

花園大學三十年のあゆみ

題
字

大森曹玄學長



懷樂

忘
回

三十
年



墨蹟「憶えは樂し花園三十年」

山田無文名誉学長



▲ 花園大学昇格記念〔1949年（昭和24）〕

▼ 花園大学第1回卒業生〔1953年（昭和28）〕





▲ 花園大学全景〔1958年（昭和33）〕

▼ 花園大学校門〔1959年（昭和34）〕





◆ 小笠原秀実先生謝恩會〔1955年（昭和30）〕





法堂での接心会〔1972年（昭和47）〕



▲ パネル・ディスカッション「禅と花大の将来」〔1964年（昭和39）〕

▼ キャンパス風景〔1973年（昭和48）〕





無文灯及び大学歌歌碑

序

わが花園大学は、この五月二十五日をもって創立三十周年を迎える。この日を基点として過去を追想し、未来を展望するという企画で本輯が生れた。

私は花大の出身者ではなく、いわば外様なので何も申す資格はないのだが、しかし強いて求められれば忘れ難い懐かしい思い出がある。それは戦後、昭和二十一年から三年にかけてのことである。

当時、私は等持院に家族ぐるみ居候をし、接心中は天龍寺僧堂に詰め、平生は毎朝通参していた。山田無文老師兄は、天龍僧堂の侍者寮におり、花大の出講日には雲水姿で出かけて行った。私はその後を追うように無断で教室に入り込んで聴講した。その教室は木造一階建てのうす暗い部屋で、床は朽ちて破れ随処に穴があいており、うっかり踏むと床下に顛落しそうなところだった。教室とは義理にも言えたものではない。そのせいか、学生でない黒衣の私が下駄履きで入り込んでも、誰れもとがめる者はなかった。

嵯峨・厭離庵の克泉尼さんもよく聴講に来ていた。恐らく私同様、無断侵入ではなかったかとも思うのだが？　この尼僧には偉い人だと私は心中つねに稽首していたものである。

久松真一先生の講義は欠かさず拝聴し、非常に学益を受けたことを感謝している。そのような聴講をしたことを、いまでも悪いことをしたとは決して思っていない。それどころか、やる瀬ない敗残の身にとっては、ほのぼのと心温まる懐かしい思い出であり、三十年前の花園大学への唯一つの思慕にも似た愛情をもっている。

盗聴学生の追憶を記して、以て序とする。

昭和五十四年四月入学式の日

大 森 曹 玄

目次

序

序章 前史——般若林から臨済学院専門学校まで——

一 般若林の創設……………三

二 大教校……………四

大教校の改革…7 学生の試験ボイコット…7 大教校同窓会発足…8

三 普通学林……………九

普通学林開設…9 東部学林の紛争…10 普通学林通則布達…12

四 花園学林から花園学院へ……………一四

興学会と花園学林の設置…14 花園学院への道…15

五 臨済宗大学の創設……………一七

臨済宗大学の概要…20 臨大の増改築…21 教学調査会の設置と臨大の改革…22 中等

教員無試験検定の認可と学風振興に関する宣言…24 臨大昇格問題…25 臨大昇格運動

…26

六	臨済学院専門学校……………	二七
---	---------------	----

臨済学院専門学校の概要……………	27
学部の開設……………	33
校舎改築期成運動の展開……………	35

第一章 新制大学設立から文学部設置まで…………… 三六

一	新制花園大学……………	四一
---	-------------	----

二	参玄寮と白雲寮の建設……………	四六
---	-----------------	----

三	図書館の建設と禅文化研究所……………	四八
---	--------------------	----

四	新校舎の落成……………	五一
---	-------------	----

五	仏教学部時代の活動……………	五三
---	----------------	----

「花園大学通信」の創刊……………	53
禅講座の公開と花園文庫の出版……………	54
雑誌「禅文化」の	

創刊…………… 55

六、文学部設置……………	六〇
--------------	----

七、本館の増改築……………	六四
---------------	----

★花園大学と私の三十年(山田重正)……………	67
★青春のすべて―あのボロ校舎(大内孝道)……………	70

★学生大会と仏学連(見浦宗山)……………	71
★クラブ活動の思い出(阿部覚翁)……………	71
★私の学	

生生活(辻光文)……………	72
★参玄寮生活の思い出(古橋圓宗)……………	73
★東洋現像所・金閣・銀	

閣での夜警のアルバイト(宝積玄承)……………	74
★私の学生生活(足立禅英)……………	75
★私の参玄	

寮生活(光山参悟)……………	76	★接心会・うどん茶礼(山田啓一)……………	77	★白雲寮(羽澄直樹)……………	78
★私の学生生活(木田雄太)……………	78	★同人誌のこと(衣斐弘行)……………	79	★学生生活の思い出	
(榎野丈子)……………	80				

第二章 文学部設置以降…………… 八三

第二節 三部長制の発足…………… 八五

第二節 学園「紛争」…………… 九四

大学の大衆化……………	94	文学部設置反対・白雲寮民主化・本館改築反対闘争……………	95	三部長制	
と教授会の発足……………	97	七十日間の長期団交へ……………	98	本館の封鎖・占拠……………	102
精神」……………	103	風化する「団交精神」……………	104		
★学園「闘争」(佐藤実)……………	106				

第三節 新しい花大への摸索…………… 一〇七

教学体制研究委員会の発足……………	109	『施設実習の心得』問題と社会福祉学科の再建……………	110
-------------------	-----	----------------------------	-----

第四節 財政の歩み…………… 一二三

仏教学部時代の財政……………	113	校舎改築と募財活動(白雲寮・図書館・教室棟の新築)……………	114
文学部開設と本館改築・学生会館新築……………	116	新制文学部の財政危機……………	117
経営姿勢の根本的転換……………	120	教育研究充実長期計画の推進……………	124
▲収入・支出構成の推移(昭二四～五一)……………	119	▲初年度納入金の推移(昭三五～五二)……………	121

- ▲財政規模の推移（収入）（昭二四～五〇）……122
- ▲学生数の推移（昭二四～五三）……123
- ▲私立大学経常費補助金の推移……125

第三章 総合移転……………三三

第一節 総合移転への道……………三三

- 総合移転の発端……134
- 移転候補地……135
- 理事会及び教授会の対応……136
- 所有権移転登記……145
- 同窓会のバックアップ……145
- 学内組織と請負業者の選定……146
- 周辺住民の理解と移転工事……147
- 資金計画……154
- 移転……155

第二節 移転をめぐる学生と教授会……………三六

- 移転に対する教授会の基本姿勢……156
- 移転に対する学生の反応……157
- 起工式阻止行動から全学ストライキへ……159
- 授業再開……161
- 白雲寮の移転と山越寮の誕生……162

第三節 移転後の花園大学……………三五

- 機構の一部改革……165
- 「団交体制」の破綻宣言と処分権の凍結解除……166
- 山田無文学長から大森新学長へ……170
- 移転直後の大学のムード……172
- 学生相談室の発足……173
- 就職課開設……173
- クリニックセンター開設……173
- 教学プロジェクトチームの発足と教学特色化への試み……173
- 興学基金計画の凍結解除……175
- 後援会の発足……177
- 教員の新陳代謝……181
- 図書館書庫・小講堂の新築と新制大学昇格三〇周年記念式典……181

第四節	入試改革の経緯	一八三
-----	---------	-----

一九七二年度	182	一九七三年度	186	一九七四年度	198	一九七五年度	213
--------	-----	--------	-----	--------	-----	--------	-----

▲入学志願者の推移……………205

第五節	花園大学を支えた人々	二二七
-----	------------	-----

一	山田無文名誉学長をたたえる	二二七
---	---------------	-----

二	学監職二十年——荻須先生をたたえる	二三五
---	-------------------	-----

三	教団の百年の大計は大学教育にある——江西名誉理事長をたたえる	二三〇
---	--------------------------------	-----

四	激動時代の教育者・柳田聖山先生	二三三
---	-----------------	-----

五	花園大学を支えた人々	三三九
---	------------	-----

▲専任教員の異動……………241 ▲専任職員の異動……………243

第四章	花園大学の教学	二四七
-----	---------	-----

第一節	仏教学部時代の教学	二四九
-----	-----------	-----

第二節	文学部時代の教学	二六〇
-----	----------	-----

●仏教学科の教学	二九三
----------	-----

●社会福祉学科の教学	三〇三
------------	-----

●史学科の教学	三〇七
---------	-----

●国文学科の教学	三二二
----------	-----

第五章 付屬施設・關係機關	三七
---------------	----

第一節 図書館	三九
---------	----

第二節 学生寮	三五
---------	----

第三節 同窓会の發展と活躍	三八
---------------	----

★賀花園大学三十周年記念(千田杏月)……352

第六章 史料(『正法輪』誌記載の大学關係記事より)	三五
---------------------------	----

花園大学史年表	四九
---------	----

後記

序章 前史

——般若林から臨済学院専門学校まで——



- 一、般若林の創設
- 二、大教校
- 三、普通学林
- 四、花園学林から花園学院へ
- 五、臨済宗大学の創設
- 六、臨済学院専門学校

（釈 元孝）

序章 前 史

— 般若林から臨済学院専門学校まで —

一、般若林の創設 一八七二年（明治五）

『妙心寺六百年史』（天岫接三著）「明治以後の妙心寺一派」の章にいう。

「古来禅門の教育は叢林に於ける学道を以て足りしが、世運の趨向は先づ授くるに普通学を以てし、而して後叢林に入れしむるの必要に迫れり。」

ために明治以後の妙心寺派の子弟教育は、諸学の真髓に達するための学校教育と、宗旨の蘊奥を極めるための専門道場における教育との二段階方式という図式を余儀なくされる。前者の目的を担って、一八七二年（明治五）妙心寺山内に般若林が創設された。

般若林においては、教相漢籍、宗乘等が教授されたが、その制度内容は、専門道場の規則に準じたもので、一年を雨安居、雪安居の二期に分け、学業の余暇には作務托鉢を行なうという実践教育に重点をおいたものであった。学級数三、生徒数七十余名で、総理（校長）は釈薩水であった。

二年後、一八七四年（明治七）臨済宗各派並びに黄檗宗の連合経営により、東京に今北洪川が総監となって連合

総疊が開設された。これにともない、翌一八七五年（明治八）四月、般若林は閉鎖された。連合総疊では華嚴・天台部を修め、かたわら儒道の二教を極め、詩文を策励した。

しかしながら、一八七九年（明治一二）、連合総疊は京都に移転する。そして、一八八三年（明治一六）四月には、妙心寺派は臨済・黄檗各派連合から分離独立して、妙心寺山内に新たに今川貞山を総理として大衆寮を設置した。

二、大教校 一八八六年（明治一九）

教学問題は年と共に重要性を増し、一八八六年（明治一九）、妙心寺派は学制法案を制定して、教学の根本方針を創定する必要に迫られ、同年十二月大教校が妙心寺山内に、中教校が左記の全国六ヶ所に設置された。

第一中教校	豊後国大分町万壽寺内
第二中教校	伊予国宇和島町大隆寺内
第三中教校	山城国花園東林院内
第四中教校	美濃国八百津町大仙寺内
第五中教校	駿河国
第六中教校	武藏国

大教校は中教校と同じ修業年限三年で、その入校資格は十七才以上で中教校の卒業証書を有する者とされた。本科と選科の二種があり、本科は全寮制で、いわゆる中教校新卒者を対象とし、選科は年令二十五才以上の住職経験者が対象とされた。また妙心寺派以外の僧侶の入校も場合によっては許可された。

学年は九月一日に開講され、翌年七月十五日に終講した。冬季休暇は十二月二十五日から一月七日まで、夏季休

暇は七月二十五日から八月二十五日までで、その他に、大祭日、花園法皇忌、成道会、開山忌、涅槃会、誕生会等が休業日とされた。

尚、始業及び終業の時間は次の通りであった。

九月一日～九月三十日 午前八時～正午

十月一日～三月三十一日 午前九時～午後三時

四月一日～五月三十一日 午前八時～正午

六月一日～七月十五日 午前七時～午前十一時

また、学内試験は小試験と大試験にわかれ、小試験は一学年中に五回以上行なわれ、大試験は学年の終りに実施された。試験は百点満点とし、小試験の平均点と大試験の平均点を合計し、それを二分の一にした点数によって及落を判定した。

そして、本科第三年の大試験に及第した者に卒業証書が授与された。

職員組織は校務一切の統理者である総理の下に教務と事務に分かれ、教務には、教頭、教師、助教が置かれ、事務には幹事、幹事補及び、学生中より選任された寮監がおかれた。

大校の授業科目は、宗乗、教相より、漢籍、洋学、教学にわたるものであった。

大校の教員数及び学生数は一例として一八九一年（明治二四）のものを記すと次の通りであった。

学 務 総 理 一 名

幹 事 兼 教 師 一 名

幹 事 補 一 名

妙心寺派普通大教校 高等学課表														
通読部、冥樞会要、註心賦、山房夜話、聞提記問、譚津文集、西域記、元亨釈書、本朝高僧伝	外 部				内 部		科 年	書 級	宗門七部集、臨濟録、碧巖録、大慧書、虛堂録、正宗贊、江湖集、禪儀外文集					
	漢義又ハ学 講義文作 数学	洋 学	内 講	本 講	九 級	八 級				七 級	六 級	五 級	四 級	三 級
大代幾何書	老子道德經	ミル宗教論 スペイン 哲学原理 シユエグラ 一希臘哲学 ボーヘン 近世哲学	涅槃經 後半部	法華經科註 後半部	九 級	八 級	七 級	六 級	五 級	四 級	三 級	二 級	一 級	
	易	カノ 物理學 シユエグラ 一希臘哲学 スペインサ 教育論	涅槃經 前半部	法華經科註 前半部										
	經	カノ 物理學 シユエグラ 一希臘哲学 スペインサ 教育論	華嚴五教章	楞嚴經義疏 後半部										
大代幾何書	莊	ゼホン 論理書 ミルトン	カノ 物理書 スウキン ト	楞嚴經義疏 前半部	六 級	五 級	四 級	三 級	二 級	一 級	三 級	二 級	一 級	
	子	ハツクスレ 生理書 ミルトン	スウキン ト	夾註輔教篇 後半部										楞嚴經合轍
	書	ハツクスレ 生理書 マコレ ン	スウキン ト	夾註輔教篇 前半部										円覚經略疏
大代幾何書	經	ロスコ 化学書 ハツクスレ 生理書 ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	二十唯識 述記	六 級	五 級	四 級	三 級	二 級	一 級	三 級	二 級	一 級	
	詩	ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	俱舍論頌疏 後半部										起信論義記
	會 話	ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	俱舍論頌疏 前半部										興禪護国論
小代幾何書	會 話	ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	俱舍論頌疏 後半部	六 級	五 級	四 級	三 級	二 級	一 級	三 級	二 級	一 級	
	會 話	ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	俱舍論頌疏 後半部										興禪護国論
	會 話	ロヤール 読第五 読本	スウキン ト	俱舍論頌疏 前半部										興禪護国論

内典教師 一名

英学兼地理教師 一名

数学兼理科教師 一名

漢学兼歴史教師 一名

学生数 三十五名

寄宿生活では、特にきびしく道徳を養ひ、威儀を正し、礼儀を重んじることが要請され、頭髪は毎月三回剃除し、師親等よりの送金は、幹事に預け、必要がある時に受け取るものとされた。また寄宿生徒心得によると、日中みだりに寮内で寝ころぶことや、柱、壁、障子にもたれたり、腰をかけることや、相撲、指相撲、拍手歌謡、雑談等が禁止され、碁、将棋等をすることや、それらを所持することも禁じられた。

大教校の改革

一八九一年（明治二四）、濃尾大地震がおこり、岐阜・愛知一帯は全壊焼失一四万二千戸、死者七千二百名という被害をうけた。この地方に多数の末寺を有する妙心寺派は深刻な打撃をうけ大教校の校費を減額した。このため、大教校は一八九三年（明治二六）七月一日付をもって、校費の節約等の改革をおこなった。

その内容はおおよそ次のようなものであった。すなわち、毎月二回、第二、第四日曜日午前十一時まで京都市中を行鉢することの復活。そのための網代笠、合羽、番傘、栗下駄などを自己負担とすること。毎日の薬石の小菜を廃止すること。学寮のランプ及び石油、火鉢及び炭、その他寝具等を自己負担とすること。それから、第一日曜日午前に祖録の提唱を、また第三日曜日午前に声明梵唄、並びに諸法式の演習を復活することなどであった。

学生の試験ボイコット

一八九三年（明治二六）七月、夏季休暇を前にした小試験において、学生側から試験実施の延期が申し込まれた。その理由については、「何角自分の都合あることにや……」（正法輪第二一号）と記されているだけで、くわしい内容は不明である。

学校側は学生の請願を却下、学生を説得して試験を実施した。ところが、試験場において、一名の学生を除き、他の全員が、出題された問題をそのまま答案用紙に書き写して提出した。そこで学校側は試験を中止し、妙心寺派教務本所に対し、学生の処分を懇請した。これを受けて、教務本所は試験ポイコット学生の退校処分を発表し、学校側は即刻これを実施した。処分された学生の中には、大教校職員、あるいは教務本所職員の徒弟も含まれていた。この試験ポイコット学生の退校処分は、午前十一時頃に大教校幹事より教務本所へ具状され、午後二時前には処分の達書が幹事に回付されるという迅速さであった。

なお、この退校処分を受けた学生はその後入校を願い出て、その九割が許可された。

大教校同窓会発足

一八九四年（明治二七）三月九日、大教校の同窓会が設立された。その規約書の第一章には設立の主旨が次のようにのべられている。

本会は現今校内にあると他にあるとを問はず一度本校に掛錫せしものは相互に気脈を通じ以て一致協同の心を固くし真個朋友たるの義務を全ふし仏教の興隆と吾門の繁盛とを希図するを以て本旨となす。

その名称を花園大教校同窓会とし、会員名簿の作成と、春秋二回の懇話会を開き布教興学の原理を講究することをその事業活動とした。

三、普通学林 一八九四年（明治二七）

普通学林開設

一八九四年（明治二七）、学制の改革が行なわれ、大教校、中教校の制度を廃して、普通学林が左記の二ヶ所に設置された。

山城国普通学林（西部学林）

京都府葛野郡花園村 龍安寺

美濃国普通学林（東部学林）

岐阜県山県郡岩野村 靈松院

その修業年限は当初六ヶ年で、後一八九七年（明治三〇）より尋常部四ヶ年、高等部二ヶ年とされた。

一八九四年（明治二七）十二月十日付にて報告された山城国普通学林現況によれば、教職員学生数は次の如くであつた。

職員は総監今川貞山他二名。教員は、内典科教授、哲学科教授、数学科教授、漢籍科教授、英学科教授、漢学科教授各一名。学生は第五年級八名、第四年級十四名、第三年級九名、第二年級七名、第一年級十名、合計四十八名であり、その他に若干の本科外の学生がいた。

当初両学林は、校舎新築が間に合わず、開講式は行なわずに授業のみを実施した。

一八九五年（明治二八）六月九日になってようやく、山城国普通学林開講式が行なわれ、学林総監今川貞山は、普通学林設置について次のように述べた。

校名	授学師	職員	生徒數
山城国花園妙心寺	1	5	43
山城国八幡門福寺	1	5	33
摂津国兵庫祥福寺	1	5	51
筑後久留米梅林寺	1	5	50
美濃国加納瑞龍寺	1	5	43
美濃国伊深正眼寺	1	5	64
尾張名古屋徳源寺	1	5	63
山城国	8	3	60
普通学林	5	2	57
合 計	20	40	464

專門道場普通学林員數（明治27年9月）

本派学制ヲ改革シテ新ニ普通学林ヲ開設スルモノ其ノ目的派内青年ノ徒弟ヲ教養シ之ニ經論ヲ授ケ之ニ普通ノ学ヲ修メシメ以テ能ク世ト相融シテ仏教ノ感化ヲ宣揚セシメントスルニ外ナラス
法自ラ弘マラス之ヲ弘ムルハ必ス人ヲ須ツ本派將來ノ法運益々隆盛ニ赴カン乎是レ本派青年諸子ノ功ナリ法運若シ否塞ニ陥ラン乎是レ本派青年諸子ノ過ナリ

また、かつて般若林の総理であつた釈薩水が妙心寺派管長蘆匡道の宣示を代読した。それには、妙心寺派の教学に対する姿勢が簡潔に述べられている。

文学ノ枝葉ヲ採拾シテ參禪ノ大体ヲ失却スル者吾之レヲ惡クム幸ニ參禪ノ大体ニ通スト雖モ一文不知ノ漢ニ至リテハ四通八達ノ活用ヲ欠クコトナシトセンヤ是故ニ本派ニ於テハ專門道場設置ト其ニ普通学林ヲ經始シ学者ヲシテ前後貫通シテ知識ヲ開達シ是ヲ応用シテ布教伝道ノ任務ヲ完了セシメントス

ちなみに、この年九月の正法輪に掲載された專門道場と普通学林の現状表は上表の如くであつた。

東部学林の紛争

妙心寺派が学制を改革して四年、一八九七年（明治三〇）、西部（山城国）と東部（美濃国）の両普通学林における教育条件の格差、すなわち、東部学林を西部学林より劣るとする感情が底流となつた一つの紛争が勃発した。

同年三月二十九日、妙心寺派教務本所は、西部学林の三年級（学徒三名）を東部学林へ、また東部学林の六年級（学徒一名）、五年級（学徒二名）を西部学林へ、それぞれ転学を命じた。これは、一、二名の学徒のために一年級を設置する費用と労力を省くことが最大のネライであった。すなわち、これによって、東部学林は事実上、五年級及び六年級すなわち高等部が開店休業の状態におかれたわけである。

西部学林に転学させられた者に不満はなかった。それに比べ、東部学林に転学させられた者の不満は大きかった。紛争はここに源を発する。

東部学林学徒は、同学林が尋常部のみとなることへの危惧、及び同学林教学の不完全さに対する不安から、まず四月興学会開設にあたって、同会々長宛に西部学林へ転学を乞う一篇の嘆願書を提出する。しかし、同会はその嘆願書を受領すべき性質のものでないとして返却する。

五月十二日に至って、東部学林の三年級以下在学徒総数五十二名は突然病氣と称して欠課、翌十三日、委員をもって嘆願書を前田誠節総監に呈示した。その内容は、東部学林を西部学林に合併することを乞うものであった。学林はその要求を拒否し教務本所と連絡を取りつつ、職員会議を開いて学徒鎮撫の策を講じ、かつそれを実行に移したが効果は上らず、二十日になって学徒の不穩は急速に高まり、二十一日総監代理として後藤禪提妙心寺執事が急遽東部学林を訪れた。後藤禪提執事は翌日、学徒一同を仮講堂に集めて、諄々懇々訓誡を加え、学徒代表とも懇話したが収拾がつかず、遂に多数の学徒が当日学林を去った。

しかしながら、数日後、前非を悔い自主的に帰林を願ひ出る者があらわれ、また学林の要請による保証人の説得をうけて帰林する者等も次第に出て、二十九日までに、二十四名の者が帰林を許された。同日正午、その他の学生もあわせて三十余名の在学生、教職員を仮講堂に集め、後藤執事より、学徒の嘆願書却下に対する教務本所の理由

書の朗読及び説明等がおこなわれた。その理由書は次の如くであった。

普通学林一校と為すの説は本派教育例改正の曉にあらざれば之を明言すべからず

普通学林学科を高等尋常の二部に分ちたる所以は成業者の品位を保全するに出て之に依りて学科を輕重せしむるの意にあらず

学徒をして甲乙学林相転ぜしめたるは即ち二個の普通学林を平等視するの発端にして且つ本派教育の理財上より推して今日の勢此の如く為さざる可らず是を以て優劣の判を下すは敢て採取せず

以上の結論と退学者三名、希望退学者一名、謹慎及び禁足者五十二名の処分者を出して、東部、美濃普通学林の紛争は一段落する。

翌一八九八年（明治三一）九月、東西の普通学林は合併され、京都府葛野郡花園村に校舍を新築、移転した。（この場所が後の京都市右京区花園木辻北町一である）

普通学林通則布達

一八九八年（明治三一）九月二十六日、普通学林通則が布達された。普通学林は、妙心寺派の教育上の法令として教育例等により、その大綱は示されていたものの、その組織、職員の分担等は何等の規定もなかった。このため、新たに通則を制定發布したものである。従つてその内容は、ほとんどがすでに実施されている事柄の明文化であった。

すなわち、普通学林の修業年限を高等部二年、尋常部四年とすること。職員組織は、総監、幹事長各一名、幹事、寮監各若干名及び教頭一名と内典教授、外典教授各若干名を置くこと。そして、その職務分掌及び評議会について規定したものであった。また、新設教育機関として修業年限二ヶ年の、普通学林予備門の設置も規定された。

普通学林開講一覽

科目	年級	内典	国語	漢学	英学	数学	歴史	哲学	科学	地理	科外	詩偈	卒業論文
科	第六年	唯識、華嚴、五教章、摩訶經	唯識、大阿毘達磨俱舍論	大学、中庸、易經	作文			心理、審美			学年ノ初メニ之ヲ定ム		学年ノ終リニ之ヲ課ス
目	第五年	阿毘達磨俱舍論	阿毘達磨俱舍論	左史、文伝	作文		哲学史	論理、倫理			同上		
	第四年	三唯識、天台四教義、法華玄義	徒然草	八大家文章	作文	三幾代、修解(純文学)、文論、文批評、文辭	宗教史	物理学、実地説			同上		
	第三年	因明入正理疏、異部宗輪論、記	神皇正統記	文章軌範	作文	幾代、説方暗調文法、(史伝体)	泰西史	化学、生理大意ヲ授ク			同上		
	第二年	原心覚人夢抄、論經	文典	論語	作文	幾代、説方(記事文法)	支那史	植物、動物大意ヲ授ク			同上		
	第一年	西谷名目、法華經	国文、教科書	孟子、子	作文	任書、取方、綴文、解方	算術				同上		

四、花園学林から花園学院へ 一九〇四年（明治三七）

興学会と花園学林の設置

興学会は一八九七年（明治三一）四月に開設された。これは妙心寺派の宗政より教育事業の独立をはかるために設置された。すなわち、「派内の教育の綱紀を保持し、育英の首脳」として、学制学科を定めその教育方針を堅持して行くための組織であった。教務本所の興学部が、就学の策励、職員



普通学林時代の学生

の進退、経費の収支、及び教師検定等の学務を所管したのに対し、興学会は学制を担当する部門として、教務本所から独立した形で存在した。同会は十五名の委員よりなり、委員の交代（三分の一交代）に際しては、その候補者を委員の決議にて推薦した。

しかしながら、設置から数年の間、その設置趣旨及び関係者の期待とはうらはらに、興学会はそれ程活発な活動を展開しなかった。一九〇二年（明治三五）に至ってようやく十一月二十六日より四日間、興学会が開会された。そして、同年当初から活発に展開された各方面の教育論を背景にして、興学会は妙心寺派教育例の改正諮詢案を可決した。その改革の骨子は、学林教育年限を七ヶ年としたこと、留学生規程を設けたこと、その他であった。

この諮詢案をもとにして翌一九〇三年（明治三六）四月、教育例改正

案が、妙心寺派議會に第五号議案として上程された。

そして、同年十一月には普通学林を花園学林と改称した。ちなみに、この年文部省は専門学校令を公布した。

翌一九〇四年（明治三七）、五月十日付にて改定妙心寺派教育例及び花園学林則その他が發布された。それらによると、花園学林の修業年限は正科五ヶ年・実修科二ヶ年と規定され、正科は中学校と同等以上として、高等の普通教育を授け、実修科においては、僧侶に必須な専門教育を授けるものとした。

尚、これと前後して、一九〇三年（明治三六）一月、普通学林の学年暦が次のように改正公示された。

第一期 四月十六日～七月十日

第二期 九月十一日～十二月二十四日

第三期 一月八日～三月三十一日

花園学院への道

一九〇五年（明治三八）から翌年にかけて、学林の文部省認定問題と、服装改良の問題が時代の趨勢として

花園学林実修科学科表

学 科				宗 旨				教 義				哲 学				漢 学				科 外			
第一年級				提 唱				天 台 教 理				哲 学 史				經 書 子 類				東 洋 哲 学			
時間				2				4				3				4				2			
第二年級				提 唱				華 嚴 教 理				哲 学 史				同 上				真 言 教 理			
時間				2				3				3				4				2			

大きくクローズアップされて来る。これら二つの問題は相互に密接な関わりを持っていた。すなわち、服装改良問題は文部省の認定を得るための前提条件となっていたのである。

服装改良派の論点は以下のようなものであった。

- 一、法服を着て運動するとそれ程粗暴でないスポーツでも粗野に感じられ風紀上洋服の方が適當である。
- 二、常に法服を着ていると、法服の神聖さが忘却されがちになる。
- 三、経済的に洋服の方が徳用である。

これに対し従来の法服を堅持すべしとする主張には、洋服着用によって学生の宗教的品性が危機にさらされるという危惧の念があった。

一九〇五年（明治三八）秋には、これら服装改良問題と認定問題が争点となって学生紛争が発生し、学生の同盟休校がおこなわれた。これに対し学林当局は十一月十日、四十三名にのぼる学生の退学処分を行なった。翌一九〇六年（明治三九）四月、学林のカリキュラムに体操が取り入れられたことも手伝って、正科に限り法服を改め洋服を正服とすることが決定、実施された。

また一九〇七年（明治四〇）四月には、花園学林を花園学院と改称、正科を中学部、実修科を高等部と改めた。そして、中学部は文部省の認定をうけ修業年限は従前通り五ケ年とした。高等部は専門学校令により二年制を三年制に改め、倫理学史、仏教史、社会学、宗教哲学、美学等の新科目が開講された。これをうけ、翌一九〇八年（明治四一）二月十日には、花園学院高等部が文部省から専門学校令による認可を受けると共に、同中学部とあわせて徴兵猶予の特典を認定されるにいった。

五、臨済宗大学の創設

一九二一年（明治四四）

一九二一年（明治四四）十一月の正法輪「普説」にはこう述べられている。

旧臘の本派議會に於て大學設立案の附議せられし際、甲論乙駁之れが可否に就て喧嘩を極めたるも、終に該案は通過して設立に関する諸般の手続は運ばれ、今や臨済宗大學という看板は花園教會所の門頭を飾るに至れり、吾人は曾て普通大教校が該教會所に在りし、昔しを回顧し來り、古今教育制度の変遷せし跡を尋ねて一種の感慨を禁ずること能はざるものある……。

花園學院の高等部が分離独立する形で、臨済宗大學を創設したのである。そして、花園學院の名称は中学部によって受け継がれた。

一九二一年（明治四四）九月二十七日、専門學校令による大學として臨済宗大學設置の認可が文部省より



臨済宗大學開校記念

下り、これをうけ、十月五日付で、妙心寺派管長豊田毒湛は、臨済宗大学々則を制定發布した。その第二条にはこう記された。

本学ハ臨済宗ノ宗旨及仏教各宗派ノ教義ヲ討究シ之ニ須要ナル高等教育ヲ授ク

同年十月二十日午前十時、内外の關係者を集めて、臨済宗大学開校式が、妙心寺大方丈にて挙行された。式典は、開山大師への焼香読経、管長の宣示、来賓等の祝辞、それに対する学長、学生代表の答辞という次第であった。また当日の来賓は、大徳、南禅、天龍、建仁、黄檗、永源、相国、東福各山の管長及び執事、花園警察署長、葛野郡長、花園村長、京都帝国大学文科大学長、仏教大学、平安中学、眞言宗大学、眞宗大学、京都五中等の關係者その他であった。当日妙心寺派管長は、臨済宗大学の開校にあたって次のように宣示した。

布教ト教育トハ宗派ノ命脈ニシテ之カ盛衰ハ直ニ宗派ノ隆替ニ影響ス、從テ此ノ兩者ハ互ニ相待チ相輔ケテ宗派ノ隆替發展ヲ期スル所以ナレバ決シテ偏輕偏重スヘキモノニアラスト雖モ、道ノ人ヲ弘ムルニアラス人克ク道ヲ弘ム、是故ニ布教ヲ盛ニセントスルニハ必ス之ニ從事スル人物ヲ養成スルヲ以テ最先ノ急務ナリトス、是レ宗派ノ施設ニ於テ教育ノ忽緒ニ附スヘカラサル所以ナリトス、本派夙ニ教育ノ振興ニ就テ焦心苦慮スル所アリト雖モ社会日進ノ文運ハ益々宗門教育ノ向上進歩ヲ促カシ未タ以テ現状ニ満足スヘカラサルモアリ、是ニ於テ本派ハ、開山大師五百五十年大遠諱法要ヲ經營スルニ際シ諸般ノ施設ヲ改革シ大ニ其ノ面目ヲ新ニセンコトヲ期シ、教育ノ方面ニ於テモ從來ノ制度ヲ更改シテ茲ニ臨済宗大学ヲ創設シ本日ヲ以テ其開校式ヲ挙行スルノ時機ニ到達セリ、抑向上ノ大事ヲ究決シ単伝直指ノ旨ヲ發揮スルハ宗門ノ要旨ナリ、而シテ仏乘ヲ講究シ學術ヲ研鑽スルハ如上ノ要旨ニ体達スル方便ニ外ナラス、是故ニ徒ラニ葉ヲ摘ミ技ヲ尋ネテ途程ニ滞リ陳跡ニ泥ムカ如キハ宗門教育ノ眼目ヲ没却スルモノト謂フヘキナリ、教職員及学徒諸子ハ須ラク

前上ノ趣旨ヲ体認シテ直ニ教育ノ根柢ヲ培養シ宗旨ニ徹底セムコトヲ期スヘシ

また、來賓を代表して京都帝國大學文科大学長松本文三郎博士は次のような祝辭を述べた。

顧ふに維新以來我が國の文化は屢々として進み社会万般の設備今や全く其面目を一新するに至れり、此秋に當り豈宗教家の獨り旧套を墨守することを許さん、須く時代知識を吸収して人心帰向の機微を洞察し、教祖の精神を掩ふに現代的血肉を以てし世道の振興心靈の救済に努めざるべからず、而して斯く重大なる聖務は亦実に高等専門の教育を受けたるものにあらざれば之れを遂ぐる能はず、是特に宗門の子弟に最高教育を要する所以なり、方今社会の各方面に於ては宗教家の真摯なる活動に期待する所愈々多く益々切なるものあるを覺ゆ、然れば本學が社会に対して負ふ所の責任亦決して僅少なりとせず

臨濟宗大學の設立は、時勢の要求であつた。社会の進運が妙心寺派を驅つて、大學を設立するに至らしめた。

「冷灰熱火録」（正法輪第二九三号）にいう。

名づけて臨濟宗大學と云ふ、世の多くの大學と面目を異にせねばならぬ。臨濟宗大學は眞宗大學にあらず日蓮宗大學にあらず、淨土宗大學にあらず、又た曹洞宗大學にあらず、臨濟宗大學は臨濟宗の大學でなければならぬ。臨濟宗大學の内容が若しも他宗の大學と同じく、或は世にありふれたる大學と同様であつたならば、設立の要を認めぬと云ふに至るであらう。妙心寺派が他の宗派に比して勝るに足らざる財産を有しながら、或他の嗤笑を忍びつつ、中學を設け更に大學を創設するには、特種の理由がなければならぬ。臨濟宗には臨濟宗の面目がある、妙心寺派には妙心寺派の精神がある、之れが他宗派と異なる所である。妙心寺派が學校を建設せし所以は、此面目を失はず此精神を發揮せしめんがためであらうと思はれる。

臨済宗大学の概要

臨済宗大学は本科と選科にわかれ、修業年限はそれぞれ四ヶ年とした。学年は四月一日よりはじまり、翌年の三月三十一日に終った。一学年を三学期にわけてそれぞれ左の通りとした。

臨済宗大学学科表

科目	学年	
	第一年	第二年
宗旨	提唱	同上
教義	坐禪	同上
漢学	因明学概論	俱舍部
哲学	舍因明学部	唯識部
科学	近思錄	經部
宗教学	進心論	倫理學
歴史	日本文明史	社会史
外国語	英文学	同上
		第三年
宗旨	同上	同上
教義	同上	同上
漢学	浄土台	唯識部
哲学	莊子語	經部
科学	倫理學	倫理學
宗教学	宗教史	同上
歴史	同上	同上
外国語	同上	同上
		第四年
宗旨	同上	同上
教義	同上	同上
漢学	真華台	經部
哲学	易經	經部
科学	最近世哲學	倫理學
宗教学	宗教史	同上
歴史	同上	同上
外国語	同上	同上

但シ宗旨ハ毎日一時間宛授業時間外
ニ於テ宗意安心トシテ之レヲ課ス

第一学期 四月一日～八月三十一日

第二学期 九月一日～十二月三十一日

第三学期 一月一日～三月三十一日

試験は学期試験と学年試験の二種があり、学期試験は第一・第二学期末にそれぞれ行なわれ、学年試験は、第三学期末、すなわち学年のおわりに行なわれた。成績は各科目百点満点とし、平均六十点以上を合格とした。但し、一科目でも四十点未満の科目があった場合はこれを不合格とした。

入学資格は、私立花園学院卒業業者、中学卒業業者、専門学校入学業者、検定試験合格者等とした。入学許可をうけたものは、入学費財金として二円を納入するだけで、妙心寺派の本科の学生は授業料が不要であった。また、本科の学生は原則として寄宿舎に入らねばならなかった。すなわち、全寮制である。

臨大校舎平面図(略図)

序章前

史



職員組織は、学長一名、主監一名、講師若干名、舎監一名、監事一名、教務係一名、図書係一名、校医一名という内容であった。

臨大の増改築

一九一五年(大正四)から一九二三年(大正一二)にかけて、臨大の校舎の増築が断続的におこなわれる。まず一九一五年(大正四)五月、旧光国院の裏に校舎が新築、落成した。二階建て、一階は主監室、事務室、幹事室、受付等で、二階はすべて教場に使用された。同年七月には、如是院庫裏を改築し、椅子卓子等の設備をととのえて研究室とした。そして、大学所蔵の書籍全部と、横田、吉瀬両師及びその他有志所蔵の書籍を移管整理して学内外の研究に供した。一九一七年(大正六)には妙心寺派議會で、臨済宗大学と花園学院とに各一棟ずつの寄宿舎を増築し、その他の教室、食堂及び付属建物等は四ヶ年計画で順

次建築することが決議された。

ところが翌年七月、急遽洛西桂村農林学校々舎を全部買収することになり、翌八月には起工、九月竣工を目ざして工事が進められた。

臨大の増築内容は寄宿舎二階建一棟、仮講堂一棟、門衛詰所、その他食堂の拡張等であつた。また、寄宿舎は教場裏に建てられ、旧光国院の建物は事務室、講師室等にあてられた。

一九二三年（大正一二）十二月には、臨大と花園中学両校兼用の大講堂が完成する。総工費五万円、建築場所は臨大と花中の間で大工上田宗太郎所有の屋敷裏の小藪であつた。設計図は洋風と和風の二つが用意されたが花中の旧門等を使用する便宜上和風の建築と決定した。同年春に設計図が出来、七月には上棟式が行なわれた。

新築講堂は六周半に十七間の建物で、元花中の大玄関にしていたものをその玄関とし、花中で使用していた校門を講堂の正面、すなわち、春浦院、龍華院の前を通過する道路と一直線上北部の突き当りに移し、臨大、花中両校の校門とした。

教学調査会の設置と臨大の改革

一九二〇年（大正九）、妙心寺派は前年の宗制改革をうけて、教学調査会を設置、六名の委員を任命した。この教学調査会の目的は、妙心寺派の教学体制の抜本的な再検討にあつた。時あたかも、日本は世界の大勢に促されて、一年一年、教育の普及を計画、前年一九一九年（大正八）からの義務教育の普及は勿論、中学、専門学校等の増築が実現され、教育の振興は一般の学校のみならず、宗門立の学校にも波及した。殊に一九一八年（大正七）十二月の新大学令の公布は各宗々門立大学に大きな動搖を來たした。個別臨大に關していえば、數年來、妙心寺派の財政事情から、臨大廃止論が同派の議會開催ごとに必ず二三の議員の間で話題になるという時期であつた。

教学調査会は同年九月八日より十日までの三日間開催され、妙心寺派の教学方針、臨濟宗大学、花園中学、その他妙心寺派の教学活動について、教務本所提出の議案及び諮問案をもとに研究及び討論をおこなった。その結果については、正法輪第四六五号の「教学調査会と其内容」（後藤亮一）から、臨大に関する部分を引用すると左の通りである。

可決せられたる議案及其内容（抜粋）

第一、大学ノ名称ハ当分之ヲ保存シ四學級制ヲ維持スルコト

本派としては単科大学令を適用せんとするには種々なる困難あり、且つ宗門教育として別に大学昇格の必要を認めざれば、専門普通教育機関として、四學級制を維持することは妥当の施設なり、但し茲に当分とあるは、文部省令を見るに単科大学に昇格せざるものは将来大学なる名称を取消さるる時期あるを以てなり。

第六、教授ノ俸給ヲ増額シテ責任アル教育ヲ実行セシムルコト

本項は教育上重大なる事柄なり、從來本派学校職員ノ俸給は他校のそれに比し甚だ遜色あり、為に専任の良教授を得る能はず、此は教育の効果を収むる迄に於て、且人格中心の精神的訓陶しやうくを施す上に於て、非常なる損害なれば是非実行せらるべきものなる事と信ず、優遇せずして人材を得んとするは猶ほ木に縁りて魚を求むるの類なり、本項は実に重要な問題にして、是非其実現を望む。

第九、大学ト接続セル地所ヲ買収シ講堂兼事務室（大中学兼用）一棟ノ大建築物ノ新築ヲ急速ニ準備スル事即ち大中学の間に介在せる上田宗太郎氏の地所を買収する事は既に前議會に於て可決せられあることなるも、爾來物価暴騰し、地所亦從て昂騰せる為め往再今日に至るも実現せられざりしが、如何にしても該地を買収せざれば、学校風致上に於ても甚だ本派の威嚴に関する事なれば是れ又実現を望む、且学校として講堂

の必要なるは多弁を要せざるべし、議會及内局諸公の努力を祈る。

その他、学期試験の施行、義財金の廃止と食費の自己負担、教育奨励金の支給、大学の収容定員を上限百五十名とすること等について討論可決された。また、これらの議案以外に、諮問案、教学調査会提案などについてもそれぞれ討論がおこなわれた。この教学調査会の教育問題、特に臨大に関わる問題の結論は、

臨済宗大学に対しては新大学令に依りて昇格するを欲せず然りと雖も臨大廃止論に至りては本所は之を首肯するものにあらず何となれば過去二三十年前に於て既に中学以上の学校教育の設備を必要と認めたるにあらざるに於て之を廃止せんとするは時代錯誤と云はざるべからず若し夫れ世間の高等専門教育に一任すべしと云ふものあらば是れ皮相の見にして一派の体面と本派教育の実際並に学校連絡上の実情を理解せざるものと言はざるべからず是に於て現状を維持して内容外観の改善を図るの必要ありと信ず。(正法輪四六四号)

というものであった。

中等教員無試験検定の認可と学風振興に関する宣言

一九二五年(大正一四)三月、臨済宗大学は学制を改革して修業年限を五ヶ年とする。そして、この学制改革の目的の一つであった修身科と漢文科の中等教員無試験検定の認可申請が一九二七年(昭和二)十二月一日、文部省に提出される。これは、五年制実施後、臨大においても文検の合格者が次第に出はじめたことを背景としていた。

一九二八年(昭和三)一月及び二月には文部省から督学官が視察に来校し、また大学関係者も数度にわたって上京した。同年三月三日、文部省検定委員会において、同年度卒業生より修身科無試験検定の取扱を受けることが決議され、三月二十六日付で許可となった。これと前後して、文部省当局の内命で、漢文の授業時間を更に四時間増

加し、漢文科の無試験検定の許可に関する指導も受けたが、大学関係者の努力にもかかわらずこの方は遂に実現を見なかった。

同年五月二十五日には、「文検認可祝賀会」がおこなわれ、式典後臨大生一同は、去る一九二五年（大正一四）三月の学制改革と同時に発表された「学風振興ニ関スル宣言」の精神を体得することを本山開山堂前において宣誓した。

臨済宗大学ハ仏祖的伝ノ宗旨ヲ奉戴シ内道念ノ涵養ト外宗風ノ対揚トヲ以テ求法研学ノ究竟理想トスル本宗教学之中枢タルベキ所ナリ

惟フニ現今動モスレバ輕薄ナル時代ノ思潮ニ左右セラレテ教外ノ実証ハ疎ンゼラレントス真ニ甚ダシキノ極ミナリ、若シ夫レ本学ニ学ブ吾等ニシテ徒ニ葉ヲ摘ミ枝ヲ尋ネ其大本ヲ忘却スルガ如キコトアラバ何ノ面目アツテ開山大師ノ児孫ト称スルヲ得ンヤ。

嚮ニ学風振興ノ宣言アリ、今爰ニ学生ノ自覺ニ須ツ一文ヲ提起シ開山大師ニ宣誓シ奉ル所以ハ能ク本学存立ノ意義ヲ体シ宗学余学ノ研鑽ヲ怠ラザルト共ニ学芸偏重ノ弊風ヲ矯メ願輪ニ鞭ツテ歴代祖師ノ芳躅ヲ攀テ臨済禅風ノ宣揚ニ任ジ得タル底ノ者タラントスルニアリ吾等ハ常ニ闡学一致以テ本宣誓ノ貫徹ヲ期ス。

時あたかも、仏教系の大学が、専門学校令による大学から大学令による大学として設立認可を受け、どんどん昇格されて行つた時期であつた。

臨大昇格問題

臨済宗大学を大学令による単科大学に昇格させるべきか否か、という妙心寺派教学上重大な問題が、一九二九年（昭和四）九月の教学調査会において審議された。これは、前年一九二八年（昭和三）一月の専門学校令改正をう

け同年五月、文部省が、臨大に対し、大学令により昇格の手續を取るか、専門学校令に従って組織変更をおこない「大学」の名称を削除するか、の二者択一を命じたためであった。教学調査会の論議は、昇格の場合問題となる次の二点に集中した。

一つは財源問題である。大学昇格となれば五十万円の供托金が必要となり、またその他に校舎の増築、移転、図書館の充実等による費用の財源を確保しなければならなかった。

二つには、妙心寺派の教学精神の維持に関する問題であった。すなわち、大学令による大学は、国家に必要な學術を研究してその蘊奥を尽し、国民思想の涵養、人格の陶冶だけを目的とした。このため學としての宗教は許すが宗旨としての宗教は許さない、故に学校名に宗派の名を冠することも許されなかったのである。こうした単科大学令のもとで、妙心寺派の教学精神を維持し、特色ある教育を施すことが可能かどうか。教学調査会はこの「本派臨済宗大学ヲ単科大学ニ昇格ノ件」（諮詢案第一号）に対し、次のような結論を出した。

本案ハ本派ノ現状ニ鑑ミ之ヲ否定ス。

但シ教務本所ニ於テ単科大学令ニ依リ、完全ニ本宗々旨ニ基キ特色アル教育ヲ施シ得ルコトヲ確認シ、之レニ要スル財源ヲ見出シタルトキハ之ヲ否定スルモノニアラズ。

臨大昇格運動

一九三二年（昭和七）は臨済宗大学を専門学校に変更しなければならない年にあたった。臨大関係者の大学昇格運動はこの年最高潮に達する。臨大教職員学生は期成同盟会を作つて、妙心寺派の世論に訴え、大々的な昇格運動を展開した。同年二月二十五日に召集された宗会には多数の大学関係者が傍聴席につめ掛けた。

この年、文部省からは、専門学校変更に対して三ヶ年の猶予があたえられた。その理由は、妙心寺当局が当時展

開していた教育関係の財団募財期間が尚三ヶ年あったからである。

同宗会は教学調査会を召集、次のような諮詢案を提示した。

前回教学調査会ニ於ケル臨大昇格可否ノ諮詢案ニ対スル答申書ノ趣意ハ原則トシテ単科大学昇格ヲ否定スルモノナリヤ。

これに対し、同調査会は次の如く答申した。

前回ノ諮詢案答申書ニ明示セル如ク一派ノ現状ニ鑑ミ原則トシテ之レヲ否定スルモノナリ（以下略）
同年六月十一日、妙心寺派教学部長は、臨大昇格案の打ち切りを旨とする声明を発表した。「現下不況のどん底にある経済状態では、寄附行為も思はしからず」という理由であった。

六、臨済学院専門學校 一九三四年（昭和九）

一九三四年（昭和九）、従来の五ヶ年制の臨済宗大学を改正して、修業年限三ヶ年制の専門學校令に基づく臨済学院専門學校が発足する。前年末の宗会において新學制案は検討を加えられ、教学調査会、臨時教學制度審議會等の審議を経て可決成立する。時の宗務総長天岫接三はこのことについて、正法輪第七八五号に

名に於て大學なる名稱が除かれたが其内容に於ては、少くとも宗門教育否臨済宗門教育の目的に關する限り、其實質に於て大學以上のものたらしむるを期せるものである。

と記した。

当年度の入学志望者は二十余名、四月十日に臨済学院専門學校の第一回入学式が挙行された。

臨済学院専門學校の概要

臨濟学院専門学校には本科と選科があり、本科は一学年六十名の定員、選科の定員は若干名とした。本科の入学資格は中学校卒業、専門学校入学検定規定による試験に合格したもの等とされ、選科は中学校第四学年修了者、または同等以上の学力を持つものとされた。

本科には徴兵猶予及び、中等教員修身科無試験検定の特典があった。

開講科目は次の通りである。〔一九三九年度（昭和一四）のもの〕

第一学年

学科目および本年度講義題目

一週時数

禅宗学

臨濟録提唱

一

禅学概論

二

禅宗史

二

法儀

一

同実習

一

仏教学

仏教概論（八宗綱要）

二

俱舍論

二

經典概説

二

日本仏教史

二

宗教学・哲学

世界宗教史

二

東洋哲学史

二

倫理学・教育学

国民道德概論

二

日本道德史

二

西洋教育史

二

人文学

社会学（豊田悌助著『法律学の基礎概念』）

二

法制経済

二

文学・語学

A. Symmons, Spiritual Adventure (英語)

一

Irving, The Sketch Book (英語)

一

伊勢物語（国語）

一

論語集註（漢文）

二

唐詩選（漢詩）

一

体育

軍事教練

二

序章 前史

体
操

第二学年

禅宗学

臨濟錄提唱

禪學概論

法儀

同
実
習

仙
教
学

大乘起信論

經
典
概
説

唯識綱要

印度支那佛教史

宗教学·哲学

宗
教
學
概
論

西洋哲学史

東洋哲學史

論理學

心
理
学

—

11

—

11

11

1

11

11

11

11

倫理學・教育學

教育學概論

二

實踐倫理

二

人文學

近代思想概論

二

文學・語學

Platt; A philosopher speaks (英語)

一

The great philosophies of the world (英語)

一

源氏物語(國語)

一

莊子選註(漢文)

二

漢作文典

一

體育

軍事教練

二

體操

一

第三學年

禪宗學

臨濟錄提唱

一

禪學概論

二

序章 前史

禅宗思想史	二
禅戒	一
布教学	一
仏教学	
仏教倫理	二
天台宗綱要	二
華嚴宗綱要	二
浄土宗綱要	二
宗教学・哲学	
哲学概論（西田幾多郎著『哲学の根本問題』）	二
印度哲学史	二
倫理学・教育学	
倫理学概論	二
西洋倫理学史	二
教授法	一
人文学	
東洋文化史	一
文学・語学	

Hauthorn; The twice told tales (英語)	二
D. Suzuki: The Zen Buddhism. (英語)	一
詩 經 (漢文)	二
漢 詩 作 法	一
俳句・川柳新選 (国語)	一
体 育	
軍 事 教 練	二
体 操	一

学部の開設

臨済学院専門学校三ヶ年の教育のみでは単に一般僧侶の高等常識の養成程度に止まり、いわゆる斯学蘊奥を極めることが不可能であった。このため専門学校の上に学部を設置することが学制改革当初から切望されていた。学校関係者は新卒業生を出す一九三六年度 (昭和一一) までには開設したいとして文部省当局と折衝をつづけた。

その結果、一九三五年 (昭和一一) 八月二十日付をもって、文部省より学部開設が認可され、翌一九三六年 (昭和一一) 四月より開講された。

臨済学院学部の開講科目は、同学部開設の目的であった宗義の究明、仏教学の攻究、道念の涵養といった事柄に焦点を合せて確定された。その内容は左の如くである。

一、禅宗学・禅宗文学に関するもの

実践禅宗学 後藤 瑞巖学長

禅宗学 日種 讓山教授

儒学と禅 福嶋 俊翁教授

神秘主義と禅 久松 眞一教授

禅宗文学演習 福嶋 俊翁教授

偈頌の研究 (未定)

正法眼藏の研究 衛藤 即応教授

楞伽經の研究 鈴木 大拙博士

二、仏教学に関するもの

經典批評 松本文三郎博士

大乘仏教原理 鈴木 宗忠博士

真言哲学原理 伊藤 古鑑教授

仏教倫理 釘宮 武雄教授

華嚴哲学原理 浅井 清教授

三、哲学に関するもの

支那哲学概論 高瀬武次郎博士

支那文学概論 本田 成之博士

現代哲学 下村寅太郎教授

学部には一科と二科がありあわせて二十五名の定員とした。第一科は臨済学院専門学校を卒業したものを対象と



臨済学院専門学校卒業式



講堂・1940年（昭和15）

し、第二科は大学令による大学を卒業したものを対象とした。またこの他に別科と聴講生制度があった。

校舎改築期成運動の展開

一九三五年（昭和一〇）秋に举行された、臨済学院専門学校創立二十五周年の記念式典を契機として、校舎の改築を要望する声が学内外に起った。これをうけて、臨済学院校舎改築期成会が、時の宗務総長天舂接三、前管長神月徹宗、臨済学院学長後藤瑞巖の三名を発起人として発足した。その趣意書には、校舎改築期成会結成の理由が次

のように述べられている。

弊簷破屋能く偉材を打出する底は屢々本学院の声誉たりしが時勢の推移は茲に相当の反省を促しつつあるを見る。故に此の教学百年の大計に立脚して堅牢にして統制ある校舎を建設し、以て育英上にも経済的にも十分に其機能を發揮せしむることこそ真に策を得たるものなるを信ず。要するに今後十年を出でざるに殆んど全面的に校舎改築の切要に直面し、一時に多額の経費を要するは当然たる事実なり。此事実を知って傍觀黙過するは不宗盟なることを痛感す。時恰かも皇紀二千六百年を迎へんとし、更に妙心寺開創六百年に際し、専門学校としては創立三十周年、中学部としては創立七十周年を迎ふるを幸ひとし、之を記念せんが為に本改築を企画せる所以なり。

こうした考えに基づいて臨済学院校舎改築期成会が作成した事業計画の概要は次のようなものであった。

計 画 要 領

本館四階建（地階を含む）延坪五百九十六坪、及び教室三階建延坪五百十九坪の鉄筋混凝土の建物を建設して先づ其根幹を整へ、現在の校舎は利用し得る限り整理して之を配し以て綜合学園としての実質を完備せんとするに在り。

経 費 概 算

総 額 一、金 二十 万 円 也

内 訳

(イ) 本 館

一、金一万七千八百十円

地階百三十七坪（坪当百三十円）

一、金六万八千八百五十円 一、二、三階四百五十坪（坪当百五十円）

(ロ) 教室

一、金七万二千六百六十円 教室十八室、一、二、三階五百十九坪（坪当百四十円）

(ハ) 一、金二万七千円 専門学校寄宿舎（三十人収容）

(ニ) 一、金二万二千元 建築物移動模様替費

(ホ) 一、金九千円 設備費

(ヘ) 一、金二千六百八十円 河川変更費（高サ十尺、長サ七十間約百坪）

関係者は、期成会結成後、当面の目標を第三十二次宗会におき、計画の実現を妙心寺派の世論に呼びかけた。

宗務本所は、学校当事者より提出された計画を検討した結果、その計画案を採用し、実施方法を立案して、これらを定期宗会に提案することを決定した。

一九三六年（昭和一一）十二月、第三十二次定期宗会が開会されると、学校職員と同窓会は、宗会に嘆願書を提出、また、校舎改築期成会の発起人三師は、宗会議員と懇談した。これに対し宗会は、特別委員会を設置し、改築の必要性と重大性を認め、実地調査を行ない、財政及び教学についての検討を行なった結果、この計画を可決した。その決定によると、これを七ヶ年計画とし、経費総額二十万円の内、七万円を宗務本所の支出、十万円を妙心寺派二十余万戸の喜捨、残り三万円を同窓会及び学校関係者の喜捨によるとした。期成会はこの決定をうけ、翌一九三七年（昭和一二）二月二十六日、臨済学院校舎改築期成会発起人会を開催して、役員及び規約等を確定、学校関係者に割当てられた三万円の経費調達のため、淨財勸募の活動に入った。

この活動は関係者の努力によって積極的に展開され、その後募財は目標に到達するが、時あたかも、日中戦争の

大な計画は実現をみないままおわる。
 その後、時代は急速に激動の度を加え、臨済学院専門学
 校もまた、他の教育機関と同じように、その波にもまれる
 こととなった。



接心会風景・1938年（昭和13）頃

勃発（一九三七
 年）、国家総動員
 法の成立（一九
 三八年）、日独
 伊三国軍事同盟
 （一九四〇年）
 といった時代状
 況の中で、物価
 が急騰し、物資
 の統制が行なわ
 れ、遂にこの遠



射撃部・1941年（昭和16）

第一章

新制大学設立から文学部設置まで



- 一、新制花園大学
- 二、参玄寮と白雲寮の建設
- 三、図書館の建設と禅文化研究所
- 四、新校舎の落成
- 五、仏教学部時代の活動
- 六、文学部設置
- 七、本館の増改築

(荻須純道)

第一章 新制大学設立から文学部設置まで

一、新制花園大学

花園大学が新制の大学として発足したのは一九四九年（昭和二四）四月からである。もともと許可を得たのは二月二十一日であった。終戦後「新制大学」の基準が示され、なんとかこれに遅れまいとして、挙学一致、懸命であった。大学昇格のことは臨済宗大学を四年制から五年制にした手島文倉学監の理想にも窺えるが、この大学昇格の運動がなされたのは奥江順徳学監のときであった。しかし本派に財源なく、募財して金貳拾万円の教学財団ができたと止った。当時の貳拾万円といえは相当なものであったが、大学設立までにはほど遠いもので、まだ時期尚早であった。

一九三四年（昭和九）天岫内局は教学の振興を標榜したが、学制改革によって臨済学院専門学校としてしまった。爾来花大の前身は臨済学院専門学校となった。しかし宗学の教授研究は高い水準を保とうとして学部を併置していった。しかし戦時中で学生は集らず、尼僧が多くなっていった。これらの先人の理想と苦い経験とをもって終戦を迎えた。

終戦後、新制大学の学制改革がいろいろと進められた。われわれは大学昇格の好期が来たと思つた。しかし示された文部省の設置基準は基準がたかく、施設、教員組織等の面で難しいものがあつた。すでに隣接の花園中学は一年早く一九四八年（昭和二三）から新制高校の花園高等学校として発足していた。この年はいよいよ大学の審査がある年で、われわれは一層緊張したときであつた。一派の中には花高を廃すべしと意見も強かつたが、後藤棲道内局は花園高校を小沢和一校長に一任して経営を持続することにした。のち花高は発展するが、建設当時の花高は十名前後の教職員で悪戦苦闘を続けていた。



市川白弦学監

大学は臨済学院専門学校を新制大学とするため市川白弦学監を中心として、種々準備がすすめられた。最初計画したのは仏教学科と社会学科であつたが、校舎・面積等の都合で仏教学科一本にしぼることにした。校舎・運動場は花高の一部を共用することにした。教授陣を組織し固めるために毎日人物捜しに懸命であつた。大学の成り立ちから一般教養の人文・社会は何とか人物があるが、自然科学においては全然といつていいほど無縁であつた。それが幸いに牧茂市郎（生物学）、山内淑人（化学）の両理学博士の参加を得たことは何よりの強みであつた。専門科目でも新村出・久松真一の両文学博士の参加は教授陣に重きをなすところであつた。そしてまた、学則を起草するに当って本学の特色を出すため、実践禅学をいかに扱うかという問題があつた。臨大・臨専を通し、接心は一日たりとも欠席すべからずという厳しい一則があつた。事実、臨大時代に接心を欠席して落第になった人もあつた。第一則は、

「花園大學」昇格決定御報告

かねて江都郡より特別の御支援を賜りました花園大學四年制新設大學設置委員会において昇格と決定致しました。

茲に敢て此の喜びを御報告申し上げますとともに諸君の御道案内に對し深甚なる感謝の意を表し併せて向後の御経緯を御願申し上げます。

昭和二十四年九月五日

花園大學新設大學設置委員会

本 院 附 属 臨 濟 學 院 專 門 學 校

昇格決議部志願者各位

新 花 園 大 學 學 生 募 集

○募集人員 第一學年 本科 哲 学 科 30名

○本校出身者及び一般有志者(定員外)は随時募集

○入學試験は九月二十日及び二十一日付宛を記入の對

前同時提出されたい。

京都府京都市花園本町

臨濟學院專門學校

正法輪・1949年2月

本学は高等の知識を授け、専門の學術を教授研究し、仏教精神に依つて人格を陶冶し、人類文化に貢獻する人物の養成を目的とする。

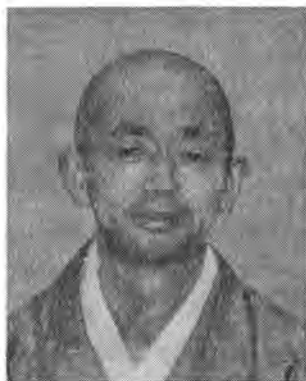
とし、「前条の目的を達するため実践禪學を履修しなければならない」とした。もっとも後に文学部になって学生が増加して来てからは無理があり、仏教学科と有志の学生で履修するようになり、学園紛争後は「実践禪學を開設する」と改めることになった。

学生は暑中休暇を利用し、各郷里を中心に卒業生や妙心寺派の寺院に化縁して大学昇格を訴えた。そして、思い出されるのは臨專の学生が審査前になったら、毎日校舎を清掃して呉れたことである。各班に分れて分担し、板の間をわらだわしで磨いていた。平生はいくら注意しても下駄ばきで上った学生だが、いよいよ審査前になったら全学の学生がわらだわしまで持ち出し教室を磨いて呉れた。大部分の学生は旧制の専門学校で卒業してしまふから、新制大学が許可されても彼等には関係がなかった。全く捨石のような犠牲的役割をして呉れたことであつた。学校も本山も教員も学生もみな挙学一致で大学への新設を目指した。後藤棟道宗務当局は、秋、宗会を開いて大学昇格を議決した。各教授は圖書等の蔵書を審査のために借して呉れた。そして十一月、文部省の審査官が来て審査をした。図書は七万冊と報告したが、自然科学の弱い点を指摘された。そして教授陣容が頭ばかり大きくて、助教授や講師の少ないことを注意され、文学部として届けを提出したが、仏教学部に改めるようにいわれた。そして、翌一九四九年(昭和二十四)二月二十一日、ラジオ放送は「花園大学等一四七校新制大学許可」を報じたのである。われわれは飛びあがって喜んだ。不思議がった学生がおつた。なぜ花園

め、傑作な名前になった。しかしのち花園学園と改称した。最初の原案には花園学園としていたが、本山当局に相談したところ、教学財団には歴史があるからこの名前は改めないようにとのことであった。しかし学校法人として



荻須純道学監



山田無文学長

大学が始めでしょう。そりや君等もよくやったからだとはいったが、恐らくはいろは順であつたろう。

初代学長は奥大節老師（大分萬壽寺師家雲閑窟）

であつた。この大学昇格にはかつて臨大の学監であつ

た奥江順徳氏（妙心寺派教学部長）の強いバックアップがあつたことも記しておく。五月二十五日の創立記念日に花園大学創立記念式を挙行した。

このとき宗務当局は第一次衣笠内局に交替したばかりであつた。そしてこの年の十一月、大学当局の交替をなし、学長に山田無文（太室）老師、学監に荻須純道教授が就任した。そして従来の学校の経営主体は妙心寺派教学財団であつたのを私立学校法にしたがい、学校法人とし、妙心寺派教学団とした。はじめ妙心寺派教学財団で文部省へ提出したところ、学校法人に財団の名は不当であるというので、突差に財の字を除いたた



初代学長奥大節老師

は相応しい名前に改めねばならなかった。

教職課程の組織

一九五〇年（昭和二五）に教職課程の申請をしなければならなかった。教職課程には二人の教育学の専任教員が必要であった。幸い花大には当時、富田精（心理学）・池長澄（教育学）の両先生がいたから大船に乗ったような気持でいた。九月四日ジェーン台風が来て、本館講堂が傾いてしまった。これはえらいことになった。瓦礫の整理や夏休みに延びた校庭の草引きをし、第二学期の開講を待った。九月十一日、池長氏が講義に来たから、教職課程のことを懇願した。池長氏曰く「私は大阪大学の専任になっていきますから」というのであった。このことを自分は少しも知らずにいた。いよいよじっとしておれない心境であった。九月三十日までに書類を文部省に提出しなければならぬ。数多くの先生を知っているわけではない。それで何方かに紹介して貰わなければならない。当時私は図書館（後学生会館になる木造）の二階に宿泊していた。電話のあるところは電話をかけてご都合を伺い、それから行けばよいが、電話のないところは午前八時までに紹介者のところへゆくことにした。このようにして教育学（富田精氏・味岡良平氏）をはじめ経済学（高橋良三氏）・法学（松本米治氏）・日本史（藤直幹氏）・外国史（金子光介氏）・地理学（藤岡謙二郎氏）・公衆衛生（山田重正氏）等の専任・兼任の教員の承諾を得て教職課程の組織をすることができた。このとき許可されたのは社会と宗教の二教科の教員免許であった。当時教育学の大学教員の資格をもつ人は少なかった。片岡仁志先生（京大教授）から京大の下程勇吉教授を紹介して貰い、下程教授の尽力で漸く教育学の補填ができた。

二、参玄寮と白雲寮の建設

一九五九年（昭和三四）に妙心寺開山無相大師の六百年の大遠諱が厳修されることになった。法灯ここに六百年、

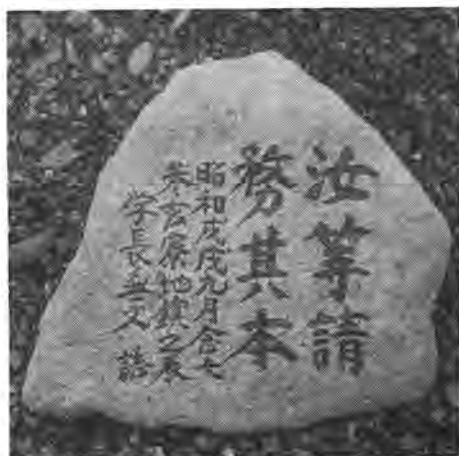


参玄寮

若い法孫を育成する花大の使命は重い。花大の記念事業としては寮の建設があげられていた。その時の寮は参玄寮であり、臨大時代からの寮であった。だいたい、この寮は桂の農林学校の古材を以て建てられたもので、それから五十年の風雪を経て、元気のいい学生が生活するために、いたみが著しかった。しかし花大の精神はこの寮生活で養われていた。

朝晩の勤行・点呼・清掃・坐禅等が行なわれた。戦後は物資が不足で、寮外の学生も米穀通知証を寮に置いて生活した。給食者は一致して、校庭に芋を作った。また薪割を手伝った。授業はサボっても薪割の当番は休まなかった。「勉強はしなくても作務の精神だけは忘れないで下さいよ」といった話声があった。いよいよ薪がなくなってきた。松の木をトラックに積んで、角帽を冠った元気のいい学生を乗せて置いたら、関門所も無事に通過してしまった。

「先生いつから休みになるのですか」「薪は充分あるから、予定通り授業をつづけることが出来るだろう」「薪の量で授業日数が決まるのですか」「薪がなければ飯を炊くことが出来ない」といったやりとりがあったものである。



白雲寮地下に埋められた石

参玄寮では便所掃除も当番で行なった。学生は当然のこととして掃除をしていた。禅宗坊主だという自負心を持っていた。このような雰囲気をもっていた参玄寮を改築することになった。まず寮を何処へ建てるかに苦心した。参玄寮の跡に建てるにしても敷地が狭い。幸い宇多川の河川工事により、川の流れが変わったので、養源院の土地六百二十坪程を譲って貰い、また花高の武道場を移転して貰うことにより、学寮を建設することが出来た。宝建設により建築され、地鎮祭の日、山田学長は石に「汝等請務其本」と書き埋めた。そして白雲寮と名づけた。ともに『開山無相大師遺誠』のことばである。

いよいよ一九五九年（昭和三四）は開山大師六百年の大遠譚を迎えることになった。一派挙って開山大師の恩徳をたたえ、将来の発展護持の大計を立てる好機会に直面したといわねばならない。翻って本学の現状を見ると、これでいいのかという反問があった。経済的不如意のため学生生活は真に涙ぐましいものがあり、困窮を克服しても学校を卒業したいという意欲に燃えていた。中には学資の大部分をアルバイトによって支える学生もあった。然し決して好ましいことではない。学業がおろそかになるのは当然である。ジェーン台風による風害復興による本館・校舎の修理改装がなり、数年前の壁は破れ、床まで抜け落ちた教室で、松下村塾を見よなどと学生を誡めていたことを思えば、一派の温き支援に日日感謝している次第であるが、次代を背負う青年学徒の学舎としては施設の不備を訴えざるを得なかった。

大学としての機能を發揮せしむるためには研究室を充実しなければならぬが、本学のごとく学生の大半が地方寺院の子弟であり、傍ら行的訓育、禪僧としての躰けを薫習すすためには寮は重要な役割を演ずるのである。這般の宗会で開山大師六百年遠諱記念事業費として、二十五万四千円（内訳、花大一千七百万円、花高三百五十万円）を議決して頂いた。参玄寮は上級生もおり下級生もいた。しかし白雲寮は下級生の一回生を中心とした学寮とすることが目的であつた。読経・坐禪・作務等をする教育機関であつた。なるべく一回生に室をあけて欲しかったが、必ずしもそうもゆかなかつた。

三、図書館の建設と禪文化研究所

一九六〇年（昭和三五）、開山大師六〇一年を期して学内の施設拡充を意願した。そして、先ず大学の生命ともいふべき図書館の改築を決し、同年五月二十五日の創立記念日に、鈴木大拙博士を招聘し、新築の花園会館で記念講演会を開催し、同窓の人びとに呼びかけた。演題は「東洋思想の特殊性」で一同拝聴した。同窓生も遠近から集まつた。そしてこの講演のあと同窓総会を開催し、竜安寺住職



白 雲 寮

松倉紹英師を議長として、「花園大学図書館建築」のことを計って貰った。ここにおいて同窓会は図書館建築のことを議決した。

そこで花園大学改築後援会なるものを作り、会長に山田無文老師、副会長に白水敬山老師（平林寺師家）、林古鑑老師（那須雲巖寺師家）、村上慈海師（金閣寺住職・父兄代表）、松倉紹英師（竜安寺住職）を推挙し、同窓・父兄・教職員一丸となり、その目的に邁進した。当時二百名未満の学生しかない大学に自己資金のあるはずはない。只管、寄附金に依存するより致し方なかった。しかし寄附金は容易に集まらなかった。

図書館を中心とする研究施設を充実したいという念願が禅文化研究所を建設しようということにまで発展した。はじめ国際的禅センターを、全臨済宗の支持のもとに、妙心寺境内を離れ学外に建設しようとした。これを花大の構内に立てることを目標として来た改築後援会としては、

思わぬ問題の発展となった。しかし学外に建設するとしても、その将来の運営については、花大の立場が全面的に尊重されるということになり、禅文化研究所と花大図書館の二本立てで並行して進めることになった。

改築後援会の事務局を、学内に設け、木村静雄氏を中心に庶務が進められた。しかし、数少い同窓から多額の募財することは容易でなかった。紙屋川の法輪寺からダルマをゆずり受け、事務室の机上においた。誰か知らぬ間に薄目をあげた。まことにほほえましい一齣であった。しかし、一年たっても二年たっても目的額にははるかに遠かった。三年目に実行委員会を開き、着工に踏切った。工費ができたわけではない。ダルマの薄目はなかなか開か



改築前の図書館



花園大学図書館落成記念・1963年（昭和38）

なかった。しかし各山管長や諸老師方から、温い慈慮のもとに揮毫を頂き、また会長の山田無文老師をはじめ、金閣寺・竜安寺・銀閣寺・苔寺の各寺院および同窓を中心とする皆様から多額の浄財を頂き、ついに図書館落成の日を迎えた。一九六三年（昭和三八）十一月十八日、同窓二〇〇名が集まり花園大学図書館の落成式が举行された。

金閣寺長老村上慈海師の巨額の喜捨により竜安寺・銀閣寺等の賛同のもとに禅文化研究所が設立され、図書館内に並置された。このとき金閣寺は五千万円を寄附し、内三千万を基本財産とし、二千万円を運用財産とし内一千五百万円を建築費にあて（二階三階の一部、五百万円を設備費にした。図書館落成記念式の日、山田学長は次のような挨拶をした。

学長就任以来、無能無力、無為徒食、常に慚愧していましたところ、各派管長猥下老師方から、多量の墨蹟並にご喜捨まで頂

戴し、同窓諸賢からは寺院経済不如意の昨今にもかかわらず、莫大のご援助を戴き、中には僧堂在錫の雲衲諸君の涙ぐましい献金まで寄せられて、多年懸案の研究室並に図書館の建築を見事に完成していただきましたことは感激のいたりであります。殊に学外からも、金が入るだろう。帳面を貸せ」とまでいわれて、多大の協力を得ましたことは全く開山大師の恩徳と宗門に対する社会の関心と同情によるものと、心から感謝しているものであります。

教授諸先生にも学生諸君にも、長らくご不自由をおかけいたしましたですが、今後は気持よくご研究が願え、よい雰囲気で読書して貰えることと存じ、喜びに堪えません。

しかし宗門並に社会に対する本学の責任は建築物や設備の充実にあるのではなく、どこまでも大法を荷担する人材の養成にあることを忘れてはならんと思います。禅が単に文字を研究するに了るならば、それは高級なる遊戯であって、仏祖に対し、これ以上の罪過はないと思います。一人でも二人でも真に宗旨の伝灯を嗣ぐ人物を打出することこそ、本学の使命であると覚悟する次第であります。

なお図書館の設計は河村専太郎氏、建築は宝建設社長磯谷信一氏であった。

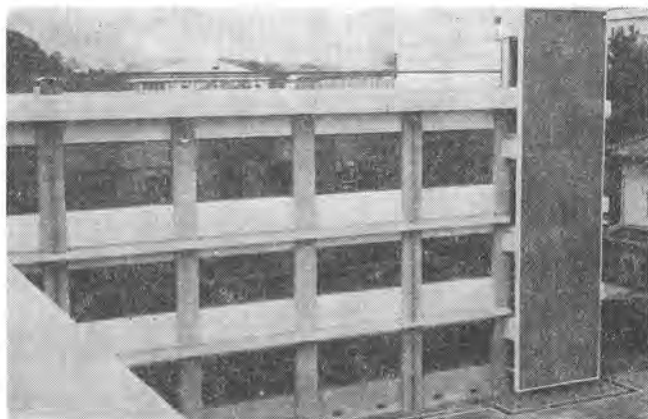
四、新校舎の落成

一九六一年(昭和三十六)五月、宮裡顕秀内局が組局された。宮裡総長をはじめ各部長は花大の前身臨大の出身者ばかりであった。一夕学長老師の靈雲院で歓迎の席を設け、その席で同窓内局による記念事業を懇願した。花園会あたりでして貰えるならという声を聞いた。それで私は木村静雄氏とともに、翌日名古屋の花園会会長伊藤藤嘉市氏を訪問し、花園会十周年の記念事業として花大校舎改築のことを懇願した。その年の十一月、花園会大会が開かれ、そ



旧 教 室 棟

のことを論議して貰い、遂に花園会で校舎を改築することが決定された。これにより妙心寺派一派の協力を得て花大の校舎が改築された。新築された新校舎は鉄筋三階コンクリートで三百六十坪の近代建築であった。町田実男氏の設計で宝建設が建築したものである。宗務当局は五千万円を計上し、これを目標として募財していた。花園会



新 教 室 棟

の本部長中原文雄氏が、花園会総会のととき、質問の矢表に立ち奮闘して下さったことが印象的であった。

一九六三年(昭和三八)、図書館が落成し、引続き翌々年教室が竣工した。何分にも旧校舎は老朽の極に達していた。戦時中は学校工場となり、一階の床をとり、そのためにけたがゆるんで戦後になって二階が落ちたことがある。

落ちた学生も大怪我がなくてすんだ。けたがはずれていたのかどうかは、天井裏のことで誰も気がつかなかった。いまならやかましい大問題になるところである。一九五〇年(昭和二五)、ジェーン台風の被害を受けたとき、大修理をしモルタル塗装がなされ、一応見よくなったが、何しろ狭くて通行も出来ないほど机がつまっていた。本館が脚をつっぱった格好をしていたのはジェーン台風の遺物であった。幸い花園会の発起によって落成したことは感謝に堪えないところであった。檀信徒に期待される本学の使命は大である。本学として一貫されるものは禅的人物の育成である。とかく立派になると苦難時代のことを忘れがちである。妙心寺の開山大師は雨漏りのする堂舎で学徒を訓練されたと伝えられる。その高風をまず新校舎落成にあたつて再認識すべきである。建物は前年出来たが、新校舎祝賀会は一九六五年(昭和四〇)四月十九日に行なわれた。

五、仏教学部時代の活動

「花園大学通信」の創刊

一九五四年(昭和二九)十月、花園大学通信が創刊された。大学と同窓等外部との関係を緊密にするためであった。山田学長は世界の思潮を説き、創刊号に次のように書いている。

世界の関心が禅にそがれているとき、花園大学の持つ意義と責任は重大だと思ひます。世界の今後の思潮の一翼を担う母胎として貢献しなくてはならぬと思ひます。この重大な任務を果たすためには、本派は勿論、臨済全派のご支援を俟たなくてはなりません。殊に今日、本派並に各派の重要なポストを占めておられる同窓会員諸師の多大なるご同情とご助力を仰がねばなりません。云云

そして学生にこんなことを訴えた。



花園大学通信

天竜寺開山夢窓国師は、厚く足利幕府の帰依を受けて徳望一世を覆い、受戒の弟子は一万余人と伝えられる。言はば国師はその時代の空間に生きた人である。是れに対して同時代の開山国師は、荒れ果てた花園離宮を寺とし熱喝暝拳に非ざれば作務三昧で、集まる修行者は塵を望んで退き、法を伝えるものは一個半個であった。しかしその無生死の禅は四派にひろがり、白隠に伝わり、脈々として六百年の今日に及んでいる。言はば国師は時間に生きた人と言えよう。私は諸君に対して、諸君が禅者としてならば、夢窓の如く、現代に社会的に生きるに非ざれば、関山の如く、千年の未来に向って生きよと望みたい。

禅講座の公開と花園文庫の出版

学生の中には、人類文化の向上に禅が重要な役割を持つという自覚のもとに、坂本静一教授を中心として弁道会なるものを結成し、遮二無二坐禅弁道する学生グループがあった。今の竜沢寺の鈴木宗忠老師や禅学の主任平野宗浄教授はそのグループであった。一方にはまた原水爆禁止、平和運動に熱心な学生もあった。社会と大学は密接な関係をもたなければならぬとし、学長老師の週一回の提唱は学外にも開放され、聴講する人もあった。これは今日まで続いている。そして花園文庫なるものを刊行し、学内外の人びとの購読を願った。しかしこれは少ない事務職員が片手間で事を運ぶには負担が多く、第六集で中止となった。その内容は次のとおりである。



花園文庫

第一集 あしもとを見よ

三浦承天・山崎大耕 共著

第二集 花語らず

柴山 全慶 著

第三集 手をあわせる

山田 無文 著

第四集 本当の自己にめざめる

久松 真一 著

第五集 六牛図講話

柴山 全慶 著

第六集 妙心寺案内記

荻須 純道 著

その後花園大学出版部から、千田杏月句集『袖風呂』を発行した。千田氏は豊泉といひ一九三四年（昭和九）から本学に勤務した会計幹事であった。また今津洪嶽教授の著書『宗教の二大類型と師資相承論』を刊行した。仏陀の宗教は唯一無二の禅定型の宗教であるとなし、その中軸をなして発展した師資相承の問題を仏教各宗派にわたって検討されたものである。

雑誌「禅文化」の創刊

雑誌「禅文化」は第一号が一九五五年（昭和三十〇）六月一日に発刊されている。本学には臨大以来、「禅学研究」なる学術雑誌があったが、一般社会人啓蒙のためには高度すぎわかりにくかったので、一般社会との関連を深めるために雑誌「禅文化」を発行した。現在は禅文化研究所より定期的に刊行されているが、最初は同人雑誌で、発行毎に苦勞した雑誌である。これは山田学長老師の念願でもあった。編集同人には学外の学者も賛同し、参加して下さった。当初の同人は次のとおりであった。



禅文化創刊号

今津洪嶽・荻原井泉水・土居次義・中村元・内島北朗
 荻須純道・緒方宗博・川村淳治・山田無文・福嶋俊翁
 藤直幹・淡川康一・佐々木三昧・木村静雄・柴山全慶
 重森三玲・人見少華・森本省念・久松真一・鈴木大拙

(順不同)

三号雑誌で終るかとも思ったが、発行の都度、山田学長
 老師がポケット・マネーで支えていた。編集人にいまは亡
 き横山文綱氏が加わったり、いまの禅文化研究所主事木村
 静雄氏が力を入れ、金閣寺号や竜安寺号、黄檗号などの特
 集号を出してつないでいた。その後、禅文化研究所が出来てからは雑誌の発行は順調になった。鈴木大拙博士がア
 メリカから書を寄せ、創刊号に

世界的意味をもっている。狭い範囲で考えないで、視野の飽くまで広からんことを要する。自分の考えで
 は、基督教だけでは世界の人間は助からぬ。どうしても仏教が加わらぬといけな。その先鋒をなすものは
 禅だと自分は信ずる。他日何か一文を草する。云云。
 と所感を寄せている。

日本印度学仏教学会第十回学術大会

開山大師六百年遠諱のあった一九五九年(昭和三四年)の十月二十四日(土)・二十五日(日)の両日、本学に
 おいて、日本印度学仏教学会の第十回学術大会を開催した。両日とも晴天に恵まれ、研究発表者は一八二名の多数

にのぼり、また聴講者も五百名ほどあり、学内は空前の満衆で、学会始つて以来の盛会であつた。発表会場は前年度は四会場であつたのを五会場の部会に分ち、次のように行なわれた。

第一部会 第六教室

印度・西域・西藏仏教關係

第二部会 第四教室

第三部会 第一教室 中国仏教關係

第四部会 第三教室

日本仏教關係

第五部会 図書館閲覧室

理事会 本館二階會議室

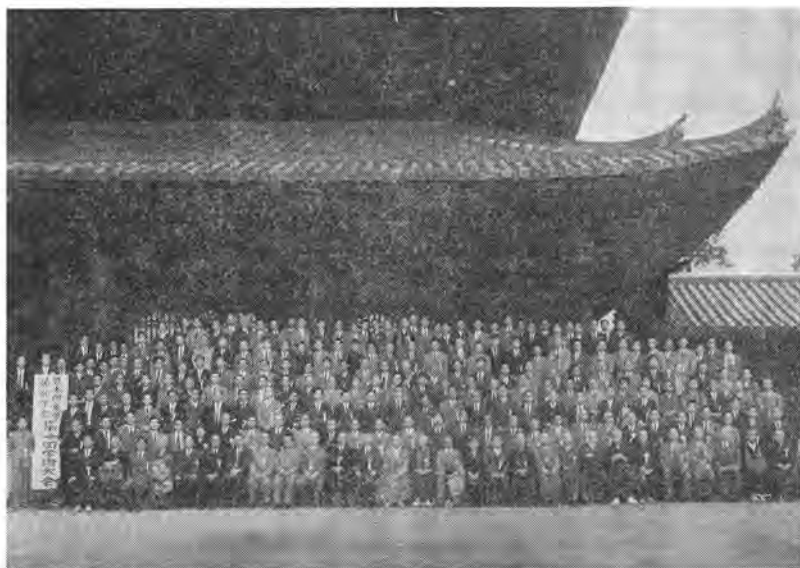
會員控室 第二教室・第五教室

記念撮影 妙心寺法堂東

會員總會並に懇親会 花園會館

二十四日午後四時二十分研究発表終了後、會員一同妙心寺法堂前において記念撮影をなし、撮影後法堂内の天井に画かれた狩野探幽の「竜」を拝観した。続いて本学に隣接する新築の花園會館において、會員總會を行なつた、参会者二百二十名、中村元（東大）理事司会のもとにすめられ、本学学長山田無文理事導師となり、會員起立して三篇依文を唱和した。沈香のたちこもるうちに一同沈黙合掌して着座し、干潟竜祥（九州大）理事の開会の辞のち山田学長理事から当番校として次のような挨拶があつた。

今回、当代学界の碩学諸先生を、学問不毛の地といつてよいような弊学にお迎えして、時ならぬ学問の花を咲かせて頂きましたことは誠に光栄に存じ、また感謝に堪えません。由来、弊学は学界の山びこ学校であ



日本印度学仏教学会第10回大会

りまして、学問に対しては、まことにお恥しい次第であります。これと申しますのも私どもの先祖が学問に対して甚だ不穩な言辭を弄しています。その法罰であろうかと存じます。不立文字、教外別伝はまでも、三乘十二分教は不淨を拭う故紙なりというに至ってはまことに糧ではありません。しかも金剛經の疏を燃したり、折角師匠の書かれた碧巖録を焼き棄てるというような不逞な輩さえ出まして、まことに申し訳ない次第であります。今後は心を改めまして皆さん方の驥尾について、大いに学界のために努力したいと思えますから、何分のご指導をお願いいたします。

ついで宮本正尊（早稲田大）理事長の挨拶があり、山田靈林（駒沢大）理事を座長に議事が協議された。

さらに総会后、懇親会を花園会館階下大広間で行なった。非常な盛会であった。荻須学監司会となり、宗務総長森宗苾師の歓迎の辞、妙心寺派管長古川大航老

師によつて般若湯の乾杯があり、ついで宮本理事長が謝辭を述べられた。天下の仏教研究者が一堂に会する宴はいよいよたけなわとなつた。折しも日本學術會議員改選を前にし、本学会から推選する中野義照氏(前高野山大学長)・福井康順氏(早大・大正大教授)・石津照爾氏(東北大学教授)・上田義文氏(名古屋大学教授)らが立ち、學術の進展に尽したき旨を述べ、一同声援の拍手を送つた。続いて古田紹欽氏(北海道大)・稻垣真我氏(仏教大)の學術隆盛を慶ぶ挨拶があり、歓談の裡に終つた。なお妙心寺諸堂拝觀に便するため、『妙心寺案内記』(花園文庫第六集、荻須純道著)を一部ずつ参会者に呈上した。

ここに妙心寺派・本學關係の發表者をあげると、

榮西の念仏勸修とその時代的意義

古田 紹欽(北海道大)

atman と anāman とについて

西 義雄(東洋大)

無文元選の行狀記について

竹中 玄鼎(早大出身)

大燈國師の獨脫性

教授 荻須 純道

思想という語をめぐる

〃 柳田 聖山

白隠下の二派に就いて

〃 大井 際断

日本の宗教における諸問題

〃 稻岡 順雄

大鑑清規考

助教授 大石 守雄

弥勒上生經の研究

〃 石川 良昱

禅録フランス訳について

講師 柴田 増美

禅那理・行の思想について

助手 小林 円照

六、文学部設置

多年の念願であつた仏教学部を文学部にして学科を増設する計画が熟し、いよいよ一九六五年（昭和四〇）に申請することになった。去る一九六三年（昭和三八）に仏教福祉学科を届出て認可となり、さらに文学科（国文学専攻）・史学科（国史学専攻・仏教史学専攻）・社会福祉学科（社会福祉学専攻）・仏教学科（仏教学専攻・禅学専攻）に増設編成し、文学部と名称を変更して申請することになった。この申請は学校法人の寄附行為のごく一部変更にもなつて、学校法人の財産評価も審査され、また学則の変更によつて、教員の編成や図書館の蔵書を分類した冊数なども報告し、あくまでも、大学設置基準に照らして、増設部分は充実に報告しなければならなかつた。理事会や教授会の了承を得て、事務職員の手承を得た。事務職員が各々分担を決めて、荻須学監を中心に総動員であつたことにした。四月から準備をすすめて、いよいよ本格的に仕事を始めたのが六月下旬であつた。夏休み返上の活躍ぶりで、荻須は勿論、千田豊泉・森弘宗・大石守雄・石川良旦・橘恭堂らの各職の努力は大変なものであつた。締切りの九月末に書類が出来上り、トランク四箇分の大部のものを持ち、早速上京、文部省に提出した。その後指摘された不十分のところを補充追加したが、十一月中に二回にわたり視察があつた。そして一九六六年（昭和四一）二月二十三日に認可された。文学部を設置した目的は次のように記されている。

本学は学校教育法第五十二条に基づき、仏教精神によつて人格を陶冶し、人類文化の発展に貢献する人物の養成を目的とし、もつて人格高邁なる禅宗僧侶ならびに実社会における有為な人材を打ち出すことを使命とするものである。かかる目的、使命のもとに一八七二年（明治五）発足以来、幾多の変遷を経て一九四九年（昭和二四）新制大学となり、仏教学部仏教学科を設置し、有能な宗教家及び高度な学術研究者を養成し

て来たのであるが、一九六四年（昭和三九）社会の要請に応ずるため、同学部に仏教福祉学科を増設し、道徳的及び応用的能力の旺盛な社会福祉家の養成をめざすことになったものである。ところが本学は従来、仏教学部のみを設置していたために、仏教教理の研究ないし、その応用的研究にとどまりがちで、高度に進歩発展した現代社会の文化構造の中にあつては、本学の教育は目的を充分に發揮できないうらみがあつた。加えて仏教研究の立場からいっても、広く人文科学・社会科学との関連において研究がなされねば、充分な究明のなし得ないことは論を俟たないところである。

それ故、ここに仏教学部を廃止し、その内容を解消し、新たに文学部を設置し、その中に従来の仏教学科及び仏教福祉学科を含め、より広い視野からの研究体制の整備をはかるとともに印度・中国・日本の精神文化において仏教の占める位置は大きく、従つてこれらに関する学的研究によつて、学界ならびに人類文化の進展に寄与貢獻しうる分野にある史学科・文学科を増設し、もつて研究体制を整え、本学の教育目的を充分發揮しようとするものである。教員組織のうち専任教授・助教授を挙げれば左記の如くである。

仏 教 学 科

教 授 山 田 無 文

木 村 静 雄

藤 吉 慈 海

柳 田 聖 山

助 教 授 高 崎 正 芳

社 会 福 祉 学 科

教授

伊藤古鑑

西原 富雄

竹内啓

市川白弦

味岡良平

助
教
授

大江憲二

石川良昱

長尾憲彰

史

教 学
科 授

荻須純道

桜井景雄

堂谷憲雄

福島雅蔵

助
教
授

大石守雄

秋山日出雄

国文学科

教授

福嶋俊翁

鈴木重雅

法橋理知

小野信爾

助教授

図書館図書

一般教養関係

人文科学系 七、五六二冊

社会科学系 一、一一一冊

自然科学系 七九〇冊

語学関係 二、七〇五冊

保健体育関係 二三二冊

専門教育関係

仏教学科 一八、七六二冊

社会福祉学科 四、二六八冊

史学科 五、一〇六冊

国文学科 三、七五一冊

総合計 四四、二九七冊

その後、妙心寺派管長嶺南室狹下から、金百万円の図書購入費を寄贈されたり、今津洪嶽先生の図書一四九六部三三七八冊を購入し、今津文庫と名づけたり、藤直幹・梅野嘉代・佐野大義・塚本幸七氏らの蔵書が寄贈された。

なおこのとき認可された文学部は仏教学科四〇名・社会福祉学科四〇名・史学科四〇名・国文学科三〇名で、合計一五〇名の定員であった。仏教学部が文学部に改称されても、校風や訓育方針には変りはない。創立精神を堅持した禅を基底としたものであり、そこに特色ある学風が打ちたてられなければならない。従来は宗門の後継者育成のみにおわるきらいがあったが、今回は門戸を社会に開放し、広く人文科学や社会科学との連繋のもとに、仏教学や禅学が研究され、また禅や仏教思想を以て諸学が研鑽されなければならない。認可はされたが、これが稔るためには、三年また七年の努力が要請される。

七、本館の増改築

本館の改築は長年の懸案であった。寄宿舎・図書館・教室とたび重なる整備で関係各位のご支援を得たのちであり、かなり無理な事業であった。しかしあえて各方面のご支援を得て断行しなければ、学園の近代化は後退し、時機を失うことになる。また一般社会では大学進学者が急増しており、花大がそれに対応するためには施設の拡充を計らなければならないという、やむにやまれぬ事由によるものであった。

一九六六年（昭和四一）の秋、学校法人花園学園の理事会・評議員会は全会一致で、本館増築を議決し、妙心寺派宗務当局はこのことのために、臨時宗議会を開き、五年間に二千万円を助成することを議決して下さった。そこで本館増改築委員会（委員長華山恵光理事長）を組織し、一級設計士林謙次氏の設計監督のもとに宝建設社長磯谷信一氏が建築を担当し工事がすすめられた。

このとき手持ちの金はなにもなかった。当座の当ては私学振興会の借入金であった。この議決が通過して私は東京の私学振興会に出頭した。「いくらご用立てしたらいいですか」「多い方がいいです」「貴方の学校は二千万円



旧 本 館

弱ですね」い
つごろ金を送
ってくれるか
と、十二月二
十日過ぎにな
り電話で、「今
年は送金が
出来ませんな
ア」受話器を
とった私はび
っくりした。
「それではお
借りできない

のですか」「いや年末ですから来春お送りします」やれやれよかった。翌一九六七年（昭和四二）の一月末に一、九五〇万円を借りることができた。一般社会の商社からも寄付の応援を得ようと思い、大蔵省へ損金算入の法人寄付許



新 本 館

可願の申請をし、いずれも許可されることになった。

工事はどんどんすすんで来た。一月の終り頃であった。ある日寄付帳の筆はじめに、「学長さん寄付帳を廻さなければならぬから、一筆お願いします」と学長にお願いし、しばらくして伺ったとき、「金貳千万円」と書かれたから驚き「大丈夫ですか」といった。「今度は五年間に出すということだから、納もきばってやる」という。私は力づきその日菴安寺を訪問し寄付を願った。「真中に太筆で一つお願いします」すると紙尾に壹千万円と書かれた。「真中に書いて貰えばよかったですね」「ここは金閣寺さんに残しておく」というのである。その足ですぐ金閣寺を訪れた。こんな風にして大口の寄付を得た。同窓・父兄の皆様から浄財を頂いたことは感謝に堪えなかった。また花大や禅文化研究所の諸先生が、用務員のおばさんにいたるまで喜捨を申込みたことはこれもまた感謝に堪えなかった。ある老婦人が折角ためた五十円・百円の硬貨で一口金壹万円也を寄せられた。期待される本学の使命の重かつ大なることを痛感する。鉄筋四階建（延六五〇坪、総工費一一、二三五万円）の近代建築で、坪数は旧館の約三倍の広さであり、全くここに面目を一新することができた。一九六七年（昭和四二）十一月十二日午前十時を期して新本館で落成式を行ない、午後一時から同窓総会を行なった。

翌年三月、荻須学監の辞任により、大学は従来の学監制を廃し、文学部長・総務部長・学生部長の三名をおくことになった。

花園大学と私の三十年

山 田 重 正

乏しき花大体育学の初代教授をうけてまるまる三十年をつとめあげた。教職員のみなきまの御高庇を得て、居心地よろしくあつというまに時を過したことになる。

荻須純道先生の筆になる本書第一章「新制大学設立から文学部設置まで」により草創期のなみなみならぬ御苦勞のかずかずのあつたことを知った。

昭和二十四年の大学設立当時から昭和五十四年四月に至る三十年をまのあたりに見た数すくない教員の一人として、感慨は決して浅いものではなかった。

私が花園大学に招かれたのは学監市川白弦先生によってであった。先生はわざわざ拙宅に光来された。私の存在が花大に知られていたのは、故花園高校校長小沢和一先生によってではなかったかと、記憶に誤りがなければ、そう思う。教壇に立った経験は昭和十三年頃以来の京都府医師会看護婦学校であった。大学教員ははじめてで自信がなかったのは勿論であったが、たつての依頼のお言葉があつてお受けすることにした。

当時大学設立認可については図書の数が問題であつたらしい。禅宗大学に医師がちんにゆうするのは私をはじめであつたろうと思うが、医学書など備えられてある筈がない。そこで私蔵の医学書を二、三十冊お貸しすることになった。自然科学方面の先生方もそれぞれ提供されたらしい。「見せ金」という言葉があるように、この場合まさに「見せ本」という次第であった。「見せ本」の御礼に

奥大節学長と大徳寺管長後藤瑞巖両老師の墨蹟を頂戴した。これはのち表装して今日に至るまで記念にと大切にしている。

当時は、仏教学科だけで教授連はほとんど禅僧ばかりで部外の人々は牧茂市郎先生ほか数名に過ぎなかった。異物扱いされはしないかといささかならず心配したが、もともと歴史的に坊さんと医者とは親類である。それと私の家は建仁寺の檀家のはしくれで、亡母が竹田黙雷老師会下の大姉だったので、少年時代から大燈国師の御遺誠などは暗記しており、いまでもすらすら誦えられるのである。だから抹香臭いふんいきは嫌いでない。教授陣も数がすくないところから障屏をはずして下さっており、容易にとけこむことのできたことは望外のよろこびであった。

こちらは地域医療を担当する市井の庸医でもあったから生活の基盤は曲りなりにもなり立っている。はじめていただいた月給は正確に記憶していないが、これはあてにしておらなかった。財政難の大学の台所はスケスケに覗えるので辞退を申出ることにした。白弦先生は笑いながら、些少の額で申訳ないが、あたりさわりがあるので是非受けとって下さいと申された。それから以来有難く拝受しつづけていたわけである。

校舎はおんぼろで木造。昔の風呂屋の入口のような破風のついた玄関。台風で傾いたので支柱が付けられた本館であった。寄宿舎が古いながら完備していたようである。寄宿舎寮生の病気でときおりよばれた。だいぶのちのことであるが、ある深夜に数名の学生が激烈な腹痛を訴えているとのしらせが入った。押取り刀で馳せつけ治療した。寮の横を流れる宇多川の上流に養鶏場があって死んだ鶏を捨てたらしい。それを拾い上げた寮生が料理して喰ったのである。彼等曰く、おいしかったです。私

は学生君らに「鶏の土左エ門を喰うなんて乱暴だよ、もうそんなことはしては駄目だよ」と云って帰った。その後ある卒業式の謝恩会に出席したとき、そのはなしをしたところ、四、五名の卒業生君がそれは私らですと叫んだので大笑いとなったことがある。寮の天井に墨くろぐろと「鶏の土左エ門は喰うなよ」と久しく書かれてあった。それは彼等の後進への戒めであつたのである。

草創期は先生同志はもちろん、私と学生諸君とも距離が近かつた。学生諸君の礼儀作法も立派で、禅僧の卵らしくきびきびとして気持の良かつたようである。

時移り花大の大躍進時代がくる。その代り、もういけません。オールドタイムースの人間にはあきれるばかりの事態となつて来た。学園紛争を境として学生気質も一変してしまつたようである。これは全国的規模で嵐のごとく吹きあれたものであつた。私の場合、まえむきに依然穩歩前進しているつもりであつたのだが、たいせいは猛然と吹きすすみこちらはとりのこされた感じとなつた。

花大と私の三十年は「めざましい変貌を呈したこと申すもおろかなり」という次第であつたと思う。

花大三十年の大躍進の渦のなかに私は教員生活を細々つづけて来たが、輝かしい花大の三十年の日に退職する。大学と教職員と学生の方々たちにふかい親愛感を向後もちつづけるであらう。さらにさらに向上發展する大学の前途を祝福してゆこうと考えているのである。

青春のすべて——あのボロ校舎

昭和二十八年卒　大　内　孝　道

吾々は昭和二十四年の入学、食糧事情が未だ好転せず、腹を空かして眼をギョロつかせていた。四年間参玄寮にお世話になり、正に寮の主の如く、万年床の中での起居であった。何もかも新しいスタートだった為、先生方の労苦は大変だったようだ。忘れ得ない教育実習、接心。小生も不相応な学友会の委員長など行ない、山田無文老師の許へ押しかけては子供への諭しの如く話される言葉に身を固くしていた事も想い起す。少ない学生数、極めて家族的で、而も「自由」の風潮に充ちた学園の姿は、今の大学とはやや異質かも知れない。あのボロ校舎の中に、私の、いや私だけでなくあの当時の学生の青春の全てがあったと思う。勉強はほどほどであったが、それ以外の、日曜学校や文化祭など、今も鮮明に脳裏に焼きついている。皆何かの目的に向って、結束の強い学生でもあった。然もその事が、或る意味での人生の支えにもなり、実社会での実践力になっているように思う。

もう四十才代の後半か五十才代になっている吾々、頭髮も薄くなっていると思う。逢いたいもの。花大に昔日の面影がなく、やや淋しいが、学園の自由の伝統を生かして、大いに発展されんことを祈念する。

学生大会と仏学連

昭和二九年卒 見 浦 宗 山

私が入学した昭和二五年の六月、朝鮮戦争が始まった。第二次大戦の勝者の蜜月時代が終って、占領米軍による反共政策が露骨になって来た時代である。それまでの自由・民主の謳歌から一転した左翼の弾圧、再軍備の開始などは若い者の心情をゆすぶった。

校内でも全学連への加盟の可否などを巡ってしばしば学生大会が開かれた。もともと全校で百名そこそこの学生数、今ならクラス会に毛がはえたようなものだが、司会のイロハも知らぬ小生が議長となつてたちまち立往生し、下級の橘君や霊鷲君たちに叱られたり、仏学連の会議で他校の代表連中の弁舌さわやかなのに感心したり、田舎者には良い勉強であつた。

教育二法案反対だったかのビラ張りに伏見の方まで行き、何か充実したような気分であつて来たのは昭和二八年の秋だったろうか。

クラブ活動の思い出

昭和三年卒 阿 部 寛 翁

昭和二十八年から三十二年の間、演劇部に籍を置き、専ら製作事務を担当し、税務署へ小道具あつ

めにでかけたりした。プログラム印刷のための広告勧誘では予定の二倍以上あつめることもあった。四年間頭止める時期を失ってしまった。

また煎茶（売茶本流）を習い、秋の文化祭では張り切りすぎて初歩的失敗をくりかえし、つくづく未熟さをなげいたものである。

学友会活動では、嵐山一周マラソン、第七回全学連東京大会へ参加、全日本仏教学生大会第三回京都大会事務局員としての活動等沢山あるが、実践禅学（接心）で現在天龍僧堂平田老師（当時花大講師）と昼食ぬきで坐ったことなどいづれもよき想い出である。

私の学生生活

昭和三年卒 辻 光 文

国全体がまだ喰べることに困窮していた時代であった。市川先生の講義にはクロポトキンの「青年に訴える」以上の感動があった。爾来、私は宗教と社会科学の問題に悶々とすることとなった。ただ当時の学園には仏教と現実社会を如何に切り結ぶか、少なくとも改革への若い情熱があった。こうして二十五年早春、退学。私が再び縁を得て花園の四回生として学んだのはそれから六年後のことであった。二十七才、放浪生活の末であった。学園の空気はもう以前とすっかり変り沈滞していた。就職難の時代でもあり、要領のよい学生の空気が目立っていた。久松先生の宗教哲学の時間に不正代返す

る者があって、切々涙溢るるばかりの示教を受けたことも忘れられない。

二度とないこの人生に花園は自己の何たるかを手づくりで徹底教えてくれたありがたき縁であった。

参玄寮生活の思い出

昭和三年卒　古　橋　圓　宗

参玄寮、寮生活の学生にとって忘れることの出来ない名称である。二階建木造で東の廊下でドンと音を立てると西の部屋まで響いてくる、どこかの部屋でドヤシをすればスキッ腹にこたえる句、部屋に入ると男くさい、それが寮生活である。多数の学生は二回生、三回生と進むにつれ寮を出て下宿住いをしたが、小僧の身分の私は下宿生活することも出来ず、下宿すれば、あれもしこれもしたいと悩んだものである。

朝、晩課の務めで共同集団の規律を身に付け、卒業までに一通りの経も習得出来ることは良いことである。それ以上に友情も固く結ばれることである。通学生のタマリ場として学生時代良きにつけ悪きにつけ入室された人も多いと思う。寮監池田豊人先生の想い出も多い。いつも身綺麗にして、強緩の鞭鞭振りも、今思うとなつかしい想い出です。賭人としてこれ又御世話下さいました能勢さん、寮生、通学生の多数が本当に苦勞を掛けました。私の一番困ったのは赤色のタラコを出されたこと、筒子御飯に筒子の煮付でニキビが出て困ったことなど、楽しい夢となりました。現在は大学自体移転

してしまい跡形もなく、花園禅塾が新しく設けられています。今後、学生諸兄の夢をはぐくむ場所となり、又一つの伝統を創り出されんことを祈らずにはいられない気持ちでいっぱいです。花園高校寮生活三年、大学参玄寮四年、そして寮監としての白雲寮二年、九年間の寮生活を想い出して感無量というばかりです。新制花園大学……進展せる花大に想いよせる夢、今より以上に良いカラー、独自のカラーを創造され若人に夢ある大学たらんことを祈ります。

東洋現象所・金閣・銀閣での夜警のアルバイト……

昭和三四年卒 宝 積 玄 承

私が花大に入った昭和三十年頃は、全校生合わせて百五十名程であった。先輩たちとも毎日接するといった調子だから、顔もみんな知っていた。ほとんどが宗門生だから、何か通ずるものがあったように思える。それは何かといえば、「やがて僧堂へ行き、寺を持つことになる」ということかもしれない。そういう意味では、通学生の私にとっても参玄寮の存在は大きかった。

奨学資金とアルバイトで卒業させてもらった私にとっては、東洋現象所、そして金閣寺、銀閣寺での夜警の体験は学生生活の思い出の一つである。銀閣では深夜、本堂の縁側で坐ることが出来た。この経験で、やがて僧堂へ入る心の準備が固められたようでもある。そんなことがあって、学内では「禅友会」を組織し、有志七、八人と八幡の円福寺に何回か接心にも行った。また世界学生奉仕団のセミナー、全日本仏教青年会の結集を中心に他大学生と交流したこともなつかしい思い出の一つである。

三十二年十二月には、学内雑誌『建設』の創刊号を発行、その後、回を重ねて出版した。その頃の学友たちはなつかしい。三十四年の卒業式には、妙心寺開山の六百年大遠譚に会い、喜んで荷担し、私の学生生活は終わった。学生時代、幾多の良き師にめぐり会い得た喜びは生涯忘れまい。

私の学生生活

昭和三四年卒 足立 禅 英

私の学生生活を振り返ってみると、「よく学び、よく遊び」と言いたい所ではあるが、よく学んだ覚えはあまりない。しかし、若い年頃の事であっただけに、真剣に考え、議論をし、取り組んだ事は、記憶の中に幾つか残っている。

今、『禅文化』の編集長で大いに頑張っている宝積君が、(彼の姿勢は今でもそうだが)既成教団に飽き足らず、花園仏教学生会(HBSA)の組織を作ろうと提唱して、私も一枚加った。貧しい中で、その機関紙を二、三度刊行したが、創刊号の題名を「創造」とするか「建設」とするかで議論を重ね、結局、市川先生を訪ね、先生に決めていただいた事、自分の文章が活字になるのを楽しみにしていた事など、昨日の出来事のように思えて、懐しい限りである。

私の参玄寮生活

昭和三五年卒　光　山　参　悟

「汝等請務其本」の志を抱いて上洛したのは三十一年四月の春でした。最初の一年は学長老師の靈雲院でお世話になりました。私が参玄寮生活を始めたのは三十二年四月からでした。当時の寮は五十年の風雪に耐えて古さび、壁は落ち、柱は傾き、やがて解体の運命を知ってか、心なしか悄然としているように見えた。当初の舎監は池田先生で、鎮西人の風貌を具備され、端正の中にも、温情ある人柄に接する事が出来ました。起床の振鈴と同時に洗面。全てが寺院学徒であつた当時、中には既に墨染衣が良く似合うお弟子さん達との二階仏間での朝課は、厳として禅学徒の一日の始まりに相応しいものでした。

昼休みになると、寮生と通学生が互いに往来し、将来帰山後の夢を大いに語つた事もあり、単なる寢食の場のみでない禅友の楽しい語らいの場でもありました。

三十二年より西村恵信先生が舎監となられ、一段と勉学の意欲が全寮に満ち、期末試験が近づくと、深夜まで電灯が消えず、互いにノートの整理、参考書の貸借など良く学んだものです。

土曜日の夕方になると、「オーイ行くか」の一声で時には円町の、樽に、五番町の、〇〇に、駅裏へと明日の英気涵養に向向した想い出など語り尽せないものばかりです。

良く学び、良く親交した参玄寮最後の寮生活でした。そして三十四年四月には二世寮「白雲寮」に

バトンを渡したのです。本当に懐しい参玄寮生活でした。

接心会・うどん茶礼

昭和三九年卒　山　田　啓　一

全学の職員・学生が一同に会して、真夏の太陽の照りつける法堂に坐った接心会、はじめは何もわからず参禅に拒否反応をおこし、足の痛さを我慢して、警策の音の厳しさに恐れをなし、流れる汗もじつとこらえ、公案に集中すべきを我慢という二字に集中して坐った四年間、実になつかしい。先生方の警策には若さと気合があった。

白雲寮での夜坐もつらかった。通学の友が法堂での一日を終えて家路につく、あるいは京の街へくり出す。朝からエスケープして映画を見に行った友の話も聞く、実にうらやましく思ったものだ。接心うち上げの寮でのうどん茶礼は壮大なものだった。バケツのやくみ、タライのうどん、どんぶりのいりごま、今でも目に浮ぶ。この時はじめて無心の心境に入れたかも知れない。

参禅しては叱られ、坐っては警策、こうして過ぎた花大での四年間。みごとに、自然のうちに心の教育をされて来た。すばらしい大学だった。

白雲寮

昭和四一年卒

羽

澄

直

樹

(旧姓 上嶋)

私は、寮生として四年、副舎監として三年、合せて七年を過したが、一日の生活が板の音で始まり、板の音で終る白雲寮は、大変貴重な体験であった。

寮監室の隣の茶室に、集中講義に來学された西義雄先生が投宿され、同室を許された時、先生は一冊の本を見せられ、「これは金剛經のドイツ語訳で、ドイツの医師が勉強している」と申された。これはエライ世の中になったものだと思つたが、それについての話も聞けなかつたし、質問もできなかった事は今もって残念に思っている。

春秋二回の全学大接心、寮の夜坐、比叡山、鞍馬の修練登山等想い出は尽きない。花園にない花園大学、白雲寮のない花大も淋しいが、花大が發展しているのだと思えば、いたしかたのない事である。

私の学生生活

昭和四三年卒

木

田

雄

太

禅にあこがれ? 社会福祉学科が創設されるとき、職を得るための手だてを考えての、はなはだ

世俗的な目的で花大に入学した。はじめ白雲寮に入寮したが、一年足らずで経済的に行きづまり、寮を離れて小学校の夜警等アルバイトで生計を立てた。花大入学の直接のきっかけとなった女性にも相前後して失恋し、痛手をいやすため、学友会の副執行委員長、花園祭の実行委員長、審査委員を買って出、社会福祉研究会も創設した。出家によって実家から勘当され、自腹を切ったの学生生活なので取れるだけの単位も取った。現在、大阪教育大学附属養護学校から大阪府立の養護学校へ転動し、重度・重複の知恵遅れの子どもたちに悪戦苦闘しているが、今までのところ、花大での四年間がいろいろな意味で最も苦しい生活だったといえそうだ。そのことが今の生きる力になっている。

同人誌のこと

昭和四五年卒 衣 斐 弘 行

チャームという喫茶店で、富川法道君と大滝成夫君と私の三人が初めて顔をあわせて、これから三人で出す文芸雑誌に就いて話し合ったのは十一、二年前の春頃であつたらうか、とこの稿を書くにあたって今思い出しているが、果して依頼のテーマに対してこのことを書くのが好いのかも正直迷っている。しかし、これも私の学生生活の中から生まれたのだから構わぬだろう。同人誌に『火源』と言う名をつけてともかく出発した。三人は当時の学生に比して本は相当読んでいたと思う。小説、評論を中心に、年一、二回の刊行で今も続けている。主張は各人違う。それぞれ、こつこつと書き続けている。僧侶である三人がそれぞれ抱えている思考をこれにぶつけているからだと思う。

学生生活の中で思い出として残るのが、この一昔余も前の出逢いである。

富川君は、『文学界』同人雑誌評、大滝君は朝日新聞東海雑誌評でそれぞれその名を売っている。私は昨日、県の文学賞というのをやるという通知を受けた。花大での学生生活がなかったら三人はこんなことを十年余も続けていないだろうと言うことは確かだろう。

「学生生活の思い出」

昭和四五年卒 榊 野 丈 子

(旧姓赤沢)

受講者二名。他大学でのマスプロ教育にどっぷりとつかった後、花大に入った私にとって、それはとても贅沢な授業でした。第一回目の国文科、十四名、全員出席しても数はしれたものです。代返はおろか、指名されずにすむということは皆無。それでも小さな演習室では机の奪いあい、あてられるということは判っていても努力したものです。

十八回卒業生のうち女性四名、どんなにしても皆の目からのがれることはできません。苦勞もありましたが、大切にもされました。少ない女子学生のために、学校はいろいろと心配され、骨を折って下さいました。その一つ、女子学生の集いが催され、親心よろしくあれこれ注意があり、希望を聞かれるやらして大変でした。双方が緊張し、模索し、滑稽な感じもしましたが、どちらも真剣。そして学年末には学長老師を囲んでの集まり。こちらの方はプレゼントをいただいたりして楽しくやった

ものです。いいなあと思われるかもしれませんが、なかなかどうして、服装から始まりもろもろのことにやかましく、早く一般大学生並になればよいと思っておりました。

優雅であつた日々が、気ままな日々であつたと思ひ知らされる四回生になりますと、先生方の叱咤激励の数々、そして狂つたように辞書を引き、本を読みはじめ……。

しかし今にして思いますと、何もなさず、何も気づかず、漠然と終つたなら、果して国文学科第一回卒業生としてのあの感動が得られたかどうか。四回生の時の不安と苦悩に満ち満ちた日々は良き思い出となっています。——十年前——昔を語らねばならない年になったかと改めて感じ入り、当時の先生方のご努力に感謝致しております。

第二章 文学部設置以降



第一節 三部長制の発足（鷲阪宗演）

第二節 学園「紛争」（小野信爾）

第三節 新しい花大への摸索（小野信爾）

第四節 財政の歩み（考沢勝弘）

第二章 文学部設置以降

第一節 三部長制の発足

(鴛阪宗演)

花園大学が新制大学として一九四九年四月に発足して以来、一九六八年三月までは学監制をとり、大学の運営の全責任と権限が学監におかれていた。文学部が一九六六年に設置されて二年目の一九六八年に、花園大学の機構改革がなされた。教授評議會は機構改革の事由を、次のように声明した。

本学教授評議員会では、時代の趨勢に即応して、去る昭和三十九年四月に、従来の仏教学部仏文学科の外に、仏教福祉学科を併設し、さらに昭和四十一年度、史学科と国文学科の二学科を増設するに至って、それらを統合する学部名を文学部と改めたので、これに伴う全学機構の改革を慎重に審議して来たが、別掲のごとき成案を得たので、設立者たる学校法人花園学園理事会の承認を経て、今年度より、これを実行に移すこととした。すなわち、旧制による学監職の廃止にともない、教授評議會員の互選による新任三部長を決定するとともに、各系統の部課専任者の着任を承認したのである。

新学制は、宗門大学としての理念を一そう具体化したものであり、今回の機構改革は、当初以来の建学の目的に沿い、大学の充実のために、大きく前進することを期するものである。

新しい機構による三人の部長は、学長を補佐し、相互に協力して、大学当局の一切の責任を負い、別掲のごとき所属部課の事務を分掌統轄するものである。

(花園大学通信十四号)

そこで三部長選出規程を、次に掲載しておく。

花園大学部長選出規程

第一条 学則第四十六条第二項により、文学部長、総務部長、学生部長の選出を、次の通り定める。

第二条 選出資格及び任期

一、文学部長は本学教授中より選出、任期を二年とする。

二、総務部長は妙心寺派の在籍者にして、任期を四年とする。

三、学生部長は本学教授及び助教授中より選出、任期を二年とする。

四、各部長は再任を妨げない。また在任期間中に交代した場合、その任期は前任者の残任期間とする。

第三条 選出の方法

一、文学部長、学生部長は、学長がそれぞれ三名の候補者を推薦し、教授会において選出するものとする。

第四条 選挙において過半数に達しない場合は上位二名を再選する。

また可否同数の場合は、学長が決する。

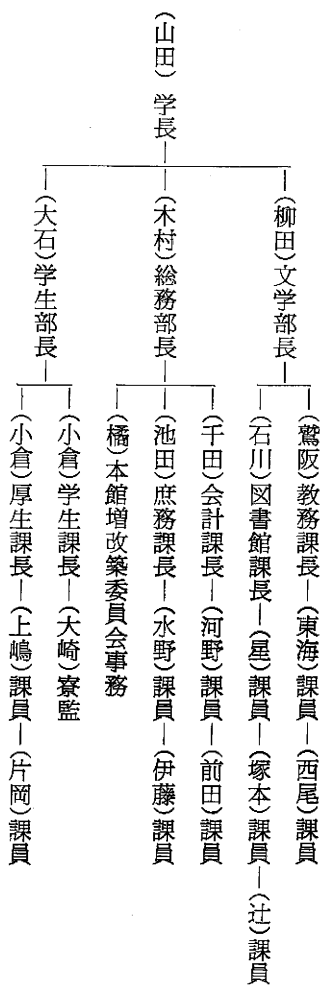
第五条 図書館長の選出は文学部長に準ずる。

付則 本規程は昭和四十三年四月一日より施行する。

申し合せ事項

各部長の交代時期は四月初めとする。

右記の花園大学部長選出規程によって、三部長が選出され、事務機構が組織された。



「この機構改革によって、約二十年の永きにわたって、学監の重任を果された荻須教授が当局を去られた。目下史学科主任教授として、専ら研究と教育に当っておられるが、ここまで学制を整え、また本館完成によって、学舎の面目を完全に一新された。学究と行政の両面にわたるご苦勞は称えてもたたえきれないものがある。」(花園大学通信十四号)

花園大学が仏教学部から文学部に改編された発足当時の事務組織についてみると、仏教学部時代の学監―主事―幹事制度が学監―課長に替ったものの、学監制度を踏襲していた。山田学長のもとに荻須学監あり、その下に大石学生課長、池田総務課長、千田会計課長、石川図書館課長があって、大学の事務運営については学監と各課長によって行われていた。

一九六五年度に「学費値上反対運動」が起り、翌年には「本館新築反対斗争」と「白雲寮民主化斗争」が起り、

学生と大学当局との対立が進行していった。一九六七年度には、「学館要求斗争」が前年の「一九六六年度学園問題協議会確認事項」により起り、学生会館建設が学生の要求どおり認められたが、大学の諸矛盾を学生から指摘され、大学当局は従来の学監制度に問題があるとして、学監制度の改革の声が高くなっていった。

従来の学監制では、今後の大学の運営はできないという意識が各課長に強く持たれるようになり、学監と各課長の間で学監制度についての協議がもたれるようになった。荻須学監が、学監制の変更について了解されるには時間がかかった。それは学監制の花園大学における歴史の長さ、もう一つは花園大学の苦難を克服してきた学監の信念にあったように思われる。しかし、当時の各課長の結束した意志は荻須学監を動かし、新事務機構を如何に組織するかについて、荻須学監と各課長の双方で協議が重ねられ、その結果において三部長制度をとることに結論づけられたのである。

一九六九年九月から長期団交がはじまり、十月には木村総務部長は現佐野師と交代する。「昨年の機構改革によって、文学部長・総務部長・学生部長の三部長が誕生し、『学長を補佐し、相互に協力して、大学当局の一切の責任を負う』ことになったが、総務部長の木村静雄師は、禅文化研究所事務局長の要職は兼務したままの就任で、大きな無理があり、早急な専任者の選定をはかっておられたが、遂に人を得て、後任佐野大義師に総務部長をゆずられた」(「花園大学通信」十五号)

一九七一年二月十五日、文学部長・学生部長・図書館長の任期を二年から一年にする、という案が当局から出される。その理由は部長職はいずれも激職であり、二年間は長すぎる、というものであった。これに対し、学生部長はともかく文学部長の二年は短かすぎる、との反対意見が強かったが、結局十六対十三で可決された。

一九七一年度、この年は、教学全般を検討するための委員会を設立せよ、との意見が出た。その理由はいくつか

あったが、一つには、一年交替となって弱体化しつつある当局を下から支え、総合的、長期的な検討をし見直しをたてるためでもあった。かくして、教学体制研究委員会が次年度に発足し、当局の諮問機関的な活動を開始する。

一九七二年五月八日、教体研は第一回レポートの十項目提起の第六項で次のような指摘をしている。「当局」の構成並びに名称の再検討（「教務部長」設置案も一部に出ていた。また「当局」という呼称について疑念が寄せられている。他大学のように「執行部」と呼んでは……との声もある……）

一九七四年十二月九日、教体研の報告で「教務部長を新設する。文学部長任期は二年とする。図書館長は文学部長が兼任しては？・部長には任期後に研修期間（サバティカル）を与えてはどうか？」という案がだされたが、これをめぐって次のような討論がなされた。

教務部長設置は事務局（教務課）のかねてからの強い要望であったが、その理由は「文学部長が毎年交替するのでは困る。経営と並行して教学を掌握する部長がほしい。クリエイティブなエネルギーと長期的な教学の展望をひきまわしていく力がほしい」というものであった。それに対して反対意見は「教務部長をおけば文学部長の存在が浮き、副学長のようにになってしまうのではないか。文学部長が積極性をもって教学にあたれば教務部長は不要だ」あるいは「結局は人の問題である」などで、結論は出ず継続審議となった。

一九七五年九月八日、部長制度について審議。教務部長の新設は小規模な本学の現状にそぐわないので見送る。教務部長の任務については文学部長が執行し、その任期は二年に延長する。図書館長も任期を二年とする。学生部長は激職であるので一年とする。また、部長任期中は出講義務の軽減措置をとる。図書館長は閑職であるとの見方があるが、委員会を通し、図書館白書を作るなど図書館行政にあたるべし。以上が決定した。

一九七六年度、移転問題をめぐる学園紛争の最中で、当局とは何か、各部長の権限は？が問題となる。紛争の中、横井学生部長は二月に西村氏と交替、また常盤文学部長も任期一年で三月に土岐氏と交替した。

一九七七年度、大巾な機構改革が行われた。骨子は次のとおりである。

- (1) 教務部長を新設し、従来の当局という呼称を改め執行部と称し、四部長がこれにあたる。
- (2) 教授会から総務部長・各課長を除外する。

(3) 評議会構成を改める。従来は当局と学科主任で構成されていたものを、執行部と委嘱された教職員で構成する。これまで、教授会で審議されていた大学運営面に関する事項は評議会で扱うこととなった。

一九七八年一月に、新制大学になって以来、約三十年間の長期にわたって、花園大学の学長職を務めてこられた山田無文学長が、妙心寺派管長に就任されることが決定した。学長後任を選出するために学長推薦委員会が発足、花園大学学長候補者推薦規程に基づいて、新学長に大森曹玄老師が決定した。

一九七八年一二月に、学長の諮問機関である評議会のほかに、大学の教学の課題を専門的に研究・立案する学長の諮問機関として、教学プロジェクトが発足した。

一九六八年四月より発足した部長制度の現在までの歴代の部長の氏名を左記に挙げておく。

一九六八年度

文学部長 柳田聖山教授（学園理事）

総務部長 木村静雄教授（学園常任理事）

学生部長 大石守雄助教授（学園理事）

一九六九年度

文学部長 柳田聖山教授(学園理事)

総務部長 木村静雄教授は同年十月に佐野大義師と交替(学園常任理事)

学生部長 大石守雄助教授(学園理事)

一九七〇年度

文学部長 藤吉慈海教授(学園理事)

総務部長 佐野大義師(学園常任理事)

学生部長 鷺山樹心助教授(学園理事)

図書館長 荻須純道教授

一九七一年度

文学部長 西原富雄教授(学園理事)

総務部長 佐野大義師(学園常任理事)

学生部長 常盤義伸助教授(学園理事)

図書館長 土岐武治教授

一九七二年度

文学部長 荻須純道教授(学園理事)

総務部長 佐野大義師(学園常任理事)

学生部長 西村恵信助教授(学園理事)

図書館長 市川白弦教授

一九七三年度

文学部長 土岐武治教授（学園理事）
総務部長 佐野大義師（学園常任理事）
学生部長 小林圓照助教授（学園理事）
図書館長 藤吉慈海教授

一九七四年度

文学部長 藤吉慈海教授（学園理事）
総務部長 佐野大義師（学園常任理事）
学生部長 小野信爾助教授（学園理事）
図書館長 福島雅蔵教授

一九七五年度

文学部長 福島雅蔵教授（学園理事）
総務部長 佐野大義師（学園常任理事）
学生部長 芦谷信和助教授（学園理事）
図書館長 桑原公徳教授

一九七六年度

文学部長 常盤義伸教授（学園理事）
総務部長 佐野大義師（学園常任理事）

学生部長 横井清助教授（学園理事）は二月に西村恵信助教授と交替する。

図書館長 鷺山樹心教授

一九七七年度

文学部長 土岐武治教授（学園理事）

総務部長 佐野大義師（学園常任理事）

教務部長 小林圓照助教授（学園理事）

学生部長 前中一晃助教授

図書館長 鷺山樹心教授

一九七八年度

文学部長 桑原公徳教授（学園理事）

総務部長 佐野大義師（学園常任理事）

教務部長 小林圓照助教授（学園理事）

学生部長 鷺阪宗演助教授

図書館長 赤阪一教授

一九七九年度

文学部長 桑原公徳教授（学園理事）

総務部長 佐野大義師（学園常任理事）

教務部長 芦谷信和教授（学園理事）

学生部長 塩見敦郎助教授

図書館長 赤阪一教授

一九六八年四月におこなわれた花園大学の機構改革によって、新発足した合議制の三部長制も、一九七六年度にはいきづまり、一九七七年度より、文学部長が兼任していた教務行政の職責と権限をはずし、新しく教務部長職を設置し、教務行政を掌握することになった。三部長制が発足して以来、各部長は学園理事を当然職として兼ねていたが、その部長のうち一九七七年度の教務部長の設置より、学生部長を学園理事からはずし、教務部長が当然職として学園理事を兼ねることになった。

第二節 学園「紛争」

(小野信爾)

大学の大衆化

新制大学発足直後の一九五〇年、全国の四年制大学は二〇一校、学部学生数二二万二千人であった。それが二〇年後の一九七〇年には学校数三八二と九〇パーセント増、学生数では一三四万余と実に五〇〇パーセント以上の伸びであった。

大学の大衆化を如実に示す数字であるが、その傾向は日本経済が高度成長に向った一九六〇年以降の一〇年間はことにいちじるしく、一三七校、七四万人の絶対数の増加であった。しかもこの急増を担ったのは圧倒的に私学で

あり、一〇年間に国公立の学生数が二〇万から三二万へ五五パーセント増えただけなのにたいし、私学は三九万が一〇二万人へと実に一六〇パーセントの増加であった。常識になっていることとはいえ、そのすさまじさに驚かされる。

こうした大学の急成長に伴って矛盾も激化した。学生数一〇万を号した日本大学を先頭にマンモス大学が続々と出現し、学士の大量生産とあいまって教育条件の悪化、教学水準の低下が現実となった。しかも「学問の府」という大学の建前と虚構の權威を振りかざす理事者や教授会と大学に幻滅した学生群とのあいだの断層には次第に大きいエネルギーが蓄積されていた。

一九六〇年ごろから大学は揺れはじめた。各地の大学で学費値上や寮問題をめぐって紛争が続発し、学生の「闘争」にも学園封鎖や建物占拠といった新たな方式が登場してきた。学生運動の主導権も既成の左翼から新左翼と総称される諸党派に移っていった。

それはスチューデント・パワーと呼ばれた世界的潮流の一翼を担うものであった。一九六七年一〇月にはベトナム戦争に反対して角材とヘルメットで武装した学生の隊伍が街頭に登場し、六八年には大学理事者の汚職を口火に日大闘争が爆発し、教授会不可謬の神話に挑戦して東大闘争が呼応した。一九六九年は東大安田講堂の攻防で幕をあけ、東大の入試中止という未曾有の事態に発展し、学園「紛争」はさらに全国に波及した。「紛争」のおこらぬ大学の学生は肩身が狭いとまで言われた。学生の氾濫は学生の叛乱を惹きおこしたのである。

文学部設置反対・白雲寮民主化・本館改築反対闘争

新制大学の設置基準は大学を非常に高くつくものにした。その困難の打開の道は規模の拡大と学生数の増大しかない。大量生産による原価切下げ——スケール・メリットの追求である。一九六〇年に一校平均二、三二〇だった

私学の学生数は一九七〇年には三、七三三と膨脹した。宗門の大学も例外ではない。これまで宗門後継者の養成を使命に細々と経営してきた宗門立大学の多くが、経済学部・法学部・短期大学などマスプロのきく学部・学科を増設して急速に一般大学化していった。

わが花園大学も遅疑逡巡しつつ、結局はそのあとを追わざるを得なかった。だが、バスに乗り遅れた花大が必死に走り出したとき、すでに他大学でのマスプロ教育の弊害は社会問題化しており、仏教学部から文学部への改組は、最初から学生たちの批判・抗議を浴びることになったのである。

花園大学は一九六四年から文学部設置と定員増加（六〇〇名）に向けて動きはじめ、一九六六年四月から今日の仏・社・史・国の四学科よりなる文学部を発足させた。これと並行して教室を改築（一九六五年落成）し、本館を改築（一九六七年竣工）して、こじんまりとしたものではあったが学園の体裁もとのえた。

だが学生の一部は大学の転進が「完全に経済的・経営的見地からのみ」おこなわれ、「大学の理念・花大の存在意義などの検討を抜きにしたものだ」、と批判し、一九六五年には文学部設置反対の運動をおこした。一九六六年度には学費値上げ反対の座りこみ、本館改築反対運動——学生は以前の老朽木造本館と対比してこれをホテル本館と呼び、大学の内容の充実を優先さすべきだとした——、そして白雲寮「民主化闘争」がつぎつぎとおこった。

白雲寮問題は規則によって退寮すべき寮生が継続在寮を要求して居すわったことで表面化した。白雲寮は一回生を陶冶の対象として准僧堂的規矩のもとに運営される学寮であり、在寮年限は一年であった。これにたいして学生側は花大が一般単科大学であるからには——と文学部改組を逆手にとって——、学生のための厚生福利施設としての一般寮があるべきだ、当面、白雲寮を二回生以上も在寮できる一般寮に改組せよと主張したのである。

これらの運動は、たとえば白雲寮問題を大学側が強制退寮で押し切ったように、学生側は具体的成果なしに収束

せねばならなかったが、かれらの問題意識は回を重ねるごとに鮮明になり、運動の輪も拡がって一九六七年度には、はじめて学生自治組織Ⅱ学友会の大勢を制するにいたった。

一九六七年二月五日、学生は花大史上はじめてストライキをもって彼らの要求を大学当局につきつけた（学生ストの前例としては一九五七年の破防法反対ストがあったが、これは対外的な意志表示で大学当局に向けられたものではなかった）。これより先、本館改築に反対し厚生施設の優先的充実を求める学生にたいし、大学当局は学生会館の改築とその一九六七年度内着工を約束（一九六六年度学園問題確認事項）していたが、規模・位置等をめぐって折合いがつかなかった。学生たちは各サークルを結集して全学共闘会議をつくり、大学当局との団交決裂からただちにバリケード・ストに突入したのである。

当時としてはきわめて衝撃的な闘争戦術を採用したことについて、「前月の羽田闘争に参加した花大の部隊が、その経験の花大にもちこんだもの」と後に学友会中執発行の文書『花園』臨時増刊）が認めているように、この前後から花大の学生運動は、それ自身の経験の蓄積と全国的な学生運動の潮流とが絡みあいつつ展開することになった。バリケード・ストは九日まで続き、大学当局が学生会館の建設と事前協議の開始を約束して解除された。その後にかれた教授評議会は学生大会の議すら経ずに突入したストの理不尽さを鳴らし、学友会執行部の責任を問うて、二月一五日、無期停学三名をふくむ二六名の処分を決定した。学生会館はその後、大学・学生双方の代表で建設協議会を設け、六九年春、当初学生が要求していた規模に近い形で完成し、学生の自治活動・課外活動の拠点として自主運営にゆだねられた。

三部長制と教授会の発足

このバリスト事件のさい、大学当局は専任・非専任を問わず全教員に非常招集をかけて対策を諮るという異例の

措置をとった。当時は専任教員といっても勤務実態は非常勤講師と大差なかったことを反面から証明するものでもあり、旧来の体制では新たな状況に対応できなくなったことの象徴でもあった。それまで大学の管理運営に当たっていたのは教学・経営の責を一身に負う学監とこれを補佐する事務職兼任の教員であり、学生のはほとんどが寺院の子弟であった仏教学部時代からそのまま持ち越された体制であった。文学部への移行のなかで一般の学生が急速に増加し、ミニ大学なりに「大衆化」状況が現出していたのに、教学面でも管理面でもこれに対応できていないことが、花園大学発足以来、はじめて大学に鋒先を向けたストライキの発生で明らかになったのである。

翌一九六八年度から旧来の学監制を廃し、集団指導制ともいうべき三部長制が発足し、一九六九年度にはじめて専任講師以上で構成される教授会が大学の最高決議機関として設置された。低い給与のために教員全員が大学の教学に専念できないという事情のもとでは、多分に形式的ではあったが、花大も大学としての機構を整備しはじめたのである。

七十日間の長期団交へ

この年、一九六九年の春、学園「闘争」の重心は関西に移り、京都大学をはじめ各大学で「紛争」は長期化した。政府は東京大学の昭和四四年度入試を中止した後、学生の「反乱」にたいし「学内秩序」を回復するため政府が直接干与できるよう、大学臨時措置法を国会に上呈した。学生はこれを大学治安立法として抗議し、教師も伝統的な大学の自治を侵害し、「紛争」の自主解決を阻むものとして反対した。

六月九日、花園大学では学生大会が開かれ、大学立法にたいする抗議スト（三日間）を決議し、かつ花大の改革と大学立法に対する態度表明を求めて大衆団交を要求した。教授会員の多くも大学臨時措置法に反対の意志を表示し、六月一五日には教職員有志と学生とが共同で二条城まで抗議のデモをおこなった。

「大衆団交」とはもともと労働運動の用語である。経営者にたいする組合の団体交渉を少数の役員だけで請負わず、一般組合員をも多数参加・発言させるといふ、示威と組合意識の向上とをかね図る戦術であつた。これが学生運動にとり入れられると、代行主義Ⅱボス交渉を排し、直接民主主義を発揚するものとして、「全共斗」運動の切札視されるようになったのである。六月の団交を小手調べに、九月、花園大学は歴史的な七十日団交に突入した。

団交要求書

昨今の激動する世界^{ミヤ}状況の中で我が日本帝国は軍備強化をはかりつつ、国内イデオロギー攻勢として明治百年祭、建国記念日、中教審答申、破防法などと一連の反動政策をなし、そしてついには憶面^{ミヤ}もなく大学臨時措置法を強行した。そのような状況^{ミヤ}の中で、我が花園大学は何ら意志行動もせず今日にいたっている。又、今年十二月に佐藤訪米Ⅱ安保をはじめとし、世界的流動体の中で階級決戦がわれわれの存在そのものにつきつけられている。我々はその状況を認識しつつ昭和四四年九月一九日午前九時三〇分より、当局、教授会との団交を要求するものである。

(学友会) 中央執行委員会

当局、教授会殿

団交議題一〇項目

- 一、大学臨時措置法案を如何に粉碎していくか。
- 二、安全保障条約を如何に粉碎していくか。
- 三、処分権に関して

四、学生心得撤廃に関して

五、経理公開に関して

六、出席制度に関して

七、講座——単位制度改編に関して

八、白雲寮自治化に関して

九、大学における妙心寺教団に関して

十、その他

九月一六日、学内で開催中の学園問題研究会（理事・教職員合同）への学生の乱入、一七日の仏教学科共斗の会議室占拠など騒然たる雰囲気の中、一九日、当局・教授会側二二名、学生一三〇名が出席して団交が開始されたのである。柳田文学部長を先頭に当局・教授会は徹底的に論議に応ずる覚悟を決めていた。他大学では、逃げ廻る当局者を学生がつかまえ、徹夜で大衆団交をおこない、双方とも疲労困憊、警察力を借りて当局者を救出するにいたるのが常だ、という時節に、花園大学では学生・教員双方二名づつの団交運営委員を選び、午前一〇時に開会し、おそくとも午後八時には打切つて翌日に廻す、というルールのもとに奇妙な団交がすべり出した。

学生たちが大上段にふりかざしたのは学問の建前論であった。例えば当時の花大には、欠課時数三分の一以上におよぶ者は当該課目の受験資格を喪失することが学則に規定されていた。それは裏を返せば三分の二以上出席しておれば、精励に免じて成績の方には眼をつぶろうということでもあったのだが、まっさきにこの出席制度が槍玉にあげられた。

それは「無内容な講義にしばりつけておくための、また学生の自主性を喪失させている小学校なみ」の制度ではないか、この制度によって教員は学問の内幕を問われることなく学生を集め、学生は主体的、自主的意欲なしに単位だけを求めることになり、教員も学生もともにスポイルされている、というのである。

学生と教員とは学問上では相互批判・相互の緊張関係を保ちつつ、人間的には信頼しあい、ともに学問の深化をめざすべきである、「我々はともに研究者である」から、相互の関係は本質的に対等である。しかるに「学生を児童扱いし、言論・表現の自由を犯す学生心得」を強制し、学生管理者として一方的な処分権をもって恫喝し、試験・単位認定によって一面的な評価をおこなう。学問の自由・大学・学生の自治をいっただう考えているのか（以上学友会機関誌『花園』一九七〇年四月発行の関連部分より要約）。

団交のなかで当局・教授会は一〇月三日までに、曲折はあったが(一)管理者としての処分権の不行使、(二)出席制度の廃止、(三)学生心得の撤廃、(四)経理の公開、(五)白雲寮自治化、(六)図書館運営への学生参加、(七)教授会の公開、(八)文部部長・学生部長・図書館長(学長・総務部長を除く)の選出規程の改正、などをつぎつぎと確約した。だが、討議が単位認定権問題にいたったとき、団交ははたと行き詰った。

学生側は現行の単位制度を「真の学問追求」と相反するものとして廃止することを要求し、教授会はこれを拒否して論議は堂々めぐりした。近代の学校制度と単位制度とは不可分の関係にあり、単位の認定は機関としての大学の存続するかぎり、教授会の負い続けねばならぬ自己矛盾であり、ひいては学生の負う自己矛盾でもある、単位制度を解消すれば大学は解消し、同時に学生も解消することになるがそれでもよいのか、とする教授会側の聞き直りにたいして学生側は説得的な論理をもたなかった。

その前後、全国の学園「闘争」―全共斗運動の指導的理念は「大学解体」であり、「自己否定」であった。資本

主義体制に奉仕する「帝國主義大學」を解体し、体制内の自己（たとえば特権階層たる学生）を否定することから社会革命の展望を切り開こうというのであり、大学の改革などは無意味な改良主義にすぎなかった。だが、花大では終始「花大解体」は叫ばれず、学友会中執の最高綱領も「全花大人（学生・教職員）の直接民主主義の全学協議会（評議会）の樹立」という、花大民主化の徹底をめざすものであった。あえて単位認定権の一線を突破しようとしなかったし、またできるものでもなかったのである。

本館の封鎖・占拠

こうした学友会中執の路線を批判して花大全共斗が公然化した。九月三〇日、彼等は団交にたいする警告と称し教室棟を封鎖し、一〇月二八日、さらに本館を封鎖・占拠した。一五日いらい、大学の日常的事務機能の停止をめぐって団交は中断されたままであったが、全共斗の実力による事務室占拠により、大学当局・事務局は旧花園会館に執務の場所を移すという非常事態となった。

本館封鎖後、中執は事務機能停止の条件が充たされたとして団交再開を求めたが、教授会は全共斗の不法に抗議し、バリケードの中での団交再開を拒否した。それまで双方の合意による休講下で団交がおこなわれていたのが、ここにいたって一挙に世間並みの紛争状態となったのである。

だが、一月五日、花大全共斗の学生四名が赤軍派の大菩薩峠での軍事訓練に参加して逮捕された。「花大闘争」を「安保決戦Ⅱ一月佐藤訪米阻止闘争」と結合させようとした実践の蹉跌である。続いて一月十一日、立命館大学全共斗との関連で京都府警が学内を強制捜査し、事態は流動化した。そのままでは四回生の年度内卒業が危うくなるという危機感もあって、警察力を借りての封鎖解除もやむなし、との意見が教授会でも強まってきたとき、中執系学生による全共斗説得が効を奏してバリケードは学生自身の手によって解除された。

一月一日、団交は再開された。だが、当初、一三〇〜一二〇名を結集していた学生側は、このころには二〇〜三〇人に減少し、大衆団交といったつ、教授会側の出席と大差ないまでになった。山田学長が二月一日までに講義が再開されぬときは引責辞職との態度を表明したこともあって一般学生の講義再開の声も強まり、中執側も退き際に苦慮した。一月二九日朝、前日結論を得ぬまま持ち越された単位制度についての討議を再開すべき団交の席に団交議長団が姿を現わさなかった。教授会は全共斗の団交要求を拒み、一月一日からの講義再開を宣言した。前後七〇日におよぶ団交期間中、花大当局と教授会は妙心寺関係者・大学同窓・学生父兄の囂々たる非難を浴びた。学生のいいなりになり、ことなかれで終始する腰抜け呼ばわりから、過激派と通謀して宗門に弓を引く裏切り者扱いまで散々だったが、宗務本所の隣りの大学本館に「腐敗教団妙心寺本山解体」とデカデカ貼り立て、時にはデモ隊が本所の三階にまで駆け上る、一月二日に禅文化研究所で開かれた同窓会総会は全共斗の乱入で「粉碎」される、といった具合なので無理はなかった。

「団交精神」

これにたいし、真向うから立ちむかい、堂々の論陣を張ったのは当時の文学部長柳田聖山教授であった（『破るもの』春秋社一九七〇年刊 参照）。

「われわれが、学生諸君と共に考えようとするのは、諸君の提起している問題が、論理的に正当だからである。つまり、すじが通っているからである。われわれはまず当の問題のもつ論理の正しさに従うべきであり、体面や常識によって、それを曲げてはならない。恥すべきは、外面的な暴力に屈することではなくて、論理の正しさに気づかぬ自己の姿勢のことである」（「宗門大学の新しい使命」）。

「大学の学問は、学生と教師の共同、否、必死の対決からこそ生まれる。それはまさしく団交とよんでよいもの

だ。もともと、団交は労使のあいだにおける実力と権力の対決を指すのだが、大学における団交はむしろ学問そのものから生まれる必然の対決である。……学生と教師は、本来は共に学問を志す仲間であり友人である。学問の権威の前につねに両者は平等である。ところが、学問の権威が見失われたとき、教師は学生にとって権力者となる。……教師が権威を失って権力にたよるとき、もはや大学に学問は存在しない」「大学の荒廃と回復」。

「学生出席簿の廃止、処分権と学生心得の撤廃、寮規則の全面的検討、図書館運営の全学的な構成への飛躍、学長・部長等の管理者選出法の全面更新、教授会の原則的公開など、すべて学生を単なる被教育者として位置づけ、教師をその管理者に仕立てようとする非学問的、非教育的体制の矛盾を、その根底から克服しようとする努力にほかならない。それは、じつに容易ならぬ今後の長い闘いの継続を覚悟してのことであり、学生と教職員とが互いに力を合せて、必死に守りつづけねばならぬ無償の苦行の決意を意味する」「大学の自治と学問の自由」。

「大いなる誇りをもつていい得ることは、われわれ花園大学は、ガラス一枚、机一脚破壊することなしに、権力によって射かけられた毒矢を自ら抜き、学内の古い秩序を自ら否定したことである」（同前）と柳田文学部長は言いきった。「紛争」を経た他大学が物理的にも人間的にも荒廃しきっているとき、講義再開後の花大では教員と学生とが論議を闘わせながら、新しい学園の倫理と秩序を創出していくはずであった。それを教授会は団交体制と呼んだ。

風化する「団交精神」

だが、団交前後、「腐敗教団解体」、「宗派教学追放」に並べて「真の禅を我らの手で」、「真の学内建設を我らの手で」とスローガンをかかっていた学友会は、団交を通じて旧秩序が破壊された後、学問や禅を口にすることは絶

えてなく新たな建設に向つての「無償の苦行」には興味を示さなくなった。団交で獲得した図書館運営、部長選出、カリキュラム編成への学生参加も放棄され、約束した白雲寮則の全学的立場からの制定さえ、手をつけようとはしなかった。理想主義的な団交精神は早くも風化しつつあった。

それでも具体的な学内問題の処理をめぐる二回の団交が開かれ、団交定則数も申し合された。すなわち学生会で決議された団交要求に教授会は無条件で応ずるが、団交自体は在学生の六分の一（学生大会定足数の半分）が出席せねば開始せず、学生数が十分の一を割れば自主的に流会する、つまり団交要求は濫発されてはならず、全学生の主体的要求を体现したものでなければならぬ、とする歯止めがかけられたのである。長期団交が学生の支持を失い、最後は中執の面子だけでダラダラと続けられた苦い教訓を踏まえたものであった。

だが、学生数の年々の増加にともない、学生の結集は難しくなり、制度としての団交はいよいよ棚ざらしになった。急進的な学生たちは形式的にせよ、一般学生の同意をとりつける（例えば学生大会）という手続きを抜きに独自の行動を組むようになった。一九七一年、学生間の左右の対立が激化し（岡潔氏講演会妨害、応援団腐部など）、九月、応援団が中執系学生に暴力をふるうという事件が発生した。教授会は二日間にわたって全学集会を主宰し、学内からの「暴力排除の確認」を満場一致でとりつけたが、倫理的な拘束は物理的な力には転化しえなかった。一九七二年には、いわゆる「内ゲバ」（民青同盟員にたいする暴力事件）を議題とした全学集会が赤ヘルメットの集団の妨害で流会に終つたのである。

一九七一年、中執系学生の応援団員告訴によって警察の強制捜査があった。一九七五年には民青同盟員の告訴で警官が学内に立入り、反日共系の三人の学生が逮捕された。大学の自治、学生の自治の形骸化が進み、団交体制はそれを支える教授会・学生双方の内的緊張の弛緩とともに、不可避免的に腐蝕していったのである。

学園「闘争」

昭和四十七年卒 佐藤 実

全国各地を襲った学園闘争の火は我が花園大学にも燃え広がった。それは戦後の大学が抱えてきた矛盾の爆発であり、必然的帰着でもあった。しかし、他の大学が政治闘争を第一に掲げているのに対し、花大では学内民主化が中心スローガンであった。つまり、他大学が敗戦直後に闘った問題を花大は二十年遅れて腰を上げたわけである。

昭和四十四年九月、学生と大学当局、教授会との学内改革についての大衆団交が開かれた。学生を縛っていた「諸規程の撤廃」から「学問とは何か」「宗教（禪者）の真の立場はどうあるべきか」といった人間としての、宗門人としての根本にかかわる問題までが提起され、日夜真剣に討議が続いた。この二カ月半に及ぶ（途中一時中断はあったが）団交を支えたものは、お互い花大大人としての見えざる「信頼」であった。まさに家庭的花園大学であったからこそできた長所でもあった。この団交を通して学生と教授・当局は非常に近親感を持った面も見逃がせない。今まで教室で講義を通してしか接触のなかった教授と学生達は、その日以来、日常言葉をかけ合い闘争の問題を講義終了後、教授の研究室で話し合い、夜は盃をくみかわすといった人間的触れ合いが生まれた。学園闘争は何を残したか。それはあの闘争にかかわった全ての花大大人に聞くしかあるまい。私は思う、あの頃は学生も教授も大学自体も躍動していた。生きていたといって過言ではない。

第三節 新しい花大への摸索

(小野信爾)

団交継続中の一九六九年一〇月、教授会は改革小委員会を設置し、改革への摸索を開始した。緊急を要する課題は出席制度の廃止、学生心得の撤廃、処分権の凍結にともなう学則・修学規程の改訂であり、ついで次年度に向けるのカリキュラムの検討であった。

まっさきに問題になったのは、永年、基礎教育課目として全学生の必修であった実践禅学（提唱および接心）の扱いである。禅の実践は単位化できるものなのか、強制されて坐ることなどという意味があるのか、論議の末に、実践禅学A（提唱）は単位から外し、ただしその時間（月曜一講時）には他の授業をおこなわず、事務室、図書館・研究室も原則として執務せず、教職員・学生が自主的・主体的に参加できる条件を整えた。春秋二回の実践禅学C（接心）は仏教学科専門課程の実習として仏教学科三・四回生のみ必修、他は自由選択にした。しかし従前通り全学的行事としてその期間は休講し、有志学生の自発的参加を期待したのである。この改革はもちろん団交精神の具体化であったが、年々増加する学生を一堂に集めて提唱・接心をおこなうことははや不可能であり、早晚必須の措置でもあった。

だが、学生の自発性への期待は外れた。山田無文学長は「花園大学通信」一六号（一九七〇年一〇月）でこう述べておられる。

「自覚ある現代の学生諸君は、学制改革を叫び、出席点検を否定しました。学生の人格を尊重して、教授方はそ

の要求を受諾されました。それは当然のことだと思います。

しかし週一回のわたくしの提唱日に聴講生が二三十人しか集らないという事実は、何を物語るものでしょうか。わたしは偏見に自分の不徳を恥づるばかりであります。」

一九六六年（昭和四八）度から提唱は仏教学講義として教養課程人文科学系列に組入れられ、自由選択ではあったがふたたび単位化された。

カリキュラムに関しては、教養課程と専門課程の年次別区別を廃し、演習・講読・実習以外の専門学科を第一年次より履修することを認め、いわゆるクサビ型の編成に転換した。学校側の便宜を中心とした硬直した体制から、学生の選択の巾を拡げ、自由化したのである。それまで花大には選択必修課目という奇妙な用語——選択課目でありながら必修と指定した事実上の必修課目をさす——すらあったが、これ以後は当然に廢語となった。

学生の自習・予習、さらには卒業論文をもふくむ自主的な研究を指導する場として、従来の演習室を転用し、各科ごとに共同研究室を設置したのもこのときからである。最初は机と椅子だけの空間だったのが、追い追いに辞典、索引など工具書もとのえ、各科ごとに教員が交替で詰めて指導に当るようになった。前述の選択巾の拡大による開講課目の増加とあいまって、団交以前のような気楽さでは花大の教員は勤まらなくなったが、教員の勤務様様のバラつきが、ここで大きな壁として立ち塞がった。

前にも述べたように貧しい花園大学では、宗盟心に支えられた事務職兼担者を除き、花大に全力投球できる教員はごく限られた存在であった。教授会が設けられて後も、たいていは委任状でことをすませ、長期団交にも顔を出さず、授業再開後は講義に登校するだけで団交も改革も他人事にひとしい、という教員が少なくなかった。それは、しかも、決して個人の責任ではなく、まさに花大の責任だったのである。

一九七一年、週一日しか登校できぬ学科主任の存在をめぐって、専任とはなにか、主任の役割・意義はなにか、と教授会で鋭い問題提起があった。当時、純専任ⅡA、准専任ⅡB、非常勤的専任ⅡCというランク付けがあったが、A・B・Cが区別なく教授会を構成している体制では改革もかけ声に終りがちだった。

しかし、財政強化の努力と一体に、教員スタッフの増強が図られ、A級専任の比率が高まるなかで、定年制の実施（七〇年）、専任教員服務申し合せの採択と嘱託教員制の導入（七三年）、事務職兼任の逐次的解決などにより、七五年度から教授会は純専任教員（部課長をふくむ）のみで構成されることになった。当り前のことが五年もかけねば実現できなかったところに花大の業の深さがあった。

教学体制研究委員会の発足

こういった事情もあって、改革小委員会は学則・修学規程・カリキュラムの応急的な改編をおこなっただけで、その後は具体的な成果をあげることができず、一九七〇年度をもって廃止された。しかし、財政・教学を総合した立場から教学体制を検討する機関がどうしても必要だということから、一九七一年度末、三部長と各学科・課程の代表で構成され、事務長を幹事とする教学体制研究委員会が発足した。それは（一）運営討論においては、学科と学科、専攻と専攻の間の「壁」を思いきって突き破り、齒に衣を着せぬ厳正な相互批判の精神を基調とする、（二）教学問題に関わる各科教員、学生の意見・批判・希望などを積極的につかみ、委員会に反映する、という基本姿勢を打ち出し、活潑に活動しはじめた。

※一九七二年五月に同委員会が提起した年度の討議目標を項目のみ、参考のために掲げる。

（一）学則・規程の十分なる把握と検討。（二）教授会の位置づけの明確化。（三）各学科の相互批判と連携。（四）「事務職」と「教授会」との関係の是正。（五）「教学」に関する学生と教員の意見交換。（六）「当局」の構成並びに名称の再検討。（七）「教学」の

見地からする「現行カリキュラム」の再検討と改革。(Ⅱ)専任助手制度の再検討。(Ⅲ)入試選抜制の再検討。(Ⅳ)卒業後の「進路指導」(就職先の開拓)の組織体系化。

教体研は一九七二年度には、各種委員会のA級専任教員のみによる構成など、いくつかの具体的な問題进行处理したあと、一九七三年度には現状の剔抉と将来計画の策定に向けて奮闘した。この間、教体研の呼びかけた教職員研究会が流会に終ったり、事務局に出したアンケートが無回答のままであったり、独り相撲の観さえあったが、各学科の尻を叩いて現状と問題についてのアンケートを提出させ、六月、レポート「各学科の現状と展望」をまとめた。教体研がとくに「各学科の相互批判と連携」を強調せねばならなかったのは、学科モンロー主義ともいふべき状況があったからである。団交後、学生が「学問はなれ」するなかで総体として教員はふたたび現状維持の温ま湯にひたってしまった。学園「紛争」のなかで改革と取り組みはじめた大学の多くが竜頭蛇尾に終わったように、それは全国的な状況でもあったが、花大のばあいは学科が壁を立てて学科自治を云々し、全学的レベルでの教学改革を干渉と同義視する傾向がなかったとはいえない。

『施設実習の心得』問題と社会福祉学科の再建

この「壁」を突破し、学科モンロー主義を一時的にせよ撞き動かす事件が一九七三年におこった。社会福祉学科が発行した「施設実習の心得」が差別文書だとして学生の糾弾を受けたのである。花大の学生が実習先の福祉施設に「心得」を携行したところ、それを読んだ指導員から施設の利用者——「心得」には収容者とあった——にたいする予断と偏見を助長するような表現がある、と指摘されたのが発端であった。

学生たちは社会福祉学科の責任を追求するだけでなく、大学・教授会の責任をも追求し、十一月には二回にわたって全学集会がもたれた。問題はさらに翌年にもちこされ、過敏になった学生たちが一講師の講義中の発言の言葉

尻をとらえて差別だとあげつらうといった暴走をも織り混ぜながら、九月、「施設実習の心得」をめぐる对教授会
団交を経て下火になるまで、一年間紛糾が続いた。この間、当然のことながら教授会は社会福祉学科の内部問題に
まで立ち入って論議し、主任教授が退任されたこともあって、学科の再建も共通の関心事であった。

この年、教体研はレポート「昭和五〇年度以後のカリキュラム編成について」を提出し、教員組織とカリキュ
ラム編成の新方針を打ち出した。それは単位制を空洞化し、選択の自由化をめざした七〇年度らしいの基調を改め、
学科ごとの教学の柱に沿って必修課目を増補し、基礎教育（教養課程）にも専門への方向性をもったゼミ・講読・
講義を各学科の主導で設置するというものであった。要するに学生にきちんと専門教育を施そうというもので、
教養課程もこれに応じ週一講時だった独・仏・中国語を週二講時の第一外国語に昇格させ、逆に英語を週一講時の
第二外国語に引き下げて、これに応じた。初めて習得する外国語が週一講時では、二カ国語必修もお飾りに過ぎな
かったからである。

このカリキュラム改編が一九七四年度から本格化した入試改革に対応して打ち出されたものであることは疑いな
いが、それを実現させた力の一つが学生の動きであったこともまた否めない。講義の質・教育の姿勢について具体
的に告発できるのは、被害者である学生だけであって、互いに侵さず侵されず、般にとじこめるのを明哲保身の術
とする教員に期待できることではない。にもかかわらず教員の有志を駆りたてて、「労怨を避けず」現状の改革に
取り組ませるのは、唯一、学生との緊張関係の存在である。ただそれは人為的に作り出せるものでなく、緊張関係
の持続的展開はカリキュラム編成への学生参加は、この年の教体研の標榜した課題の一つであったが、ふたたび期
待はずれに終わったのである。

この間、学生数は確実に増えつづけ、一九七六年には一二〇〇と団交当時の二倍となった。狭いキャンパスは人

であふれ、超過密のミニ大学が現出した。理事会は一九七六年度から学生の定員を一学年一五〇人から二八〇人へ増加させることで現状を追認しつつ、移転先を物色しはじめた。一九七五年度の終り近く、現在地への大学の総合移転がにわかに決定し、学内は慌ただしい気分に包まれた。教体研は移転プロジェクトチームに組みこまれ、教学問題よりも建物の青写真相手の論議に明け暮れた。

そのなかで「学科別学生数傾斜配分案」を教体研は最後の仕事として提起した。

これより先、定員増にともなう措置として、理事者は一九七六年以降の五ヶ年間に専任教員五名を増員することを約束した。この五名を各学科・課程が分けどりするのでなく、特定の学科に集中的に投入し、当該学科を飛躍的に強化するなかで、学生数もそれに見合った配当をしたらどうか、具体的に受験生も多く社会的ニーズも強い（と思われた）社会福祉学科をその対象としたらどうか、と教体研は教授会に提案したのである。

この提案は当の社会福祉学科をはじめ各学科の反撥を受けた。教授会ではとくに新任の教員からかかる越権的な提案をする教体研の性格について疑問が出され、あわてて「教学体制研究委員会の沿革と任務」（一九七六年六月）たるレポートを提出して蒙を啓かねばならなかったが、「傾斜配分案」そのものは真剣な討議の対象となることなく、うやむやのうちに葬り去られた。

社会福祉学科を候補としたことが妥当だったかどうかは別として、五人というまとまった数の教員が年次計画で採用できるということは、実質的に学科の増設に近い思いきった改革を可能にする得がたい機会であった。従来も、そしてこれからも理事者サイドからしか出せない学科構成の改変を、教授会自身のイニシアチヴでおこなえる唯一のチャンスだったといつてよい。だが教授会は冒険の意欲はなく、教体研自身も「歯に衣着せぬ相互批判」を展開しつつ、討議をリードしていく情熱を欠いていたのである。

やがて移転をめぐる紛争のなかに改革論議は埋没し、一九七六年度をもって教体研はその歴史を閉じ、再編された評議会にその任務を託することになる。「新しい花大」の摸索は、改革小委から教体研を経て、ようやく機構上、大学らしい体裁——たとえば教員人事委員会規程が成文化されたのは一九七六年度においてであった——をととのえ、総合移転によって外観的にも新キャンパスで威容を正した花園大学において、継続されるのである。

第四節 財政の歩み

(芳沢勝弘)

仏教学部時代の財政

新制大学発足の一九四九年から仏教福祉学科が増設される一九六四年までの十五年間の花大財政の基本は、戦前の臨専時代と殆ど変るところはなかった。大学財政収入の大部分は妙心寺派の補助金によってまかなわれていた。学生数も一〇〇名余から二〇〇名余へと漸増してきたが、その殆どは妙心寺派を中心とする寺院子弟であり、その内の妙心寺派子弟については学費の一部が免除された。(この学費減免制度は一九七〇年度まで続く)この当時は名実共に、妙心寺派の財源を中心に運営される妙心寺の「私塾」であった。

しかしながら、このような財政で戦後の新制大学としての高い質の教学を展開することは極めて困難であった。現実には、花大教学は主として僧職を兼ねる数名の専任教職員と、他大学の専任でありながら、あるいは、他に本務をもちながらも、花大に特別の愛着をもつ「非常勤的専任教員」との経済的犠牲の上に成り立っていた。さらに、

その上に大学の設備は老朽の極に達していた。大部分は木造であったが、ただ一つ図書館書庫（一九二七年に建築）だけが鉄筋コンクリート造であった。学生は記念写真を撮影する時は決まってこの書庫を背景にして撮ったものだった。「開山大師は雨の漏る堂で子弟を教育された」という言葉に代表される花大の精神主義が、この苦難の時代を乗り切る一要因となっていたのである。

しかし、高度成長による社会構造の変化という時代の波は、当然のことながらこの「小私塾」にも押し寄せ、変質を余儀なくせられることになる。

校舎改築と募財活動（白雲寮・図書館・教室棟の新築）

一九五八年には妙心寺開山無相大師大遠諱を記念して新学寮の建設が行われた。白雲寮の新築である。この財源一七〇〇万円は妙心寺宗務本所、遠諱局、大学の三者が協力して募財にあたった。

一九五九年になると改築後援会が発足し校舎全面改築計画がたてられた。これは、一九六〇年から五ヶ年計画で五〇〇〇万円を勧募し、図書館棟・教室棟の全面改築を行なう、というものであった。その具体的内容は次のようなものであった。「改築計画の内容は、第一期計画として図書館と研究室を鉄筋コンクリート三階建三千万円で三年間に、第二期計画として校舎新築鉄筋コンクリート二階建を二千万円で二年間に募金することを目標とするものである。容易ならぬ大事業であるが、全臨済宗を背景に、禅学と禅文化の一大センターとして、花園大学が生れるのである。」（花園大学通信第六号 一九六〇年二月）

募財は、大学教職員・同窓会員・篤志者を中心に進められた。教職員は桁はずれに低い給与をそのために積み立てた。しかし、何といってもその中心は寺院関係を中心とする同窓会員であった。「前号で母校全面改築を呼びかけてから一年、この声は全国の心ある同窓諸師の間に大きな反響を呼び起し、各地の実行委員有志を中心に多くの

波紋が動き始め、波紋は次第に大きく広がっていく。昨年八月、全国同窓会員に本部から寄付帳をお送りして、一千万円勸募を懇請したのに対し、即時お手元の浄財を送られた方もあり、……毎日のように寄付帳や振替やいろいろの連絡が到着しつづあり、一つ一つ尊い母校愛の結晶として感動の渦をまき起している。」（花園大学通信第七号一九六一年五月）

戦前・戦後を通じ、あの老朽化したみすばらしい校舎で学生生活を送った同窓生の大学に対する愛情は他の大学では見られないほどのものであった。しかし、高度成長期とはいえ、規模の小さい大学でこれだけの募財をすることは並たいていのことではなかった。時の学監・荻須純道教授は次のように述べている。「しかし、数少ない同窓から多額の募財をすることは容易でなかった。紙屋川の法輪寺からダルマをゆずり受け、事務室の机の上におかれていた。誰か知らぬ間に薄目をあけた。……しかし、一年たっても二年たっても目標額にははるかに遠かった。三年目に実行委員総会を開き、着工に踏み切ることになったが、工費ができたわけではなかった。ダルマの薄目はなかなか開かない。」（花園大学通信第十号 一九六四年一月）

こうした状況の中で第二期計画の校舎改築のための募金は、大学当局の熱心な陳情の結果、妙心寺派の全面的な後援で進められることになった。「改築後援会では、かねて第二期目標として教室校舎の全面改築を宗務当局に懇願していたのでありますが、今回妙心寺派檀信徒の全国組織であります花園会が、結成十周年記念事業として之を取上げ、予算三千万円で、本年から三ヶ年計画により完成する事と決定し、来る定期宗会の承認を求めるものとなりました。誠に感謝にたえません。同窓発願の全面改築への熱意と努力が、一派を動かしたものと云えましょう。妙心派下の同窓諸師には重ねての御尽力を煩わすこととなりますが、どうかこの運動でも一派の推進力として一日も早く実現しますよう、偏に懇請申し上げます。」（花園大学通信第九号 一九六二年十二月）

こうして、白雲寮・図書館・教室棟の改築は、妙心寺派・同窓生・教職員・各専門道場・臨済各派有力寺院等有縁各方面の協力を得て成し遂げられてきたのである。

文学部開設と本館改築・学生会館新築

一九六四年には仏教福祉学科を増設、そして一九六六年には仏教学部を文学部に改組し、仏教学科・社会福祉学科・史学科・国文学科の四学科を開設することになった。そのために、木造の旧本館を全面改築することになり、これでは一九五八年より続けられてきた改築計画は全面的なものとなった。「(本館の改築事業は)図書館・教室とたび重なる整備に皆様のご支援を得た後であり、かなり無理な事業で、花大としては一大事業であるが、あえて皆様のご支援を得て断行しなければ、学園の近代化は後退し、時機を失することになるし、また大学進学者の急増は施設の拡充を計らなければならないという、やむにやまれぬ事由により、……」(花園大学通信第十三号 一九六七年十月)と大学は実に苦しい状態にあった。しかし、妙心寺は臨時宗議会を開き、五ヶ年間に二千万円を助成することを決議した。他方、私学振興会から一九五〇万円の借入金を得、同窓を中心とする寄付金を加え、この事業を推進することになった。

更に、一九六八年には、私学振興会からの借入金七二〇万円、花園高校からの借入金七〇〇万円、住友銀行から借入金一千万円を中心とし、総工費二六七〇万円で新たに学生会館が建築された。

かくして、約十年間に亘る募財活動によって一連の改築事業は完結し、花園大学の学舎は一新したのである。本山、同窓、教職員を中心とする長期に亘るご協力のお蔭であった。中でも、龍安寺の松倉紹英師、金閣寺の村上慈海師は多額のご協力を申し出られると共に、別途、財団法人禅文化研究所の基本金も拠出して頂いた。また、山田無文学長は基金勸募のために多枚数の墨蹟を書かれる一方、自ら巨額の基金を大学新生のために出された。

新制文学部の財政危機

文学部を開設して四年目の一九六九年になると、学生数は、仏教学部仏教学科時代には二〇〇名程度であったのに對し、六〇〇名余になっていた。しかし、財政収入の面では学生増に伴なう自然増にとどまっていた。一連の校舍改築の借入金をかかえ、高度成長期の極度のインフレの中にありながら、文学部設置以降、授業料は一九七一年までの六ヶ年間据え居いてきたために、大学の財政は著しく悪化していった。更に、仏教学部時代には少なく共大財源の半分以上は妙心寺派の補助金によってまかなっていたのであるが、文学部開設以降、その率は漸減し、一九七〇年には一四・四％にまでなっていた。

こうした財政状態で新生の花大文学部が順調な教学充実を図ることができるわけがなかった。建物が出来たが、教学の中味である教職員を充実するための財源をどこにも求めることも出来ない状態であった。文学部設置以降新たに多くの教員を採用したが、依然として大学の運営は教職員の経済的犠牲の上になりたっていたのである。正に、当時の本学の給与は世間離れのしたものであった。専任教員といえども、他校に非常勤講師の口をいくつか得て、ようやく糊口をしのぐ、というありさまであった。

一九六九年には、小花園大学も学園「紛争」の波に洗われ、七十日間の長期団交に突入することとなった。長期に亘って母校一新のために募財に協力してきた同窓生、妙心寺派をはじめ各方面の花園大学に対する不満と失望は計り知れないものとなった。花園大学は財政面のみならず、大きな試練の時代に入った。

長期団交の最中の一九六九年十月に出された花園大学通信第十五号で山田無文学長は次のように述べている。

「お願いばかり」

同窓会諸師諸兄諸姉、ご健在でしょうか。学園もお蔭を以って、益々発展充実しつつあるように思いますか

ら、ご安心下さい。

いわゆる学園紛争も、世間にありふれたような事態は、本学には、起らないものと信じます。それは、忍耐強い教授方と、賢明なる学生諸君の、懇切なる話し合いによるものであります。

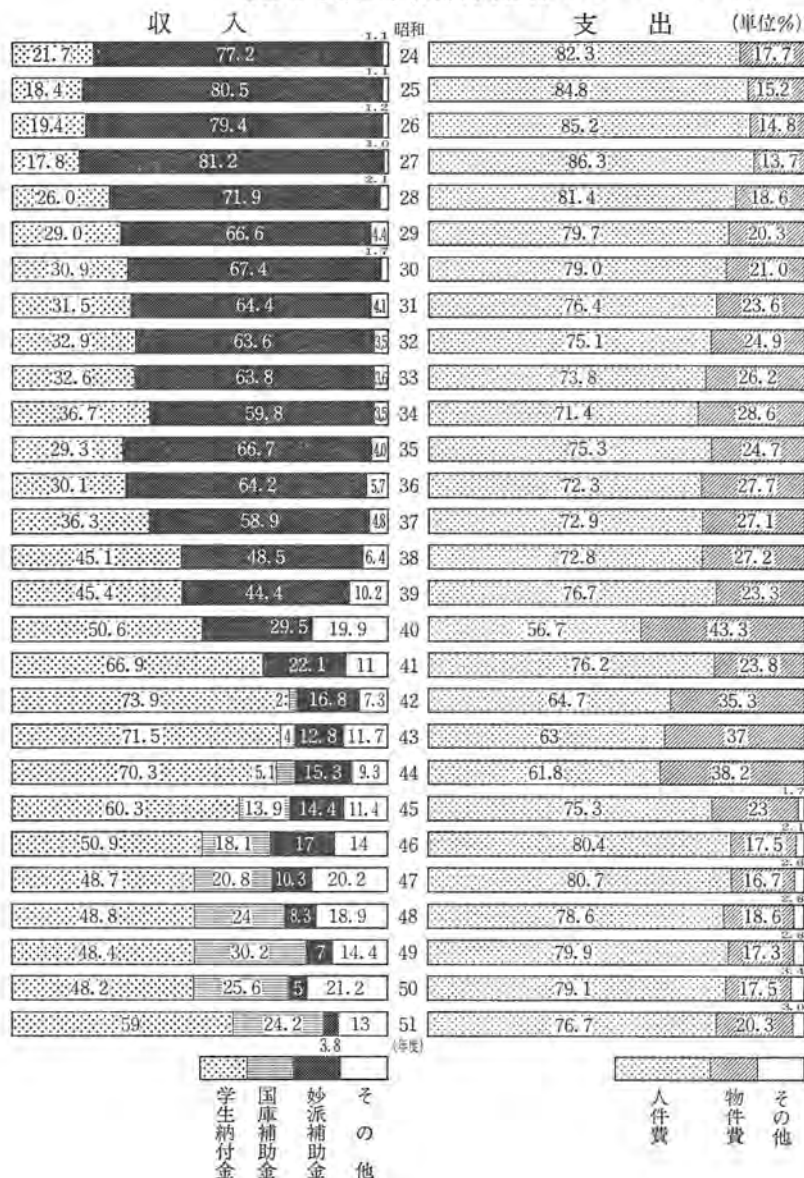
ただ、憂いますことは、本学は従来、本派在籍或は、因縁ある教職員によって、全く犠牲的に経営されておったのでありますが、今後は、そういう甘い考えでは通れなくなることであります。九十数名の教職員を抱えて、世間並みの給与を差上げようと思うと容易なことではありません。どうしても、基本財源が必要になります。そこでわたくしは、かねて一億円の基本金をめざして、ひそかに努力しておるのでありますが、せめて三億円の基本金があったらと思います。

卒業生諸賢の多くは、戦後の財政不如意の寺院生活をしておられるのでありまして、まことに申し上げにくいことでありますが、何とか浄財を捻出して下さって、わたくしのこの志願を全うさせて頂きたく、ひとえにお願いいたします次第であります。

そうした中で、禅文化研究所事務局長を兼務していた木村静雄総務部長に代って、法輪寺住職の佐野大義師が新たに総務部長（事務局長）として就任した。学園紛争によって設立者妙心寺派及び、同窓会の大学に対する批判が最高潮に達している中で、大学運営面の問題は山積していた。とりわけ、財政的には文字通り「火の車」であった。新総務部長に課せられた任務は大きく、学内外からの期待も大きかった。佐野総務部長は就任の抱負の中で述べている。

「……大学の当面する問題を、管理運営面から言えば、全寮制を目ざしての女子寮の建設、体育充実のための運動場の整備と拡充、そしてけたはずれに低い教職員給与の是正、と思われます。然し、母校の財政は昭

収入・支出構成の推移(昭和24年～51年)



和五十年度迄、拡充した一連の施設の借金の返済に追われて火の車であります。正に大学の財政的危機といわねばなりません。活路はあるのか——。私は、あると思います。それは花大がすばらしい教育をすること、そのためによい教師を得ること。それにはよい待遇をすること。つまり、よい教育をすることだけが大学運営管理の唯一つの道であると思います。……（花園大学通信第十五号 一九六九年十月）

以後、佐野総務部長が文字通り「機関車」となって、大学運営の諸政策が精力的に推進されていくこととなる。

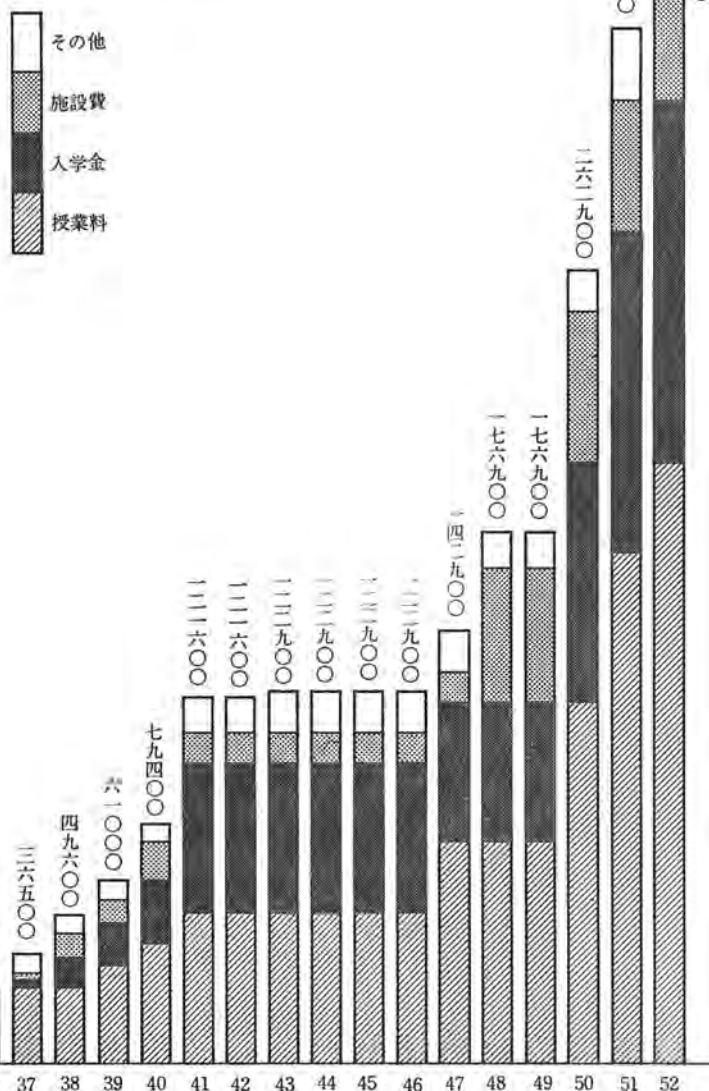
経営姿勢の根本的転換

花園大学は文学部に改組され、新しい教学の充実を積極的に画る時期にさしかかっていたが、学費については一九六六年以降六年間にわたって据えおかれてきた。これは、「学生の負担は少しでも軽くしてやりたい」という山田無文学長の考えでもあったが、一面では、大学収入の大半を妙心寺派補助金に依存して来た旧来体質と、更に山田無文学長の巨額な個人的寄付とに依存する、という経営姿勢の消極性を表わすものでもあった。当面の財政危機を乗り越えていくためには否応なくこの旧来の体質を根本的に変えていく必要があった。一九七一年に発行された学内資料『学費改訂について』には次のように記されている。「花園大学の経営は、学生数の僅少（学生数の絶対的な不足と学生納付金の僅少）ということから、極端な人件費の節減によって年々の収支のバランスをとってきた。言えば教職員の犠牲の上に立って経営がなされたといっても過言ではない。そのことは、結局、学生の教育研究にもはねかえって、教育研究成果の不振と低下につながることになり、大学は出すものは出さないが、取るものも取らないという消極的経営に堕した。そこで、この姿勢を改め、積極的経営に発展して、大学の使命を果さねば、大学の存立の意味がない。」

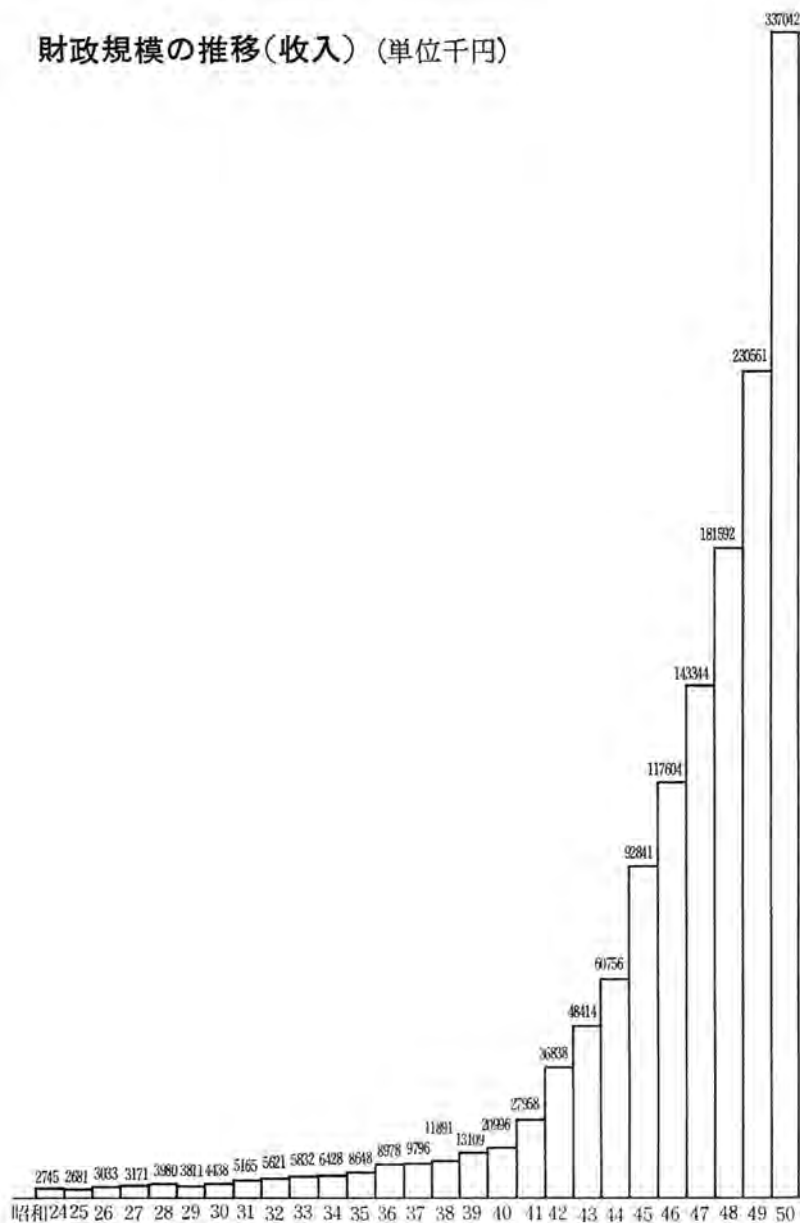
花園大学の経営は以後このような認識と姿勢の上になつて展開されていく。その基本は、学生数の確保と学費の

初年度納入金の推移

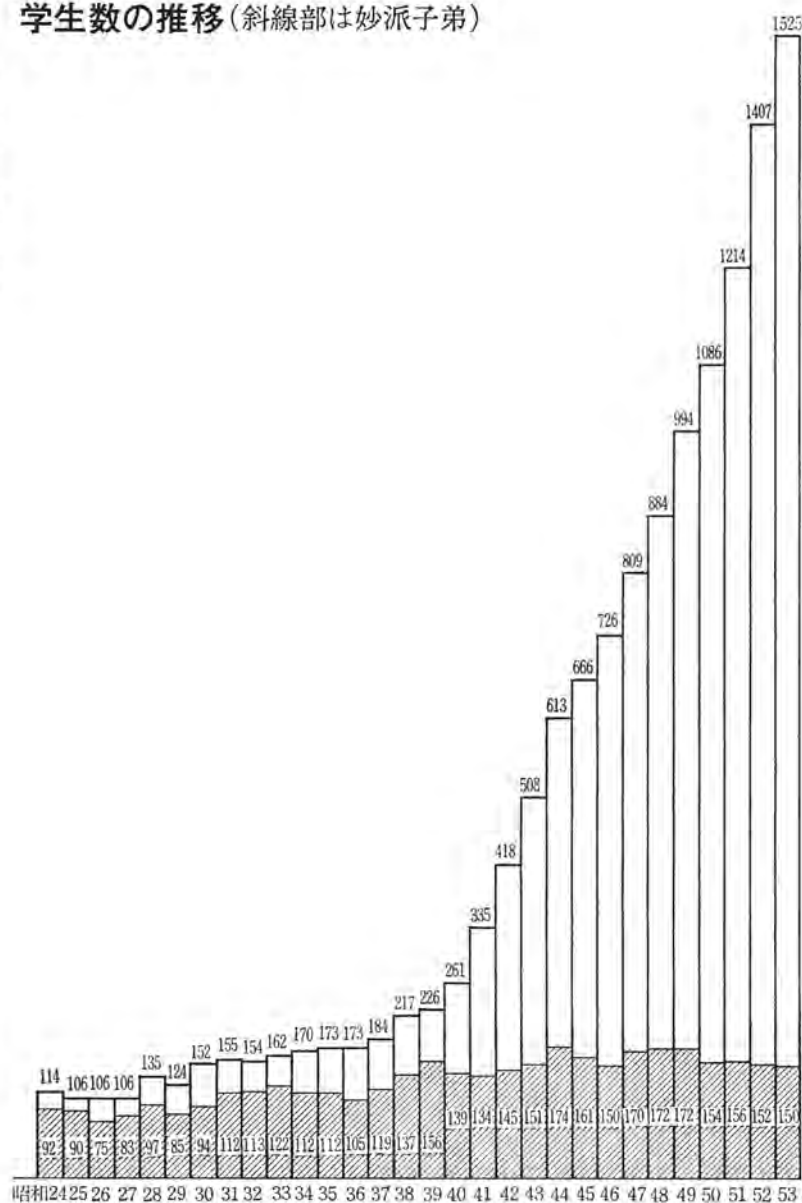
(単位円)



財政規模の推移(収入) (単位千円)



学生数の推移(斜線部は妙派子弟)



改訂であつた。とりあえず、學費の改訂は一九七二年度、一九七三年度に実施された。しかしながら、当時、受験競争率が一・一倍であつた本學に、この姿勢の展開を可能ならしめる諸條件が整備されていたわけではなかつた。内側からの條件づくりと共に、外的條件も次第に備わつて、この積極的經營の展開が可能となつていったのである。

内側の條件とは志願者の急増である。一九七一年には二九六名であつた本學の志願者は、一九七七年には一六四七名となつた。五・五倍の増加である。これは、大學あげての必死の広報活動・募集活動による効果と、全国的な大學進学率の自然増大によるものであつた。この入学志願者増加と學費改訂によつて「學生数の絶對的な不足」と「學生納付金収入の僅少」を克服していくことが可能となつたのである。

また、外側の條件とは、私立大學振興助成法の制定によつて一九七〇年度より本格化した、國庫からの私立大に對する經常費補助金の増加である。一一九頁の表に見るやうに、一九七〇年には總収入に占める割合が十三・九%であつたものが一九七六年では二四・二%となつてゐる。文學部設置以降、本學財政収入に占める妙心寺派補助金が急減しつゝあつた中で、國庫補助金の漸増は、全私學の要求を常に下まわるものであつたとは言へ、本學にとつては決定的な要因となつてゐた。

教育研究充實長期計画の推進（一九七二年～一九七七年）

以上のような經營の建て直しによつて行なう事業の計画は次のやうなものであつた。

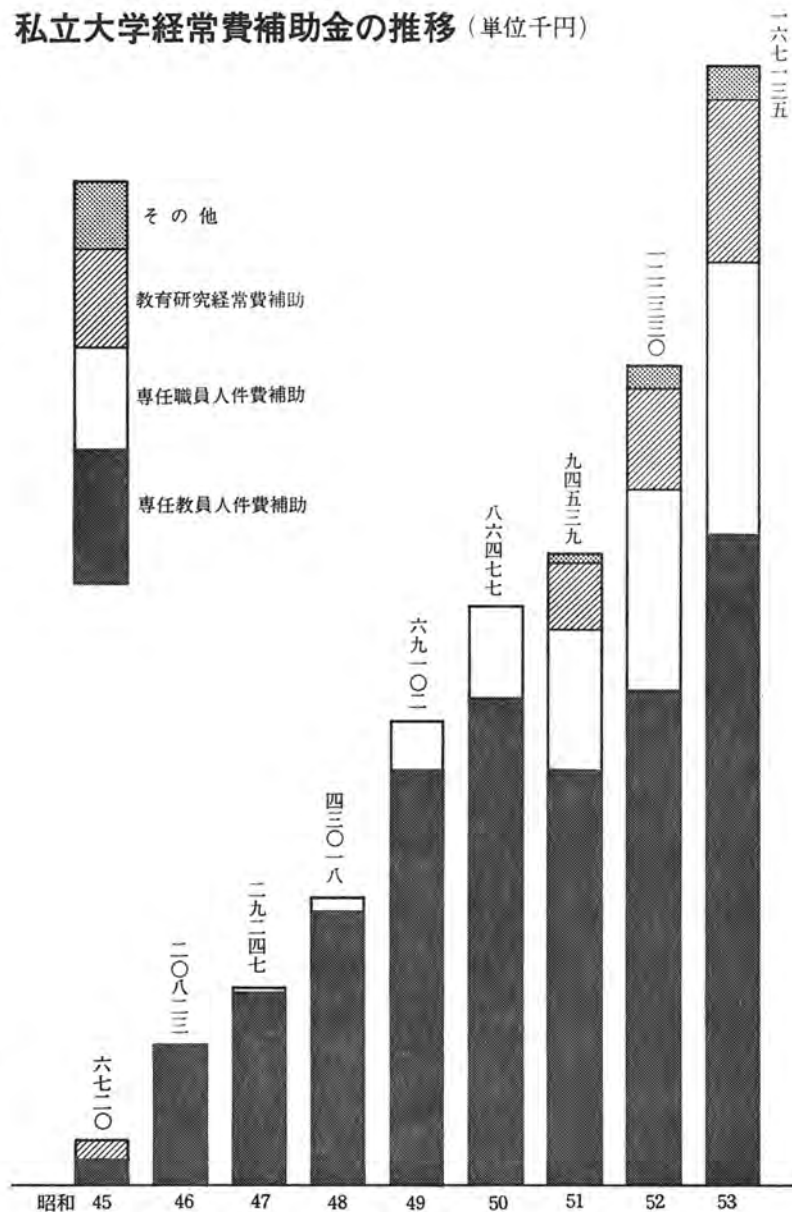
① 専任教員の充實

イ 教職員の待遇改善

ロ 人員の確保

② 學生厚生施設の充實

私立大学経常費補助金の推移（単位千円）



男子寮の移転新築

ロ 女子寮の新築

ハ 学生食堂の新築（新体育館に付設）

③ 研究体制の強化

イ 研究室の増設

ロ 研究費の増額

ハ 研究専修制度の実施

④ 体育設備の充実

イ 体育館の建設（白雲寮敷地）

ロ 運動場の整備

これらの事業計画は学費改訂と表裏一体をなすものであったが、学費改訂のみによって達成し得るものではなかった。学費改訂による増収の他に、入学検定料の増収、国庫補助金の増収、更に妙心寺派補助金及び同窓会員補助金・寄付金収入を見込み、その上不足額については私学振興財団から借入して行なっていくというものであった。

この中で特に緊急を用するものは桁はずれに低い教職員給与の是正であった。この長期計画の推進で一九七六年度にはようやく、「公務員並」の給与に達することができた。一九七〇年当時に比べ、教職員の給与は五〜七倍に達する急上昇であった。この背景には、一九六九年の「紛争」中に結成された「花園大学教職員組合」のその後の動きと、前述した教職員人件費に対する国庫補助の増額という要因があった。

専任教員の数も、一九七一年に三十四名（内嘱託教員十名）であったものが一九七七年度には四十九名（内嘱託教

員十一名」と増加された。

一方、施設面の拡充については、一九七一年には図書館閲覧室の増築工事を行ない、一九七二年には右京区山越に男子寮用地として七四三平方メートルを購入した。一九七三年には、大学隣接の慧照院の敷地を借用し、新研究室二〇平方メートルを新築した。しかしながら、一九七四年には、前年度来の石油危機に伴う狂乱的な物価暴騰という経済状況の急変によって、また、学内の諸要求の変化もあり、当初の長期計画の大巾な手直しを余儀なくされた。一九七四年には、三四・五％という大巾な人件費アップを実現するために、施設費とは別に、私学振興財団から一三〇〇万の緊急借入をして急場をしのいだ。一九七四年度はこうした経済状況の急変にもかかわらず、前年度の「学費据え置き」という「公約」を守ったため、財政は極めて苦しい状態となり、手直しされた長期計画を推進していくとは甚だ困難となっていた。

そのために一九七四年には、「花園大学興学基金計画（案）」が立案され、資金面の努力が試みられた。この計画は同窓会の全面的な協力を得て展開される予定であったが、諸事情のため、未決定のまま、翌年に持ちこされることになった。

一九七五年度には私学振興財団から三五〇〇万円を借入し、総工費九六〇〇万円で右京区谷口梅津間町に女子寮（若草寮）を新築した。と同時に、「開学百年記念事業花園大学興学基金計画」をまとめ、従来の「長期計画」を手直しして次のような事業計画を発表した。

- 1、体育館（学生厚生施設を含む）の新設。学内にある白雲寮を学外に移転し、その跡地に体育館二階建を新築し、一階は学生厚生施設として利用するというもの。

2、図書館書庫・同窓会館の新設

現図書館書庫を取りこわし、その跡地に四階建書庫を建築し、その内四階を同窓会館とする。

3、圖書の充実と視聴覚教室の充実

4、第三研究室の新築

5、教育研究奨学基金

この内、視聴覚教室の新設はこの年度内に完成をみた。

しかし、この「興学基金計画」と相前後して、総合移転問題が理事会に於いてにわかにクローズアップされてくる。これまで、再三にわたって手直しを加えながら進められてきた教学充実計画の最大の難問は、本学キャンパスの絶対的狭隘さであった。しかし、一方では総合移転の可能性が現実化するという考えは学内では極めて少なかった。本学の貧弱な財政基盤からすると、それは当然のことであった。ところが、翌一九七六年一月、恰好の移転候補地が出現し、急速に具体化に向っていったのである。こうして、急転直下、電撃的な総合移転計画が実現したため、「長期計画」の延長としての「興学基金」計画は一時凍結され、学債募集に切りかえられ、多くの関係方面の協力を得て、奇跡的な総合移転が実現した。

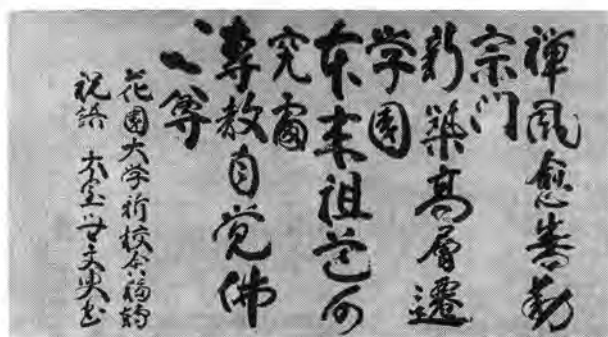
一九七一年以来、いく度かの厳しい財政的試練を経て、紆余曲折しながらも進められて来た「教育研究充実計画」の大半はこの総合移転によって一挙に解決をみたのである。

花園大学の財政は、一九七〇年以降国庫補助金が急速に増加してきたとはいえ、妙心寺派に依存するところが大きかった。近年、妙心寺派からの補助金は全収入の数パーセントにしか過ぎないが、妙心寺一派の後押しがなければ総合移転は全くの不可能事であった。また、一貫して、母校発展のために惜しみない援助を提供し続けてきた、

同窓会の存在なくして、本学の現在は考えられない。更にまた、三十年近くの間、学長をつとめられた山田無文学長が大学発展のために個人として出された志納金は恐らく数億という巨額なものになろう。「花園大学は物心両面に於て無文学長でもっている」と学内外で言われた所以である。

「バスに乗り遅れた」花園大学が逡巡しながら門戸を開放し、一般大学へと転身する過程での大学財政は正に茨の連続であった。この苦難の時代に積極的な経営政策を展開し、今日に至るまで花園大学の先頭に立って牽引してきた佐野大義総務部長の精力的な活動があったことを記し、この項を終る。

第三章 総合移転



禅風いよいよ愈盛にして宗門を動かす

高層を新築して学園を遷す

本来の祖道は別に究むる処ところ

専ら教う自覚仏心の尊きことを。

花園大学新校舎移転の

祝語 太室無文叟書

第一節 総合移転への道

(秋 元孝)

第二節 移転をめぐる学生と教授会

(前中一晃)

第三節 移転後の花園大学

(芳沢勝弘)

第四節 入試改革の経緯

(芳沢勝弘)

第五節 花園大学を支えた人々(佐野大義・小野信爾)

第三章 総合移転

第一節 総合移転への道

(釈 元 孝)

はじめに

文学部設置以後、四ヶ年が経過した一九六九年（昭和四四）、本学の学生数は、一学年四学科定員百五十名、四学年合計六百名に対し、実員は六百十三名であつた。また、同年の入学志願者は二百二十七名、実質競争率二倍に満たないというのが実状であつた。当時のキャンパスはこの実態に、充分ではないにしても一応即応し、いわゆる花園村の教学がなんとか維持、展開されていた。

しかし、極度に貧しい花園大学の財政では、この学生数を維持しながら、同時に質の高い教学を展開することは全くの不可能事であつた。教学条件を充実させていくためには、学生数を増加させて少しでも財政を好転させる必要があつた。当時は、教員の内容にしても名目的な専任教員が多く、また純粋な専任教員にしてもその待遇は極めて劣悪なものであつた。このような事情の中で、次年度以降、次第に学生数は漸増されていくことになつたのである。そして、六年後の一九七五年（昭和五〇）には定員の二倍近い一〇八六名となつた。その背景には、学生募集の積極的な展開による受験生の急増現象があつた。同年の志願者数は一二八一名、即ち、六年前の約五・六倍となつてゐる。

このような苦しい大学運営の中で、繰返し問題となつたのは、本学のキャンパスの絶対的な狭隘さということ

であつた。経営サイドにおいてのみならず、教学サイドにおいても、「この狭いキャンパスを脱出し、広々とした新天地で、花大の教学を展開したい」という思いは大学関係者が等しく共有する淡い願望であつた。現実的に考えるならば、それは全くの「夢物語」であつたのである。しかし、この願望は学生数漸増化の中で次第に深刻な要求へと急速にふくらんでいった。

総合移転の発端

一九七五年（昭和五〇）八月、文部省の次官通達によつて「昭和五十年九月三十日までに大学設置基準によつて申請された学部、学科、定員増については、本年度に限つて特別な配慮をする。次年度以降は原則として一切の変更は認めない」という指導がおこなわれた。

この時、本学の現状は、一学年定員百五十名、四学年合計六百名に対し、実員は千八十余名となつていた。

理事会は早速この問題を取り上げ、五ヶ年計画で実員数を定員六百名に近づけるか、それとも教育環境を整備して、定員増を図るかについて苦しい検討を行った。

その結果、理事会は後者を選んだ。

大学当局は、その決定をうけ、一学年定員二百八十名、四学年合計千二百二十名の定員増申請を、九月三十日付で文部省に提出した。その後書類不備等によつて若干の日時を要したが、最終的には翌一九七六年（昭和五一）二月七日付をもつて申請書類は受理された。

そして同年二月二十八日付で、文部省は花園大学の定員増を正式に認可したが、その条件として、五ヶ年以内に教育条件（校舎、校地、教員）を整備して、大学設置基準に合致するようにとの強い指導が行われた。花園大学総合移転の発端は、この定員増問題にあつた。

移転候補地

一九七五年（昭和五〇）九月の教授会において、学園常任理事を兼ねる佐野大義総務部長は、すでに定員増計画の策定中に、前後して進められていた移転問題について、理事会の意向を次のように伝えた。

「花園学園理事会としては、学生定員増を実現し、大学設置基準による教育環境の整備を計りたい。そのためには、現在のキャンパスは狭隘で如何ともしがたい。このため近來、移転先をさがし求めて来たが、その一つとして北嵯峨鳴滝の一角にある山林平地が有力な候補地となっている。」

と、初めて具体的な移転候補地を教授会に示した。

しかし、該地は古都保存法、市街化調整区域等三重にわたる建築制限のあることが判明するに到って、移転候補地には不適当として調査が中止された。



移転候補地（日本レースKK春日寮跡地）

翌一九七六年（昭和五一）一月二十日、大学当局者に対し、出入の建築業者から、西ノ京壺ノ内町の日本レース株式会社春日寮跡が売りに出ているという情報が寄せられた。

即刻現地が調査された。そして、一月二十八日には、正式に佐野常任理事が日本レース本社を訪れ、売買に関する打診をおこなった。

土地の面積が二万二千百五十平方メートル、建物は鉄筋、鉄骨不造あわせて二十一棟、売価は有姿のままで十七億円、支払条件は、同年三月三十一日までに二分の一、同十月に二分の一、契約締結は来る二月十五日まで等の条件が、日本レース側から提示された。

理事会及び教授会の対応

理事会は移転計画の概要を連日にわたって協議すると共に、現地の調査と研究に全力をあげた。

一九七六年（昭和五一）二月三日の理事会において、計画案に基づいて移転候補地取得のために全力をあげることに決定され、同月十九日の理事会では、移転計画案が検討され、審議の結果正式に理事会案を決定した。

同年二月二十八日には、妙心寺派宗議会において「花園大学総合移転にかかわる案件」（花園木辻北町一のキャンパスを妙心寺派に帰属せしめることについて七億円を大学に支払うこと）が決議、承認された。

これをうけ、翌三月三日には理事会、評議員会が開催され、理事会においては総合移転にかかわる資金計画が議決、評議員会においては移転計画の理事会原案が決議された。

ちなみに、同年三月二十三日付で発表された「花園大学全面移転計画概要」は次のようなものであった。

△花園大学全面移転計画概要説明書▽

昭和五一年二月二三日

学校法人 花園大学

花園大学

一、全面移転を行なうことになった理由

本学の現有キャンパスは、専用校地面積はわずか、六六三一㎡有余、校舎等の建物も延面積四八〇六㎡にしか過ぎない。この中に、現在一〇八〇有余名の学生と一〇〇有余名の教職員とが、肩を叩きあつて教育・研究にいそんでいるのである。

花園大学は昭和五〇年九月三〇日付をもって、一学年現定員一五〇名を二八〇名に定員増することを文部省に申請し、すでに承認の内示を受けているが、本学の定員二八〇名に対する大学設置基準によれば、校地面積は二五％不足、校舎等はぎりぎりの面積である、という指摘も受けているところである。即ち、大学のキャンパス面積に限って言うならば、条件は日一日と悪化している、といつても過言ではないであらう。こうした状況の中で、とにかく、現キャンパスより少しでも広いところであれば何処でもよい、移転すべきだ、というのが、教職員と心ある学生の偽らざる声であつた。

そうした中で、大学当局は、昭和四七年二月二日の理事会・評議員会の開催以来、毎回の如く、大学を適地に移転すべき必要性を訴え続け、一方では、京都市西部、あるいは京都市郊外に移転候補地を物色、調査を行なつて来た。昭和五〇年九月一日、本学学生定員増に関わる理事会開催時には、正式に理事会の議題として、大学全面移転問題が討議され、当時調査中であつた移転候補地の現地調査を行なつたが、当該候補地は大学の建設不可地域であることが判明し、この計画は中止された。

ところが、昭和五一年一月二〇日に至つて、突如天から降つてきたように、大学の現在地の東南約六〇〇mの至近距離に移転候補地のあることが通報されたのである。該候補地は京都有数の大会社である日本リース株式会社、春日寮の跡地であり、全盛期には、一二〇〇有余名の男女従業員の宿舍と教養の場となつていたところである。土地六七〇〇坪（二二、一五〇㎡）と、鉄筋、鉄骨、木造の平家建および二〜四階建の建造物一一、六〇〇㎡とがある。

二、移転先（候補地）を選定するまでの経過

以上の情報を得て、花園学園常任理事は直ちに、日本リースKK社長以下各重役と直接交渉をもつとともに、河村設計研究所に依頼して、該当地の実情調査をすすめてきた。その結果、以下の事項が明白となつた。

- ① 該土地は第二種住居専用地域であり、大学の建築ができる地域であること。

② 該土地全体が日本レースKK所有の土地に間違いないこと。

③ 該土地の面積は、本学の現キャンパスの三・三倍にあたり、本学が移転するに相応しい土地であること。

④ 既存建物は改修と補修を加えれば、大巾に活用できること。即ち、研究室棟、図書館棟、講堂、体育館、学生ホール、食堂、クラブボックス等に活用できる。

⑤ したがって新設すべき建物は管理棟、教室棟だけで済むこと。

⑥ キャンパスの中に二つのグラウンドと、一つのテニスコートが設置できること。

⑦ 土地価格は、相手側に最も有利な条件のときで、総額一六億四千四百万円（三・三㎡当り二四五、四〇〇円）となる。近隣土地の最近の売買実績は三・三㎡当り三五万～四〇万円というところである。また、既存建造物の活用メリット分、約六億円を差し引けば、該土地の価格は一〇億円ということになり、三・三㎡当りにして、一四九、二五〇円にしか過ぎないことになる。

⑧ 所有者日本レースKKの示した契約条件

- ・ 会社は資金繰りのため、五〇年の歴史ある土地を手放すこととなる。五月一日までに何としても六億円を得たいので、至急契約したい。

- ・ 昭和五一年三月四日に正式契約を締結して、手付金として一億円支払うこと。

- ・ 昭和五一年五月一日に七億二千万円を支払い、同時に二二、一一〇㎡の所有権を花園大学に移転登記する。

- ・ 該土地にかかっている京都信用金庫の債務八億三千二百万円を花園大学が引きつぐ。

- ・ 昭和五一年一月一日二億円の内入金を支払う。

- ・ 昭和五二年五月一日、六億二千四百万円を支払い、京都信用金庫の債務を解除する。

⑨ 大学移転については、環境が大事であるが、該土地の東側は道路を隔てて日本レース本社がある。日本レース本社は現在

操業中であるが、無公害・無騒音の企業である。また、近接して、洛陽女子高校、小学校等もあって、本学が移転すれば一
大学園街となつて、環境は更に良好となるにちがいない。

⑩ 日本リースKK当局も、跡地が花園大学となつて活用されることになれば、これにすぎる意義の深いものはない、と大歓迎、協力の意を表し、三回に亘る直接交渉の結果、二〇億円の地価総額から三億五千六百万円を値引するとともに、二ヶ年にわたる延べ払いを承認している。

以上のことが明らかになつたため、昭和五十一年二月三日、緊急に大学当局と本山理事の協議会を開催し、全面移転問題を討議し、引きつづき二月十九日、学園理事会を開催した。その結果、移転候補地はまことに得難いもので、本学園に相応しい移転計画であることを認め、該土地の買取りを推進することを申し合わせた。そして二月五日以来、移転土地の買収計画、利用計画、施設設備計画、現有校地校舎の売却計画等を、夜を日に継いで進めてきたところである。

△移転を計画するに至つた理由 その概要▽

一、現有する大学専用校地校舎の狭隘

	花園大学現況	大学設置(定員) 基準(二八〇)	花園高校現況
専用校地 (除借地)	六六三・一㎡ (二〇〇九坪)	二五%不足	一九・一七二㎡
専用校舎	四八〇六㎡ (一四五六坪)	借用地一八六五㎡ を足してきりぎり	九、三二五㎡
在学学生数 (昭・五〇・五現在)	一〇八六人	一一二〇人	一、一二五人
教職員数 (含非常勤)	一一七人	専任教員四三人	八二人

上の表でも明白であるように、在学学生数において、大学高校とも大差はないが、校地では大学は高校の三四%、校舎は五一%に過ぎない。

入学志願者数
(昭、五一)

推定
二一
計 次次
一六七二

入学許可人数の限
度は定員二八〇人
の五〇%
即ち一四二〇人

定員三六〇人に対し
二一
計 次次
一五五

二、移転候補地の諸条件

所在地	京都市中京区西の京壺ノ内町八の一六 花園大学東南約六〇〇m、徒歩一〇分
所有者	京都市中京区西の京春日町一六 日本リース株式会社 社長 信江基次
面積・地目	二二、一五〇㎡(六七〇〇坪余) 宅地
現地の有姿	鉄筋コンクリート建物四F建一棟、三F二棟、平家建体育館、食堂、講堂各一棟、木造寮舎二F建七棟、その他合計一、六八八㎡の建造物がある。電気・水道、ガスの引込みあり。
環境	該土地は三方道路に囲まれ、東隣に日本リース本社、さらに近接して女子高一、小学校二がある。
買取価格	大学側の支払条件により異なるが最低一六億円(坪当二三九、〇〇〇円)と最高一六億六千万円(坪当二四八、〇〇〇円)
近接地売買実績	三・三㎡(坪)当り 最低三五万円と最高五〇万円

三、移転後の建築計画

既存の建造物を改修、補修するなどして、最大限に活用し、研究室棟、演習室、共同研究室棟、図書館棟(禅文化研究所を含む)、講堂、茶室、体育館、食堂、学生ホール、学生クラブボックス等を建設する。本館(管理棟、禅堂)二F建と教室棟四F建(一部三F建)は新築する。既存建造物の利用によって、建築費が大巾に(約六億円)節減できることになる。

四、移転実施の時機

昭和五十一年八月一日に建築に着手し、昭和五十二年三月一日には完了する。従って昭和五十二年三月一六日から四月一〇日の間に

五、現有校地校舎の活用計画（譲渡）

[illegible]

六、移転計画に伴う資金計画（昭和五一・四、昭和五五・三 満四ヶ年間）

収 入 (財 源)			支 出		
財 源 別	金 額 (単位 億円)	摘 要	項 目 別	金 額 (単位 億円)	摘 要
日本私学振興財団借入金	八	五一年度 四	土地買収代金	一六	一括買取
銀行借入金	一八	土地代 物 一六	校地整備、校舎建築、設備費	五	校舎 その他 一四
校地校舎売却代金	七		借入金返済	二〇	銀行 学 債 一八
学 債	五	五一年度 二 五二年度 三	借入金利息	二・五	銀行
特別寄付金	二・五	毎年 〇・五	諸 経 費	二	
大学自己資金	五・五	学費増収分累積			
総 計	四六		総 計	四五・五	

他方、理事会は教授会に対し、二月十七日総合移転計画の概略を説明、理解と協力を求め、以後事態の進行状況

を逐一報告した。これに対し教授会は、四月二日に特別委員会を設置、同月五日には教職員研究集会を開催し移転問題を討議研究した。

そして、四月十五日には、総合移転計画に対する次のような教授会の基本的姿勢が発表された。

△本学総合移転事業の推進に対する教授会の基本姿勢について▽

昭和五十一年四月十五日 花園大学教授会

学校法人花園学園理事会は、今回の「公示」に明らかのように、本学の総合移転を決定した。われわれの花園大学は、昭和五十二年四月一日付をもって、長らく親しんできたこの校地を離れ、全面的に新たな校地へと移転することになる。本学教授会は、理事会のこのたびの決定に賛意を表し、新校地における教育と研究の充実、発展に大いなる期待を寄せるとともに、教学面でわれわれの荷うべき重大な責務をあらためて痛感するものである。以下に、この事業の推進に対する教授会の基本姿勢をあきらかにしておきたい。

（教授会は、なぜこの事業に賛同したか）

周知のとおり、本学は設立以来今日にいたるまで、この極めて狭隘な校地の上に運営されてきた。学生数がせいぜい五〇〇人、六〇〇人ていどであった時代でも、若ものたちの学び舎としては余りにも狭く、施設は充分でなかったが、その上さらに、ぜい弱な財政基盤と大学進学率の急上昇とに対応しつつ年々学生数の漸増をきたし、それにもなって教学条件の不備もまた急速に露呈してきた。だが、本学の財政的な力量では、誰しもが認めるこの悪条件を克服し、新天地を求めて脱皮していくことは不可能であった。小規模大学の良さを全面的に生かしつつ、「手づくり教育」の旗を誇り高く掲げてきながらも自ら求めて本学の門をくぐった学生諸君に対して充分な教育諸施設を提供できなかったことは、われわれがつねに悩みぬいてきたところであった。

ところが今まさに千載一遇ともいふべき好機が突如到来したのである。もちろん、なじみきつたこの愛らしい空間に潜む歴史

と伝統に愛惜の情がないわけではない。そのことは、本学に育ち、本学を職場としている教職員には、とりわけていちじるしい。また、ここ数年らしいの教学面での改善の試みを、今いっさい放棄して転進しようというものでもない。そのことは、本学の歴史と伝統を本質的に見すえながら教学面・組織運営面での改革を提唱し推進しつづけてきたすべての教職員の本意なのである。

さきにもふれたように、現校地・施設の諸矛盾に悩みぬいてきた教授会は、このたび理事会からの説明をつぶさに検討した結果、(一)に、新しい校地が現校地とは至近の地にあるために、移転が至って容易であるのみならず、今般入学する学生をふくめて全学生の通学の便に大きい変動をきたさずにすむこと、(二)に、新しい校地の現況(すでにある建造物・空き地の現況)から察するに、その地が予想以上に新しい「花園大学」の建設にふさわしい好条件を数多く有していると判断できること、(三)に、土地・建造物の入手価格をふくめて、これほどの好条件に立つ新天地は、今後は容易に得られないと考えられること、以上三点に立つて、理事会による本学総合移転事業の推進に賛同したのである。

なお、本学当局・教授会は、特別委員会を組織して、教学と学生厚生のための施設を第一義におきながら、理事会による事業計画内容をさらにくわしく点検し、万全を期すべく努めるとともに、別途に理事会に対して教学条件の整備と充実にいつそう精励されるよう申し入れることとした。

(教授会は今後どのような点で重大な責務を負うのか)

さて、本学教授会は、この総合移転事業の推進にあたって、たんにこれを機幸するのみならず、教学面での責任の重大さをつそう痛感している。

すなわち、本学教授会は、従来一貫して本学が「小規模大学」たることを自認しつつ、「小規模大学ならではの、行きとどいた教育の推進」という信念を社会に向って表明してきた。学生諸君にとっては、われわれの本意とは別に、多々不満とする点もあったと思うのであるが、われわれは劣悪な条件のもので、能うるかぎり教学担当者としての努力を重ねてきた。だが、かえりみると、その「小規模大学ならではの、行きとどいた教育」という理念の定立は、この校地の狭隘さからの脱出が絶望的であっ

たことと無縁ではなかった。「共有する空間がこれ以上には広がりにくい」という、物理的な制約のなかで辛うじて創り出した理念であった。こんどは、決定的に情況がちがってくる。

われわれの「花園大学」は急遽三・三倍もの広大なキャンパスに展開するのであって、敷地内には既存の建造物をふくめて十指に余る学棟が建ち並び、グラウンドやコートと共に両手をひろげて「全花大人」を待つことになる。

しかし、このような教学条件の一挙拡張が、「花園大学」の教学の将来に対して、いったい何を提起してくるのか。移転事業の計画内容の教学面からの検討とあわせて教授会が注目するのは、まさにその点なのである。なぜ、その点に注目するのか。答えは、きわめて明白である。すなわち、世にいうところの、マスプロ大学化の危険であり、これまでわれわれが創出し高唱してきた教学理念の崩壊の危機ということなのだ。この一点から眼をそらしたままでは、本学教授会は総合移転計画に賛同しえず、その事業の推進に全面的に協力しえないのである。

すでにのべたように、本学教授会は、今回の総合移転事業に賛同し、その推進に全面的な協力態勢をとっている。われわれの「花園大学」のマスプロ大学化への道を全力をあげて回避すべく努力するとともに、この狭隘な校地と不十分な施設のなかで「全花大人」共通の理念として育んできたものをあくまでも堅持しつづける覚悟をさだめたからである。

もちろん教学のための施設の拡張という条件は、脆弱な財政基盤に立つ一つの私立大学においては、当然のことながら一定数の学生数の増加をまねくことであろう。「大学」として有する適度の敷地、校舎の空間に、適度の学生を包摂することは望ましいことといわねばならないが、このさいたいせつなのは、そうした諸条件が、本学の教学理念にもとずき、あくまで「適度」であり「行きとどいた教育」の精神が生かされていくことである。専任教員一人当たりの学生数如何ということも、「行きとどいた教育」の維持、充実ということのためには、けっして軽視しえないと考える。

本学教授会は、右にのべてきたように、本学の総合移転事業の推進を「花園大学」の飛躍と、いつその充実への好機としてとらえるとともに、この千載一遇ともいうべき突然の好機の到来に内包される教学の危機にもしっかりと眼をひらき、みずからか

えりみて、教学担当者としての責任の重大さを教授会員相互に確認しあうものである。

また、同月二十五日には、教授会より総合移転計画に関連して、理事会に対し申入れ書が提出された。その内容は「今回の移転地の条件と四学科二課程の構成をもつてする限り、各学年定員二百八十名、実数四百名を越えないという線を堅持すべし」というものであった。これについて理事会は、「申入れ書の趣旨を体して花園学園の運営にあたり、定員及び実員の厳守をしたい。」と回答した。

所有権移転登記

一九七六年（昭和五一）五月一日、江西寛堂花園学園理事長は信江基次日本レース株式会社社長との間に土地売買に関する契約を締結した。その内容は次の通りである。

日本レース株式会社所有地、京都市中京区西ノ京壺ノ内町八の一―六。地目宅地。土地面積二万二千百十平方メートル（建物・附加物有り姿のまま）。代金は十六億四千四百万円。

支払方法、八億二千二百万円を一九七六年（昭和五一）五月一日、二億円を同年十一月一日、六億二千二百万円を一九七七年（昭和五二）五月一日に支払う。

というものであった。この契約に基づき、五月一日、八億二千二百万円を日本レースに支払い、同時に該土地建物の所有権が花園学園に移り、移転登記を完了した。

同窓会のバックアップ

同窓会の理事会、幹事会、評議員会の合同会議が、一九七六年（昭和五一）二月十五日に開催され、佐野花園大学総務部長は、この席で初めて同窓会に対し移転計画を明らかにした。

そして、この会議において、一九七四年度（昭和四九）以来進められて来た興学基金造成計画を、一時凍結することとし、同窓会が中心となって、学債を引き受けることが決議された。その総額は五億五千万円であった。

また、同年五月十五日、洛北鞍馬で同窓会の全国役員合同集会がもたれ、「花園大学移転協力学債引受の件」が審議され、全会一致の賛成を得た。そして、この月から事実上学債募集の大事業が展開されることとなった。

これと前後して、二月二十二日、妙心寺派宗議会開催の前日、同窓会有志は花園大学総務部長の要請に応じて全国から入洛、宗議会に対し、「花園大学総合移転にかかわる案件」を決議、承認するよう請願を行った。

学内組織と請負業者の選定

一九七六年（昭和五一）四月一日、学内に総合移転準備室を設置、森事務長が室長を兼務、中央毛織株式会社から同窓の国友憲道氏をスカウト、同室長補佐とし、これに出向職員三名を加えた計五名の陣容でスタートした。

また同年四月二日には、学内教職員十六名により総合移転プロジェクトチームが発足、建築、設備、施設についての大学原案作成のため、教育、研究、学生、厚生、体育の各方面にわたって調査、研究がおこなわれた。同プロジェクトチームは、各研究項目に従って他大学の視察、見学等を実施した結果、七月二十七日に到って最終案を作成した。

なお、同年四月一日、理事会は総合移転に伴う建築設備の設計監理者に、河村建築設計研究所所長河村専太郎氏を選定。同研究所により総合移転プロジェクトチームの最終原案をもとにした建築、設備の基本設計図が、八月五日に作成された。

この設計図をもとに、請負業者の選定がおこなわれた。当初、建築業者五十三社から見積指名願いが提出されたが、いくつかの段階を経て、九月三日、最終的には浅沼組とフジタ工業の二社を請負業者に指名した。

周辺住民の理解と移転工事

朱雀第八小学校において、五月十七日夜、移転地周辺住民に対し、花園大学総合移転についての説明会がおこなわれた。これをうけ、住民側から、総合移転に対する要望書が提出された。

大学側は多種多岐にわたる周辺住民の要望を二十一ヶ条に整理し、できるものとできないものを明確にして、確認書を住民側に提示した。その内容は次の通りであった。

△花園大学総合移転にともなう関係自治連合会と関係町内会の要望・要求書に対する回答及び確約書▽

朱八自治連合会、壺ノ内町南部町内会、壺ノ内町北部町内会

花園自治連合会、春日町内会、ハツ口南町内会、ハツ口北町内会 各 位

藪ノ下町内会、朱八小学校、洛陽女子高等学校、同幼稚園

昭和五十一年五月二十七日

京都市右京区花園木辻北町一

学校法人 花園学園理事長 江西 寛堂

花園大学学長 山田 無文

この度花園大学が御近所の元日本レース株式会社春日寮跡地二二、一五〇㎡を買取り総合移転をいたしたいということで関係御町内はもとより学校、工場、事務所に対して大変なご心配を煩いておりますことを恐縮至極に存じております。おくれればせながら去る五月一七日朱八小学校をおかりして初めて関係御町内の皆様のご参集を賜わり移転計画の概要についてご説明とお願いを申し上げましたところ、御町内の皆様から率直に御批判と御要望を承ることができ有難く存じあげました。

引きつづき五月二二日花園会館に關係自治連合会、御町内の役員各位のご参集の栄をいただき、大学の移転にともなうそれぞ

れのお立場から御要望と御要求書を拝受することができました。

わたくしたち大学関係者は連日になたつて御要望書、御要求書について協議いたしました。つきましては別紙のとおり御要求書に従ひご回答申し上げますとともに確約を申し上げます。そして誠心誠意これを実行する覚悟であります。現在無人で最も用心のわるい木造の元春日寮寄宿舎をとりこぼつて、火災等の不慮の事故でご町内に迷惑のかからないようにと念じております。わたくしどもの今回の回答、確約書を御高覧の上格別のご理解を賜わり、取りこぼす工事だけ実施できますことを懇願してやみません。どうぞよろしく願ひあげます。

回答と確約書

花園学園 花園大学

要求一、工事用と通学用とを問わず、自動車の出入口は移転敷地の東南隅一ヶ所に限定せよ。

回答・確約 ご趣旨に体してそのとおり通行いたします。ただし人と自転車は通行させて下さい。

要求二、移転敷地南側沿いの内側に排水溝を設け、馬代通りの本管に導き旧二条通りへの排水の吹き出しを改善せよ。

回答・確約 ご趣旨のとおり実施いたします。ただし本施工は校舎新築工事施工と同時に着工いたします。

要求三、移転敷地南西側のA棟、B棟裏沿いの旧排水溝の使用をストップするか敷地内にて馬代通りの本管へバイパスされたい。

回答・確約 ご趣旨のとおりいたします。ただし施工は校舎改築工事施工と同時に着工いたします。

要求四、移転敷地南西側の民家に接している部分の塀に防犯用の忍び返しをつけられたい。

回答・確約 ご趣旨のとおり取りコボチ作業の始まる前に実施いたします。

要求五、F棟建設の反射によるテレビ電波障害の対策を実施せよ。

回答・確約 ご趣旨のとおり事前に調査を必要あるときは共同アンテナ設置を計画実施いたします。

要求六、B棟西側の丸屋根のトユを太くして水が溢れないように改善されたい。

回答・確約 トユをかけかえて水のあふれないように改善いたします。

要求七、 B棟のクーリングタワーの水シブキを防止改善されたい。

回答・確約 ご趣旨のとおりクーリングタワーの養生施設を実施して、水しぶきのかからぬよう改善いたします。

要求八、 工事期間中の安全の確保について

① 児童、園児の通学通園の指定路（旧二条通）になっているので特にその交通安全について充分配慮されたい。

○ 工事のスケジュールに合わせ、必ず事前に朱八小学校、洛陽幼稚園等に対し密接な連絡を取り学校側の管理に遺漏が生じないようにされたい。

○ 工事関係者の車輛等が路側帯の通行を妨害しないよう特に監視されたい。

② 工事期間中ダンプカー等の大型車輛の旧二条通り商店街の通り抜けは禁止されたい。

回答・確約 施工者と大学が一体となって御要求の一つ一つを契約書或は作業工事要領に取決めを行い御要求を全部厳守して、児童、園児はもとより一般通行者の交通安全に全力をつくします。

要求九、 旧木造構築物の撤去工事の際敷地内での廃材の焼却は禁止されたい。

回答・確約 ご趣旨のとおり焼却は一切禁止いたします。

要求一〇、 移転敷地内東北隅のL棟は撤去されたい。

回答・確約 L棟がその北側の住民の皆々様に変な迷惑になっておりますことを知って驚きもし、胸を痛めております。

実は大学も一日も早くこのL棟を撤去して約一〇〇米南側の図書館に予定しております建物の北側に新築したいのであります。そしてL棟の跡はグラウンドにして北側の住民の皆さんにも喜んでもらいたいと考えてきました。ところがそのためには約二億円の新たな資金が必要となります。しかし古いコンクリートの建物は改修して少しでも節約しなければ移転できない小さい貧しい私立大学である花園大学ではそれができません。みなさまも大変でございま

しょうが、大学の死活の問題でございます。近い将来必ずL棟は撤去して跡は広々としたグラウンドにいたします。今日現在それは何年後とお約束することができません。しかしわたくしどもはこのL棟によって既に起っている住民の皆々様方のご迷惑、ご苦勞等が少しでも軽減除去されますことは、可能な限り誠心誠意を以って実行いたします。

なおこのL棟は一般学生の教室棟ではございません。教員の個人研究室が中心で最も静かな環境になる建物でもございますのでご諒承いただきたいと思います。

要求 一一、 移転敷地内西北隅のM棟新築と附近住民の日照権について。

回答・確約

M棟は今日現在のところ三階建か二階建か決定しておりません。しかし三階建でも二階建にしても皆さまの日照権をいささかも侵害しないよう、建設の場所をできるだけ南側によせたり、衛生上、風紀上でもわるい建物にならないよう確約いたします。幸いこの建物は(M棟) 禅文化研究所と坐禅道場になりますところで大学の建物では一番厳肅神聖な場所になりますので一般教室ではございません。将来は日本庭園を築き趣きのあるものになるのでございます。どうぞご理解下さい。

要求 一二、 木造建造物撤去にともなう塵埃と騒音の防止と家屋汚染、精神的苦痛に対する配慮について。

回答・確約

取りコボチ業者寺村建材と大学は厳重な作業要領契約を結んで、養生用の TENT を張りめぐらし、大型の機械力等にはよらず、成べく人力による取りコボチを実施して騒音を防ぎ、散水を充分にして塵や埃の舞い上らぬよう万全を尽くします。穴を掘って焼却するということは禁止してこれまた煙りやすい塵や埃を防止するよう一生けんめい努力いたします。

要求 一三、 工事中に起る一切の事故及被害について全責任を負うこと。

回答・確約

ご趣旨のとおり工事によって起った事故や被害に対しては誠心誠意、大学も業者も一体になって対処し補償申し

あげることはいうまでもありません。何としても事故やその他のことでご損害やごめいわくを少しでもかけないよう最善を尽す覚悟でおります。

要求 一四、住民と話し合いがつくまで着工してはならない。

回答・確約

移転計画による大学の校舎建設工事は住民の皆々様のご理解とご協力を得た上でなければ着工できないと存じます。ただただ私どもが誠心誠意を尽くして住民の皆々様の御諒承を得て一日も早くスムーズに着工できますことを天にも地にも祈っております。お察し下さい。

要求 一五、設計図及工事契約書各一通を提出すること。

回答・確約

現在建物についてマスタープランの作製最中でございます。マスタープランが一応できあがりました。ときに詳細図までは大変な枚数でございますので平面図、立面図を御高覧いただくよう準備いたします。工事契約書はこの中の工程表或は作業要領、等の実務面について皆々様に必要なものをコピーしてこれもご高覧いただくよう準備いたします。

要求 一六、Ｌ棟の迷惑の除去と防止について。

○のぞき見ができないよう眼隠しをすること ○テレビの電波障害除去。コンクリート塀による通風阻害の除去。

○コンクリート塀による通水改善と湿化防止について。

回答・確約

Ｌ棟にはすでに眼隠しの施設がしておりますが、Ｌ棟にも教員が勉強しますので、健康上に支障のない限り眼隠しについても工夫を加えます。電波障害除去のため共同アンテナが必要なきときはこれも実施いたします。コンクリート塀による通風改善、通水、除湿等については北側の住民の皆さま方のお宅を実地に拝見して、できるかぎりの誠意をつくしてご要求に応えたく存じます。

要求 一七、Ｌ棟と日照権について。

回答・確約

Ｌ棟の建物が北側住民の皆々様方の日照権を侵害しておるとご指摘がございます。日照権が問題になりますのは、「新築した建物によって、今までに建っておりました住居が冬至の日の午前十一時から午後三時の間の四時間のうち三時間以上太陽の光が入らなくなった」というときに、日照権が侵害された或は奪われたということになるようです。Ｌ棟は日本レース時代でも一番古い鉄筋コンクリート建築のように聞いております。

要求 一八、

大学校舎になったときの騒音をどうして防止するのか。

回答・確約

移転敷地の日本レース春日寮は近年まで一三〇〇人の従業員さんの寄宿があつて随分賑やかであつたと聞いております。大学も移転してここにきましても人数は一三〇〇人に足りません、そしてここで寝泊りするものは殆んどありません。その上大学は一年の内四ヶ月はまるまる休眠でございます。平生登校する学生は一日に半分に達しませんし、又一時に登校したり下校したりいたしません。時差通学でございます。

しかし大学も催しものの多い学校でありますので騒音は沢山あると思います。しかしそれは殆んど学内に響くものでございます、ご心配の打楽器等の音は、学内に防音をした講堂棟を指定しこれ以外での練習を禁止いたします。そして騒音の学外に出ますことを全力をあげて防止いたします。

要求 一九、

防犯灯をとりつけること。

回答・確約

現在火災予防の上から電気を切っております。御趣旨を体して「取りコボチ作業」着工時に通電して防犯灯を設置いたします。

要求 二〇、大学の風紀が乱れないようにしてほしい、学生運動も心配である。どう対処するのか。

回答・確約

男女共学の花園大学でありますから、女子学生も約四〇〇余人在学しております。風紀については私たちも案じております。幸い大学生という矜持も自覚もありましてしっかり明るい交友をしておると思ひます。一層教化指導を重ねて風紀を乱さないよう努力をいたします。学生運動は沢山ありましてそれぞれクラブやサークルをつくつて、



起 工 式

張り切っております。学内では自由でございますが、一步学外に出ますと社会人として当然その責任をとわれます。本学の学生として地域の皆様にも愛され親しまれるよう、全学をあげて心を尽くしたいと存じます。

要求 二一、 学生の自動車登校はどうなるのか、学内に駐車場を設置して周辺住民にめいわくをかけること。

回答・確約 原則として学生の四輪自動車の登校は禁止したい。教職員の四輪自動車登校は許可する。このときは外来者の自動車とともに移転敷地内南側のコートを自動車、自転車の駐車場として整備し、学外周辺に無断、不法駐車しないよう強力に指導管理いたします。

その後、これをもとに話し合いを進め、六月七日に至って双方の合意が成立、確認書を手交した。そして、既存建物の撤去工事が六月九日から始まり、八月一日に終了した。

九月八日には理事長、設計士、業者等関係者の参列を得て、起工式が挙行され、大般若転読、鍬入れ式等を行った。

当日には「花園大学全学協準」の学生が、起工式阻止実力行動を行ったが、起工式を当初の予定より三十分余繰り上げて挙行したため、学生と大学関係者が衝突するという事態は避けられた。

花園大学の移転は法的には文部省、国土庁による認可承認事項であった。このため、大学は四月以来京都市都市計画局―国土庁大都市圏整備局大阪事務所を通じて、関係書類の提出をおこない、国土庁の現場視察調査等を受け、十月五日付をもって国土庁長官の許可書が交付された。

工事着工と前後して、現地が平安京跡という史跡であるため、埋蔵文化財の発掘が行なわれた。これには、本学講師の山田良三先生を調査主任として依頼、約一ヶ月にわたって調査活動がおこなわれた。

資金計画

資金計画の第一目標は、日本私学振興財団の長期低利の借入金獲得であった。佐野大義総務部長は一九七六年（昭和五一）二月以来九月までに十七回にわたって上京、日本私学振興財団に陳情し借入について折衝を繰り返した。その結果、同年十二月に五億九千万円、翌年六月に三億六千三百



移転工事

移 転

当初の計画より一ヶ月余遅れて、一九七七年（昭和五二）四月二十九日に、移転工事は竣工した。翌三十日から約十日間にわたって移転が行なわれた。



総合移転竣工記念式典

万円の借入が決定した。

他方、同窓会が中心となって総合移転協力学債の募集が展開された。一九七六年（昭和五一）には、当初目標金額を五億五千万円として出発、翌年度にはこれを七億五千万円に増額修正して実施され、二ヶ年を合すると最終的に七億二千三百五十万円が同窓会員及び、大学関係者の絶大な努力により集まった。

この他、妙心寺派による花園木辻北町一のキャンパス買取りによる七億円等が総合移転の資金計画に繰り込まれた。

そして、五月九日午前十時半から、学生、教職員ら約千五百人が参加して、新校地講堂において開校式が挙行された。参会者全員が般若心経を誦経、合掌したあと、山田無文学長は「新しい校舎ができたことは常識的にはおめでたいことだが、学舎が広く立派になったことだけではダメだ。物質文明が進む一方で、人の心は貧しくなるばかりの世の中に、人間性の原点をつかんだ人をひとりでも多く出すのが本学の使命。釈迦は、三界はわが家、生き物すべてわが子」と教えているが、相手の立場に立って考え、行動できることが人間性である。禅宗ではこのような状態を無とか空とか表現しているが、在学中に知識や経験を得る以前の事柄として身につけてもらいたい」と式辞を述べた。五月十二日には開講。そして同月十五日には同窓会、工事関係者、臨済宗各本山、周辺住民代表、その他関係者多数をまねいて総合移転竣工記念式典が挙行された。一九七六年（昭和五一）一月に移転候補地が発見されてから、わずか一年五ヶ月後のことであった。

第二節 移転をめぐる学生と教授会

（前 中 一 晃）

移転に対する教授会の基本姿勢

一九七六年四月十五日、花園大学理事会は、一九七七年四月一日を期して、大学全体を右京区花園木辻の地から現在地の中京区壺ノ内に移転するとの公示を出した。理事会は、大学を総合移転する理由として、学生増によって大学内が、手狭になり、移転の必要性をかねて痛感していたこと。天佑ともいってもよい移転適格地がみつかった

ことを挙げ、旧校舍、白雲寮を売却し、白雲寮に代る男子寮を常盤の地に建設することを決定した。

理事会のこうした総合移転事業計画に対し教授会は、

(一) 新校地が旧校地と至近の地にあり、移転が容易であり、通学の便にも大きい変動をきたさずにすむこと。

(二) 新校地の既造建造物、空き地の現況からして、新しい「花園大学」の建設にふさわしい好条件を数多く有しているとは判断できること。

(三) 土地、建造物の入手価格をふくめて、これほどの好条件に立つ新天地は、今後は容易に得られないと考えられること。

の三点に立って、その推進に賛意を示した。それまで、「小規模大学」であることを自認し、「小規模大学ならではの行き届いた教育の推進」を表明しながらも、自ら求めて大学の門をくぐってきた学生に対して充分な教育諸施設を提供できなかったことに常に悩み続けてきた教授会にとっては、教学条件の一挙拡張は、大いに期待して良いものではあったが、一面それがマスプロ大学化につながり、旗印としてかかげてきた「手づくりの教育」の崩壊につながるのではないかとの危惧もあった。そこで教授会は、理事会に対して申し入れを行い、新校地において、現在の四学科（仏教、社会福祉、史学、国文）二課程（教職、教養）の構成を維持する限り、各学年定員二八〇名、実数四〇〇名を越えないという線を堅持されるよう約束を取りつけると共に、それまでの狭隘な校地と不十分な施設のなかで「全花大人」共通の理念としてはぐくんできたものを、これからあくまで堅持しつづける覚悟を表明した。

移転に対する学生の反応

大学の総合移転計画が発表されて後、早々に大学当局と学友会中執との間で協議会が開催された。『花園大学文

学部十年資料集』によれば、その間の事情は、次のように記されている。

一九七六年四月十九日 大学当局より学友会中執に対して移転説明会開催を申し入れ、その日時、会場につき事前協議を提案。学友会中執より当局に対して回答があり、移転計画を白紙撤回した上での「公開の場での協議会」の発足を提案してきた。「当局が主張する説明会と、中執のいう協議会と、方針に一致がみられないが、方針の一致点を見出すために協議することに、中執は否かではない。」というのが、学友会中執の主張。

一九七六年四月二十三日 大学当局より学友会中執に対して、移転事業の白紙撤回は絶対に不可能なこと、かねての花大長期計画と今回の移転事業との関連性について理事会が基本姿勢を明らかにすることが必要だと考えていること、「方針の一致点を出すため」の公開協議会開催案に賛成であること、その日程等について早速にも事前協議をしたいことを申し入れる。

一九七六年四月二十八日 学友会中執より大学当局に対して、(一)長期計画の総括を要求する。(二)公開協議会を五月七日午後四時三十分より行いたい旨を申し入れる回答あり。

一九七六年五月四日 大学当局より学友会中執に対して、前記申し入れを受諾する旨通知。

こうして、五月七日に第一回、五月十九日に第二回の公開協議会が開かれ、学友会中執より「何もかも全面的に反対しようというのではない」との発言があったと報告されている。もっとも、この発言は七月二十二日発行の中執文書の中で十分に反省したいと記されている由である。

七月に入って学生は、クラブサークル部長会議、学友会中執、学生会館運営委、花園大学新聞社を構成者として全学協議会準備会（全学協準）を組織し、学生を無視したままでの大学移転強行に反対するという立場に立って大学当局との交渉に入った。それまで大学当局と公開協議会を開いてきた学友会中執はここで、全学協準に埋没して

しまい、公開協議会は中断してしまった。

そして夏休み明け後、事態は急テンポで進展していくのである。

起工式阻止行動から全学ストライキへ

九月八日、全学協準は「移転」問題に決着をつけずに起工式を強行することは許されないと、他大学生の応援を得て、起工式実力阻止斗争を展開していった。そして九月十六日、十二時三十分より「起工式実力阻止報告集会」を開き、三講時目休講要請もないまま集会を続行していることに対し抗議文を提出しにいった学生部長、さらにはその後文学部長もひきづり込んでいわゆる糾弾集会を行った。これがその後の五十七日間におよぶ全学ストライキへと発展していくひきがねとなった。

この間の事情を全学協準等の学生側の資料から跡づけてみると次のようになる。全学協準は、九月十六日の二部長（文学部長・学生部長）の糾弾集会では、「当局とは何か」「移転について最大の責任を負いうるのは、いかなる者なのか」について追求していくなかで当局に対し不信感をもち、二十日から二十一日に至る徹夜の二部長糾弾の末、当局は崩壊したとして、当局崩壊の中での試験実施は、認められないと、九月二十一日午後から九月二十九日午前までの試験実力阻止行動を展開していった。

九月二十九日、学生大会開催、(一)二部長は糾弾集会に応じよ。私達は、問題が解決するまでストライキで闘う。(二)試験を全面的に保障せよ。(三)ストライキの全責任をスト実が持つ。と決議を行った。

十月五日 スト実代表と学生部委員会委員長との間で確認書が交された。その内容は、

(一)二部長以外は発言させない。

(二)糾弾集会の開始は午前十時から、終了時刻は午後四時三十分くらいで、区切りのいいところで終えることを原

則とする。ただし問題が残っている場合は、次回に繰越すものとする。

(3) 学生部委員会は糾弾集会の日時設定に關してのみ二部長の意向を代理するものとする。

四 昼食は午後一時をめぐとし四十分間、休憩時間は九十分間をめぐとし、当日の司会者が判断する。

(四) 司会者は学生側があたる。

こうして、十月六日、第一回糾弾集会。続いて、十月十三日、第二回糾弾集会が開かれた。ところが十月十三日の糾弾集会で、スト実「糾弾に仲介者を入れるということは本来の糾弾ではなく、九月二十日～二十一日徹夜で行われた二部長に対する糾弾が本来の糾弾である」として、十月五日交した確認書の一方的破棄を通告した。教授会は、この事態の急変を重視、十月五日の確認書が再びスト実によって確認されるまでは、二部長が「糾弾集会」へ出席することを保留するという決議を行なった。

十月十五日、スト実は二部長を糾弾に応じさせるための戦術として部長室占拠の行動に出た。そして十月二十七日には、「学生部長宅包囲糾弾斗争集会」を行った。教授会は、こうした異常事態解決のために全学生に訴えるとして、十月十六日、十月二十八日の二回にわたって声明を出し、事態の打開に資するため、十一月五日午前十時より全学的集会を主宰することを表明した。

十一月五日、教授会主宰の全学的集会を予定していた日、スト実は全学ストライキ決行中に教授会が主宰して全学的集会を開くのは学生自治への介入であり、集会は断じて許さないととして、午前三時、当日学内に泊り込んでいた三名の宿直教職員を集め、監禁後、正門、西門をバリケード封鎖、その後、事務室、講堂を封鎖していった。三名の教職員を解放したのは七時すぎのことであった。教職員が主体となって、このバリケードを解除したのは十時すぎ、その後教授会主宰の全学的集会がもたれたが、スト実の集会介入によって粉碎された。

授業再開

九月二十九日のストライキ突入以降一ヶ月以上経過し、大学設置基準による年間必要開講時数から逆算すると、十一月中旬にストが解除されない限り、卒業予定者を年度内に送り出すことは不可能な事態となってきた。学生の署名要求によってようやく開かれた学生大会も三日間にわたる議論をしながら結局ストを終了させることが出来なかった。ここにいたって、一九六九年教授会と学生との相互信頼回復を前提として成立した団交確約精神にもとづいて、「学生大会の決定は、学生大会の決定によってしか変更できない」という基本原則を求め続けてきた教授会も現実の事態の重大性の前に、従来の基本姿勢に反する方途を採択せざるをえなくなったことを自己批判しつつも、ストライキの内実はなくなったとして、十一月二十日授業再開を宣言し、二十四日午前十時より、授業再開ならびに移転事業の現況について説明する全学的集会を開催することにした。ところが、二十四日全学的集会を予定していた時間、場所でスト実側は学生大会を開催し、ようやく五十七日間にわたるストライキの解除を決議したのである。授業再開後、年明けて一月二十五日学生は学生大会を開き、理事会に対する団交権を確立したとして大会決議に基づき学園常任理事に対して、「移転」に関する団交を要求したが、理事会は「今まで団交に応じたことはないし、今後も応じる姿勢はない」として団交は拒否し、常任理事は「全学集会」として、学生に対応するということである。四月二十二日入学式当日全学協会の学生が挙式最中の会場に乱入し、山田無文学長につめより「常任理事を団交に出席させる」旨の確約をさせた。全学協会は、この確約書を基に常任理事に団交に応じよとの通達を五月四日に出し、これに対して常任理事は、「学長の厳命により、異例のことであるが今度の団交要請に応ずることとする」と返答して団交開催に向けての予備折衝を開始した。常任理事側の予備折衝委員として企画室長と四月よ

り新たに就任した前中学生部長があたり、団交の方式として従来、教授会と学生との間で培われてきた方法（イ、議長団は学生があたる。ロ、双方より二名ずつの議事運営委員を出す。ハ、団交開催にあたっては全学生数の六分の一の出席を必要とし、議場内数が全学生数の十分の一になれば流会）を提唱したが、定員数の問題について全学協準は拒否、折衝はこの一点に関して平行線をたどり、遂に全学協準は常任理事と、定足数の問題に関して直接交渉をもちたいと主張した。これが入れられて双方五名ずつ出席して五月十六日正午から一時迄の間、直接交渉がもたれることになった。しかしながらこの交渉も決裂、全学協準は途中で団交切りかえ宣言をし、団交に入ろうとして事態はもつれ、五時頃に至って機動隊が導入され、学生二名が逮捕されるという騒ぎになったのである。

この後は、学生側は五月二十日に緊急学生大会を開いたが、「今回の団交を拒否、警察権力導入、二名の学友を権力に売りわたしたことに對して、満身の怒りで抗議し、不当逮捕された二名を奪還するまでストライキ斗争で斗い抜く」といった決議案を審議することさえ否決されたと伝え聞いている。

一方、教授会は、一九六九年以降の団交精神の破綻を確認し、過去八年間にわたった処分権の凍結を解除することを決議し、それまでの公開であった教授会も今後一切非公開で行なうこともあわせて決議し、今日に至っている。

白雲寮の移転と山越寮の誕生

一九七七年四月、学生部長が大学の総合移転の一環として早速にも取り組まねばならない問題として残されていたのは、白雲寮の移転問題であった。

この問題については、この年から学生部委員会の編集・発行で出されるようになった学内広報で「寮の顛末」と題して、時々資料と共に詳細に報告してあるが、かいつまんで記してみる。

理事会は、大学移転と共に白雲寮を旧校舎とともに妙心寺に売却し、代って新たに右京区太秦開日町二十山越東

町二十六に鉄筋コンクリート二階建一棟（一室二名、収容二十五室、各室ベッド、押入備品付）の新男子寮を建設した。

学生部長は就任して早々の四月九日、白雲寮談話室で、白雲寮寮生の代表である自治運営委の学生と、白雲寮移転についての交渉をもった。これは、前任者の学生部長が苦勞して敷いてくれた路線の上に、そのまま乗ったものであった。席上学生側から新寮でも白雲寮の時と同じように学生の自治を認め、入寮選考権も学生にあることを確認できるなら、移転交渉に応じてもよいし、新入生のためにも早急に移転作業を開始させて欲しいと要求があった。四月二十二日入学式での騒動のあった日の午後、大学と白雲寮との間で確認、確認書（新寮の学生自治を認めることを確認する。新寮の入寮選考、運営のいっさいを、白雲寮自治運営委員会に認める。これを前提として花園大学男子学生寄宿舎管理規程、同施行細則について交渉協議を行なうことを確約する。）が交され、四月二十五日には新寮の鍵、備品の一切が寮運営委員会に引き渡された。

四月二十九日より大学の旧学舎から新学舎への移転作業が本格的に始まり、五月二日には学長名で「五月八日をもって旧学舎を全面閉鎖する」との告示が出、それをうけて「五月八日午後五時をもって、大学のガス、水道、電気を止める」という内容の事務長通達が出た。ところが五月六日白雲寮寮生が「寮に人が住んでおり、現に電気の使用料も自分達が払っているのに、電気、ガス、水道をきるとはどういうことか」と問うてきた。これは、予想外の問いかけであった。白雲寮寮生全員が移転に同意したからこそ、四月二十二日の確認確認書が交され、基本的話し合いがなんにもついてない、まさにその段階であえて寮生の要望に應えて、新寮の鍵、備品一切も寮運営委員会に引き渡していたので、とっくの昔に移転作業を完了し、無人の館になっている筈の寮に五月八日を過ぎてもまだ学生が残っているかもしれぬとは、まったくの驚きであった。既に新寮へ移転した寮生もいるのに、なおかつ白雲

寮に残留している寮生が居る理由を問うたところ、移転済みの者は、寮費、寮母の問題でいかなる結論が出ようとも納得している者であつて、まだ残っている寮生は、その結論が出ないうちは移転出来ないということであつた。そこで五月八日、(1)大学は、新寮に寮母をおきたいと希望しているが、寮自治運営の了解が得られないかぎりおかない。(2)寮費については、白雲寮在寮生であつて新寮に移る者については、既得権を認める。(3)話し合ひは、今後とも継続していくという三項目からなる提案を行なつて、移転作業の即時完了を要請した。

五月九日開講式、十日、十一日新入生歓迎祭、十二日より授業開始、十五日落成式とあわただしく時が過ぎ、五月十六日、改めて早急に移転を完了するよう通告を出した。ところが、この日既に述べたような騒動があつて、この日までずっと一貫して寮移転の話し相手であつた当の学生が逮捕されてしまい、話し合ひのもつて行き場もなく困っていた所へ、五月二十四日寮生の方から新寮の方へ全面移転を申し出てきた。六月七日、(1)白雲寮寮生の新寮への移転を昭和五十二年六月十日午後十二時までに完了し以降旧校舎への立ち入りを厳禁する。(2)新寮の学生自治を認めることを確認する。(3)新寮の入寮選考、運営のいっさいを白雲寮自治運営委員会に認める。これを前提として花園大学男子学生寄宿舎管理規程、同施行細則について交渉協議を行なうことを確約する。(4)寮母については、寮自治委員会の了解が得られないかぎりおかない。(5)寮費および光熱水費については、その既得権を認める。但しその対象は昭和五十二年六月十日現在新男子寮に入寮している者だけで、その事実確認は、自治運営委員会の名簿提出による。(6)話し合ひは、今後とも継続していく。といった内容の確認、確約書を交し、寮生は全員白雲寮から新寮へ移転していった。新寮は学生によって「山越寮」と命名された。

最 後 に

大学移転後はや、二年経過した。旧校地に較べて三倍の広さをもつ現校地では、教室や研究室、図書館なども立

派になり、校地内には以前なかったグラウンドやコートも出現した。随所に樹木があり、芝生も増えてきた。しかし今もなお、時として旧校地の方が良かったという声を耳にすることがある。「学生にとって移転によって本当に大学が良くなったのか？」これが全学協進をはじめとする学生達の投げかけた問いであった。これに対して大学側は、どの程度応えてきただろうか。容れ物の方は、徐々に整備されてきているが、教学の中身はどうだろうか。マスプロ化はしない。小人数運営の講義や演習の体制を維持していく。学生と教職員との密接な人間関係をこれからも大切にしていきたい。これが移転に際して教授会が学生に約束したことである。

花園大学は、花大生に対して何をしてやることが出来るのか、これからも考え続けて行きたい。

第三節 移転後の花園大学

(芳沢勝弘)

機構の一部改革

移転後の花大は旧体制の清算とともに始まった。この年（一九七七年）四月、前年来の反省に基づいて新しい制度が発足した。新たに任期二年の教務部長が設けられ、初代教務部長に小林円照助教授が就任した、学生部長には前中一晃助教授が就任したが、学生部長が当然職理事として理事会に加わることは今年より廃止され、代りに教務部長が当然職理事となることになった。

一方、教授会構成も変更され、総務部長及び各課長は教授会員からはずされることとなった。数年来主張されて

来た「教学については教員のみによつて運営すべきである」という主張の実現であつた。また、当局に各学科主任を加えた構成の評議会も、その活動が不活発であつたため、メンバーは執行部と、執行部から委嘱された教職員による構成に変更された。評議会は主として大学運営上の重要事項を審議することとなり、従来、すべての問題が教授会で審議されるという傾向を避ける道が開かれた。

「団交体制」の破綻宣言と処分権の凍結解除

突如として起つた総合移転は、文学部開設以来の花園大学のあらゆる局面における諸矛盾を表面化させた。一連の移転反対運動によつてひき起こされた諸問題には根本的な解決がつけられぬまま、諸矛盾を包摂して新キャンパスへの空間的移動が行われた。移転反対を唱える学生も、そのまま新キャンパスへ移動していた。五月十五日には盛大に移転記念式典が行われ、翌五月十六日には全学協準と常任理事とがそれぞれ代表を出して、団交のための予備折衝が行われた。しかしこれも決裂となり、全学協準のメンバーが会議室に乱入して、常任理事を監禁し暴行を加えたため、大学当局は機動隊を要請して学内に導入しこれを排除した。(第三章第二節「移転をめぐる学生と教授会」参照)

一九七六年十一月十九日、学生のストライキ続行中に授業再開を決議し、翌二十日「団交体制の苦渋にみちた再検討」という声明を出して以来、一九六九年の団交確約書に基づく教授会体制の矛盾に教授会自らがメスを入れることは未だされていなかったのであるが、この外部権力導入により教授会は否応なく、その再検討を余儀なくされることとなった。学内問題の解決のために大学自らが外部の権力を導入することは断じて行わない、というのがこれまでの花園大学教授会の基本方針であつたからである。

五月十六日、二十三日、三十日の三回にわたつて開かれた教授会では、この「団交体制」の再検討にむけての論議がなされた。そして、三十日の教授会において、一九六九年の団交において交わされた確約書を廃棄することが

決議された。決議にいたるまでの要旨は次のとおりである。

・ 団交後四、五年は確約書の精神を守り、それを貫徹する努力がなされて来たが、一九七三年ころから次第に空洞化がはじまった。それは教員各人の主体的努力が欠如していたといえるが、一面では教員の新陳代謝も否めない要因の一つであった。

・ 処分権に関しても、いわば教授会が積極的に不行使の姿勢をとって来たというより、むしろそういう問題に直面することを避けて通って来たのではないか。

・ かつての団交当時は学生も教員も一致して大学立法に反対するという共通基盤があった。しかし、今では、移転反対運動を通じて明らかになったように、学生は教授会を敵対関係としてとらえ、「非和解的闘争」を展開して来た。団交精神の基礎には学生と教員との信頼関係があったのであるが、今ではその基盤が失われている。

・ 本来、処分権不行使の前提として「大学自らの手で外部権力を導入しない」という大学自治の大原則があった。今回の事件では、結果的に教授会は何の抵抗もなく外部権力を受け入れることになった。教授会は最早、団交精神を主体的に守る意志も能力も喪失している。

これと同時に、「教授会公開の原則」についても再検討された。教授会の公開は、本来、団交で確約されたものではなく、「団交精神」を尊重して、教授会自らの意志で公開して来たものであった。当日の教授会は、この問題の討議をするに当り、「公開・非公開の討議は公開の教授会で行なうべきである」として教授会を公開で行なった。しかし、学生の傍聴者は一人もなかった。議論の末、教授会員一人一人が自ら意見を述べて採決を行なった。その結果は、「公開すべきである」が五名、「場合により非公開とする」五名、「非公開とすべきである」二十一名、「保留」三名、であった。

この結果を声明文にして学内に公表するために、特別小委員会が組織され文章の検討にあたり七月四日、次の声明が学内に公示された。

公 示

花園大学教授会は、一九六九年の大衆団交における確約書のうち、「教授会は、学生に対して、今後管理者としての一切の処分を行なわない。」という事項の破棄を宣言する。

道義性と論理性とを貫徹しつつ、全花大人が新たな花大像を摸索すること、これが花大の団交精神であった。団交裡に昂揚したその精神は崇高であり、尊重すべきものであることは、われわれ花大人の共通認識であった。しかしながら、さまざまな試みにも拘らず、団交精神は、期待される豊かな花大像を結実させ得なかった。団交によって切り開かれた地平と、その精神の実現のため、相互の信頼を深めつつ、不断の緊張に充ちた場を具現する地道な努力を、われわれは怠ったのではなからうか。

学生の言い分はしばらく措く。

現在の閉塞し、荒廃した相互の關係の、その責任の多くを教授会が負わねばならぬことは自明である。団交精神を維持し得なくなつたことを、教授会は、深刻に自己批判するものである。

教授会は、団交精神の破綻を確認し、去る五月三十日の公開教授会で、過去八年間にわたつた処分権の凍結を解除することに決議した。なお、今後、教授会は一切非公開で行なうことも、あわせて決議した。

当面、教授会は、学園の存立にとって最高の保障であるべき「教育・研究活動のための学内秩序」を著しく乱

すものについて、処分権を行使する。

一九七七年七月四日

花園大学教授会

かくして、教授会は一九六九年以来の「団交体制」の破綻宣言を自ら行なったのである。この「団交体制」破綻宣言に伴ない、以後各種委員会において、「団交体制」終焉以後の問題がそれぞれ検討された。

学生部委員会では、処分権を行使するためには、その裏づけとしてかつての「学生心得」のような規範が必要である、との考えから「新・学生綱領」の案文を作成し、数回にわたって教授会に提起した。しかし、重要な問題であるため慎重な審議を要する、とのことで、原案は再三にわたって持ち越され、結局は十分な討議を経ぬまま立ち消えとなった。

教務委員会是一九六九年団交で確約した「出席制度の廃止」を再検討したが、制度としての復活は行わず、教員の自主性にまかせる、という現状のままでいくことを、七月二十五日の教授会に報告し、了承された。

図書館委員会は、図書館の管理運営に学生の参加を認めた確約書十を検討した結果、次の声明を教授会に報告し、教授会はこれを決議した。

一九六九年九月二十四日付団交確約第十項について

図書館に関する一九六九年九月二十四日付団交確約第十項は、学生図書委員の参加を見ないまま年月を重ね、すでに、現状にそぐわぬものとなってきている。

教授会としては、これ以上「図書館委員会」を暫定的性格のまま放置することは不可能であると判断し、今年度限りでこの確約事項を破棄する。新年度以後は新たに制定される「図書館規程」に則って、教授会選出の「図書

委員会」が図書館の運営および図書資料の利用等に関する必要事項を審議していく。

なお、団交後設けられた学生の希望購入予算は、共同研究室用図書費に活用され、それをめぐって各学科学生、教員の意見交換がはかれるという慣行が生れつつある。

教授会はこの慣行を尊重し、今後も図書選定にあたって各学科ごとに学生の意志が反映できるよう努力したい。

一九七八年三月二十七日

花園大学教授会

一方では、教授会の非公開に伴ない、大学・教授会からの情報を学生に伝達し、また学生の意見を取り上げる場として「花園大学学内広報」が発刊されることになった。編集には学生部委員会が当り、年に四回程度、発行されることになった。

山田無文学長から大森曹玄新学長へ

年明けの一九七八年一月七日、妙心寺派管長選挙の結果が判明し、山田無文学長が妙心寺派管長に選出された。佐野常任理事は直ちに妙心寺派と折衝し、三月十五日の卒業式までは無文老師が学長を兼任され、二月十六日から三日間行われる後期接心の指導にもあたって頂くよう要請した。

一方、大学執行部はこれを受けて一月十八日、臨時教授会を招集し、「学長候補者推薦規程」に基づき、学長候補推薦委員会七名を選出した。そのメンバーは、土岐武治文学部長、佐野大義総務部長、小林円照教務部長、桑原公德教授、桐田清秀助教授、岡田徹講師、国友憲道事務長、であった。また、教授会は学長候補者の基本条件として、次の四項を確認した。

一、臨済宗の僧籍にあって、①師家分上の者、もしくは②学徳兼備のもの

二、大学の教育・学問に理解のあるもの

三、学長職に専念できて、週に四日は登学できるもの

四、一期四年であるから、少なくとも二期八年間は勤められる健康と年令のもの

二項については奇異な感を与えるが、これは「不立文字」の禅を標榜する本学ならではの事情があったのである。

推薦委員会はこれに基づいて活動を開始した。何しろ、三十年間、学長の更迭がなかったため、現行の「学長推薦規程」は一度も運用されたことがなく、現実にはこれのみでは不備であった。そのため、先ず「学長候補者推薦実施要綱（選考委員会内規）」を作成し、教授会の承認を得た。その後、二月、三月と多くの候補者について検討を加え、三月上旬、最終的に三名の候補者が決定された。

三月六日の教授会では、推薦委員会から審議の結果が報告されたのち、教授会での審議の方法が議論され、

一、推薦委員会のつけた優先順位に従い、候補者一名ずつ報告し、教授会の信任投票を行う

二、推薦委員が決めた候補者を同時に報告し、教授会の投票によって選出する

の二方法について採決した結果、二〇票対一〇票で一の方法が採択された。このため、推薦委員会は第一候補として大森曹玄老師を報告し、教授会の信任を得たのである。

三月八日、推薦委員七名は早速、東上して、大森曹玄老師に面接し、学長就任を懇請したところ、快諾のご返答を得て、ここに大森曹玄新学長が決定したのである。

土岐武治教授、文学博士号受領

一九六九年、文学部草創期に就任されて以来、国文学科主任教授として本学国文学科を築いて来られた土岐武治教授は、論文『堤中納言物語の成立の研究』によって、二月二十八日、先生の母校立命館大学大学院より文学博士

の学位を授与された。先生は学園紛争の年に本学に就任、以来、学科主任として国文学科の基礎を固め、「花園大学国文学会」を組織される一方、図書館長一期、文学部長二期をつとめられた。先生の東北弁、夏の半ズボン姿の研究室通い、かつて立命館高校時代に「熱」と譚名されたといわれる熱血漢ぶりは、本学の名物である。その薫陶を受けた卒業生の数は多い。土岐教授は一九七八年三月、停年退職となったが、引きつづき特任教授として国文学科の教学に加わって頂くことになった。

移転直後の大学のムード

一九七八年、移転から一年を経て一連の移転紛争にまつわる事後処理もようやく型が付きかけた。しかし、教授会を中心とする全学には「疲れ果てた」というムードが充満していた。余りにも突如として起った移転のためか、死にものぐるいで移転を完了してみると、まだ緑の少ない白々としたキャンパスは学生にも教職員にもなじみにくいものであった。「旧校舎はよかった」との感慨が多く聞かれた。

学生生活は一応平穏に戻った。しかし、この年京都の各大学には「ネズミ講」と「マルチ商法」との嵐が吹きあられ、本学学生からも被害者が出た。かつては学内学生運動の対策と処理に追われるのが職務の中心であった学生部長は「ネズミ講」や「マルチ商法」に対する注意を再三にわたって促した。文学部開設以来、徐々に進行して来た花園大学の変質が、総合移転を契機に一挙に学内のあらゆる局面で表面化してきたかのようであった。

しかし、学生も次第に「広い」新キャンパスになじみ、グラウンドではスポーツに興ずる姿が見られるようになった。それはかつては見ることの出来ない光景であった。一方では、第一期緑化計画が進められ、キャンパスもようやく落ち着いた風景に変貌しつつあった。

学生相談室の発足

この年から学生相談室が正式に発足した。前年度来、学生相談室準備委員会を中心として行ってきた積み重ねの成果であった。学生相談室は月曜日から土曜日までの毎日開設され、全教員が交替で相談員として詰めることになった。また、相談にあたる教員を対象にして、学生相談のための研究会が外来講師を迎えて、前後二回開催された。

就職課開設

従来、就職に関する業務は学生課でとり行われて来たが、この年から多年の懸案が実現して新たに就職課が開設された。就職課長には国友憲道事務長が兼任としてあたることになった。かつては宗門後継者が学生の大半を占めていたため、大学当局も学生自身も、「就職問題」に対処する実感をもち得ないのが本学の実状であった。大学当局も「学者とサラリーマンは作らない」と公言していたものだった。しかし、年々、学生数が漸増する一方、経済情勢も減速期に入り、本学においてもようやく就職問題がクローズアップされるに至り、遅れ馳せながら就職課が誕生したわけである。

クリニックセンター開設

四月には、先年来社会福祉学科によって準備が進められていた「クリニック・センター」(仮称)が完成した。文部省の研究設備助成七〇〇万円余を得て、「心身障害児(者)の治療教育研究のための記録分析機器」が導入された。今後の活用と発展が望まれている。

教学プロジェクトチームの発足と教学特色化への試み

あわただしい総合移転に伴う諸問題の内あるものは整理され、あるものは鎮静化していき、学内もようやく落

ち着きを取り戻して行く中で、「移転後の教学の充実」がクローズアップされてきた。かつての旧キャンパスでは教学問題を検討推進するに際して、常に空間的狭隘さが絶対的な制限となっていた。移転後研究室は一挙に二倍に増強された。その他の諸施設もかつてとは比較にならないほど充実された。このように「器」が整備された今、その中味である教学の充実を全面的に検討する必要があるというのが、その理由であった。こうした動きは移転問題の発生と同時にあったのであるが、移転後、評議会を中心にその検討がすすめられ、九月二十五日の教授会には教学プロジェクト・チームの発足についての原案が提出された。その骨子は次のとおりであった。

一、構成

学長が委嘱する五名の教職員により構成する。更に必要に応じ、関係教職員を加えることがある。任期は二年とし、各種委員（評議員は除く）からはずす。

二、組織の性格

学長の諮問機関として、教学全般にわたる問題点の発掘と方針の樹立を行ない、必要に応じ、各学科・事務局等に調査・報告を求めることができる。また教学プロジェクト・チームの報告・答申はその都度教授会に報告するものとする。

三、検討する内容

① 建学の理念・学是の確認、及びその教学内容への発露の点検

② 財団法人禅文化研究所の吸収合併について

本件は①と深く関連する事項であり、これを如何に吸収するかが、本学の発展に決定的な要因となる。

③ 将来の学科構想についての検討

③ 研究体制の抜本的検討と条件の改善

この教授会で正式にその発足が承認されたが、実際に活動を開始したのは十二月に入ってからであった。教学プロジェクト・チームは直ちに諸問題の検討を開始し、とりあえず、一九七九年度から次の二講座を新たに開講することを決定し、実行に移されている。

一、仏教学特別講座「仏教の思想・文化とその周辺」

隔週毎に二コマ連続で開講する。講師はその都度外部から迎え、前半は講演、後半はパネル・ディスカッションを行なう。各学科の選択科目とする。

二、総合講座「中国文明と日本」

テーマ毎に学内外から適任者を講師に委嘱して、学術講演の形で行なう。

その他、懸案の重要問題が山積しているが、今後の教学プロジェクト・チームの活動に期待が寄せられている。

興学基金計画の凍結解除

教学プロジェクト・チームの発足と相前後して、一九七六年、総合移転問題の勃発に伴ない一時凍結されていた興学基金計画が再び検討されることになった。本学の総合移転は財政的には、旧校地売却代金の七億円を元にして、その他は私学振興財団からの借入金十一億余円、同窓会を中心として協力を得た学債によって遂行されてきた。移転後の課題の第一はこれらの借入金を順調に返済していくことであった。

それと同時に、移転によって飛躍的に整備された教学環境に対し、本学独自の教学を更に一層展開していくための財政的裏づけが要請されてきた。そのため、「花園大学興学基金計画」の構想が再検討を加えた上で復活されることとなった。一九七八年十一月二十二日、翌年二月二十八日の二回にわたり、同窓会役員合同協議会が開催され、

協力が得られた。目下、その実施の詳細について事務的検討が加えられているところである。興学基金の再発足の趣旨は次のようなものであった。

花園大学は新制大学として再出発以来、明昭和五十四年で満三十周年を迎える。また昭和四十一年に仏文学部を文学部に改組してからすでに十二年を経過した。この間、花園大学は質量共に発展を続け、ついに昭和五十二年には総合移転により新キャンパスを得るに至った。殊に、文学部設置以降の花園大学の歴史は社会一般の私立大学と同様に、極めて小規模であるとはいえ、量的な拡大が大きな特徴であったといえよう。

多くの私立大学は、この成長過程で一般大学化への道をひたすらに走り、規模の拡大を画り、国立大学の亜流としての画一化した教学を目指してきた。その結果、大学生数のみが増え、私立大学の教学は空洞化され、また自主的で創造的な建学の精神は稀薄化されてきているのが現状である。

このような一般状況の中で、花園大学は規模の拡大も最小限にとどめ、苦しい財政の中で、各方面の御協力を得て、総合移転を成し遂げて来たのであるが、今後の花園大学の最大の課題は、他私立大学に追隨することなく、本学独自の建学の精神を踏まえた特色ある教学の展開によって、世界に比のない本学の社会的存在意義を高めていくことである。

本学においては、文学部設置以降、殊に一九六九年の学園「紛争」以降、「建学の精神をどのように具体化していくか」について幾度となく論議がくり返されて来たが、総合移転の実施と共に、この問題はますます緊急度と重要度を増して来た。新キャンパスの誕生により物理的な教学環境が準備されつつある今こそ、ややもすると抽象的論議に終りがちな建学の精神論議に終止符を打ち、建学の理念に新鮮な生気を吹き込み、総合的な視野から花園大学教学の特色化を画る段階に達したといえよう。

移転後、花園大学内では各方面においてこうした論議がにためられて来たが、このほど「教学プロジェクト・チーム」が編成され、新キャンパスという「仏」に魂を入れる作業が開始されつつある。しかしながら、内容の充実を画するためには、それに対応した財政措置が講じられなければならない。興学基金計画がそれである。

後援会の発足

本学には一九四六年以降、在学生（Ⅱ寺院子弟）の父兄（Ⅱ授業師）の団体である「師僧会」があり、教職員の研究・研修の補助、学生の厚生面への補助を行ない、ささやかながら後援活動を行なってきた。しかし、これも一九六五年ころになると、立ち消えとなっていた。それは、本学同窓会の会員と在学生父兄とが多くの場合、重複することが多かったためでもあり、後援活動は全面的に同窓会に依存していたためでもあった。

しかし、文学部を開設して以来、在学生の質量が変化してくるに従って、新たな構想の下に「後援会」が組織されるのが各方面から望まれていた。

こうした中で、一九七九年一月十一日、在学生父兄有志が京都・花園会館に寄り集い、後援会発足について協議を重ね、同日出席者が世話人となって発足に向けて準備がすすめられた。次いで一月二十七日、同じく花園会館において、全国各地より馳せ参じた発起人三〇数名によって、後援会会則・活動計画案が承認可決され、正式に発足することとなった。初代会長には、兵庫県の門脇良光氏が選出された。

以来、門協会長を中心に後援会の積極的な活動が開始され、今日に至っている。今後、同窓会と並んで後援会が、文字どおり大学の両輪となつてご協力頂けるものと学内各方面から期待を集めているところである。後援会の会則・役員は次のとおりである。

花園大学後援会会則

第一条 本会は花園大学後援会と称する。

第二条 本会の会員は次のとおりとする。

正会員 本学在学生の父兄

特別会員 本会の趣旨に賛同する者

第三条 本会は事務所を花園大学内に置く。

第四条 本会は建学の精神に基づき大学の事業を後援し、併せて子弟の教育に資することを目的とする。

第五条 本会は前条の目的を達成するために必要な事業を行なう。

第六条 本会の役員及び任務は次のとおりとする。

会長 一名 本会を代表する。

副会長 二名 会長を補佐し、事故あるときは、之を代理する。

理事 若干名 理事会を構成する。

監事 若干名 本会の会計を監査する。

顧問 若干名 会長の諮問に応じる。

幹事 若干名 庶務・会計を処理する。

第七条 役員は次の方法により選出する。

理事は会員中より之を選出し、会長及び副会長は理事会において選出する。

顧問は花園大学学長、各部長を推し、その他理事会の決定により推戴することができる。

幹事は会長之を委嘱する。

第八条 会長・副会長の任期は二年とする。但し再任を妨げない。理事の任期は学生の在学中とする。その他の役員は任期は二年とする。但し、再任を妨げない。

第九条 本会の会議は、役員会、理事会および総会とし、役員会、理事会は委任状を含め定数の過半数の出席を必要とする。

② 役員会は、会長、副会長、顧問、幹事をもって構成し、理事会への提出議題を審議するものとし、会長が随時招集する。

③ 理事会は会長が必要と認めたとき招集し、予算、決算、事業計画、役員を選出、会則の改正その他重要事項につき審議、決定する。顧問、幹事は理事会に出席して意見を述べることができる。

④ 総会は会長が必要と認めたとき招集する。

第一〇条 本会の経費は会費及び寄付金をもってこれに充てる。

但し、会費以外に必要な場合は、総会に諮り臨時に徴収することができる。

第二一条 本会の会費等は次のとおりとする。

① 入会金 三千円

② 会費（年額） 七千円

第二二条 本会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

付則 本会則は昭和五十四年一月二十七日より施行する。

後援会役員一覧

会長 門脇良光（兵庫）

幹事		理事		顧問		監事		副会長	
小佐々隆昌(長崎)	家永重遠(広島)	田所涉(岡山)	田中紹賢(奈良)	古川源造(兵庫)	岸田正昭(大阪)	正木義完(京都)	岡田寿之(京都)	大谷清三(滋賀)	細川宏導(岐阜)
林義泰(長野)	花岡祥博(埼玉)	芳沢勝弘(企画室長)	佐野大義(総務部長)	桑原公德(文学部長)	大森曹玄(学長)	福山義忠(京都)	中光明(愛知)		
八橋紹信(愛知)	岫順史(富山)	細川俊彦(会計課長)	国友憲道(事務長)	鷲阪宗演(学生部長)	小林円照(教務部長)	中嶋泰洲(滋賀)	牧本典雄(広島)		
村山戒舟(岐阜)	雲山和隆(滋賀)	安楽島龍仙(京都)	山田甲子郎(京都)	鈴木祥介(大阪)	倉内実道(兵庫)	釈野晨也(和歌山)	佐崎俊道(広島)	片桐玄弘(香川)	岐津禅忠(大分)

宮崎清士（大分）

教員の新陳代謝

一九七八年度を以って本学を退任した教員は例年になく多く六名であった。梶山雅史講師は八月三十一日付で、山田重正教授、清水茂講師、横井清助教授、入矢義高教授、宮岡薫助教授はそれぞれ、三月三十一日付で退任となった。

山田重正教授は一九四九年、新制花園大学の発足と同時に就任され、満三十年間、保健体育を担当されると同時に校医も兼ねて頂いた。清水講師は一九六七年以降、本学の体育実技を一手に担って頂いてきた。

横井清助教授の退任は花園大学の一時期の終焉を象徴するものであろう。横井助教授は一九七〇年、学園紛争直後に就任されて以来、常に、花大改革の中心的存在であった。一九七二年、教学体制研究委員会から出された「十項目の問題提起」、一九七四年度版大学案内のメインコピー「花園大学とは」そして入試改革に向けての入試委員会からの文書等、横井助教授の筆になるものは多い。明晰な論理・さわやかな説得力・鋭い問題剔出。「花園大学の仕掛人」と異名を取る所以であった。

図書館書庫・小講堂の新築と新制大学昇格三〇周年記念式典

総合移転の際より、なお二期工事として図書館書庫の増築・及び小講堂増築が計画されていた。大学の隣接地二六七平方米を購入して、書庫（二階建）を新築すると共に、現図書館三階に小講堂を増築するというものである。総工費一億二千万円余、内五六〇〇万円を私学振興財団から借入した。工事は十一月に着工、四月初旬には完工し、小講堂には京都・江里仏師の作による聖観音木像が本尊として安座された。

一方、学内の緑化工事も先年来、数度にわたって行われ、キャンパスには巨木が聳え、ようやく学園らしい光景

が現出してきた。本館前の芳徳苑中央には、山田無文名誉学長を記念して、高さ十二尺に及ぶ大灯籠が据えられ、「無文灯」と命名された。

風薫る五月二十五日、新装なった図書館小講堂において、来賓、同窓会関係者、後援会関係者、現・旧教職員三百数十名の参加を得て、「新制花園大学昇格三十周年記念式典」が行われた。

第四節 入試改革の経緯

(芳沢勝弘)

文学部設置以降の花園大学で、教職員が最もエネルギーを投入してきた作業の一つは、入試改革であった。入試改革については、既に「入試改革から何が生まれるか?」(桐田清秀講師一九七六年 INFORMATION 所収)、「花園大学文学部十年資料集」(一九七七年十二月、企画室編)等に述べられているが、ここに、学生募集から入試改革に至る経緯を大略書き留めておくこととする。少し資料の引用が長くなるが、いずれも、「ユニークな花大づくり」を摸索しながら、学内の情念を注ぎこんできた一時期の「花大マニフェスト」であると思われるので、敢えて引用することとしたい。

●一九七二年度(昭和四十七年度)

この年の三月から活動を開始した教学体制研究委員会は、五月八日の教授会において「十項目の問題提起」を行った。そのうちの項目が「入試選抜体制の再検討」であった。その内容は、

① 推薦・一次・二次の三段階をとっている入試の根本的な再検討と改善

② 入試取扱い事務をめぐる学内の機構上の問題点、とりわけ「責任」体系の点

③ 入試問題作成のための組織編成がない（現在は個人責任になっている）

④ 学生募集との関連

であった。

①は②と関連するが、当時、文学部が設置されて既に六年目に入っていたにもかかわらず、本学への入学志願者は極めて少なく、教学的にも経営的にも深刻な事情があったことを反映している。一九七二年の志願者総数は三九一名、合格者総数は二八二名、競争率は一・三九倍であった。

②は主として入試を取扱う事務局体制に対する改革の提起であった。当時は、学生募集に関しては総務課、入試受付業務は学生課、入試実施については教務課、と三分されていて、能率も悪く、総括的な責任体系も不明確なままであった。

③作問者の決定は文学部長が行なっていたが作問の基本方針などは作問者個人が決定し、責任を負うシステムになっていた。

これらの問題提起に対する取組みは、しかしながら、この年度内には具体化されることはなく、入試をめぐる諸業務は従来どおりに推進された。委員会としては、学生募集は学生募集委員会が担当し、入試実施面に関しては教務委員会が担当した。この年に学生募集委員会が力を入れたのは『大学要覧』の作成であった。体裁も従来とは異なり、B5版で、意匠にも新しい工夫が加えられたもので、メインコピーは次のようなものであった。

「本学を志す諸君へ」

学長 山田 無文

今日、大学と名のつくものが掃き捨てるほどある中で、諸君が本学に着目せられたことは、諸君一人一人の人生に大きな意義があると思う。それは、近代合理主義に基づく頭だけの学問が、結局あらゆる形で人間を脅かしている現状に鑑みて、本学は、人間性の原点に立ち、そこから新たな世界を創造していく主体的人間を作り上げることを目的とする場だからである。

わが花園大学は、禅の大学として世界的関心を浴び、しかも教授一人に学生十人という塾的教育研究方式を保持している点で、今日大きな誇りを持ってよいと私は信じている。真の学問は、人間尊重の原理に裏づけられなければならない。教職員との人格的ふれ合いの中で真実の自己を研摩し、諸学を探究し、もって君の人生に意味と生き甲斐を持たんとする若人よ、私は君が本学の門を敲かれんことを心より期待する。

「一〇〇年の歴史を誇る学問思索の府、花園大学」

禅を諸学問の根底におき、ひろくアジア文化の本質をあきらかにし、新しい世界の創造に参加しようとする若人の大学——それが花園大学である。

臨済禅の最高学府として、はじめて近代教育を取り入れた学園が、古都洛西の花園に生まれてから一〇〇年、こんにちの文学部単科大学にいたる風雲の歴史は、あたかも我が国の近代化と表裏している。

現代日本の物質的繁栄は、伝統の破壊と思想の混乱をとまなっている。明治以後の日本人は、われわれの祖先の生き方を支えていた瞑想と信仰の実践をすてて、ひたすら欧米の科学文明を取りいれることによって、はな

はだしく心のおちつきを失いながら、なおそのことに気づくことすらすくない。

信仰の自由は、日本人の大半を無宗教の白痴とした。国家神道と軍国主義、教育の画一化と急激な産業の向上は、もつとも大切な人間の生命と豊かな心を枯渇させただけである。

我が花園大学は、かく誤った明治百年の虚勢と栄光を反省し、瞑想と信仰によって人間性の原点を自覚し、新しい思想文化の創造に貢献すべく、禅精神を根底にふまえて、正しい人文科学の研究と実践をめざす文学部に、次のような四つの学科を開く。すなわち、常に自己をみつめながら、今日の歴史に即した人間性の生き方を研究する仏教学科、これを明日の社会に応用する技術を得得する社会福祉学科、およびアジアの人文の本質を究明するための史学科と、祖国美を研究の対象とする国文学科の四つの教室は、かならずや、現代の苦悩を解決し、未来を創造せんとする若人の期待を満足させるはずである。

「坐」

禅は、古代インド人が、ヨーガとよぶ精神統一の実習より起こった。ヨーガは、今日もなお若ものたちのあいだに、世界的に広い魅力をもっている。ビートとか、フーテンとかいう自由主義者は、思想としてはたいがいヨーガの仲間である。

禅とヨーガのちがうところは、後者が古くインドに発生して、今日にその神秘的技を伝えているのに対して、禅は仏教とともに早くより中国と日本に伝えられて、この地の風俗や文化と合し、独自のすぐれた精神文化を創った点である。

しかし、かつて偉大な禅の思想文化を生み出した中国は、いまや、西洋の理念による社会主義国となり、多くの日本人もまた明治以来の誤った教育制度のために、宗教白痴の状態にある。

われらの禅学のねらいは、みずから坐禅を実習して、古代インドの瞑想の世界を。わが身にじかに味わうとともに、かつての中国および日本民族のすぐれた文化遺産としての禅思想を評価して、今後の世界のあたらしい思想文化の創造に、参加しようとするところにある。わかい青年諸君に何よりも禅を学ぶことをすすめたい。

しかし、こうした試みにもかかわらず、一九七三年入試の志願者総数は前年度を七%ほど下まわる三六五名にとどまったのである。

●一九七三年度（昭和四十八年度）

前年度に教学体制研究委員会から提起された入試に関する諸問題は、教学面からは手を入れられることなく終わった。そして、この年度の「受験生の減少」という事実は、教学サイドからというより、むしろ経営サイドから「危機」として捉えられたのである。なぜならば、文学部設置以降、本学への志願者数は微増ではあれ、ともかく増えつづけていたし、また、一般的にも全国的大学進学率および各大学の志願者数は急激な増加の一途をたどっていた最中であつたからである。

この「危機」に対応するために、事務組織上の手直しが行われ、学生募集業務を行なう事務係として、総務課に企画係が新設された。後の企画（広報）室の前身である。さらに、一方では、学生募集委員会と教学体制研究委員会とを統合して、新しく企画広報委員会を設置し、事務局組織改組との対応をはかるという案が、当局から提起された。しかし、これは教授会の強い反対で否決され、現実には、教学体制研究委員会は存続することとなり、学生

募集委員会が廃止され、代りに企画広報委員会が新設されることになったのである。教授会においては、この「企画」が何を意味するのかという議論が行われたが、その意味は不明確なまま、ともあれ、入試のうち学生募集面を担当する組織として、企画広報委員会は出発したのである。

企画広報委員会のなすべき任務は、きわめてオフィシャルな広報活動の展開であつた。それにはまず、大学の現状を嘘いつわりなく把握し直した上で、本学の求めるべき募集対象を明らかにすることであつた。すなわち、建学の精神と本学の現実、タテマエとホンネとの関係を洗い出し、その上で現実の花園大学をできるだけ肯定的に捉え直すこと、そして、このような花園大学にどのような学生を迎え入れるのか、という検討であつた。

この作業は、ある意味では、従来の禅を大学の根幹とするというタテマエに対するアンチ・テーゼの提起であつたといえよう。本学の理念は確かに「禅」であるが、内実は果たして充填されているのかどうか。学内諸問題のあらゆる局面において、「禅、禅」とさえ言えば済むように、建学の精神が一種の「かくれみの」的存在になつてはいないか。こうしたタテマエをとり去つたところで、花園大学にはどのような内実があるのか。このような問題を追求する試みであつた。

こうしてできた一九七四年用大学案内のメインコピーは次のものであつた。

「花園大学とは？」

歴史・現況・理想

△まさにミニ大学▽

大学のなまえがやさしいからでしょうか。よくこんな問いあわせがあります。おたくは男女共学ですか、男子も

入学できるのですかね？　こういうことはすぐに教職員のあいだにひろまって、あかるい笑いをよびます。「そういえば、ずいぶんと花やいできたものだ。十年もまえとくらべると、たいへんな変りよう……」と、老教授はつぶやきます。学科によっては、学生の半数が女子学生で占められるようになってきているからです。

花園大学、男女共学、四年制。とはいっても、あらためてみなおしてみると、これはまあなんと小さい大学でしょう。臨濟宗（禪宗の一つ）の巨刹妙心寺の東南隅に、ひっそりたたずんでいます。学生総数八八六人（一九七三年六月現在）まさに「ミニ大学」です。計四二人の専任教員。専任教員一人につき二一人の学生ということになります。教員も職員も、学生の顔となまえをすぐにおぼえてしまいます。

花園大学のおこりは一八七二年（明治五年）の「般若林」の創設でした。臨濟宗寺院の子弟をうけ入れて、りっぱな禅僧を育成する学園として第一歩をふみだしたのでした。京都の人は今でも、花園大学というところ、「ああ、坊さんの学校どすなあ……」といいます。（でもごしんばいなく。今では寺院関係以外の学生のほうが圧倒的に多いですから）その後、歴史をへて一九一一年（明治四四年）に臨濟宗大学、一九三四年（昭和九年）に臨濟学院専門学校となり、さらに一九四九年（昭和二十四年）に花園大学と称するにいたしました。

△へんな大学！！▽

さきにもいいたように、専任教員と学生との比率が一对二であることは、じつは花園大学のいのちである私たちには考えています。大きいマスプロ大学では、教員は学生のなまえをおぼえきれないし、じかにことばも交わせません。教員が多く、学生が少ないことは、「教育」を目的の一つにする大学にとって、またとない好条件であるわけです。この好条件を私たちは、花園大学という名の「ミニ大学」のいのちであると信じこんでいるのです。でも現実はいきびしい。学生をたっぷり集めて、どんどん学費をとりたてて、ゆっくりと安定した「経営」がで

されば、他のマスIIプロ大学のように「発展」するのかもしれない。くるしい大学の「経営」と研究・教育との間で、どのようにすれば「花園大学のいのち」を生かしきることが可能なのか。その道を、まるでバカみたいに私たちは摸索しています。「へんな大学!!」そうです！とてもへんちくりんな大学です。

△人間の真実をたしかめよう▽

「大学紛争」といっても、これから大学受験なさる世代のみなさんには遠いことでしょうか。もうあれから何年もちますから。私たちの大学も、あのころ深刻な「七〇日」を体験しました。そのとき私たちが学生から聞われたこと、その最大の眼目は「建学の精神」のほんとうの意味であり、「建学の精神」にてらしてみても現状はいったいどうか、ということでした。私たちは「禅」の精神を花園大学のあたりまえの大黒柱だと考えるだけで、いたい「禅」の精神と真理追求の学問（科学）との根本的で人間的なつながりの真実にたいして、みずからの力で光を照射するのを怠りつづけていたのです。「紛争」は七〇日間でおわりました。けれども、いちばんたいせつな課題——すなわち「禅」と「学問」とのつながりを「人間」としてきわめつくすこと——は、大学のなかにのこされました。小学校から中学校へ、中学校から高校へ、高校から大学へ——その間の、あまりにも苛酷な、あまりにも非人間的な「受験体制」の「教育」に、さんざんいためたためつけられ、差別されて、ようやく花園大学の門にたどりついたはずの、あのときの学生たちが私たちにぶつけた課題は、はっきりとのこされたのです。意識しつづけると否にかかわらず、私たち一人ひとりが背負わざるをえない課題として議論は、ささやかであれ、こんにちもつづけられています。とにかく小さいキャンパスの中でのこと。たがいに論を交わし、「人間の真実」をたしかめようことでしか「花園大学」のほんとうの発展はないと、私たちは考えております。

△エリートは無用▽

こういうキャンパスに、私たちは若い青春の群像を迎えたいと思います。むろん「受験体制」のエリートはただの一人だって無用。受験参考書の一頁一頁に地獄を見、「教師」による「受験のためだけの教育」の外に自分の大学像を求めつづけ、悩みぬいてきた若い力の数々を迎え入れたいのです。花園という名のこの「大学」が、真にユニークでありうる道はここにしかない。私たちはそう確信しています。一人ひとりが文字どおりの「手づくり」で、じぶんの青春の仕上げをするのです。これまで誰もみつけてくれなかった自分。自分の力でもみつけることのできなかったほんとうの自分。それを再発見しながら――。花園大学は、そういうあなたを待っています。

文字どおり「苦肉の策」で生み出されたこのコピーは、本学のデメリットをメリットへと変える錬金術的效果を果たしたのであった。多くの私立大学があたりさわりのないタテマエのみを打ち出して事足れりとしている中では、本学のこのコピーは、大学案内そのものの新鮮な意匠と相まって、極だって印象的なものであった。しかも、現実の花園大学の根本的諸問題を捉え、含みこんでいるという点で、これから後の花園大学の行方を方向づけていく基本テーゼとなったのである。

学生募集の思い出

芦 谷 信 和

私が花園大学に奉職したのは、昭和四十五年（一九七〇年）四月である。当時は現在の入試委員会に相当する学生募集委員会という名称の委員会があり、私は最初の年、その委員会の一員となった。その仕事のひとつに各地の高等学校を歴訪して、進学指導の先生方にお会いし、本学へ一人でも多くの

受験生をお向け下さるようお願いすることがあった。それでも当時脚光を浴びていた社会福祉学科以外は志願者は少なく、第二志望までの志望学科を認め、例えば私の所属する国文学科なども、社会福祉学科第一志望者の中から、そのおこぼれを頂戴するという、肩身の狭い思いをしていたものである。

私はそれまで大阪の高等学校に勤務していたので、他の委員会に所属してからも、主として大阪方面を中心に、兵庫県・奈良県などを三、四年間連続して毎年廻った。大阪へは十年間の勤務で、当時勤務校以外にそれほど出たことはなかったが、それでも訪問先のいろいろな公私立高等学校でずいぶん旧知の先生方とお会いした。こちらからたずねて行ったこともあったし、思いがけない学校で思いがけない方から声を掛けられて懐かしく談笑したこともあった。そんな有様で割合楽しく高校巡りができたが、当時の花園大学の志願票は受験生の本籍地や、父兄の職業から年収まで記入する様式であって、訪問先の先生方から指摘を受け、委員会で発言して、様式を一新したことなどもあった。志願者も増加し、入試改革の試行錯誤が続けられている今日から見れば、隔世の感であるが、まだつい四五年前までのことである。

学生募集の回想

藤 田 義 光

昭和四十五・六・七年頃、花園大学の学生募集は、まさに手弁当を持って足で稼いだ時代であっ

た。近畿圏を中心に年によって募集の範囲を拡げつつも、主に教員一人・職員一人を一ペアにして、それこそ教職員が一丸となつて、巡回訪問を行なつた。毎年十月頃になると、一人でも多くの受験生をと東奔西走したことが今ではなつかしく思い出される。

その頃の募集のいでたちたるや、片手に募集県下の高校所在地の地図・一反風呂敷に入学案内・募集要項・手みやげに学長（むもんさん）の著書（昭和四十七年は三省堂版花園大学謹製の新明解国語辞典）をぎっしりつめて、高校始業時間八時半から午後四時半までの間に（一日十二・三校訪問）、スチール書架（もちろん進路指導の要項がギッシリ詰まっている）の谷間の一角に通され、ホツとする間もなく進路指導のいかめしい先生と御対面、ときたま出されたお茶をススリつつ、「花園大学は、花園大学は」とやり出すのである。しかし、進路指導の先生の聞くことは決まっています、「文学部だけですか。競争率は。授業料は。寄付金は。男女比は。取得可能の諸資格は等等。（あげくのはては）学長さんはお幾つに、お元気ですなあ……」こちらも学長の偉大さに、妙なところで感心したりしたものである。ある進学率の高い有名県立高校などは、入学案内をパラパラとめくり「花園大学ですか……まあ志望者があればまた」でオワリ。こちらはガックリ、重い足を引きづりつつ、うらめしく校門を出ることがしばしばあった。しかし反面うれしいこともあった。こちらは前もってハガキで何日の何時何分頃学生募集に何う旨連絡しているので、県立I高校へ行つたとき、玄關に進路指導の先生が待ちうけていてくれて「ちようど、おたくの大学を志望する女子学生Aがいるので、授業中ですがちよつと呼んできますので、直接会つて聴いてやってください。その進学指導室でお待ちくださ

い。」という訳で待つているとAさんがチヨコンと頭を下げて入ってきた。こちらも時間の過ぎるのを忘れ、熱っぽく面談したことがあった。Aさんは、めでたく本学国文学科に入学、卒業し今は嫁がれよきママとなられ幸せな日を送つておられると聞く。あのAさんに面談したあとI高校より見た夕ばえの湖面が今も私の臉に生き生きとよみがえり、学生募集の思い出としてさわやかに残っている。

さて、この年は右に述べたような企画広報委員会の活動が直接的原因となつて、本学への志願者数は前年度の二・二倍と、飛躍的に増加したのである。予想外の結果は学内のさまざまな問題に対し波及的效果を及ぼしていくことになった。その一つは、「教学の一環としての入試そのものの捉え直し」であつた。この年の企画広報委員会の総括レポートはこの点について詳しく述べている。

昭和四十八年度企画広報委員会活動の総括ならびに当局・教務委員会に対する問題提起

昭和四十九年三月十一日 企画広報委員会

はじめに

周知のように、本委員会は以前の「学生募集委員会」の任務を継承して、昭和四十八年四月一日付をもつて発足し、学生募集活動の中核組織体をなすとともに、事務担当係の尽力を得つつ、各方面への「学生募集宣伝」のいっさいを展開してきた。

ここに、いわば、内外にわたる「戦闘」としか言いようのなかつた一年をふりかえつて、総括を試みると同時に、貴委員会および当局に対して、重要な問題をいくつか提起し、ご一考を煩したい。この件を貴委員会に提起するのは、一にかかつて、問題が「入試選抜方法」に深く関わりと判断したからであるし、又、当局に

対しては、教学と財政とに深刻に関わるものとしてである。この意図を理解され、以下の諸問題を受けとめて下さるよう切望する。

一、昭和四十八年度広報活動総括（省略）

二、本学における「教学」の理念と、それが直面する現実について

一で示した諸活動は、勿論「一人でも多くの、良い学生を得る」ことに主眼をおいていた。そのさいの本学の「理念」は、

(一) エリートは無用、非凡なる凡人を求む。

(二) 「手づくり」の世界——花大像の打ち出し

が柱となっていたのである。この二本の柱は、本学の「建学の精神」とも通い合うものと考えてよく、事実上、本学の教学の理念を端的に表現するものと思う。私たち委員は、この二本の柱を、次年度へ継承させたく思う。ただ、ここで問題なのは、「エリート」とは何か？「非凡なる凡人」とは何か？「手づくり」とは何か？……について、わかったようできて、しかも未確認の状態である。

私たちは『一九七四年大学案内』の基本線を打ち出したさい、漠然とではあったけれど、次のような理解をもっていたように思える。すなわち、私たちのいう「エリート」とは「受験体制最優先の日本の教育のあり方についていくことができ、事実、有名大学にパスし得る、学力を備えた青年」であった。そして、そのことを前提として、「そのようなエリートには眼を向けていない、学力に偏りがあるうとも、何か自分の中に豊かな才能をひそめている青年」がほしい、ということを打ち出したのであった。「非凡なる凡人」の意味も同列と考えてよいだろう。

正確な測定はむろんムリであるけれども、以上の路線が青年たちの心に何かをもたらし、それが「受験生急増」の事態に多少の影響をきたしたのでは……と私たちは推測している。そして「急増」という現実が、花大の「教学」と「財政」に対し、ある種の深刻な問題をつきつけてきたわけである。いうまでもなく、「財政」にとっては希有のプラス方向の問題であるとみてよいが、たんにプラスというのみならず、「財政」安定策の立案計画について、「次年度以降はどう動くのか？」という、これまで体験したことなかった、きわどい課題を提示している。ここで図にのると、おそらく大変なことになるであろうし、又、妙にいじけた発想に終始すると、やはり「安定化」への飛躍の機をのがすことになりかねない。入試判定をめぐる一連の会議の中で、総務担当理事が示す、不安、喜び、不安……という現象は、そのようなところに根を發していると思われる。

一方、教学の面からすると、これは実に明白である。「小人数の大学」がじりじりと「相当人数の大学」に近づいてきているのみならず、キャンパスの許容量を超えかねない方向がすでに予見されつつあるからだ。それが三〇〇〇——五〇〇〇——一〇〇〇〇となるとは、むろん誰も考えてはいはしない。しかし、一〇〇〇〇に達することは明白かとみられ、ヘマをすれば一二〇〇あたりまでメートルは上昇しかねないであろう。この方向が「手づくり」を謳い、「教員一人に学生三十一人」と叫んできた本学の「教学」にとって、致命的であることは言をまたないと思う。ここに「エリートはいらないよ。非凡なる凡人よ来たれ！」と語ってきた本学の危機の一面が露呈している。要するに、ふだんわれわれが言っている「手づくり」は不可能となるからである。ところで、その「手づくり」の教育の意味も、実は、もう一つはつきりしていなかった。すなわち、「教員が行なう教育が手づくり式」なのか、それとは別に、「学生が己れを、己れの手で手づくりで仕上げてゆく」の意なのか、いったい全体どっちであつたらうか。当委員会の議論は少なくともこの点では稔りきらな

った。前者と後者との関連を、どう考えるべきであらうか。このことは、学生増加現象の中では、一人一人の教員が、学生に対して、今後どのような基本姿勢で臨んでゆくか——ということとも関連しており、いずれはハッキリせざるをえなくなるであらう。

三、学生募集における理念と難関

さて、学生募集の基本理念が上記のところにあったとして、実はむつかしい諸問題が派生してきている。つまり、

(一) 非エリート、非凡なる凡人を求めたい。

(二) 本学学生全体の「学力水準」を高めたい。

という、二つの願いの矛盾である。この矛盾に私たちは当面の間、悩まねばならない。(一)は「学力水準」を高めることと、いろいろな意味で喰いちがうし、(二)はむしろ(一)を度外視することで実現しうるからである。事実、ある面接委員は、一次受験生の一人から、逆にこの矛盾点をつき刺すような言を聞かされて、心中大いに動揺したという。その話を聞かされた当委員会も少なからず、動揺したのである。

私たちの言う「難関」がこの矛盾を意味していることは言を重ねる要もないが、さらに言うならば、(一)の理念を貫きつつ、しかも(二)を実現し得る道があるのか、ないのか、が問題であり、あるとすれば、どういう道か——ということである。そして、企画委は、「そのような道はありうる。それは入試方法・入試問題作成方法の改善である」と一応判断した。

志願者の急増現象は経営・教学の両サイドに等しく、喜びと安心感とを与えることになったが、この学内の安心

ムードに警鐘をならし、本学独自の問題をさらに掘りおこし、捉え直し、前向きに検討を進めていこうとしたのが右の「総括レポート」であった。企画広報委員会はさらに、入試全般に亘って、鋭意、研究立案すべき教務委員会が、積極性に欠け、ややもすると問題処理機関たる体質を克服しようとしなかったのではないか、そして、学生募集についても事務当局にまかせきりではなく、学募の理念に関して、もっと敏感であるべきではないか、と教務委員会に対して問題提起を行なった。また具体的には、

① 新年度より入試委員会を新設すべきであること

② 入試問題の作成・基本姿勢・組織の大巾改革等を目ざし、教務委が具体的に活動すべきこと

③ 一、二次入試では実質的に英語が足切制度として役割を果たしている。この問題について教務委と英語教員とが討議すべきこと

の三点を提案した。これに対して教務委員会が示した見解は大略次のようなものであった。

教務委員会討議事項（骨子）

(1) 学生募集の理念について

理念というものは造り出すものではなく、大学の現状を照し出して、本学のあり方についての情報を受験者に提供することが学生募集の基本理念であるべきである。

(2) 本学の建学の精神について

根本において、実践禅学を入学案内などの宣伝の表面に押し出すという浅薄な行き方は行わず、最も奥深いところに蔵しておくという方向を自覚的にとるべきである。下手をすると禅をコマーシャルイズムに乗せて鳴物入

りで賑かに紹介し打ち出すという、幽玄をこととする禅のあり方とは全く異質な、嘲笑すべき、軽薄な失態そのものを世間に曝け出すこととなる。

(3) 学生を募集するに際しては、学問以外の何かを旗印のように振り廻して、受験生の注意を学問以外のものに向けさせるのではなく、学問への取り組みに向わせるよう、情報を提供すべきである。

(4) 面接について

面接結果を点数化することには問題がある。特に問題あるケースのみ可否判定のさいに検討する程度で適当と考える。

(5) 入試委員会の新設について

従来の当局と事務局中心の行き方では問題がある。基本的に企画広報委員会案に賛成する。但し、企画広報委員会は入試作問等には関与すべきではない。

●一九七四年度（昭和四十九年度）

前年度末の企画広報委員会による問題提起を受け、入試委員会設置が検討されたが、結局、企画広報委員会と教務委員会の合同委員会に入試事務室メンバーを加えた組織として出発することとなった。従って、この年は学生募集については企画広報委員会が、入試そのものについては入試委員会が担当することとなった。

(1) 学生募集に関して

前年度のメイン・コピー「花園大学とは」が内外に与えた影響は大きかった。事実、京都市内の某大学が本学のコピーによく似た「剽窃」版を出したほどであった。そのため、企画広報委員会はこれを全面的に書き換えることにしたが、この際に、前年に引き続き問題となったのが「建学の精神」の表現であった。「禅」と花園大学の現実

との関係は一体どうであるのか、という問題をめぐって議論がなされたが、最終的に出て来たものは次にあげる二つの文章であった。企画広報委員会はこの二つを何とか調整して一本にしようと試みたが、結局は二つをそのまま掲載した。

花園大学とは……その一

— QとAとの対話 —

Q、「やさしい名前ですね、由来を話してください」

A、「ここは、花園天皇の離宮があったところですよ。それ以前は、じっさいにお花畑だったそうです。御室の仁和寺におそなえする花を育てていたのです。南北朝のはじめに、ここに離宮を営まれたのが花園天皇で、上皇になられてから禅宗に帰依されて、関山国師のために禅寺とされたのが、妙心寺の起りです。花園大学は、妙心寺の経営する私立大学で、はじめは坊さんだけの学校でした。昭和四十一年から、仏教学、社会福祉学、史学、国文学の四学科からなる単科大学に改組されて、今年はちょうど十年目に当たります。男女共学、四年制で、学生数九七八人、専任教員三十九人、職員二十八人という小さくて若い大学ですよ」

Q、「一般の学生も入れますか？」

A、「今では一般の学生の方が多くて、約六十六パーセントに当たります。それに一般文系大学と同じように、女子学生の数が増加しています」

Q、「四つの学科について話してください」

A、「学科そのものは、他の大学の場合とちつとも変わりありません。担当の先生方が書かれた説明が別にあります

からそれを見て頂ければ分ります。

花園大学の特色は、各学科を通じて、仏教や禅の勉強ができるようになっていくことです。希望者は、坐禅を実習することもできます」

Q、「禅が、建学の精神だというのですか？」

A、「そうです、しかし、禅は決して堅苦しいものでも、難しいものでもありません。若くて自由な気持で、各学科の勉強を完成し、生かしてゆくのが禅の精神です。禅を何か道徳教育や修身のように考えるのはまちがいです。又、最近一部で見られる超能力の開発みたいに関心するのにもまちがいです。花園大学で学習する禅は、各学科の勉強とかけはなれたものではないのです」

Q、「禅について話してください」

A、「花園大学の誇りは、何といっても学長山田無文老師です。老師は、現代の生きた禅の見本みたいな存在です。老師は作家の水上勉さんと対談された本の中で、若いころに禅を志された動機をこう話しておられます、△この地球の上を牛の皮でおおえば、どこへでもはだしで行けるが、そんなことは不可能だ。しかし、自分の足に七寸の牛の皮をつければどこへでも安心していける。そのように、この世界を争いのない、貧しい人のない、病人のない平和な楽園につくりかえることなんて、おそらく不可能にちかい。しかし、自分の心にボダイ心を起せば、そぐずに世界は平和になったと同じことだ。ボダイ心とは、自分の一生を人類にささげますと心に誓うことだ、自分をなくすことだ……▽」

Q、「ちょっと待ってください。そうすると、誰でも老師のように出家して坊さんにならなければいけませんね。ボダイ心を起して、人類のために自分の生命をささげることなど、普通人にはできません」

A、「老師は、御自身の経歴を話していただけるだけです。誰もみな同じ路を歩く必要はありません。むしろ、世界中に牛の皮を敷きつめる代りに、自分の足にしっかりした靴をつけるのが、本当の勉強ではないでしょうか。大学の勉強は、けっして単に小さい自分のためではない。他人をおしのけても、有名な大学に入りたい、有利な職に就きたいという、自分中心の勉強ではなしに、小さいながらも自分の足にあった靴をつけて、世の中に出てゆこうというのが、大学に入ることの意味ではないでしょうか」

Q、「勉強することがボダイ心であり、禅の精神だとすると、それぞれの学科の勉強のほかに、建学の精神はいりませんか」

A、「まったくその通りです。要は、各学科の勉強が本当に創造的で、健康であればよいのです。学問が片よった物議りや、就職のためにあるのなら、何と空しいことでしょう」

Q、「花園大学には、そんな素晴らしい学科が、開かれているのですか」

A、「残念ながら、これは理想です。しかし、学生も教職員も一生懸命にそのことばかり考えています。いつも、歩きながら考え、立ちどまっては足もとを見つめているのです」

Q、「ずいぶん変った大学ですね」

A、「変った諸君に入ってほしいのです」

花園大学とは……その二

「QとAの対話」で語られているように、花園大学は宗門立大学です。ここで「宗門立大学」であるがために花園大学が背負っている問題を少しのべてみたいと思います。

△現代の危機と「宗教」へのあたらしい関心▽

近年、急激な科学の発展にともなって生じてきた「公害」に象徴される諸々の問題に、いま全地球的な関心がよせられています。そうしたなかで、「科学」のもつ限界が議論され、一方では宗教、ことに東洋の宗教をみなおそう、という声がむしろ欧米のほうでより多くきかれるようになりました。ところがその反面では「日本人の宗教に対する無関心」ということもよくいわれます。

しかし、『宗教的無関心』は日本人にかぎりません。世界的にみて、宗教が人間生活の中心であった中世が終り、信仰にかわり理性が歴史の主人公となった近世・現代では、理性を否定する立場をとる宗教はわれわれに無縁なものになっているのです。いま「公害」の中で理性の内に自足することもできず、また理性の外に宗教的安息をもとめることもできない現代人にとって本当に救いとなるものは、いったい何なのでしょう？ これは現代という状況の中で生きる私たち人類共通の根源的な課題です。

このような問題を解決しなくてはならない、という自覚、それはもはや、単なる「宗教的無関心」にはとどまりません。既成の宗教形態への無関心、という点では似ています。しかし、いわゆる宗教と理性との相剋をもふくめ、自己と社会と歴史との問題が「私」の中で根源的な解決をせまられている、という点ではまさに実存的関心そのもののなのです。いま世界的に「根源的な宗教性」が問いなおされているのです。

△宗教（教団）と学問（大学）▽

ところで、ふつう宗教団体が設立している学園では、「宗教が学問を規制してはならない」という近代社会の基本方向が、いちおう認められています。しかし、ややもすると、学問の上に宗教をおこう、という中世的方向にもどろうとする傾きがあります。また「宗教は科学とは別の固有の領域をもち、科学的理性の侵入を許さない」とい

う論理で、設立者である教団は自らを守ろうとしてきました。しかし、その「聖域」の維持も科学の進展のもとではたいそうむづかしくなってきました。このような事情の中で、「坊さんの」大学という言葉がひかえめにささやかれ、敬遠されるようになってきています。

私たち花園大学の設立者は、仏教のなかの禅宗、そのなかでも、臨済宗妙心寺派です。この教団も、他の多くの教団と同じように封建制度のもとで存続し、その後も第二次大戦中まで、大勢として「天皇制」を支持し続け、戦前の国家主義の枠内にとどまってきました。そのかぎりでは他の既成仏教教団とかわらぬものを保持してきたといえます。

△「建学の精神」をも突き抜けて▽……

しかし、「禅」というものは、いわゆる「宗教」そのものさえも「突きぬける」という性格をその中にもっています。たとえどのように伝統の力が厚くても、そこに何かの力を残しては、人間の本当のあり方にはならないという立場——つまり、あらゆる力を脱した、自由で創造的なあり方が人間本来のものであるということを自らに実証する生き方です。ユニークといえばこれほどユニークなものはありません。

ともあれ、「禅宗」の妙心寺教団が花園大学を設立した当初の目的は宗門の子弟を教育し、卒業資格を与えることでした。その後、現在のように文学部を設置し、宗門以外の青年に門戸を開放するにいたしました。このことは、いったい何を意味するのでしょうか？

実はここにこそ、先にのべた「根源的宗教性」が問い直されているのです。花園大学が花園大学としてあるべき意義もここに伏在しているのではないのでしょうか？「禅」をあたりまえの建学の精神とするだけでは、また、宗門の子弟を僧職者に養成するだけではもはやすまされないのです。真に生き生きとした自由で創造的な人間の発見と

いうことが、「花園大学」で展開されなくてはなりません。

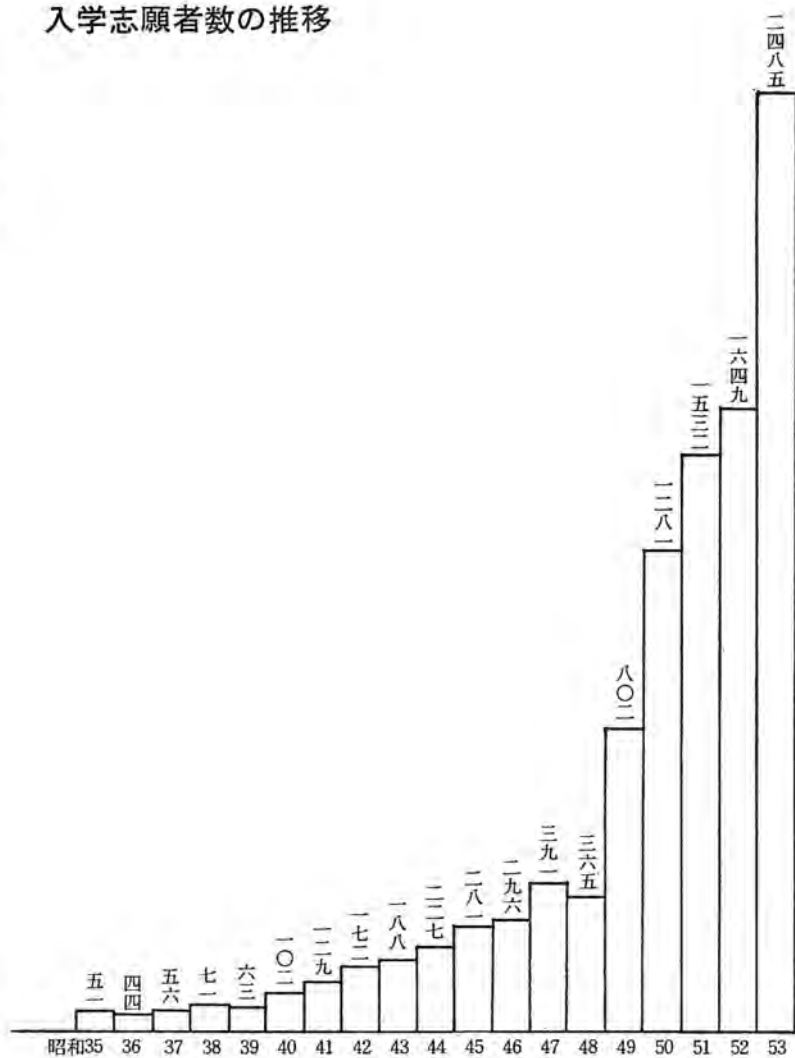
……とはいっても、花園大学が現にその存在意義を十分に發揮している、などとありもしないことをいうつもりはありません。私たちの大学は設備・制度・運営の上ではまだまだ、とても不十分です。それにこのような精神の活ばつな展開が全学的になされているわけでもありません。むしろ、ある部分では依然として「古い鎖」をひきずって歩いている、というのが現実です。

しかし、そういった状況の中でこそ、真に自己を問ひなおすことができなくてはなりません。どのような分野で学び、研究するにしても、私たちが、近代の理性の立場を根源的に批判し、その底にあるものを自覚するのでなければ、あらゆる学問は生きてこないのです。ほんとうに自由で創造的に生きるという「禅」の精神を単に形式や伝統のカラの中におしこめるのではなく、つねに現代にとりもどし、甦がえらせる永続的な営みの中に、花園大学の向かうべき方向をたずねたいと思います。

また、前年の「大学案内」における「宣伝臭さ」に対して学内から批判があったこともあり、「大学案内」にはタテマエばかりではなく、混沌とした大学の現実||ホネの部分こそ載せるべきだ、との考えから教員一人一人のメッセージを掲載することになった。この形式は以後の「花園大学案内」の基本パターンとなっていた。

さらに、前年度まではほぼ毎年のように行われて来た、学生募集のための高等学校巡回訪問は今年からは全面的に行わないことになった。学生募集委員会の主要な任務は、この「巡回訪問」であり、各高校を訪問し本学の説明と紹介を行ない、志願者の募集をして歩いたのであった。その点では委員会の呼称も内実をよく表わしていたといえる。巡回訪問中止の背景には、昨年の志願者増加という要因もあったが、多くの教員が潜在的にもっていた「学

入学志願者数の推移



「募」に対する拒否反応がその要因であったといえよう。企画広報委員会としては、大学の教員が学生募集のためとはいえ、直接、高等学校の教育現場に出かけて、現場の空気を目のあたりにする機会を「教員が私学教員であることの現実認識をするためのかつこうの機会」であるとして、重視していたのであるが、教員の大方の空気としては、「学生募集は本来職員の行なうべきもの」という考えが強かったのではなかったか。一昨年までの、志願者が極めて少なかった頃、各高校を訪問し、「一人でもいいから受験生をおくって下さい」と懇願して歩いた時代のあの涙ぐましくも屈辱的な体験を考えると、この「巡回訪問」の中止は、花園大学が明らかに全く新しい段階に入ったことを如実に示す象徴的出来ごとであったといえよう。

(2) 入試の改革へ

今年新設された入試委員会の当面の任務は、昨年、企画広報委員会によって打ち出された学生募集の基本路線を入試方法そのものに反映させることであった。すなわち、受験体制下のエリートではなく、それからはみ出した「非凡な凡人」をどのようにしたら選ぶことができるのか、そのためには入試をどう改善するべきか、の検討であった。入試委員会は企画広報委員会と教務委員会との合同で成り立っていて、委員数が十八名と多人数であったため、その内部に教員五名、職員二名より成るプロジェクト・チーム「ユニーク」がそれである。他大学では実現し得ない入試改革Ⅱ教学改革を推進しよう、という熱い期待が、この特異な命名にこめられたのである。

「ユニーク」Ⅱ入試委員会がまず行なったことは、前年度の「大学案内」のメインコピーの理念を、入試において具体化する作業であった。この基本理念をとりまとめたものが、入試のポイントである。

入試のポイント

△はじめに▽

「花園大学という大学は、いったいどのようなやりかたで入試をするのだろうか?」——これは、花園大学に関心を寄せて、受験してみようと思われるみなさんにとっては、いちばん気がかりなことでしょう。わたしたちは、その気がかりをすこしでも軽くして、みなさんが自分の個性・持ち味・力量に照らしながら適切な判断をされ、この大学への「道」を着実に歩み進んでこられるように、ねがっています。ひとりでもたくさん「素晴らしい若者」を迎えてこそ、花園大学は名実ともに伸びるからです。

では、その「素晴らしい若者」って、いったいなんだろう? わたしたちは、いくども寄り合って、そのことを議論してきました。もちろん議論百出、百家争鳴……というわけでしたけれど、ともかくも、「花園大学が求める若者像」らしいものは、浮かびでてまいりました。それはわたしたちが、いま可能なかぎりでも入試をおこなう側の基本姿勢をあきらかにし、さらに入試のやりかたを考えなおしてみよう……という方向で、やっとこさ浮かんできたのです。

△いまの大学と受験体制▽

みなさんは、身にしみて感じておられましょうが、こんにちおこなわれている大学入試のありかたについては、いろいろな角度から問題になっていきます。いまの大学制度ができていらい、制度の上ではなんらの変更も加えられなかったのに、大学進学希望者の数は激増しています。このことが、大学入試の実情を、歪んだものとしているのです。がいて、各人のすぐれた個性を発見し、伸ばす……というしくみにはなっておらず、平均的な人間を製造して社会に送りだすための大学入試……というイメージが勝っているのです。現実問題とし

で、そうなってしまっている。

そのことも関連しているのですが、極端な学閥主義・学歴偏重主義がはびこりつづけています。どの大学へ入るかによって、その人の人生が決まってしまうやすい。すでに、社会の数多くの「指導者」を送り出して、就職にも有利だし、将来の不安もすくなくような大学へ入るには、すさまじいばかりの受験戦争の戦列に立ち、ときにはかけがえのない友にさえ銃口を向けなくてはならない。その戦いを勝ちぬけばあとは道も広がり、情性で進行できる。

こういう現実が、じつは大学そのものを学問水準の点でも大学教育のありかたという点でも質的に低下させる働きをしています。

△かけがえのない「個」をみつけない▽

ところで、昭和四十九年四月に本学の一学科に入学した学生のうち二十五名から「私にとつての高校教育」という課題でレポートを求めましたが、その約半数が、出身高校における厳しい受験教育体制を批判する内容のものでした。しかもその多くが公立高校のことでありました。いわゆる一流大学への合格者数の増加が、「高校教育」の大目標にすえられているのです。そして、無数の若ものたちが「個性」を軽視されて傷つきながら、人生への希望をうばわれつつあるのです。

かれらをうけ入れる側の大学にとつても、むしろこの現実を直視しないわけにはゆきません。大学がおこなっている入試のありかた、その矛盾が、「高校教育」を大きく歪め、公立高校でさえも「予備校」化する導火線になってきたのですから。そういう反省にしっかりと立って、入試そのもののあり方を少しずつでも改革してゆこうという心は、わたしたちにもあるのです。さいわいなことに、わたしたちのこの花園大学は、学生総

数九七八名（昭和四十九年六月現在）という小規模な大学ですから、もちまえの利点を思いつきり生かして、小さい大学ならではの……の試みをやってみることができるのです。その試みはいろいろですけれど、かんじんかなめことは、「かけがえのない、すぐれた個性・独自の力」をみつけたことです。

△すぐれた個性・独自の力をみつけるためにどうするか？▽

わたしたちが、あなたがたに對しておこなう入試は、不必要なまでに「高度」なものでもなければ「難解」なものでもありません。ということは、けっして、「安直」で「低位」なものであることはいけません。かたんに言ってしまうと、なんでもかんでも詰めこみ・暗記主義でおぼえこんで試験にのぞもうとする人は、とうていダメということになります。もちろん、高校の課程で最低限度、これくらいのことには知っておかねば……とされる基礎的な学力は重視しているのですが、その上に、さらに各人の「考えすむ能力」「考えを表現する力」をいっそう重視するのです。

花園大学では、推せん入学・編入学・一、二次入学試験のいずれにおいても、「小論文」テストをおこないます。これは、たんなる「作文」テストではありません。思いつきの感想文や随筆ふうの文を綴ってもらおうなどとは考えていないのです。八十分という時間内に、試験場で配布される短かい課題文を読み、それについてあなたがたの考えをまとめ、すじみちを立てて論述してもらいます。そして、わたしたちは、受験生が、

- ・課題文の内容を的確に把握しているかどうか
- ・独創性がみとめられるかどうか
- ・論述の内容が、すじみち立っているかどうか
- ・文章構成や、ことばの用い方、文字などはどうか

といった諸点に注目しながら、総合的に評価するのです。このばあい、受験生各人の思想・信条ならびにプライヴァシーにふれる面は、評価の対象から除外します。

※

「小論文」をわたしたちが重視するのは、多少なりとも、あなたがた各人がもっている「個」の才覚や力量を客観的に引きあわせる上で、一つの有効な方法だと考えるからです。

さて、「小論文」方式に生かそうとするわたしたちの理念は、当然のことではありますが各科目の試験（英語・国語・社会）にも適用します。そのばあい、知っている英単語の数量だけを覚えてきたり、ある古典文学の著者名を知っているかどうかだけで差をつけたり、ある歴史的事件の年代を記憶しているかどうかだけをためしてみたり……というふうな試験問題は、はじめから出しません。要するに、詰めこみ主義による知識の有無や、多い少ないだけで合否判定をすることはいいのです。わたしたちが見ようとするのは、いわゆる高校の課程で学びとっていることがらをふまえて、いったいどのように「考えすすみ」「考えを表現する」力をあなたがたが自分の中に潜めているのか……という点なのです。実は、そういう力をもっている人が、入学後の学習生活において、めざましい伸びかたを示すのであり、思索の深まりを見せるのであり、自分でも見つけられなかった新しい自分の才能にめぐめて、大きく成長するのです。逆に、知識を知識としてのみこみ、自分で考えること・自分の力で論理を組み立てることを怠りつづけてきたような人は、意外なくらい伸びないのです。知識を生かすすべを、自分の努力で体得することがむづかしいのです。

※

さあ、わたしたちが「入試のポイント」として提示したいことは、以上に述べたとおりですが、かえって、

あなたがたをとまどわせることになったでしょうか？

いや、わたしたちは、けっしてそうは考えておりません。わたしたちが見ようとしているのは、「あなた」だけしかもっていないはずの、何か素晴らしいものなのです。ふつうの高校教育課程ではあたりまえとされている程度の知識・理解力は、どうかしつかりみがおいてください。教科によっては、得意なものもあれば、不得意なものもあるでしょう。英語は死ぬよりつらいけど、日本史のことなら・国語のことなら……と腕まくりしてみせようか！というふうな人。古文はイヤだったけれど作文はすばぬけて自信あり……というふうな人。わたしたちは、あなたがたに對しておこなう入試によって、「あなた」のもつ良さ・可能性をかならずや発掘することでしょう。ごく基礎的なことがらをもういちどおさらいして、その上に、文を読み、文意をつかみ、自分の感じたこと・考えたことを記述する力をたくわえてください。「型」にはまろうとはせずに、のびのびと学習し、花園大学の入学試験にのぞんでくださるよう、わたしたちはねがっています。わたしたちは、冷静に、そして慎重に、「あなた」を見つけましょう。

△合否判定をめぐって（一次・二次試験のばあい）▽

さて、さいごにわたしたちは、合否判定にさいしての基本姿勢をあきらかにしておこうと思います。わたしたちは、受験生の合格・不合格をきめるとき、つぎの二点にじゅうぶんな配慮をいたします。

第一には、「総合得点」をあくまでも重視します。つまり、ある特定の科目（たとえば英語）だけを重くみて、その得点如何でまず「足切り」をしてふるい落とすような方法はとりません。

第二には、受験科目のなかで、きわだってすぐれた成績のものがあれば、これをおおいに評価して、全体に入試成績がふるわなくても「合格」とすることがあります。このばあい、国文科を志望する人がとくに「国語」

にすぐれているとか、史学科を志望する人がとくに「日本史」にすぐれたさを示しているとかいうときは問題はないのですが、国文科をめざしながら国語の成績がわるく、そのかわり日本史は拔群……というふうな人に対しては、第二志望をすれば史学科での合格をみとめることがあるのです。ですから、どうか自分の「希望」と「実力」とをよく見はからった上で、第一志望・第二志望を勘案しながら受験なさるようにすすめます。なお、試験終了後、本学内に「小論文」「各科目試験」についての「解答の一例」を公示いたします。

入試のポイントに盛り込まれた入試改革の主要点は次のとおりである。

① 「小論文」試験の採用

従来の学科試験の出題傾向を批判的に検討する中で、これまで推薦入試のみで行われていた「作文」を、より高度な「小論文」としてすべての入学試験で用いてはどうか、という意見が生れて来た。この過程で大きな参考になったのは、宮城教育大学の一連の入試改革、とりわけ小論文の出題ケースであった。『朝日ジャーナル』が四月九日号と十六日号との二回にわたって連載した「小さな大学の大きな試み——宮城教育大学の入試正解公表」というレポートは、前年来、摸索を続けてきた我々に大きな影響をもたらした。

② 学科試験の内容改善

学科試験ではどうしても知識の蓄積度を問うことになりがちであるが、できるだけ「考えすすむ能力」を重視すべきであるという「入試のポイント」の路線に沿って、個別学科の専門家である作問者と、素人の立場である「ユニーク」のメンバーとの間で、深更に及ぶまで激しい議論がくりひろげられた。

③ 入試終了直後に解答例・出題意図・評価の基準などの解説を公表することとした。

●一九七五年度（昭和五十年度）

この年の入学志願者数は前年の約一・六倍の一二八一名となり、学生募集の面では安定化の波に乗ったといえる。この年は学生募集に関しては前年とはほぼ同じ方針が進められた。しかし入試改革は更に一歩進み、かなり大胆な路線が打ち出されることとなった。

改革案の骨子は凡そ次のとおりであった。

- ① 一次入試の学科試験を全廃し、小論文のみで行なう。
- ② 推薦入試は小論文と面接で行なっていたがこれに代え、副申書（自己推薦書）とグループミーティング（集団討議方式による面接）で行なう。

この改革案は五月十九日の教授会に提出されたが、審議は白熱し、議論は百出した。意見は賛否両論に二分し、審議は深更に及んだが、結局原案通り採択されたのである。

翌五月二十日の京都新聞（夕刊）は本学の入試改革を報じ、次のような記事を掲載した。

花園大の一次募集 学科試験やめます

花園大（山田無文学長）は、十九日開かれた教授会で、来年度の一次募集には、学科試験をやめ、考える力や判断力を判定する小論文テストのみにする方針を決めた。日本の教育をゆがめている「受験地獄」の打破に真っ向から挑戦したかたちで、約千人のミニ大学ながら、他大学の入試改革に大きな波紋を投げかけるものとみられる。

来年度入試の改革は、同大学の五十年度入試委員会のメンバーだった企画広報委員会と教務委員会（教授、助教授、講師、事務職員で構成）が検討していたもので、この日決まった改革の骨子は「従来どおり推薦入学と一次、

小論文だけで判定

地獄解消へ試金石

花園大の一次募集

学科試験やめます



ミニ大学 受験

花大の入試改革を報じる紙面

二次の三形式で学生募集を行うが、このうち一次募集については、小論文テストだけを実施、国語、社会、英語の学科試験は廃止する。ただし、二次募集は、学科試験を行う」というもの。全国の大学は、四十八年に実施した高校の新カリキュラムに沿って、来年度から入試科目の変更など、手直しするが、学生募集の中心といえる一次募集で、学科試験の全廃に踏み切るのは同大学が初めて。しかし特異な例として、従来から全入学生を面接と書類審査で決めている芦屋大（芦屋市）がある。

花園大では、今春の入試で、国語、社会、英語の学科試験に加えて小論文テストを採用したほか、学科試験についても問題の解説や解答例を公表するなど、すでに入試改革に踏み出しており、来春からの学科試験の全廃は、その第二弾。今春の小論文テストの結果を学科テストの成績などと総合比較して分析したうえ、学科全廃に踏み切った。（後略）

（解説）

「受験体制のエリートは無用。それより参考書に地獄を見、悩みぬいてきた若い力を待っている」——これは、花園大が五十年入試の募集広告として、ある受験雑誌に出した文の一節である。これまでなら考えもつかなかった。呼びかけであり、それだけにユニークで、受験生のハートをつかんだのではないか。実際にこの方向を打ち出

すには学内でかなりの論議があったが、改革をめざして動き出した同大入試委員会は、この新方式を採用。さらに、入学案内の小冊子に「入試のポイント」を設け、「かけがえのない、個性をみつきたい」と訴え、小論文テストの重要性をPR、入試改革へ動き出した。

また、今春から試験問題の解説をテスト終了後に学内に張り出したほか、実際に答案を採点したあとの「講評」まとめを試みた。近く全国の高校のうち二千五百校へ送り、大学—高校間の相互交流をはかるというが、解答の公開は京都の大学では、初めてであり、こうした改革への意欲が、今回の学科テストの廃止へ踏み切った原動力といえる。「はたして、小論文で客観性を持たせられるのか」という疑問は、今後の課題として残るが、同大学では、今春のやり方を基礎に、採点の基準になるチェック・ポイントをできるだけ客観的に選んでいく方針。具体的な出題—採点課程については、近くまとめるが、あくまで▽課題文の内容がわかっているか▽論理的な組み立てができているか▽独自性があるか—を重視「受験生のユニークさの発見に努力したい」といつている。

いわば、小まわりのきくミニ大学の特性を十分に発揮したわけで、新入生からアンケート調査をした結果でも入試の新しい試みを歓迎する声が多かったという。ちょうど、五十一年度入試は、高校のカリキュラム改定後、初めての入試で、科目が変更されるなどの動きがあり、さらに五十三年度を目ざして、国立大共通一次試験と一、二期校一本化を軸とした全国的な入試改革の動きがあるだけに、これに先がけての、同大学の思い切った実験は、大きな波紋を呼びそうだ。（京都新聞昭和五十年五月二十日夕刊）

その後、各紙がこぞって取り上げて記事にしたために、本学の小論文入試は一躍、社会の注目をあびるところとなった。このことは、いまだかつてこのようにマスコミの注目を集めるといふ経験をもたなかった花園大学の学内

にも少なからぬ動搖を与えることになったが、いずれにしても、この入試改革は花園大学という小私学の学内的論議にとどまらず、社会的な問題へと拡大されたのである。

この年度の改革で、以後の花大入試の基本パターンは一応確立したといえる。後、昭和五十四年度になると、国公立大学の共通一次試験が実施されることになり、これを契機に国公立大学はそれぞれ独自に入試改革に取り組みはじめ、私立大学にも間接的にその影響が及ぼされることになる。しかし、その中で試みられている多くの改革は、この時点での花大入試に取り入れられているといっているだろう。

おわりに

その後、昭和五十一年度の小論文入試には素材として人気劇画が採用されたため、本学の入試は再びマスコミの対象となり、「花大入試改革」の表面的な華々しさは、否応なく、一層強調されることになった。こうしたことも手伝ってか、学内には「本学は入試改革だけで有名になっている」「ユニークさは売り出すものではなく、自から出てくるべきものだ」という意見も出て来ている。しかし、入試改革の当初から「入試はあくまでも教学の入口の問題にすぎない、入試に於ける独自性の發揮を通じて、本学ならではの教学を確立することが目的である」との認識があったはずであろう。入試改革は入試改革のみでは完結し得ない。今後成されるべき問題は多い。

『今年の大学受験で何よりも注目されたのは、国公立大学の入試改革だった。…改革を迫られるのは私立大学の入試だろう。私大の入試は本来、国公立大より多彩な試みが可能なはずなのに、受験生の増大から次第に画一化し、ペーパーテスト一本やり、それもコンピュータ採点方式が広がる傾向にある。『私大の特徴が薄れた』『建学の精神はどこへ行ったか』といった声が年々高まっているのも、一つはそのためだろう。校風をよみがえらせるためにも、入試改革は欠かせまい。私大に限らず、すべての大学・学部は、もっと特色を打ち

出すべきではないか。うちの大学はこういうことを目ざしているのだ、こういう人間がほしいのだ、ということをはっきり示してもらいたい。受験生が難易度だけでなく、校風や特色で大学を選ぶようになれば、それだけでも「偏差値教育」の弊害は薄まっていくだろう。」（昭和五十四年三月二十八日、朝日新聞社説より）

今や新聞ではこうした論調が見られるが、花園大学は、入試改革以後、の時期にさしかかっている。入試改革に投じた教職員のエネルギーをどのように教学の特色化に注いでいくか、が今後の大きな課題であろう。

第五節 花園大学を支えた人々

一、山田無文名誉学長をたたえる

（佐野大義）

△同窓生の新学長誕生▽

一九四九年一月廿六日「新しく花園大学々長に山田無文老師を推戴することとなった」と妙心寺派の機関誌正法輪誌十二月号に公示された。「新学長は最近山内霊雲院に入られた山田無文老師と決定。老師は臨済宗大学出身、故関精拙老師の蘊奥を究められた人、長く天龍僧堂に在りながら既に一流の文化人と聞こえている。本学として初めて同窓出身の学長であり、今回専任学長として母校の学運を双肩に担われるに至ったことは、極めて意義が深い。」と同誌の学園通信欄で紹介している。一躍老師は脚光を浴びることとなった。時節因縁は到来した。老師五十才の初冬のことである。初登校の老師の服装は雲水スタイルそのままであった。学運を双肩に担われることになったというが、誰れがこの時二十八年の長きにわたって学長職にあられることを予期したであろうか。何にしてもこれか

ら山田無文老師は花園大学と運命を共にすることになった。

△草鞋をはいて▽

一九五〇年九月シェーン台風が関西を襲った。大本山妙心寺の諸堂建物も大損害を受けた。花園大学も高校もメチャクチャにこわれ、ガラス代だけでも数万円という被害であった。このため一九五一年第八次臨時妙心寺派宗議会が開かれ、花大・花高校舎建物復旧工事費千万円、その他あわせて千五百万円の大勸募運動が議決された。この



鉢運動を展開することとなった。花園大学の歴代の学長の中で、草鞋をはいて大学のために勸募托鉢にくり出されるは、実に山田学長を以って初めとする。その熱意は周辺各方面を痛く感激せしめた。一九五一年三月彼岸過ぎのことである。

一派の熱意を坐視するに忍びずと、学長以下教職員と学生が一体となって托

△一冊の預金通帳▽

一九七二年三月八日の夜のことである。明日はメキシコを中心に南北米諸国訪問の旅という前夜の忙しい夜のことであった。靈雲院から私に「学長がお渡しするものがあるから来寺されたい」との電話があった。飛ぶようにして駆けつけた。隠寮の弱い螢光灯の下に、本と紙と箱に埋まるようにして老師が端座して待っておられた。老師から「明日からメキシコに旅立ちます、これを大学のために使って下さい。お預けします。」と申されて一冊の預金通帳が手渡された。有難く通帳を拝見した。「花園大学基金代表 山田無文」と記名されている。中味を見ると金額を二百八十一万一千円と読んだが、零が一つ多いような気がしてもう一度通帳の数字を見直した。

二千八百拾万壱千円ではないか、驚いてもう一度しっかり位取りを勘定した。何と二百八拾万壱千円ではなく二千八百拾万壱千円であったのである。私はその通帳をおし頂いてタタミに頭をすりつけて感激して泣いた。恐らくはメキシコに旅立つが、飛行機は何時でも絶対安全ではない、どんなアクシデントが起るかもしれない、花園大学は教員の給与は日本一低いように思う、すべての教育条件は最低である、先生も学生も気の毒だし何としても向上させねばならない、それが学長としての責任である、と御考えになったに違いないと拝察して泣いたものでした。それから後六ヶ月間如何にして学長老師の慈恩に報ゆるべきか、如何にして学長老師の愛校興学の御志を生かすべきかを考えた、そして漸く花園大学興学基金構想を打ち出した。やがてそれは総合移転協力の学債募集に代った、そして総合移転を完了することになったものである。学長山田無文老師から大学が受けた現金による特別ご寄付は在任二十八年間に数億円を超えている。花園大学は山田無文老師の化身である、まことに空前絶後の学長であったと申し上げても過言ではなからう。まことに学徳福が兼ね備った稀有のお方であると、学園あげて敬慕感謝をささげておるところである。

△花園大学の使命と理想▽（山田無文学長語録粹）

誰よりも花園大学を愛され、教職員と学生の事を心配された学長老師二十八年間の言行録は厩大で深重で、小論の凡そ尽くすところではない。ただその中から花園大学の建学の精神に関するもの、花園大学の今日的使命と理想を示されるものに限って、年代順に要点を抜粋し集めた。題して「花園大学の使命と理想」という。

◎私の年来の理想から申しますと、今日着々と成果を挙げつつあります花園会を真に堅実なる宗門維持の団体に結成して頂きまして、一戸平均五十円也を学園に喜捨されますれば、檀信徒数約三十万と仮定しまして千五百万円になります。さすれば本派の子弟は大半月謝も食費も無料で、開山大師塔下において思いのままに禅教育ができると思います。これこそ本末一体僧俗不二となつて教化の実を挙げることができると信じております。

（一九五四・一二 花園大学通信）

◎禅僧には学問が要らぬというような俗説が何時から創つたのであろうか。釈尊に学問がなくてどうして仏教が成立したであらうか。達磨大師に学問がなかったらどうして六派の外道を折伏できたであらうか。白隠禪師に学問がなかったらどうしてあの夥しい華墨の大業が成就したであらう。今日では禅そのものが学問の対象になっている。少くとも宗門の祖師方によつて遺された厩大な禅言が思想的に歴史的に解明されなければならない時になっている。ここに宗門子弟の教育ということ以外に花園大学の持つ大きな意義と責任があると思う。

（一九五六・三・五 正法輪）

◎鈴木大拙博士が多年海外で講じられ、海外禅ブームを点火されたのは臨済禅であつた筈であります。それなのに外国の求道者が花園大学へは来たらずして曹洞宗の駒澤大学へ集るのはどういふわけですか、建物が粗末だからですか、金がないからですか、設備が悪いからですか、良い先生が無いからですか、学長が有力でないからですか、

わたくしはどうしても花園大学を禅研究の世界的センターにしなければならんと誓わずにはおれません。今春からその完成のために邁進したいと思います。

(一九六〇・二 花園大学通信)

◎御本山の護持も大事だが、御開山さまは、一生雨もりのする所でお暮しになって、御自分の生活を忘れて子弟の教育に没頭された。本山の伽藍がどんなに立派になっても御開山さまは決してお喜びにはならない。しかし子弟の教育をおろそかにしたらそれこそ御開山さまの悲しみであり、お怒りになる所である。「御開山さまが雨もりの室におられたなら、学生も雨もりの室で勉強したらいいじゃないか」といううれい声もあったそうだが、御開山さまは雨に濡れて茶をつむ雲水たちの姿を見られて、茶の木を全部切りとられたというほど、ご自分は濡れても子弟をぬらすことを怖れられたのである。

(一九六二・二 花園大学通信)

◎それにしても完全なる設備が果して人物を作るものであろうかとこれまで深く反省させられることであります。これだけの設備をして若し優秀な人物が輩出しなかったら、一体それは誰れの責任だと今から遠く思いやられます。それには学長の不徳の改修が、一番大事だったようで慚愧の至りに存じております。

(一九六二・一一・五 図書館建築起工式)

◎あらし山にはつ雪ふれりこのあした

あ子らは老をねぎらうという

去年の冬、はからずも京に初雪のまう日であった。女子学生諸子が、大覚寺の寮に集って老骨を痛めてくれるというのである。

全学生が教授と共に一同に会して、肩を並べ膝を交えて、坐禅三昧に入るような雰囲気がこの学校で味えるであらう。

といつて当今の時世に鑑みて、学園の拡張は止むをえない趨勢である。願わくば現在の和氣あいあいたる学風を失わず、いよいよ学園の内容、外観ともに発展せんことを切に祈る。

(一九六六・四 花園大学通信)

◎春は花園に入つて覺容を革む

高樓応に仰ぐべし両三重、

百万の金剛信に酬わんことを欲す、

師学一同となつて祖宗を拾わん。

(一九六六・四 校舍落成式香語)

◎春光一段として花園に満つ、

大地 深く穿つて道根を植ゆ、

秀菊幽蘭 妍、日を競う、

祖底報ずるに堪えたり嫡伝の恩。

(一九六七・一・二七 花園大学本館建設地鎮祭香語)

◎中国の文化革命は学問と労働の密着により成功したという。あらゆる文化人と学生が労働を通じて文化革命をおしすすめた。それは禅の精神から出たものだと思ふ。

百丈禪師は「一日作さざれば、一日食わず」と教えられたではないか、文化革命に匹敵する学園革命をやるのではないか。校庭も便所も教室も先生と職員と学生で掃除しようではないか、運動場よりも農園でも持つて百姓しながら勉強してはどうだろうか。

(一九七二・九 花園大学通信)

◎若し経営が許されるなら、私は本学がこれ以上大きくなることを望みません、校舎も学生もこれ以上増えることを望みません。それよりも学問的により深く精神的により高いものを望みます。そして学生と教師との間がもっと親しくなることを望みます。

(一九七四・五・二五 創立記念日)

◎禪風いよいよ盛にして宗門を動かす、

高層を新築して学園を遷す、

本来の祖道は別に究むる処

専ら教ゆ自覚仏心の尊きことを。

(一九七七・五・一五 総合移転完成式典香語)

△学長退任▽

われらの学長が臨済宗妙心寺派の管長に推戴されて一九七七年一月二十九日就任された。やむなく二十八年間の学長のイスを同年三月末限りで去られることとなった。このためその二月六日退任の記念講演会を開催した。講演会には学生と老師を慕う信者も交えて五百余名が会場の大学の大講堂を埋めた。法鼓の鳴り響く中に老師は平生のままに壇上に立たれた、聴衆すべてが起立して般若心経を誦経した後記念講演が始まった。

「法句経に『人間に生るること難し、死すべきものの生命あるは有難し、正法を耳にすること難し、諸仏の教えに合うこともまた有難し』とあるが、もう少し金持ちに生れたら、もう少し美しく生れたら、もう少し賢く生れたらと思う人がいるが、人間として生れたことを有難く思わねばならぬ。人間は皆いづれは死ぬが、永遠不滅なものは、鏡のような心の中の真理だ、鏡には私がない、すべての人を平等に、あるがままに写し、相手の悲しみをわが悲しみとし相手の喜びをわが喜びとする。曇りのない、あるがままの心こそ永遠不滅だ。私はダルマみたいに何もしないで二十八年が過ぎた、私は学生諸君と一諸に暮せるのが生き甲斐だった。みんな身体を丈夫にして長生きして下さい」

約一時間にわたる講演は了った。四半世紀を超えた学長職であったので老師の顔にも感慨一入のものがあるのが見えた。在学生は学長と接する最後の機会とあって、講演の後どっと学長を取り囲み、握手をしたり、手帳や色紙

にサインを求めて列ができた。「直心是道場」「無事」「和顔愛語」など禅語を書いて与えられ、笑顔で学生に別れを告げられた。

△憶えば楽し、花園三十年▽

「花園大学三十年のあゆみ」の巻頭に掲げた名誉学長山田無文老師の染筆墨跡である。一九七九年四月十二日の午后、かねて懇請してきた「巻頭の偈」を染筆してもらうこととなった。大筆をとってまず一円相をかかれた、賛文はいかにとたたずを呑んだが、なかなか筆を下されない。五分も経った頃筆を執られて一気に書きあげられた。「憶楽花園三十年」の七字である。大事をとって「どう読みますか」とお訊ねすると、「憶えば楽し花園三十年」とにこにこして読み下された。私は思わず熱いものがこみあげた。教授職にあられること三十四年、学長職にあられること二十八年、楽しいことではなかったに違いない、どんなにか苦しいことが多かったことであろう。苦しいことが楽しい、楽しいことは更に楽しい、それもこれも皆樂し花園の三十年であったと申されるのである。

それにつけても想い出すことがある。一九六九年二月無文老師に随行して老師も私も東部ニューギニアに戦死者の慰霊の旅をした。まだホテルも寝台がある程度で、シャワーもせず、クーラーもなかった。喰べものもおいしいと思うものは何一つなかった。暑さと湿気でマッチも用にならず身体中べたべたしていた。そんな中でジャングルに入って土を掘り遺骨を拾集した。悪戦苦斗の十五日間であった。私には成程東部ニューギニアは聞きしに勝る気候風土の最もわるい猖獗地帯と思われた。帰途の飛行機の上で日本帰国第一声の新聞発表の原稿をいただいた。「ニューギニアの現地の住民は神代の人のように天真爛漫でした。日本を慕って、今でも日本語で私たちの忘れているなつかしい歌を唄ってくれます。ニューギニアはまことに平和で、花咲き鳥歌う極楽のような国でした」と書いてあって、ただの一言も熱帯瘴癘の地、水もなくホテルも寝台も名ばかりというようなことは書かれていなか

った。

花咲鳥歌真楽園であると書かれていた。このためか私には「憶楽花園三十年」の七字の意味がよく判って一時に熱涙を呑んだものである。

四月十日の入学式に御臨席下さって、新入生四五三名に対し「この世界に私は一人しかいない、その私しかできない仕事がある。人生は一遍しかない。身体に気をつけて勉強してほしい」と慈愛溢るる祝辞を頂いた。花園大学の教職員も学生も、同窓生も、在学生の父兄も皆が名誉学長山田無文老師の御長寿を祈っております。名誉学長老師！ ご無理なされずに長生して下さい、皆の為に！

二、学監職二十年——荻須先生をたたえる

(佐野大義)

一九四九年十二月の花園大学通信によれば「昭和十九年以来学監として、学長を輔けて苦心經營の功を完了された市川教授も、今回奥学長と共に勇退して学究の本分に復されることとなった。後任は荻須純道教授（長野県大宝寺住職）と決定、十一月廿六日学長学監交代式が行われ、江西教学部長の情理を尽した訓示があり、式後本山で本所員心尽しの清餐を共にして無事交代を終了した」と報じている。この時から荻須先生は学究と共に花園大学の経営と教学の中心となられ、雨に洗い風に磨する二十年が始まったのである。

先生の足跡はそのまま花園大学発展の歩みである。今、年次を追ってその足跡を尋ねてみたい。

・一九四九年度「新制花園大学」の門標の金文字に宗門の誇りを秘めつつ五十名の新入生を迎えて、漸く運営も軌道に乗ってきた。大学と臨専との二本立てであるが、新しい教授陣の権威ある講義によって、耐乏の苦しみも忘れ



教授 名譽 道純 須荻

て落着いた学究の喜びに浸っている初年度であった。

・一九五〇年度「宗団が活潑な活動をする為には万難を排して妙心寺派住職たらんとする者の教育を、花園高校花園大学の一本に定むべきである。財源難に逡巡してこの根幹を等閑にする限り吾が妙心寺派の発展は夢である。先ずさし当ってはこの両校を義務制にして、それに相当額の補助を与えることが第一の急務である。」と妙心寺派生徒の花園大学進学の余りにも少いのを嘆いて妙心寺派寺院に訴えろとして一文が正法輪誌に載った。この年の創立

記念日に「宗教と倫理」と題して久松教授の講演をきき式後目下アメリカに留学中の緒方教授より贈られた砂糖、メリケン粉にて全学学生の花大や花高を経営することは名義倒れになる、よろしく廃校にして別に

後継者教育を考えよという意見が妙心寺派宗内識者の声として問題となった。

・一九五一年 「宗門と大学」と題して先生は論評された。宗門の大学は宗門の心臓である、同じ学窓に学び、切磋琢磨するところに護法の精神が培われると、宗門大学の必要性を強調した。そしてシェーン台風で大損害を被った校舎の修復のために壱千万円の妙心寺派の援助を受けることに全力をあげる。

・一九五二年 破防法反対運動が起き、学内に「日本共産党花園細胞」の名でアジビラがまかれ、妙心寺派宗議会に於いて花大批判が一時に起る。このため先生は「建学精神への反省」の一文を発表して一派に謝罪する。

・一九五三年 開山大師を讃仰して、理想的な禅の教育は行の実践の裏付を持つ教学であり、教学の理解をもった行でなければならぬと訴える。

・一九五四年 照顧脚下と題して次の如く訴えられた。今日の寺院は全く経済的に行き詰り、大部分の学生は困窮している、何とかして教団の責任において学資の一部でも援助してほしい。本派百年の大計は教学の興隆にありと戦前戦后を通じて妙心寺派は久しく標榜してきたではないか、と。

・一九五九年は開山大師六百年大遠諱を迎えることとなった。三百年遠諱には伽藍整備が中心となった。来るべき六百年の大遠諱は教学の基礎確立こそ最も有意義な事業である。将来の宗門を担って立つ学徒の育成こそ大師の恩徳に報謝する途である、と訴え、六百年遠諱記念事業費として花大助成壱千七百四万円が議会で認められた。

・一九五六年 妙心寺派が学校教育に着手してから年久しい。であるにもかかわらず、もう一つ振わないのは何故か、不立文字の禅は学的なものを軽んじてきたためではないかと、先生は「学園に想う」と題して訴える。

・一九五七年 禅は他宗と異なる特徴を以って今日に及んだ。身を以って仏の真実を体得することを生命とした。行的面が重んぜられてきた所以である。本学の建学精神もこのような心的基礎の上に打立てられる学問でなければならぬ。この意味に於いて無相大師六百年の遠諱を記念して本学の学寮が改築されることは実に意義のあることで

ある。遠く全国各地から集る青年学徒が禅的雰囲気の中に切磋琢磨しつつ勉学にいそむことのできる学寮ができることは何よりの慶びである。として先生は学寮の早期建設を訴えた。

・一九五八年、九月 熱意は宗門を動かし開山大師六百年遠諱記念事業として新学寮建設に着工、総建坪二九八・五坪二階建二十八室、定員五十六人、工費一千七百万円といわれる。

・一九五九年十二月、六〇一年へのお願いとして、研究施設充実を訴えた。同窓生は開山忌の前夜会議を開き、花大施設充実後援会の発起人会が開かれ、五千万円で図書館と校舎の改築をすること、そして先ず三千万円で図書館にかかることが議決された。

・一九六〇年二月 臨済宗大学創立五十周年、花大昇格十周年を迎えたことを記念して、花園大学改築後援会が発足した。

・一九六一年五月 時代の要請に応えるために、禅文化研究所の設置を訴える。

・一九六一年九月二五日 先生多年の研究業績により文学博士の称号を授与される。「私は最初学問の道に入る等ということは考えてもみなかった。最初に禅門高等学院に奉職して、仏教史、禅宗史を担当したが、史学研究の道に入る契機となりました」と感激を語られた。令夫人の内助の功を高く評価したい。

・一九六二年一月五日 待望四ヶ年、図書館建築起工式。工費二五八二万円、敷地七二坪、三階建である。別に妙心寺派花園会結成十周年記念事業として、花大新校舎、三一〇坪三階建が贈られることが議決された。

・一九六三年一月一八日 図書館落成 ダルマに、片目を入れて四年目遂に落成した。

・一九六四年十二月一二日 新校舎落成、工費五千万円、次第に面目を一新する。

・一九六五年十二月二二日 文学部設置遂に認められる。

門戸を広く社会に開設し、広く人文科学や社会科学との連係のもとに、禅学や仏教が研究され、また禅や仏教思想を以て諸学が研鑽されることとなった。まことに画期的な學術改革である。新制大学発足して十六年目にして漸く悲願が達成できた。荻須先生はこのために心血を注がれたというも過言ではなかった。病軀は更に細くなって体重も二貫目も減ったという。

・一九六六年一月 文学部発足、宗門の近代化のために花園大学が道俗一体となり、大乘仏教運動の基盤となる花園大学にならねばならぬ。そのために本館建築の要を力説された。

・一九六七年一月一二日 本館竣工、鉄筋四階建、延六五〇坪、総工費一一二、三三万円の近代建築で旧本館の約三倍の広さである。このため妙心寺派の臨時宗議会が開かれ、五年間に二千万円の助成が議決された。

・一九六八年四月、花園大学機構の改革が始まった。花園大学では多年の懸案であった、大学運営事務機構の改革を検討中であったが、今や大幅な改革を行い、新年度から発足することとなった。新任 柳田聖山文学部長、木村静雄総務部長、大石守雄学生部長、退任 学監職—荻須純道（教授）と発表された。

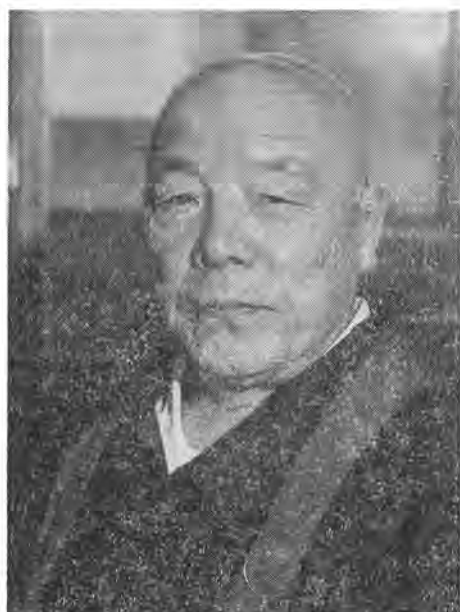
想えば、この学監職二十年間、荻須先生は花園大学の教育整備充実に明けくられた。花園大学中興の祖は無文老師と荻須先生である。花園大学に荻須先生を迎えることが無かったら花大の今日の発展はない。図書館、校舎、本館がキャンパスに聳え立った。仏教学部で発足した新制大学は文学部に改組して定員六百人に発展した。一つの時代の幕が下りようとしている。

この時に全国的に大学紛争が起り、花園大学も激烈な学生運動の流れにまきこまれて、新しい苦悩の時代の幕明けが迫っていた。

三、教団の百年の大計は大学教育にある――

江西名譽理事長をたたえる

(佐野大義)



長 事 理 名 譽 堂 寬 江 西

花大昇格時の一九四九年度の設立者妙心寺派の教学部長は、後の宗務総長江西寛堂老師であつた。昇格後の翌年すでに一派の中には、花大花高廃止すべしという声が上がつた。この時「花大花高は存続すべきか？」と題して妙心寺派の機関誌正法輪誌に堂々の論陣を張られたのは時の教学部長江西寛堂老師その人であつた。「本派の教学、特に学校経営問題は予算並びに末寺賦課金問題に関連して一般論議的となつてゐるところであります、結論的に云つて現在の大学、高校を併立存続させることが最も妥当であると考えます。学校無用論、禪堂單一論は到底これを納得できず、又高校廃止、大学存続論も妥当を欠くものと思われまゝ。よく百年の大計という言葉を聞きますが、人材の養成、延いては大学の権威確立という問題こそ教団としては最も重要な百年の大計であります。

貧弱な小大学を経営することは名前倒れに過ぎない、名を捨て、実をとれとの議論もある。高校も大学も僅か二ヶ年の試験を経ただけのことで、現状のみを見て、その存続価値を云云するのは余りにも早

計であります。

寧ろ權威ある禪学の最高学府を作ることが、教団一般の一大責任であると考えるのであります。花園大学の充実に向上こそ妙心寺派一派の本願でなければなりません」と、大胆率直に提唱しておられる。

この教学部長の理解と協力によって昇格直後の花大は経営されてきた。一九六八年春以来全国的に吹き荒れた大学紛争の嵐は花大を襲った。そして一九六九年九月十六日より紛争の幕は切って落された。禅の最高学府として誇りを内に秘めて、その鋒先は峻烈を極め、その方式は事務室封鎖に至った。そして学生から提起された所謂大衆団交が二ヶ月間にわたってつづけられた異常な時機に江西宗務総長は学園の理事長に就任、八年間の長い間その重責を尽くされた。そして屢々過激派学生のツルシアゲの場となる大衆団交にも臨まれた。或時は厳として学生の意見に反対され、或時は謙虚に学生の意見に耳をかされた。江西総長は花園高校の前身、花園学院から六高—京都大学に進まれた俊才であり、しかも一鵬と号される俳人でもあられた。

まことに学園の一大事の時に有難い総長、理事長に恵まれたことよと、感激にたえないところである。

一九七六年二月五日午後一時、前日の立春の寒さとはうって変って温い春の陽がいっぱいという好日であった。

一月二十日以来夜を日に継いで調査・研究・討論をしてきた花園大学の全面移転の具体案を以って妙心寺派宗務総長以下各部長全員の方々に面接をお願いして許可を得て会議が始まった。大学の移転については妙心寺派各重役におかれても、一九七五年の秋に移転用地の候補として市内北嵯峨の景勝地観空寺町の台地を案内したことがあって以来、関心事で奇想天外のことではなかった。宗務本所二階の管長室に総長以下各部長が揃って私を待って下さった。私は「花園大学全面移転計画案」なる資料をお配りして、説明をはじめた。

移転せねばならぬ理由、候補地として選定した移転用地の立地条件・該土地の実況・買取価額・移転に要する

総合的資金計画等二時間にわたって説明した。今から十二年前に花園高校の東側にあった「旧京都工芸繊維大学跡」が売りに出たとき、学園も妙心寺派も当時の金で三億円という莫大な金の要ることで、びっくりして尋ねることも調査・検討することもなしに引き下った。今日学内外で惜しいことをしたものの、あの時に買っておけば、一派にとつても大変な力になっていたものと愚痴がこぼれている。十二年前の三億円は今日の三十億円に相当する。日本レース跡の敷地は約七千坪、妙心寺派からも東南方わずか六百米の近いところにあり、そのまま使える建物も多い。「この機会を失っては悔を百年の後に残すことになります。」と総長以下各部長に訴えた。

江西総長は顔を真赤にして「大遠諱のために重任して、十五億円に及ぶ淨財を集めて、漸く準備も出来ようかとする時、十数億円の新たな募財協力を必要とする花園大学全面移転計画は再び大遠諱をすることと同じだ。佐野は私を殺す気か」と声を大にして私を叱られた。総長は高血圧で休養されたこともあるのでそのお叱りも尤もと受けとった。然し私は引き下がらなかった。「興祖大師の大遠諱をして大本山妙心寺の諸堂の修理ができて、お経を讀んで、威儀を正して大法要をするだけで、二祖大師がお喜びになりましょうか。後継者を育て、禅的人材を打出する大学の充実は開山大師と二祖大師が一番お喜びになる大遠諱の記念一大事業ではないですか。決断を下さい、江西総長が決断をしなくてはこの全面的移転はできません。妙心寺派のために、ご本山のために必ずお役に立ちます」と涙を流して訴えた。質疑応答が繰り返えされた。やがて各部長もお一人お一人賛成の意見が出てきた。

「花大の全面移転を助けよう、やんなさい、しっかりとやんなさい」遂に江西宗務総長の決断が下された。夕日が花大の図書館や禅文化研究所の二階を真赤に染めていたことを忘れない。

江西総長の英断あってこそ今日の花園大学はある。まことに山田無文老師、荻須純道先生と共に花大の恩人である。一九七八年五月二十五日名誉理事長に推戴して永くその功績を感謝することとなったものである。

四、激動時代の教育者・柳田聖山先生

(佐野大義)

一九六九年十一月初旬、花園大学は学園紛争の最中であつた。六十日に及ぶ学生との大衆団交は夜半に及んだ。今夜は教授の単位認定権に対する全共闘学生の追及である。全共闘の先頭に立っている学生の言葉ははげしく、不穏であり、不遜であつた。しかし、文学部長の柳田先生の対応は例の如くまことに懇切丁寧で、静かに、よく透る声で、順々と教えるように答弁されていた。朝から休憩二時間を含めて延々十三時間の大衆団交は時間切れで、また明日ということで漸く終つた。秋冷が身にしみる夜であつた。頭も身体もクタクタになつて私は帰り仕度を急いだ。自転車ハンドルに手をかけて、ふと、禅文化研究所の二階を見た。柳田先生の研究室に明々と灯が点いている。毎晩のことである。この年、十月一日私は総務部長に就任して直ちに所



柳田聖山教授

謂學生との大衆団交の渦の中にまきこまれた。すでに団交は五十日間を超えていた。団交は昼も夜もつづけられた。活動學生は朝ぐっすり寝て銳氣を回復しては、身体も精神も疲れ果てている教授会に迫った。

一九七〇年二月下旬に開かれた妙心寺派宗議会の全員協議会に私は喚ばれた。「過激派を助長する柳田を切れ、〇〇を辞めさせよ。」と迫られた。しかし、私はこの声に断乎として反対した。そして、この四十日間、柳田文学部長の人柄に触れ精神的感化を受けたし、火中の栗を拾うために私は母校に入った。

「真に大学を思う者は柳田であり、〇〇である。夜を日について連続する団交で堂々と倫理と論理によって學生に対応している。真に勇氣のあるのは柳田であり〇〇である。然かもあの細い身体で颱風に立ち向っている。団交が夜半に終って、研究室で研究をつづける学究の姿は尊い。私は柳田文学部長を信じる、そして断乎として守る。柳田と〇〇を辞めさせるなら、その先に私のくびを切るべきである。」と訴えた。

それほど信頼し、誇った同窓の大学者、柳田先生が、京都大学の先生になるということを打ち明けられたとき、一番喜んだのは私だったかも知れない。開学百余年、臨済宗大学・臨専・花大を通じて、同窓生で京都大学の教授になったのは柳田先生を以って始めとする。うんと勉強されて学徳を深めてもらいたい。

京都大学は六十三才が停年である。六十三才になられたら柳田先生は母校に帰ってもらうのだと私は私に言い聞かせて大賛成した。

先生は花大の前身臨専を卒業した。二年上級に私が在学していた。既にその時秀才の名が学内に高かった。臨専の事務職員をしながら、舎監補をしながら大谷大学に学んだ。卒業して新制花園大学の仏教学助手になられた。それから二十年、故紙を利用して二万枚に上る禅学のカードづくりを続けた。

僧堂の実参実究そのまま柳田先生は久松門下に在って壁觀参禅しながら花大にあって苦学力行の二十年である。

一般人が伺い得なかった「禪の語録」を二十年の行と学によって読み切り、しかも日本語に読み換えてくれた。「禪の語録」を誰にも理解せしめるように徹底したのは先生の努力の賜である。

それは恰も、白隠禪師が假名法語で深い禪の要諦をお薩婆さんに説かれた如く、盤珪禪師が日常の日本語で禪の奥旨を善男善女に語った如く、柳田先生は「禪の語録」を大衆のものにした。先人の曾ってなされた学徳の人である。

一九七六年三月三十一日付を以って、柳田聖山先生は本学を退職されて京都大学人文科学研究所教授となられることとなった。柳田先生は一九四二年九月、臨済学院専門学校を卒業後、大谷大学を経て、一九四九年四月に本学仏教学科に着任、爾来二十七年である。「やっと花大を卒業することになりました」と一言、いつもとかわらぬにこやかな表情で、その心境を語られた。以下は、この時花園大学通信特集号に、本学学生及び教職員諸氏が寄せた「送別文」の抜粋である。その一つ一つに先生に対する愛惜の念がこめられている。柳田先生はこのまま成仏してもいい人だと私は思った。

・禅学の重鎮、柳田先生を失うことは、花大の学問的權威を失うことで、まことに遺憾に堪えない。しかし、わが国最高学府京都大学の教授として先生が迎えられることは一面本学の名誉でもある。

嬉しきことが悲しきことであり、悲しきことがそのまま嬉しきことであるのは、浮世の常として諦めるより仕方がないであろう。（学長 山田無文）

・仏教大学裏の瀟洒なお宅へ参上した。その時受けた実に丁寧で、ものやわらかでありながら、どこかびしょと筋の通った先生の印象は忘れられない。（助教授 芦谷信和）

・小さな花大のキャンパスを中心に、遠く近く先生のお姿を拝し続けて三十年である。今花大で敬慕していなかつ

た人はなからう。更に三十年、遠く近く先生を拝したいと冀う。（講師 池田豊人）

・名は体を表わす。聖山という名前からして柳田氏のイメージは嵩山の一角に住する白髪の者、あるいはガンジスの岸辺に坐する修道者を思わす。（仏教学科四回生 岩田美紀夫）

・七十日間連続団交を敢行した文学部長の著作『破るもの』を手にした時、それは驚くべき「花大紛争」の質を開示している。私にやっと職場へのうさんくさいおもいを払拭しえた喜びと新たな仕事場へのアイデンティティを感ぜさせてくれた。

自己否定の倫理と論理を学生以上に己れ自身につきつけた大学当局者が実在したということは想像できぬ一大事件であった。（講師 梶山雅史）

・柳田聖山——禅の研究者・人間の研究者・人間の人間者・人間。「達磨の語録」。達磨の「無功德」で家を新築してしまった人。（仏教学科三回生 樺島勝徳）

・この二年間、臨済録講説を通じて先生と対話できたことが一番大きな収獲だった。「他人の言葉や思想をかりず、自分の言葉で話さない」とにかく何につけても固定化・形骸化をとても嫌われる。（仏教学科四回生 木保美智子）

・すばらしい授業だった。どこがすばらしいかというと、先生の使われる言葉は、一つ一つが皆生きているのだ。花大に来て良かったと思った。禅学を専攻することにしたのも先生故であった。その先生が花大を去られると知ったとき、私は本当に驚いた。これは詐欺であると。（仏教学科二回生 清友正明）

・七一年六月、投票という異例の措置によって、F・W両君の復学が否決された教授会の席上、柳田聖山先生は「この広い日本の中で、彼にはこの花園大学しか帰るところがないんです」といい、あとは言葉にならず鳴咽になった。その夜、帰ってその言葉を想い、声をおさえきれず、オーオーと泣いたことを想い出す。（講師 桐田清秀）

・大学入りたてのところ、下宿の近くのカトリックの教会で牧師さんと「天国へ行くために神を信じるのではない」と論争した。花大に来て宗教について考える機会が多くなった。柳田先生にあの昔のその辺のことをお聞きしたいと思っている。先生に「禅の思想」を頂いて以来、触発された課題である。（講師 塩見敦郎）

・一九七四年にふとしたことから一冊の本『破るもの』を手にした。「今日の歴史的課題に対決し得る学問はつねに共同研究の場から生まれる。——教えるものと教えられるものは、最後まで区別されるべきではない」と。私の話すことばの全てがひっくり返された。（国文学科二回生 辻 清人）

・「壁が観るのであって壁を観るのではない」とは、壁観の語義として柳田氏が指摘される出色の解釈である。これはすごい、とこの頃思う。（教授 常盤義伸）

・花園大学がまだ旧態勢で研究室もなく、古い木造図書館の中広い階段を上って左に折れた奥の南側の暗い一坪ほどの部屋で、常盤大定博士編するところの「中国仏教史地図」とにらめっこして、禅語録のカード作りに専念しておられた三十才を出たばかりの横井聖山講師をむしろ懐しく想い出す。どんな宴会にも先生の顔を見ることがなかった。先生はひとり黙々と孤独の研究を続けられていたらしい。その艱難辛苦の正念相続が遂に報いられたというべきだ。いわゆる京都学派のエリートではなく、名もなき私学の学究が、並居る学者の城に名乗りを挙げたのである。（助教授 西村恵信）

・花大に来て一年、キリスト教徒として禅に学ぶという当初の意図は雑念にかまけておろそかのうちに終わりました。先生から頂いた『禅思想』もともかく読み通し読み返してはみたものの、結局なにもわかりません。ただ、キリスト教信仰での神の声ということについて新たな示唆を受けたような気がしました。

それは、頭（ちえ）・ハート（心情）による信仰を総括して実践につなぐ肚（決断）の信仰の問題です。神の声（啓示）は聞えない。それが聞えるためには自ら丹田を塞じ顛倒夢想の茨を払って心身脱落せねばならないのです。（教授 桧前敏彦）

・ 昨年の推薦入試で三日間四十時間余、柳田先生・横井先生と三人で五百有余の副申書に取り組んだ。

副申書の中で一つ柳田先生のことと言及しているものがあった。「入学案内に載っている柳田先生の笑顔の写真が実にいい。私は柳田先生に恋をしました。」と。この女子学生が合格したかどうかを覚えていないが、柳田先生が花園大学を去ることに一番失望を覚えるのは、恐らくこの女子学生であることに間違いないであろう。（講師 前中一晃）

・ 僕が先生から受けた印象の中で一番強いものをあげるとすれば、それは先生の側で時折見ることでできる、なんとも言えない、冷いほどの静けさである。周囲の熱を奪い取って自らは少しも沸騰しない冷却水のようなものだ。

（仏教学科四回生 文殊正規）

・ とともに、秋水。（幸徳ではない）の如き風体とは申せ、かつての白誓の美青年？ は不惑に達し、片や先生はとみれば、ナンニモぜんぜん変っておらん。どこかおかしいのであると私は固く信じる。（助教授 横井 清）

・ 先生は何びとに対しても、だれ一人差別することなく、軽んずることなく、人を鄭重に対応なさった。

自分の教えている学生たちが起した学園紛争はどのように映ったのであろうか。あるいは大学立法の成立は、どのように映じたのであろうか。先生は「タコツボ式専門技術家を量産する工場の事務員に変じた」と自己批判した。先生のお人柄は、今日のタコツボ式専門家の量産を許さなかった。（仏教学科四回生 吉田晃敏）

五、花園大学を支えた人々

(小野 信 爾)

大学において、学生は基本的に通過客であり、伝統を創り、支え、また革める主体は最終的には教職員である。そして、元号制論議とは関わりないが、明治、大正、昭和とそれぞれの時代にそれぞれの人物像が重なってイメージされるように、大学においても一つの時期にはその時期の担い手があり、他の時期にはまた他の担い手があつて、それぞれを特徴づけている。花園大学三〇年を文学部創立前後で時期を画するとすれば、前期すなわち仏教学部時代を象徴する何人かのお顔がおのずから彷彿しようというものである。

ただ、会者定離^{えしやじようり}、四年で入れ替る学生ほどの目まぐるしさはないとはいえ、ある周期で教職員も確実に交替していく。退任される方が一時期を代表される方であればあるほど、愛惜の想いは深く、時代の推移への感懐はひとしおである。一九七〇年（昭和四五）、「紛争」の硝煙のまだ失せやらぬ春、永年花大に教鞭を執られた禅宗学の緒方宗博先生、英語の川村淳先生が病氣その他の理由で退職せられた。文学部創設に荻須先生の片腕として奔走され、紛争中には学生部長として衝に当られた大石守雄先生も退職・帰山なされた。いずれも清貧——というよりは赤貧の花大を支えて教学に経営に砕身された方々であつた。

翌一九七一年には一九二三年（大正一二）に臨済宗大学の教授に就任されていらい半世紀にわたつて花大の教壇に立ち、卒業生のほとんどを教え子としてもつ福嶋俊翁先生（漢文学）が退職された。万事草創の花園大学は急遽「名誉教授授与規程」を制定し、その第一号を先生にお贈りした。物質的に報酬すること極めて薄かった大学のせめてもの謝恩だったのである。その前年、先生の教え子たちを中心の執筆者として『禅学研究』五八号を八福嶋俊翁教授喜寿記念特集Ⅴとして贈り、御退職の翌々年（一九七三年）には『福嶋俊翁著作集』（木耳社）の刊行を祝い、友人・門生あい集つて盛大な祝賀会を催したことも付記しておく。



千田豊泉師



能勢政次郎さん

一九七二年には、定年制の施行にともない自然科学の山内年彦先生、仏教美術の堂谷憲男先生などが退職され、一九七三年には一九三六年いらい母校の教壇に立っていただいた市川白弦先生、仏教福祉学科創設（六四年）いらい、主任教授として荊棘の道を踏破して下さった西原富雄先生が退職された（西原先生はその後七五年まで三年間、特任教授としてさらに御苦勞をお願いした）。

市川先生は戦争前後の時期に臨専の学監として大任を負われ、新制大学への移行後は教授として英語学、社会思想史などを講じてこられた。社会的にも進歩的仏教者として活躍され、ことに仏教者の戦争責任についての究明は先生の全存在を賭けてのお仕事であった。教授として最後にものされた論文が、『花園大学研究紀要』第五号の「軍神杉本五郎の禅」であったことの意味は深長だといわねばなるまい。いまは京都を離れて千葉県に閑栖されておられる先生の御加餐・御長寿を切に祈りたい。

ついで一九七四年、社会福祉学科の竹内啓先生、大江憲二先生が退職され、一九三四年から実に四〇年間、事務室の主として会計をあずかってこられた千田豊泉師も退職された。千田師は杏月という俳号で花大句会を主宰され、毎号の花大通信を杏月選の佳句が飾ったものであった。

七五年、国史学の橘恭堂、禅学の小倉宗徳、図書館学の石川良昱の三先生が花大を辞された。御三名とも長く事務職を兼担し、大学にその青春を捧げられ

た。宗盟心に燃えて清（赤？）貧の大学を支えられた御苦労があったればこそ花大の今日はある。すでにそういう時代ではなくなったが、飲水思源、御功勞に感謝したい。

退職された教職員のことばかり書いてきたが、この間、退職者の数をはるかに上まわる教職員が新任されたことはいうまでもない。古い伝統の花大に注ぎこまれた新しい血が、「日々に新たに、日に新たなる」大学を現出さすべく脈動している。大学を去られた方々もそのなかでこそ真に記念されるのである。

年度は学年度（4月～3月）

昭 20 年 以 前						
木村 静雄	崎山 宗秀	伊藤 古鑑	緒方 宗博	久松 真一	福嶋 俊翁	新 任 教 員
山田 無文	柴山 全慶	小笠原秀実	荻須 純道	柴野 恭堂	市川 白弦	
						退 任 教 員
昭23		昭22		昭21		
今津 洪嶽		坂本 静一		牧 茂市郎		新 任 教 員
方谷 浩明				川村 淳		
柴野 恭堂						退 任 教 員

昭34	昭33	昭32	昭31	昭30	昭29	昭28	昭27	昭26	昭25	昭 24	
山内 年彦 柴田 増実		橘 恭堂	石川 良昱		平田 高士 大井 際断		大石 守雄	味岡 良平	坂本 静一 山内 鉄郎	柳田 聖山	山内 淑人 富田 精
大井 際断	牧 茂市郎 柴山 全慶				小笠原秀実 山内 鉄郎	坂本 静一		崎山 宗秀 久松 真一	方谷 浩明	奥 大節	
昭43	昭 42		昭 41			昭40	昭39	昭38	昭37	昭36	昭35
筏野 泰嶺 鷺山 樹心	福島 雅藏 清水 茂	中島 利仁 平野 宗浄 室井 修	前中 一晃 池田 豊人	易 陶天 藤吉 慈海	竹内 啓 大江 憲二	堂谷 憲勇 小野 信爾	鈴木 重雅	森 弘宗 鷺阪 宗演	長尾 憲彰 鷺阪 宗演	高崎 正芳	桑原 公德 小林 圓照
味岡 良平 室井 修						伊藤 古鑑	今津 洪嶽	山口 三郎	富田 精		山内 淑人 柴田 増実

昭20以前	新任職員	退任職員
木村 静雄 市川 白弦 荻須 純道 千田 豊泉		
昭21	新任職員	退任職員
浜中 菊枝 高柳 得宝		

専任職員の異動（太字は現職者）

年度は学年度（4月～3月）

昭 49	昭48	昭47	昭 46	昭 45	昭 44
入矢 義高 林 信明	梶山 雅昭 史子 岡田 徹	宮岡 薫 吉田 清		横井 清 大森 曹玄 荻谷 信和 西 義雄 桐田 清秀	塚本 孝之 河野 太通 常盤 義伸 土岐 武治 西尾 賢隆 山口 緒方 三郎 宗博 川村 大石 淳 守雄
西原 富雄 森 弘宗	大森 曹玄 良昱 小倉 宗徳 橘 恭堂	竹内 啓 大江 憲二	山内 年彦 堂谷 憲男 河野 太通 西 義雄 篠 勲	福嶋 俊翁 水野 泰嶺	易 陶天 鈴木 重雅 緒方 宗博 大石 守雄 山口 三郎 川村 淳
昭 54	昭 53	昭52	昭 51	昭 50	
伊達 宗泰 寺川 真知夫 毛利 勉 三原 芳一 中村 櫛	大森 曹玄 川戸 昌	武知 京三 高橋 諄子 浜田 寿美男 三村 晃功	長谷川 常次郎 赤阪 一 上田 健夫 大井 際断 岡本 彦一 沖本 克己 竹中 智泰	松前 敏彦 桑原 洋子 塩見 敦郎 金谷 明子 竹貫 元勝 村本 詔司 (志村)	
	梶山 雅史 横井 清 山田 重正 宮岡 薫	山田 無文 稲岡 順雄 萩須 純道	長谷川 常次郎 松前 敏彦 岡本 彦一	塚本 孝之 柳田 聖山	

昭33	昭32	昭31	昭30	昭29	昭28	昭27	昭26	昭25	昭24	昭23	昭22	
西村 恵信		橘 恭堂				石川 池田 良豊 大石 守雄			森 弘宗	柳田 聖山	釈 義雄	
	池田 豊人					浜中 菊枝				市川 白弦 柳田 聖山	釈 義雄 高柳 得宝	
昭 43		昭42		昭41		昭40	昭39		昭38	昭36	昭35	昭34
西尾 賢隆	水野 泰嶺 辻 祐子	前田 明美 東海 文省	片岡 武夫 大崎 恭道	鷺阪 宗演	伊藤 順子	上 嶋 直樹 池田 豊人	小川 温子 河野 喬子 高島 海子	前田 紹誼 沢野 洋子	星 マサイ 塚本 孝之	小倉 宗徳 坂根 孝慈	鷺阪 宗演 松本 アサ	細合 喝堂 小林 円照
		西尾 賢隆 小川 温子	高島 喬子	荻須 純道 前田 紹誼		鷺阪 宗演	坂根 孝慈				細合 喝堂	西村 恵信

昭48		昭 47		昭 46		昭 45		昭 44			
伊達 滝 澄子 文教 小西 竹貫 勇三 元勝	塩見 健夫 片岡 武夫 早苗 博之 憲生	吉瀨 勝 梶野 博之 山口 正智	吉井 良子 友村 都	釈 元孝 芳沢 勝弘	坂岡 桂子 進藤 節子 福山 徹 辻 祐子	大橋 宏成 鷺津 孝道 池田 豊人 羽登直樹 (上嶋)	奥田 たい 遠山 照香 遠山 照香 平野 節子	赤沢 文子 斎藤千佳子 橘 恭堂 奥田 たい 東海 文省	平野 節子 福山 徹 小林 円照 東海 文省		
千田 赤沢 豊泉 文子 小倉 島田喜一郎 宗徳											
佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 大石 守雄 伊藤 順子 河野 義海	藤田 義光 山口 正智 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子	佐野 大義 伏見 範子 片岡 武夫 伊藤 順子		
昭 54		昭 53		昭52		昭 51		昭50		昭49	
由良 稻垣 清野 周介 姉川 秋山 富江 裕子	古家 玲子 盛井 幸道 名和 トヨ	太田 源盛 渡辺 龍雄	島崎 義範 河原 順子 城 文の 細川 俊彦	清陀 博生 宮部 紀子	松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	吹田 和光 松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	吹田 和光 松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	吹田 和光 松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	吹田 和光 松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	吹田 和光 松原 宏衛 宇野 房子 後藤 慶裕	
	四方由美子 吉井 良子 宇野 房子 太田 源盛	小西 勇三		水野 泰嶺 宮部 紀子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	竹貫 元勝 伊達 澄子 伏見 範子	

第四章 花園大学の教学



第一節 仏教学部時代の教学 (西村恵信)

第二節 文学部時代の教学 (桐田清秀)

仏教学科の教学 (小林圓照)

社会福祉学科の教学 (岡田 徹)

史学科の教学 (福島雅蔵)

国文学科の教学 (土岐武治)

第四章 花園大学の教学

第一節 仏教学部時代の教学

(西村 惠 信)

仏教学部時代（一九四九年四月～一九六六年三月）の教学が何を志向し、実際に何がなされたかということについて記録しておくことは、戦後の花大史を考えるための重要な作業であろう。もちろん、花大が仏教学部から文学部へと大きく発展することに伴って起った量的・質的变化の意味を肯定的に評価する人にとって、かつての仏教学部時代の教学は反動的要素を含むものとして批判されるべきものであり、やがてはまるで無かつたもののごとくに忘却されてもよいものかも知れない。

また、この急激な花大の変貌を歴史の必然的推移と見て、曲学阿世の哲学に生き、みずからも巧みに変身し、仏教学部時代から文学部時代への進展を一直線上に見ることによって花大の教学そのものが発展したかあるいは逆に後退したかというような価値判断を差し控えるような立場も無いとはいえない。

ところで、仏教学部時代の教学について記録することを分担した著者の立場は少しく別である。というのは、著者自身が花大仏教学部時代においては学ぶ側の立場に立ち、文学部時代には教えるものとして直接教学上の責任ある立場に立つという仕方、この一連の変遷の歴史を自分も身をもって生きてきた一人であるからである。そういう立場に立つものにとって過去は単なる過去というよりも、「古きよき時代」として懐しく想い起され、その持

っていた意味、いな、現在の新生花園大学のなかでも十分に保持しつづけられるべき意味についての探索を四六時中怠たりえないという事情によるのである。

そのような筆者の懐古趣味と無関係に花大は容赦なき変貌を遂げた。いやそれどころか、筆者自身もその変貌につながる作業のために大いに一役買ったことをも否定しえないのだ。旧い花大の教学を否定することは、筆者の場合全く自己否定そのものであり、それは人知れず血涙下る難行ではあった。旧い花大の教学が具体的に一つ一つ否定されて行ったのは、いうまでもなく一九六九年九月に端を発した七十日間に亘る教授会と学生との大衆団交の日々においてであった。この団交を通じてなされた仏教学部時代の教学の全面的否定は、必ずしも学生の暴力的方法によってなされたものとは言いがたい。それは、教授会自身の自発的改革でもあったことを当時の教授会の成員は半ば自負している。

そのようなことがどうして起ったのかといえば、仏教学部から文学部へと一挙に拡大した花大の教員陣容には、旧い花大教学について無知であるばかりか（あるいは悉知なるがゆえに）、むしろそれが温存している旧い体質に戸惑い、異和感を持ち、機会があれば否定したいと思う人が多かったからである。文学部新設当初の教授会は、まだ旧花大の教学を担っていたごく数人の教授による「教授評議会」なるものであって、これが教学全般に亘る最高決議権を持っていた。そして、多くの新参の教員たちは、主体的に教学に関わることのできる場を持たなかったのである。

仏教学部時代においては、その教学というものがどうあるべきかというような反省的問い直しがその当時の教授評議会員諸氏にはなかったといえる。むしろ宗門大学としての花園大学の教学は、既に学園創設以来九十余年の歴史の中で、さまざまな批判の体験を経験したものの結果であり、それはいわばもはや批判の余地もないものとして

承認されていたのであろう。仏教学部時代の花大教學理念は全く臨済学院専門学校時代のその無批判的踏襲であり、ただ、その理念の内実化としての学園諸設備の整備発展だけが教學担当者の当面の課題であったといえよう。つまり、教學の理念をめぐる厳しく熱い議論は見られなかったようであり、先ずは大学の設備充実、組織の拡充にこそ教授評議会のエネルギーは燃えたように思われる。仏教福祉学科の新設（昭和三十九年四月）と学生定員の倍增はそういう線上で実現されたのであった。

機関としての教授会が組織的に弱少であったために、教學の改善や推進への努力が、もっぱら経営責任者を兼ねている学長や学監（当時は教務学監が事務学監を兼ねていた）だけに委ねられていたばかりか、ややもすれば教學理念が経営理念に追隨するという妥協的構造が常識的なこととして認められていたように思われる。教學と経営の一体化のもつ危険性、あるいは、教學の経営への優先というようなことは、今日の教授会の通念からすれば、教學体制構造のいわば前時代的な姿であったとさえいえよう。

仏教学部時代の教學理念が、後の文学部時代のそれに対して著しく対照的である根本の理由は、教授会自体の意識の問題というよりも、むしろ教授会の組織上の一大変改に基づいているということは否定しがたい。したがって、教授会組織が今日のように拡大され整えられた以上、かつての教學理念や体制への復帰はもはや望みたいということ率直に認めねばならないのである。一言でいえば、仏教学部時代の教學理念は、いわゆる「花園村」という小部落の家父長的家訓であって、それは神聖にして犯すべからざるものであった。教員の低廉な給与一つをとっても、それは宗盟心（宗門祖師への報恩謝徳の意識）を装った経営中心主義によって正当化されるべきものであり、学生の反学園体制的運動もまた厳しく処罰されるべきものであったのである。教學の責任をその最先端で果すべき現場の教員や、教學上の利益・不利益を直接に蒙る学生の直接の意見が充分に反映しえない大学の教學の体制には、

何か不自然なものがあつたのである。そういう教学体制への不満に気づき、もはや旧体制の教授会を維持しえなくなった大学当局は、新たに教授会の構成員を一挙に花園大学専任教員（教授から専任講師までを含む）の全員へと拡大した。それはあたかも花園大学に学生による反体制闘争の起る前夜であり、これを予感した大学当局の保身の措置であつた。というよりも、新参教員たちの教学に関する新鮮な関心と教学のあり方に対する厳しい批判の前での旧体制の崩壊であつたという方が當つていたかも知れない。

このようにして、仏教学部時代の教学理念や体制は急速に変貌を遂げていったのである。体制によって漸く維持されてきていた仏教学部時代の教学理念は、新しい文学部時代の教授会によって殆んど全面的に否定される形となつた。新しい教授会の成員の中には、仏教学部時代の教学に馴れ親しんでいるものもあつたが、かれらは日々否定されていく旧花大の教学に、片や想いを留めつつも、片や不馴れな自己否定の言動によって自虐的な態度を余儀なくされたのであつた。設立者である本山当局はもとより、全国同窓生の諸氏がこの花大の変貌に容赦のない批判を向けたのもむしろ当然であつたであらう。

あれからもう十年近くの歳月が流れ、大学キャンパスも妙心寺の膝下を離れて総合移転し、花園大学は名実ともに宗門立（宗門後継者養成の宗門大学でなくて、宗門の設立している一般大学という意味での）の一般大学となつた。そして今新たに「花園大学という一弱小私立大学の教学理念とその社会的意義は何であるか」ということが真摯に問ひ直される時代を迎えた。今日ふたたび文学部単科大学としての花園大学の教学理念をめぐる議論が日夜なされているのは皮肉なことである。ともかく、旧花大の機構や教学体制の否定に終始することによって無理矢理骨抜きにされた花大百年の建学精神が、今また見直される時期を迎えつつある。そういう議論のためにも必要なのは、仏教学部時代の旧花大の教学についての具体的客観的な資料でなければならない。仏教学部時代の教学は如何にあつ

たかという事実の証言がこの際求められる所以である。筆者は、上來仏教學部時代の教学についてむしろ批判的に述べてきた。けれども、本章の目的は主として仏教學部時代の教学についての事実の報告でなければならぬ。それらについての評価は、読者各人によってそれぞれになされる時代がきているのである。

臨済学院専門学校が、新制花園大学として出発した年の十一月、学校法人設立者妙心寺派教学団は、学長に本学の前身臨済宗大学の同窓で、天龍寺僧堂を暫暇し妙心寺山内靈雲院住職として聖胎長養中の山田無文老師（当時五十才）を拜請し、学監には、前学監市川白弦教授を補佐して大学昇格に尽力した荻須純道教授を委嘱した。山田無文学長は、従来の学長が遠隔地の専門道場の師家を兼ね、年に数回の登学も容易でなかったのに対して、山内の塔頭寺院の住職として以外には公職を持たなかったもので、後に神戸祥福寺僧堂の師家として出世されるまでのまる四ヶ年は文字通り学長職に専念せられた。その間、山田学長は自坊靈雲院に蟄居せられ、教職員や学生の訪問に心よく応じられたので、教職員はもとより学生はよくここを訪ね、学長の薫陶を受ける機会に恵まれ、また学長もまたこれを通じて学内の状況を熟知しておられた。

学監荻須純道教授は、長野県妙心寺派大宝寺の住職として妙心寺派に籍を置き、平素は妙心寺塔頭福寿院に仮寓して大学経営の事実上の責任者としてよく山田学長を補佐された。一九六八年三月学監制が廃止されるまで実に十九年間に亘って、大学の経営と教学推進のため日夜粉骨碎身されたのである。新制花園大学草創期の大学づくりは名実ともに山田・荻須両氏の二人三脚によって着実に進められたのである。

仏教學部当時の花園大学は、毎年入学生定員五〇名で募集された（一九六四年度より仏教福祉学科の増設で百名に増員）が、入学者の実数は選科入学生や編入生の数名を含んでもわずか四十名足らずであったから、全学学生数

はせいぜい百五、六十名であり、学生たちは一人残らず、荻須学監教授と深い師弟関係をもっていた。当時荻須教授にとって未知の学生は一人も居なかったのである。学生たちも事務所を訪れ、よく荻須学監や事務所の教職員（総員八名）と懇談し、直接教職員から番茶の接待を受けたものである。学内においては、教学の理念というような抽象的観念は自覚されず、むしろ宗門学生と教職員の運命共同体的意識が強く、学間の最高府というよりは、徒弟教育の延長あるいは塾的要素の強いムードが支配していた。九十九パーセントの学生が臨済宗寺院の子弟であり、また女子学生も数名以下という実情のなかで、花園大学＝宗門大学の通念は自然に培かれていたのである。

「花園大学通信」第三号（一九五六年、十二月）冒頭に山田学長は本学の使命と題して次のように書いている。

本学の使命

「マナスルに立つ」という映画を見た。釈尊の祖国ネパールの首都から、数百人の苦力の背中を借りて、夥しい荷物を運搬しつつ登山にかかる。

展開されてゆく自然の風物、遙かなる雪峰、わけ上る溪谷、珍らしい野花禽獣、そして原住民の生活などすべてが美しい。最後に大映しにされた楨隊長の笑顔が、殊に印象的であった。

楨隊長が言われたように、頂上を極めるのは誰でも良いのだ、誰が極めてもそれは隊全体の成功である。否、協力者全員の成功であり人類の成功である。こうした事業に最も必要なことは、まことにチームワークである。

翻って本学の如き特殊学園には、特殊の使命のあることを自覚しなければならぬ。世間の学校と同じような事をするならば、何も本派（妙心寺派）が苦しい財政の中から無理をして、本学の経営をする必要は少しもない。社会にはいくらも、もっと完備した公立学校がある。

本学の使命はどこまでも堅実なる臨済僧侶を養成することではなくして、学者を造ることではなくして、人格を造ることではなくてならぬ。利巧者を造ることなくして、信頼される禅僧を造ることではなくてならぬ。

そしてその中から一人でも二人でも、禅という人間性の最高峯を極める者が現われるならばそれは即ち皆の成功である。妙心寺一派の成功であり、人類の成功である。

そのためには先ず寮を完備し、出来るならば極めて安い生活費で全員を收容し、学長始め教職員一同が、起居を共にし苦楽を分かち合つて、実践躬行、身を以つて指導に当らねばならぬと思う。そこに楽しいチームワークが形成されるであらう。

開山大師六百年遠諱記念事業を前にして、只この一事をのみ冀う。

山田学長が花園大学に託される夢がこの一文に密度高く語られている。当時の山田学長は、このような文章をいつも自筆墨書されていた。山田学長は、花園大学の理想を有能な禅者一個半個の打出にかけられていた。この、いうならば学問そのものへの幾らか消極的な態度は、学長在任中の終始一貫した無文老師の姿勢であった。仏教学部時代の教学とはまさにこの学長の教学理念に象徴されていたように見える。

もう一点は、山田学長が、花大の経済基盤をどこまでも妙心寺派一派に求めようとしたことであり、それが可能ならば全学生の授業料を無料とし、代りに全寮制の教育をすべく望んでおられたことである。山田学長は「学園通信」第一号（一九五四年十月）に次のように書いている。

……わたくしの年来の理想を申しますならば、今日着々と成果を挙げつつあります花園会（妙心寺派末寺檀信徒

の会）を真に堅実な宗門護持の団体に結成して頂きまして、一戸宛年額金五十円也を学園に喜捨されますならば檀信徒数約三十万と仮定しまして千五百万円あります。さすれば本派の子弟は大半月謝も会費も無料で、開山大師塔下に於いて、思いのままに禅教育が出来ると思います。そうなつてこそ始めて本末一体となつて親善し僧俗不二となつて教化の実を挙げることが出来ると信するのであります。

花園大学のこのような教学理念は、学園研究をこそ最高学府設立の意義と考え、人格形成は、行学一如の一半でしかあり得ないとする学内の教職員の共通理念といささか齟齬するものがあつた。たとえば、荻須学監教授は、同じ「大学通信」第三号において次のようにその信念の一端を披瀝しておられる。

……上求菩提の心はわれわれ学道の者にとつてはかたときも忘れてはならないことである。真理の探究を標榜する学園においてはこの精神に燃え立っていなければならないことはいうまでもない。

勿論仏道修行者と学者とは、そのいき方において異なるところのものがあつて、宗教的安心立命は身をもつて真実を把握しなければならないが、今日のように文化の向上した時代においては一応学的基础が要請される。しかし学者も容易には出来ない。学園の道もまた深淵である。

妙心寺派が学校教育に着手してからすでに年久しい。であるにもかかわらず、も一つ振るわないのはなぜか？不立文字の禅は学的なものを軽んじたきらいはなかったか？今日においては学者の育成によりよき理解と施設、組織といったものに一段の考慮が払われなければならない。前述のような純心な求道者の訴え（一学生が荻須教授に宛てた手紙で仏教者としての使命を述べたもの）は法幸であり尊いことでもあるが、同時にまたひた向きな学究

者のいずることも望ましい。

嘘のような話であるが、仏教学部時代には専任教員の研究室というものがなかった。専任教員も、非常勤講師として週一、二度来学される学外の人と一緒に学長室兼教授控え室で休息する程度で、講義と会議以外には自宅で学習をされたのであった。木造の旧図書館の二階の小部屋を改造して一人黙々として研究に勤しんでいた横井講師（現柳田聖山京大教授）はむしろ例外中の例外であった。

そのような教学体制が何に由来していたかといえば、宗門全体の学問軽視の風潮であったことは間違いない。極端に言えば大学人全体もまた学問研究を二義的なものと考え、専門道場における実践的修行を後継者養成の最終目標としていたのである。そういう気風へのささやかな批判が先述の荻須学監教授の一文であったであろう。

花園大学の教学のあり方についての、より自由で痛烈な批判をしたのは、世界的視野に立った禅者久松真一教授であった。教授は当時から大衆禅を提唱し、「絶対大乘」の精神を主張しつつけておられた。

終戦後間もなくまだ京都大学仏教学主任教授であった久松真一先生が、花園大学の講壇に立って「禅学即今の課題」と題する十三回の連続講義を行われたことがある。（昭和二十年十月六日より開講、そのなかに次の一節がある。『禅文化研究所紀要一』、所収十九頁以下）

単なる学問的批判は、宗教の内面的なものを理解し得ず、外面的なものに陥る弊もあるが、しかし反面に、理性的な批判をなし得る点がある。全くの素人であっても、その批判力が玄人の病弊を扶けるといふやうな事は、屢々ある事で、素人の批判も決して無視することはできないと思ふ。一般的に云って、玄人は、自分の立場を、外から見

てゆくことができない。却って素人は自由に玄人の病弊を看破することができる。従って新しいものを創造するには素人が参与することが必要であると思ふ。……私は、禪についても、この素人的なものの出現することを望みたいのである。そしてかかる点で従来の禪門に於いてあまり重んぜられなかった学校教育が盛んになることを望みたいと思ふ。

学校教育は、従来の禪門に於いては、禪堂に行く一つの前段階にしか過ぎなかった。即ち禪堂に行く事が、この宗門の教育の最後であって、学校それ自身の意義は、その一つの前段階として、従属的な意味しか認められていなかった。勿論禪堂へ行くことは大切な事である。しかし学校教育を単に禪堂に行く前段階として見てゆくことは考えなおさねばならない。……伝統を徹底的に批判するやうな働きを十分養って、伝統といふものを却って反省させて、伝統の硬直を防いでゆく。伝統は学校教育から絶えず刺激を受けて新鮮味を保ってゆく。……学校と禪堂と宗門の三位が真に密接な関係を保って、完全に一体となつてこそ、はじめてここに禪の宗門が働いて、社会に役立つものとなつて行く事ができると思ふ。この点で、私は学校の教育も改革されねばならない。年限にしても、講義の内容にしても、十分に検討を加へて新しい学校の制度を作つてゆく。盛んにしてゆく。禪門の宗政家には、特にかかる点に十分な自覚を持つて、力を注いでゆく事を望みたいと思ふ。

久松氏のこのような宗門大学への期待は、その後の花大教学に大きな反響を与えることはなく、仏教学部時代には、まだ大学教学の全面的改革というものがなされぬまま、むしろ旧体制が受けつがれ、反体制的行動が噴出するまでには至らなかった。

当時、花園大学の専任教員の顔ぶれは次の通りであった。（一九五四年度）



小笠原秀実教授

山田無文（提唱）、稻岡順雄（宗教学・社会学）、小笠原秀実（倫理学）、福嶋俊翁（東洋文学・五山文学・東洋哲学史）、川村淳（英語）、市川白弦（英語・仏教哲学）、平田高士（独逸語・梵語）、山田重正（体育学・公衆衛生）、今津洪嶽（仏教学特講・三論教学・禅学原理）、伊藤古鑑（仏教学特講・天台教学）、柳田聖山（仏教学特講・禅宗史書）、柴山全慶（禅学概論）、緒方宗博（英文禅録・布教学）、木村静雄（法儀実習）、大井際断（禅学講読・教育原理）、荻須純道（仏教史・概論、講読）、牧茂市郎（生物学）、石川良昱（仏教学特講・唯識教学）、大石守雄（仏教史学特講、清規史）、味岡良平（教育学）、柴田増実（西洋哲学史）、森弘宗（法儀実習）、長尾憲彰（教育心理学）、池田豊慶（布教学）、桑原公徳（人文地理学）、高崎正芳（梵語）、西原富雄（社会福祉学）

これら専任教員のうち、仏教学部時代の教学の中心的役割を果されすでに退職された人々の中には次のような人々が特に思い出に残る。

小笠原秀実教授 愛知県海部郡の浄土真宗寺院の生れで、大谷大学教授を経て本学に転じられた。すでに大正末年には本学に出講しておられたようである。山田無文学長や市川白弦教授などは先生の愛弟子として先生から思想・文芸・詩作等の個人的教えを受けられたと聞く。一九五五年に先生の退任に際して謝恩会が催され、市川白弦教授は「小笠原先生の思想」と題して先生の面前で講演されたが、その頃の小笠原先生はもう恍惚の人であった。「手をふりふり その大いなる足跡を かえりみま

に「君去りたもう」というのはその時の山田学長の送別の詩である。この詩は、小笠原先生の秀句の一つ「足跡の残らば残れ足跡の消えなば消えね　ひとり旅行く」を受けたものであろう。市川白弦教授は小笠原先生の想い出を次のように書いている。

（「花園大学通信」四〇五号所収）

先生は共產主義を好まなかった。唯物論が先生の「汎意識的観点」と相容れず、弁証法が先生の「帰納」演繹法」と異なり、一党独裁が先生の自由精神に反したからである。しかし資本主義と共產主義とを並列的な反対物と見るべきではないというのが先生の根本信念であった。江西省瑞金に解放地区が生れたことを、先生はガンジーの独立運動とともに喜ばれ、一夕わたしと酒をくみかわしながら長歌をつづられた。その一節「批政暴虐人獣の、悩みに哭きし民四億、眠れる獅子の意にさめて、今解放の武器に起つ。倒せイムベリアリステン、樹てよ中国ソビエット、排撃劣紳土豪の徒、戦旗は靡け四百洲。」丸金醬油社長の依頼によって小豆島寒霞溪の一番札所の御堂の建築を設計され、工成ってその札所の図絵に刷り込まれた先生の「般若心経意」にいう、「形あるものはすべてこわれてゆく。花のように人のように楼閣のように。されど形なきものは虚空のように大空のようにいつまでもこわれることを知らない。形あるすべてを捨てた心。かわり行くすべてを離れた心。それが空の心である。みどりの大空のように、空の心は限りもなく、涯でもなく、増えることもなく、減ることもない。こわれゆくこの世のすべてを離れるが故に、生きることに迷わず、躓づくことにも惑わず、ただすべての恐れを離れる。若葉にしたたる日の滴が、すべてを包みすべてを育くむように、空の心は何ものをも許し、何ものをも育てゆく。それは限りなき光であり、楽しみであり、無我のさやかさである。ほがらかなる空の心よ、あたたかく滴る空の光よ。……」

小笠原教授には一九二四年の『純粹美学原論』を始め、『万葉の思弁的研究』、『禅文化の体系』など十余の著書

があるが美学を論じたものが多い。先生が本学仏教学部時代に講じられたものは倫理学であった。晩年の先生は古いノートを讀まれたが、それは最も新鮮なものに感じられた。先生はパチンコ遊戲の無益論をしばしば唱えられた。



柴山全慶教授



今津洪嶽教授

柴山全慶教授 一八九四年、愛知県生れ、十四才で出家得度、上洛して花園学院で修学、後、関西学院高等部に学んだが、発心して南禅僧堂南針軒老師の爐^ろに投じた。在錫十一年して罷参、南禅塔頭に住した。一九三九年四月より臨済学院専門学校教授として禅学を担当、一時鈴木大拙氏の推挽によって大谷大学に出講されたこともある。柴山教授の講義は、『臨済禅の性格』と題する小著をテキストとされたが、その新鮮な禅学概論は学生に親しまれ、とりわけ教授の飄々とした話術と美男の風貌は「学全慶」の渾名を恣にしたものである。著書も多く、『禅の牧牛図』や『江湖風月集』などの豪華本をはじめ、『禅心禅話』、『越後獅子禅話』、『臨済の禅風』など平易に説かれた禅の啓蒙書は多くの読者をもった。

今津洪嶽教授 一八八四年、岐阜県生れ、一九一二年東京真宗大学研究院卒業後、更に奈良東大寺勧学院にて仏教学を研究、東京宗敎大学、東京天台宗大学、東京豊山大学、東洋大学、駒沢大学、日本大学等の教

授を歴任、一九四九年より臨済学院専門学校教授として赴任され洛西宇多野の妙光寺に住されていた。教授は臨済禅隠山・卓州両室内を究めたことを自負されており、代表的著書に『碧巖集講義』上・下、『金剛經講義』等がある。論文は枚挙に暇がない。一九六二年文学博士の学位記を授与された。教室では講義の始めには必ず「開経偈」と「仏祖の名号」を唱えられた。その頃の講義の内容は「宗教の二大類型」および「師資相承論」であった。



福嶋俊翁教授

福嶋俊翁教授 一八九三年愛媛県生れ。今治中学校、花園学院高等部、京都帝国大学文科大学哲学科選科修了と進み、直ちに京都府立第五中学校、兵庫県立第二神戸中学校の教諭、龍谷大学講師等を経て、一九二三年より臨済学院学部専門学校教授として本学に赴任された。以来五十有年、本学の教学に専念せられた。山田無文老師、市川白弦教授らはその薫陶を受けられたという。中国哲学史に造詣深く、その学問は先生の風貌に滲み出で、その中国人的風格はこの道の大家を彷彿とさせた。その論著は『福嶋俊翁著作集』全五巻（木耳社・一九七

四）に収められている。

市川白弦教授 一九〇二年岐阜県生れ。県立東濃中学校卒業。しばらく下米田村小学校に奉職の後、一九二一年臨済宗大学に入学、一九二六年卒業。直ちに花園中学教諭となり同時に臨済宗大学図書館勤務、一九三六年臨済学院専門学校教授、一九四三年より一九四九年まで同校学監兼学部長を務められた。一九五二年より同五七年まで京

都市教育委員。古い著書に『仏教哲学概論』（翻訳）、『大慧』その他があるが、『仏教者の戦争責任』、『禅と現代思想』など新しい著書では教授自身の仏教者としての戦後責任を追求するものがあり、世間の識者から高く評価されている。論文には、仏教と社会主義の接点を論じたものが多い。



富田精教授

富田 精教授 一八八四年福井県生れ。福井中学校、東京高等師範、京都帝大文科大学、医学部大学等に学び、一九一八年医院開業、後、富田病院々長となる。一九二七年医学博士、一九五二年、社会福祉法人博愛会理事長となる。一九四九年本学の教授となる。著書に『左利右利』、『結核を治せ』等がある。教授の温厚篤実な人格はよく学生の慕うところであった。



緒方宗博教授

緒方宗博教授 一九〇一年大分県生れ。豊岡中学、臨済宗大学、米国サンフランシスコ・エマーソンスクール等を経て、相国僧堂掛搭。一九二四年臨済学院専門学校舎監、一九三七年より同校教授、一九四一年大谷大学文学部宗教学科卒業、一九四九年本学教授、一九四九年と同五年、シカゴ大学神学部留学。教授は本学出身者にして禅の海外布教に着手せられた草分けの人であり、国際交流のために本学で果たした役割は大きい。著書に『A guide to Zen Practice』『Zen for

the West』『禅宗読本』などがある。自坊に「国際禅研究センター」を開設し、外人の禅指導に生涯を捧げられた。



伊藤古鑑教授

伊藤古鑑教授 一八五〇年、愛知県生れ。花園学院卒、本学では終始「天台教学」を講じられたが『大般若理趣分の研究』、『禅宗日課経新録』、『禅宗聖典講義』、『金剛経講読』など經典の解釈や法式に関するものあるいは『臨濟』や『栄西』など禅宗祖師の言行を述べたものも多い。晩年は自坊の岐阜県善教寺から通われ、教場での教授の岐阜弁には特別の味わいがあつた。教授はつねに学生に宗門における花園大学の重い役割と使命を諭されたことが印象ぶかい。



牧茂市郎教授

牧茂市郎教授 一八八六年生れ。一九一一年広島高等師範研究科卒業。一九三二年理学博士。爾来、台湾総督府農事試験場教師、台湾総督府師範学校教授、京都帝大理学部動物学研究室嘱託、京都府立第三中学校教諭を経て、一九四七年五月本学教授として赴任された。教授は爬虫類の権威として著名な生物学者であつたが、本学の生物学では専ら性教育に終始せられた。克明に騰写刷りされた性の図鑑は学生の興味を煽った。教室はいつも満席であつた。その理由の一つは、教授の講義には試験がなく、成績は平常出席一回五点というように評価されたことにあ

ったようだ。百点をもらった学生も、多くいたようである。山羊のような顎ひげをつけた小さな先生が杖をついて通われた姿が眼に浮ぶ。



久松真一教授

なお、非常勤講師ではあるが、特につけ加えたい先生に久松真一教授がある。教授は一八八九年、岐阜県生れ。岐阜中学、第三高等学校、京都帝国大学文科大学哲学科と進み、早くより西田幾多郎に師事して、その学風を継承した。一九一五年、二十六才にして妙心僧堂池上湘山について大悟徹底した。一九一九年より臨済宗大学教授、以来竜谷大学、講師を兼任し、後、京都大学仏教学教授となり、花園大学仏教学部の講壇にも立っておられた。久松教授の仏教学は、起信論あるいは華嚴哲学を基礎とした仏教的宗教哲学であり、絶対的な生仏一如がとかれ、絶対無的主体の有的妙用を構造とする絶対大乘を提唱された。教授はまたかかる哲学の実践のために「学道道場」や「心茶会」を主催されて大に行学一致の道を学生と共にされていた。一九三四年文学博士を受領された。その居室抱石庵は妙心寺塔頭春光院の茶席であり、これを訪れる学生には先生みずからお点前をして待遇されるのであった。教室には本学学生の他に多くの学外の聴講者もあり、緊張した雰囲気の中で和服姿の先生の講義は静かに進められた。したがって教授の講義はそのまま原稿となつて、今日『久松真一著作集』全八巻（理想社・一九七〇）に悉く収められている。

そのほか非常勤講師としては池長澄（哲学史・哲学概論）、高橋良三（経済学）、山内淑人（自然科学概論・科

学)、藤原了然(仏教学概論)、森蘊(仏教美術史)、三村勉(哲学)、松本米治(政治学)、竹田聴州(日本史)、金子光介(外国史)、石川栄吉(人文地理学)、勝田吉太郎(社会思想史)、太田進(東洋文学・中国語)、清水茂(体育実技)、西義雄(原始仏教)、光山文達(布教実習)、城下かず(仏教聖歌)、藤直幹(日本史)、渡辺一(社会思想史)、山内年彦(生物学)、藤岡謙二郎(人文地理)、山口三郎(教育学)、橋本崧(ドイツ語)、中原文雄(布教実習)、森暢(仏教美術史)、西村睦男(人文地理)、谷岡武雄(地誌学)、桂木善啓(布教実習)、富田義雄(数学)、阿部正雄(宗教哲学)などの人々があつた。

学生総数約百五十名及至二百名に対して、専任教員数が約三十名という数字は、学生七名に一名の専任教員という恵まれた教学条件を具体的に示すであらう。当時、非常勤講師として本学の教壇に立っていた人々には、著名な学者も多く、それらの人々は、花園大学の教員や学生をこよなく愛しておられたようである。その理由は、小規模大学特有の家族的環境であり、教職員の禅者的振舞いへの共感であり、受験さえすれば殆んどが入学できた学生たちのもっている豊かな個性であつたに違いない。学外からの非常勤講師たちの本学におけるこのくつろいだ気分はややもすれば花大教学の自立を妨げる要素となっていたかも知れない。ともかくこの風潮は新制大学になる以前からのものであつたらしい。下村寅太郎氏は学外講師として臨済学院専門学校の教壇に立つておられたころの想い出を、氏の著『遭逢の人』(南窓社、一九七〇)に書かれている(同書、一六一頁以下)。

臨済宗大学——現在のことは知らず、当時は、京都に数多い仏教大学の中で多分最も簡素な——これは修辞学的ない方なのであるが——大学であつたろう。その頃、京都では宗教大学以外には哲学の講師を勤める所は殆んどなかったから、私も色々な宗教大学の講師を遍歴したが、この大学には一番長く——東京に移る最後まで、勤めた。清潔

な気分が最も印象に残っている。森本さん（森本省念老師）との遭逢もこの想念の契機の一つであろう。

森本さんは何時も粗末な、洗いざらしの木綿の黒衣の素足の雲水姿であった。省念老師のイコノグラフィはこの外にない。烈しい修練の果てに初めて出てくる骨相を感じた。しかし何時も笑いを内に含んだ開放的な自由さがあり、つい忸れ易くせしめる。しかし今にして思えば、余り忸れて更に接近したら、ずばりやられたことであろうと思う。教官室と一緒に昼食をするのであったが、森本さんは何時も握り飯で、手掴みで食べられた。ある時、私の弁当箱をのぞいて、菜が残っているのを見て「残さるのやったら貰いまっさ」とさっと無造作に手を延ばして召し上った。咄嗟に、禅僧の機鋒はこういう所に出るものかと、名状しがたい感銘をうけた。

この学校は臨済禅の唯一の大学で、森本さんは最も重要な禅学を担当されたのだが、道元禅師の『正法眼蔵』を演習のテキストにした。いうまでもなくこれは曹洞禅の典籍である。これを臨済禅のテキストとして使うのである。これは見識と自信とがなくては出来ないことであろう。『正法眼蔵』でも何でも自由に扱えるのでなければ本当の禅ではないというのが森本さんの本心であろう。型式化した宗風に対するチャレンジであったかもしれない。眼蔵の次には親鸞の『教行信証』、その次には『聖書』を使うのだといって、森本さんはいたずらっぽい顔をしながら「本山から文句をいってくるのを待っているのや」と笑っていわれた。間もなく私は東京へ移ったのでその後のことは知らない。

これら外来講師にとって、教育研究条件の貧困はむしろ本学教学の美德とさえ映ったものであろう。しかしながら、本学専任教職員にとっては、それは自己の学問的生命にかかわる危機的状況であったので、山田学長、荻須学監は取り敢えず教学諸設備の充実に日夜努力を重ねられた。妙心寺開山無相大師六百年遠諱を機会に学寮の改革、

教室の改築がなされ、更に図書館・研究室の新築、そして本館の改築と殆んど昔日の面影を留めないまでに諸設備の充実がなされたのである。他方、若手教員たちによる自発的な研究活動も活発に行われていった。その主なるものを挙げると、先づ一九四九年の秋から横井聖山講師（後の柳田聖山教授）が中心となつて坂本静一教授の指導のもと敦煌出土の禅宗史として貴重であつた『祖堂集』（朝鮮本）の研究会が発足し、そのために手刷の謄写版テキストが会員によつて作られていったのである。そして、このようにして作られた古い禅録を広く学外の識者に頒つことになり、「花園大学祖録テキスト刊行会」の名において凡そ百冊程の頒布がなされ、その後約十年間に亘つて『禅門撮要』、『禅門拈頌集』、『法集別行録』と主に朝鮮で複製あるいは編集された禅書が次々と刊行されていったのである。貧弱な研究条件のもとで花園大学の禅学がわが国の学会において今日のような注目を得るようになったのはまことに横井聖山講師の努力によるものであつたことを特記しなければならない。この研究会の様子を柳田教授は次のように述懐しておられる。

いまから考えてみますと、謄写刷『祖堂集』は、雑な本で誤植もかなりございます。実はそれから三回刷つておりますが、一番始めは、とにかく五、六人が集まりまして、一刻も早く『祖堂集』を読みたいということで、朝から書き始めると、大体、一日に五、六枚は書けるわけで、そうすると夕方にそれを待っておりまして、刷り上げると、直ちに読書会の方が始まる。夕方五時か六時頃から、十二時頃まで掛けて、その日書き上げられたものを読み上げていく。これを指導しておられたのは、坂本静一という、飯田税隠門下の老居士で、以前は朝日新聞に勤めておられた方であります。釈瓢斎と並ぶ税隠門下の豪傑で、佐賀出身の大変な人物でございました。その坂本先生がゴリオシで、今刷つたばかりの白文の『祖堂集』を読み上げる。とにかく漢字で書いてあるのだから、漢和辞典一

冊あれば読めないことはない、一人づつ当てまして、ウソでも何でも、とにかく言え言えというのであります。点も何もない白文をムリヤリ読ませるのです。……………そんな読書会がしばらく進んだところで、百部ぐらい作ろうじゃないかということに切り替わった。(中略)これが忽ちなくなりましたので、もう一度作ろうということ、三回目には私が全部自分で細かに騰写版の原紙を切りました。……………『駒沢大学仏教学部論集第九号』所収『正法眼蔵』と公案」

柳田教授は、その後(一九五九年頃)も、若手教員や学生とともに毎週木曜日の放課後「中国高僧伝」の輪読会を主宰されるなどして後進の指導にも余念がなかった。

当時の教員の中で学生に多大の全人格的影響を与えたのは禅学の坂本静一講師であった。坂本先生は一九五〇年四月から同五年十二月二十日五十九才で急逝されるまで花園大学に於いて教鞭をとられた。先生は朝日新聞記者として三十年活躍されたが、十九才にして円覚寺で坐禅を始めたという古参の居士で、最後は飯田槐隱老師の下で安心を得られたらしい。朝日新聞社を退いて花園に近い安井に閑居しているところを山田学長のすすめで本学の教壇に立たれたのである。当時「坂本グループ」と呼ばれた学生グループの一人である平野宗浄現本学教授の想い出記には次のようにある。

老漢の大学での講座は禅学の理論篇と、講説とがあったが、此の理論篇が極めて難解であると云う事は学生の間で有名であり、又随分沢山の落第者があったのである。老漢の自宅での講義はそれより又一段と手酷いものであった。一人一人腸を刳られる様な、ものすごい痛罵を浴せられ、烈しく追求し迫られたもので云わば猛烈と云う可

きものであった。奥様が台所に居乍ら、それを聞くのがつらくて、我々の講義の時はしばらくの間、外へ出て行かれるのが常であった。講義課目は、伝心法要、頓悟要門論、臨濟錄、洞山錄、正法眼藏、永平広録、無門関、証道歌、碧巖錄、趙州錄、祖堂集、等であった。大学での講義は大体一定していた様だが、我々坂本塾の四、五名に対する講義は、始めの頃は、我々に坐禪をさせておいて、その間に老漢が提唱風に説かれる所謂口宣と云われる方法が多かったが、腦溢血で倒れて後は、ゼミナール式の指導方法をとられる事が多かった。それに厳しかったのは一日たりとも休む事が出来なかった事である。一日でも休んだら翌日はそれこそ大変な叱られ様で全くスパルタ式教育とでも云ってよい位だった。老漢の語録の読みは、今日の漢文学者の科学的方法とは又少し違い、禪の体験内容から判読して行かれ、仲々強引、痛快なものだった。今はなき今津洪嶽先生も祖堂集を始めて回読した当時の様子を回想せられ、老漢の語録読解力に驚いたと云って居られた。現在大活躍中の柳田教授も、その当時老漢の感化を大きく受けられた一人である。思うに臨濟学院専門学校が花園大学と昇格した発足当時、所謂禪哲学と称する科目が始めて出来た基礎時代に於て、老漢の花園大学禪宗学にあたえた影響は全く大きいものがあり、今後何らかの形で存続してゆくものと信ずる次第である。

我々坂本門下で懐しい思い出は山登りである。愛宕山などは表から裏から右から左から、何回も登らされた。あの周辺の山々で登らない山は無い位である。道の無い所を真直ぐ頂上まで登れとか、このままずっと谷まで下れとか、全く無茶苦茶な命令をされるのだが、それを又老漢が先頭になってガサガサと実行してゆくものだから、こっちもついて行かざるを得なくなるのである。或時は空也の滝などへ行つて滝に打たれて坐禪したりするのだが、これ又老漢が良しと許可を出すまで滝の中から出てはならないのである。しかしブルブルふるえ乍ら滝から出た後、老漢が世話して下さった芋粥を食べた時のうまさは忘れられない。比叡山でお堂を借りたり、高山寺の金堂を借り

て徹宵夜坐をした事もある。真夜中、睡魔の最も激しい頃、ローソクの火の下で、老漢が口宣でしみじみ説かれた説法は今でも、すぐよみがえってくる。接心も又方々でやった。養徳院、福寿院、願王寺、先生の自宅、室内では文字通り悪辣手段でもって我々学生を錬磨されたものである。老漢特製の独創的公案で窮地に追い詰められた。又老漢の室内の特色は単に公案だけでなく、昨日あった事、今日の出来事などで随分我慢、慢心をたたきつぶされた。接心が終るとよく皆で酒を飲んだり、一緒に風呂屋へ行ったりもした。風呂屋でも例の調子で、老漢が「潜れ」と命令すると、我々は一斉に潜ると老漢が頭をおさえつけてなかなか離してくれない。風呂のお湯を飲まれ、アプアプした事もある。酒を飲んでもゲイゲイ吐くまで飲まされる。酒宴酣になると、老漢得意の猥談が始まる。これが又実に妙を得て少しも厭らしくなく、皆心から呵々大笑したものだ。しかし我々若げの至りで此の辺でついお調子に乗ってしまうのであるが、そうすると、早速翌日がつちりとしぼられる。兎に角油断も隙もならない。夏にはよく素裸で坐禅をさせられた。素裸になるとゴマカシが絶対にきかない。これで結跏趺坐を三時間も四時間もぶつつづけて坐らされたものである。

『禅文化』三十九号、五十頁以下

荻須教授もまた大石守雄助教授や橘菰堂講師などともに、毎年仏教史学専攻の学生十数名を連れて関西地方一円の仏教史蹟踏査をされた。師と起居をともにしての数日の調査旅行は、同行の学生たちに大きな学問的刺戟を与えたに違いない。

また、一九六〇年から「頂相画賛研究会」が、森暢講師を中心に、福岡、今津、荻須、木村、横山、大石などの教員によって開かれたり、「日本禅宗僧伝研究会」が荻須、大石、石川の各教員によって開かれるなど、教員の自発的な研究ムードは昂っていったのである。

なかでも、一九六三年から「禅学研究」の月例会が開かれ、毎月定期的に若手専任教員の個人研究発表と質疑応答の会が行なわれた。その発表と題目は次のようであった。

橘 恭堂

わが国における大般若経信仰の概観

小林圓照

マンダラの起源

西村恵信

禅と禅宗―新しい宗教学の動向

高崎正芳

大乘阿毘達磨集論について

石川良昱

禅門における俳句的なものについて

驚阪宗演

天台における二十五方便について

森 暢

頂相について

大石守雄

清規の書誌学的研究

吉富宜康

禅と現境について

太田 進

宋代国語小説に見る仏教的なもの

平田高士

日本臨済禅における行

これらの研究発表会は、すべて個人の自発性に基づいてなされ、いかなる公的学会組織にも属さぬ研究会であった。そういう場において各人の研究領域が定着し、深められていったのであり、仏教学部時代に入って始めて起った新しい教学発展の熱気ある運動であったわけである。

一九五七年五月より、月曜日第二講時が、全学アッセンブリー・アワーとして設定された。従来、月曜日第一講時は学長による全学的実践禅学（提唱）の時間であり、この時間がよく外来講師の講演に振り変えられたが、提唱の時間を更に充実すること、作務の時間を創設すること、及び学生に自治活動の時間を与える目的で新設されたのが、このアッセンブリー・アワーであった。この時間帯は仏教学部時代の建学精神を実践するために実に有効に利用されたのである。作務の場合には、山田学長が校庭に出て作務の精神を率先垂範された。当時は、大学に用務員がいなかったのである。後に用務員が雇用されたが、彼は七十代の老爺であった。また学生はこの時間によく学生大会を開催し、学生自治活動が積極的になされた。更にこの時間には有名講師による講演会が頻繁に開催された。その頻度は今日の比ではない。その他いわゆる二祖三仏忌（達摩忌・妙心開山忌・仏降誕会・仏成道会・仏涅槃会）や創立記念日あるいは文化祭を利用して行われた講演会は、全花大人が聴講し大きな刺激を受けたのである。いま大学通信に記録されている仏教学部時代の講演会の講師と演題を挙げれば次の通りである。読者はその多彩な顔ぶれに驚かれることであろう。

西谷啓治京大教授

現代思想と禅 54・5・25 創立記念日

森 蘊奈良博物館技師

芸術と科学 54・6・8 全学集会

E・フィリップス奈良女子大教授

私の求道 54・6・22 同右

堀正人関大教授

英国における仏教 54・6・25 同右

ヴァリシンハ印度大菩提会主事

印度の仏教事情 54・7・2 同右

山田無文本学学長

碧巖録提唱 54・7・10 夏期講座

今津洪嶽本学教授

禅と日本文化の独自性 54・7・10 同右

久松真一 本学教授

森 蘊 本学非常勤講師

俳人萩原井泉水氏

市川白弦 本学教授

入矢義高 名大教授

山田無文本学学長

大井際断 本学講師

今津洪獄 本学教授

緒方宗博 本学教授

ウーティティラ、ラングーレン 大学教授

サムチャンド・V・シャー氏

牧田諦亮 京大教授

下程勇吉 京大教授

米国詩人ポール・レップス氏

山田無文本学学長

緒方宗博 本学教授

塚本善隆 京大教授

作曲家黛敏郎氏

大衆禅 54・7・11 同右

古美術と近代精神 54・7・12 同右

禅と俳句の道 55・5・10 禅文化講演会

小笠原先生の思想 55・5・25

麗居士のことども 55・6・25 禅文化講演会

碧巖録提唱 55・7・9 〱 11 夏期講座

禅僧と教育 55・7・9 同右

禅と念仏 55・7・10 同右

観音信仰について 55・7・11 同右

講演 56・4・23

印度におけるサルボードヤ運動 56・5・27 創立記念日

新中国仏教事情 56・6・18

進歩主義と保守主義 57・5・25 創立記念日

講演 57・6・17 アッセンブリー・アワー

新中国訪問報告講演 57・10・28

欧米仏教事情 57・12・9 成道会

仏教復興の気魄 58・5・26 創立記念日

交響曲ねはんについて 58・5・30

アムリタナンド、ネパール大僧正

山田無文本学学長

緒方宗博本学教授

森 暢本学非常勤講師

山田無文本学学長

久松真一本学教授

鈴木大拙元本学非常勤講師

柴田増実本学講師

藤吉慈海京都大学助手

武内義範京大教授

古川大航妙心寺派管長

山田無文本学学長

森暢大阪工業大学教授

イスマエル・キレス、サルバートル大教授

淡川康一立命大教授

金子光介同大教授

山内得立京大名誉教授

白石 凡朝日新聞論説委員

ネパールの仏教 58・6・20 接心

無門関提唱 58・7・11~13 夏期講座

禅と西洋 58・7・12 同右

禅と美術 58・7・13 同右

無相大師について 58・9・8 国際宗教学宗教史学会

臨済禅 58・9・8 同右

東洋思想の特殊性 59・5・25 創立記念日

フランスの学生々活 59・6・3 白雲寮教養講座

欧米における禅の契機 59・11・7 文化祭

原始仏教における禅定思想の問題 59・12・8 成道会

北米開教報告 60・1・19

仏蹟巡拝報告 60・2・23

欧米文化と禅 60・5・25 創立記念日

人間の問題 60・10・17

近世の禅画について 60・11・10 文化祭

ねはん図を拝して 61・2・15 涅槃会

世界思想における仏教の位置 61・5・25 創立記念日

これからの日本 61・5・27 創立記念日

鈴木宗憲華頂短大教授

プラーニ印度アシラム道場主事

アラン・ワット米國禪研究家

西義雄東洋大教授

松原泰道妙心寺派教學部長

岡本清一同大教授

宮地廓慧京女大教授

山口三郎本學教授

佐藤幸治京大教授

宮裡顯秀妙心寺派宗務總長

猪木正道京大教授

市川白弦本學教授

牧田諦亮京大教授

ホボケン・スイス禪画研究家

木村靜雄本學教授

原一郎早大教授

藤吉慈海本學教授

柴山全慶元本學教授

新興宗教の実態 61・11・9 文化祭

ヨガについて 62・4

講座 62・5・14

菩薩の願行 62・5・25 創立記念日

沖繩の宗教と政治 62・6・1

現代と学生と思想 62・11・10 花園法皇忌

日本の新興宗教 62・11・13

日本人の教育 62・12・8 成道会

禪の科學的研究 63・5・25 創立記念日

学園の将来 63・5・27

世界は動く 63・11・12 花園法皇忌

知性の谷間 63・12・7 開山忌

中国近代の禪風 64・5・25 創立記念日

欧州人の見た仙厓 64・12・7 成道会

成道会の香語について 64・12・8 同右

ヒューマニズムの現代的意義 65・5・25 創立記念日

東南アジアの宗教事情 65・6・12

欧米巡錫記 65・6・14

古田紹欽日大教授

鎌倉仏教をどう見るか 65・10・24

中原文雄妙心寺派学部長

宗門安心章について 65・12・8 成道会

柳田聖山本学教授

仏子ラーフラ 66・2・15 涅槃会

仏教学部時代に開催された特別講演会の記録をこのように克明に書き出した理由は、それによって仏教学部時代の充実した教学への全学的な沸騰ぶりを具体的に示したかったためである。これらの講演会には学長を始め全教職員と全学学生が参加し木造旧本館二階は常に熱気に溢れていた。その講演の題目が示すように、講師や話題は世界全体に及び大いに学生の志気を喚起したものである。外人講師による講演の多くは緒方宗博教授の招聘と教授みずからの通訳によるものであったが、教授が本学に国際的新風を醸し出した功績は多大なるものがあることを忘れてはならない。

当時の本学教授講師陣の中には、緒方宗博教授（シカゴ大留学 49・10 渡米、ミシガン・ワシントン両大学客員教授 56・9 渡米）久松真一教授（ハーバート大客員教授・57・9 渡米）西村恵信助手（アメリカ・ペンデルヒル宗教研究所留学・60・8 渡米）柴田増実講師（コレージュ・ド・フランス留学 61・9 渡仏）平田高士助教授（ミュンヘン大客員教授 61・11 渡独）小林圓照助手（インド、オーロピンド・アシラム留学 63・8 渡印）など、海外留学あるいは客員教授として世界の出た人が多かった。

また、学内にあつては、荻須純道教授が一九六一年九月東洋大学にて、また今津洪憲教授が一九六二年二月大谷大学にてそれぞれ文学博士の学位記を授与されたほか、久松真一教授が一九六一年十一月に紫授褒章を、また一九六五年に勲三等瑞宝章を受けられ、伊藤古鑑教授が一九六一年十二月第一回宗門文化賞の名誉を受けられた。また、市川白弦教授は一九五二年十月より一九五七年九月まで丸五ヶ年、京都市教育委員として京都市の教育行政刷新の

ため尽力されたことも記録されてよいであろう。

最後に宗門後継者養成を教學理念にしていた仏教學部時代において特に学生のためになされた宗門生教育の実態について述べておこう。

先ず教學上についていえば、実践禅学の必須制があげられる。実践禅学の内容は、学長老師の提唱と全学大接心であった。提唱は毎週月曜日第一講時に全学必須講義として厳しい出席点検のもとに行われた。この提唱には荻須学監教授が知客寮を務められ、事務室職員も一緒に拝聴する慣わしになっていた。古式豊かな禅録の提唱は新入生にとっては驚異であったが、やがて回生を重ねるに従って自然に禅の精神に誘い込まれ、禅の用語にも親しみ次第に宗門子弟の自負心を深める貴重な実践の時間であった。また、この時間は先述のようにアッセンブリー・アワーが設定されるまでは、よく外来有名講師の講演会や学生大会あるいは学内大掃除に変更されるのであった。今にして思えば、全花大人がこのようにして一堂に会することは今日ではもう望むべくもないミニ大学の一大長所であった。

春秋二回の大接心は、常に妙心寺の法堂を道場にして行われ、大方丈で参禅がなされた。夜は靈雲院や白雲寮において有志による夜坐があり、全大学人は文字通り万事を放擲して坐禅三昧の三日間を過したものである。直日は歴代の学寮舎監が務めたが、時には、若き日の大井際断老師や平田精耕老師など禅学の教員が加役をされて、それは恐ろしい殺気に満ちた接心であった。一九五四年の前期大接心から、大学当局は接心の日程を三日から五日に延長せんとしたが学生の反対運動で止むなく従来通りの三日間が継承されたという一幕もあった。いずれにせよ、春秋二回の大接心こそ、当時の卒業生にとって忘れない想い出となっていっまでも語りつがれているのである。

接心に関連して想い起されるのは、学寮の生活である。学寮の歴史は恐らく本学が創立されて以来綿々と続いたものであろうが、一九六九年九月二十二日の大衆団交において白雲寮自治化が果されることによって、昔日の面影が失われてしまった。仏教学部時代の前半は旧い一棟の「参玄寮」であり、そこには老朽化した寮ならばこそその逸話の多い生活があった。しかし寮生たちはそこで自由で豪放な生活を存分に楽しんだようだ。寮監もまた若い学生と起居を共にすることによって学内教職員の誰よりも学生の気質を理解した。寮監を経験した者でなければ本学の職員としての十分な資格を持ちえないという不文律まであったくらいである。寮生活は朝六時半起床、寮内外の清掃、引続き舎監室前の廊下に集合し、家郷遙拝、出欠点呼、引続き仏間にて朝勤め、坐禅一炷終って食堂へ雁行、食事作法に則っての朝食。昼食と夕食は自由、夕方六時半出席点呼して夕勤め、坐禅。九時の消灯まで自習の時間であった。自習時間には舎監が警策をもって各部屋の見單を行ったので寮生達は止むなく机を前にして自習していた。しかしこれは表面上の仮装であり、実は毎夜のごとく密かに囲碁や将棋の名人戦が展開されていたようだ。舎監は部屋の手入れに開けられた壁の穴から寮生が部屋の往來をしていることを見て見ぬ振りをして学生の反感を買わないよう氣をつかったものである。一九五九年に妙心寺開山無相大師六百年遠諱を記念して、新寮が建設され、寮の名も「白雲寮」と改められた。新寮は立派な坐禅堂、茶室、談話室などが完備され、照明はすべて螢光灯であり便所は水洗式となった。寮生達は、自主的にこの寮の寮則を守り、白雲寮々風づくりに精進努力したものである。因みに仏教学部時代の寮監は、森弘宗、池田豊人、西村恵信、細合喝堂、古橋圓宗、小倉宗徳、大崎恭道の諸氏であった。建学の理念の具体的実践の場としての学寮は今はない。しかし仏教学部時代のあの懐しい寮生活の想い出は当時寮生活を体験した同窓生諸兄の心の中にいつまでも残りつづけることであらう。

以上、「花園大学通信」を手掛りにして仏教学部時代の教学を振り返ってみた。そしていまふと現実に戻ると、そこにはかつての花園大学の教学体制の片鱗も残っていないのである。この変貌が単に外観上のことであつて欲しい。花園大学の教学理念の本質までも変つてしまったというならば、花園大学の存立意義そのものの喪失でしかない。皮袋は新しく、酒は古い方がよいといわれる。幸い花園大学には百年の古い酒がある。それを盛る新しい皮袋を如何にして手にしうるか。その摸索こそが今後の課題であらう。

第二節 文学部時代の教学

(桐田清秀)

一、教学理念をめぐって

一九六四年の仏教福祉学科増設を経て、六六年度には、仏教、社会福祉、史学、国文の四学科からなる現在の文学部が成立することになった。

以降、花園大学は、六九年の学園闘争、七二―七五年にかけて教学体制研究委員会の問題提起にはじまる入試改革と教学改革への摸索、七七年の大学総合移転、という三つの大きな節を経ながら現在に至る。これら三つは、その到来のたびに、この小大学を大きく揺り動かし、その都度、「花園大学とは何か」「花園大学はどうあるべきか」「建学の精神はどうなっているのか」の議論を惹起してきた。

こういう議論が、時と場所を選ばず、教職員の間で、さらには学生をも捲き込んで可能であったということは、また、別の面白い議論を生み出すが、ここではさしあたり、文学部設立以降、花園大学の教学の要である「建学の精神」が、どういう情況と議論を経て、どういう言葉で残されているかを辿って見ることに、現在を見つめる素材としたい。

新しく文学部単科大学になった花園大学は、その「学則」の冒頭に、「本学は高等の知識を授け、専門の學術を教授研究し、仏教精神によつて人格を陶冶し、人類文化に貢獻する人物の養成を目的とする」と掲げている。この「仏教精神」の内実が何であるのかをめぐつて、さまざまな解釈や議論が行なわれてきたのだが、まず、その代表例を年次を追つてふり返つて見よう。

文学部設置に際し、家族的雰囲気をもつた「世界唯一の禪の学園」とか、「禪的人間の育成」という、大学側の外向けの趣意説明に対して、教学理念がより一層曖昧に、かつ稀薄化していくのを直観した一学生は、六四年、花園大学の使命を次のように直截簡明に表現していた。すなわち、彼は、「花園大学の使命とは、真に強い人間、即ちいかなる権力にも屈せず、内、外を通じて生半可な妥協をしない、真の人間育成にあるのではないか」とし、「その生涯は名誉ではなく、自己否定であり、生活は「一日なさざれば一日食わず」の言葉によつて表わされ、歴史に記されるべき英雄ではなく、表面には現われない歴史を動かす力そのものとなるべき人格の育成こそ、花園大学の使命ではなからうか」としている。ここには、宗門後継者養成大学から一般社会へ開かれた文学部設立という変化を、期待と危惧で受けとめた青年ならではの、熱氣と花園大学を思う真摯さが、卒直に表現されたものとして特筆に値する。

文学部発足後、六八年に、当時文学部長であつた柳田聖山は、「現実の批判と、沈滞せる伝統の革新は、将来の

創造の前提であらねばならぬ。革新をつねに瞑想の英智と深い人間精神の反省によって裏づけてゆく工夫こそ、本学の目的に外ならぬ」と述べ、翌年の大闘争をある意味で先取りしている。

六九年学園闘争では、他大学に比し極めて古い体質を存続させて来た大学であつただけに、また、視点を変えれば禅門の家風であらうか、じつにすっきりと従来の体制を一八〇度転換させた。学生処分権の凍結、出席制度の廃止、教授会公開等等、それらは、当時、他大学では見られぬ思い切った改革であつた。そこに流れる精神は、学生を管理の対象として見るのではなく、学生・教員が把手共行、互いに教育・研究に励もうという高邁なものであつた。これは、以降、「団交精神」と呼ばれ、教員は学生を信頼し、その自主性、主体性を徹底して尊重するという風潮をつくり、七六年総合移転紛争まで、花園大学の基本テーゼとなつた。ただ、この闘争は、個別花園大学を出発点としながらも、「本来大学とは何か」「大学の教学とは何か」という原則論のみでストップし、改めてそこから私立花園大学の特殊性を問い、また、生かす手段や工夫を摸索するところまでは至らなかった。そして、極めて高い理想に基づいたこの「団交精神」は、諸制度や諸規則の枠を徹底してゆるめたり撤廃した結果、「何をしてもよい」から「何もしなくてもよい」ことまで含んだ、担うに極めて重い自由を、大学全構成員に課することになつたのである。

学園闘争の翌年、藤吉慈海文学部長は、学問の大切さと身体的修行の大切さをいい、花園大学は、単に机上の学問だけでなく、「絶対の大道を学研行取してゆくユニークな学風がある」とし、「人間の最も深い根源を自覚した人」「つまり、「禅的主体性の確立」こそ大切だと述べている。

大学全体が極めて自由な雰囲気につつまれ、いわば、アナキーともいえる中で、教授会の席上や私的な場において、ことあるごとに「花園大学をどうするか」「建学の精神とは何か」が議論され続けたが、一応のまとまりを

見せたのが、七四、七五年度版の「入学案内」の作成時であった。七四年の「入学案内」は、「①エリートは無用、非凡なる凡人を求む ②「手づくり」の世界」花大像の打ち出し」をメイン・コピーとした。このメイン・コピーは、本学の「建学の精神」に添うものとして委員会でも認められ、教授会でも承認された。①は、受験競争でいう「学力」ではなく、自己と世界とを深く見究めようとする「本当に大事な学力と意欲」を内に秘めた青年が望ましいということであり、②は、目玉商品になるようなものを何もたない千名足らずのミニ大学が、文学通り必死で考え出した花大像であった。この「手づくり」は、教員の学生一人ひとりに見合った手づくり式教育であるとともに、学生自身が自らを自己形成していく意味の両方を含んで理解されていた。

七五年「入学案内」のメイン・コピーは、前年のものを受け、山田無文前学長の発菩提心の説教からひいて、「むしろ、世界中に牛の皮を布きつめる代りに、自分の足にしっかりと靴をつけるのが、本当の勉強ではないでしようか。大学の勉強は、けっして単に小さい自分のためではない。他人をおしのけても、有名な大学に入りたい、有利な職に就きたいという、自分中心の勉強ではなしに、小さいながらも自分の足にあった靴をつけて、世の中に出てゆこうというのが、大学に入ることの意味ではないでしようか」と、大学の姿勢を述べている。また、同時に掲載された今一つのメイン・コピーには、「真に自己を問いなおし」「真に生き生きとした自由で創造的な人間の発見」ということが、「禅」であり、この「禅の精神を単に形式や伝統のカラの中におしこめるのではなく、つねに現代にとりもどし、甦がえらせる永続的な営みの中に、花園大学の向かうべき方向をたずねたいと思います」としている。

このような理念を、当時、たとえば、各学科での授業の小人数化の推進、一般教養課程における外国語の位置づけの改編、総合講座開設への努力、などなど教学の中に具体化していくために、大きな努力が払われたし、また、

入試の具体的な合否判定の際に、改めて、長時間の理念論議が繰り返されたりしている。しかし、全般的には、「建学の精神」を直接的にそれとして議論する機会は減っていく。

そして、教職員の「理念」に関わろうとするエネルギーは、七六〇七年の総合移転紛争でまったく消耗してしまうことになる。本来、総合移転というような大事業にあつては、教学の理念があらためて問われる絶好の機会であり、また、問われてこそ正常である。当初、学生の問いかけの根底には、花園大学の教学はどうなるのかということがはっきり出ていた。それが、移転の責任の所在問題でつまづき、ずるずると、それに固執したまま、本質的な問題に迫ることなく終焉した。教職員は移転反対派？学生との、論理的対応ではなく身体的・物理的対応に忙殺され、事態の收拾にのみ膨大な時間を費す結果となつた。花園大学の諸事件で、一般の教員が、これほど当事者学生と議論する機会のもてなかつた経験は、文学部設立以来はじめてであつた。つまるところ、理念を根底から問い直す好機をまったく生かせなかつたのみならず、さらに、従来から持続してきた教職員のエネルギーを、生産性の低い学生対策と事後処理に奪われて、「団交精神」と「花園村幻想」の崩壊を白日の下にさらけ出すことのみが残された。

七七年四月、総合移転が行なわれた。虚脱感に似た奇妙な空白の後、あらためて、移転はしたもの、果して何がための移転だったのか、一体何が変わつたのかが問われ始めた。思えば、今ようやく、花園大学は激動の一サイクルを終え、あらためて、いずこへ進むべきなのか、いずこへ進むことが可能なのか、深く摸索、冥想すべき時期にきている。このような状況の中で、教学の大方針を打ち出すべく、七八年、新たに「教学プロジェクトチーム」が発足し、活動を開始した。教学プロジェクトは、特色ある教学の構築のために、「建学の精神」を問い直し、新しい肉付けを考える重責を負う。大胆で斬新な問題提起が期待される所以である。

最後に、現時点の総括にかえて、教学理念を考える難しさを、一、二述べておく。

花園村幻想の崩壊について

近年、相当数の受験生を確保できるようになり、教職員の意識に、花園大学存立の基盤を問わざるをえないというような危機感が稀薄になってしまっている。つまり、わざわざ面倒な議論をせずとも何とかなるさ、建学の理念など理事会が特別な教職員が考えればよいことで、自分の知ったことではない、という雰囲気広がってきている。大学がゲゼルシャフトであることは、今さらいうまでもない。にもかかわらず、総合移転の頃までは、学生は「花園村」の表現をよく使い、大学全体を一つのファミリーと感じている者が大部分だった。大学は「オラが村」であり、山田無文は実にやさしい村長さんであった。たしかに、学生同士に限らず、教職員も花大の学生であれば名前は知らずとも顔は必ず見知っていたし、学科の学生であれば、ほとんど全員の顔と名前が一致する状況が存在した。また、教職員にあっては、戦後の焼跡に似て何もない大学であるが故に、何かを作り出そうとする意欲と熱気があり、何よりも、これからの花大をどうするかという、花大を思う真剣さがあった。何かとんでもない、ユニークですばらしい大学ができるのではないかという共同幻想があったように思う。

このような幻想の崩壊は、七五年、学生数が千名を越える頃から目につくようになり、七六年移転紛争で明確となった。学生は、大学とは無関係な小さな空間をそれぞれもつようになり、そこを主たる生活の場とする傾向が強くなっていく。教員は教員で、徐々に花園大学全体を問題にすることから、各学科へ、さらには特別な授業科目や一部特定の学生のみへと、自己の関心を狭めていき、そうすることによって自らのアイデンティティを守ろうとするようになる。これは、マンモス大学を基本的に特色づけるあり方である。ミニ大学をマンモス大学から区別するものは、学生数の少なさではない。当該大学の構成員がどの程度、個別利害のみの発想から、大学全体をつねに視野に入れて発想できるか、という点にある。花園大学は、今ようやく、そのまがり角にさしかかった。たとえば

どの大学にもすでに常在している派閥争いなどの弊害を、花園大学は果して回避できるか。

禪の不可解さと面白さ

「建学の精神」が日常性の中で、一定程度問題になり続けたというのは、花園大学の特異性を示すものであるが、そのなかには禪の不可解が大きく作用している。「建学の精神」そのものは、一般には非常に問題にしにくい性質のものである。それが「禪」となると一層難しくなる、と同時に面白くもなる。文字化された前述のものは、無理を承知で敢えて言葉にしたものであろうが、果してそのような表現で正しいか、正しいとしてもその言葉の内実は何なのか、単なる同義反復ではないのか、また、何をどうすればよいのか、などなど解らないことばかりである。禅僧教員のこれに関する発言が一貫して少なく、論議に消極的な姿勢で終始してきたことも、それなりのことを象徴的に表現している。禅僧教員が、この件に関して無関心であるはずはなく、やはり、禅そのもののへのつかみどころの無さに主因があると思われる。ただ、口に出すと嘘になる、クサクなるといふ禅僧教員の発言は、何となく理解できるとしても、また、禅の本質として積極的に「禅とは何々である」といい切ることができないものであるとしても、工夫して表現する努力がなければ、大学に籍を置く意味は半減する。まして、研究者としてはその姿勢を疑がわれることになる。仏教の中でも、最も文字を軽視する風潮が見え隠れする禅であればこそ、禅僧教員の果すべき役割は大きいといわねばならない。

禅僧教員への期待はさておいて、「精神」は客観化されて、はじめで、それとして経験され認識される。文字だけにこだわることもない。しかし、表現されなければ無いに等しい。可能なことは、表現することとその否定という、無限の繰り返ししかないはずである。大学の教学で、禅はどのような表現、カタチがありうるのか、まさに、禅的発想の面白さが試されている。

二、教学内容をめぐる

文学部設置以降の各学科の動きに関しては、後に述べられるので、文学部全体に関わること、一般教養課程および教職課程に焦点をあてて、大きな動きを辿っておく。

カリキュラムの変遷

六九年長期団交の最中、この年はじめて形がととのった教授会に設けられた「改革小委員会」は、カリキュラムの根底的改革をめざして、レポートを出している。この内容には、実践禅学の見直し、必須単位を可能な限り少くし選択単位の幅を拡大する、一般教養課程と専門課程の年次区別を廃止する。一般教養課程の中で基礎教育科目を充実する、一般教養語学クラスの小人数化、他大学との単位取得の交換、教員の研究条件の改善、などが含まれている。これらは、全体として、かなり大幅な、というより、現行法規と大学経営が許す限り、学生の単位履修を自由化し、選択の幅を広げて、学生・教員相互の研究意欲を高めようという思想が基本になっている。まず、これらの点を手がかりに、その後の動きを見てみよう。

翌七〇年から、卒業必要単位が従来までの一般教養課程五四単位、専門課程七六単位、計一三〇単位から、一般教養五二、専門七二、計一二四単位に減らされることになった。その内容は、一般教養の必須単位であった実践禅学(一)、(二)の二単位分と、専門課程での従来の必須六〇、選択一六単位から、必須五二、選択二〇単位になったことである。以後、現在まで、この単位数できている。

一般教養と専門科目の年次区別の廃止は、七〇年から実施され、講読、演習、実習など一部の科目を除いて、どの学年でも履修できるようになった。つまり、クサビ型になった。この年次区別の廃止は、七九年の現在も生きている。しかし、現在は、後に述べるが、学年指定科目が相当増加し、一般教養課程の学生と専門課程の学生という

ような区別や呼称がなく、一般教養課程が終らないと専門課程へ進めないというようなことは無い、という程度のことである。

一般教育科目の充実に關しては、開講講座数が漸増して來ているが、ここでは、七二年に史学科が先鞭をつけた基礎講座のことに触れておく。これは、各学科教員が、各学科の基礎的内容をもつ講座を担当して、一般教養課程の必修単位とすることにより、一般教養課程の充実に力を貸すとともに、各学科で一回生時から学科教員との接觸をもたせ、また、専門教科へ水路づけをして教養課程との有機的連關を計ろうというものである。史学科は七二年度には四クラスを、七三年からは歴史学Cとして三クラスを開講し、基礎教育科目の充實をはかった。

入試改革からのインパクトもあつて、七五年からは、四学科とも基礎講座を置くようになる。仏教学科からは、仏教学基礎講座として三クラス、史学科は歴史学基礎講座と改称して四クラス、これらは基礎文献の講読を中心に、おいた基礎ゼミナールの性格をもつ。国文学科は文学基礎講座として二クラス開講しているが、国文学研究入門講座といった性格をもつ。社会福祉学科は、いずれでもなく、一般教育科目の哲学、社会学、法学の三科目に、学科学生だけを對象とする三科目を、それぞれ同じ名称で重複して開講し、基礎講座としており、性格を少し異にしている。

語学は、一般教養の中核のみならず、文学部という性格からして、いくら重視してもしすぎることはない分野である。しかし、現実には、高校までで既に英語アレルギーをもつて入ってくる学生が多いこと、専門課程とのつながりが薄いなどの理由で学習の意欲がない学生がかなりあること、その結果、単位のとれない学生が累積すること、毎年語学のために卒業できない学生が数多く出ること、などなどの問題がある。また、大学側の体制としても、一般教養課程では必修でありながら、入学試験で英語のフィルターを通さずに全体の四分の三も入学させていること、

外国語の単位数が一二単位にすぎないこと、まして、初めて取り組む第二外国語に、たった四単位しか充当していないこと、などなど問題があまりにも多い。山積する問題を解決するために、七三年度から外国語科目のみ再試験を認めたり、多人数のクラスが出ないように厳しいクラス指定をしたり、七五年には中国語、七七年にはフランス語の専任教員を確保し指導体制の強化をはかったり、ということが行なわれてきた。さらに、七五年からは、従来、第一外国語だった英語を第二外国語にまわし、ドイツ語、フランス語を第一外国語とし、八単位を充てるよう改革された。七六年には、中国語も第一外国語となり、単に形式だけにすぎなかった従来の第二外国語を、少しでも学習の実があがるよう改革された。しかし、まだまだ問題は多く、現在も継続して改革が検討されている。

学生の単位選択の幅を少しでも広くしていく方向と、基礎教育科目や外国語教育を充実する方向は、必ずしも一致しない。むしろ、正反対の傾向を示すことがある。七〇年の思いきった単位履習の自由化は、その後、徐々に修正される結果を生みつつあるといえる。

その他の動きとしては、「総合科目」の開講へ向けての試みが、七五年、七六年に行なわれたが、移転紛争などで流産した。しかし、そこで蒔かれた種は、七九年に総合講座「中国文明と日本」として、また、仏教学特別講座「仏教の思想・文化とその周辺」として実を結ぶこととなった。

また、主として、教育方法に関わるものとして、七五年以降、視聴覚設備に力が入られて来た、現在では、視聴覚教室、各教室への集中制御などをおこなう調整室、スタジオ、大型調整卓、カラー教材提示卓、VCR、ポータブルカラーVCRカメラ、VCR合成器、VCRプリンター、等等、他の大学に見られない秀れた機器も数多く入っている。そして今後は、図書館にVCRライブラリーも整備、充実されることになっている。しかし、現実には、これらを使いこなすためには、一定の技術の習得と、教材作成にかける時間が、それにまして、日々の講義内容と

方法を少しでも改善しようとする各教員の志向性が、不可欠の前提となる。現在、これら視聴覚設備が十分その教育機能を發揮しているとはいいいがたい。宝のもちぐされとにならないためには、適切な手段を講ずる必要がある。

教職課程について

教職課程が他の四学科一課程と肩をならべ、文学部が四学科二課程制となったのは七四年である。というのも、寄合世帯で、七五年までは教職課程を実質的に担う専任教員は一名のみであり、七六年からようやく二名になる。この人員増は、教員資格取得希望者の増大による。カリキュラムの改編、強化については、七四年からその重要性に鑑み部落問題論を開講し、内規で教育実習以前の履修を義務づけたこと、七五年からは各教科教育法も実習前年度までに履修済みを義務づけたこと、教職に関する専門科目の選択科目に、教育史、教育行政学などを新設し増強したこと、などである。また、四学科二課程中、一番多人数クラスの授業となつていることもあり、教育原理、教育心理学、青年心理学、道徳教育の研究は、受講生が二〇〇名を越えると二分するようになったこと、社会科教育法は指導に責任をもつ建前から一〇〇名を越えないようクラス分けするようになった。また、原則として、京阪神にある実習校には必ず出向き、実習先指導をおこなうことも行なわれている。

学術研究活動について

花園大学文学部の学術研究誌である「花園大学研究紀要」は七〇年に創刊され、すでに一〇号を数えた。平均一・二篇の論文を掲載する。一九二五年臨済宗大学の創刊になる「禅学研究」は、花園大学文学部になって以降も継続し、七〇年三月の第五八号をもって休刊したが、七八年に五九号が復刊され、再び継続されることになっている。その他、国文学科では七三年から「国文学論究」を、社会福祉学科は七九年から「福祉と方法」をそれぞれ刊行している。

教員の平素の研究を口頭発表し、「内外の批判に訴え学の研鑽練磨に応えようとする」主旨で、六七年までは「禅学研究発表大会」が、六八年以降は「花園大学學術研究大会」が毎秋公開されている。さらに、同僚の日常研究を知り相互批判を行うことで、タコツボ化を防ぐ意味をこめて、「学内研究会」が七〇年から、年二、三回行なわれてきたが、これは七三年中断されたままになっている。

また、共同研究では、仏教学科教員が中心になった「唐代語録研究班」が文学部設立以前から今なお継続しているし、史学科では「福地院家文書研究会」が七三年発足し、何回かレポートを公けにしている。その他、小さなサークルもある。しかし、科学研究費助成の取得を見れば、一般研究に関しては毎年数件あるのに、総合研究に関しては一件もない。つまり、共同研究を通じてその成果を世に問うというルートがほとんど開発できていないことを意味する。このことは、従来の花園大学文学部の學術研究のあり方を、それなりに特徴づけるものであり、教員が改めて考えて見るに値する問題であらう。

最後に、教員の研究条件に関しては、飛躍的に改善されてきたといえる。但し、それは、給与面で公務員に近づいたこと、七〇年以降学科運営のための経常費予算が各学科課程についたこと、という金銭面に限られる。いまだ、会議や雑務で奪われる時間の量は他大学の比ではないからである。

教員の国内外留学制度は、六九年の「改革小委員会」の問題提起以来、何度も検討されているが、いまだ成立をみていない。ただ、学外資金による留学規程は七七年に難産のすえ発足している。また、サバティカル・イヤー制度も、計画案にとどまっている。

研究図書費と旅費は、後者に関しては漸時増額され、ほぼ水準に達していると思われるが、前者に関しては、図書館予算を含めて今なお飛躍的に増額する必要がある。大学の評価は、どの程度秀れた資料、動く資料―人間と動

かぬ資料Ⅱ図書等をもっているにかかっている。とりわけ、永久保存のきく図書類には、今後、最優先の予算措置が計られねばならない。

仏教学科の教学

(小林 圓照)

仏教学部から文学部へ——仏教学科の位置

一九六六年(昭和四十一年)の文学部設置前の三年間、荻須学監を先導とする事務局は最高度の機能を果たしたに違いない。宗門立各大学の拡張の動き、高度成長・禅ブームを背景とする禅文化研究所の開所(大学としては図書館の落成)などに刺戟と期待とをうけて、「花大文学部」は目前にあった。つづく一九六四年(昭和三十九)の仏教福祉学科の増設、一九六五年(昭和四十年)の旧校舍改築落成により、その基礎が固められた。認可された文学部は定員総数百五十名で、仏教学科も他学科と同様、四十名であった。(のち一九七五年には七十名となったが、各学科学生数の平等主義は保持された)。

当時の荻須純道学監は「花園大学通信」十二号で文学部のあり方をこう述べている。「仏教学部が文学部に改称されても校風や訓育方針に変わりはない。創立精神を堅持した禅を基底としたものであり、そこに特色ある学風が打ちたてられねばならない。従来は宗門の後継者育成のみにおわるきらいがあったが、今回は門戸を社会に開放し、広く人文科学や社会科学との連繫のもとに、禅学や仏教学が研究され、また禅や仏教思想をもって諸学が研鑽され

ることとなる」

この文学部発足の理想の実現には多くの問題が山積していた。仏教学科もたちまちその問題の渦中に投げられた。一九七五年（昭和五十）に実践禅学にからんで、学長自らが教授会の席上「建学の精神」の再認識を求めるといような過程を経なければならなかった。他学科としても、禅を基底とする建学精神は一応納得しても、禅や仏教思想を以て諸学を研鑽するというのはどう理解するのかという疑念を生み、かえって各学科は独自のサイエンスに立脚することを主張した。それらには誤解や混乱も同居した。仏教学科にあっても、「われわれは文学部の一学科に過ぎない」とか、「仏教学科の地盤沈下である」とか、「否、仏教学科はもともと浮上したことはない」と反論するなど、ここ十数年、雑多の戯論が横行した。なかでもいわゆる「柳田路線」の「仏教学科解体論」は「無相の自己」ならぬ「無相の仏教学科」を理念としたものか、その他学科への浸透・解消の理論は高踏に過ぎた。学生との長期団交後、とかく批判の標的となった本学出身の教員・職員的眼には、この論は「自虐の極み（花大コンプレックス）」と映った。

本学の特色ある進路が仏教精神（禅）以外にないとのコンセンサスを得たのは、「私大の原点に帰れ。それに沿った独自の教学を創ろう」という全国的な動きの中での、ここ二、三年のことであり、その具体化についてはこれからなのである。本学文学部における仏教学科が占める位置も当然そこから明確にされねばならないし、仏教学科もまた現在「花神の園」の中核にあることを自覚し、反省すべき時節に来ているのではなからうか。

実践禅学の変遷

本学の建学精神に基づく「実践禅学」が大学構成員（教・職・学生）にひろがる全学的な立場であるとしても、その実動の主体はあくまで仏教学科であった。それをめぐっての変遷も仏教学科の教学のあり方と深くかわって、

看過できないものである。

文学部発足以来、一九六九年（昭和四十四）までは学則第二条（「本学の学生は前条（建学精神を示す学則第一条）に則し、実践禅学を履修しなければならない」）に基づいて二種の「実践禅学」が学科目（単位は一年一単位）として開講されていた。第一種は「実践禅学（一）（いわゆる提唱）」と称し、教養の基礎教育科目として第一・二年度の学生に必修のもので、内容は学長担当の禅の講義と坐禅実習と参禅であった。第二種は専門課程の実習（いわゆる摂心）として、仏教学科および妙心寺派教師資格を履修する者には必修であり、他学科は専門選択の科目であった。教科内容としては、前期・後期各三日間の提唱・坐禅・参禅の集中実習となっていた。これら全ての実践禅学は全学的に教職員も参加し、一九六八年ごろまでは、学長も率先して作務（学舎内外清掃）にあたった。

学園紛争ののち、一九七〇年（昭和四十五）、改革小委員会のカリキュラム改編案にともない、学則第二条は「本学は前条に則し、実践禅学を開設する」と改訂された。実践禅学それ自体も(A)(B)(C)の三種となった。そのうち実践禅学(A)は従来の「提唱」を必修単位から解放するものであった。この時間（月・第一講）は他の授業も事務執務も原則として止め、教職・学生、全員が自主参加すべきもので、加えて一般にも公開された。のちに問題となるのは「単位外の自主参加」ということ、講堂の収容数の都合で「第一年度の学生」のみに限定したことであった。実践禅学(B)（木曜）は形式は提唱と変らぬが専門単位（四単位）となるものである。(C)は前期・後期の集中実習「摂心」で、一年間に二単位取得とした。以上の改編方式は一九七一・同七二年と踏襲されたが、その間にこの方式をめぐる多くの議論が噴出した。その端を発したのが、実践禅学(A)の自由参加の内実であり、山田学長の「不徳を恥づ」〔花園大学通信〕一六号一九七〇・一〇の一文であった。「……自覚ある現代の学生諸君は、学制改革を叫び、出席点検を否定しました。学生の人格を尊重して、教授方はその要求を受諾されました。それは当然のことだと思

います。しかし、週一回のわたくしの提唱日（実践禅学(A)を指す）に聴講生が二、三十人しか集まらないという事実は何を物語るものでしょうか。わたくしは偏見に自分の不徳を恥づるばかりであります。」

また提唱や摂心期間中の平常授業開講の是非なども討議がなされた。

一九七二年（昭和四十七）三月、教務委員会の検討を経て、「実践禅学(A)は一般教育科目の人文科学系に入れて単位化する。開講方法は普通講義とする」と教授会で決定された。このような審議を経て一九七三年（昭和四十八）ついに実践禅学(A)は「禅学」の名を冠せられ、一年間四単位が認められた。一九七四年には同じ時間帯に他科目も並置開講され、一九七八年には二クラスに分けねばならぬほど全学科からの学生が受講したのである。実践禅学(B)・(C)に関しては基本的な改編はなかった。なお「禅学」は従来の古式を打破して、学長が問題提起の講話をなし、対話形式で進めるといのが理想であったが、次第にもとどおりの講本提唱の形式に戻っていった。

このような変遷をたどって、実践禅学(A)に学生が出席しないということは一応解消した。しかし、実践禅学(C)（摂心）の運営については教員・職員の負担が常に問題となった。「大学としてやる気の有無が問われている。やる気がないとなると学則第一・二条はもはや無用である」（『文学部十年資料集』八七頁）といった極論もでた。これは日頃、口先だけで建学精神を言いながら、いざとなったら何の特別処置も採れない当局だなどとなじたものであろう。事実「職員の自主参加が欠勤扱いにされた」という声もあった。仏教学科は当局の不熱意を問い、職員は禅学専攻の教員の摂心の推進への主体性の欠如を衝いた。摂心が「全学的行事であると同時に仏教学科の講座でもある」という二重性格より惹起する矛盾が、摂心衆評のときにはいつも爆発したのである。一九七四年の黄檗山での摂心を最後に事実上、事務局は摂心運営より手を引き、仏教学科にそれが移ったのである。一九七四年、実践禅学単位化批判などを内容とする、学生からの「公開質問状」も出たが、学科としては実のある改革を進めることを

約した回答をした。

一九七五、七六年と同じ方式は続けられ、その間にあって「禅学の総合講座化」の案もしばしば討議されたが結論をみなかった。一九七八年（昭和五十三年）学長交替と同時に学科では全面的な改革に着手し、一九七九年度より「禅学」の三講座を開設し、しかも仏教学科は一回生次より必修とし、一方、実践禅学を全学的かつ日常的に充実して行くべく、従来の(B)(C)方式を解消して「実践禅学」に一本化した。具体的には三講座に展開された。この改変により無文館二階では毎曜日、「禅学」ないし「実践禅学」が開講される結果となったのである。また「禅学」の総合講座化の問題は、もっと広範囲に「仏教と文化」に関する科目として、「仏教学特別講座」となって目の目をみた。また本学の建学の精神と各学科の独自性に触れるような、しかも単位外で自主参加のできる、全学的な集中ゼミナールの必要も説かれている。現在、「花大ゼミ」（仮称）として教学プロジェクトを中心に計画されている。

教員組織の変動

一九六六年（昭和四十一年）四月、文学部発足当時の仏教学科に属する専任教員は、山田無文前学長をはじめとして、教授四名、助教授一名であった。それが十三年後の今日、専任教員は禅学専攻（コース）四名（平野宗浄〔専攻主任〕・西村恵信・沖本克己・池田豊人）、仏教学専攻（コース）四名（藤吉慈海〔学科・専攻主任〕・高崎正芳・小林円照・鷲阪宗演）となり充実した。その変動の過程をたずねてみよう。

一九六八年度までは変化なく、学生と教授会との長期団交の途中であった一九六九年十二月の改革小委員会の討議に、「教員組織」についても検討すべきことが提示された。つづいて一九七二年（昭和四十七）五月の教学体制研究委員会（以下教体委と略す）の報告では、学園における「十項目の問題提起」がなされ、そのうち「教授会の

位置づけの明確化」の項に、「専任教員の種別慣行の現状は「教学」の面からみて重大な問題である」と指摘している。教員の勤務条件、教員の増減に関しても討議された。また別項目には専任助手制度の再検討が挙げられている。

さらに一九七三年（昭和四十八）の六月・十二月の二回にわたる教体委の報告によると、教員組織は仏教学専攻が教授一名、助教授二名、専任講師一名、その他は非常勤講師であり、禅学専攻にあつては教授四名、助教授一名、専任講師二名（この内、一名は事務職兼任、一名は布教学専門）、その他は非常勤講師となっていた。そのころ専任教員の少ない他学科から「仏教学科は専任を十一名も許容している」と評されたが、実状はどうであったか。教体委によってまとめられた報告には「（とくに禅学専攻の場合）教員の頭数は多いが、現在、真の意味の教授は一人もない。（準専任ではない）極めて無責任な教員組織となっている」と内部告発している。その解決策として一九七四年度からの柳田聖山教授の正規教授への復帰が確約された。教員組織の将来展望としては「準専任教授の位置づけを明確にしたい。若い教員養成の必要もある」と報告している。同様のことは卒業論文指導、共同研究室管理にも関連し、「禅学専攻の純専任教員の少ないことからくる卒業論文指導の手薄さ」とか、共同研究室では一九七四年度に助手採用を希望しながらも、「助手は望ましいに違いないが、助手以外の教員体制の充実が先行すべきである」などと報告している点からも窺える。また集中講義の是否が問題になったが、鎌田茂雄・古田紹欽両講師の隔年出講が望まれた。

一九七六年（昭和五十一年）六月に提出した教体委リポートによれば、教員の勤務体制の明確化という点で、従来の教員A・B・Cのランクづけを廃し、嘱託と特任制を導入して解決しようとした。これが大学当局で実施の運びとなり、木村静雄・平田高士の両教授が嘱託となられた。さらに一九七五年度をもって柳田聖山教授が退職される

と同時に、西村恵信（一般教養から）、沖本克己（新任）両氏が禅学に就任され学科に新鮮なエネルギーをもたらした。これにより一九七八年度には、禅学専攻教員として一名、助教授二名、講師一名、仏教学専攻の専任としては、教授二名、助教授二名の陣容をようやく整えるに至った。卒論指導においても、仏教学専攻の教員が禅学の方へ応援に行くことで一応解決しつつある。また学長交替によって、大森曹玄学長による実践禅学の指導をも仰ぐことになったのである。

カリキュラム編成の推移

一九六九年（昭和四十四）の長期団交中に組織された改革小委員会は「現体制下の大学における単位制度の矛盾を認めつつも、教授会として従来のカリキュラムの検討とその根底的改革を計ると共に、当面する個々の問題を解決してゆく」という基本方針を打ち出した。その改編のポイントは「実践禅学」（前述したので略す）と「カリキュラムのクサビ型編成」であった。これに沿って仏教学科でも教養と専門との履修年次の固定化を廃し、演習、講読、実習以外の専門学科も第一年次より弾力的に履修可能となった。また選択必修の指定も廃止された。仏教学科と関連する仏教学概論・禅学概論の他学科必修を選択とし、一般教養に「仏教入門講座」（「仏教学」と呼ぶ）を設けた。これらの改編によって一般教養は五十四単位から五十二単位、専門科目は七十六単位から七十二単位となり、卒業所要としては合計百四十単位から百二十四単位と減少した。

改革小委員をひき継いだ教体研委員会是一九七二年（昭和四十七）、「十項目の問題提起」をしたが、これを受けて「各学科の現状と展望」（一九七三・六）というレポートが提示された。仏教学科では(1)文学部を哲・史・文の三学科に分けて、全体の構成を研究する、(2)仏教と国文・史学との学科セクションリズムを排除する、(3)梵語講読の開設などが要望された。しかし、概してこれらの検討は消極的・末梢的なものであった。

また一九七三、七四、七五年の入試改革から教学改革へという流れの中で、教務委員会提示の七五年以後のカリキュラム編成が決定された。この改編は一九七〇年以降つづいた教学の基本路線をふたたび変更に導く転換点にもなった。仏教学科に関していえば次のごとくである。

(1) 一回生次に仏教学・禅学専攻共に「仏教学基礎ゼミナール」を一般教養課程に開き、仏教学科専任教員との接触を計る。(2) 卒業論文提出を大前提としたカリキュラム編成、これには、(イ)普通講義の細部検討、(ロ)特殊講義の柱だて(仏教コースではたとえば原始・大乘・仏教史、禅学コースでは、中国・日本禅宗・禅文化)の必要、(ハ)講読・演習では(イ)から(ロ)から(ハ)へと一貫した「たて」の線を明確化する。(ニ)については小グループ単位を重視し、(ニ)学生より提出された卒論題目に基づいて指導する。このうち(1)の「仏教学基礎ゼミ」は七五年度より発足したが、(2)の問題は現在、一九八〇年(昭和五十五)に向けて再検討をせまられている。

仏教学科の講読・演習の講座数に関していえば、仏教学専攻では、一九六七年までは二講座ずつ、一九七〇年から一九七四年までは講読三、演習二が続き、一九七五年から一九七七年にかけて演習は三講座となった。禅学専攻では、一九七〇年までは講読三、一九七七年までに講読は四となり、演習は三から四、四から五に及んだ。この変化は禅学専攻者の増加に比例している。

仏教学科に入ってくる学生の多様化に伴い教学自体も検討されるべきであろう。宗門後継者は無論のことであるが、就職その他の社会へ進路を取る者への仏教教学と指導のあり方が課題となる。また教員免許資格取得率においても一九六六年までは八二%まで持続してきたのが一九六六年から一九六九年にかけて五〇%から三〇%に至り、一九七〇年から一九七六年までには一〇%代に落ちていることも看過できない。大学である以上、カリキュラム・研究・学科運営にしても所詮は教育(学生のため)を第一義としなければならない。

一九六九年度から一九七七年度までの主な各科目担当者を列挙すると。仏教学専攻の普通講義では、「仏教学概論」(藤吉・西・高崎)、「禅学概論」(A・B)(平田・大森・平野)、「仏教思想史」(柳田・高崎・藤吉、一九六九年から一九七一年までは仏教教理史)、「禅学思想史」(柳田・木村・平田・平野)、「印度仏教史」(高崎)、「中国仏教史」(大石・道端・西尾)、「日本仏教史」(荻須・橘・竹貫)、「中国禅宗史」・「日本禅宗史」(荻須)以上の各教員となっている。

特殊講義の主なものとは、「原始仏教」(藤吉・高崎)、「南方仏教」(藤吉)、「印度西域仏教」(高崎)、「仏教美術史」(森)、「天台教学(思想)」(鷲阪)、「華嚴学」(鎌田)、「仏教倫理と社会」(空と現実・否定の論理・世界倫理)(市川)、「密教概論」(高井)、「浄土教」(藤吉)、「仏教とキリスト教」(八木)、「金剛經」(伊藤)以上が挙げられる。

仏教学・禅学共通の選択科目では、「哲学概論」(三村・阿倍・西村)、「東洋哲学史」(福嶋)、「経済学」(浜崎)、「政治学」(松本)、「東洋美術史」(堂谷・森)、「民俗学」(橘)、「仏教文学」(鷲山)、「倫理学」(東・有福・大井)、「社会学」(稲岡)、「法儀実習」(一)(水野・森)、「実践禅学」(B)(山田・大森・平野)、「印度哲学概論」(小林)、「宗教哲学」(阿倍)、「国史学」(二)(福島・横井・吉田)、「東洋史」(小野)、「サンスクリット」(小林・高崎・竹中)、「宗教法人法」(松本)、「教化実習」(池田・小倉)、「宗教学・宗教史」(西村・藤吉・北野)、「仏教美術史」(森)、「漢文学・五山文学」(入矢)の各教員が担当した。

禅学専攻の必修科目では、普通講義は仏教学専攻とはほぼ共通であった。ただ特殊講義のうち、仏教学専攻と共通でないものを挙げると、「禅学史書研究・中国禅の形成・正法眼蔵」(柳田)、「看話・公案禅・日本近世禅」(木村)、「禅文化」(古田・加藤)、「英文伝灯録」(緒方)、「初期・五家の禅宗・臨済録」(平野)、「碧巖録・無門関」

〔平田〕、「禅の心理」〔佐藤〕、「坐禅と公案」〔大森〕、「維摩經」〔入矢〕、「天台止観」〔鷲阪〕、「禅と教化」池田などが主な開講科目と担当者であった。

今後の課題

仏教学科の今後のあり方を考えるまえに、一九七〇年当時文学部長であった藤吉慈海教授の「大学生活の反省」〔花園大学通信「十六号」〕の説く「学行一如の中道」の一文こそ学科の指針を示すものであろう。「われわれの花園大学には絶対の大道を学究行取してゆくユニークな学風がある。人間の真実のあり方を求めて自ら思索し、わからなければ、これを古典新籍に探り、さらに坐禅や作務を通して体験的に究明しようとする。古人がその出発点に当って全身心を挙げてと言われたのは、正しくそのことを意味している。…学究と行取とは両者あいまってその成果が得られるものである。仏教はつねに中道を教える。それは両極端を批判しうる自主的自覚の大道をいう。」かつての「柳田路線」は学問を二義的・過渡的にしか見ない旧習「花大コンプレックス」からの必死の抵抗であった。

仏教学のスタッフは当面、一九八〇年度より出発する学科の新しい展望に向けて歩み出した。一九七八年春の堅田・夏の亀岡・一九七九年春の岡崎などでの合宿会議と、一九七八年秋の駒沢大学の教学（仏教学部を中心とする）調査訪問などを通じて今後の学科のあり方を摸索・準備している。そこにあがる課題の主要なものは(1)史学科の国史学科への改編と並行して、仏教史を中心とする「仏教文化コース」の開設とそれに伴う教学の再検討、(2)仏教学科学生のための独自な入試改革（宗門後継者・いわゆる一般学生・中高年者などを対象とする入試方法とそれに対する教学体制の整備）、(3)建学精神に基づく学科の特殊性と他学科との関係、(4)禅文化研究所の将来と学科教学とのあり方、(5)柳田体制がネグレクトしてきた新人養成と学科スタッフの将来的展望、(6)妙心寺派教師資格の充実に関する「本山理事」との協議、（一九七九年から開講した「禅書道（筆禅道）」と「漢詩概説（作偈）」などを資

格科目に導入すること、(7)学生・学外者をも含めた花大仏教学会の編成と「禅学研究」誌の今後の運営、(8)さらに大学院構想の是非なども射程にはいつてくるだろう。どの問題も教学の実践的側面を重視し、その強化と、他方、学問的水準の向上を計るものである。

まことに旧弊を「破るもの」の真髄は「創るもの」の中にこそあることをわれわれは学びつつあるのである。

社会福祉学科の教学

(岡田 徹)

編集委員会からここで私に与えられた課題は、文学部設置後の社会福祉学科の歩みを報告することである。ところが、私が本学に勤めるようになってから、今年でまる六年経ったが、この年数は、四学科のなかで仏教学科について古く、一九六四年の学科創設から十五年、また一九六六年の文学部設置から数えても十三年という学科の歴史に照らしてみると、たかだかその半分にも満たないものである。その私がこうして筆を執らなければならないところに、なによりも本学科の現実がよく表われていそうである。その現実が何たるかについては、以下の行論においておいおい述べるとして、ひとつだけ断っておきたいことがある。というのは、こうした「〇〇何年史」というものにつきものの自画自賛と祝儀的言辞のオン・パレードは、私など若輩のよくするところではない。そこで私としては、なるべく事実に即するよう努めながらも、私見や私なりの思い入りを随所にちりばめることにしようと思っている。ここでの理解や表現に異議ありと思われるむきがあれば、将来の「花園大学〇〇年史」において書きかえ

ていただきたい。

前置はそれぐらいにして、さて、ここでもつばらとり挙げることは文学部設置後の学科の歩みということであるが、本学科の場合、正確には学科創設からの十五年を視野に入れておかねばならない。しかし学科の歩みは、学科創設まで遡ろうと、文学部設置まで下ろうと、大きく二つの時期に分けることができそうである。すなわち第一期は、一九六四年の学科創設から一九七二年まで、第二期は、教員の新旧世代の交替の起点である一九七三年から現在までがこれである。第一期はさらに創設から文学部設置までの仏教・仏教福祉の二学科時代とそれ以降の時期に、また第二期は一九七三年からの二年間と一九七五年以降現在までの時期とにそれぞれ下位分割することができる。以下、カリキュラム・教員スタッフという教学面と学科の諸活動とに焦点を合わせながら、各時期に固有な問題や課題に学科がいかに取り組んできたか、こなかったか、現在どういう状況にあるかを概述してみる。

ところで、第一期については、ごく簡単に問題点だけを指摘するに止めたい。なぜなら、私はその時期に居合わせておらず書くような立場にないということ、およびこの時期の前期二年については別の執筆者が予定されているからである。一つは、創設当初の二年間、仏教福祉学科と呼ばれていたのがなぜ、文学部設置にもなつて社会福祉学科に改称されたのかという点である。とりわけ、大学総合移転を契機として、建学の精神であり本学の特徴である仏教・禅への傾斜が一段と強まりつつある現状にあって、この点はあらためて一論議しておく値打がありそうである。二は、例の七十日連続大衆団交に象徴される、一九六九年、同七〇年の花園大学紛争のなかでの学科および学科教員の対応、その身の処し方についてである。たしかに文学部設置は花園大学史上、画期的な出来事であったであろうが、この大学紛争の衝撃はそれによっても劣らない一大出来事であったに違いない。全国的規模の大学紛争によって、当時、社会福祉系大学の多くは、その存在意義やあり方が深く問われ、改変を迫られており、一つ

の試練のなかにあったわけであるから、いくら本学の特殊事情によって社会福祉という個別問題が祖上にのせられなかったとはいえ、われ闕せずで済まされるものではなかったはずである。ところが本学科の対応は、大学紛争どこ吹く風といった具合で、問い問われることのないまますり抜けてしまった、ようである。紛争後の大学に、学科の壁（学科エゴ）をぶち破って教学のあり方をその根本から検討し直そうとして設けられた教学体制研究委員会（教対研）が、その当面の標的の一つとして社会福祉学科に照準を合わせていたことや、つぎの紛争の火種は社会福祉学科にある、と半ば公然とさやかれていたことなどから推していても、この時期の学科がどういうものであったか、推察するに難くない。カリキュラム、教員数とその構成、そして教育への関与の仕方において、問題・課題は山積したままで、そのことへの自覚すらあったかどうか疑わしい状態であった。

ところで、第二期は、学科教員の新旧世代の交替が端緒となって開始、展開された。そして手つかずであった学科教学のあり方に対する改変作業は、おりしも教対研が全学科に発した「学科の現状と展望」と題するアンケート（一九七三年六月）に便乗する形ですすめられた。そこでとり上げられた主な点は、①他学科とくらべて学生数は多く、しかしそれに見合うような教員数が確保されていない。現状では花園大学きつてのマス・プロ学科である。教員のスタッフの早急な増員が必要である。②教員スタッフの構成上の欠陥、およびカリキュラム編成上の不備が顕著である。したがって学科教学の基軸を確定し、それに基づいたカリキュラムの再編成が不可欠である。

こうした形で漸次的な改変作業に着手し始めた矢先、同年九月「施設実習の心得」差別文書問題が起こった。とてもここでその内容を紹介する余裕はないので省かざるを得ないが、直接の当事者がなかったが、われわれは、単に実習の心得に差別的文言があったということに理解を止めず、第一期の学科教学のあり方総体に、あるいは学科経営全般に関わる問題として、また避けて通った大学紛争の、いわば社会福祉学科版として受けとめた。もっとも

追及する学生の側には、独自の状況認識や運動目標があつてのことであろうが、これはわれわれの関知するところではなかった。われわれはこの問題を政治的に矮小化したり、教授会をかくれ蓑にして逃げたりはしないという決意をもって真正面から臨み、そのなかから教学のあり方と学科の新生を探ろうとした。この点については、今でも一点の疚しさももっていない。この対応のなかで、急転直下ことが展開し、この年、第一期の全教員が学科から実質的に手を引くことになり、さらに改変作業に拍車をかけることになった。そのなかでまずつぎのような事柄が手がけられた。先ほどの教対研アンケートの回答に沿って、①マス・プロ教育をさせ、パーソナルな指導体制の確立、②現行カリキュラムの大々の改変作業（カリキュラムにおける四つの柱＝核体系として、④制度・政策論的なもの、③社会学的なもの、②心理・精神医学的なもの、①福祉の思想、原理原論的なもの）を企図し、それにもなう教員スタッフの拡充整備、③教員、学生、卒業生・現場関係者との交流の場として、「花園大学社会福祉懇話会」の創設などがこれである。こうした問い直しと摸索的試行を通じて、幾つかの懸案事項はその後解決実現をみることにした。すなわち、上記四本柱に基づくカリキュラムの改変整備は、一九七四年に一名、同七五年に学科主任を含む四名の新任教員を迎えることによって大幅に推進されることになった。そしてこれにともなう、念願の講読、演習、卒業論文指導などにおいて、パーソナルな指導体制が実現した。さらに一九七六年には養護学校教員資格に必要な関連科目を開講し、一九七六年、同七七年にそれぞれ一名ずつの教員を迎えて、障害児福祉・教育部門の充実化を図った。さらに福祉現場との交流としての懇話会活動は、一九七四年結成以来、年一回の合宿による総会の開催と機関誌『花園ふくし』の刊行がおこなわれてきた。これについてはひいき目に見てもとても盛会とはいえない状況を反省して、一九七七年から、年一、二回程度ではあるが、懇話会研究会を開いてその内実化に努めてきている。もう一つは、総合移転に際して、社会福祉学科付設の「クリニック・センター」（仮称）新設が認められ、

時宜になつて文部省「昭和五十三年度私立大学研究設備費」による補助金の交付を受けて、心身障害児（者）の治療教育研究のための記録分析機器（ビデオ装置）を導入し、その物理的な条件整備を図つた。まだ本格的に活動を開始するまでには至っていないが、今年度から実験的に始めてみようというところまでこぎつけている。そしてこうした諸活動のいっそうの発展に向けて、従来の機関紙『花園ふくし』を発展的に解消して、このたび独自に当学科の研究紀要『福祉と方法』の発刊が進められており、今年五月には刊行の予定である。さらにまた、昨年半ばから学科内外で、懇話会、クリニック・センター機関誌の発刊といった一連の個別的活動を統合するような、さらに上位の場として「福祉教育研究所」（仮称）の設立が検討されている。こうしてみると第二期の前二年間は一大激動期であり、一九七五年以降後半は離陸期であるといえる。

さて、このように書いてくると、一九七三年以降、第二期は、順風満帆、いいことづくめのようにきこえるが、けつしてそれだけではない。たしかに以上述べたように、弱小私学のおかげで、学科教員の熱意と自発性をもとにした摸索的試行がかなり活発におこなわれてきたことは事実であるし、また一定の成果も生み出してきつつあるといえよう。しかし、この摸索的試行の推進図でもあり、かつ目ざすべき目標でもある、教育、研究に関わる教員同士の、また大学と現場との協働的営みの場の創出ということになると、まだまだ不十分で、その緒についたかどうかという状況である。このことは一般的にいつてもそんなにたやすい事柄であるとは考えていないが、とくに社会福祉（学）を志向するがゆえに、あえて既存の社会福祉（学）の専門家だけで固めることを避け、社会学、心理学、社会福祉学、教育学などの、通常社会福祉（学）の周辺領域と目されているものを中核に据えた教員スタッフとカリキュラム構成をとっている本学科にとっては、かかる協働的営みの場の創出はまさに生命線であり、今後の学科の発展の成否を握る鍵であるといえよう。したがって今後の学科の課題は、単位としての学科、および各教

員が「どこからどこへ」行こうとしているのかを問いつつ、かかる協働的営みの場をいかに創出していくか、ということであることを指摘して、この小稿を結びたい。

史 学 科 の 教 学

(福 島 雅 蔵)

(一)

史学科の創設は、文学部の発足した一九六六年度からである。国史学専攻と仏教史学専攻の二専攻が設けられた。編纂委員会からは、『文学部設置以降、今日までの史学科の教学の流れについて』を執筆するよう依頼をうけたが、筆者は、史学科創設から一九七一年度ぐらいまでの諸事情には明るくないので、むしろ省略させていたゞき、現在の史学科のカリキュラムの根幹となった大改正が、一九七二年度から実現していることでもあるので、一九七二年度以降の流れについて詳述したいと思う。この点につき、大方の御了承を得たい。

(二)

一九七二年度は史学科の教学全体の上で、大きな変革をなしとげた最初の年であった。それまで史学科の専門教育科目の履修の方法については、一定の方向性や順序もなく、ことに教科目の中心である史料講読や演習等についても、はっきりした段階性がなかった。その結果は、履修の諸教科目の消化不良をおこし、卒業論文の内容に於ても多くの問題点をもったまま、きわめて不完全ないくつか、指摘されるような現状でもあった。他面、史学科入学

生の漸増にともない、高校時代に習得した歴史の知識をふまえて、大学入学後の専門科目として習得する上に於て、両者の結接点となるような授業が必要であり、新入学生に対して、一般教育科目や外国語のほかに、ゼミ形式の授業で専門教育諸科目の入門となるような教科目の設置が、カリキュラムの編成に於て、何よりも、焦眉の急に迫まられている現状でもあった。その上、本学の教育上の特色の一つとして、一般的に指摘されている、小人数システムによる内容の豊かな教育^を、新入生の時から実現、具体化していくことが必須でもあった。

学科会議の席上で、以上の問題点はいろいろと話題となったが、一九七二年度に於ては、とりあえず、正規の履修単位に換算できる科目の取扱いをせず、試行的に「歴史学基礎講座」を設置した。それは毎週土曜日の第三講時に開講することにし、新入学生を一五〜二〇名ぐらいの小クラスに編成し、数人の教員がそれぞれその小クラスの授業を受持ち、それぞれ自己の専門領域を中心に歴史学の内容にアプローチせんとするものであった。そして、学年の前・後期で担当教員を交替させ、領域・内容の相異なる教員の授業内容に接し、歴史学入門につき極めて幅広い教育を授けんとしたものであり、而も、土曜日の午後という時間がとられたのも、実証的研究を重んずる立場から、時には、一同打揃つての史跡踏査や臨地見学等に都合のよい時間帯として考えたからでもあった。この、歴史学基礎講座は、教員・学生ともに大変好評でありその実益の多いことが認識せられたので、翌一九七三年度からこれを単位化し、新入一回生を対象としてクラス編成を行ない、社会科学系列の一般教育科目の「歴史学」(C)とし、史学科学学生の必須科目として位置づけた。

つぎの問題点は卒業論文の作成に対する指導書のことである。卒業論文は学生の各自の在学中における勉学、研究の成果を各自の撰んだ題目のもとに論述・発表するものであり、文学部在学四ヶ年間の総仕上げとして重要な意味をもつことは、いう迄もない処である。

それまでの卒業論文は、前述した如く、内容的にも極めて不満の多いものであったばかりか、指導する教員の側からも一定の基準がなく、「卒論指導」の時間が設定されているのにもかかわらず、それに対応する学科の姿勢ができていなかった。学科会議の席上で種々論議をかさねての結果、「卒業論文作成の手引」なる冊子を作成・印刷し、学生に頒布することにした。その内容については、はじめに、(一)諸規程、(二)論文作成にあたっての諸注意、(三)論文の構成について、(四)卒論執筆上の諸注意、(五)審査・試問の各項目から成り、卒論に関する学内の諸規程や、論題の決定から論文の構成、及び執筆上の留意点、論文表記上の体裁などを具体例と関連して述べており、学生が卒業論文執筆に取り組むにあたって、文字通り、座右の書たらしめんとしたものであった。一九七二年度卒論提出予定者から、この手引書をもとにして卒論指導を実施したが、一九七二年度は、国史学専攻だけでも二十七名を数えることになった。而も、中間発表も十月に実施し四回生以上の全員を参加せしめ、三回生にも聴講させ、レジュメを用意し配布させ相互の討論と卒論作成執筆上の参考にさせたのであった。

(三)

一九七二年度の改正の上になつて、一九七三年度はさらに、カリキュラムの内容の細部にわたり検討を加え、教学の実を一層たかめるように努力した。卒論の作成への準備的な学習としての講読と演習は、そのばあい、いずれも重要な位置づけとなるわけである。それは、今まで履修の年次につき規定のなかった講読と演習を中心として、段階的な積みかさねの学習を核とするカリキュラムを組むことになった。講読については、国史学・仏教史学両専攻ともに、二回生の指定として、各時代・各部門の基礎的な史料の解説を中心とする基礎講読を設け、二回生を分ち、複数の教員が担当し前期、後期で交替するといった歴史学基礎講座と同じ方法を採用した。そして、それまでの講読は、「専門講読」とし三回生以上を対象とし、国史学専攻のばあいは、中世及び近世・近代のいずれか一つを撰択

履修せしめることにした。二回生の基礎講読が単位不合格のばあいには、三回生以上の講読・演習を履修し得ず、事実上の学年進行制をとったのである。演習も同じような趣旨で、両専攻ともに、三回生むけの演習と、四回生以上を対象とした演習とに分け、段階的に履修させ、原則として同時履修を認めない方針をとった。而も、学習面でのかたよりを防ぐため、三回生次の演習と四回生次の演習を、同一教員の授業を継続して学習することを許可しないという歯止めをなし、広い方面にわたり、史学研究の実力をつけることを目標としたのである。

以上の両年度のカリキュラム改正の骨子を要約するならば、史学科では、

一回生 「歴史学」基礎

二回生 「歴史学基礎講読」

三回生 「時代別専門講読」及び三回生演習

四回生 「四回生以上演習」及び卒論

という具合に、回生別に段階履修を実施して史学研究の実力をつけ、卒業論文の作成を容易にし、その質をたかめようとするものであって、一見、学生をしきり苛酷のように思われるが、このような構想は現在にいたるまで、史学科のカリキュラム編成にもその基底として踏襲され、生きていると云える。而も、演習にあつては、小人数教育を終始徹底させ、最大二〇名前後を限度として運営しているのである。

(四)

つぎに問題として、特殊講義や選択科目がとりあげられた。個別研究の実際についての方法と成果を学ぶための「特殊講義」は、両専攻とも三科目が必須であるが、史学科学生の増大と多方面への問題関心のため新しい対応にせまられていた。特講の担当者として専任教員のほかに、外来の非常勤講師の全面的な活用により新生面を開く方

向が、学科會議の討議を経て決定した。そのばあい、外來非常勤講師の講義が情性に陥らぬように、また、専任教員の研究や学生の學習に新風をふきこむように、各分野の研究者を新進・中堅・大家を問わず、原則として一年契約で出講をお願いし毎年交替するというシステムをとることにした。それは専任教員でカバーできない分野を依頼するが、また専任教員と同じ研究分野の研究者を招くこともあり、学生・教員に役立つよう意欲的に運営がはかられた。一九七三年度は、その手始めとして、専門教員のおらぬ近・現代史方面で非常勤講師を招き、翌一九七四年度は古代史方面に及ぶと云ったように、毎年、時代と分野とを變更して実施することとなった。

選択科目は一九七四年度から一九七五年度にかけ整理・統合が行われた。それまで特講に位置づけられて開講していた、『古文書』、『仏教美術史』は、選択科目として、『古文書学』、『美術史四』として履修していくことになった。その他、人文地理学・地誌学等の地理学方面や民俗学・美術史(1)など、教職教科目と関連して政治学・経済学等の講義も毎年、開講されるに至った。

一九七四年度から一九七五年度にかけ以上のカリキュラムは、一応、定着した。しかし、専攻学生の増加は国史学方面を中心につづき、学生の問題意識も多様化し、各時代・関連の諸方面にまで及ぶ状況で卒業論文の内容にもこれが恒常的に現われる状態であった。教学上の整備と学生指導の上からも専任教員の増員は必須となり、近・現代史の部門と最近の『古代史ブーム』と関連して考古学の方面に、是非、補充する必要にせまられた。前者は一九七七年度に於て、後者は一九七九年度から実現することになった。特講や選択科目の方面でも増講座の必要があった。そこで、一九七八年度では、国史学専攻方面では古代・中世史研究(一)、近世近代史研究(一)及び増設の歴史地理学研究並びに仏教史研究、と六つの講義を開講し仏教史学専攻方面でも三つの特講を設けている。演習も三・四回生それぞれを対象として、国史学専攻で五つ、仏教史学専攻で二つと合計七つを開設し、学生の研究指導に当たっている現状である。

なお、一九七六年度から史学科を母胎として博物館学芸員コースが実現したことを、付言しておこう。そのため考古学関係講座の増加をはかったが、それは、単に博物館学芸員の養成をはかるというだけではなく、あくまで、具体的な事物に即して実証的に即物的に歴史を考察しようとする、史学科の教学上の特色を、具体化したものと考えてよい。

史学科が創設されてから十年以上の年月が経過した。その間の教学の展開のあとを、一九七二年以降に限って眺めてきたが、いたずらに旧習を墨守するものではない。今後ともに、時代の変遷や学問の発達、学生の動向等に応じて、たえず、教学の内容に検討を加えることがつづけられるであろう。

国文学科の教学

(土 岐 武 治)

一、一九六六年度～一九六九年度

一九六六年四月、文学部設置に伴って国文学科が併置され、募集人員三十名、法橋理知教授が主任となって出発する。ところが一九六八年五月、法橋教授が心臓疾患から病床に臥し、代わって鷺山教授（当時助教授）が代理主任となる。その翌一九六九年四月、浅学の私が、主任として就任させて貰った。丁度この年度は、国文学科完成年度でもあり、これを契機に国文学科の現状と将来を検討し、次のように立案し、方向づけたのである。すなわち、わが国の歴史と風土の中に形成された固有の文学研究を目的とする花園大学国文学科は、古典の薫る京都と日本文化

の主軸となる仏教という二因縁の中に生れたもので、研究上誠に好条件を有し、この恵まれた中で私たちは、日本文学の構造や本質を実証的に究明し、探求を目指す光榮を新しく見直し、この点を考慮しながら、国文学追求のため、例えば正確な読解と鑑賞を第一とする「講読」、日本語の特質を究める「国語学」、作品の創造発展の回顧を展望する「文学史」、文学形態を把握する「日本文学概論」、研究の実際についての方法・成果を学ぶための「特殊講義」、それらを学生みずから実践する「演習」、さらに「卒業論文」などの特徴を有するカリキュラムを計画し、同時に国文学科研究室の設置をお願いするなど、次第に整理改定へつとめたのである。しかも講義は単なる学問の伝達のみでなく、この中に人間形成の教育を尊重し、学問は人間尊厳を悟るためにあることを建学の理想と考えたのである。それがためにも学生の自主性に基づく学究活動、また各自の研究成果を高く推進し花大学風を建設すためにも、卒業生・在学生・教師が三位一体となる機関「花園大学国文学会」を、やがて組織出来るように、周囲を啓蒙し且つ叙上の目標に向かって、その目的達成に邁進することに決めた。一方、選択書道担当の中島教授（当時講師）も豊かな創造性に富む書道の指導にあたられたのである。丁度同年五月十四日（水）、国文学科完成年度を記念し、午後四時から旧学舎十番教室で、国文学科全員の合同クラス会議を開いて、「日本文学の研究を推進し、教員、卒業生（一九七〇年三月第一回）、在学生の親睦や研究を目的とする『花園大学国文学会』を設ける件」について協議し合ったところ、満場一致、ここにわが「花園大学国文学会」が誕生したのである。参考までに当学会会則の最初を掲載すれば、左のようになる。

第一章 総則

第一条 本会は花園大学国文学会という。

第二条 本会は本部を花園大学国文学科内に置く。

第三条 本会は花園大学国文学科専任教員をもって指導者とする。

第四条 本会は日本文学の研究を推進すると共に、会員相互の親睦を計ることを目的とする。

第五条 本会は次の事業を行なう。

① 研究会並びに講演会の開催② 会報の刊行③ 講習会・輪読会及び見学旅行、その他必要なる事業。
以後は、この会則の規定に従って、発表会、輪読会・史跡探勝など、つぎつぎに開催することになった。

二、一九七〇年度～一九七三年度

一九七〇年四月一日付けで、芦谷信和教授（当時講師）が就任となり、近代文学を担当し、また一九七二年四月には宮岡薫助教授（当時講師）も就任し、上代文学を担当するなど、国文学科内は次第に充実し活気づいて来る。
一九七二年五月二十七日（土）午後二時より旧学舎十番教室で、卒業生最初の研究発表会を次の通り開催する。

○大筑波集と山崎宗鑑について……………大阪学院高校教諭 二回卒 高橋五生
続いて同年六月十七日（土）にも、左記の通り行なう。

○石川淳論……………大映映画撮影所 二回卒 豊島 啓

殊にこの一九七二年は、本学創立百年にあたったが、この年の七月二十五日（火）より三日間、国文学会主催のもとに、第一回の公開夏期講座（聴講無料）を、旧学舎十一番教室で、毎夕六時から九時の時間で、次の通り開催したのである。

第一日 七月二十五日（火）

○盛遠と袈裟御前―平家物語の文覚発心説話の源流……………本学教授 鷲山樹心

○記紀における反逆伝説と歌謡の交渉……………本学講師 宮岡 薫

第二日 七月二十六日(水)

○独歩の『忘れえぬ人々』……………本学助教授 芦谷信和

○平安文学と書道……………本学助教授 中島利仁

第三日 七月二十七日(木)

○堤中納言物語の笑い……………本学教授 土岐武治

右の公開講座の主旨は、(1) 講義にない内容を在学生に聞かせる。(2) 卒業生の実力養成を期する。(3) 一般市民への公開という三点に立ち、今後継続する計画に立つての行事であつたが、毎夜聴講者は百五十名、中には神戸、大阪方面からの聴講者もあり、盛んな拍手の中に閉じることが出来た。終了後は、在学生、卒業生、教師とも相揃つて旧学舎十番教室で懇親会を開き、来年を期して万才三唱し十時半頃散会した。一九七三年六月二十五日、大学側より各学科の現状と展望について提出せよとの要請があり、当時国文学科より、次の体裁で大学当局に提出している。

国文学科の報告

主任 土岐武治

一、国文学科の現状概要

A 学生在籍数 一回生 四七 二回生 五二 三回生 四四 四回生 三二 五回生以上 八 計 一八四

B 教員数 専門教員 四 教職書道教員 一

C 共同研究室の管理 宮岡講師指導監督のもとで、月・水・木・金の四日間を学生の閲覧日となし、閲覧時間は朝九時より午後六時まで。

D 国文学科の研究活動

(イ) 毎月第四土曜午後二時三十分から「国文学会」例会を開く。

(ロ) 夏期講座の開設 今年は第二回目で次の通りである。

第一日 七月三十一日(土)

○ 女人愛執—吉備津の釜より……………鷺山樹心

○ 独歩の運命劇—源叔父より……………芦谷信和

第二日 七月二十二日(日)

○ 文学のふるさと・書のふるさと……………中島利仁

○ 応神朝の歌謡……………宮岡 薫

第三日 七月二十三日(月)

○ 源氏・狭衣の教育観……………土岐武治

(イ) 研究雑誌の発行『国文学論究』創刊号 九月刊行予定・毎年一回発行・六〇〇部出版。この専門雑誌を他大学の研究雑誌と交換し合い、学生・教師の研究に便ならしめる。

(ロ) 輪読会 毎週火曜日午後四時二十分から四番演習室にて、土岐教授の「源氏物語」の輪読会。

二、国文学科の問題点

A 国文学科募集人数について、国文の入学定員数三〇名なるも、今後他学科と同じく四〇名とすべきである。

B 教員三名増員すべきである。

(イ) 最近国文学科の学生数は数年前と比較し、著しく増加し、しかも卒業時の就職は殆ど教職である。このような見地からも国文学科の教学内容に関する充実を計ることも必然のこと。教員について考えるに、国語

学担当の教員、中世文学担当の教員が欠けている。

- (ロ) 漢文専攻の福嶋先生が定年退職のあと、未だにそのままの状態なので漢文（古典）担当の専任教授を速かに補充すべきである。

- (ハ) まして入学定員数四〇名ともなると、一層以上の教員が必要となる。

C 共同研究室について

- (イ) 一九六六年の新設学科に対する特別措置がないため、学問上の基本図書が著しく少い。共同研究室備付けの図書は誠に貧弱である。

- (ロ) 国文学に関する月刊の雑誌は十種程は備えたい。

- (ハ) 共同研究室付きの助手がいらないし、指導上いろいろ困る場合が多い。

- (ニ) 雑誌編輯、夏期講座、演習の補助資料集め、輪読会その他の研究活動に至るまで、一銭の予算もなく、指導上から担当教師の負担は余りに大きすぎる。せめて一学科あて年間二十万円程の予算は必要である。

三、国文学科の展望

A 大学院の設置

- B カリキュラム、特に選択科目についての長期改革

- C 卒業生の追跡調査と、その対応及び指導

- D 教員の研修を考え、少くとも毎年各学科一名位国内留学生として認める制度をつくる。

- E 各学科の持つ立場と使命を、学問上、教育上から公平に尊重し合い、学生の場合も同様、心から喜んで努力

出来る大学にしなければならない。

このような現状分析と展望を教授会に公開し検討いただいたところ、教員は一九七六年に中世担当一人、一九七八年国語学担当一人増員の見通しが立ち、それに二十万円の学科交付金も出るようになって、今後の「国文学論究」の発行や「夏期講座」開催も、これによって継続の見通しが立ち、学科一同は非常に喜んだのである。

一九七三年六月三十日(土)に、旧学舎十番教室で、第三回卒業生、夙川学院高校教諭一色正道君が「古今和歌集の研究―表現と美意識―」と題し、また十月三十日(土)には、第五回卒業の吉岡寿道君は「建礼門院右京大夫の研究」と題して、それぞれ内容に富んだ労作を発表、在学生に大きな感銘を与えてやまなかった。一九六九年花園大学国文学会創設以来念願して止まなかった研究誌発行の夢が、一九七三年十月一日「花園大学国文学論究」の命名で創刊号が世に出た。この実現こそ真に教師と在学生と卒業生との、うるわしい和合の結晶に外ならず、まさに学会に寄与すべき使命を担う、「国文学論究」こそ、国文学科の永遠の燈といつてよからう。今参考までに、創刊号所載の題名および発表者氏名を左に紹介することにする。

○創刊のことば……………土岐武治

○狭衣物語冒頭文の再吟味―典拠上から見て―……………土岐武治

○春雨物語「焚燐」の主題―上田秋成晩年の

仏教観に関する研究ノートより―……………鷺山樹心

○独歩「忘れえぬ人々」……………芦谷信和



花園大学国文学論究 創刊号

○神武記における歌謡の奥相……………宮岡 薫

○大筑波集と竹馬狂吟集について……………二回卒 高橋五生

○石川淳覚書……………二回卒 豊島 啓

三、一九七四年度～一九七六年度

福嶋俊翁教授退職後の代りに入矢義高教授が一九七六年四月一日付けで就任し、漢文の講義を担当するようになる。この年の六月八日（土）午後二時から旧学舎十番教室で、第四回卒業生、夙川学院高校教諭服部潤承君が「竹取物語成立の再吟味」を発表し、資料豊かな発表は、聴講の在学生に対して、先輩の貫録は誠に見上げたもので、先生方の批評も将来を嘱望されている。続いて六月三十日（日）には、一九七四年度全国仏教文学研究大会が、旧禅文化研究所三階講堂を会場にあてて、午前九時より開催、当日全国各地の大学より参集された諸先生は、百数十人で、発表者の中には佐々木八郎先生、岡見正雄先生の御高説の聴講を得、本学国文学科にとっては、又とない良い機会であったと考える。当日の発表題目や氏名を掲載すれば、次の通りになる。

○室町時代写本「歎異抄」中における蓮如本の位置……………京都女子大学 岡見令子

○狭衣物語における女二宮出家の一斑……………花園大学 土岐武治

○日本と中国における救母説話……………八頭高校 石波 洋

○柳宗元の釈教碑について……………大谷大学 河内昭月

○和泉式部の愛の構造……………園田学園女子大学 岩瀬法雲

○今昔物語における狩……………専修北海道短大 広田 徹

○山徒について……………関西大学 岡見正雄

○平家物語

大東文化大学 佐々木八郎

この年六月三十日、「国文学論究」第二号を次の目次通り発行した。

○狭衣と源氏における朧月夜内侍との典拠関係

土岐武治

○春雨物語「血かたびら」の思想——その儒・仏批評についての論の再検討——

鷺山樹心

○独歩「忘れえぬ人々」承前

芦谷信和

○仲哀記の酒宴歌謡

宮岡 薫

○「建礼門院右京大夫集」の歌風——修辭・語法の見地から——

吉岡寿道

さらに又、七月十三日（土）より二日間、花園大学国文学会第三回公開夏期講座を左の通り開催したのである。

時間 毎夕六時三十分から九時 会場 本学（旧学舎）十番教室

第一日 十三日（土）

○独歩の「武蔵野」

芦谷信和

○女人哀愁「宮木が塚」

鷺山樹心

第二日 十四日（日）

○倭の五王の歌謡

宮岡 薫

○狭衣と高野詣

土岐武治

連日聴講者百余名、盛会のうちに無事終了。例によって在学生、卒業生、教師、佐野常任理事、学長相揃つて十番教室で懇親会を行い、十時過ぎ母校の発展を祈り万才三唱して解散する。

一九七五年度新学期からは卒業論文指導を、毎週金曜日第五講時に変え、試みに四回生の中に三回生をも加え聴

講させ、指導の徹底を計ることにする。七月四日（金）より二日に亘って、毎夕六時より九時まで旧学舎十一番教室で、第四回公開夏期講座を左記の通り開催する。

第一日 四日（金）

○独歩と「青年文学」

芦谷信和

○雨月物語の悲愁美——「浅茅が宿」を中心に

鷺山樹心

第二回 五日（土）

○ヤマトタケル伝承と歌謡

宮岡 薫

○平安後期文学の一特徴

土岐武治

聴講者は両日共に二百余名、例年にない盛況で、卒業生の聴講も多く、これ亦例年に見られる現象である。終了後是在学生、卒業生、教員、各部長も出席し懇親会を開く。母校を憶う卒業生の感想発表に在學生は感激して聞き入る。十時三十分万才三唱して解散する。

十月一日（水）花園大学国文学論究第三号が次のように刊行される。

○狭衣物語と源氏末摘花巻との交渉

土岐武治

○雨月物語「夢底の鯉魚」の構想について

鷺山樹心

○有島武郎「生れ出づる悩み」

芦谷信和

○神武記の歌物語的方法

宮岡 薫

○「竹取物語」成立年代の再吟味

四回卒 服部潤承

次に十一月三十日（土）午後二時四十分より旧学舎十番教室にて、第四回卒業、聖家族高校教諭野村隆司君が

「太宰文学における中期の意味」を発表した。新しい試みに基づく発表で、ユニークな発表と評された。続いて十二月六日（土）にも第五回卒業、仙台朴沢高校教諭後藤健司君が「宇治拾遺物語の研究」と題し、先行説話集との比較の中から、実証的に説話選択の意識の推論考を発表した。今後の期待がかかる労作発表であった。最近卒業生の発表には、目ざましいものがあり、現に上記服部君は、同年十一月十八日（土）京都女子大学での仏教文学研究会例会において、「竹取物語と伝典」と題して発表し、他大学の諸先生から数多く称讃の辞をいただいた程である。

一九七六年五月二十日（木）「花園大学国文学論究」第四号は次のように刊行される。

○狭衣物語と源氏簞木巻との交渉……………土岐武治

○春雨物語「死首のゑがほ」と仏教……………鷺山樹心

○有島武郎「生まれ出づる悩み」承前……………芦谷信和

○源氏物語と狭衣物語との交渉——筆跡を中心に……………四回卒 坂東育子

七月三日（土）、四日（日）の両日に亘って、国文学会主催第五回の公開夏期講座を開催する。

時間 毎夕六時三十分～八時四十分 会場 十一番教室

第一日 三日（土）

○雄略記の歌謡……………宮岡 薫

○雨月物語の世界……………鷺山樹心

第二日 四日（日）

○国木田独歩における老荘思想……………芦谷信和

○平安末期物語文学と仏教……………土岐武治

兩日共に聴講者三百名、外来者の聴講が目立つし、卒業生も多いのがたのしい。終了後在學生、卒業生、教員と相揃って懇談会を十番教室で開き、母校の発展を祈って万才三唱し、十時半散会する。

十二月六日(木)には文部省から視察委員野間光辰・藤沢令夫両氏来学し、国文学科を主体とする視察があり、土岐主任教授より、現状と展望を説明する。視察官より今後「国語学担当」の教員を増員して欲しいとの要望があり、これについて佐野常任理事より「一九七八年度より増員の予定がある」との答えを得た。

四、一九七七年度～一九七八年度

四月一日付けで三村晃功氏が、専任講師として就任、中世文学を担当するようになり、学舎も現在の新学舎に移り、学科内も次第に充実の兆が見える。七月十七日(日)より二日に亘って、花園大学国文学会主催第五回の公開講座を、左記のように開催する。

時間 毎夕六時三十分～八時四十分 会場 B号館三〇〇番教室

第一日 十七日(日)

○続日本紀歌謡の歌詞……………宮岡 薫

○女人挽歌―春雨物語「死首のゑがほ」考……………鷺山樹心

第二日 十八日(月)

○歌枕「小倉山」考……………三村晃功

○狭衣と宣旨……………土岐武治

兩日共に聴講者二百余名、九州、四国、関東、北陸からの卒業生が集り、盛んな拍手の中に無事終わる。終了後在學生・卒業生・教員・佐野総務部長等相揃って、三〇一番教室で懇談会を開く。席上卒業生は母校の発展を喜々と

して悦び、花大今昔の思いを語り合つて止まぬが、十時半、明年を約して散会する。また十月十七日（金）花園大学国文学会研究発表会を開催、午後四時四十分より一〇一番教室にて次の通り行なう。

○「一握の砂」の歌風について……………甲子園学院高校教諭 五回卒 平井常雄

聴講者七十余人の中で、発表後批評会に入り、意見の交換があり、諸先生の指導もあつて、次回を期して閉会する。

一九七八年三月三十一日花園大学国文学論究第五号は、次のように発行される。

○狭衣巻一「とりかへばや」物語との交渉……………土岐武治

○雨月物語と儒・仏二教……………鷺山樹心

○独歩の「今の武蔵野」(三)……………芦谷信和

○神武記の歌物語的方法（承前）……………宮岡 薫

○ノートルダム清心女子大学蔵本「為世集」の成立……………三村晃功

○宇治拾遺物語における説話選択の特色について……………五回卒 後藤健司

一九七八年四月一日付で川戸昌氏は専任講師として就任し、国語学を担当するようになり、一九七三年度立案の国文学科のカリキュラム完成の念願もここに達成し、国文学科の一段階を作るが、今後この現状の密度を一段と深め、教学の実をあげねばならない。

七月七日（金）、八日（土）、九日（日）と三日に亘る第七回目の国文学公開夏期講座は、次の通り開催された。

日時 七月七日～九日 毎夕六時三十分～八時四十分

会場 花園大学B館三〇〇号教室

第一日 七日（金）

○神武記の歌謡……………宮岡 薫

○雨月物語「夢応の鯉魚」考……………鷺山樹心

第二日 八日（土）

○時枝誠記の文章論……………川戸 昌

○国木田独歩「酒中日記」……………芦谷信和

第三日 九日（日）

○神宮文庫本「為冬集」の成立……………三村晃功

○平安末期物語と観世音……………土岐武治

終了後、例によって三〇一号教室で在学生、卒業生、教員全員、事務長等約七十余名相揃って懇談会を開き、談笑し合い十時半解散する。

十二月二十五日（月）、花園大学国文学論究第六号を「土岐武治教授学位受領記念号」として、次の通り発行することになった。

○土岐武治教授略歴、主要著書・論文目録

○土岐武治教授学位論文「堤中納言物語の成立新考」要旨

○浜松中納言物語「孝養の志」考……………土岐武治

○雨月物語「青頭巾」と禅思想……………鷺山樹心

○独歩「源叔父」(1)……………芦谷信和

○「入道大納言為兼卿集」（前集）の成立……………三村晃功

○主語過程の主体……………川戸 昌

○他撰本貫之集の研究……………八回卒 宮原千鶴子

国文学科発足して以来十三星霜を経て、現在に至るが、この間卒業生は次のように巣立ち総数三一八名となる。

年度	人数
44	9
45	24
46	16
47	33
48	21
49	31
50	38
51	36
52	51
53	59
計	318

又学内の在学生の状況を掲載すれば、一九七八年三月現在で、在籍数は次の通りになる。入学定員については一九七六年度より七十名となり、従って一、二回生の在籍が多いのも、そこに起因する。

	計	男	女
1回	92	45	47
2回	94	37	57
3回	76	37	39
4回	64	18	46
5回	17	11	6
合計	343	148	195
備考	昭和51年度から募集人員70名のため1、2回生が3、4回生に比べて多い。		

第五章

付属施設・関係機関



図書館（森 弘宗）

学生寮（法谷文雅）

同窓会（芳沢勝弘）

第五章 付属施設・関係機関

第一節 図書館

(森 弘 宗)

花園大学の前身であった臨済宗大学の図書館は、一九二七年の妙心寺第二世徹妙大師五百五十年大遠諱記念事業として、妙心寺図書館の名のもとに設置せられた。この設置については、当時正法輪主筆であった後藤光村師の提言と、その募財に当られた木村祖要師の努力は容易ではなく忘れてはならないものである。

手島文倉学監の後任として就任された奥江順徳師は一派に閲覧室の必要性を訴え、木造二階建閲覧室の完成がみられた。

爾来学制の変遷とともに、内容と規模の拡充が要請せられることになり、妙心寺開山大師六百年遠諱を機に図書館建設の機運が高まり、一九六三年十一月閲覧室、研究室、小講堂、演習室、会議室、ならびに禅文化研究所各室を包含した図書館が竣工した。

収書に於ては、大学昇格の一九四九年から一九六三年までは仏教学部のみであったため、仏教関係の図書が主に集められ僅少な予算では教養的図書整備までに至らなかった。仏教書は専門学校時代の蓄積により四学科の内では一応揃ってはいる。しかし印度・中国・日本・原始仏教と広範囲で深い学術研究に対応するための、チベット・高麗大蔵経等、ならびに国外における仏教書等の収集は強く要望されている。一九六四年仏教福祉学科の新設により社会福祉関係の図書を購入、一九六六年文学部となり四学科の内、特に社会福祉、史学、国文関係それぞれの基本的

妙心寺圖書館創立紀念攝影

前花園中學校校長
理事 手島文學士
前臨濟宗大學監事
理事 神岡政造師

前妙心寺派管長
館長 神月徹宗 現下



前永源寺管長代議士
理事 後藤虎一郎

寺務理事 木村恒幸

妙心寺圖書館（旧圖書館書庫）

図書充実に専念するもオイルショックを受けた図書価額の高騰は収書計画を根底からくつがえしていった。一九七七年度より図書強化予算が計上され生きついたが、高価額の波圧は留まることなく蔵書構成の堤を打ちくずす現況である。

図書館の重要な問題は蔵書の内容であり各学科構成員による学科の特徴・学科構成による大学の特色、個性が蔵書構成に反映されユニークな大学図書館に発展させねばならない。

一九七七年、大学は現在地に総合移転。図書館も五十年の住みなれた建物に別れを告げ当地の新館に移転した。寄託・寄贈図書の整理配架と、年次増加する図書資料の量に新書庫は満配となったため、一九七八年度事業として図書館増築計画に着手、隣地二六七・三平方米を購入、閲覧室、書庫ならびに三階に学術講演等のための小講堂を建設、一九七九年三月完成をみた。

新築成った図書館の面積は、書庫一六五㎡、閲覧室一六五㎡、三階会議室七五㎡、小講堂二四〇㎡の増加となった。全館内に冷暖房設備が完備されている。

閲覧室

一九七九年度から閲覧方法を一部の図書を除いて全開架式を採用、カウンターを中心に参考図書コーナー、閲覧室にも親しみやすく書架を増設し、閲覧机三十五脚（百四十席）を余裕をもって配置、既存書庫は開架式となっている。また入口に別に自習室（十六人掛）を新設、隣接して休息ロビーを設けている。

写真室

文献複写・撮影のため次の器機を設けている。

マイクロフィルム・リーダー・プリンター

一台

ミニコピー・カメラ

一台

引伸機

一台

別置機器

乾式普通紙複写機、断裁機、製本機、カード印刷機 各一台

書庫

既存書庫には書架二〇台収容可能冊数約四二、〇〇〇冊、新書庫には洋装本用書架九台、約一六、〇〇〇冊、和装本用書架八台約五六、〇〇〇冊が設けられている。

既存書庫は一般図書を配架して開架室とし、新書庫には貴重図書、寄託図書ならびに未整理資料が収蔵される。

図書資料 (一九七八年五月現在)

一般教育関係図書

(人文・社会・自然科学系)

三四、九六五冊

外国語関係図書

(英語・独語・仏語・中国語・他)

三、六八四冊

保健体育関係図書

三五八冊

小計

三九、〇〇七冊

専門教育関係図書

仏教学科

三〇、八九一冊

社会福祉学科

四、一九五冊

史学科

四、五八六冊

国文学科

一五、〇五三冊

小計

五四、七二五冊

總計

九三、七三二冊

學術雜誌

四二二種

寄贈圖書（文庫）

伝衣文庫

三六五冊

海福院文庫

一、〇〇〇冊

永明寺文庫

一、二〇八冊

桜内文庫

三四六冊

吉瀬文庫

一、二六九冊

南泉寺文庫

一、一八八冊

天王寺文庫

一四〇冊

坂本文庫

三四六冊

大法院文庫

六一冊

塚本文庫

九四八冊

今津文庫

三、四六〇冊

法橋文庫

二五〇冊

三田寺文庫

二〇〇冊

藤文庫

一四七冊

法泉寺文庫

五八九冊

寄託図書（文庫）

国清寺文庫

七八九冊

自性寺文庫

一、二五二冊

高嚴寺文庫

八〇三冊

大龍寺文庫

一、八六一冊

慈雲院文庫

八六七冊

曹源寺文庫

二、二四〇冊

図書館業務

陸川文庫 四、六二〇冊

応国文庫

二八二冊

年間開館日数 一七五日

開館時間 平日 九時より十七時

土曜日 九時より十四時三〇分

試験期間中一時間延長

年間館外個人貸出数

学生 三、三三四人

教職員 一七五人

其の他 二八人

計 三、五三七人

年間館外個人貸出冊数

学生 六、六〇四冊

教職員 四三〇冊

其の他 四一冊

計 七、〇七五冊

館報 全学生を対象に「図書館利用のしおり」を印刷配布。ならびに年二回「図書館報」を刊行している。
展示 一九七八年秋、図書館収蔵の今津文庫の善本を「古経展」と題し閲覧室に於て展観した。

第二節 学 生 寮

(法 谷 文 雅)

○参玄寮さんげんりょう（一九一八年～一九五八年）

一九一八年、花園大学の前身臨済宗大学当時、木造二階建の本館が新築され、時を同じうして後に白雲寮の南寮のあった場所に建築されたのが参玄寮であり、本格的な本学学生寮の始まりである。

本寮は、木造二階建、総面積約五〇〇平方米、原則として一室二名であった。

当初は、一回生全員入寮が建前であり、二回生以上は、寮頭を除き退寮することとなっていたが、学生数の多少等により必ずしも厳密ではなかった。

この寮は、教育の一環としての施設であり、又専門道場予科の性格が強く、寮則等にも厳しい規定がなされていた。例えば生活面では、寮の北側の空地に菜園を作って自給自足の生活をし、又随時二階の広間で摂心を行って「行」の研鑽に励むなど、行学一体の学風を保持し続け、この精神は旧制臨済学院専門学校、新制花園大学の参玄寮へと受けつがれていった。

○白雲寮はくうんりょう（一九五九年～一九七七年）

一九五九年二月、新しい学寮が建設され、その名も白雲寮と改称された。

参玄寮当時は、宇多川が未改修のため、増水時には一階が水びたしになる等の問題があったが、昭和三十年代に入って宇多川が今日の如く改修され、時あたかも妙心寺開山無相大師の六百年遠諱に当り、これを機に記念事業として、妙心寺派檀信徒（花園会）の浄財によって新築されたものである。

木造二階建、面積は南寮が五〇四・八五平方米、北寮が四六八・一四平方米、他に宿舍等が七六平方米、総面積



▲ 外人参観団をむかえての坐禅風景（白雲寮禅堂）

▼ 白雲寮食堂



約一、〇五〇平方米で、参玄寮の約二倍の広さとなった。

この寮には、参玄寮になかった禅堂、茶室、談話室、外国人留学生用の部屋などを併備して面目を一新すると共に、新寮則を制定してよき宗門子弟の養成の場としての寮をめざして再出発した。

一九六六年、文学部の設置に伴って起った寮生許容量の不足から、二回生以上を退寮させることから端を発したいわゆる白雲寮解放斗争は、一九六九年九月の大衆団交の結果自治寮となり、学寮としての歴史を閉じた。

更に一九七七年四月、本学が現在地に総合移転することにより、旧校地・校舎は妙心寺派に売却され、同年五月白雲寮は閉鎖された。

○山越寮（一九七七年） やまごえりよう

一九七一年十二月、花園大学教育研究充実長期計画の策定に伴い、寮を学外に建設するための用地買収が進められ、一九七二年七月には、右京区山越東町二十六番地に、面積七四三・三七平方メートルの土地を四千四百万円で購入、一九七七年三月には、鉄筋二階建、面積五八〇・一八平方メートル、総工費約五千四百万円の新寮が建設され、現在の男子寮として今日に至っている。

○若草寮（一九七六年） わかぐさりよう

一九六六年、文学部の設置によりそれまで殆ど在籍しなかった女子学生の急増に伴い女子寮建設の機運が高まり、大学は適地が確保されるまでとりあえず、契約寮を保有して女子学生の便に供することとなった。

一九七五年三月、念願の女子寮用地を右京区谷口梅津間町十五番地に購入（面積五五一・四六平方メートル、金額五千万円）、一九七六年四月には、鉄筋二階建、面積四四三・〇四平方メートル、総工費四千五百万円余、定員三十六名の寮がここに完成、学生厚生施設の一環として現在に至っている。

第三節 同窓会の発展と活躍

(芳 沢 勝 弘)

一九五八年の白雲寮新築から一九六七年の本館新築に至るまでの長期間にわたって、募財活動を積極的に展開し、母校の新生に献身的な努力を惜しまなかったのは多くの同窓会員であった。これについては別項に記したところである。しかし、同窓会独自の活動は、年一・二回京都で総会を開く他は、地方同窓会あるいは同級会が散発的に開かれる程度であった。時折、大学の本部から地方同窓会を訪問することがあっても、それは多くの場合募財を目的とするものであった。これは、花大の同窓生のほとんどが宗門関係者ということもあって、同窓会でなくとも、本山や各教区において横のつながりがあったことも一因となっていたためであった。

一九七〇年には公開講演会が開始され、各地方に於いても同窓会の全面的協力を得て行なわれた。これを機に各地での同窓会支部活動の動きが次第に活潑になっていった。公開講演会は次のとおり。

一九七〇年十月十三日 於京都會館第二ホール

「人間性の原点」

山田無文学長

「知足の秋」

水上 勉氏

一九七一年十月三日 岐阜市

「創造の人間の再発見」

山田無文学長

「失われゆく美しいもの」

水上 勉氏

一九七二年には本学は開学百年を迎え、十月十七日、京都會館に於いて盛大に記念式典が催された。この式典に



北九州地区公開講演会

は多くの同窓生が全国各地から参集し、同窓会の結末は一段と強まり、同窓会活動をますます活潑に展開していくことが約束された。この年の公開講演会は、次のように催された。

一九七二年 十月十二日 兵庫県浜坂市

十月十三日 島根県松江市

「人間の故郷」 水上 勉氏

「東洋の道」 山田無文学長

一九七三年には、同窓会機関紙である「花園大学通信」が、従来年一回発行であったものを年に数回発行するようになり、同窓と大学とのコミュニケーションはますます緊密になった。「同窓ミニ通信」欄は居ながらにして大学と同窓、同窓と同窓とを結びつける役割を果たした。新しい装いのもとにスタートした「花園大学通信」第十九号で同窓会副会長の松倉紹英師（龍安寺住職）は地方支部の充実を次のように訴えかけた。

「今まで花大は寺門の人のみが学生であった。しかし花大も現在ではすっかり変って、年々、女子の同窓生もウナギ上りに増えている状態である。同窓会本部では、このような変化の中で如何に同窓会活動を経営すべきかを考えて来たが、とりあえず、今年は総会をとりやめ、代って地方支部幹事の方々に京都にご参集願ひ、同窓会の諸問題を提起して頂くことにした。……本部では各地方支部と密接に連絡をとり、それぞれの地方には本部役員など

を出自させるなどして、本部と地方との意志の疎通を計りたい。」

なお、松倉師は、山田無文学長を補佐して実質的に同窓会運営の最高責任にあたられ、名副会長としてお世話頂くことになった。この年には九州地区で次のように公開講演会を開催した。

十月三十一日 午前 於八幡製鉄所親和会館

午後 伊万里市民会館

十一月一日 福岡青少年勤労センター

「創造的人間の自覚」 山田無文学長

「私の中の『寺』」 水上 勉氏

講演会の会場準備、広報活動等に同窓会は積極的な活動を展開した。これに合わせ、九州では二地区に於いて地方支部同窓会を開催し、大学通信はこの実況をつぶさに報告した。これを機に全国各地に同窓会地方支部結成の動きが波及していくことになった。

十一月十二日には京都に於いて同窓会全国評議員幹事合同協議会が開かれ、次のような決議がなされた。

① 同窓会の組織化を強固にするために、地方支部の結成をすすめる。

② 評議員・幹事を地区別に調整しながら増員する。

③ 年額会費一〇〇〇円を徴収し、機関紙の発行をもっと盛んにする。

そして、これと同時に「花園大学興学基金計画」を同窓会が中心となつて全面協力することが決議された。これは、山田無文学長が個人として出された志納金三〇〇〇余万円を元にして二億円を勧募しようというものであった。

一九七四年七月二十六日には、本部から委嘱された各府県の地方支部準備委員が、京都は清水の成就院に陸統と

して結集し、準備委員がそのまま地方支部幹事として就任頂くこととなり、各役員が次のとおり選出された。

花園大学同窓会本部役員

会長	山田 無文	神戸市
副会長	鈴木 宗忠	静岡市
〃	松倉 紹英	京都市
〃	多津 猷保	兵庫県
理事	鈴木 久直	宮城県
〃	花岡 禅博	埼玉県
〃	角野 永宗	福井県
〃	永井 甲嶽	山梨県
〃	今城 義尚	熱海市
〃	裁松 完道	岐阜市
〃	古田 宗忠	京都市
〃	堀尾 正寛	京都府
〃	朝日 大真	大阪市
〃	法輪 好道	島根県
〃	上杉 寛人	愛媛県
〃	野口 浩堂	福岡市

〃	佐野大義	京都市
〃	福島雅藏	大阪府
〃	芦谷信和	京都市
〃	森弘宗	京都市
〃	法谷文雅	京都府
監事	杉井栄一	京都市
〃	正木義完	京都府

この地方支部幹事会において「興学基金計画」への積極的協力と、それに合わせ各地区に於いて積極的に地方支部を結成していくことが決議された。この時、本部から提示された同窓会地方支部会の規約案は次の通りである。

花園大学同窓会〇〇県支部規約 (例)

(名称及び事務所)

第一条 この支部は、花園大学同窓会々則第一条二項の規定により、花園大学同窓会〇〇県支部といい、その事務所を〇〇県地区支部長宅内におく。

(会 員)

第二条 この支部の会員は、〇〇県内の花園大学同窓会員を以て組織する。

(目 的)

第三条 この支部は、花園大学の発展に協力し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業)

第四条 この支部は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

一、会員名簿の発行

二、総会の開催

三、その他必要な事業

(役員)

第五条 この支部に次の役員を置き、その任期を四年とする。但し、再任を妨げない。

一、支部長 一名（幹事より選出）

二、副支部長 二名以内（幹事より選出する。但し幹事なき時は支部長が委嘱する。）

三、委員 若干名（会員の中から、支部長が委嘱する。）

(役員の任務)

第六条 支部長は、この支部を代表し、会務を統理する。副支部長は支部長を補佐し、支部長事故あるときは、その職務を代行する。委員はこの支部の事業についてこれを処理し、その内一名は庶務、会計を司る。

(経費)

第七条 この支部の経費は、会費、寄付金及びその他の収入を以て充当する。会費の額は総会で決定する。

(会計年度)

第八条 この会の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終る。

附 則

一、この支部の規約の変更又は、前各条に定める以外のことについては総会において決定する。

二、この規約は昭和 年 月 日から施行する。

以上

各地方支部の結成状況及び役員は次のとおりである。

同窓会地方支部結成状況

支部名	会長	副会長	庶務・会計	結成年月日
四国 (香川・徳島)				一九七四・六・二
愛媛	小林 珠山			一九七四・九・二〇
大分				一九七五・一
関東 (関東全域)				一九七五・四・二
九州西 (福岡・佐賀 長崎・熊本)	前川 大道	山岸 善来 東海 大光	加藤 昌弘 見性 宗哲	一九七五・四・二四
静岡				一九七五・四・二八
愛知	城 円成	多田 清秀 水野 東瑞		一九七五・五・一七
兵庫	多津 猷保	倉内 実道 甲斐 宗光	会計 山根 守道	一九七五・一〇・二二
岐阜	梅園 義勇	高林 宗貴	東地区委員長 河村 義政 西地区委員長 東海 恵遠	一九七五・一一・二二

岡山					一九七五・一二
京都	松倉 紹英	古田 宗忠 村井 承純	監事 平塚実道 庶務 宝積玄承 森弘宗 會計 法谷文雅	一九七六・一・一七	
山陰 (鳥取・島根)	法輪 好道	高橋 宗隆 朝山 桂州 小野塚越山		一九七六・二・一六	
佐賀	伊万里良照	丸田 元親 飯盛 宏猷		一九七六・六・一二	
北陸 (富山・石川・福井)	角野 永宗	小林 宏 吉川 無陰	武田 正憲	一九七六・六・一五	
長野	鎌田 松山	酒井 昭道 中川 澄心 (金子祐治)	田島亮忠 註()内は五二・ 七・一信越支部として再発足 した時の新役員	一九七六・六・二五	
宮城・福島 (宮城・福島)	鈴木 久直	中山 宗徳 星 松岳	顧問 加藤隆芳 参与 千坂精道 桂田 文喜 諏訪 一此	一九七六・七・八	
和歌山	徳田 武雄	武内 宗詮 田中 宣能	九鬼 恵忠	一九七六・七・一七	
高知	関 禅陽	筒井 祖晋	高月 宏 顧問 大平 端山	一九七六・七・一七	
大阪	朝日 大真	大崎 文英 本多 道一	岸田 正昭・小沢 紹典	一九七六・七・二四	
長崎	大石 素琢	薬師寺正春 微笑 義教		一九七六・七・二六	
奈良	原田 牧尚	黄塚 明徹	田中 紹賢	一九七六・八・一七	
滋賀	後藤 泰邦	横井 大用 清水 宗郁	竹中 邦昭	一九七六・八・二〇	

三 重	浜岡 宏亘	金田 隆嘉	市川 信行	一九七六・一〇・一〇
東北 (青森・岩手 秋田・山形)	今山 弘毅	高田 文隆	目時 祐行 黒木 東祐	一九七六・一一・二二
山 梨	山田 禪輝 (故)	多和田文道	小笠原雄山	一九七六・一一・一五
信越 (長野・新潟)			山口 正智	一九七七・七・一
北海道	河野 琢禪	中山 玉宗	津森 琢道	一九七七・七・一一

一九七四年（昭和四十九年）三月五日の同窓理事会では、会費を一〇〇〇円から二〇〇〇円に値上げすることが決定された。従来、会費収入は殆どなく大半が入会金と大学からの補助金で運営されていたため、会費を徴収して積極的な活動を展開していく方向が打ち出されたのである。これとともに、同窓会機関紙「花園大学通信」を年間四回発行すること、五年目ごとに会員名簿を発行して無料配布することが決議された。従来は、機関紙（それも大学の公報を兼ねるものであった）の発行は年一回、会員名簿は実費頒布であった。

さて、一九七六年（昭和五十一年）に入ると、にわかに花園大学総合移転の動きが起り、具体化されることになった。同窓会はこれをうけて、同年五月十五日の理事会に引き続いて、京都鞍馬の歓喜園において評議員・地方支部幹事合同協議会を開催した。本部からはこの総合移転を推進するために、先の興学基金計画は一時凍結し、総合移転学債募集にしたいとの案が出され、協力が要請された。その結果、総合移転という開学以来の大事業を成功させるために、会員の総力を挙げて学債募集に協力することが全会一致で決議された。

こうして、同窓会の理事、評議員、幹事各位が学債募集実行委員及び、募集委員の中心となって、積極的な学債

総合移転学債募集実行委員・募集委員（順不同敬称略）

第五章 付属施設・関係機関

委

員

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

金 浜 勝 小 寺 東 河 道 水 城 丸 法 伊 中 酒 鎌 山 小
田 岡 峯 倉 町 海 村 家 野 毛 山 藤 川 井 田 口 牧
隆 宏 大 賢 研 恵 義 弘 東 円 玄 高 義 澄 昭 正 浩
嘉 亘 徹 堂 山 遠 政 宗 瑞 成 猷 演 昭 心 道 山 智 哉

委

員

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

甲 倉 宇 小 岸 本 大 辰 河 尾 村 竹 柳 清 横 後 中 市
斐 内 田 沢 田 多 崎 己 野 関 井 中 原 水 井 藤 野 川
宗 実 柏 紹 正 道 文 謙 義 義 承 邦 寿 宗 大 泰 正 信
光 道 巖 典 昭 一 英 道 海 昭 純 昭 弘 郁 用 邦 典 行

委

員

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

高 小 千 武 九 德 原 田 円 峯 江 宇 小 大 足 竜 山 林
橋 野 村 内 鬼 田 田 山 山 西 野 林 西 立 山 根 良
宗 塚 啓 宗 恵 武 牧 紹 恒 寛 正 恭 道 提 守 道
隆 越 山 詮 忠 雄 尚 賢 功 夫 州 弘 三 裕 英 三 道 道

委員		委員		委員	
〃	朝山 珪州	〃	内藤 大然	〃	丸田 元親
〃	安田 宗見	〃	吉瀬 義紘	〃	大石 素琢
〃	岸 定樹	〃	小林 珠山	〃	龍瀧 恭道
〃	井上 峰一	〃	長谷 勝山	〃	佐々木 瑞昌
〃	松本 昭道	〃	末広 延良	〃	安藤 恵薫
〃	神田 敬巖	〃	筒井 祖晋	〃	松田 俊夫
〃	坂野 宗淳	〃	伊賀良 昌山	〃	石田 晴康
〃	原田 宗謙	〃	伊万里 良照	〃	善国 乗憲
〃	山本 叙男	〃	飯盛 宏猷	〃	池田 豊人

本部は直ちに趣意書を全国に配布して協力を依頼するとともに、募集委員が中心となって各地に於て地方支部總會を開き、その趣旨徹底を計り学債協力の懇請につとめた。こうして、二年間に亘る募財活動が開始され、同窓會地方支部を主軸として、広く非同窓寺院有縁各方面への積極的な勸募活動が進められた。その結果、初年度は五億五一五万円の学債が集められた。これに勇氣を得て二年目は、各地域の役員方と相提携しつつ、個別訪問して懇請につとめた。これにより、二年目には二億一七八〇万円の協力を得て、合計七億二二九五万円に達した。当初の目標額である七億五〇〇万円の九割六分強の成果を納めたのである。こうして、総合移転成否の最大の鍵であった学債募集は同窓會の絶大な協力のもとに成功裏に円成し、開学以来の大事業が遂行されたのである。

一九七七年（昭和五十二年）五月二十五日、創立記念日に花園大学は総合移転記念式典を挙行した。総合移転の



松倉紹英師



多津猷保師

原動力となった多くの同窓もこれに参加し、大事業の完遂を祝った。実に、一九五八年以来、母校一新のために常に協力を惜しまなかった同窓にとって感慨一入のものがあつた。当日は、同年一月妙心寺派管長に推戴されて三十年ぶりに学長を退かれた、名実共に花大の父である山田無文老師に、名誉学長号を、総合移転の功労者であつた江西寛堂師に名誉理事長号を、そして長らく本学と共に歩まれ、苦難の時期に本学発展に寄与された荻須純道先生に名誉教授号をそれぞれ贈りし、三師の功労に感謝した。同窓会からは記念品料として三一七万円余が寄せられた。

一九七八年、同窓会副会長で、常に本学のために巨額のご資助を提供されてきた松倉紹英師（龍安寺住職）が病を得られたため、一時、多津猷保副会長（兵庫県市川高等学校校長）が中心となって同窓会活動を推進されることになり現在に至っている。多津猷保師は兵庫県支部

会長として、学債募集の際にも最も活潑な活動を展開して頂いている。

府県別同窓会員数（昭五四・三・三一現在）

北海道	二七	千葉	一一	岐阜	一九二	岡山	七二	熊本	一六
青森	一〇	東京	三九	三重	八五	広島	九四	大分	八五
岩手	一〇	神奈川	一五	滋賀	一〇四	山口	三一	宮崎	七
宮城	五七	新潟	五	京都	五三三	徳島	一四	鹿児島	一二
秋田	一八	富山	一〇	大阪	三二〇	香川	一八	沖縄	一三
山形	八	石川	一七	兵庫	二七〇	愛媛	八五	大韓民国	一
福島	一九	福井	二五	奈良	五九	高知	二三	台湾	一一
茨城	一〇	山梨	二三	和歌山	七五	福岡	六四	メキシコ	一
栃木	一二	長野	六九	鳥取	二四	佐賀	四八	ブラジル	一
群馬	四	静岡	一八二	島根	六九	長崎	二五	合計	三〇八三
埼玉	二二	愛知	一三八						

賀花園大学三十周年記念

千田杏月

思ひ出は霞がくれの三十年

一座建立の宴にもぐ惜春賦

花萬朶更に流芳もとせに

緑雨して学舎ととのふ新樹光

虚に実には禪の学舎や春風裡

賀花園大学三十周年記念

千田杏月

思ひ出は霞がくれの三十年

一座建立の宴にもぐ惜春賦

花萬朶更に流芳もとせに

緑雨して学舎ととのふ新樹光

虚に実には禪の学舎や春風裡

第六章 史料

第六章 史 料

本学は現在妙心寺派教団から独立した学校法人として運営されているが、かつては同教団によって設立され、直接経営がおこなわれていた。妙心寺派の機関誌『正法輪』には、同派の教学政策の問題として大学に関する記事が多数掲載されている。それらは教団サイドからみた大学像として非常に貴重なものである。ここに、それらの中から一九四九年（昭和二四）から一九七六年（昭和五一）までの部分を転載して史料とする。

編 集 部

一九四九年（昭和二四）

★「花園大学」昇格決定御報告

かねて江湖諸賢より格別の御支援を賜りました花園大学（四年制）今般大学設置委員会において昇格と決定致しました。

茲に取敢ずこの喜びを御報告申し上げますとともに諸老宿年来の御道愛に対し深甚なる感謝の意を表し併せて向後の御鞭撻を懇願申し上げます。

昭和二十四年二月十五日

本派寺院諸大徳 各位

昇格志願金特志者諸老宿

★花園大学学生募集

○募集人員 第一学年

〔本科 若干名
選科 若干名〕

○本校出身者並びに一般高専卒業者については相当学年に編入する用意あり。（尼僧の入学も許可）

○入学案内請求は実費二〇円及び切手貼付宛名記入の封筒同封申込まれたい。

京都市右京区花園木辻北町

★就任に際して一派諸大徳に訴ふ

宗務総長 衣笠興通

(前略) 偕て今日の世情より見て教団の最大の力点は何といつても布教教学の事であると思われる。今こそ親鸞を慕ひ、日蓮を懐しみ、道元を仰ぐ声、巷に滿ち宗教的偉人の現出に世はあげて待望しているのではないか。開山大師及び幾多の傑物を出せし本派としては、この声に応ずる底の人材の打出には最も意を注がなくてはならぬ。

幸いに本年四月より従来の臨濟學院専門學校は花園大學と称して新制大學として出発したのであります。苟も臨濟宗を代表する一大教派としては之は当然な事であり、将来内容設備の充實を図ると共に外觀施設の整備にも相当の改善工作を必要とする事は勿論であり、それと共に本派教学の源泉として禅學の一大權威となることこそ大學の使命であらう。特に優秀なる末派の徒弟を挙つて入学せしめ、互に切磋琢磨、世間の大學に劣らない凡ゆる學問を修め、進んで師家の牙城に迫つて宗旨の玄々を究め、教外別伝不立文字が看板倒れにならぬ様古人垂迹の跡に身を投じて次代の本派を担う立派なる人材の養成こそ最大の急務でなければならぬ。特に國際的に禅が大いに擡頭の兆あるを幸い、世界的思潮或は凡ゆる思想の研鑽を深くし、禅者として此等思想に対する確固たる立

場を闡明し得る底の學徳を以て一派の思想的指導權の把握こそ大學の存在価値を深からしめるものでなければならぬ。

さればこそ大學の充實とその發展とは本派の生命線とも言ふべく教線の消長に重大なる關連を持つ事は言を俟たない。この意味に於て我々一派本末協力してこの大學の發展に物心両面に寄与貢獻するは兒孫最大の報恩底でなくてはならぬであらう。禅の宗旨を究むるに學問の不必要は言う迄もなく寧ろ之を邪魔とし之を捨てよ忘れよと古人より示されているが、學を極めずして學問(所謂科學的方法)が宗教的真理(禅の玄旨)把握に關係なき事が如何うして分るだらう。學問をしつゝして始めてそれがお悟りの邪魔になる事が発見され得るのである。之は或種の禅僧の陥り易い偏見である。我々は學問を究め玄旨を探つて百尺竿頭一步を進めて入麁垂手の菩薩行に身を投じてこそ宗教者否禅者としての眞の在り方と思われる。茲に教學により延いては布教こそ教団の最重要使命であり、教団としてはこれのみが活きた働きであると言つても過言ではなからう。布教といつても言論のみを言うのではない事は勿論であるが、この方面に如何に經費を要すとも、之こそ教団活動の実績のパロメーターともなれば、之を吝んでは單なる形骸仏教の誹に甘んじなければならぬ破目に陥るであらう。尚、この布教に就いては新しい視野の下に経験識者に諮つて鋭意検討を加えつつあり、必ず御期待に副いたいと存じます。

(後略)

(九月一日)

★花園大学近況

今春四月、挙派一致の熱意が実を結んで見事に誕生した「新制花園大学」、門標の金文字に宗門の誇りを秘めつつ、五十名の新入学生を迎えて、漸く運営も軌道に乗って来た。現在、臨済学院専門学校の二、三年級と、大学の第一期生との二本建であるが、新しい教授陣の権威ある講義によって、耐乏の苦しみも忘れて落着いた学究の喜びに浸っている。次に二、三の近況を御報告する。

▽久松真一博士が六月を以って芽出度く京都大学を停年勇退せられ、いよいよ本学専任教授として、円熟の学徳を以って宗門学徒を指導さる事となったのは、広く宗門の幸福である。すでに開講の仏教学講座に加えて、九月から仏教概論及び宗教哲学を講ぜられる。博士の京大最後の講義は「無神論」であったが、禅の立場からキリスト教の根本批判に堂々の論陣を張らる様は学界の偉観である。因みに博士は、七月末岐阜県美濃町仏教会夏期文化講座及び長野県教育会の夏期講座に出講され、又九月初め、愛媛県八幡浜市の文化団体や大乘寺僧堂の招請で初めて渡海される。妙心寺を離れること三十年と言われる博士の近時の過渡的御活動は、教界に取っても絶大の法悦である。

▽七月九日、陣容成った新内局を本学教授室に迎えて、歓迎茶話会を開く。本所から衣笠総長、大橋、岩田、江西、土井各部長、大学側から新村文博、久松文博、山内理博、小笠

原、福島各教授と市川学監以下事務当局、高校側小沢校長以下職員顔ぶれで、新内局の全部が旧花園学院や臨大、花中の出身であり、和氣藹々の懐旧談に花が咲いたが、就中、京都文化院長として京都文化界の代表的存在であらる新村老博士が、該博な言語学の蘊蓄が流出する名論とユーモアを以って、談笑裡に宗門大学の在り方を説いて一座を傾聴せしめられたのは流石であった。

▽伝道部では、夏休みを利用して、禅宗学の今津洪嶽教授を指導者として部員学生五名から成る伝道班を編成、七月下旬高知県中村町太平寺を中心に数箇所講演会を開いたが、何れも好評で、特に地方青年との交歓討論に見るべきものがあつた。

又、日曜学校研究部は聖典刊行会から新型幻灯器二十余台と新フィルム数本宛を貸与され、各々自坊をふり出しに各地を広く巡演するが、盆休みを中心にこども達の大歓迎を受けることであらう。

▽緒方宗博教授は、かねて国際宗教同志会等を通じてキリスト教や神道各派とも提携活動を続けて居られたが、今回米国シカゴ大学神学部の新奨学生として推薦せられ、近々一年の予定で渡米留学される。宗門のみならず仏教界を通じて初の喜びであり、その成果が期待される。本学では教授会と在京同窓会の共同主催で七月十九日壮行茶話会を開き、交々起つて激励の辞が述べられ、緒方教授亦抱負を吐露さ

れて、頗る盛会であつた。

(九月一日)

★挨拶

学長奥大節老師在任中は、学制改革其他につき絶大の御支持を賜りました事を深謝申上ます。

今回後任として山田無文老師を推戴致す事となりました。

向後は新学長を中心として清新の氣を以って宗門教育のため研鑽致したいと存じます。学長交代に際し、御礼を兼ね、更に越格の御支援と御鞭撻を賜りますよう偏えに御願申上ます。

昭和二十四年十一月二十六日

花園大学

一派諸尊宿座下

(十二月十日)

★花園大学便り

▲学長学監更迭 学長奥大節老師は、学制改革一先づ成り、且、方広寺派管長に就任せられたのを機会に退職せられることになった。奥老師は昭和二十年四月就任以来、高邁な識見、雄勁な提唱によって学徒の薫化につくされ、近來の名学長として声望が高かつただけにその辞任は深く惜まれている。

新学長は、最近山内靈雲院に入られた山田無文老師と決定、老師は臨済宗大学出身、故關精拙老師の蘊奥を究められた人、長く天竜僧堂に在りながら既に一流の文化人として聞えている。本学として初めての同窓出身の学長であり、今回専任学長として母校の学運を双肩に担われるに至った事は極めて意

義深い。

又、昭和十九年以来学監として、学長を輔けて苦心經營の功を完うされた市川教授も、今回奥学長と共に勇退して、学究の本分に復されることになった。終戦前後の大変動期に於ける学園処理や、今次学制改革に當って、蒲柳の身を鞭って昨夏昨冬にかけて屢々東上、その間母堂を失われる等の不幸の中に日夜真摯綿密な活動を續けて、終に劃期的昇格を実現せられた師の功は大きい。後任は仏教史の担任で舎鑑業務の荻須純道教授(長野県大宝寺住職)と決定、十一月二十六日学長学監交代が行われ、江西教学部長の情理を尽した訓示があり、式後本山で本所員心尽しの清餐を共にして無事交代を終了した。

▲教授消息 今秋から久松博士担当の宗教哲学一科目が増加開講せられた。新村博士の文化史は十一月を以って講了。

緒方教授は十月一日羽田空港発渡米、シカゴ大学神学部に在って比較宗教学を研究中であるが、最近第一信と共にキリスト教団の運営方法を明かにした書物二冊を彼地から寄贈された。何れ一派に紹介されるであらう。今津教授は十一月六日大谷大学で開催された日本仏教学大会に「宗教の二大類型」と題して研究発表された。

▲禅学研究所 十月二十日国学院大学教授古田紹欽氏「道元の正法眼蔵に就て」十一月二十五日米国ルース・ササキ夫人「アメリカに於ける禅仏教」十二月六日市川教授「悲慘にお

ける論理」等の発表が行われた。

特にルース・ササキ夫人は、嘗て南禅寺の河野霧海老師に参じ、次いで故佐々木指月居士により鎌倉禅の流れをくんで、ニューヨークに在る宏荘な自宅を開放して禅窟とし、毎週二回数十名の白人を集めて禅会を続けて居らるる人、十月新指導者を求めて来朝された。戦後初めて純米国人仏教徒が法を求めて海を越え来った事は意義深く、その物静かな中に叡智あふれる講演は学生に大きな反響を与えたが、特に「英文臨濟宗禅語辞典」の編纂が急務であることを強調して本学に要望されたのは感銘深い。夫人自身すでに五千語に上る禅語カードを作製して居られ、之を本学に提供してもよいとの申出があった。

▲学友会の活動 十月二十二日花高と合同陸上運動会。十一月十三、十四日文化祭開催、第三文明党事務局長藤田玖平氏と人文学園教授藤谷俊雄氏による討論「宗教人と政治」や、京都大学教授桑原武夫氏の「文学は何故必要か」の講演、及び学生劇研究部の演劇や学生書画作品展覧等があり盛会であった。

十一月二十二日朝日新聞社主催近畿地区大学「朝日討論会」に於いて、本学チームは、決勝戦まで勝ち進み、立命館大学に惜敗した。

▲出版消息 同窓会員名簿は十二月末に、「禅学研究」は来春二月上旬刊行の予定である。「禅学研究」代価八十円（送

料共）の見込。執筆者、久松真一、小笠原秀実、荻須純道、

木村静雄、市川白弦。

久松教授編、鈴木大拙博士喜寿記念論文集「禅の論攷」が発刊せられた。内容左の通り。

正宗国師の宗旨と息耕録開筵普説

朝比奈 宗 源

南陽縣忠の心経註疏

宇 井 伯 寿

白隠禅の看話に就て

柴 山 全 慶

禅的人格の自由性

柴 野 恭 堂

自戒集に就て

古 田 紹 欽

禅の将来性に就て

長 与 善 郎

禅と美

柳 宗 悦

狂 信

市 川 白 弦

信仰の論理

柳 田 謙 十 郎

幽 玄 論

久 松 真 一

（価三七〇円 東京神田一ツ橋 岩波書店）

市川教授及び駒沢大学増永教授其他による「現代仏教問題五講」が刊行せられた。

共產主義思想の展開と仏教

市 川 白 弦

基督教に対する仏教の五つの旗印

増 谷 文 雄

社会政策の基本理念と仏教の人生観

久 保 田 正 文

仏教僧団の意義とその将来

増 永 靈 鳳

新しい伝道形態

壬 生 照 順

（価百円 東京葛飾区新宿町四ヤング・イースト社）

柴山教授編「禅宗檀信徒必携」が近く臨済宗合議所から発行せられる。
(十二月十日)

一九五〇年(昭和二五)

★花園大学近況

▲二十五年度に於ける開講課目中、専門科目を記せば次の如くである。

仏教哲学(概論部門)	藤原講師
仏教哲学(原理部門)	久松教授
仏教哲学(実践部門)	市川教授
(特殊研究)	
仏教々理史の研究	藤吉講師
維摩經	坂本講師
浄土論の研究	横井講師
禅哲学(概論部門)	柴山教授
禅哲学(原理部門)	今津教授
禅哲学(実践部門)	坂本講師
(特殊研究)	
無門関講読	今津教授
正法眼蔵講読	方谷講師
禅源詮集都序	方谷講師
法儀実習	古田講師
仏教史学	荻須教授

中国禅宗史
日本禅宗史

荻須教授
荻須教授

(特殊研究)

中日文化の交渉

―特に五山を中心として―

初期妙心寺史

福嶋教授
荻須教授

(選択科目)

宗教哲学

久松教授

哲学(独逸観念論の研究)

三村講師

東洋哲学史

福嶋教授

社会科学概論

小笠原講師

社会思想史

市川教授

尚山田学長は臨済録を提唱されている。

▲「創立記念祭」五月二十五日午前十時より、講堂に於て創立記念式を挙行し、江西教学部長や宗務本所職員、花高校長、並に上洛中の高林玄宝師等の来賓及び教職員学生一同列席し盛会であった。この日の記念講演は

宗教と倫理

久松教授

で、花高生徒も聴講した。式後、目下アメリカに留学中の緒方教授より贈られた砂糖、メリケン粉にて全学学生の茶礼を行い、午後は靈雲院(山田学長老師住職)にて教授会を開いた。尚学生は美術展(書道、絵画、活花)、体育会、児童大会等の催しをなし記念祭を盛大にした。

▲接心会

戦後中絶していた接心会を復活して行学両面より人格の陶冶をなすこととなり六月の十九、二十、二十一の三日間竜泉庵にて行われることになった。

臨濟録提唱

学長 山田無文老師

(六月五日)

★布教伝道の書『花園文庫』のすゝめ

布教伝道の一助として、小冊子「花園文庫」の刊行を試み、第一輯として

「あしもとを見よ」

妙心寺派管長 三浦承天老師述

相国寺派管長 山崎大耕老師述

を世に送ったところ絶讃を博し、またたく間に品切れとなったので、今回また再版の運びとなった。現管長親下の御法話であるから広く檀信徒におすすぬ願いたい。又盆用その他寺院よりの贈物として好箇そのものである。今回待望の第二輯として

「花語らず」

柴山全慶老師著

がいよいよ出ずることになった。この書は插画数葉が入り、花道や茶道の文化面を平明且つ流麗にかかれた随筆である。文化の香り高き中に禅が語られている。

第三輯として

「手をあわせる」

山田無文老師著

もこの程脱稿され、印刷にかかることになった。専ら布教伝道を宗としたもので檀信徒への良き伝道書である。意味高きものをいかに軟かく表現するか、著者苦心の力作である。

△売価は各輯いづれも一部二十五円

△十部以上は一部二十円に割引

△送料は当方にて負担

発行所 京都市右京区花園木辻北町三〇

花園大学出版部

(六月五日)

★花大、花高を存続すべきか？

教学部長 江西 寛堂

本派の教学、特に学校経営問題は予算並びに末寺賦課金問題に関連して一般論議の的となつているところであります。結論的に言つて現在の大学、高校を併立存続させることが最も妥当であると考えます。学校無用論、禅堂単一論は到底これを納得できず、又高校廃止、大学存続論も妥当を欠くものと思われまゝ。と言うのは申す迄もなく今日は社会の各種の要求に応じ得る僧侶養成ということも考慮しなければならず、従つて大学へはやれないが高校だけでも本山の雰囲気に触れしめたいという要望も相当あり、本派経済の許す限り両校存続を念願して居ります。高校認可の際の府当局者の言をききましては現代の宗門には高校大学併存こそ望ましく、それなくしては到底教家の使命達成は困難であるとの一般社会の声を聞きとることが出来るのであります。

よく百年の大計という言葉を聞きますが人材の養成延いては大学の權威確立という問題こそ教団としては最も重要な百年の大計であります。目前のことだけを考えれば、この財政難の折柄末派を苦しめ当局も苦心慘憺してまで貧弱なる名だけの大学を守る必要が何処にあるか、よろしく教育のことは世間に委ねて本派としては禅堂のみにより真の禪者らしい僧侶の打出を図れとの議論も一応は肯けるのでありますが翻って考えてみますと大学の現状からのみその存続価値を云々することは余りにも早計であります。寧ろ權威ある禅学の最高学府を作ることが禅の世界的将来につながる建設的な一大事業であり教団一般の一大責任であると考えるのであります。今の禅界を見渡してみてもわかりますように禅の權威者といえは鈴木大拙博士とか久松真一博士に指を屈するというのは何を物語っているのでしょうか。今後の禅仏教は世界的視野の下に考慮せらるべきでありまして広い世界的視野の中へ禅を導き得る底の学徳兼備の人材を打出することにあると思えます。高校も大学も僅に二ヶ年の歳月を経験したにすぎません。今暫くその成果を静観せられまして一ヶ寺当り年平均約八百円の御負担に耐えて頂きたいと言うのが私の只管なる念願であります。

次に一般末寺々庭婦人の仏教的自覚昂揚のための教養講座開設であります。徒弟の教育、檀信徒の教化のためにも実質上副住職的地位に在る寺庭婦人の仏教的教養乃至禅的覚醒を

高めることは焦眉の急務でありますので、出来得れば本山に於て、若しそれが不可能なれば各教区に於て三日間位の講習会を開いて貰いたいと考えます。講師と講座科目など具体的に討究決定の上実施の運びに致したいと予定して居ります。

更に本派僧侶にして小学校、中学校、高等学校などに奉職している方も相当数に上ると考えますが、そうした方々こそ青少年の第一線に立って居られる大切な方々でありますのでそういう方々に教育と宗教特に禅的情操の十分なる把握を求め以って仏教徒教育人の特色を活かしていただくこともこれまた大切なことの一つであると考えますのでそうした方々のための研究会又は講習会の開設をも考究中であります。なお末派寺院住職各位の建設的な御協力を願って止みません。

(七月五日)

★伴を結んで大接心 たのもしき花大生

接心道場看板座談会

「花園大学接心道場」の看板が山内靈雲院の玄門口にかけられたのはつい近頃のこと、山田学長の自坊たる靈雲院にこの看板を見るのに不思議はないが一度その様子を見学しようと訪ねて見る。折から先客の元朝日新聞論説委員という堂々たる肩書をもつ坂本静一先生に看板の由来をおたずねするとそれはざっと次のようなことになる。坂本先生は大兵肥満の堂々たる五十紳士、佐賀の産に相応しき偉丈夫であるが禅に参ずること三十年という斯道の大居士、山田学長とは旧知の

仲で今は太秦安井に閑居しているパーシ組の一人だ。

こないだの大学の接心に用いた看板が不用になつて押入れにつっこんであるのを持つて来てここにかけたまでのことです。接心をやってみると接心のよさがわかる学生も出て来て續けて坐つてみたいと言うのもある。そういう諸君が此処へ来て坐っている。及ばずながら私がそのお相手をしているわけで、こないだから一週間、夜七時から十時まで接心をやつた。ちょうど昨日で終つたが今日も三人はど来て坐っている。明日から暑中休暇で夫々帰省するので最後の一日を頑張ろうというわけです。

若い諸君が長時間坐つて経行に立つときに皆すつと立ち上るので感心していましたが、よく様子を見ると皆半跏趺坐でやっている。私はまた結跏趺坐でやっていると云つて、それにしてはえらい早いこと立てるものだと感じ入つたのですが、そんなわけですっかり仕掛けがばれてしまひましてね、それから皆結跏趺坐でやらしていますよ。もうそろそろ時間ですから何でしたら一つ御一緒に……。

仰せに従つて本堂の縁へ行つてみると和服の袴のイガ栗頭の青年が三人、ものすごい勢で坐っている。何れも花大学生だ。

S君。三十歳。サイパン島生き残りの勇士で戦争に往つていたお蔭で学校が遅れたという。花大三年生。

N君。二十五歳。久留米高工を出て花大に編入してきた道心青年。まだ僧籍には入っていないと言う変り種。花大二年生。

A君。二十歳。早稲田高校から大学へ進んだが禪を目指して花大へ来たという生真面目な若冠。花大二年生。坂本先生の直日さんのお許しを得て、靈雲院本堂前、板の間座談会が開かれる。

どうです、うまく坐れますか？

N「なかなかむつかしいです」

Aさんは如何です。

A「僕もまだ日が浅いので駄目です」

学校の接心に学生諸君が反対決議をしたと言う話ですが、その動機理由というか、論拠は一体どういう点にあるのでしょうか？

N「僕は花大へ編入して来てから未だ日が浅いのでよくわかりませんが、学生の全部がそういう気持をもっているのではなく、一部の人たちに曳きづられてああ言うことになったのだと思います」

一部の人たちと言うのはどんな人のですか。

N「理屈の達者な指導者です。二、三人そういう人が居ります。あとは接心なんかどうでもよい連中が多いのですから、ただそれについて行くだけです」

そういう人たちは一体どんなことを言うのですか。

A「接心なんか無用だ、それよりも今の我々にはもっと大切なことがある、先生方の中にもそう言うことを言われる人がありますし又中には先生方の言われることを誤解している

ものもあると思いますが……」

先生の中にもそう言う議論をされる人があるわけですね。

A「はあ、しかし僕はそう言うことを言う先生もあってよいと思います。なぜなら今の教学はあまりに眠っています。僕等の悩みを聞こうともしないし、宗教家としての本来の仕事もしていない。わけのわからぬお経を読むだけでは何にもなりません。それよりも自分の信ずることを勇敢に言つてのける人が一人や二人はあつてもよいと思います。そう言う人も本当に宗教家としての本質的なものを身につけていないならば、その言うところの理想も遂に実現されずに終るでしょう。どうしても先づ自分を確立することが先決問題です。だから僕は坐るのです。」

N「僕たちには何かしら今の教団に大きな不満があるのです。自分でもそれが何であるかと言うことはハッキリわからないのですが何かしら満たないものがあるのです。今度の金閣寺の炎上でも、若し自分が林承賢の立場におかれていたならば自分もああいう犯罪を犯したかも知れないと言う意見が相当沢山あります。これは僕一人ではないと思います」

Sさん如何ですか。

S「僕は今の学生は以前と比べて可なり變つてきていると思います」

どういふ點が變つていふのでしょうかね。

S「一般にいつて享樂的になつていふでしょう。要するに面

白く遊びさえすればよいと言う風な気分ですね。学校の廊下などでダンスの真似をしたりしている人もありますからね」

そういう傾向は一般にあるでしょうか、また中にはあなたの方のようなグループもあるわけですね。

S「僕は思うのですが今の宗門学生が何かしら爆発させてみたいような一種の焦燥感にかられていることは事実ですが、彼等をしてそういう氣持を抱かせるに至つた責任は明らかに彼等の師匠にあるのではないかと思うのです。自分の子供や弟子の面前で接心をする事の馬鹿らしさを口にしたり、教団の惡口を言つたりするようでは、その弟子が教団に対する尊敬と信頼を失うのは寧ろ當然だと思います。世の和尚さん達が今少し真剣な態度でやつていただくことが何より必要なことだと思ひます」

A「僕は和尚さん達がもつと僕らの氣持を理解して欲しいと思います。僕らが何か尋ねると、すぐに馬鹿野郎！とどなられるようなことは止めてもらいたい。僕等の疑問に對しては僕等の納得の行くような明確な解答をあたえて貰いたいと思います。僕等は概念的に明らかにされないと、どうも納得が出来兼ねるのです。本山の方々が今まで只だの一度でも僕等の氣持をきいてくれたことはありません。これからは大いにそういう點でも僕等をよりよく理解して欲しいと思います」

色々ありがとう御座いました。坂本先生、この辺で一つ註

を加えていただきたいのですが……。

坂本「いや僕は門外漢で宗門のことには何も興味を感じませんが、花大には色々とその道の権威者が揃っておいでになるわけですがそういう教授たちが銘々勝手に講義をされたのでは学生こそ迷惑なので、これはどうしても、ここから外へ出ては不可ないと言う一つのワクを決める必要がありますね花大は妙心寺派として将来必要な人材を作るために妙心寺が金を出して経営している大学ですからこれは当然な話だと思います。そこで山田学長にも始終このことを献言しているのですが、何とかそういう具合に出来れば好都合だと思いますね」

×

花大学生が学校当局から指示した「接心」案に反対して学生大会を開きその反対決議をしたが、学校当局の説得を諒として六月十九日、二十、二十一日の三日間妙心寺山内竜泉菴を「花國大学接心道場」として無事に接心を完了、その時の看板が雲雲院の玄関口に掛けられたと言う「看板座談会」はこれをもって終りとする。(七月五日)

★花國大学だより

○七月十日から九月十日迄夏期休暇に入った○伝道部では浅野宗信、中島利仁、北折敏正等の諸君が山田無文学長のカバン持ちで岐阜県下の伝道旅行に出かける○七月十五日岐阜県掛斐郡小島村瑞巖寺、同十六日掛斐町東光寺、同十七日下伊

自良村東光寺、同十八日山県村大智寺、同二十六、七日美濃町清泰寺○八月一日から十日迄は学生三名だけで同県下を遊説する○方県村長泉寺、梅原村曹教寺(花大名曹教授伊藤古鑑先生の自坊)、大桑村南泉寺、葛原村蓮華寺、上伊自良村竜興寺、足近村大恵寺、新加納少林寺、大垣市江月菴○武儀郡上麻生村真光寺、加茂郡川辺町曹源寺、吉城郡上宝村本覚寺岐阜市裁松寺○何れも幻灯機を持参して妙心寺宣伝に熱弁をふるう○和歌山兵庫両県下も目下交渉中とある○七月上旬から京都市右京区を中心に野外伝道をする○花國文庫第2輯が出た

花語ら ず

柴山全 慶著

広円流家元広昌鋤花氏の生花写真七葉入りのポケット版、二十五円御喜捨の方にこの書一部呈上しますとのこと○禅の近代的表现をもって斯界の第一人者の名ある柴山老師の短文集、題名からして美しい。

○米国シカゴ留学中の緒方宗博教授から留学一ヶ年延長願が届いた。伝灯録英訳の仕事を続けられる由。

○今度図書館で水素爆弾の本を買いましたから一度読んで下さい、これは今の宗教人の常識ですよ、正法輪にもあやうものを紹介するといいですね、とはノータイ姿の木村幹事の弁。(七月五日)

★学園だより

○花國大学ではシェーン台風で校舎の被害相当に甚大、この

ままでは何時倒壊するかも知れないとその前後策に腐心している○新制大学には成ったが未だ教員検定をとっていないので、今度「社会科」無試験検定資格をとろうと準備中である○これからの寺院住職は本業だけではとても食えないから、学校教員資格を取っておくというのが当局者の肚○それには教育学と法制経済関係の専任教授二名を置かなければならぬといふ話○それだけ仏教学や禅宗学の間口が狭くなるのが一番心配の種だとある○アメリカ婦人で僧侶故佐々木指月師夫人になった佐々木ルース未亡人が紐育から又やって来て、大徳寺山内に居を構えたのを機会に、今度講師として迎えることになった。これこそ本当の開校以来の異色プロフェッサーである。碧眼禅尼に期待できる。

(十月五日)

★山田無文老師述

手をあわせる — 花園文庫第3輯 —

花園大学々長老師が、三歳の童児の前にも微笑恭礼を生む心情をそのまま露呈した、優しく易しい殆んど仮名書きの様な禅書で、禅などとは一言の説明もせず、禅というものの有難い感じが身にしみる本だ。禅書と言ったのはユーモアで、赤ん坊の澄んだ眼、花の微笑、雲、水、空気の、魂の声の様な文字だ。そして所謂自然などには半言もふれず、人間々々の一歩々々、この脚力の強さ自然さは、何人も手を合せ拝みたくなる。ポケット版四九頁の小本。(中外日報評—二五・

九・一九)

三〇万信徒の家々にもれなくすめたい小冊子です。最も幅の広い布教指針として、「手をあわせる」心がまえを信徒の一人一人に徹底したい。読んだ人は次々に新しい読者を誘って下さい。年始の施本にも好適です。

全国の宗務所宗務支所に見本を送りました。(信徒頒価二五円、但、布教用として十部以上各十五円、送料)

京都市右京区花園 花園大学出版部

振替京都九一五一番 (十一月五日)

★学園だより

花園大学では学友会主催の下に、十一月三日から五日迄の三日間文化祭を行い多彩な行事を展開した。初日は仏教史蹟野外研究ピクニックで、狛須、金子両教授引率の下に五十余名の学生が奈良へ出かけた。興福寺、正倉院、三月堂、若草山、東大寺と奈良文化の蹟を探り両教授の解説に古きものの眼を新たにした。

四日は午前九時から京大教授文博原隨円氏の「正義に就いて」の記念講演、午後一時から校内討論会だ。一、日本の中立は守れるか守れないか。二、学生間の恋愛は勉強に妨げであるかないか。三、キリスト教は日本に育ち得るや否や。各クラスから三名宛四組の選手が出てのジスカッション。審査の結果、大学部二年B組が優勝した。

五日は午前九時から妙心寺法堂で児童大会、花高グラウンドでの野球大会、それに研究室での書画や華道的美術展覧会に

中国文化と写真木版画展と賑やかなこと。さらに別室ではジュウタンに赤モウセンを敷き本山から借用に及んだ五色のドン帳を張りめぐらした茶席の用意、鈴木大拙居士の「平常心」の一軸に、黄菊にコメ柳の一輪さしと趣向よろしく、学生宗匠のお点前も見事に和敬清寂の一刻を樂しませて呉れた。文化祭気分は正に最高潮——。

(十二月五日)

一九五一年(昭和二六)

教団の将来を語る

花大生の座談会

何時の世にも青年は居るものだ。青年は何を考え何をなさんとして居るのであろうか。わが教団の将来をになって立つべき宗門青年たちの偽らざる声をきかなければならない。花岡大学々生七名の参加を得てここに、教団の将来を語る。若人の提言を擲むことが出来た。採るべきは採り、捨つべきは捨てて、彼等の希いを生かすべきであらう。(録田)

出席者(敬称略)

専門部三年生	浅野宗信	大学部二年生	森本 昭
同	原田宣裕	同	江西寛州
同	平山治道	同	土屋実全
同	大野全光		

△臨済本来の立場に▽

司会 今日の一つ、教団の将来について、というテーマの下に、皆さんの忌憚なき御意見をお聞かせ願いたいと思います。これからの教団はどうすればよいのか、教団の現状に対する不満と希望といった点について、何もかもすつかりブチまけていただきたいと思います。Aさん、如何です。

A 僕は何といつても先づ第一に、僧侶の改革が必要だと思っています。実は僕たち自身が今、社会的実践と僧堂的方向との何れをえらぶべきかについてデレンマに陥っています。教団が今のようないふ現状に至った原因は、臨済の精神を本当に把握していないからだと思います。先づ臨済本来の立場にかえることが必要だと思っています。

B 客観的にいうと、日本仏教だけに「近代」がないと思う。頭が小さくて肚ばかり大きい。これが今の禪宗の姿だ。それから僕はこの花大が何時つぶれるだろうかという不安を抱いている。

C 今日教団無力化の原因は、僧侶の妻帯にあると思います。どうしても無妻帯の方向に向って努力しなければ駄目だと思っています。社会的な仕事をすれば経済は自ら出てくると思います。

司会 社会的な仕事という何ういうようなことなのでしょう。

C それは色々あると思うのです。

司会 このことは世間でよく言われることです。社会的な仕事とは一体どういう仕事なのかと問われると、どうもハッキリしないというのが一般のようです。

C ……………

B 僕は人間の生の不安から、求道一点張りで行けばいいと思う。

C 政治と宗教がくっつかなければ駄目だと思います。

△うちの学長さんは偉い▽

G 今日の仏教というものは社会の一般大衆によって護持されなければ駄目だと思う。今では仏法が商品化されている。

司会 仏法が商品化されているというのは、どういう意味なのですか。

G それはですね、中には（本派にはそんなのではないと思いますが）葬式の公定価を定めたり、幾ら出せば法階をやるかと言うようなことです。法階なんてものは無視してしまわなければ本当でないと思います。

司会 しかしそういうことは所謂資本主義社会においては止むを得ないことと違いますか。

A 僕は紫衣や金ランの袈裟を着てもよいと思います。しかし同時に雲水姿になれる人が欲しい。その意味でうちの学長さんは偉い。

G 結局、僧侶としての人格が必要だ。臨済録をそらで読

める位にならなければ駄目だ。

B それが花大設立の意義じゃないですか。僕は思うのだが、今の禅坊さんには禅に対する科学的知識が乏しい。

司会 それはどういうことですか。

B 禅を学問的にとらえて発表する力が乏しいということです。この学校にもそういう課目をもっと多くあっていい。

G もっと学問を尊重しなければ駄目だ。

E 僕は人格の完成ということが、すべての人間の在り方だと思う。今の坊さんが経済的に容易でないことはよくわかるが、それはそれとして、仏教者に求道的態度の欠けていることが致命的欠陥だと思う。

B 坐禅をする和尚さんが何人あるかな。

E 今の坊さんは一般社会人と少しも変らない。

G お寺でなくて寺屋だ僕はどうしても妻帯が寺院を今日のような結果に導いた根本原因だと思う。

△妻帯について▽

B 僕はそうは思わない。坊さんも妻帯すべきだと思う。坊さんも先づ全き社会人になることだ。苦しい経済生活の味も知っていなければ不可ない。愛児を亡くした親の苦しみも知らなければ不可ない。

G それならもっと、お寺の奥さんが仏教に理解を持つべきだ。お寺の奥さんでありながら、お経も読めず、仏教の何たるかも知らないようでは始まらない。

A うちの学校などでも、ラゴさんの中には仕方なしに学校に來ている人が多いんじゃないかな。

G お寺の奥さんの役目は極めて大切だ、今度何か本山でお寺の奥さんに法階みたいなのを授ける規定が出来たそうですが、僕はそんなもの不要だと思う。そんなものを貰う資格がありませんよ。

A そうすると、結論はやっぱり臨濟禪師の精神に還ることですネ。即今、臨濟禪師が居たなら何うするかという問題ですネ。

司会 臨濟禪師が居たらと言われますが、臨濟禪師は今何処に居るのですか。

A ……………。

(二) 同暫し沈黙

D 皆が銘々のうちに持っているのではないですか。自己のうちに臨濟を発見すればいいでしょう。

司会 ところで少し話題を転じますが、現代人はわれわれ教師人に対して何を求めているのでしょうか。

B それは心の拠りどころを求めているのでしょうか。

C もっと仏教者が社会人の中へ入って行かなければ駄目です。

A 今の仏教者は社会人の一人として活動していない。今までは伽藍の中へ人を集めたが、これからは人の中へ伽藍を立てなければダメです。

司会 社会人の一人として活動していませんか。

A いません。

司会 社会、社会と言いますが、社会を離れた人間なんて只の一人も居ませんよ。われわれのこの手は一体何処まで届くのですか。

A ……………。

F 今の宗教家は百姓の中へ入って百姓たちを迷わせていると思います。

司会 そんなことはないでしょう。迷わせずに救ってやらなければなりませんネ。

F 救うことが出来るでしょうか。

司会 出来ますよ。自分が救われなければ他を救うことも出来ませんネ。

D 結局、自分のうちに臨濟禪師を発見することですネ。

△僧堂と老師▽

司会 皆さんは僧堂に対してどんな氣持をもっているのでしょうか。

F 僕は一寸行ってみたくと思いますが、どうしても行かなければならないとは今のところ思いません。一寸でも僧堂へ行ってみたいなあとと思うようになったのは、この学校へ来たお蔭で、自分は未だ僧侶になる氣持がアヤフヤです。

司会 どうです皆さんの眼から御覽になつて、僧堂に長くいた和尚さんとそうでない和尚さんとの間に、何か違つたと

ころがありますか。

E 本心に宗教家として立つたためには、どうしても学問だけでは駄目だと思います。僧堂に行かない和尚さんには何処かに足りないものがあります。

A 僧堂へ行った人はやはり肚が出来ている。

F 何か一物ある。

G 悪い点をいうと、僧堂臭いところがある。エゴイストなどところがある。よく言えば決断力に富んでいると思う。

A 僕は僧堂の生活様式を見ると、今の僧堂へ行く気にはなれません。托鉢をしたり接心したりするのはよいとして、天井粥なんていうような食物を食べさせるのが心配です。

E 僧堂で新聞や本が読めないというのが僕はイヤです。

B 僕は何だか刑務所へでも行くような気がします。そこで思うのですが、学校教育と僧堂教育とを一本立には出来ないものでしょうか。そういう鬱屈気を学校内に作ればいい。

司会 それは問題にしていることでしょうネ。それに関連して所謂「老師」と言われる方々を、皆さんはどういうふうに見ていますか。

A 臨済の精神を把握している人が老師だと思いますが、老師がたに色々な思想、たとえば共產主義とか、カトリシズムとか、そういう思想的知識をもつと持ってもらいたい。どうも皆古い感じがして不可なりと思います。

F 僕は求道に対する温い理解をもっていたきたいと思

う。下手にマルキシズムの講義なんか聞こうとは思いません。

△学校そのほか▽

司会 今の学校に対して何か望むことは……。

E 僕はこのままでよいと思う。何となれば、自分の好きな勉強が出来るから……。(笑声)

D 時間がありすぎて困ることがあります。

A 僕等の一番困るのは宿舍の問題です。山内のお寺に学生を一人づつでも無料で置いて呉れたらいいと思います。寄宿者生活はどうも落着けません。

G それは君がゼイタクすぎるよ。落着けないのは君が落着けないのだ。朝早く起きて皆と一緒にお経を読んで、それから食堂で飯をくうのも気持ちのいいものだ。

B 僕は優秀な学生に対する特別生制度を設けるべきだと思う。勉強したいものは勝手に勉強しろと捨てておかないで、よく出来る優秀な者には教団の名に於てこれを激励し援助するようにしたらと思う。

司会 それはよいことですネ。教団の意志によって、後から来る若人を温く見守ってやるということは美しいことですネ。

G 僕は学生の夏期伝道にもっと力を入れてもらいたいと思う。この夏も妙心寺の実写と水戸黄門(これは老人向)と漫画(これは子供向き)の映画を持って行きました。あとで座談会をやると、此方が青年なので村の青年男女が沢山来る。

それらの青年を相手に大いに仏教的啓蒙をやった。寺も喜び村民も喜ぶ。こういうことに金を使うなら、われわれも賦課金を喜んで出しますヨとその和尚さんも言っていた。三千万の青年と二千万の子供とをその教化の対象としている点に、キリスト教の強味があると言われているが、仏教側もこの点に目をつける必要がある。

B 本山でも巡教師に使う費用の半分ぐらい学校の伝道部へ回わした方が効果的だと思いますネ。

A そんなことをしたら巡教使さん達に恨まれるぞ。(笑聲)

司会 いろいろな活発な御意見を拝聴しまして大へん参考になりました。教団の将来をになつて立つべき皆さんでありますので、この上とも御自重あつて一つしかりとやっていただきたいと思います。有りがとう御座いました。

★学園だより

大蔵会 京都仏教各宗学校の主催にかかる第三十六回大蔵会は建仁寺に於て催された。展覧は建仁寺塔頭兩足院にて行われ、高麗版大蔵經、五山版等の古刊本古写稀観本、各種清規類等百八十六点の江戸中期の学僧高峯和尚の顯彰を中心課題とし、広く学界に訴えんとしたものである。

ジェーン台風の被害は学園も夥しい。本館は大破傾倒し大学、高校の校舎も相当の被害をうけた。これが復旧のため、法皇忌を卜し全国の花園会信徒代表者が本山に集まり協議、

このまま等閑に附することの出来ない問題であり、一千万円を要することを認めて下山した。

十一月二十七日より三日間、花大授心会。学長山田無文老師の提唱参禅。本学独特の伝統的校風を法堂内に漲した。

(二月五日)

★質問三ヶ条・諸家解答集

これは世論調査というほどの肩のこるものではない。質問の内容も時節柄まことに貧弱、御解答を賜わった派内の各師に厚く謝意を表する。紙面のワクもあり広範圍の方々に御依頼できなかったことをお詫び申し上げる。新年号を飾る紙上除策のおつもりで御清覽願えれば法幸至極質問事項は次の三ヶ条である。(編集部)

一、卯年の仏法如何

二、現代禪者の使命

三、本派教学に対する意見

○

一、伊豆の和尚からもらつた一匹の鬼が、よく食い、よく跳ね、よくなつてゐる。それが五つの子を生んだ。みんな元気で肥つてゐる。

二、とにかく、うんと坐る。もつともつと勉強するんですね。

三、本山の受付わきの大衆用の便所が、何時行つても、クモの巣とホコリで鼻もちがならぬ。本派教学発展は、案外と

んなところに再出発の基があるんじゃないかしら。

(沼津市中沢田大中寺高橋友道)

○

一、うさぎの河渡りが、声聞の仏法に喩えられてをります
が(優婆塞戒經に)卯年の仏法は、しっかりと地についたこ
とを考え、それを平生の行いの上にあらわしたいものです。

二、現代禪者の使命は、どっしりとして、時代を導くだけ
の力と勇気が欲しいものです。

三、それには人物の養成ですが、悲しいことには本派の現
在の教学では心細いです。何とか世間の教育委員の如く、本
派も教育委員を各方面から選出して活躍して貰いたいもので
す。

(岐阜県山県郡梅原村普救寺住職伊藤古鑑)

○

一、日々是春風。

二、照顧脚下。

三、禅僧としての教養を望む。

(京都市花園慈雲院住職宗會議員足立宗詮)

○

一、年来地方の一教員として、伽藍の維持に汲々たる小衲
にとって、卯年の仏法も特記する程のこともありません。

二、現代禪者の使命については、昔時の沢庵、白隱の如く
禅文学の発表に努力したし。(例えば目下評判のよい朝日新
聞の「佐々木小次郎」の如く、禅文学のポピュラーのものを

発表せしめたい)

三、本派教学に於ては今後地方との連絡ありたし。関係者
が草鞋ばきにて懇談あれば相当の協力はするものと思う。そ
れには平素学校の弁論部員の派遣も必要かと愚考します。

(愛知県八名郡石巻村万福寺住職香村俊雄)

○

一、干支の如何にかかわらず、仏法の根本理念は三宝帰依
の大信念に基く上求菩提下化衆生にある。これが顕証には時
処に対する適切な方針を確立する必要がある。現時とし
ては特に青少年教化に重点をおかねばならぬと信ずる。

二、興隆仏法、再建日本平和確立の一語につぎるが狂騒、
焦燥、利己、功利、背徳の現世相に対しては、主体的真我の
体現による自律無功徳の大信念を十字街頭に顯示することが
急務である。

三、禅的特色ある最高学校教育機関と、道場の修行機関の
確立発展を期したい。これによつて学徳信兼備の禪家を打出
すると共に、教育即教化の大機能を発揮することによつて、
禅的文化の振興につくしたいと思う。本派唯一の事業の場と
も言うべき花大発展の基盤の確立強化を期したい。

(岡山市小橋町七六、宗會議員奥江順徳)

○

特に尼僧の立場から

一、保育園の運営と、幼児の保育研究に没頭致して居りま

す。

二、現代に尼僧の存在の必要性を獲得して、禪的生活の環境を作っていくことであると存じます。

三、尼僧教育の一大改革を要望致して居ります。

(岐阜県揖斐郡大和村薬師寺住職山田祖恵尼)

○

一、社会事業に専念すること。

二、以身說法。

三、社会事業に対する一切の研究を希望する(宗団に社会事業なきは、宗団としての価値なし)

(愛知県丹羽郡扶桑村竜泉寺住職、宗会議員風岡範二)

○

一、偉大なる聴覚を以って時代を捉え、すべては釈尊のもとに結集されて一大飛躍をなすべき日本仏教渡来一千四百卯年の記念すべき年である。

二、現代禪者は道心堅固にして、野球チームのメンバーの如く使命を果たすべきである。

三、本派教学は新しい宗制の制定からなされねばならない。即ち

A、全教区を廢し全国を五管区と一特別管区に改め、これらの地方管区内に地方分権制度を確立し、地方で可能な筈の一切の事務を配分し、宗政上の地方自治を認め、新しい宗制法令を制定すること。

B、管長直裁下に独立した教学委員会を設置すること(委員は花大職員より二名、各管区より各一名)

C、比丘、比丘尼の差別を無くし、又居士大姉に教師位制度を確立する。教師の種別は専門、社会、一般とす。

D、信徒一般の眼からの布教のため印刷局の特設。

E、単立寺院希望の解放的処置。

(宮城県塩釜市寺下通り東園寺住職干坂秀峰)

○

一、卯は山を登るときは速く、下るときは遅い。それは後脚が前脚より脚力が強いからそういう習性を持っているのだらう。卯が犬に追われて山を下るときは犬に捕えられるが、登るときは到底犬は兎に及ばない仏教々団の不振日に甚だしく、仏日増輝に非ず。上るか下るか、こころでちよいと肚を決めねばなるまいこれ卯年の仏法。

二、禪に関する書物は多い。禪といえばインテリは好感をもつて呉れる。だが振わないのはどうしたことか? それは宝珠を転ばす組織が近代社会に合わないのか? 今こそ男女僧俗の大僧伽を樹立せんとする大乘仏教運動の先達となることが望ましい。

三、教学問題の重要性はいうまでもない。教団人の横の連絡は花大、花高等に北海道からも九州からも来て学ぶ純真な学生々活の中に培われる。更に臨済禪の学的究明は極めて重要な命題である。(花大学監荻須純道)

一、いかる事なきを仏法となし、うらむ事なきを仏法となし、そしる事なきを仏法となし、あらそう事なきを仏法となし、業をつみ枝を尋ぬること勿れ。

二、前(一)と同様に変化なく候。

三、本派教学は全臨済の教学として、臨済宗檀信徒の財的援助により教学基金を確立して永遠の基盤とすること。

(滋賀県犬上郡大滝村高源寺住職桂木善啓)

一、正法輪は機関誌なれば無料配布のこと。誌代は納金に加算して徴集のこと。兎のように飛躍のこと。

二、一日不作一日不食の式で小生は進みつつある。

日日是好日。

三、仏教も大いに民衆化して、仏の教とはこの通りと通俗化せねばならぬと思う。孝に対しては恩重經を通訳して、貞操に対しては玉耶經をという風に。解らぬことがよいと言うのなら如是我聞を、若人欲了知を更に蜜語に訳して読ませるがよろしいと思う。何にせよ解らぬことでは駄目。手取り早く解るよう、これが深入りする初手である。湖海玄昌師の「回向文」がどれだけ民衆に有難がられつつあるか、民衆に伍する街頭進出こそ何より大切。

(長野県諏訪郡原村深叢寺住職小銅純一)

一、日日新たにして、年年新たなり。敢えて卯年の仏法なご省察究明の要なし。

二、働くこと。行の仏法なら、身、舌、筆、熱意を傾けて随処に臨機に寸閑を惜しみて活動すること。新しき使命は自然にその活動体の中より生まれる。

三、イ、僧堂撤廃、掛搭証明廃止。ロ、大学に専修部設置。禅の学と行との部を設ける。その修了証書により現在の掛搭証明に代えること。ハ、布教部を設けて試験制により資格を与えること(現在の高等布教講習に代える)。二、住職講習(教区別単位の住職再教育)年二回一週間究。禅学、坐禅、布教、社会事業の基本的研究。この講習会に特別の事情なく欠席せし者には、教学部にて試験を行い成績不良者は住職を罷免すること。

(兵庫県多可郡西脇町観音寺住職伊達道一)

一、改年新春に当り、先づ強調いたしたきは真の仏法の興隆である。釈尊をして今日あらしむれば何をなしたであろうかの一大反省が必要であると思う。絶対の宇宙生命に生きる仏法の隆起興隆こそ、真に社会人の心から希求して熾まざる処であると信ずる。新春を期し仏法興隆の一大運動を展開すべきことを願って止まない。

二、昨秋十月、東北僻陬の地ながら、鎌倉より朝比奈宗源老師を拝請して五日間の禅会を開筵したが、実に驚くほど多

数の参会者があつた。この一事よりしても、現代禪者は何はともあれ其の本を務むることであり、且つ務めきすこと以外にはないと思う。布教も可、花園会協議員会も可、それにも増して更に重大なるは、禪者自体の正法眼への願心であると思ふ。

三、対機說法こそ仏者に課せられた使命である。然るに對機者には既に高等教育をうけたるもの多し。かかる對機者に法を説かんとする本派の教學の振興こそ、一日もゆるがせに出来ぬところであると思ふ。それにはその裏付けたる經濟面の確立が附帶してくるが、これが確立には先づ以て教學振興せんとする願心の要請が急務であると思ふ。そこには必ず打開の途が拓ける。

（青森県八戸市南宗寺住職田口豊洲）

○ 童歌に曰く「十五夜お月さま見てはねる」と。はねることも、ころぶとも御自由の世界なれども、ただ月夜のみにては誠に心細きかぎり。暗夜であらうとも真昼間であらうとも、徹底はねるべし。はねつくして何彼あらんや。若人よ一考せられよ。二考否三考に及ばざれば悔いを千載に残すと言ふものか。茲に現代禪者の使命があると思ふ。故に教學に對する識見も、各自に研究を重ねて頂きたいと念願して止みません。

（姫路市八代東光寺住職大西道一）

○ 摩曰く、勿思過去、勿憂現在、勿怖未來、照顧脚下即今完

爾焉と。

關山國師曰く、我が室に文字なし、唯だ、「勤」の一字あるのみ、と。貴い哉、この一言。願わくは我が宗門の徒輩はこの勤の一字を奉持し、勤儉力行あらんことを。

（静岡県引佐郡氣賀町金地院閑栖河野大圭）

○ 一、上求下化の菩薩行を信念としたし。

二、以身說法の徹底。

三、古教照心の二原則を高揚のこと。

（尾張一宮市外妙興寺専門道場師家河野宗寛）

○ 一、明年は待望の講和条約も締結の機運にあり、之を転機として我が教界も一大記念行事を計画し、沈滞せる仏教界の起死回生の策を講ずべき年と思ふ。

二、わが禪は凡ての宗教の基定をなす所の絶対真理の体験を以て宗となす故に宗派を超越す。現代世界の人類の念願する世界の平和は、凡ての人類を等しく救済し得る超宗派超民族の宗教たる吾が禪の拡充強化によりてのみ実現せらるるものと信ずる。

三、本派の教學につき最憂慮せらるる問題は、わが宗の生命と言ふべき禪堂の現状である。留錫人員の少きことは勿論、時代の思潮に影響せられて規矩嚴に行われず、禪の生命は正に失われむとす。教學の基本を確立するを急務とす。

（岐阜県武儀郡西武芸村太原寺住職東海保山）

一、昭和時代生まれの者の世の中になつたらどうなるかを考慮に入れて、立派に布教伝道の出来るものは兎に角、然らざる者は現在の宗教行事を真面目に務め一卷のお経を読むに、参列者をして何となく有り難いと感じしむる迄に真実に経を読むこと、読んだお経の一節を捉えて三分か五分でよいから簡単な法話すること。それも出来ぬものには本山からその材料をあたえて欲しい。これが為めには専門の人をかねてよいと思う。

二、近頃の住職者は大多数が履歴取りの禅堂生活者で、この者が禅をもの知り顔に語る害少なからず、今少し僧堂生活を永くさせる方法を講じて欲しい。空院云云の懸念よりも法を大切に取扱うことが望ましい。

三、高校大学両方あるに越したことはないが、今の本派経済状態では必ず行詰る時が来ると思う。故に高校を廃して専門の然かも費用少くしてすむ旧専修学院の如き、もう少し気のきいたものを設けて欲しい。

（長野県西筑摩郡福島町長福寺住職三宅宝洲）

一、われに掻きこむ手は短く、実践の脚は長く強く飛鳥の如く身軽に、口のきけるほど正法を説かねばならぬ。溫柔と純白は本来の姿、常に社会の声に聞き耳を立て、眼の赤いの

も一寸愛嬌。

二、衆生無辺誓願度。煩惱無尽誓願断。法門無量誓願学。仏道無上誓願成。

三、全国花園会を速に大成して、教学資金は花園会に委嘱すること。年に一戸あたり百円のお初穂を開山真前に供えて貰えるならば三十万の檀信徒が有れば、総額三千万円である。その内一千五百万円を学校経営にあてる。一人三万円見れば授業料食費共に無料で、五百人（高等学校三百人大学二百人）収容出来る。本派寺院の子弟のみならず、時には檀信徒の子弟も入学せしめてよい。かくて賦課金が大いに削減され子弟の教育が無料で出来れば、寺院方は大いに助かるであらうし、檀那寺の和尚が全部大学出ということになれば檀信徒諸氏も共に喜んで貰わねばならぬ。これは必ずしも実現出来ないほど難しいことではないと思う。

（花園大学長山田無文）

（二月五日）

★本派百年の大計

教学部長 江西 寛 堂

何事かを為さんとし、或は施策を行わんとする時、われわれの念頭に浮ぶことは百年の大計ということである。いうまでもなく、それは大磐石の如き基礎的工事の確立ということに外ならない。

本派教団の将来については、幾多の重要課題が考えられるが、その最も根本的な課題は人材の養成ということである。

今日の場合は殊に然りである。日本の将来を考えて見ても、その浮沈は懸かつて今後の人材の如何にある。現在の人物も勿論肝要ではあるが、より大きく今後の人材の有無にその鍵が托されている。今日の中堅層が如何に力んでみても、日本の再建成就は到底望み得ないことであろう。故に今日の心ある中堅層の最大関心事は、今後の人材を如何にして養成すべきかという点に懸かっている。教団も亦然り、その人材養成にこそ今後の教団施策の一大重点をおくべきである。想えば親鸞にせよ、日蓮にせよ、道元にせよ、且つ又本派の白隠、盤珪、古月、願堂、隱山、卓洲の人材にしても、何等かの組織的な力をもって押し出したものでは決してなかった。われわれの渴望してやまぬものは祖師の再来であり、斯かる人材の輩出である。そこで蒼竜窟下に玉を探る専門道場の存続は、本派人材養成の根本機関として不可欠のものとなって来る。がそれと共に学究根本道場たるべき大学の完備もまた何といつても現代的不可欠の根本課題であることを否定するわけには行かない。

そこで現在の花園大学並に花園高等学校が果してこの課題に応え得る能力を持つかどうかは遺憾ながら甚だ疑問であるが、それなればこそ一層これが充実発展を図る必要と責任がわれわれのものとして痛感されてくる次第である。

今や本派はあらゆる機関に誇って両校々舎の復旧修築に着手したのであるが、これは実に本派の一大慶事と言わなければ

ばならない。教団の将来は一にかかつて人材の養成にあることを痛感せしめられる。これがためには如何なる犠牲をも堪えなければならぬ。百年の大計はここにある。今回行われる本派未曾有の大勸募運動もこれが実現のためである。学校的内容の充実と本派教育の一大方針の確立も、この美酒を盛る革袋の完成後にこそ衆望に応え得るものとなるであろう。今度の大勸募は時節柄なかなか容易ならぬ大事業であること勿論ながら、本派教学百年の大計を樹立する根幹と思召して、挙派一致の勸募目的完遂に御協力、御支援を願つてやまない。

★学園だより

(二月五日)

○今度私立学校は「私立学校法」により新たに学校法人を設立せねばならぬことになり花大、花高では旧臘より本所当局と協議中であつたが、一月十一日妙心寺派教学財団評議員会を開き同教学財団の学校に関する件のみを教学財団より切り離し新たに学校法人「花園学園」を設立することになり、私立学校法第三十条の規定に基き認可申請の手続をした。

今回の「学校法人花園学園」の寄附行為においては妙心寺派立学校の性格を充分發揮するように起草され評議員も教職員適格審査に不資格及び不承諾の方を除いては、一応教学財団の評議員を以て届けることにした。理事長衣笠興道、理事大橋禪寔、江西寛堂、竹中玄徹、監事朝日義緒、足立宗詮の諸師である。

○昨秋のシェーン台風被害に関しては、昨年の法皇忌を卜して全国より花園会代表信徒の方々が参集協議、更に十二月一、二日には臨時宗会が開かれて風害復旧の件が議決されたのであるが、年末からの工事資材の暴騰に鑑みて本所当局は辰巳工務店と契約し、いよいよ復旧工事にとりかかることになり、去る一月十二日、地鎮祭を営み、翌日より工事に着手した。これがため大学事務室は一時図書館に移転、二月末には本館の復旧工事も完成、大学校舎も修復される予定である。

★花大生の臘八

花園大学生有志約二十名が妙心寺東海庵で臘八大接心を行った。十二月一日から六日迄は毎晩六時半から九時迄、最後の七日の晩は徹宵坐禪で八日の曉天を迎えた。同学教授坂本静一氏は元大阪朝日新聞論説委員の肩書をもつ篤信の居士で、学生接心には何時も自ら陣頭に立つて坐るといふ熱心ぶり、一時とかくの噂のあった花大も、近頃では頃に校風に精彩を加え来つたと専らの評判である。荻須学監、木村幹事も随喜して学生と坐を共にした。

(一月五日)

★草鞋をはく山田学長

三十万檀信徒の浄財喜捨による一千五百万円の大勧募運動は全国各教区において既に活発なる実動を開始しているが、今度の募財目的の主体となる花園大学ではこれを坐視するに忍びずとして、山田無文学長以下教職員学生一体となつての托鉢運動を展開することとなり、山田学長、木村幹事それに

学生一名をもつて組織する托鉢第一班は、来る三月十四日より田辺市海蔵寺住職（釈宗謙師）を中心に岸和田より南紀地方へと托鉢行脚の旅に上ることとなつた。行程は約十日間。今後引続きこの托鉢はつづけられる。

さらに今津洪獄教授の率いる第二班、柴山全慶教授の第三班と、このところ全学を挙げての勧募大托鉢運動を展開することになっている。花園大学の歴代学長中で草鞋をはいての勧募托鉢に乗り出すのは実に山田学長をもって始とするのでその熱意のほどは関係方面を痛く感激せしめている。本山当局と学校当局との一体的努力は必ずやその実を結ぶであらうことが今から期待されている。

(三月五日)

★学生募集

新装成る花園大学へ！

新しき仏教学禅宗学の建設・布教研究開講・中、高教員免状・妙心寺派生授業料補助金あり。至急入学案内を申込まれたし

(三月五日)

★花大改築募金南紀托鉢成果

花園大学では既報の通り去る三月十四日より南紀を中心に山田学長、坂本静一教授、木村静雄幹事の一行が托鉢行脚に出たが、その把住成果は次のようである。

一千円（海蔵寺）四百円（田辺市遺族会）一千五百円（田辺市托鉢所得）三千円（報恩寺）一千五百円（上品寺）一千円也（円光寺）五百円（円光寺遺族会）二百四十二円

(串本町托鉢所得) 一千五百円 (海翁寺) 二千円 (清閑院) 六百円 (清涼院、松巖院より車代) 五百円 (松林寺) 三百円 (泉松寺) 一千円 (観福寺) 一千円 (観福寺檀徒深見かつ)

把住合計一六〇四二円、旅費放行金三二五五円、差引所得金一二七八七円也である。今後も機会ある毎にこの托鉢運動をつづけて行くつもりであるという。卒業生が殆んど皆本派住職なので母校への拠金額にも限度があるので容易でない。

(五月五日)

★學 園 から

花園大学本年度の新入学生は四十名。新装成った校舎で新学期の講義が始まる。○中学校教員社会科一級免許状、高等学校教員社会科二級免許状の無試験検定資格も近く許可されることになっている。

○従来、二祖忌(開山忌と法皇忌) 三仏忌(降誕、成道、涅槃)には学生も本山へ参詣したが、これから三仏忌だけは花高と合同で新しい法要形式による学校法要をやるようにしたい。それには仏教聖歌もと入れねばならず、今の青年の情感にマッチした新形式にしたいと思う、とは木村幹事の抱負。○学生諸君よ、わが済門の将来を一人で背負って立つ意気をもって頑張ってください、とは一派の蔭の声である。

(五月五日)

★花大夏期伝道班の結成

花園大学伝道部が二十余年の伝統を有し幾多の人材を打出してきたことは周知の事実であるが、本年は来るべき夏期休暇を利用し、七月十三日より八月末日まで四十数日の長期間を、左の如き伝道班を結成して各地方寺院よりの伝道申込みに応ずることになった。因に布教講演のみならず、幻灯器、映写器をも携行し視覚を通しての布教をも行うことになっているのでその効果は必ずや大きいものがあると思う。

○第一班 山田無文学長、学生二名随行。

○第二班 今津洪嶽教授、学生二名随行。

○第三班 坂本静一教授、学生二名随行。

(六月九日)

★鈴木大拙博士講演

アメリカから帰った鈴木大拙博士を迎えて、七月六日午前十時半、花園大学禅文化研究所主催の下に、妙心寺大方丈でその講演を開催、「アメリカに於ける禅」の題下に蘊蓄を傾けられ、終つて靈雲院を会場に歓迎午餐会あり、久松、高坂、西谷の各博士、林東福、竹田建仁、柴山南禅の各僧堂師家、山田花大学長以下関係者三十余名出席、鈴木老博士の労をねぎらつて散会した。

★花大だより

学友会弁道部の学生は毎週火・金の二夜、定期的に坐禅と語録の輪読を始めた。「洞山大師語録」をとりあげたが、臨済將軍、に対比しての、曹洞土民、といわれる洞山の宗風は

好箇のテキスト。坂本静一教授の名解説で学生に親しまれている。

△：弁道部の要望で、仏教研究室を畳敷きの単に改造した学生飯禅堂誕生。学長の臨席を乞い、ささやかな開單式挙行。学生の手で作られた禅堂とて気がねなく坐れる。意気ケンコウ。△：「私立学校法」によって花高・花大の経営主体は「財団法人妙心寺派教学財団」から「学校法人妙心寺派教学団」に切換えられたが、七月新寄附行為によって役員と評議員の改選が行われる。

△：古い歴史をもつ「禅学研究会」は禅学研究所として再出発したのだが、今回さらに「禅文化研究所」と改称、規約改正とともに新しき抱負で再出発した。（八月五日）

★僧堂の在り方

教学部長 松原 泰道

一

最近「禅堂のあり方について」の論考をよく聞き、考えさせられる事が多い。ただ注意しなければならないのは、変改出来ぬもの、変改してはならぬもの（本質）と変改出来るもの、変改すべきもの（機用）との混乱である。

宗教は人を改む。人によって改められるべきものではない。釈尊の体験せられた苦の解決方法を現代人は如何にうけとるべきであろうか。その感覚は世代と共に変っているもので、その与え方が時代にマッチ出来ないものがあるとするならば

それは与え方の方法の貧困ではなく、却って如何にうけとるべきかの求道の熱意なきを暴露しているものであろう。

更に、禅と、学との相違を同一線上に於いて論じられていることだ。智識（学問智）は学ぶことによって肉となるものであると表現し得るなら、悟性（宗教的智意）は、それを捨てることによって、髓となるものであろう。拾って財となる知性と、捨てて宝となる悟性のバランスを得て、はじめて人間としての内容が豊になるのである。それらはそれぞれの異なる領域を把持しつつ、窮極に於て一味にまで止揚するところに禅の行がなければならぬと思う。

二

現代禅者の無気力は、知性、悟性それぞれあまり豊かでないか、或は円満でないところに病根があると思われる。それを肯定する人々は慌てて禅堂生活に知性面の教育をとりいれよと論ずる。一見、妥当の様だが前記の二律を乱すもので私はうなづけない。およそ、朝に学んで、夕にそれを捨てることが、しかく可能なのであろうか。また、焦眉の急だからといって拙速主義もやむを得ずとて、禅堂生活と学生生活の年限短縮を考えるが、それは百年の大計を誤るもので、幾百の近視眼的人物が輩出したとて何になるであらう。一般世間にも、学界にも、まして宗教界にはいささかも寄与し得ないであらう。焦点距離の大きい人を作るには、やはり、かすに時間をもってせねばならぬ。ましてや、禅堂生活のすべては、「見

性」への一路であつて、見性をぬきにしたものは單なる修養道場にすぎない。

三

心ある人はその具体的改良法として、入（禪）堂前に、ある期間の知性教育を施し宗団の高等常識を与え、然る後に禪堂生活を行すべきだと主張する。然し、筆者はそれとは逆に、一般の中、高、大学を経て直ちに禪堂生活に入り、相当期間（後記）の後に、再び宗風独自の知性教育を授くべきだと主張したい。つまり「拾つて」から「捨てて」ではなく、

「捨てて」貧寒に徹し、然る後に學んで、始めて心魂にはのぼのとした光明の深さを味得し得るのであらう。知性的禪者を築くのではなく禪的知人を築いてこそ、學問智の窺い得ぬ、禪知の深さがある。更にいえば、身につけ得た知性を駆使し得る悟性の手堅さがある。いささかの時間的犠牲をも厭うようでは、どうしてこの卑しい世情に奉仕することが出来よう。理科系統の學歴は文科系統のそれより時間的にも長さを要するのは一般の常識ではないか。宗教系統の學歴が文、理両科と同じ時間でよいということがそもそもの甘い考えであらう。進度の早い一般の學問を消化するのはそれら學問智ではなく、骨髓より、にじみ出る悟性の働きである。悟性を駆使するのは知性でなく悟性それ自身であるが故に、私はあえて逆のコースを主張するのである。具体的にいえば、禪堂後の宗門人必須の最高學府（仮称宗門大学院——宗門大学に

非ず）は、現代的學問智と、禪堂に於ける応分の見性力なくしては領解し得ぬ講座をもつことによつて、禪門でなくては學び得ぬ宗門大学の生きる途がある。ここに現行の宗教大學の性格も昂揚されるし、又、両者の次元をこゝまで引き上げべきではなからうか。單なる禪堂家でもなく、又、單なる學僧でもなく、深い悟性と豊かな近代知性の禪者が生れるであらう。

（九月五日）

★藤吉教授印度留學

花園大學教授藤吉慈海師（淨土宗所屬）は京大人文科學研究所員として將來を嘱目される新進仏教者であるが、今回印度政府の招聘でベナレスの印度大學に二ヶ年間留學することになり、去る九月二十日、羽田空港発で印度へ向け出発した。これは戦後日本人として始めての印度留學で、推薦者六名の中ただ一人の幸運者だと言われる。なお同師は、布施行者颯田本真尼の著者、久松真一博士主宰學道々場の高弟として真摯な生活の持ち主である。關係者発起でその、後援會を組織しているが、宗務本所からも金二千元を拠出して賛意を表した。仏教人の絶大な後援が望まれる。

（十月五日）

★宗團の意識

花園大學長 山田 無 文

一
三宝に帰依することは、仏教徒の第一条件であつて今さら申すまでもないことである。

併し宗門のように自己の外に仏も法も認めない宗団に在つては、よし又認めたとしても、それ等が無形的存在である以上、具象的に帰依されるものは、僧宝の一ということになる。従つて僧宝こそ宗門の生命と言ねばならぬ。

所でその大切な僧宝を今迄のように出家階級という意味にのみ解しては、現代はあまりにも多くの矛盾を露出しすぎて居る。

出家であるが故に尊敬せられねばならぬと言う特殊な考え方は、最早遠慮すべきではなからうか。どこまでも僧俗一体、御同行御同朋の考え方こそ望ましい。

比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四衆の集団を総称して僧宝という可きである。この場合、優婆塞、優婆夷は大乗菩薩戒の血脈を受けたものに限る。

これが現代に於ける僧宝の定義で、それは真理と愛情を基盤として、社会を浄化してゆく尊敬さるべき団体であらねばならぬ。之を宗団と名づけられる。

即ち、宗団は時間的には開山大師を基点として未来永久に発展する有機体であり、空間的には貴賤貧富の別なく、ひろく横のつながりを以て一体化して、以て社会の幸福と進歩に寄与してゆく組合である。

かかる組合の存在を認めその存在の意義を尊重して之に加盟しその規約に随順し、その活動を発展せしめて行くことを、僧宝に帰依するというのである。

或は加盟はせぬがシンパとなつて金品を喜捨することも帰依僧である。

二

寺院の住職が万一にも寺を私有物視するならば、大変な誤りである。住職は管長の任命を受けて任地に派遣されて居るものである。寺は任地であつてわれわれの僧籍は本山即ち開山塔下にあるのである。

寺院はもとより住職や寺族の私有物ではない。檀信徒の共有物でもない。本山の所有とも言えない。とすると一体誰の物であらうか。

わたくしは三宝の物だと思ふ。仏法僧の三宝のために喜捨されたものであるから三宝の所有である。

然し仏宝法宝は前述の如く無形のものであるから、結局は僧宝の所有物である。即ち宗団全体言葉をかえて言えば、われらの組合の所有物であると言ねばならぬ。

随つて此処に最も尊重されなければならぬものは、お互いの宗盟心だと言うことになる。

三

先般本山に於ては十五日間に亘つて、第三回高等布教講習会が設けられた。短期間ではあったが、極めて真面目に厳粛に研修され、よい安居をさせて貰つたという感を深くした。年に一度、本山開山塔下に宗門をあげての大安居会を設け、極めて簡易な僧堂的な生活組織を以て、可能的多数員が集つ

て研修し、研修了って各々任地に帰るといふ事になれば、本山の意義もはつきりし、宗団という有機体がその本来の線にそつて活発に動き出すのではないかと思う。

而して優婆塞優婆夷をも含んだ和合体である宗団は各種の職業人各種の階級人各種の政党人の集合体であるから、政治的に一方に偏することはつしむべきであり、又不可能な事である。

政争を超越した和やかな一時を思ふような、専ら信仰によつて固く結ばれた平和な団体、それが宗団でなければならぬ。従つて宗団の在り方は極めて微温的であり、現状維持的であり、進歩的でないという所しりも免れないであらう。

然し階級を超え政治を離れても、人生と社会を離れるわけではない。永遠的人間性に目ざめた真理の探究と普遍化が宗団の使命でなければならぬ。

例えばガンジー宗団に見る八つの誓のうちに、一、己事究明の誓。一、不殺生の誓。一、無所有の誓。一、勤労の誓。と言つたような宗教的人道的盟約が固く結ばれ、宗団が一致団結して社会浄化に乗り出すならば、之等は又新しき宗盟と言われるであらう。

花園会の大成願起を願つて止まぬものである。

★花園大学学生募集

募集定員 本科五十名 選科若干名

入学資格 (1)高等学校卒業者(2)十二年の学校教育を修了し

た者(3)旧制中学卒業者(大学入学資格認定試験を本学にて行い、英語、化学、国語西洋史等の試験科目に合格したる者) 選科は旧制中学校及び文部大臣に於て同等の学力ありと認めたる者

第一次募集 出身学校長の推薦により無試験入学を許可する。入学志願者は二月末日迄に入学願書を提出すること。

第二次募集 三月末日迄に入学願書を提出すること(学力試験を行う) 試験日時 四月十日午前九時。試験科目、英文和訳、論文。

願書受付 二月一日——三月三十一日

本学の特色 本学は高等一般の学術を授けるとともに仏教学、禅学の学問的研究をなし、人格を陶冶して有為なる人材を養成するにある。人類文化の根本を究め国家社会に活動せんとする士は来れ! 教授陣容には久松真一博士や柴山全慶、今津洪嶽老師、自然科学の牧茂市郎、山内淑人の西理學博士を始め有能な教授により組織されている。

特典 本学卒業生には高等学校、中学校の社会科教員免許状が下附される。

○入学案内入用者は十四切手封入申込の事。

京都市右京区花園木辻北町 花園大学

振替大阪六五五九九番

電話 西陣 二二七九番
(十二月五日)

一九五二年（昭和二七）

★宗門と大学

筆者は十数年前、ある人より「仏教の大学、禅の大学というようなものが成立するだろうか」といわれ哑然としたことがある。それも相当な地位にあった宗門内の人であったからである。

とかく不立文字の禅僧は錯覚を起し易い。凡そ今日の社会水準に於て、社会の指導的立場にある宗教家としては大学教育を受けるということは望ましいことであり、また仏教学なり禅学の学問的組織大系を樹立する機関である大学が必要であることは言を俟たない。

この故にこそ国家は固より宗門も大いなる犠牲を払っている所以である。学的研究と後進の養成こそその使命でなければならぬ。

永い歴史と伝統を持ち教学の權威を誇っていたある宗団が教団経済の故にか或は他の理由によつてかは知らないが、大正の初年迄は大学と称する教育機関を持っていたその宗団がその宗門大学を廃止して他に合流した。然しその結果に於てはその宗勢昔日の如くならずという感がある。その宗の教学に於ても他の大学に却つて權威者が出たり、末寺の肉山寺院が本山を離れて単立寺院として独立するような結果となつたものがある。

やはり宗門の大学はいわば宗団の心臓である。宗門独自の立場より思想、文化に豊かな理解と教養を持つ後進の育成こそは最も緊要なことといわねばならない。

北海道からも九州からも全国各地から集つた青年が同じ学窓に学び切磋琢磨する処に護法の精神も培われやがて真摯な伝導者ともなるであらう。（一月五日）

★文化都市京都 思索の花園

凡そ学校を選択するには先ず環境を考えなければならない。殊に大学への進学はこれが大切である。東京は政治の中心であり、大阪は経済の大都市であるが、京都は文化の都である。哲学、宗教を学ばうとするものは先ず京都を選ぶのがいいと思う。殊に洛西花園は学徒には最もいい環境である。

東京へ遊学しても、他の宗門大学に学んでも、大学卒業の資格には変りないが、やがて教団を基盤として、教化活動をなし、社会の指導者となる時、仏教学殊に禅学の教養が貧困である。そして志を同じくする友が得られない。これは最も淋しいことである。禅は宗門的臭みがない。この点インテリは関心を持ち、禅によつて人格の完成を期している。かかる意味に於て先ず花園大学を選ぶことをおすすめする。

★学資は廉く理想は高く

—花大生の学資調べ—

花大の会計係で、本派の学生がどれ位学資を必要とするか調べてみよう。

講師	經濟學	高橋良三
講師	仏教學	藤原了然
講師	哲學	三村勉
講師	日本史	竹田聽州
講師	人文地理	藤岡謙二郎
講師	仏教學	佐藤哲英
幹事		千田豐泉
幹事兼補導主事		木村静雄
司書兼講師		横井聖山
舎監兼書記		森弘宗
書記		浜中菊枝

★花園大学優勝

—京都六大学野球—

読売新聞主催京都六大学軟式野球秋季リーグ戦は去る十一月一日より九日まで衣笠球場に於て行われたが連戦連勝、九日の優勝戦には立命館大学理工科を四対一の成績で破り、優勝杯を獲得して帰校した。

★宗門学生へ学資援助

花園協議会の要望

十一月十一日、花園法皇御忌を期して開かれた花園会檀信徒協議会では、宗門教育の振興について熱心な討論が行われ、その結論として新たに僧堂に掛錫する者には準備費として一万五千円程度、花園大学及び花園高校の在学生には年額一万円乃至一万五千円程度の援助を与えたいという強い意願を表明された。

勿論これが実現には花園会の総意にまたねばならないが、代表諸賢がその独自の信仰的立場から宗門教育の振興に強い関心を示された事は、教育関係者にとって感激にたえないのみならず、実現の暁には、高等教育は宗門の手でという理想に一步を進める朗報であろう。

★禅籍を求む

忘れられた本箱の中で私共の見たい禅書が虫の餌食になっています。本館で保存させて下さい。どうか御寄贈、御寄託、或は御譲与下さい。御一報次第御連絡申上げます。

花園大学図書館

★花園文庫

花園大学出版部に於ては布教伝道の一助として、花園文庫を発行している。意味高く、表現を平易に一般社会人を対象としたものである。既刊のものは左の如くである。

「あしもとを見よ」

売価二十五円

送料 八円

妙心寺派管長 三浦承天老師述

相国寺派管長 山崎大耕老師述

「花語らず」

売 切

南禅寺僧堂師家

花園大学教授 柴山全慶老師著

「手をあわせる」

売価二十五円

送料 八円

花 大 学 長 山 田 無 文 老 師 著

「本当の自己にめざめる」

売価二十五円

送料 八円

花大教授 久松真一氏著

★編集室

○新宗制も六月十日付で認証された。宮裡総務部長、肩の重荷をおろす○東京、京都を始め各地での学生警官衝突事件。戦争の幽霊におびやかされる地上人類の地獄絵巻○春日の局と禅僧の幽霊済度の公案の教えるものは果たして何か?○泊り合わせた隣りの客が、大きないびきをかいてこちらの安眠を妨害した時、大声で「マ、レ」と怒鳴るのは正当防衛である、と大獲勝は言った○これは西田天香さんが、新緑雑感」と題して「光」五月号に載っている一文にあったもの○さあ、そこが問題だ。あなたならどうする怒鳴るか、逃げるか、かんねんするか。それとも自分もいびきをかくか○今度花大「平和を創る会」編集部から、「あかつき」という機関紙が発行された。学長山田無文老師を始め教授陣では小笠原秀実、高橋良三、市川白弦の三氏がそれぞれの立場からペンをとり、学生十名が署名入りの文章をかいている。編集もなかなか堂に入ったもの。松原教学部長さんから、鎌田さんの法嗣ができましたネ」とひやかされる。いや、どうも○久松真一先生を議長と仰ぐ学道道場の「風信」六月号が出る。求真一路を歩む道人たちの呼吸が、その文章に感じられる。発行人名義は赤い哲学者として有名な柳田謙十郎博士令嬢で、

思想的には父と異なる道を行くといわれる柳田静子女史。竜安寺前の西源院を道場にかりうけて、道人一同撥草参玄に余念がない○これなかなかおもしろいから読んでご覧と「東京リポート」六月第四号を某師から渡される。「宗門内戦のルツボ」身延山を繞る勢力争い「デカデカと写真入りで書かれた中外日報紙型三頁にわたる暴露記事。同紙は東京日日新聞編集とことわってあるから内容は信用するに足るかどうか。ヘエと感心するより他はない○とにかくこれだけ書かせるだけ偉いもんだヨ」と某師は阿々大笑された。(七月五日)

★教学部長花大講演

七月十一日より九月十日迄夏期休暇に入る花園大学では去る七月四日午後二時より階上第一教室に於て松原教学部長の「かたすみのともしび」と題する講演をきいた。例の破防法反対運動以来特に大きくクローズアップされてきた学生運動に対する批判の声が良識ある関係者間から放たれている折柄、花大生を対象とする教学部長の講演はその意義誠に重大で、宗門学生としての生活原理の透徹を強調した慈愛ある講演は聴衆学生一同に多大の感銘をあたえ同三時終了した。

★花大接心会に異色

伝統を誇る花園大学の接心会が去る六月二十五日より三日間毎日午前八時半から午後四時まで本山法堂で行われた。山田学長の提唱と参禅、それに今までその例を見なかった居士大姉(禅道同行会員)十数名の参加は周囲に無言の雰囲気をもたらし、

かもした。二日目の二十六日には昨秋来日したロンドン大学東洋学院駐日研究員ダグラス・E・ミルズ氏(30)が仏教大
学教授春日井真哉師の案内で参加、麻法衣をひっかけて午前
中坐禅に頑張った。

竹中総長、亀谷部長も提唱に随喜、松原部長など学生と一
緒に坐るといふ熱心さであった。(八月五日)

★本派の教学を憂う

—花園大学学生と父兄に—
数学部長 松原 泰 道

かつての大水害に島根県に出かけた各大学の勤労奉仕隊の
中で、土地の人々に多大の感銘を与えたのは本派の学生であ
った。

朝課、食作法、清掃等の禅門一流の行持が、宿舎を初め、
多くの人々の胸に今でも尊い布教の事実として残っている。
行動主義、政治主義が滔々として流れ、思想を無惨にも喰
い散らしている今日、行動と思想とを一つに迄次元を高めた
精神の権威を如何に建立すべきであるか、それが今日の命題
であろう。

時流の思索は、すべてを二つに分けて考え、二つの立場に
よつてのみ真実の相を認得しようとしている。

しかもこうした傾向が、宗門の学徒にも影響をあたえてい
ることはまた止むを得ぬことも知れぬ。

ロベルト・ロッセリーニが、時代思潮への悲憂のやるせな
さに、祈りをこめて自己の社会理念を造形したのが、映画

「ドイツ零年」であるという。彼はいう。

「一つの思想体系が、道徳と愛の法則を踏みにじった時に
は、その思想は人間を犯罪に追いこむような狂的なものと
なる。これによつて純真な青少年は罪の道へと転落してゆ
き、その罪を償おうとして彼らは、その無邪気さの故に更
にもっと重い罪を犯す事になる」

たしかに一大烟眼である。

仏教徒の使命は、二つの対立的解釈を引き起す人間そのも
のの靈性的覚醒を、教学の目標として指向せられるべきであ
る。

学生運動も、その目的に向つて勇気を振うべきであろう。

学生を指導する教授も、宗教学者も、客観的研究とは別に、こ
の烈々たる宗教的信念を持つ、一僧侶であるべきではないか。
学徒に求道の念うすく、指導者に、道念なくば問題は解決
されないであろう。

今日の学校問題の淵源は深刻な程、大いなる時空を經過し
ている。容易ならぬ反省と、緻密なる方針を持たねばならぬ。

所定の本派補助費と檀信徒の淨財とをもつてして、なお多
くの学生はアルバイトを必要とする。学習時間を超える労働
時間と、その影響、経済苦、伝道に対する疑惑、思索時間の
僅少さから将来される自己の無内容等の悪材料と、時には誤
解を生じた講義の内容が、僅少とはいえ、逸脱した一部学生
の行動を生んだのではなからうか。先輩の手によつて築きあ

げられた特異な校風を軽々に歪曲することは些か考慮を要する問題であらうと思う。

どうすればこの汚濁からまぬがれることが出来るのであろうか。今こそわれわれは真剣にその根本方策を考慮すべきであらう。

即ち、学園の肅学と共に今日の学生問題を正視し、寺院にあっては、虔まやかな信心と、外にあっては、心身両面にわたる暖い愛の手と、求道心と、そして正しい道德的意欲とを盛り立ててゆかねばならない。

別項、本大学の最近の学生運動の実態を端的に発表し世の疑惑を解き、父兄の憂慮に応える所以である。

教学当路者、筆者を含めて、その不徳をわびつつ、報恩の念に燃えている事を諒とせられたい。

筆者は、学生諸君の豊かな良識を信じている。不幸縁なくして一日も本学に学んだ事はないが、愛校の念おのずと別箇のものがある。

秋風寂寥とした中に、運動場に立って、衣笠の山波を見て、又一念、すなおにひるがえし、静かに受験せらるる学窓を見て胸中の熱さを感じるの、一筆者の感傷にすぎぬのであるうか。

★花大ストライキ○十月十二日付朝日新聞にて「花園大学一部スト」も山田学長の説得で一も二もなく解決。十三日からの試験も無事終了。目出度し○いうまでもなくこれは屈

指にも充たぬ一部学生の至んだ仕業。先に退学した学友会副

委員長某君もその非を認めて自発的退学であつてみれば今さら騒ぐのは騒ぐ方の負だ○「日本共産党花園細胞」の名でまいたアジビラの文字が科学的鑑定によつて明らかに某君の筆跡だと証明されては退学するのが当然なのと違ふか?○なにごとにも性急に運ぼうとするその気持はよくわかる。しかしそこが問題。○問題は宗門学生としての方法を誤つたわけだ。宗門大学に籍をおく宗門子弟が、たとえどのような事柄に關しても、日本共産党の名において宗門に弓をひくということとは絶対に許されないのが先ず社会的常識というものだろう。○あえていうなら、青年というものは完全なる自律的意志で行動し得るものではない。つねに他我的律的意志によつて動いているものが青年なのだ。特に今日のようなやり方には必ずその背後に黒幕的指導者のあることを予想する○宗門が進歩的であることは至極よい。しかしその伝統的価値批判が公式的であることは危険である。相互によく話し合つて見ることが何よりも望ましい。(K)

(十一月五日)

一九五三年(昭和二八)

★建学精神への反省―本派の教学を憂うに應えて―

花園大学学監 荻 須 純 道

戦後国内に於ては社会のあらゆる面に於いて改革と建て直しが要請された。勿論宗門でもその在り方について検討され

研究論議されて来た。戦後の虚脱状態より如何にして宗門本来の使命を完うすべきかということは重大なる命題であつた。

戦後兩三年を経たとき本学では文部省の学制改革に應じて新制の大学として新に発足した。幸に同窓の山田無文老師を学長として迎え実践禅学を学生は履修することが出来るようになった。ここにいう実践禅学とは高等の知識を授け専門の學術を教授研究することと相俟つて、仏教精神によつて人格を陶冶するということが目的である。人格の陶冶は固り、専門の學術というも禅学を中心とした仏教學部である以上、究極の真理探究は身を以てせる実践的な學道でなければならぬ。

由來禅門に於ては不立文字を標榜する。ここに學道の精神がなければならぬ。真理の探究に於て知識の分別を以て究明する諸學の研究とは自ら異なる性格を有している。大学に於て禅學の研究をする場合、諸學の研鑽と相俟つて一應論理的究明をしても畢竟不立文字の學道精神を尊重しなければならぬ。というところに中心がなければならぬ。戦後殊に山田学長就任以來、本学は宗門の経営する大学として本来の在り方というものを堅持し努力して来た。

戦後一般の社会に於ては虚脱状態が続き混乱した事情にあったのだから本学に学ぶ学生にも少数の者が認識を誤り、本學の特異性に気づかず他の学校と同じように考えた学生もないではないが、それは純真なる青年の思慮の足りない認識不

足から来たものである。然し彼等も条理を尽して本學の自主性の存するところを説示すれば多くは領解してくれる。昨年は周知の如くメーデー事件、破防法の反対等で社会問題の多くあった年であつた。当時本學としては破防法に対する批判は兎も角、実力行使を以て反対することは固く禁じていた。宗門学徒としての良識に訴え反省を促して来た。この点輕率盲動することのなかつたことは幸いである。然したまた破防法の反対に附帶して本學の特異性を無視した行動が僅か一部の学生にあり、これに対して本學としては建學の精神を曲げることが出来なかつた。これがため少し学生が動搖し一派の諸大德に御心配をかけ、松原教學部長殿には特に御迷惑をおかけしたことは遺憾に堪えない。然しこれも本學の特異性を立て建學精神を曲げることが出来なかつたために惹起した事件であつたことは御領解して頂きたい。

然し本學としてはこの事があつて却つて本學の在り方を学生に對して再認識せしめたり、又教育指導の再検討をなす機会を与えられた学生は目前の社会事象にのみとらわれることなく、深く自らの本分を省みて勉學にいそしむに至つた。本學は臨濟禅を中心として仏教の研究をするというも畢竟花園法皇の御言葉の如く興隆佛法のためである。一人でもよりよき人材を世に送るべく念願し教授陣容も有能な教授を迎えて補充したい。新学年度より本派の碩學伊藤古鑑師も病癒えて復帰することとなり、また京大教授猪木正道氏を招聘すべく目

下交渉中である。建学の精神を省みつつ大学の使命を完うせんことを念願し、以て開山大師微笑塔前に報恩の敬意を捧げんとするものである。

(二月五日)

★開山無相大師を讃仰して

花大学監 荻須 純道

一

正法山六祖伝を拝読すると開山無相大師は外見や形式には無頓着であり、余り重きを置かれなかった。然し宗門の生命とする仏法興隆のためには飽くまでも厳格であり、法を盛るべき門下育成のために心血を注がれた御生涯であったことを拝察するものである。

大師は読経儀式には拘泥されなかった。殿堂の荘嚴ということも留意されなかった。雨漏りにさえ甘んじられていた。そして藤をわぐねて袈裟の環とすといったような簡素な生活に徹底されていた。然し門下育成のためには涙のにじむ大慈悲の御心持が拝せられる。例えばある時、春雨の降る日、衆寮は静寂であった。大師は雲衲の動静を問われ或る人が普請して茶を摘ましむと申し上げたのに対し「何んぞ清衆を湿却するや急に茶樹を伐り將ち来って内に於いて摘ましめよ」といったお言葉があった。

だからといって門下の人々を甘かされた訳では勿論ない。大燈国師亡き後、大燈門下の旧参と称する人々が開山大師の席下に帰したが、その惡辣の鉗鎚は到底上根の器でなければ

堪え得るものでなく、多くの門下中唯一人授翁宗弼のみを法嗣として打出された。寔に仏種育成の厳格さに驚かざるを得ない。

大師は伽藍も儀式も意とされず、仏法そのものの根源に徹せられ、伝灯の嚴肅さを示されている。語録もなく、頂相さえもない、文字通り無相であった。後年五山に伝わった関山派の春夫宗宿により、松源十祖の像なるものが製せられた時大師には模写すべき肖像がなく、止むを得ず一円相を書き贅をしている。童華無著和尚が正法山誌に疑問とされたところを明め得て私は感激を新たにしている。大師の仏法久住の方法は門下育成の外にはなかったとさえ拝察される。

二

古来禅門に於ける教育法は、叢林に於いて学道并進することであった。而し明治以後普通学を以って先行し後叢林に於いて参究するのが常道であった。

廃仏毀釈の後を受けた仏教々団は従来の宗学を脱皮して、学問的研究は長足の進歩をなしたのであるが、その裏付けをなす行的面が疎んぜられ、識者の等しく憂うところとなつた。

而も世運の赴くところ、教育水準は高まり、教導職として社会の指導者となるには宗門の学校教育は忽せにすることは出来ない。それ故にこそ一派は挙って花園大学の支援を惜しまぬ所以である。

然らば行的面を如何に打開するか。人は等しくいうであらう、叢林に於いて弁道すべしと、毫にその通りではあるが、現下寺院の経済生活は直ちに僧堂掛錫を許さざる者もある現状で、教団としては真に由々しき問題である。

理想をいうならば行的裏付けをもった教学であり、また教學の理解をもった行でなければならぬ。ここに行学兼修ということが標榜される。然しこの理想は容易ではない。一応学校教育を了えた者が禪堂にて弁道し、再び学的研究をなして行学兼修ということがいい得る。然し学校教育に於ては行学の兼修を同時に徹底せしめることは難しい問題である。勿論宗門学校である以上、行学一致の精神に於いて教育すべきはいうまでもない。

畢竟不立文字の禪は叢林に於いて弁道しなければならない。それと同時に、学校教育の充実と相俟って、人材の育成に意を注ぐよう苦難の道を乗り越えねばならない。

開山大師毎歳忌を迎えるに当り大師の御徳を偲びつつ撰筆する。
(十二月五日)

★花大文化祭と接心

花園大学では十一月十一日より十三日迄の三日間恒例の文化祭を行い、十三日午後一時からの学生弁論大会には市内各大学の選手が参加、次のプログラムで同四時三十分終了した。
△自由を歩む我等の立場(花大田中久好) △悪用される愛国心(立命二郎栗野昭三) △現代宗教の社会的意義(龍大奥村

道男) △現代宗教の誤謬について(花大西村恵信) △アメリカに望む(同大池部明) △人生に於ける誤謬の意義(同大巽好子) △平和への道(中央仏教学院豊島淳由) △人類の幸福の為に(立命一部伊藤雅文) △M.S.A.の意味するもの(京都女子大今西洋子) △日陰の草と日向の草(花大勝山進) △逆流に抗して(薬大今中信義)

緒方、荻須、木村外各審査員の審査の結果優勝者が決定された。
(十二月五日)

★花園大学昇格五周年記念

新学園歌募集

昭和二十四年四月、本学が新制大学として新発足してより早くも五周年の春を迎えました。おもえば明治三十一年本派普通学林高等部創設以来、宗門最高学府として常に一派教學の進展に寄与し來ったのであります。この時「われらの大学」花園大学の理想、使命、抱負を謳い上げ、朗々若人の愛誦にたうべき新学園歌を広く宗門から公募したいと存じます。奮って御応募下さい。

募集規定

- 一、歌詞二節乃至三節、格調自由、本学設立の趣旨に合し、平明にして莊重なるもの。
- 二、応募者の資格に制限なし。
- 三、期限 昭和二十九年三月三十一日
- 四、採用歌の作者に賞金五千円呈上、他に力作に対しては

薄謝を呈す。原稿は返却しません。

五、封筒表記に「花園大学々園歌係」と記す。

昭和二十九年度入学生募集

入学願書受付期間

△第一次推薦入学志願者

二月一日から二月末日まで

△第二次志願者

三月一日から三月末日まで

詳細は本学宛「入学案内」を請求されし。

(宛名入封筒と十円切手三枚を封入のこと)

京都市右京区花園木辻北町

花園大学

(二月五日)

一九五四年(昭和二九)

★照 顧 脚 下

花園大学 荻 須 純 道

一

御開基花園法皇さまがつねに御念願になられたことは仏法の興隆ということであった。これがため松源一流の再興と妙心寺造営ということを御珍念になり所謂「往年の宸翰」を賜った。

爾來関山門流の人々はその御聖旨にそうべく撓まず努力を続けて来た。苦難に堪えつつ仏法護持に力めて来た。政權に

彈圧されても戦禍を蒙っても再建への努力がなされた。関山の門流には毎に花園法皇さまの御精神が一貫してその発展を遂げている。

最近花園会本部長であった風岡範一師が辞任された。風岡師は花園会の再建に尽力されたのであるが、全国各地に花園会が結成され、仏法の興隆に目指す妙心寺外護団体の活動が活発になりつつあることは法幸の至りである。

何といつても花園法皇さまの御聖旨を体して仏法の興隆を計ろうとすれば、先ず教学の興隆を期さなければならぬことはいうまでもないが、本派教学の現状を顧みるとき聊か以て寂寥を感じざるを得ない。更に一段の充実が要請せられる幸いに花園会の結成により学生の学資の一部を援助して下さるという有難い言葉を頂いており、その実現する日の来らんことを望んで止まないものである。今日の寺院は全く経済的に行き詰り、大部分の学生は困窮している。而も花園大学に学ぶ学生はみな寺院の後継者である。地方から子弟を勉学のために上京することは容易ではない。なんとかして教団の責任において学資の一部でも援助して頂きたいものである。

二

それに切実な問題は寮である。本派の如く地方寺院が多く、従って地方出身の学生が大部分である本学としては寮の訓育が中心となるのであるが、寮の室数はこれが収容に困難である。下宿の部屋代も高いし、間賃をして呉れる所も少い状態

である。

寮の名称を「参玄寮」といつているが、現在寮生活を営んでいる学生の師匠さんやお父さんもこの寮で学生生活を送られた方もあることと思うが、幾十星霜を経た今日では台風の時など危険である。この寮の問題はなんとか解決していただきたいものである。そしてその名に相応しい禅的訓育が十二分に実施出来るように念願するものである。

然し如上の点にのみ留意しても教学の興隆は期せられない。どうしても教学興隆のためには研究施設の充実と能勢とが整えられなければならない。大学の教授は学徒の指導とともに学究に専念し得る態勢におかれなければならない。そして後進研究者の育成を期しなければならない。これこそ最も肝要な課題である。

貴い信施により、また乏しい一派の財政によって経営する学園であれば簡単に理想のみを訴えることは許されないが、然し臨済禅を中心とする唯一の大学でもあり、その使命をもつものとするならばその充実を期するよう御支援をお願いする次第である。

本派百年の大計は教学の興隆にありとは妙心寺派が久しく標榜して来た命題である。また将来もこの目標に向って進まなければならない。新時代には新時代の、民主社会には民主社会の在り方に於て教団の船は進むとしても、花園法皇さまの御精神が一貫されたものでなければならない。妙心寺派教団

が今日まで苦難の道を歩みつづけた如く、将来もまた狂瀾怒濤を力強く押切って進まなければならないであろう。近く花園法皇毎歳忌を迎えるに当り、御徳を偲びつついささか以て感ずるところの概要を記して擲筆する。

(十月五日)

★私は日本が好きだ

山田 無文

◇日本の好きなわけ

「わたくしは日本が好きだ」といったら、いけないであらうか。善くても悪くてもわたくしは日本が好きだ。

それは富士山があるからではない。桜が咲くためではない。聖徳太子や白隠の国だからでもない。

わたくしは中国も好きだ。しかしそれは北京があり、万寿山があり、美しい姑娘(クーニャン)がいるからだ。それは眼のつながりともいえない。

わたくしは印度も好きだ。それは釈尊の国であり、ガンジスの国であり、ネールの国だからである。それは心のつながりのようである。

日本にはわたくしをふくめてイヤな奴ばかりいる。小利口で、軽薄で、しつと深くて、利己的で、無作法で、誠実を欠いた、しかも極めて小心者の。

それでもわたくしは日本が好きだ。それは眼のつながりでもなく、心のつながりでもなく、血のつながりというものであろう。

このわたくしをふくめたイヤなイヤな日本人を、もっとよい日本人にしたいと思えば、この古わらじのように破れちぎれた日本を美しい温い堅実な日本にしたいと思えば、それがイヤであればあるほど、好きになるのである。

◇仏さまより生きた人間

わたくしは日本が好きである。日本が好きだというと、とかく保守的になりがちだが、そうではなくて、最も進歩的な意味において日本が好きだといつてはいけないであらうか。

奈良も残ったし、京都も残ったし、日本には保存せねばならぬ立派な祖先の遺産がおびただしく有って、それらの古文化財の保存と修理のために、年々相当な国家予算がもられる。そしてその最大の恩恵を受けるのが仏教界であるから、大変有難いことで、はなはだ申しにくい話だが、まだ外に現実にはし迫った、しなければならぬ事がたくさんあるのではないかと思われる。仏さんの家よりは人間の住家が、仏さんの折れた手足より生きた人間の生命の方が、先ず大切のように思われてならん。

大局から見れば、文化財保存の予算の如きは微々たるものであるが、一兆円にも及ぶような大予算が、何よりも先ず民生の安定にそそがれねばならぬと思うがどうであらう。

「人を殺すことを好まざる者が天下を保つ」と孟子はいった。「皆を笑わせて最後に笑う者が最も幸福だ」とマルクスはいった。

保守派の人達に申したい。諸君が金科玉条と戴いて来られた「万民をしてその所を得しめ兆民をしてその堵に安ぜしめる」というお言葉は何時実現されるであらうか。保守派の人達にそれを実現する意思がないというなら、やはり革新派の人達に革命をして貰うより仕方ないであらう。それがいわゆる聖旨に添う所以ではないか。あの常に示された立派な宣言もまた古文化財であつたのか。

革新派の諸君に申したい。闘争や革命はどうしても赤旗を持たんと出来んものであらうか。日の丸ではだめであらうか。日の丸は侵略戦争を連想させるからいかんというならば、それはわれわれ全体の責任として、日の丸のために汚名をそそがねばならぬ。日の丸はあまりに尊厳で平和だからいかぬというならば、尊厳と平和の自覚のない闘争は盲動に過ぎんであらう。

◇たとえ話で恐れ入るが

わたくしは日本が好きだ。戦争と武力を放棄した日本こそ平和のメッカとならねばならぬ。世界の各国をして武器を棄てしめるような強力な平和運動が、この国から起らんものであらうか。

単俗なたとえで恐れ入るが「このごろ部落に盗人が侵入しておる。部落の平和のためにうちの若い者を夜警に出すから協力して貰いたい」と、村のボスが手下の若者を夜警に出したとする。

ところが何のことはないその若者達が切取り強盜、かつ払い、強かん、火付けを働いたとしたらどうであろう。結局皆から袋たたきになって「過ちはくりかえしません」と謝ってみてすむものであろうか。

しかもその言葉の乾かぬ中から「やっぱり盗人が心配だ」といって、何処かのかこわれ者みたいに、黒板べいを新築し、見越しの松に手を入れ、かき根をつくらって自衛と称したらどんなものであろう。

はなはだ卑俗なたとえで恐縮だが、近所界隈の損害と借金を支払ってからわが家の手入はすべきである。日本は先ずアジアの諸国にいさぎよく賠償を支払うべきだと思うがどうであらう。

ついでながら、わが家の犠牲者の法要や回向は次第に丁重に行われるようになったが、隣近所の貴い犠牲者のために、だれがお悔みとおわびに回ったであらうか。一遍の念仏でも唱えたであらうか。日本はアジアの諸国に単なる親善使節ではなくして、誠実なる謝罪使節を送るべきである。

南北朝戦争の時、足利尊氏は国毎に安国寺を建てて兩軍の犠牲者の霊を祀ることを、政治の手始めとした。アジアの諸国に彼我の英霊を祀る平和のための寺院教会を建てて、現地においてザンゲ奉仕する勇猛なる宗教家はいないものであろうか。そんな事を企画し支援する政治家や資本家はいないものであろうか。

などと役にもたたぬよまい言を申しながら、わたくしは日本が好きだ。(朝日新聞、昭和二十九年九月二十日付紙上掲載。この一文を見落された読者のために茲に転載する。)

(十月五日)

★教団の将来に寄す

花園高等学校長 小沢和一

終戦後の著しい社会現象の一つとして、労働組合の強化とそれに随伴して頻発する争議に次ぐ争議が世人の耳目を捉えている。これを嘆く者、止むなしとする者、正しい民主化の現われとして謳歌する者と、その受取り方は様々であるが、これに対する是非の批判は別として、組合の力即ち組織の力の強さというものを世人は等しく痛感していることと思う。

ところで、宗教団体は信仰を同じくする者の組織的団体であり、寺院住職はそのオルグ的存在である。オルグは勿論その最高機関の方針を克く体し、その方針に自己を捧げる殉教者の精神の把握者でなければならぬ。信仰を以て結ばれている教団に最も望まれるものは、強烈な信仰の下に殉教の精神に燃え立つオルグ的存在である。近來仏教々団が概して振わないのは、オルグであるべき寺院住職自身が信仰に乏しく、寺院を生活の方便としている傾きによらないだろうか。最近の世相に於て、若し仮に生活の方便化も或る程度止むなしとするも、組織の力こそ当面の急務である。

二

本派教団には、現在教区があり、所長支所長がそれぞれに教区を管轄し、組織は一応整備されている。しかし私は更に進んで、本派全寺院住職方が本派檀信徒のオルグとしての機能を發揮されることが望ましいと思う次第である。中央本部の一本の指令によって末端までが動くという今日の組合活動の在り方を夢見るものである。

組合活動は切実な生活につく問題で、それとこれとは別の問題であるとお叱りを蒙ると思うが、信仰によって結ばれている教団が、信仰の尊貴を忘れぬ限り、その教団の活動をより活動的ならしめるべく檀信徒の財力を動員して、寧ろ教団主腦者を鞭撻督励し、活発な教団としての事業を行わしめらるべきでないかと思う。

社会主義国家がその理想社会建設のために、いかにオルグの養成に全力を傾けているか、本派教団がその組織を強化しその勢力を張らんとするには先ずオルグを養成すべきである。本派教団のオルグ養成の最終のルツボは勿論専門道場であるが、専門道場の特殊の存在を考える時、オルグ養成の機関として花園大学を以てすべきである。

三

花園大学は本派設立の大学であり、宗教教師としての高等知識と本派宗旨の根幹を専攻する独自の存在である。本派寺院住職たらしとする者は、いかなる貧困寺院の子弟と雖も、

ここに学び得る方途を講ずべきである。年間費用一千五百万円位を要しよう。若しこれが実現を見た暁に於ては、近き将来、本派の組織は強化され、本派の教線は大いに振るう事となる。この英断なくしては本派の教線は振わず、本派の組織は日に月に弱まるであらう。

近く開山大師の大遠諱を迎うるに当って、その最も大なる記念事業として、花園大学の振興を計られ、大遠諱までにそれが実現せられんことを切に望む次第であります。

(十一月五日)

一九五五年(昭和三十〇)

★花園大学へ入学を

教学部長 小林 禅友

一派教学の歴史を回顧してみると、相当旧いものがあります。東部、西部の教校時代から、普通学林、花園学院、臨済宗大学、臨済学院専門学校、花園大学と幾度遷して七十余年、一派宗門人の大半は殆んどその同窓生であります。何れもその時代の新人とよばれる指導者ばかり。指を屈すれば老師格の方、又宗政家、布教家として、教育家として社会的にも宗門的にも力をつくしているその功績は頗る多大であります。これ勿論、一派宗門教育特色の然らしめたところ、禅的精神の涵養、宗門人としての行解相応の円満なる人格の教育、自尊自立の学風によって薫育された結果に外ならぬと信ずるも

のであります。

いうまでもなく、花園大学の学風は、宗門人的人格の涵養と禪的薰育にその最大の主眼があります。勿論学校である以上、学問的研究を軽視するものではありません。しかし宗門としてそれ以上に大切なことは、宗門人的人格の涵養であります。この点が兎角、忘れられがちになっているところに、現下宗門教育の一大欠点があるように思われてなりません。

学究第一主義で、誤れる自由主義的傾向に毒され、学徒の人格訓育という根本義が忘れられがちであります。今日の宗門最高学府教育の危機はこの点にあると申しても過言ではありませんまい。前にも述べましたように、坐禪并道による宗門人の人格涵養こそ大切であります。開基花園法皇さまの「報恩謝徳」開山無相大師の「応燈二祖の深恩を忘却せば老僧が児孫にあらず」と遺誠されている一連の報恩底の血脈こそ、一派教育の生命であり又本学の人格涵養の源泉であります。従って学徒の日常行事に於ても、この宗教的感激を一層深からしめる考慮が十二分に払われなければなりません。

大本山妙心寺の山門に一ど脚を踏み入れれば、松の緑も深く、七堂伽藍立ち並ぶ幽邃清寂の風景、石畳をふんで玉鳳院御殿、微笑塔前に礼拝し、又風水泉頭の遺蹟を偲んでの永久に忘れがたき宗教的感激は、花園大学々徒の自然に感得する宗門生活の第一ページであります。本末の親善を一層緊張ならしめる第一の根源であります。思いをここにいたします

時、一派の青年学徒は、行学一致の禪的修養にまって身心を鍛練し、宗門人としての人格を涵養し得る花園大学に是非とも進学することを、衷心より切にお勧めする次第であります。

(三月五日)

★小笠原秀実先生謝恩会

五月二十五日創立記念日、小笠原秀実先生謝恩会を同窓会主催にて行つた。眼に涙して語る山田学長謝恩のことばは誠に感激そのもの、衣笠宗務総長の本山賞典贈呈、松倉紹英理事(龍安寺住職)の謝恩会名簿献呈、小笠原先生挨拶、校友会代表の花束贈呈、千田理事の謝恩会経過報告、「小笠原先生の思想」と題する市川白弦教授の記念講演。終つて尺八合奏、茂山千五郎社中の能狂言、龍谷大学合唱団の仏教聖歌合唱。会議室にて来賓三十余名会合。それぞれテールスピーチ。大正九年四月就任以来三十有余年の講壇生活にピリオドを打たれた本年古稀の老先生に対する謝恩会の幕を閉す。同窓生中には北海道室蘭市より遙々上洛された河野琢禅師(昭和十三年卒)、秋田市の藤田溪山師(昭和三年卒)、静岡県の安部光三氏等の顔も見え、山田学長、今津洪嶽、福岡俊翁各教授陣も加わって盛会。嵐峽館での祝賀宴も懐旧の喜びを極めた。

(六月五日)

★編集室 鎌倉円覚寺派管長朝比奈宗源老師から近著「欧米雲水記」(B6版三三六頁、東京都中央区新富町二ノ二株式会社四季社振東二〇一九三番、定価三八〇円)を贈呈され、

寸暇をぬすんで閲読中○米國政府の招きで渡米、欧米の旅二ヶ月間の記録である。禪の政治經濟的實踐に深い関心をもつ老師のものだけに楽しめる○ながい間の薰習というものは一寸やそとで止められない。読書慾という「慾」などがそれだ。しかしそれも初老の生理的制約が然るべき結論をだしてくるから世話はない。マイナスになるものは根気で、プラスになるのが難用だから、その日常底はおして知るべきだ。○「開山無相大師六百年大遠諱大法会事務局」の看板がかかる。すべてはこれからだ。責任担当各位の御苦労や偲ぶる○この月は大遠諱關係の告示類が多かったので、新刊紹介の原稿が棚上げになった。いつも無遠慮な批判を書かしてもらうので一寸気が引ける。花大から今度新しく刊行された「禪文化」も一字残らず眼をとおしたが、誤植過多に驚いた。その原因なへんにありや。第二巻の名譽ばんかいを期待するや切○「御苦労にとたむけた言葉聞えたか」「皆に云うお礼はわしから伝えおく」「これからはどこへ行くにも二人づれ」——これは去る六月二十一日に行われた西田天香氏夫人照月さんの告別式に供えた天香さんの香語。「光友」七月十五日発行誌所載）○八月九、十兩日、大分市体育会館で行われる全日本高校竹刀競技優勝大会に、花高剣道部生徒が古田教諭引卒のもとに京都府高校代表として出場する。大分市附近の同窓生諸師ふるって応援あらんことを願っておく○祇園祭の鉾の上に、生れて始めて乗せてもらう。豪華けんらん、よくこ

ういうものを今日まで伝統し来れるものかなと感嘆せしめられる。京都市民の血の中に生きつづけている祭りの精神、その強靱さと根強さを再認識せしめられる○祖先崇拜といえ、その語感はいと古めかしい。しかし何といつてもその実感は新鮮そのものだ。人間の生命の流れの中には、概念的新旧を越えた事実が生きている。それでいいのだ○檀家の法事でよばれた御馳走の中毒で二、三日下痢になやまざる。医師の話によれば、ネズミの小便の中毒だという。えらいものを口にしたものかなと独り微笑する○八月盆近づいて寺庭に雑草茂く炎熱やぐが如くにして蟬声降るが如しだ。(K)

(八月五日)

★編集室 彼岸もすんで早くも十月となる。三日から十日間は「安居会」、二十七日から二週間は「高等布教講習会」だ○安居会は「僧堂の規矩に準ずる」とある。指導する側もされる側もこの精神を空念仏に終らせてもらいたくない。去年の安居会閉講式がすんだあとの受講者控室のあの不始末ぶりはどうだ。呉々も照顧脚下第一、起正慎重の筆法をお忘れなく、安居会の鼎の輕重を問われることなからんことを致えて望むや切○花園大学禅文化研究会から「禅文化」第二号が出る。先の第一号の驚嘆すべき誤植過多に、禍を転じて福となしたか今度は流石に誤植も少ない。仮名使いの新旧混用は依然として眼ざわり。この種の雑誌編集の至難さは愈々入れば愈々深しだ○日本共產党の徳田球一氏の遺骨とデスマスクが同志

の手に迎えられて本部の祭壇にまつられた写真を新聞紙上で見る○共產黨員は何ういう感じ方で死者に対決しているのだろう。それが知りたい○高等布教講習会参加者の論文課題は「現代生活と禅」生活という文字上に「現代」の二字を冠す。現代とは何か。生活とは何か。その三者をつらぬく一つのものの、問題はこれの線を手ぐりよせるかどうかにあるような気がする。○生活体験の深淺と論理的割截の鋭鈍、この二者の織りなす文様の面白さを、やがて寄せられる参加者論文に期待する○「趙州がなぜ履を頭に戴(の)せたか、これが問題である。古来或は意路不到と逃げ、或は言詮不及とごまかし、或は皆の頭が顛倒しておるからそれを趙州が諷したのだなど尤もらしく説明され、無門も『若し者裏に向つて一転語を下し得ば』などと、勿体ぶつておるが、わたくしは何でもない事だと思ふ。何時も胸に踏みつけておるものを頭の上に戴(の)せただけのことである。常に踏みじられておる者、虐げられておるもの、泥にまみれてる者を頭に頂かれたのである。即ち宗教者の本質である下坐の精神を素直に表現されたものと思う。後來『驢を渡し馬を渡す』と、石橋の心境を吐露されたあの精神に外ならぬ。多くの経巻が百千万言を費して論説なお足らぬ菩薩道の精神を、この微少なる一行爲に對つて示し尽しておるところ、趙州も実践道の後継者たるに恥ぢぬ」『禅文化』第二号所載「南泉斬猫」中の山田無文

老師の提唱の一節だ○提唱もこうなると有難い。なるほどな

あである○「あまり台風々々というものだから何となく心さわがしいな」という。「仁者の心動くなり」と半疊が飛ぶ。「老師みたいなことをいうな」と反撃する○台風の仏法如何ということになる。(K)

(十月五日)

★開山大師六百年遠諱を迎えるに當りて

花大学監 荻 須 純 道

いよいよ昭和三十四年には開山大師の六百年大遠諱を迎えることになった。一派拳つて大師の恩徳を称たえ、本派将来の發展護持の大計を樹立する好機會に直面したといわねばならない。

源深ければ流れ長しという古徳の語をしみじみと有難く味わい、また感激せざるを得ない。法燈六百年、ただ開山の一流のみ世を照輝して今日に至ったことは開山大師の恩徳の然らしむるところである。かつて愚堂和尚は三百年遠諱に焼焔聯芳三百年と高らかに香語を唱えられたが歴史はここにまた六百年の感激に遭遇することになった。三百年の遠諱には隠元の来朝によつて刺戟された妙心寺が断乎として開山の仏法を堅持し、伽藍整備のもとに嚴修された。然し来るべき六百年の大遠諱は教学の基礎確立こそ最も有意義な事業であり、また開山大師への報恩でなければならぬ。

開山大師はただ仏法久住のため、門下の育成に力められた。大師が春雨降りしきる日、雲納みな茶摘みに普請されること

を知られ「何んぞ清衆を濕却するや、急に茶樹を伐りもち来て内において摘ましめよ」といわれたお言葉は屢々引用されるが、大切な茶樹を伐つても清衆を濕却さすといわれる慈悲心は如何に大師が学徒育成に意を注がれたかを拝察することが出来る。寔に将来宗門を担つて立つ学徒の育成こそ大師の恩徳に謝するものでなければならぬ。

二

翻つて本派教学の現状を省みると、いささか以て清衆濕却するの感がある。なぜか寺門の子弟は僧侶となることに魅力をもたない。而も社会の人々は宗教を要請し、欧米の人々は東洋的叡智を求めて仏教研究熱は高まり、殊に禪に関心をもつ事情にある今日、何はさておき大学の充実を期して人材の育成に力めなければならないと思う。人材は容易には出来難い。人材の育成には十分なる理解と温き支援とを必要とする。また経済的不如意による学生生活は涙ぐまじきものがある。この困窮を克服しても学生は学校を卒業したいという意欲に燃えている。中には学資の大部分をアルバイトによつて支える学生がいる。然し決して好ましいことではない。学業がおろそかになるのは当然である。

ジェーン台風の風害復興により、本館校舎の修理改装があり、数年前の壁は破れ床まで抜け落ちた教室で松下村塾を見よなどと学生を誡めていたことを思い起せば、一派の温き支援に日々感謝している次第であるが、次代を背負う青年学徒

の学舎としては施設の不備を訴えざるを得ない。

大学としての機能を發揮せしむるためには研究室が充実しなければならぬ。また本学の如く学生の大半が地方寺院の子弟であり、旁ら行的訓育、禪僧としての躰けを薫習すためには寮は重要な役割を演ずるものである。

来るべき六百年の大遠諱には教学の基礎確立を念願して止まない。ために妻々訴えて、諸大徳の御理解と御支援を懇願するものであるが、這般の宗会で開山大師六百年遠諱記念事業費として二十五万四千二百五十円（内訳花大一千七百四万四千二百五十円花高三百五十万円）を議決して頂いたことは感謝に堪えない次第である。

（十二月五日）

一九五六年（昭和三二）

★宗学の意義

花園大学長 山田 無文

禪僧に学問は要らぬというような邪説が、何時から創まつたであろうか。

若し釈尊に学問が無かったら、どうして仏教が成立したであろう。竜樹大士や馬鳴菩薩のような大学者が出られなかつたら、どうして大乘仏教が発展したであろう。達磨大師に学問が無かったら、どうして六派の外道が折伏されたであろう。若し臨済和尚に華嚴の学究がなかつたら、どうして四料揅や四照用が生まれたであろう。圓悟禪師に七翰林の才が無か

つたら、どうして碧巖録が完成されたであろう。

松源黒豆の禅とは、黒豆のような活字を、気長に拾い読んで、只管古教照心することでは無かったか。

天龍寺の寺宝に、関山国師の墨跡なるものが一軸ある。どんなにか雄渾な大幅と思われるかも知れんが、そうでない。

美濃紙大の紙に、実に濃かく書かれた、天台か華嚴の疏抄の一葉である。そこに却って真蹟の信がおけるのではないかと思ふ。

わたくしはそれを見る毎に、これある哉と思つた。これなくしてどうして妙心一流が興隆出来たであろう。

大燈国師の如き、開山大師の如き、その投機の偏一片を見ただけで、その蘊奥の深さははかり知れぬものがあるでは無いか。

近世宗門中興の祖、白隠禅師に学問が無かつたら、どうしてあの夥しい華墨の大業が成就したであろう。「無学とは学が無いことではない、何もかも学び尽して、もう学ぶものがないということだ」と、無学管長を評した、三生軒の猷禅和尚の言葉は面白。

明治になってからでも、好学の士は皆奈良や叡山に登って、勿論余乗である一般仏教学を研究したものである。それは他山の石として最も必要なものであった。

併し今日の場合はそうでない。禅そのものが一つの学問の対象となつておるのである。

少くとも宗門の祖師方によつて遺された老大なる禅書が、思想的に歴史的に解明されなければならぬ時になっておる。而もこれらを海外に紹介する必要にさえ迫られておるのである。

ここに宗門子弟の教育ということに以外に、花園大学の持つ大きな意義と責任が有ると思う。そして研究の成果を見るためには、やはり相当の研究費を必要とするのである。

本派諸大徳殊に花園会員諸士の、御理解と御支援を冀つて止まぬ次第である。

毎度申すことで甚だ恐縮であるが、三十万檀信徒の各位が、年に金五拾円也を学校教育のために、献金して頂けるならば、年々千五百万円の淨財が集る。一人宛五万円と見て、三百人の宗門子弟が、授業料も食費も只で、而も開山大師の塔下で、特異の禅教育が出来るのである。

それでこそ本末親善の実は挙げられ、これ以外に宗門向上の道は無いと私は考える。

それは住職各位の熱と御協力さえあれば、決して難しい事ではないと思うが如何。

(三月五日)

★諸君には希望がある

——花大卒業生に学長の訓辞——

去る三月十日午前十時、花園大学第四回卒業式が同学講堂に於て挙行され横南室管長親下、衣笠宗務総長以下來賓多数を迎えて晴れの卒業生三十名が巣立ちました。この日、学長

山田無文老師は次のような訓示を行い、卒業生はもとより列席の宗門関係者に深い感銘をあたえた。以下はその大要である。

「私は一昨日、招かれて神戸のある女子短期大学附属高等学校の卒業式に列席した。この日の卒業式に兵庫県知事や神戸市長をはじめ沢山の人々の祝辞が述べられたのでありますが、それらは揃いも揃って若い乙女たちの前途を祝福する喜びに満ちあふれるものばかりでありました。ところが本日わが大学の卒業式に臨んで私は学長として果して諸君の胸ふくらむような希望と栄光にみちた挨拶をすることが出来るではありませんか。本学の性格から申しまでも諸君の前途には輝かしい希望というよりも、むしろ幾多の苦難が横たわっていると申し上げた方が適切かと存じます。

諸君、諸君は大学を出てそれからなつかしい故郷に帰って行かれることでありますが、諸君の郷里はどんな気持ちで諸君を迎えるのでありましょうか。三等地の寺の子弟は三等地の寺の和尚になる。五等地の寺の子は五等地寺院の住職になるだけの話だ。どんな秀才でも五等地寺院の息子が別格地寺院の和尚になったという話は、現在の宗門制度のうちでは聞くとうとするのがむしろ無理だろう。そこで諸君は中学校の教壇に立つことや、町の農協組合の書記や、役場の吏員になることを考えようとする。だが、お寺（の住職）以外の社会で、たとい諸君がどのような成功を収めようともそれはアルバイ

トであって成功とはいえない。一体、諸君はどこに希望を持ったらよいのであろうか。ただ一つだけ、諸君のために残された希望の世界がある。それは法を求めることだ、真理を追求する真摯な精進の生活態度だ、法の權威をつかもうとする精進とその成功だ。これ以外に諸君の希望を満たすものは何一つない。これに成功しさえすれば社会は双手をあげて諸君を迎え、讃嘆の声がわき、おのずから尊敬と親愛とが集まってくる。私はいつも考えるのであるが、人間として心に拝むもの、尊敬するものを持たぬほど淋しいことはないと思っている。（中略）

今日の仏教界を見るとき果して幾人の僧が真に心の中に拝むべき「仏」を「神」を持っているであらうかまことに寂寥の至りであります。諸君よ、諸君はタバコ十本入りの「ヒカリ」の箱のなかにタバコが八本しかなかったらどうする。パインナップルの缶詰の中味が石コロだったらどうする。諸君、他人（ひと）ごとではない。「法」を説く宗教家に「法」がなかったら、聴く人々は黙っているであらうか。仏教は黙っているであらうか。仏教は今日、泥のごとく見捨てられている。仏教家が心に拝むべき法を持っていないからだといったら間違ひであらうか。盤珪禪師が「大学」を読んで、「明德」の二字に行きつまり、骨を削り血を絞る苦難の修行を経てついに、かの「不生禅」の新天地をきり拓いた話はすでにご存じであらう。諸君はきつと法を求めて真剣な仏教徒としてのこ

イスを邁進されることと確信する。このとき諸君の前途には初めて大いなる希望が生れることを受けあいだ。どんな苦難も堪え忍ぶ覚悟を今こそ固めてほしい。

開山無相大師の六百年の大遠諱は目前に迫っている。どのように盛大な記念祭典や行事が行われようとも、もし妙心寺一派に「法」がなくなつたなら何をもって開山様の恩にむくいることが出来よう。禅宗十三派のうちわずかに残る妙心寺一山の法灯は全仏教の法であるといつても過言ではないと信ずる。自分の心のなかに尊嚴なるもの、拝むものを発見するまで頑張らねばならない。そこにこそ、苦難の途ではあるが大いなる希望がある。どんな立派な寺を建ててもお互いの胸の中に拝むべき法がなかったら、それは外道だと申さねばならない。(朝日新聞記者 鳥越杉雄氏筆録) (四月五日)

★ビルマ僧 花大講演

全日本仏教青年会連合の招待で去る四月十六日来日して以来、京都の仏教関係大学で毎日、南北仏教交流運動の講演をしているビルマ政府派遣のランゲーン大学教授、ウーティテイラ僧正と国際仏教大学教授、ウーニヤスツラ僧正の二人は、四月二十三日午前九時半から花園大学講堂で、「ビルマ仏教の実情」について語ったが、特にウーティテイラ僧正は大要左のような講演をし、学生たちに深い感銘を与えた。

◇：さきの大東亜戦争が始まったとき、私は仏教国日本について、不思議なことだ。と思つた。仏教は大慈悲をその

精神としてゐるはずだから。さては日本は仏教を軍国主義に切りかえたんだなと考へてみた。日本は仏教を持っているが形式だけで、仏教の精神を実践しないのではなからうか。人間はダレしも幸福になりたい希望を持っているが、果してそのうちの幾人が幸福というものを手に入れたであらうか。仏教的にいつても、来世即ち死後の世界(天国)で幸福をつかむというようなことは私にはわからない。現世でこそ眞の幸福はつかむべきだ。

◇：それは宗教的な精進と実践の量に正比例して与えられる。仏教的原理の実践はきつと幸福をもたらずにおかない。

「幸福」は内からわき出るもので、他から求められるものではない。来世の幸福、など、人が勝手に考へて作つたものではないなからうか。眞の幸福を得るためには般若の知慧をつかむことである。「禅」こそは日本が世界に誇り得る東洋文化の珠玉といわねばなるまい(下略)。(四月二十四日付、朝日新聞、京都版掲載記事より転載)

ちなみに両教授の京都滞在中の宿舎は妙心寺山内霊雲院であつた。(五月五日)

★花大だより

花園大学では去る七月二日より五日間、西義雄博士の「原始仏教」集中講義を行った。多年手がけたものだけに流石は名講義と一同感嘆。七月十日より例年の夏期講座開催(毎夕六時)十日は柴山全慶老師の「白隠禪師粉引歌」の提唱、十一

日は荻須純道教授の「開山慧玄について」。十二日は藤直幹博士「作法の精神」。十三日は森暢氏の「日本絵画の変遷——鎌倉から室町へ——幻灯スライド使用」となっている。今年は山田学長北海道巡錫中でその提唱は聴かれない。花大講堂で行われる。

★花園大学校歌

(一) 自覚の曙光あざやかに

眼皮穿ちし明星を

高く仰ぎて心躍る

われらが学園花園大学

(二) 霊鷲の嶺に示されし

これ妙心の花の色

とわの微笑をたたえる

われらが学園花園大学

(三) 見よ嵩山の雪の庭

深紅にそめし若人の

熱血いまもたぎりたり

われらが学園花園大学

(四) 貞和の勅に応えつつ

法燈ここに六百年

懸けて重き使命あり

われらが学園花園大学

(八月五日)

一九五七年(昭和三二)

★昭和32年度花園大学々々生募集要項

募集人員 本科五〇名 選科生若干名。

入試科目 国語、社会、英語、理数、面接。

希望表示 国語科では漢文を、社会科では日本史、世界史を、

数学科では幾何を修得し、なるべく之を選択受験
することが望ましい

試験期日 三月三十日(土)、三十一日(日)

願書受付期間 二月一日から三日二十九日迄

詳細は左記要領により「入学案内」を申し込まれたし。但し、送り先を明記(八円切手貼付)の封筒と拾円切手三枚を同封のこと。

なお、第二次募集は行わない。

京都市右京区花園木辻北町三〇 花園大学

(三月五日)

★本寺と末寺

花園大学学監 荻須純道

(一)

ある部内会の席上である。ある和尚は「こうして集まると、金を出す話ばかりであるが金を出す寺の貧困になったり、

能力のない寺院なり住職をもち立てることを、お互に研究し協力しなければならぬのではないか。仏教会の会長など、この点に意を注いで貰いたい」と述べ、さらに例をひいて、「ある寺の若和尚が道路工事の工夫になって働き出したら、とたんに信用がなくなった」というのである。

これは極端な例であるが、これに似たような寺院は数多く出来だした。勤労奉仕であるならば又これほど尊い姿はないだろう。しかし食えないから生活のために工夫に出たといつては、ところによつては未だ社会通念のピンツに合わない。そういう和尚さんにお経をよんでもらつても有難くないといふことになる。僧侶は僧侶の在り方において生活を立てるといふのが理想であり、またそうしなければならないのであるが、さて現実においては困難な幾多の問題がある。

(一)

栄枯盛衰、万物流転、滅びゆくものは亡ぶとしても、さて衰微してゆく寺院の檀信徒が、みな大寺院についてゆくとは限らない。お互に協力し助言を与えその寺の檀信徒総代などに渡りをつけてその寺をもち立てるようになることは緊要なことであり教団を構成する個々の末寺の経済的基礎を固めることの方策が立てられなければならない。末寺が衰えては本寺も衰える。和尚の発言には何か末寺がもとであるといったようなお言葉の響きさえあつた。

(二)

本寺と末寺、檀家と菩提寺といった本末、寺檀の関係は徳川幕府が封建性を確立するための制度であり、かつまた、キリシタン禁制のためにも強固なものになったのであるが、今日はまた別の意味で民主社会の線に沿ひ、本末一体となつて、より一層強固な基盤を固めねばならない秋である。

(四)

細りゆく末寺の維持のより立てには、なんといつても中心になるものは住職その人の人物にあることはいふまでもない。信頼される後継者をつくらうとして、子弟を京都に送らうとすれば、なかなか以て容易ではない。高校の成績は優秀であつても、大学への進学は断念しなければならない青年もいる。

なんとかして、教団全体の責任において、花國大学に学ぶ学生のために、育英資金の確立が開山大師六百年の大遠譚記念として出来ないものであらうか。

(十月五日)

一九五八年(昭和三三)

★教学の一課題

花大学監 荻 須 純 道

ある若い科学者が、再蒸溜水を飲んで卒倒したという。純粹の蒸溜水を飲むことは危険である。

むかしから禅は諸宗の総府といわれる。禅を物質の水に喩えればこの蒸溜水のようなものであらう。なくてはならない

中核をなすからである。だからこそ向上の道をひたすら強調し、今日までその命脈が持続されたのである。しかし第一義的なものだけでは一般大衆はついてゆけない。何物かを媒介しなければ理解し難い。ここに学問の必要性があると思われる。

今日の臨済宗の教团的勢力は余り振わない。しかし文化に及ぼした影響という点においては、他のいずれの宗派にも劣らない。華道、茶道、能、庭園、絵画、建築、武士道等いずれも禪を中核とする文化である。われわれはすぐれた文化遺産をもっている。戦後歴史は新たな転回をした。いうまでもなく欧米の思想文化が高度におし寄せて来たことである。そしてまた欧米人も東洋の文化を求めている。中でも禪に高い関心をもっているという。昨秋、緒方教授はフルブライト交換教授として、さらにまた久松真一博士はハーバート大学の客員教授として昨年招聘され、同じく欧州を廻って去月無事帰朝された。いずれも欧米人に禪の関心が高まっていることを強調されている。このような文化交流のうしおは大きくうねって行くであろう。縁起の理に基いて仏教はまさに世界の仏教になって来た。

一昨年の南方仏紀二千五百年を記念して、セイロンにおいては英文仏教百科大辞典の刊行を計画し、その執筆を日本の仏教学者に依頼して来たので、目下その項目が分担され、執筆編纂が急がれている。今月下旬には国際宗教学会が東京で

開かれ、九月八日には妙心寺へ世界の宗教学者が実地見学に来る予定となっている。金閣、龍安両寺へも来訪されるが、とくに妙心寺は禪の根本道場として選ばれている。

この六月、全国学会である印度学仏教学会の三十三年度の学術大会が東洋大学において行われた。本派在籍の西義雄博士が当番校理事として大会がすすめられた。研究発表者約二百名の多きに達した。明年は花大に当番校の順番が廻って来ている。開山大師の大遠諱記念に、大学としては最も相応しい事業である。

それにしてもつねに考えさせられることは若い研究者の育成である。たゆまずはげんで研究業績をあげてゆく専任講師、助手クラスの人々である。人物は急には出来ない。諸尊宿の御理解を得たいことである。

(八月五日)

一九五九年(昭和三四)

★花園大学の新学寮落成す

収容定員 五十六名

二月二十三日午後三時花園大学学寮(寄宿舎、総工費一千七百万円)落成式が学長山田無文老師導師、横南室管長、衣笠宗務総長、朝日、平居、清水、足立、服部各部長、遠諱局芝原、小林、太田、後藤、土井、井上各常在委員、岸田宗会議員、同窓会員諸師、建築関係者、学生その他数十名随喜、学寮新禅堂に於て厳修、学長、総長挨拶、荻須学監の経過報

告あつて式を閉じた。新築学寮の様式施設の完備とモダンぶりは驚嘆にあたいし、禅堂、食堂、茶室、寮監室と何れも京都一の折り紙を張ることも誇張ではない。学生室は二十八室、一室二名宛、収容定員五十六名。今度の大遠譚団参者の宿舍として活用される。今後の理想的学寮訓育の徹底が期待されている。

(三月五日)

★御 案 内

臨済宗大学創立五十周年

花園大学設立十周年

記念大講演会

とき……五月二十五日午前十時

ところ……花園高等学校直心館

講師 文学博士鈴木大拙氏

御来聴を歓迎致します。

主催 花園大学

★同窓会総会案内

臨済宗大学創立以来五十年の学統を祝賀するために、花園大学主催記念大会に参加し、ひきつづき花園会館に於て、鈴木大拙博士を囲んで会食(会費四百円、五月二十日迄にお申し込みのこと)後、総会を開きます。奮ってご参加下さい。

花園大学同窓会(五月五日)

★花大創立記念日を迎えて

花大学監 荻 須 純 道

さる五月二十五日は花大創立記念日であつた。しかも本年は前身校の臨済大学が開学されて五十周年に当り、また花大が新制の大学として発足してから満十年になる記念すべき日であつた。意義ある記念日とすべく計画をすすめていたが、山田学長老師の指示もあり、鈴木大拙博士を迎えて記念講演会を開くことになり、同窓各位のご参集を請うた。老博士は遠路いとわず快諾され、「東洋思想の特殊性」と題し淳々と述べられ、同窓各位も遠く仙台、長崎といった方面からも来会され、意義ある記念日であつた。

思えば本学は半世紀の長きにわたつて臨済宗教学の支柱となり幾多の人材を輩出して来た。しかし五十年の長い歴史をもつとはいへ、表面に現われた形の上では余りめざましい進展はなかつた。しかし開山大師六百年の大遠譚記念事業としての長年の懸案であつた学寮が改築されたことは甚深の謝意を表するものである。

この大遠譚を契機として考えさせられることは人物育成の問題である。宗門子弟の学校教育は極めて自由で、いかなる種類の学校を出ても差支えがなく、禅宗学や仏教学はややもすればうとんじられ易い。不立文字の禅とはいへ今後このことは是正されたまた対策が考えられねばならないのではなからうか。

さらに教団の盲点は指導者の育成である。臨専時代であるなら、卒業したての旧帝大系の英才を教官として迎えること

が出来たが、新制ではそれが許されない。新制で重んずるのは研究歴である。将来花大においては少くとも仏教学や禅宗学は血の通った教団人の中に指導者を育成すべきであろう。

研究者を育成するためには、まずなんといっても施設が必要である。学者が研究室にとじこもって携ゆまず地道な努力をつづけさすようにしなければならない。学生は研究室で教授の指導をうける。学生が自発的に研究する意欲をもたなければ教育の効果は期せられない。まことに研究室の問題は大学の生命である。研究室設置のことは新制になるとき課せられた問題であったが、間に合せのままで今日にいたり、思うにまかせなかった。

今回の創立記念日に同窓各位がこぞって研究施設充実期成会の結成を要望されたことは、まことに感謝にたえない次第である。大遠諱記念事業として、寮の改築がなされたばかりであるが、次代を背負って立つ後進のために、温きご理解とご支援をしていただきたく懇願する次第である。(六月五日)

★編集室 去る十月二十四、二十五両日、花園大学で行なわれた「日本印度学仏教学会第十回学術大会」出席者二百名が、花大校舎の小さく可愛らしいのと、花園会館、花大寄宿舎白雲寮の立派さに仰天したという。その気持はよくわかる。○「近頃の学生気質は変りましたね」と或る人がいう。「どう変りましたか」とたずねる。その説明はこうだ。先ず「ただの仕事」は御免。仕事とは即ちアルバイト。アルバイトには賃

金がつきもの。ただの仕事は御免だ。見事に割り切った、いわゆる「幾何学的精神」である○なるほど、ただの仕事では、アルバイトにはならない。しかし、アルバイトでない「仕事」のあることを知らないところに「現代の問題」がある。

「作務」精神の喪失であり対人間倫理の崩壊である○そんな考えは、資本主義の走狗だというかも知れない。人をただで働かせるのは、相手を奴隷視することだというなら、「作務」精神なんか何処にも割りこむ余地はない筈○この問題はどう片付けたらよいのか。一課題である○「執着をはなれる」とは、「価値の転換」である。○「安心」とは、「これでよい」ということである。まずこれでよしということになれば、そこに不安はないのであろう○高尾の観光客溢れるばかりなり。これは例年のこと。都会生活者にとって、「自然」は魂の故郷なのだ。(K)

(十一月五日)

一九六〇年(昭和三五)

★六百一年への願い

花大学監 荻須純道

千載一遇の妙心寺開山無相大師の六百年大遠諱も無事に昨年春営まれ、末孫の者みな心を新にして、それぞれ明日への発足をしたのであるが、学園も新発足をしなければならぬときに遭遇している。日に日にすすむ世の進展に処して、教

学はいかにあるべきかという命題は、誰しも一応考えさせら

れることではあるが、さて具体的なことになるゝ容易ではない。

しかし実際問題としては、欧米に禅ブームがまきおこり、ことに臨済禅に期待をかけられているといわれる。昨秋某大学の教授が帰朝されたときの話に、スイスとかで禅画展のポスターがあり、そのポスターには糸国師筆の達磨像が印刷されたものであったという。日本人でさえ、そういう高い文化はなかなか理解出来ないのに、みな興味をもつとは不思議なくらいである。さる一月十八日に森暢教授が欧米への旅に立たれた。主として禅画を通じて日本文化の紹介につとめるといわれた。現在花大にデマチノというアメリカ青年が熱心に禅の講義を聴いている。身近にも欧米人に禅の要求のあることを知る。やはり人物がなければどうにもならない。翻ってまた古典に関する理解である。ことに禅籍は難しい。終戦後一般には漢文はすてられた。東洋文明の暗黒時代であるかのような感じさえもつたときがある。古い文化を捨て、なんの精神文化が残ろうか。われらはこれを次代に荷担する義務がある。しかし現実には高校の漢文は選択であり、大学入学生必ずしも漢文を履修していない。今にしてなんとか方策を講じなければ祖師の伝える文化は顧みられなくなるであらう。

開山大師六百年大遠諱の営まれた昨春、本学の創立記念日に同窓会総会を開催した。全国各地から御参集をいただき感

謝に堪えなかった。その節、遠諱記念事業として多年の懸案であった大学寮の改築は出来たが重ねてお願いしたいことは、研究施設の充実であることを訴えたところ、同窓総会はこれを諒としたので、開山忌正當の前日（十二月一日）花大にて花大施設充実後援会を開き、五千万円を以て、図書館（研究室）教室の改築をすることしその第一期計画として向こう三ヶ年間に、三千万円で図書館の改築をすることに決定した。願わくば、江湖諸大徳の熱烈なる御支援を賜わり度く懇願する次第である。

（六月五日）

一九六一年（昭和三十六）

★花大創立記念講演と映画

花園大学第十二回創立記念講演と映画の会が行なわれた。前京都学芸大学長、文学博士、山内得立氏「世界思想に於ける仏教の位置」（五月二十五日午前十時、大学講堂に於て）映画：「学長老師印度仏蹟巡拝紀行編」（同日午後一時大方丈）

朝日新聞論説委員、白石 凡氏「題未定」（五月二十七日午前十時、大学講堂に於て）
（六月五日）

一九六二年（昭和三七）

★花園大学学生募集

募集人員 本科五〇名、編入生若干名。

入試科目 国語甲、乙漢文を含む。社会、英語、面接。

希望表示 国語科では漢文を、社会科では日本史又は世界史

を修得しておくことが望ましい。

試験期日 三月三十日(水)、三十一日(木)

願書受付 二月一日より三月二十日迄、

詳細は本学教務課宛、入学案内を請求のこと。

(一部五〇円下共)

京都市右京区花園木辻北町一 花園大学

(二月五日)

★宗門に課せられた諸問題

宗務総長 宮裡頼秀

近頃の世相は、目まぐるしい程の変化と様相を呈しています。その社会の現実に対して、わが宗門は如何にその本来の機能を発揮しているであろうか。

思うに、わが宗門には他に見られぬ独自のものがあります。それがどのようなかを知ること、これまた大きな課題ではないでしょうか。それは宗門自体のもつ不安苦悩の解決であります。

わが宗門の現状を見まするに第一に、本派寺院住職の八割までが他に兼職をもっていて、寺院本来の使命達成に果たして万全を期しているかどうか反省させられます。第二に、将来の宗門を背負って立つべき学徒が、宗旨研参、禅道修行を怠りがちの傾向が見うけられます。勿論このことは、寺院

生活の現状から見ても、やむを得ない現象でもあります。しかし、このことは等閑視できないことです。何としても全学徒をして、禅道修行に心魂を打ち込ませねばなりません。宗門にとって一番大切なことが完遂できないということも、一つの大きな問題点であります。

第三に、宗門布教の不振と、布教師人材の減少傾向であります。教義の宣布、大衆教化といつても、立派な布教師の養成が焦眉の緊急事であることもまた考えさせられる問題であります。第四に、宗門の教育のことですが、現在の花園大学はどうであろうか。臨済禅研究の学府としては、日本で唯だ一つでありましょう。しかしその内容、設備などに至っては遺憾ながら甚だ貧困といわざるを得ません。こんなことで果たして所期の人材が得られるかどうか、ここにも問題点があります。

第五に、わが宗門には約六百ヶ寺の無住(青天井寺院をも含む)寺院があり、その殆んどが無教化、無信仰状態のままに放任されているのです。寺院を開基された先達者たちの護法と道念を喚起したならば、今日でも何とか復興の方途もあるのではなからうか。有害無益の寺院ならば廃統合も考えられよう。

第六に、寺族制度の問題であります。これに対しては宗内の一部から各色々の批判が寄せられています。勿論、宗旨本来の立場から論ずれば、寺族などは第二、第三の問題である

一九六三年（昭和三八）

★大学在学のまま僧堂に掛搭せよ

春 見 文 勝

本派寺院の大半は経済事情に恵まれていない。経済的貧困が、寺院生活に対する青年僧の魅力を減殺する最大原因であろう。

雲水修行の眼目は「無所得」にあるという。しかし「無所得」に甘んずる者が今日、幾人いるか。「一個半個を打出すれば以て足れり」という。しかし何か楽しい目的をも与うべきではなからうか。昔から「無所得」を口にしながらも、実のところ禅僧の名譽は、

- (1) 師家になること。
- (2) 学僧になること。
- (3) 大伽藍に住すること。

だとされてきた。現代青年は一般に、名譽よりも経済的潤沢さをもとめる。寺族の生活と教育に四苦八苦している師僧の現状を見ると、青年僧に寺院生活に入る勇氣がでて来ないのは当然だろう。長年月にわたって平抱強く雲水修行をしたからといって、必ずしも肉山寺院に住職できるとは限っていない。現状のままでは青年僧は減るばかり、本派の危機はますます逼迫してくる。創価学会の悪口をかりれば、「ペンペン草がお寺の屋根にいま生える」であらう。

ことは自明の理であります。宗門教団という立場から見ると、時は、現実の姿として無視出来ません。寺族の定義よりも、寺族の責任と使命を明確にして、寺門興隆のために、その責を果たさしめ寺庭婦人の資質向上とその自覚を促して、寺ぐるみの教化活動を実現して行くことを刻下の急務であります。近頃、全国的に、寺庭婦人研修会が盛大に行なわれていますが、もしその趣旨に反するような寺族があると致しますならば、それこそ宗門の使命を阻むものといっても過言ではないであります。

第七に、宗門に籍をおく禅者が、祖師の行履に省みて恥じざるものがあるかどうか。仏に仕え信心に生き、祖録をひもといて仏学に志し、古教照心、念々相統しているであります。宗門はつねに流動しています。新しい血液とともに成長し変化します。宗門が社会と取り組み、社会の中に宗門の光りを投げかけようとするには、以上の問題点の何れも放任してはおかねばかりであります。

要は宗門人全体の認識、理解協力のもとに、犠牲をいとわず責任を果たし合うならば、宗門に新らしき血がかよい、宗門の持つ独自の意義が、必ずや立派に生かされると思います。諸尊宿各位ならびに花園会員の皆様の絶大なる御支援助と御協力を希念してやみません。

(二月五日)

教団は青年僧が少しでも喜ぶ機構組織を作るべきだ。勞力に対する報酬さえあれば、決して努力を惜しむものではない。今こそ「無所得」の旗じるしを「有所得」に書きかえるときが来たようである。その方が青年僧には適切のように思う。そこで私は四ヶ条の希望事項を提案する。

(1) 一ヶ寺一人の青年僧を、万難を排して必ず作ること。自分の子でよし、弟子でよし。要は一人を必ず育てあげてもらいたい。娘に養子を迎えるとか、どこかで後住をもらえばよいとか、無ければ無いで仕方がないでは困る。弟子の教育に親切な和尚であれば、檀家にも必ずよく、信施も自ら湧いてくる。本山当局も、花園会の支援のもとに、弟子作りに懸命であつてほしい。

(2) 百ヶ寺位の特選寺院を設定すること。これを長年月間僧堂で修行した者への努力賞として与えたい。実力のないものが、よい寺に坐つて高座を占めることは宗門を衰退させる一原因である。現在でも五十ヶ寺位は特選に相当する寺院があろう。ここの住職を大乗的に公正に決定する選定審査機関を作る必要がある。

(3) 本山周辺に学僧の住職できる寺院を設けて大いに優遇してほしい。今や対外的にも対内的にも、講演に文書伝道に活躍するに耐えうる学僧の存在を重要視すべきではないか。

(4) 大学在学中でも、希望者には僧堂証明を与えたい。経済的に恵まれない寺院を自らの手で豊かにするには、僧職と

就職の兼行が最も手軽で確実である。勿論、大学卒業と同時に僧堂へ掛搭、長年月間を禪道に実参実充、僧職專業で貫くことが最も理想的であり当然ではあるが、寺院の諸事情からやむを得ず、卒業と就職を直結せざるを得ない若干の学生がある。そういう境遇にあるもので在学中の春夏の休暇を利用して僧堂へ掛搭を希望する者で、一年の夏、二年の夏、三年の春夏の五伏暇に僧堂生活をする。私の所へ、他派の学生ではあるが、毎年春は四十余日と、夏は二ヶ月余り僧堂へ来てゐる者がある。この夏は正式に掛搭したいといっている。

本山の安居会も、これを受けいれられる僧堂へ委託すれば効果も大きく、就職後に安居会を履修するよりも本人にとつて好都合ではなからうか。青年僧の少ない現在、只だ一人でも道を開いてやりたい。報恩の一念さえあれば、案ずるより生むがやすい。

花園大学に一年間のインターン式の僧堂生活を探り入れるとの説もきくが、本派学生は他大学にも多数居ることでもあり、希望者の勧誘が望ましい。

近く「禅文化研究所」が設立されることになっている。人材の教育が謳われてもいる。次代になう有為の青年僧の誕生を期待してやまぬ次第である。(西宮市海清寺専門道場師家)

(七月五日)

一九六四年（昭和三九）

★花大校舎改築いよいよ着手

花大校舎改築募財も、おかげさまで成果があり、既に教学団において工事着手の手續きを始めて居ります。御志納の未納の向きは何卒早急に御納入下さい。さらに特別志納につきましても事情ご賢察の上特にご尽力下さいますよう併せてご依頼申し上げます。

募財事務局

本派寺院各位

（一月五日）

★お知らせ

一、花大新校舎改築工事は八月中旬竣工の予定をもって、宝建設KKの手により着工致しました。

一、御志納が未だお済みにならない向きは何卒この際奮って御納入下さる様ご協力下さい。

一、特別志納については各教区ともそれぞれ宜敷くお願い致します。

この特別志納に対する事務費支給は、諸整理の都合上、只今のところ、どちらへもお送りせずに居ります。今夏頃から送金開始の予定です。悪しからず御諒承下さい。募財事務局

（二月五日）

★花園大学の福祉学科

花園大学「福祉学科」新設が一月二十八日付をもって文部省より許可せられ、拾八名（内一名は女子学生）の新入学生

を見たことは、図書館、校舎の改築と共に大学の将来の発展拡充を予約する一ポイントとして同慶の至りであります。花園大学経営に対する現在本派補助金は年額六百万円に達していますが、これは本派補助能力の限界点をしめすものでありまして、今後の発展は大学の独立採算制に立脚するより他にその方途を見出すことは困難であるよりむしろ不可能に近いものと判断されます。今回の「福祉学科」の新設はその趣旨にそわんとするものであります。

今や宗門人はいわゆる二足の草鞋をはかざるを得ない現実的環境のうちにおかれています。住職専従が許されず、何等かの副業に従事するとしても、他の一足の草鞋は出来るかぎり宗門人にふさわしい草鞋であることが自他ともに望ましいことは申すまでもありません。「仏教福祉」を身につけて、その有資格者となり、宗門人にふさわしき社会的活動に献身していただきたいとおもいます。花大仏教福祉科の卒業生には、社会科・宗教科の中学校一級教員、高等学校二級教員免許状、児童福祉司、社会福祉主事、身体障害者福祉司、社会教育主事などの資格の取得が保証されています。

寺庭の子女を収容訓育する宗門学園の設置要望は久しいものがあり、たびたびの寺庭婦人研修会の際にも強く要請されてきています。花大福祉学科の新設はその求めに応ずるものでもあります。宗門子女にその門戸を開放いたしました。将来寺庭婦人たると否にかかわらず、社会福祉を身につける

ことは今後の新らしき女性活動の分野を開拓するものとして高く評価されてよいとおもいます。

寺門経営を住職一人の手にゆだねていた時代はすでに過去のものとなりました。今や寺庭総ぐるみの時代であります。寺庭婦人のになうべき役割りの比重は倍加してきました。不断の研修への努力精進が強く要請されています。子弟の教育、檀信徒への渉外、婦人会の活動と、その接触分野は拡大されるばかりです。まことに苦勞さまでございます。それでもなおかつご活躍を願わなければなりません。

寺庭の興廢は寺庭婦人の双肩にかかっているといつても過言ではありません。ご精進を祈つてやまない次第であります。嶺南室管長さまは九十四歳のご高齢の御身をもって中近東より歐洲訪問の旅をおえ、去る四月二十二日夜七時羽田空港着、四月二十四日午後一時四十八分京都駅着無事ご帰山になりました。ご同慶法幸の至りであります。各位の理解とご支援を祈ります。(教学部長 林 文道) (五月五日)

★花大校舎改築募財についておねがい

花園大学校舎改築資金募財は各位の深きご理解とご協力により、順調にその第一年度をおわりましたこと誠に法幸の至りに存じます。

募財も第二年度に入りました。一派の総力を結集、その完遂を図りたいと思います。督促がましく恐縮でございますが実情と賢察の上、未納の向きは何卒早急にご納入下さいます

ようお願い申し上げます。

なお、「特別志納」は些か低調であります。総代、世話人、有志の方々をご督励の上一段のご配慮を賜われますよう重ねてお願い申し上げます。花大の改築工事も別掲写真の通り進捗、八月中旬竣工の予定であります。何卒ご協力下さい。

(募財事務局より)

(五月五日)

★花大校舎改築委員会開催

八月二十八日午前十時、花園大学図書館三階に於て花大校舎改築委員会開催、宗会議員伊達道一、花園会教区会長村山藤市、足立莊太郎、細井直義、花大寺監荻須純道、花高校長小沢和一の各氏、本所側より宮裡宗務総長、足立総務、林教学、田中財務、安田社会、中原花園会、秋田法務の各部長出席、宮裡総長より建築経過報告、九月十五日仮入舎式を行なう。竣工式は募財事情により延期(期日未定)の件等報告、完成近い校舎を參觀、散会した。(十月五日)

一九六五年(昭和四〇)

★花園大学校舎改築資金募財委員会

昭和三十九年十二月十五日午前十時宗務本所に於て花園大学校舎改築資金募財委員会開催、本所側より常任委員宮裡宗務総長、足立総務、林教学、田中財務、安田社会、中原花園会本部、秋田法務各部長、募財委員伊達道一、竜淵環洲、川口慶瑞(各宗議)、高橋勇育、源玄英、高林宗貴(各宗務所

長、村山藤市、足立莊太郎、細井直義（各教区会長）全員出席。議題は次の通り。

一、全教区花園会長会における花大募財更正予算案承認報告。

二、昭和四十年一月末日迄に募財完遂（会長会申し合わせ）の件報告。

三、花大校舍改築に関する諸支払いの現況報告。

四、竣工式の日取りについて。

附記。志納率六〇パーセント以下の成績不良教区には、明春一月中の納入状況をみて、当局と募財委員出張、完納を期せられたしとの活発な意見があった。（二月五日）

★施政方針演説

宗務総長 宮 裡 顯 秀

（前略）

さて、宗務全般にわたり、昨年来実施して来ました事については一々厳しく反省と批判を加え、より一層、成果実績の挙がりますように心がけたいと思うのであります。

第一、布教興学であります。布教についても各末寺、常時布教態勢の確立、開教寺院の増加促進、新人布教師の養成等は最も大切な事であり、近年一派でもこの方面への認識も高まり逐次上昇を辿っておりますが、尚一層この方面への努力をしなければならぬと思うのであります。しかし近年実施しております布教師研究会は、開設以来日なお浅いのであり

ますが、研究の成果、実績の見るべきもの甚だ大きく、その都度、立派に実を結んでおります事は、全く布教師各位の真摯な精進と努力の結果であると感謝いたしておる次第であります。

次に教学について、専門道場及び花園大学についてであります。特に専門道場は、わが宗門における宗旨の枢要を究める人づくりの最高機関でありまして、最も大切な事であり。最近寺院経済その他の事情から、禅堂修行に専念する雲衲の減少せる傾向を重要視いたしまして昨秋、師家会議を開催いたしました。各師家方と隔意なき意見の交換、懇談をかさねましたが、何を致しましても近年、学徒たる者が学問的、知識的に仏教への関心はありまして自ら禅堂に入つて、厳しい修行と禅的体験を身につけ寺院に入り、令法久住、大法護持のため一生を捧げようとする求道者の甚だ乏しきを嘆ぜられたのであります。これは学徒のみではなく宗門人らが、愛宗護法の信念と意欲の欠如にあると思うのであります。従つてこのことは宗門衰頹の大きな要因をなすと思ひますから、これが対策については宗門を挙げて打開の道を講じなければならぬと考えるのであります。

次に花園大学であります。昨年、仏教福祉科を増設いたしました。一部学制の改革を行なつて、入学生数の増加を図りました。ならびに内容の充実と外観の整備にも鋭意努力いたしました。が、何分乏しい予算のため、より以上の発展は困難であ

ります。しかしながら、教育方面から見た宗門の人づくりまた大切な事でありますので、学生数の増加と学校経営面への施策については、学科内容の研究充実、財源の確保等、切実に考えねばならぬと思うのであります。学校当局においてもこの点については苦慮いたしておりますが、四十一年度に実施するため、本年度中に学制の一部改革と、学生数の増加を図るため、また一方、宗門学徒のみでなく、一般社会からも入学し得るよう門戸を開いて、新たに文学部を設置したいと目下検討中であります。

次に多年の懸案でありました大学校舎改築の件であります。詳細にわたりましては、予算本会議の席上で縷々説明を申し上げますが、大学の外観整備の一環として、校舎改築事業が末派寺院住職を始め、花園会員諸氏の絶大なるご協力によりまして立派に竣工いたしました。図書館の新築と相俟って面目を一新いたしました事は、同慶の至りに堪えぬ所であります。なお今後も大学の外観整備、施設の充実としては、本館ならびに賓舎の新築等が課せられた問題であります。

(後略)

(四月五日)

★花大校舎落成に際して

花大学監 荻 須 純 道

去る四月十九日、花大校舎の落成式が挙行され、古川管長親下を始め、宗務当局、募財、建築各委員、京都仏教各宗大代表、花大教職員、学生一同集まり新校舎の大教室におい

て、厳肅なる式典が行なわれたことは感謝と感激で胸一杯でありました。

思えば花大校舎の改築は長年の懸案であったが、幸いに花園会の発起により、一派ご協力のもとに鉄筋三階コンクリート三百六十坪の近代建築が洛西の一角に聳え立ったことは、今昔の感に堪えないものがあります。全国一派檀信徒の方々から頂いた尊い信施によってできたものであることを思うとき、そのご期待にそうべく、尚一層の精進が、われわれ学徒に要請されることを痛感するものであります。

これ偏えに開山大師の恩徳の然らしむるところではありませんが、この事業完遂のための募財は容易なものではなく、宮裡内局、殊にその衝に当たられた前花園會本部長对本愛道師の後を承けた花園會本部長中原文雄師のご苦心は察するに余りあるものがあり、宮裡総長・伊達宗議會議長や花園会々長の村山藤市氏、足立莊太郎氏、細井直義氏等は募財とともに建築常任委員として、格別なるご配慮を賜わったこと、建築設計には学校建築に明るい町田実男氏を得たことや宝建設の磯谷信一社長が終始誠意を以て建築に当たっていただいたことなど感謝に堪えません。校舎落成とともに竜安寺住職松倉紹英師が一寄進で机・椅子・暗幕・ブラインド等の備品を新添して下さることになり、錦上さらに花を添え、有難く存じます。

宗門は今日、近代化ということが叫ばれています。花大も

また当然将来いかに生くべきかということは重要な命題であります。花大は伝統を守って本年五十六回の創立記念日を迎えたのですが、どうしてもここに学制改革の必要があります。これがため、まず現在の仏教學部を改めて文学部にすることであり、仏教学科を文学部の中に包含することであり一般社会にも開放して、禅を底辺とした教育を施すべきであると思います。

これがためには、さらに一段と施設の充実を図らなければなりません。昨年大雄院・東林院の敷地や妙心寺直轄地の一部を借入れ校地を拡張することとなり、本年三月整地をおえたが、この整地費の基本となる多額の寄附を山田学長老師から頂いたり、古川管長猥下から図書費として高額寄附を頂き、また第四教区花園会・乙津寺・如是院等の寄附金品に謝意を表します。今後ともご道愛のもと、よりよき明日の学園を築きたいと存じます。

(六月五日)

★花園大学新校舎落成式

四月十九日午前十一時、花園大学新校舎落成式が同校舎三階に於て行なわれた。(式次) 開会の辞、祈禱詠経(山田学長香語、心経)、理事長挨拶(宮裡宗務総長)、学長謝辞、感謝状贈呈、総裁猥下挨拶、祝辞、閉会の辞。

宝建設KK社長磯谷氏、建築設計士町田氏、竜安寺住職松倉紹英師、建築委員村山藤市、足立荘太郎、細井直義各氏に感謝状贈呈。嶺南室管長猥下、伊達道一宗議会議長、花園会

会長会(会長) 村山藤市氏祝辞があった。伊達議長の祝辞左の如し。

「本日茲に花園大学校舎の落成式に参列いたし、本派宗議會議員を代表して祝辞を申しのべることを欣快に存じます。

この立派な近代校舎が新築できたことは、ご開山無相大師のご遺徳と、九十五歳のご高令の管長猥下のお徳は申し上げるまでもございせんが、花園会役員諸氏の立案による内局のご努力は、只々敬服と感謝の他はございせん。さらに花園大学の旧来の弊風が取り除かれて、新鮮なる学風へと切りかえられた学長山田無文老大師のご苦勞は、表面に出ないだけに陰徳の光彩が、さんとして輝いていることを察知、頭の下がる思いが致すのであります。現われるまでには、蔭に人の知れぬ苦辛が多く含まれています。今日落慶の盛事を單なる喜びに終らしめたくない氣持が致すのであります。

時代は終戦後、激変して参りまして、物質偏重の流れとなり、幾度か中央政府要人たちより、人づくり、人間尊重、人間像と種々叫ばれて、その対策が研究されつつあります。世上は自我思想の発達に伴ない、その場のがれ、無責任と骨抜きの人間が浅ましく右往左往して、物のない者は金を求め、金のある者は権力を漁って狂奔いたしています。

省みて吾が宗門が、宗門人が、自らを犠牲にして世の、この無責任時代に幾人か反撥は正に傾倒しているでしょう。思い半ばに過ぎるものがあります。

一般社会も宗門も、年とともに筋金の入った人間が失なわれてきつつあります。せめて吾が宗門に筋金入りの教育があつていいとは、私の平素感ずるところであります。幸いに今日この立派なる校舎が竣工いたしました。この機に於て学生諸君は新しい校舎に新しい校風を、新しく打出して頂きたい。われわれ宗議會議員も最近、従来の弊風を一掃して己に議員自体の体質は改善されつつあります。行政を司どる内局も現宮裡内局に於て、ガラス張りの公正なる財政と、新時代に処する前向き態勢を作り出されています。

ここに於て、われらの後続部隊である諸君が、新しい校風のもとに学び筋金の入った人間的基盤の体得に一段のご努力を頂きますならば幸いと存ずる次第であります。この点、特にお願ひ致しまして、私の祝辞と致します。

昭和四十年四月十九日

妙心寺派宗議會議長 伊達道一

★花大募財と花園会の強化について

今次の内局交替にあたり、図らずも花園会本部長の要職をけがすことになりました。浅学無能もとりその任ではありませんが、一派諸大徳のご指導のもと、最善の努力を致したいと存じますので越格のご道愛を懇願申し上げます。

さて花園会の強化育成について不断のご尽力を頂いておりますことは、宗門の為まことに有り難く感謝の他ございません。特に今次の花大校舎改築資金の募財については、諸大徳

のご指導ご尽力により、会員の格別のご協力を得て好成績を収めましたことは、ただただ感激あるのみであります。

然しながら一面残念なことは募財に一部の未納のあることであります。校舎は竣工したものの、事後処理に全く困却苦慮致しております。花園会発足十周年記念事業たるこの事業が、滞りなく完遂できるか否かは、会の成長に係わる問題で、かりに会の消長によって宗門の将来を卜し得るとすれば、まことに重大な意味をふくむものと思われれます。今日、禅への関心が高まり特に本派の活動に注目が集まっていることを思うとき、大きな責任を感じないではおれません。最近の社会経済情勢からいろいろ困難な事情もありましようが、未納寺院におかれては一日も早くご完納の運びにお願い致したく願ひ申し上げます。

花園会当面の動向として最も憂慮されますことは、年々会員が漸減の一途をたどっていることであります。その主な理由は都市への流出、絶家、新興宗教への転向等であります。

都市へ転出することによって会員でなくなること、二、三男は無宗教のままで放置の状態にあること、さらには新興宗教への転向など、何れも会員としての自覚がいかに乏しいかを物語るものであります。禅への関心が高まっているというのに、会員は益々減少するというこの矛盾を私共はどう考えたらよいでしょうか。

信教の自由が追々常識化され、個人主義が益々浸透するに

つれて檀家制度の屋台骨がぐらついて来ました。葬祭だけでなく、信仰を中心とした結びつきであり、一寺院の信徒であると同時に、宗団の同信同行であることが要請されます。家族みんなが本派の信者であることが望まれます。そこに花園会設立の意義があり、会を育成するところに本末共に生きる道があるうと思ひます。

花園会の強化には、部、教区、本部を一貫する指導体制の確立と、会員の組織化が最も緊密な課題だと思ひれます。組織化は一寺院、或いは数カ寺又は部で結成することが考えられますがまず青年、婦人部の結成を急ぎ、部、教区の指導体制を一日も早く確立したいものであります。

(花園会本部長 土方紹篤)

(十一月五日)

一九六六年(昭和四一)

★宗門の近代化と花園大学

花大学監 荻須 純道

近時さかんに宗門の近代化ということが叫ばれています。これは宗門の内外を問わず、客観的にみてもっともなことでありますが、伝統的なものに生き、古規慣例にしたがう宗門としては、種々な問題があります。しかし歴史のながれにしたがって宗門が生きたためには、この宗門の近代化ということとは、考えざるを得ない重要な命題であります。

花大も時代の要請にこたえて昨年、難しい大学設置基準の難関をのり越えて文学部設置の申請をなし、幸に今春認可を得て本年度から新発足しました。

花大が宗門の後継者のみを養成するばかりでなく、広く一般社会人も学ぶことのできる体制にせよとは一部の輿論でありましたが、どうしてもそうしなければならぬ時代になったと思ひます。道俗一体となり、四衆総合の大乗仏教運動の基盤となる学園体制をとのえなければならぬと存じます。

花大文学部の学科組織は仏教学科(禅宗学専攻・仏教学専攻、史学科・国文学科・社会福祉学科の四学科であります。学科組織は変わつても、校風や訓育方針には変わりはなく、創立精神を堅持して禅を基底としたものであり、広く人文科学や社会科学との連繋のもとに禅学や仏教学が研究され、また禅や仏教思想を以て諸学が研鑽されることになりました。どうか温いご理解のもとに寺門のご子弟はもとより広く檀信徒へも入学をおすすめ下さるようお願い致します。

来る昭和四十三年は創立六十周年にあたります。花大の前身である臨済宗大学が設置されたのは明治四十四年のことで、その後、昭和九年には臨済学院専門学校となり、別に二ヶ年の学部が設置されていきました。しかし戦後学制改革がなされ、昭和二十四年より花園大学として発足しましたが、四十三年には記念すべき二十周年を迎えることになりました。

開山大師の大遠諱を契機として、寄宿舎、図書館、教室の

改築がなされ、なみなみならぬご道愛を賜わったのでありますが、学生の増加とともに、本館の改築が迫られています。どうか一つ、内容、外観名実ともに花大が近代化するよう一段とご支援を賜わりたく懇願する次第であります。

そしてまた一人でも多く微笑塔下の学園にご子弟をお送り下さって、明日の宗門建設のためにご尽力賜われることを重ねてお願いする次第であります。

(十一月五日)

★花園大学学生募集要項(42年度)

文学部▽仏教学科(仏教学・禅学) 40名▽社会福祉学科40名
△史学科(国史学・仏教史学) 40名△国文学科30名▽転入生・聴講生若干名。

試験科目△外国語(英語B)▽国語(国語甲・乙、古典Ⅰ・Ⅱ)▽社会(日本史、世界史、倫理社会、政治経済)Ⅱ国語、外国語は必須。社会科は一科目選択。

個人面接▽受験場(花園大学)

推薦入学▽成績優秀で学校長が適当と認めた者で、書類選考の上通知したのものについての面接を行なう。(面接日42年2月5日Ⅱ本学)。

入学試験期日▽第一次試験日3月3日(金) 3月4日(土)

第二次試験日4月7日(金) 4月8日(土)。

願書受付期間▽推薦入学1月10日(火) 1月29日(日)まで
▽第一次試験1月10日(火) 3月2日(木)まで▽第二次

試験3月5日(日) 4月6日(木)まで。

合格発表△推薦入学者2月7日(火) 頃▽第一次受験者3月7日(火)▽第二次受験者4月9日(日) 午後三時。

編入学▽試験科目(英語、論文、面接)

○入学案内願書の申込みは花園大学入試係宛(京都市右京区花園木辻北町一)に百円(切手代用可)を同封、申込むこと。
花園大学・電話京都〇七一一番。

(十一月五日)

一九六七年(昭和四二)

★花大本館の落成とお願い

花大監 荻 須 純 道

花大の本館が遂に落成しました。戦前からの懸案であった本館の増改築がここに実現し、面目を一新して竣工したことは同慶に堪えません。図書館・教室とたび重なる整備に皆様のご支援を得た後であり、かなり無理な事業で花大としては一大事業であります。あえて皆様のご支援を得て断行しなければ、学園の近代化は後退し、時機を失することになるし、また大学進学者の急増は施設の拡充を計らなければならぬという、やむにやまれぬ事由により、重ねて皆様のご協賛を得て、この事業の完遂をいたさねばならなくなりました。何卒温いご理解のもとに、ご支援の程をお願い致します。

昨秋、学校法人花園学園の評議員会は全会一致で本館増改

築を議決し、妙心寺派宗務当局は臨時宗議會を開き、五年間に二千万円助成を議決して頂きました。これを根幹としてこの事業達成のため本館増改築委員会が組織され、事業の発足をみたことは感謝に堪えません。一級建築設計士林謙次氏の設計により、宝建設工業株式会社（社長磯谷信一氏）の施工によるもので、九月末日竣工いたしました。鉄筋コンクリート四階建（延六五〇坪）で総工費一・二三五万円の予算をもつ近代建築で、東洋的な感覚が設計にもられ、堂々たる偉容を洛西に出現しました。坪数は旧館の約三倍で、四階の講堂には長連床をおき、数百名の学生が坐禅摂心のできる大道場となりました。しかし事業資金は巨額であり前記宗務本所の助成金のはかに、広く淨財を仰がねばならないのであります。

このため妙心寺派管長嶺南室現下を始め、山田学長老師、竜安寺住職松倉紹英師、金閣寺長老村上慈海師等の禅的人材育成に對する深いご理解のもとに、巨額の寄附申込の慈慮を得、また同窓、父兄、教職員有縁の皆様からご寄附を頂きつつあります。

一方私学振興会の借入金（一九五〇万円）や大蔵省から損金算入の法人寄附の許可を頂き、工事をすすめて来ましたが、建物ではきましたが事業は第一次で、これからであります。学生数少なく自己資金に乏しい本学としては、どうしても皆様の温いご支援を得なければ達成できません。ここに謹しんで懇願するものであります。

なお落成式は法皇忌の翌日である十一月十二日（日）に決定いたしました。この日は開山大師のご命日でもあり、本学にとつては意義のある日で、午後は同窓総会も開く予定であります。
（十一月五日）

★花園大学学生募集要項（43年度）

文学部 ▽仏教学科（仏教学・禅宗学）40名 ▽社会福祉

学科40名 ▽史学科（国史学・仏教史学）40名

▽国文学科30名 編入生・聴講生 若干名

試験科目 ▽外国語（英語B）▽外国語現代国語及び古典乙）

▽社会（倫理社会・日本史）Ⅱ外国語、国語は

必須。社会科は一科目選択。個人面接 ▽受験場

（花園大学）

推薦入学

▽成績優秀で出身学校長が推薦した者に対し、書類選考と面接によって可否を決定する。（面接日

43年1月14日Ⅱ花園大学）

願書受付期間

推薦

12月1日（金）～12月23日（土）

一次

1月10日（水）～2月4日（月）

二次

2月7日（水）～3月13日（水）

試験及び面接

筆記試験

面接試験

一次

2月5日（月）

2月6日（火）

二次

3月14日（木）

3月15日（金）

合格発表表

推薦	1月16日(火)	P・M 4
一次	2月7日(水)	P・M 3
二次	3月16日(土)	P・M 3

編入学 ▽試験科目(英語・論文) 及び面接。

○ 宗門学徒、花園会員子弟及び寺院住職紹介の入学希望者は是非とも推薦入学または第一次試験に出願されたい。

特に入寮希望者の場合。第二次試験合格者は殆んど入寮不可能です。

○ 入学案内、願書の申込は花園大学入試係宛

(十一月五日)

一九六八年(昭和四三)

★花園大学機構を改革

花園大学では多年の懸案であった事務関係機構の改革を検討中であったが、今回大幅な改革を行ない、新年度より発足することになった。

新機構によると、これまで学監独りで行なわれていた学校運営事務が学長の下に文学部長、総務部長、学生部長の三部長を置き、その合議により行なわれることになっている。改革にともなう人事及

び機構は次の通り。

新任―柳田聖山(部長) 木村静雄(部長) 大石守雄(部長)
水野泰嶺(課員) 前田明美(課員) 大崎(寮監) 東海(課員)
西尾(課員)

退任―学監職退任、荻須純道(教授) 前田(図書館課員)
高島(会計課員)

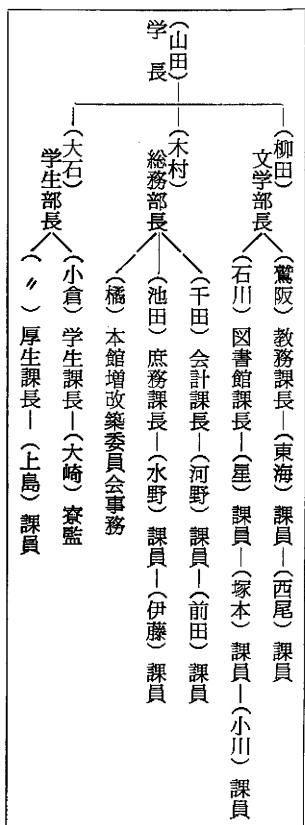
なお部長の任期は二年で本派宗制に抵触する学監職(理事)は当面総務部長が兼ねることになっている。

(六月五日)

★前進する花園大学

学監・総務部長 木村 静雄

花園大学は、久しく臨済禅唯一の学府として、ささやかながら世界的に貴重な存在としての誇りを持ってきました。本派が豊かな財政の中から、六十年に亘って本学を育てて



きた功績は高く評価されなければなりません。もともと、大学の前身臨済宗大学の設立は、寺院の中にあつた徒弟教育を、日本全体の教育水準に合わせるための努力でしたが、戦後新しい基準に沿うて新制大学となり、更に昨年仏教学部の基盤をひろげて文学部に改めました。これはもとより宗門大学の単なる世俗化であつてはなりません。社会福祉学科、国文学科、史学科の増設によつて、仏教学科との学問的交流をすすめ、おのおのの視野をひろげ、内容を豊かにして、教養のひろい宗門人と、仏教精神を身につけた社会人を送り出したいのです。

一派の大きな御支援の下に、花園大学は面目を一新しました。学寮、図書館、校舎に次いで、昨年は深い装いを凝らした四階の本館が竣工しました。妙心寺の大景観に隣して、東の花園高校と共に、近代的学園づくりが漸く一段落しました。北海道から九州まで、広く全国から集まつた若者たちが、ギッシリつまつた講義と取組み、また古美術、武道、茶道、生花、伝道、児童教化、写真など、色々のクラブ活動に熱中しつつ、多彩な学生々活を楽しんでいます。女子学生もだんだん増えて、学園に華かな彩りを沿えています。一般に女子学生ははじめに勉強する者が多いので、成績の上位は女子が占めるという傾向は、多くの大学で見られますが、本学でも彼女たちは次第に安定した位置を占めつつあります。

花大名物は、何と言っても、毎週二回の学長提唱と、前期

後期におこなわれる全学大振心です。本山の法堂や大方丈など大伽藍を埋める若人たちの坐禅ぶりは、死せる文化財もために生動する趣があります。昨年は久しぶりに学園に帰り、新しい本館講堂と大教室で行われましたが、やはり本山の環境に勝るものはないようです。仏教学科以外の学生も、本学をめざして集まつた以上、本学の特色を身につけ、実社会を生きぬくための信念を体得しようと意欲十分のようです。ただ学生数の増加に伴い、会場をひろげるか、回数を増すか、振心を更に効果的に行うために、種々の角度から検討中です。

今日学生運動は世界的な現象であり、日本の大学も多かれ少かれ学生たちの溢れるエネルギーの嵐を受けています。花園大学だけが無風状態であることはできません。むしろ、健全な学生運動を育て、誤つた政治的暴走より守ることは大学の使命であります。私たち教職員は、宗門と社会のこの問題についての正しい認識を喚起すると共に、全学一致の体制の下に、ある時はしんぼう強い話し合いによつて、ある時は確乎とした指導力によつて、花大の一貫する理想をまもるべく決意しています。

しかし、新しい文学部はスタートしたばかりで、まだまだ取組むべき課題は山積しています。このたび事務機構を改革し、学長の下に三部長（文学部長柳田聖山・学生部長大石守雄）をおき、各々の分担と協力によつて、大学の充実と発展をめざして最善を尽くすことになりました。一派寺院、花園会

各位の積極的な御支援を得て、着実に前進をつづけたいと感謝します。
(十月五日)

一九六九年（昭和四四）

★のびゆく花園学園 — 新校舎順次竣工 —

明治五年般若林の名で発足した宗門子弟の教育機関としての花園学園は時代の推移とともに種々変遷はあったが、昭和二十三年の学制改革によって、現在の花園大学・花園高等学校が生れた。以来、高等学校では宗門子弟対象の教育から、一般人へ門戸を開放し、普通課程、商業課程の併設により大きく飛躍し、校舎も逐次新校舎に生れかわった。

昭和三十三年、講堂兼体育館完成、三十七年本館鉄筋コンクリート四階建（普通教室9、特別教室6、図書室、教員室、事務室）完成、この程四十三年十一月には新館四階建鉄筋コンクリート建（普通教室14、特別教室2、視聴覚教室、生徒ホール）を完成して、十一月十四日竣工式を行なった。その間四十二年には画期的な自動車科を新設し、その設備は他校の追隨を許さないもので注目を浴びている。現在生徒在籍数は普通科六〇三、商業科五四七、自動車科五〇で計一、二〇〇名である。

一方、花園大学は、昭和三十八年十一月図書館と禅文化研究所鉄筋コンクリート四階建を、三十九年には校舎同三階建

を、四十三年には同四階建の本館を完成し近く学生会館が二、〇〇〇万円で新築になる運びであり、ここに全校舎が整うことになった。その間、三十九年二月に社会福祉学科が増設され、四十一年二月には文学部が認可されて本格的な造りの道場としていよいよその内容を充実しつつある。現在在籍数百七名である。

洛西花園の一郭、大本山妙心寺の畔、古き伝統と、新しき建学精神に燃える花園学園が、いまや近代的容貌をもって時代の期待に応えて大きくのびようとしている。（一月五日）

★執務の大要について

宗務総長 華山恵光

（前略）

教学部に関して

本派最高の学府、花園大学は従来仏教学科のみの単科大学でありましたが、昭和四十年より文学部が設置せられ、史学科、国文学科、福祉学科が増設された事は御承知の通りであります。大学の拡張は、その教授、助教授、講師の数に於て大きく増加された事でありますが、大学運営に年々経営困難を訴えつつも、無理に無理を重ねて参りましたが、職員給与が何とか改正されなければ教授人員の確保も困難となり、再三補助金の増額を訴えられて参りました。而し乍ら大学本館改築の大事業もあり補助金増額を押えて来しました。最近大学問題の困難なる諸々の条件を抱えて何とか此の要求に応じ

なければならぬ今日であります。学校当局の懇望を入れ、

乏しき財源の中から捻出して二百万円の補助金増額を計上致しました。宜しく御審議頂き度い所であります。また花園大学は学長の下に学監職を置き、大学の運営を致して参りましたが、大学の文学部設置による大拡張によって機構が大きく変化致しました。教授、助教授の数も大きく増加し特に学生数も四倍に増加致しました。大学問題の複雑な時、大学の運営を学監只一人で責任を持つ事は到底出来ない状態となりました。そのために学監職を廃して、文学部長、総務部長、学生部長の三部長を置き、学長を輔佐して大学の運営に当る事になりました。従来学監に相当するものを三人の部長に改めたいと存じます。花園大学につきまして更に付け加えて申し上げます。花園大学は従来仏教学科のみの単科大学であり、本派無試験検定制度は仏教学科を標準として定められた事は言う迄ありません。此の度新らしく増設されました史学、国文、福祉の各学科に於きましては卒業の曉、夫々専門の教師資格を取得出来ましたが、其の反面、仏教学科を卒業した者と比較する時、履修した学科単位に於て大きな違いがある事は又止むを得ない事であります。学校当局に於きまして、仏教学科以外の卒業生を本派無試験検定制度の趣旨に則り、仏教学科卒業生と同様に無試験検定の恩典に浴する事の出来る様に特別の措置を考えておるのであります。後刻学校当局の説明を求めて各位の御指導と御協力を賜わり度いと

存じます。(後略)

★花園大学総務部長に就任して

花園大学総務部長 佐野大義

十月一日付で花園大学総務部長に就任いたすことになり、全く思いもかけぬことでありましたが、母校の非常事態を目前にして敢えて火中の栗を拾うことになりました。大学経営について何の経験もありませんが、如何なる暴力にも(言論にも物理的にも)屈してはならぬ、個人の思想と良心の自由が最大に発揮される場に大学がならねばならぬと…その為の叩き台というのが私の基本的な姿勢であります。

花園大学は現在と将来の運命をかける非常事態であると率直に申し上げねばなりません。

学生運動の激化は花園大学のための傾向でなく、世界的なそして日本の全大学の傾向であります。激動する世界、日米安保をかけての左右の激突、世代による社会価値観の変革、特に教育界にある思想的混乱、凡てのステューデント・パワーの結集をという背景から生起する諸問題を社会と学問の接点ということで大学がこれを真剣に受け止めて教授も学生も共に苦悩している姿が、花園大学の現状でもあります。

花園大学では、全学生の組織であります学友会中央執行委員会からの問題提起によって去る九月十九日から教授会と大衆団交という形で討論が続けられその為に正規の授業がストップしております。

柳田文学部長を頂点とする教授会は大学の内外の諸問題について、徹底的に話しあう、論理の尽きるまで話しあい、解決点に達するまで話しあうという、基本路線で進んでおります。むしろ大衆団交の場を学問の場と生かして把え、大学に附随する一切の問題を根底にまで掘り下げ、学問とは何か！ 禅とは何か！ と火の出るような討論も交わされ団交は教授会にとって真剣であります。

現状は進歩的學生を支える一般學生の盛上りは低調で學生一人一人が自分の問題として把えることには程遠くこの点一番心配されます。然し大学側の態度はどんなに困難でも迂遠であっても貴かねばならぬ願ひであります。

総務部長はこの教授会を中心にした大学とこの花園大学を經營する理事会とを結ぶパイプの役になると思うのであります。私は本派の各位が母校を愛され憂慮されて大学に寄せられる激励と叱正を有難く存じております。

形骸を残して何の建学の精神ぞ、という精神主義のみでは大学の經營は成立しません。靈(建学精神)肉(大学經營)の一致こそ新しい花園大学の創造があると思うのであります。

花大は文学部として四つの学科を開きかつての宗門子弟養成のみと云う門ではなく一般大学として門を開きました。そして一般の子女が全學生六百人の半分を占めておる現状は無視することはできません。そしてここから花大の問題が生起します。

大学經營の面から見て。

- 一、大学經營の母体である理事会の強化
 - 二、文学部設置と学科増設に伴う所要經費の財源
 - 三、設備施設の整備に伴う教職員給与の是正
- とどうしても改革せねばならぬ時点に達しております。

大学經營の要はただ一つ良い教育をすること、良い教育はよい教師による、よい教師にはよい待遇をせねばならぬと：花園大学が經濟的貧困を理由に教職員を遇することが薄ければ結局よい教育は成立しないという自明の理に達します。私は大学と理事会(妙心寺派)とのパイプ役になるというのはここに意味があると思うのであります。

学園が静かに考え、学び、語り合い、激動する現代社会に生きぬく知性と精神を身につける場になるために、この身体と心とを尽くしたいと念じております。本派の各位におかれましては大学問題の本質を冷静に御批判頂き、高着眼からの御叱正を続々とおよせ下さるようお願いしてやみません。流動的な現時点、思いのままご挨拶を申上げました。妄言をお許し下さい。(十一月五日)

★花園大学授業開演

去る九月十九日より花園大学では大学立法問題から学制問題の旧体制改革問題に至るまでの議題で學生と教授会の間に「大衆団交」が行なわれており、教授会側は論理が尽きるまで話し合いを続け、學生の声を聞き共に考える姿勢でもって

臨み、授業も無期限閉鎖をしている。

★花園大学総務部長交替

花園大学では十月一日付、木村静雄総務部長が辞任し、新任総務部長として佐野大義京都達磨寺住職が就任した。折しも学園問題が熾烈化している最中であり、この交替は注目されたが、既に以前から予定されていたことでもあったのでこの交替になったようである。

なお、木村静雄師は禅文化研究所事務局長で大学の総務部長を兼任していたもので、早くから専任総務部長が求められていた。

(十一月五日)

★花大ストライキ

9・29。「宵敗妙心寺教団、偽禅組合解体」粉砕。大学治安立法反対」と書いたビラが夜中のうちに本山の南門やその他の建物、宗務本所のガラス窓に張り散らされた。花大では去る十九日から学生と教授会との大衆団交が行なわれ、二十五日までに教授会は九つの確約書を学生側に与えている。

「教授会は現代の歴史的課題に対決し全学友と共同して、大学立法と闘う為に、先づ相互の信頼を回復することを前提とし、従来教授会制度の保持していた一切の学生管理者としての権力を基本的に解消することをはかり、学生提起の十項目について更に具体的に討議し決定してゆくことを確約する」

(9月19日)

「1、教授会は学生に対して今後管理者としての一切の処

分を行わない。2、修学規定第21条を削除する。さらにこの条項と関係する他の規定を含め、今後問題の生じた場合は、あらためて全学生と共に討議し決定する。3、(省略)」

(9月19日)

「従来、学生管理者の立場から規定され、施行されて来た学生心得すべてを撤廃する。学生生活上、必要な問題に關しては、あらためて話し合う。」

(9月20日)

「学生心得を撤廃するとともに、過去に於ける学生管理者として一方的に為された行為、又表現自由の妨害等の学生心得を背景とした、犯罪的な行為と共に主体性の欠如を、ここに自己批判するものである。」

(9月20日)

これらはみな、花園大学教授会、文学部長柳田聖山、総務部長木村静雄、学生部長大石守雄の名前でなされている。

このほか、大学の会計の公開、それについて会計帳簿は一般者には理解できぬ点が多いので、法人監事と公認会計士の証明を用意しなかったのは当局の怠慢で反省する、早急に理事会の承認を得て、いつでも団交席上全学生に公開するよう努力する。

白雲寮則と制度のすべてを撤廃する、新しい寮則は、全学的立場で制定する。

図書館の管理運営および図書書の選定購入について、一切の権限を委任されていた図書館委員会を解散する。図書館の管理運営については、今後全学的な立場で討議し、決定し文部

省からの介入には学生と共に闘うことを確約する、などの確約をしている。

教授会権力打倒ノ 学生心得撤廃ノ 経理全面公開ノ 白雲寮を自治寮とせよノ 妙心寺教団の大学介入粉砕ノ 大学治立法粉砕ノ 単位認定制度撤廃ノ 七〇年安保粉砕ノ という中央執行委員会の闘争スローガンであるが、今度のピラは妙心寺教団への挑戦をいよいよ始めるということか。

(十一月五日)

★花園大学紛争をめぐる当局内外の「声」

花園大学の学園紛争は去る九月十七日端を発してより五十日余を経過した今もなお解決のめどがついていない。「友好的団交」と大学当局が銘うってきたように、他の大学に見られるような外面的紛争は少ないが、禅の最高学府としての誇りと独自性を内に秘めて、その鋒先は峻烈を極めていっているといつてよい。しかもその方式は、いわゆる七〇年安保を契機とする一連の大きな潮流に関連する一般の学生運動と多分に相似性を持ち、成り行きは予測を許さないかの如くである。

遙か彼方の理頭の投影上に議論がなされている、という批判もされるが、紛争は現実には不気味な台風として宗門の上に覆いかぶさっているように見える。ここに、この台風の目と周辺の声を集録して事象の把握の参考に供したいと思う。

編集室

宗門への矢ぶみ

— 宗門大学の革新 —

柳田聖山

一

何千メートルという坑道で働く人は、カナリヤその他の小鳥を伴って地底に下るといふ。それは単なるマイペットでも、可愛い鳴声を楽しむためでもない。抵抗力の弱い小鳥たちは、坑道にこもる毒ガスに対してまずはげしく鳴きさわぐのが常で、労働者は小鳥たちの警告によって、身の安全を得るのである。

今日の学生運動について、正しい認識を持たぬ人は小鳥たちの警告に気づかぬ地底の労働者にひとしい。宗門の大学や、女子大学における学生運動を罪惡視したり、あるべからざるもののように考えるのは、現代の大学の病源を直視しようとしぬ無知から来ている。

ブッダは、人間の現実生活を苦のかたまりとし、そのよって来たる原因をさぐり、これを除く道を教えた。苦・集・滅・道の四つの真理の認識は仏教の出発点である。宗門が現代の苦悩に直面する接点は、宗門大学においてこそある。宗門大学の危機は、謂うところの学生運動の激化によって、その経営がゆさぶられるからではなくて、現代の宗門そのものの危機が、学生たちによつてはげしく警告されているためだ。そのことに気づかないで、鳴きさけぶカナリヤの声を聞くまいとするなら、宗門はもはやブッダの説かれた現実の苦とそ

の原因の除去という、根本精神を自から否定することになる。

二

花園大学は、今のところ仏教學、社会福祉学、史学、国文学の四学科をもっているが、仏教學を単なる布教の道具とし、社会福祉を寺院経営学と勘違いし、史学や国文学を一般在家の学生を集めるための方便と考えるなら、それは宗門そのものの自殺を意味する。単なる宗門の後継者をつくるための機関なら、とくに大学を設けなくても、充分にその機能を果しうるはずである。ましてや史学や国文学の犠牲によって、仏教學科を支えようとするなら、それはすでに仏教の精神に反している。さいわいに花園大学の拡張は、単科文学部にとどまったが、もしも他の宗門大学のように、経済学部や法学部が同じような構想で増設されるなら、その犯罪性はきわめて大きい。現代の学生運動は学内における諸矛盾の改革より、社会の体制そのものの革命に向っている。宗門の大学が犯した過ちの原因は、じつは現代社会の政治的、経済的な体制そのものから来ているところが大い。エコノミック・アニマルの名で、国際的な蔑視をうけつつある日本経済の異常肥大は、もちろん教育・文化・思想の諸方面に、すでに多くの悪影響を及ぼしている。言うところの死の商人はまさしくその最たるものであり、マンモス大学、情報文化、イデオロギーの硬直化は後者の一例である。宗門もまたその害毒を避け得ない。宗門の大学ゆえに学生運動が起らぬとしたら、それはすでに

現代の大学ではない。

法を売ってはならない。仏法商人や、禪の誇大宣伝は、もつともいやしむべきである。宣伝するに足るすぐれた法が生きているなら別であるが、一つの体制と化した宗門に、果して生きた法が存続しうるであろうか。「宗教法人法」は、あきらかに宗教を俗化せしめる最大の病源であった。

三

禪は、もともと反体制の仏教であった。ブッダの宗教そのものが、すでに当時の体制と化していたバラモン教に対する批判として出発したのだが、中国的な体制の中にとり入れられていた仏教に対する批判として生れたのが禪宗である。ダルマも六祖も臨済も、ともにはげしい体制の反逆児であった。教外別伝とは硬直化したイデオロギーの外に出ることを意味する。本来無一物とは、教条主義化した伝統仏教への挑戦であった。

山中の人は山の全容を見ることができない。一定の宗旨の枠内だけでものを考えていると、いつの間にかすべてがみな同じように見えてくる。せっかく、社会に向って大学の門戸を開き乍ら、門外の人を門内に入れるだけで、門内の人が門外に出ぬなら、その道は片側通行であり、すでに門とも言えぬこととなる。門とは、もともと出入の場であり、入るばかりの門はありえない。宗門はややもすると一方向にのみ固定しがちである。布教と言っても、一定の教義や固有の考えを、

判りやすく教えるだけなら、それは水で薄められた牛乳のように味気ない。新鮮な原乳を出す牛は、大地に生える青草を沢山にむさばり喰う。布教は片側通行に終ってはならず、教えるものと教えられるものは、さいごまで区別さるべきでない。

四

かつて、江戸時代のはじめに、仏教者によって開拓された朱子学や陽明学が、仏教から離れて独立すると口をそろえてもとの仏教を批判し攻撃したことがある。すべてが仏教者によって指導されていた室町文化と異って、江戸の文化は仏教を超えることによって発展した。辻善之助氏の「日本仏教史」第十巻は、そうした儒者や国学者たちの痛烈な仏教批判の資料を集めている。

宗門大学は既成の宗門に対する批判の場である。宗門大学の学生運動を以て、単なる反抗期の若人のそれと見あやまつてはならぬ。宗門大学そのものが、今やまさしく反抗期にあるのである。今日ほど、学生たちが真剣に生きた哲学や宗教を求めることは、曾てなかったと言つてよい。あまりにも政治的であり闘争的な活動の一面のみに眼をうばわれてはならない。学問は、もともと批判なしに成り立たないし、批判はどこまでも実践に裏づけられねばならぬ。そうした実践を、個人の決意として受けとめるとき、人は必ず宗教的となる。もっとも宗教的実践的であるべき宗門大学の学問が、具体的

な実践を欠いて、一般大学の味気なさに転落していることを宗門大学の学生運動は、宗門に向つて警告しそれを自から奪回しようとしているのである。

これからの大学は若人のものである。宗門もまた同じだ。かつて、飛鳥・天平の昔より、大陸に仏教を求めた留学僧は、すべて当時の学生の代表であつた。最澄・空海も、そして鎌倉仏教の祖師たちも、それぞれ真理への情熱にもえて海を渡つた。風波大難の地を超えて夙に宋域に入つたのは、いったい誰であつたのか。明治の志士が、西洋に新しい知識を求めたのも、やはり若い情熱の力による。

新しい日本の未来は、学生たちのものだ。もはや外国のどこに求めようもない真実を、かれらは自己自身の古い秩序の破壊と、新しい創造にかけているのである。

冬来りなば、やがて春は近い。

春は、きびしい冬の後にこそ来るのである。

(花園大学文学部長)

(十二月五日)

花園大学紛争と妙心寺派教団体制の「正常化」

いかなるものを見方であっても、再考するところができないほど、神聖なものではない。

鎌田 禅 商

「花園大学紛争」は一体どうなるのでしょうか、という質問を地方でよくうける。さきことは誰にもわかりませんよ、

と、わたしはいう。過去の経過報告をするのは、わたしの任ではない。現在のわたしは、旧花大教職員、旧宗務本所員、現花大生父兄、妙心寺派末寺の一住職の立場でものをいおうとしている。冷い言いぶんかもしれないが一応、第三者的自由な立場にいる。それを踏み台として「批判」させてもらう。批判とはご承知のとおり「是なるもの」を「是」とし、「非なるもの」を、「非」と判断することである。大学当局の問題処理態度（教授会）にも腑に落ちない点が多々ある。だからといって、それだけを今ここで批判しようとする立場をわたしはとりたくない。なぜなら、花園大学は宗門立大学で、設立者は妙心寺派教団ということになれば、大学問題との必然的関連性から見て、妙心寺派教団そのものを「批判」圈外に疎開せねばならぬ根拠はどこにもない。この点を棚上げして大学紛争正常化のみを標的とすること自体、過去の立場に立って現在を批判する体制的独断の誤謬を犯していることになるのではないかとおもう。理事者側はこのことを計算に入れているのかどうか。

花園大学柳田聖山文学部長の「中外日報」紙上発表の「大いなる試練の中で」「宗門大学の新しい創造をめざして」「宗門大学における大学の自治と学問の自由」の三論文、それに、十月十三日付、「花園大学当局」名の「父兄各位」への、花大紛争経過報告書翰（これは父兄以外の一般末寺住職には配布されていないと想像される）を熟読すれば、その所

論内容と趣旨方向は大体わかる。さすがは新進気鋭の論客だけあって達者な筆力だと感服するが、われわれが知りたいのは一般「宗門大学」論ではなく、特殊「花園大学」論である。文章表現の制約と順序からいって、一般宗門大学論から筆を起さねば始まらないことはわかる。でもそれは、より簡潔にして、肝心の「花園大学論」を、それも抽象的論理展開はほどほどに、そのものずばり具体的にやつてもらいたいというのが、わたしの率直な希望である。でないと所論の具体的結論がボケてしまうし、つい「理論は整然としていて、われわれは対応できないが現実問題として足が地についていないように思う」などという敬遠的取り扱いをうけることにもなる。それでは効果がない。現実的問題の現実的処理に役立つ言論と論理こそが要望されている現時点だからである。

問題なのは、九月十九日「花園大学教授会」の名において学生側と取りかわされた「確約書」の内容である。九月二十日に追加された「確約書」もふくめてである。父兄に配布された「団交経過報告」を見れば詳細がわかる。いまこの文章を書いていても、問題点の多様性に振りまわされて、どれから手をつけていいかに迷惑させられるほどであるが、なんといっても重要点は「確約書」中の次の条件だろう。

「一、教授会は、学生に対して、今後管理者としての一切の処分を行なわない。」

「二、修学規定第二十一条を削除する。さらにこの条項と

關係する他の規定を含めて、今後問題の生じた場合は、更めて全学生と共に討議し決定する。」

まだ、ほかに「学生心得の撤廃」「学生心得を撤廃するとともに、過去に於ける学生管理者として、一方的に為された行為、又表現自由の妨害等の、学生心得を背景とした、犯罪的な行為と共に、主体性の欠如をここに自己批判するものである」といった具合である。用語法は頗る激越かつ新鮮である。「犯罪的行為」などといわれると、こっちはすぐに「手錠」など連想してしまう。具体的にどういことが「犯罪的行為」なのか少しも解説はない。これも、「花園大学教授会」の「自己批判」である。

「教授会」と「学長」との権利・義務關係は一体どういうことになっているのだろうか。一般法令や宗制でそれがどうなっているのか素人のわたしは知らない。けれども、これはど重大な事項を「花園大学教授会」の名において学生側と確約したその事実に対して「学長」は、どのような見解をもっておられるのか。皆さんがそれを知りたがっている。同時に本山当局、宗務総長、教務部長はどうこれをうけとめているのか。なんの意思表示をも公表しないのはどういうことなのか。末寺住職、花園会員の混迷の行方、その宗政的帰結をどう判断されるのか。沈黙は肯定を意味する。所属の公人の義務に忠誠であってほしい。政治生命、いな宗教的生命を賭けて勇氣をもって、うけとめてほしい。「私は、学生が持っている

不満を抑しつづけてはならないと思う。大学としては、学生が初期に提起した問題を解決しなければ、犠牲を払った意味がない」という池田弥三郎慶大教授（十月二十二日、朝日新聞、夕刊「過激ゲリラと学生運動の行方」座談会）の発言に現代教育者の勇氣ある態度を見る。

「花園大学当局」からの「父兄各位」宛書翰の全文をここに掲げることは紙面制約上さしひかえる。それと「ふたたび全学生諸君へ」というそれも再録をはぶく。なかで目立つ言葉拾ってみる。「新しい大学の創造をめざして」「花大百年の旧習と積弊を除去して」「明るい学園の創造」「新しい制度の誕生」「学問研究の場としての大学の創造」「開放大学」「新しい秩序の創造」というような抽象語が続出する。その具体的解説はどこにも見あたらない。

わたしは花大の柳田聖山文学部長に面談を申し入れてことわられた。

「御芳書有難く拝見いたしました。大学問題につき御批判御憂慮、御懸念のかずかず甘んじて銘記いたします。目下国交継続中にて拝眉の機なきことは失礼且つ残念至極でございますが、御指摘の点につきましてはいずれ、中外、その他公式の紙上の拙論でお答え申し上げる所存でございます。とり急ぎ御返事まで。くれぐれ御法愛、御鞭撻のほど」（十月十六日夜）

これではこっちも「残念至極」あきらめるより手はない。

「いずれ、中外、その他の公式の紙上」でといわれてはそうするより仕方ない。愚痴をこぼすのは、わたしのサガにあわない。斉藤別当実盛をきめこむ破目に追いこまれてしまった。

「花園大学理事会は花園大学全学生と左記の要領で話し合いをすることを確約する。」

記

時、昭和四十四年十月二十日以前

所、花園大学内

テーマ、1、花園大学は妙心寺本山にとってどのような位置をもつか。

2、右のテーマから敷衍する一切の問題について。

3、花園大学に関する諸問題について。以上 昭和四十四年九月十九日 理事長 江西寛堂」

そのテンマツは「九月十八日」付中外日報「教界雜記」臨済ランに報道されている（それが事実なら）とおりである。

「応接室に花大闘争委らの学生約二十人がヘルメット姿でおしかけ、研究会を学生に知らせずに開いたのはどういうことなのか、と激しくつめよった。これに対して本山側理事は、ヘルメットを脱げ」と応酬。（中略）退場しようとする江西理事長らを学生が阻止するという一幕もあった」と。

花大闘争委員長、仏教科三回生、村山久くんは、十月二十日朝、京都府警警備部員の手によって京都市伏見区桃山町弾正島の下宿で逮捕された。（九月二十二日の京大時計塔占拠

に関連、凶器準備集合罪、建造物損壊、不退去、盗みの疑い）。こんな事実もあったことを付記しておきたい。外人部隊として京大時計塔上から火炎ビンを投げたのか。

さて妙心寺派教団体制である。まず「体制」という言葉の意味だが、英語ではエスタブリッシュメントという。

（Establishment）。「確立されたもの」ということである。

「すでに確立された組織の中では、どうあがいてみても、自分の自由は大幅に制限される」（竹村健一著「常識をぶち破れ」毎日新聞社刊、九十五ページ）。寺班五等地の田舎寺の俸はどれほど有能でも寺班五等地の田舎寺の和尚、寺班別格地の俸はどんなに無能でもそのあととり。寺附法類と身附法類と寺の責任役員が連署しさえすれば、そして本山への滞納金があれば「任職辞令」が下附されて一生安泰である。そこには「二十一世紀にやってくる」と予想されるメリトクラシー（実力主義）の一かけらもない。収入の多い寺院に住職したものが勝ち。羨望の的となる。羽振りをきかす。若者たちが反撥する。当然ではないのか。そういう体制にメスを入れようとはしない。それでいて「人材がない」という。あいかわらずのアリストクラシー（貴族主義）体制の仕組みのなかで、ダイヤの編成に苦心している。東海道線で乗客がさばけなければ「新幹線軌道」をつくれればよい。ちかごろ流行の言葉というなら、これが「水平的思考の世界」である。デボノ理論ではこんなふうにいる。

「古い枠組みから新しいアイデアを探し求めるのは時間の浪費である。新しい方法と古い方法を比較するのも意味のないことだ。誰もが自由に、疑ってみる権利があるし、また一度はそうする義務がある。いかなるものの見方であっても再考することができないほど、神聖なものではない。どんなことをやるにしても、かならず進歩はあるはずだ。車輪を見て、その性能を再考することだってできるのである」(同書一二六ページ)。

再考停止の怠慢は問責さるべきである。

「水平的思考とは、いうなれば、ぬかるみの中にはいつて行き、本来の道をさがし出すことなのである。各段階が、どこでも正しくあるべきだという考え方は、おそらく、新しいアイデアを生み出す最大の障害となるだろう」(同書一三五頁)。

妙心寺派教団体制の「正常化」にこそ新しき通路を開らくべきであろう。

「大多数の人間は前を向いているつもりだが、バックミラーを見ている(つまり、見えるものは過ぎ去った過去だけ)」「(マクルーハンの言葉)とは、現時点に立つわれわれへの頂門の一針だとおもう。」

(十二月五日)

宗務総長から

本派公職者への書簡

謹啓上 秋も漸く深まり山色鮮かな候となりました。

本派公職者諸老宿倍々御健勝職務に御精励四衆接化に御活躍の御趣法幸至極に存じ上げます。

さて、既に中外紙上等で御承知のことと存じますが、花大非正常化の件については一方ならぬ御心痛を煩わし、誠に恐縮に存じおる次第でございます。

この件につきましてはその因つて来たるところ極めて広く、且つ深いものがあります。御承知のように学園紛争は世界的な流れの中で、政治問題をきっかけにあらゆる体制の改革をねらう一面と学園内に包蔵する諸の矛盾を取り除こうという一面とがからみ合っているまことに複雑なものであります。花大の場合も例外ではありませんが、特に宗門大学であり、同時に新制の文学部単科大学であるという事情と活動家の中にかんがりの仏教科学生が加わっていることがその特殊性を示し、動揺のきざしは数年前からあったのであります。従つて、大学当局も宗門大学であるという立場を堅持して学生と教職員との間の不信感を除き、どこまでも「話しあい」の場で解決しようという意図のもとに事を運んで来しました。

本所当局も、新制大学への切りかえて学校法人となり、かつ文学部を設置してよりは、昔のように一派直管というわけにゆかず、施設経営面では努力援助するが、学内の管理運営面では大学当局に任せるといふ態度をとつて来ておるのであります。その為、大学当局の「話しあい」解決の方法を認め、事態の推移を見守つておりました。勿論設置者として建学の

精神はどこまでも堅持すべきことを強く申し入れてあります。

下記のように今迄の経過では「これで花大は一体どうなるのか」という御心配はまことにご尤かと存じますが、花大当局はこれを一応の地ならしとして、今後建設面への努力を重ねてゆくと言明しております。十月十六日教学調査会の皆様のご上山を願ひ懇談を頂いたのでありますが本所当局としては誠にその推移を見守り、一方大学経営面から考慮してその処理を考えてゆきたいと存じております。

勿論、一日も早く授業再開をと度重ねて申し入れておるのではありませんが、周囲の情勢もからんで容易にその時機をつかみ得ず今日に到っているわけであります。各方面から色々の声を承りますが、本所当局としてはできるだけ被害を最少限に止めるべく配慮致しておる次第でございますが、最近に至って必らずしも樂觀は許されぬ事態となり全く苦慮致しております。

今少し早く事情をご報告申し上げたいと存じながら、本所としては最も多忙な九、十月であり、事態の變転に追われつい延引致しましたことまことに申し訳なく、深くお詫び申し上げます。

如上事情のあらましを御報告申し上げて御諒察をお願い申し上げます。と共今後とも何卒温い御助言をたまわりたく、且つ管内御寺院へも御伝達の労をおとり下さるよう懇願申し上げます。

尚、今日までの経過の要点を付記して御参考に供します。

昭和四十四年十一月一日

宗務総長 江西 寛 堂

本派公職者各位殿

付 記

九月十六日 理事と教職員との学園問題研究会は一部学生の

乱入により流会

十九日 本日より十月七日まで断続的に教授会と学生と

の大家団交

三十日 校舎(教室)封鎖(出入通行可能)

十月 八日 本日より団交中断

十二日 理事と教職員との研究会

十八日 学生大会(出席数に達せず、協議会に切替)

爾来団交再開への折衝(この間不測の事件あり、再

開困難となる)

二十日 理事会(宗務当局)と学生との話しあい、決裂

二十一日 理事と教職員との研究会

二十七日 同右

二十八日 本館封鎖さる

二十九日 封鎖解除よびかけの教授会声明発表

爾来解除説得中

教授会と学生との大家団交では、学生心得撤廃。経理公開に努力する。白雲寮々則を廃し、新寮則制定することを決定。

図書館委員会を解散し、暫定的図書館委員会成立。教授会公開（一部を除き）。

学長、部長（総務を除く）選出規程を全学討議で改正する等を確約しております。

以上の経過で学生側提起の問題の一部を残し、団交中断、封鎖の事態が発生、複雑な段階に入りました。

（十二月五日）

花園大学教授会

「声 明」

十月二十八日午後、花園大学本館は「花大全共斗」（準）の学生諸君によって、突然、占拠・封鎖された。事務室で執務中の職員および会議室で研究会開催中の教職員は、全員実力によって排除され、大学の機能は完全に麻痺した。教授会は現在進行中の学友会中央執行委員会提起の大衆団交の基本精神を踏みにじるものとして、この不法な占拠・封鎖に強く抗議し、「全共斗」（準）の学生諸君がただちにバリケードを撤去し大学を平常の状態に回復することを要求する。

いうまでもなく、われわれ花園大学教職員と全学友との友好的団交はすでに四十日を越し、連日の討議によって多くの合意をみるにいたり、相互の信頼と連帯のもとに、本学積年の旧習を破り、新しい大学の創造ともろの学内機構、制度の改革がようやく具体化されようとしていたのである。今回の占拠・封鎖はこのような団交の成果を無視し、相互の

話し合いを一方的に拒否したものであるが、「全共斗」の学生諸君は、これについて、なんらの論理的根拠をも公式には提示していない。ただ、「花大全共斗再建準備委員会」および「花園大学全学共斗会議書記局」なる署名で配布された二種類のビラによれば、その理由とするところは次のとおりである。

一、大学当局が四十五年度入学案内（「花園大学」というパンフ）を団交中であるにもかかわらず発送したこと。
二、ある奨学生にたいして「成績がよくないから」といって奨学金打ちきり勧告』（原文のママ）をおこなったということ。

三、ある学生について『外部に、本人に無断で彼の成績を報告し、「危険人物」というそえ書きまで出している事実』（原文）

（十二月五日）

一九七〇年（昭和四五）

★花園大学の黎明

花園大学総務部長 佐野大義

昨秋以来大学の問題で一派の各位には大量なご心配をかけて参りましたことを深くお詫び申し上げます。大学は一部の暴力学生と団交を続けて大部分の学生を犠牲にしている。脚下を照顧する学風は既に無く無法無責任大学になり下がっている。等等大学を愛される故の厳しい、然も温いご批判を各方

面から頂いております。十月一日就任のごあいさつをして以来二カ月、大学は苦難の連続でありました。

歴史的台風の中で

話し合い路線の所謂団交で大学改革を摸索している最中、突如十月廿八日、全共闘と名乗る一部学生によって本館が封鎖占拠されました。当局教授会は佐藤訪米阻止の政治的路線に短絡した無法理不尽な行動として、話し合い路線を自ら踏みこじる暴力として全共闘諸君にその解除を迫りました。話し合いの場に引き戻すために泣いて馬鹿を切る覚悟もして最後の団交に望みました。当局はこの封鎖を歴史的台風と受け止めております。十一月十五日理論的にも道義的にも行き詰った封鎖学生は遂に自主解除をしたのであります。三週間にも近い事務室機能の停止は大学中枢機関のストップであり、社会的にもその信頼を失ったことは残念至極であります。封鎖による物質的損害は案に相違して少く、機動隊導入の最悪事態を避けられたことは不幸中の幸いであり、花大路線といわれる話し合いの結果であると評価もされております。

学長のご決意

全学集会（十一月二十七日）の席に臨まれた学長は「十二月一日授業開始を私自身全学生に訴えたい。無期限団交がつづいて、留年や新入生を迎えることができないことがおこつたら、六百名の全学生とそのご父兄、設立者の妙心寺派に対しても申訳がない、当然辞職して責任を取ります」と決意

を表明されました。十一月二十八日には一般学生、ご父兄宛に「全学生諸君に告ぐ」との一文を起草され速達便で送ることを命ぜられました。

思えば学長老師は九月以来劇繁を割かれて大衆団交の熱気の中に立たれ「授業をやらぬ大学は生産のない工場と同じだ、授業をやりながら団交を！」と所信を述べてこられました。本館封鎖占拠の中にも単身入られ封鎖学生に身を以って説得に当られました。どんな学生も一度も学長を批難攻撃する者はありません、全国の大学紛争の中で本学のみの特徴でもあります。団交についても、当局、教授会の学生信頼の方向に忍耐され、十一月中に団交を了って、十二月から正規授業を開始せねばならぬと強く訴え続けてこられたのであります。

妙心寺派と花園大学

妙心寺派は大学にとって生みの親であり、年間千二百万円の乳（補助金）を飲ましてもらっている子供が花大であります。文学部になり四学科併列の新制大学の花大はただ前進あるのみであります。青年反抗期の子供とご理解を頂き大学を育てて下さるよう願ってやみません。教学内容から言えば特に本派に理解の深い諸先生を懇請して建学の精神を振起することが妙心寺派立宗門大学花園大学の根本でありましょう。

大学の黎明

社会と体制の矛盾を真理探究の場として大学が真向から受

けとめ、進歩と調和に矛盾を止揚しようという自覚が大学の内外に漲って来ました。

学問とは何か、授業の中味は、単位認定は、と団交は矛盾と改革の諸問題に肉迫したのであります。そして無期限連続の団交が、大衆（一般学生）の脱落を来たし、団交大学であつてはならぬ、授業を通して学問を、と授業再開の声が澎湃（ほうはい）と起つて来ました。

大学は文化的遺産を伝達するだけではなく、批判と独創の精神とを学ぶ場であり、真理の決定は多数決にあるのではなく、事実そのものと真実性の確証にあるということ。

太陽中心の地動説を貫き、火あぶりの刑に処せられた、ジョルダノー・ブルノーは真理の下に自らの命をささげました。社会にとつても望ましいのは鋭い批判力を持った個人による社会構成であります。大学は「学ぶ」だけの場ではなく、「学ぶことを学ぶ」場でなくてはなりません、花園大学の全構成員の目ざす目標はここにあります。臨済禅唯一の大学、本派が粒々辛苦してこまで育てて来た大学は決して本派を離れることができません、あり得ないことであります。教職員一体となつてこの七十日余大学問題の解決に忍耐の限りを尽くして教育学問というものが、足下にあるということを知つて莞爾（かんじ）たるものがあります。再び一派諸大徳の大学に対する御高庇を伏して願ひ上げ、大学に黎明の来たつたことをご報告申し上げます。（一月五日）

★施政方針について

宗務総長 江西寛堂

（前略）

教学に関して

第二に布教興学についてでありますが、これは先きに申し上げました二大使命の内の大学の改革問題と密接な関係にあるもので御座います。布教は教団の一大生命であります。又、先程申した末寺の振興ということも大いに関連して参ります。

教育の振興と教育機関の充実を図ることは本派宗政の一大命題であると先程申し上げました。この根本は矢張り宗制の確たる建学の精神の標識が必要であり、従いまして学事に関する宗制の改正を考え、それが学校法人花園学園の寄附行為に反映するよう考へて行きたいと存じます。それにより理事会の責任体制を布いてもっと強力に学事問題に取組む必要があると痛感致し居ります。又、教授陣の強化刷新、給与体系を確立しての増額等々を勘案して大学補助金の増額に踏み切つたのであります。又花園大学紛争の一因とも見られました本派学生の入学金特別扱いを廃して別途に奨学金として直接授業師に送金するよう改めました。

この状態が続けば年々補助の増額が必至となり、著しく一

派の財政に圧迫を加えますことは火を見るより明らかで御座います。故に之が打開策といたしまして、育英会を組織し一派諸大徳の篤い宗盟心と檀信徒各位の護法の念に期待致しましてその設立を考えたのであります。財政の裏付けなくしては大学の進歩改善は到底成就することは出来ません。又、本派教育全体の振興を考えると育英会を組織し、その進展を図ることが最も適切な策であると思われまふ。

その他布教面に於きましては御親化の趣旨を明らかにし、その効果をあげるため、親化修行の要領をはっきりする必要からその改正を考えました。

又学徒講習を義務づけとしたり又尼僧研修会、教職員代表協議会等を新しく計画致し居ります。その他更に住職及び寺族の自覚と責任を明らかにし、教化の活潑化を促進するため「住職読本」「寺族読本」(共に仮称)を目下教化研究委員の手により執筆中で御座います。

(後略)

(四月五日)

★第三十五次定期宗議会 —— 花大問題に議論集中

開会前慎重に全員協議

第三十五次定期宗議会は去る二月二十四日より二十八日まで五日間宗務本所に於て行われた。全国より招集された三十六議員は、開会前日の二十三日花園会館に到着、午後一時より花大当局者(総務部長)を招き花大問題につき全体協議会を開き協議し、二十四日の開会に備えた。

初日二十四日は午前八時半開山塔拝塔、九時小方丈に於て給茶礼、続いて大方丈に於て祈禱諷經。続いて物故議員日高盛山、権藤定山兩師追悼回向あり、再び全体協議会を開き開会に先立つ諸準備を整えた。午後議長副議長の無記名による投票選出辞令交付、記念撮影に続き、管長猗下出席開会式、猗下宣示、常任委員選出つて、宗務総長の施政方針演説で第一日の日程を終る。

第二日、午前九時開場、恒例により、議案熟読のため一日をあてるため直ちに閉場が宣せられたが、午前中は選挙制度に關して全体協議会をもち慎重審議をし二十六日からの実質審議に備えた。

第三日(二十六日) 先ず答辞委員長梅園議員より宣示に対する答辞草案が読み上げられ全員の賛成を得る。

次に議長より、「全国二十四万花園会員の危愼の心と憂愁の目でみられた花園大学の問題に關しては特に関連質問を認める」との前置きがあり、宗務総長の施政方針演説に対する質問に入った。要点次の通り。

△宗務総長施政方針に対する質問▽

先ず花大問題に集中

裁松議員「花園大学は、二十人足らずの暴徒に引きずられ、天下に醜態を露呈した。建学の精神はいづくにあるか、当局の無責任な態度を問う。学園の最高責任者の総長の答弁如何によつては、予算に組まれている多大の花大補助増額は承認

出来ない。どのような所信か、約束を違えた現実をどうするか。

総長―今後のほうがむづかしいのではないかと思う。先日総長会議にも出席したが、理事会が強い責任態勢を敷く必要があるのではないかと話した。

これまで大学運営に宗務当局が介入する余地がなかったが、改めたいと思う。無責任な態度といわれるが、出来るだけのことはしたし、紛争中最悪事態には一週間寝るの番もした。しかし、未然に妨ぐ配慮を今後はしたい。また五、六月頃にかけては決して楽観的でない。又約束を違えたというが、文学部長の約束だけで、文学部長は弁明すべきであるとは思いますが、それも、その時とは事情が変った、ということかもしれない。尤も、文学部長即理事の言葉ともいえるが。

裁松―花大の白雲寮は開山六百年遠諱の記念事業に出来たものであり宗門教育の場でもあるが、見単に行くと自治寮として開放され、悪徳の巣窟となっている。生いたちを振り返ってどう思うか。

総長―悲しいと思う。ご期待に添い善処したい。

裁松―現実に実行して貰いたい。

総長―理事長の四年毎に変わる機構も検討し、精鋭なる常任理事を置くとか、今後の問題として研究したい。

裁松―去る十一月二、三日教誨師大会があったが、援助もなければ祝電もなかった。本末親善をうたいながら宗政の空

念仏であって是不ならぬ。

△寺の後継者を養う大学を▽

―建学の精神―

朝雲議員―花大の十二か条の確約書を見ると、經理の公開とか、大学立法に關うとか、従来の教授権力を解消し、一切の処分を行わない、学生心得撤廃、犯罪的行為の自己批判などあるが、学長その他の理事、全学的評議を経てなされたものかどうか、教授会の常識をうたがう。

総長―全体が不賛成である。しかし、古典的大学と現代の大学とは全然違う、単に學問に専念しておればよいということとでなくなっているところに現代の大学問題があるのではないかと思う。これは長期の改革が必要であると思う。

朝雲―確約はいま行われていると思う、事は緊急を、要する問題である。

総長―ご期待願いたい。

朝雲―教授会と理事会の間で断絶はないか、花大各部長と本所理事の話し合いは行ったか、正法輪により月々花大の状況を末派に知らせてほしい。

五葉議員―教授の任免の権限はどこにあるのか。

教学部長―学長にある。

五葉―柳田教授から辞表が出ているというが。

総長―あずかっている。

五葉―教授の任免に理事会の権限はどのくらいあるか。

総長―権限は学長となっているが理事会も或る程度、関与出来ると思う。

五葉―授業が行われていないと聞くが。

教学部長―十二月一日から再開したと聞いている。

新入学生については、僧堂などで一定期間研修させて、誓約書をとるような試案もしている。

五葉―前向きの姿勢を聞いて心強い。教授の中には、例えば史学科では唯物史観のみを教えているものがあると聞く。学問の自由は大切だと思うが、優秀な学生が寺を出て行ったという事実がある。寺にとっては後とりが心配の種であるから、建学の精神をふまえた上での学問の自由を望む。十年待てというが、十年は待てない。大学の大幅除をいまやらなければならぬ。

上村議員―これまでは前からの引きついだものを誠実に実行してきたといえる。今度の内局では前内局から引き継いだものは妙心寺護持会だけだ、予算は一億円の太台にのつたというが、花大教職員のベースアップなどに対して、万博について本山参拝料の臨時収入を当てにして居り目新しいものがない。財政の発展をめざした積極的な、施策がほしかった。

現在の東京出張所の他に東京別院を設けるなど過密地帯に於ける檀信徒の教化を考へては教団としては末派即ち檀信徒が財産なのである。

花園大学は、宗門人として憂慮に耐えない事態が起った。

中外日報や正法輪また斎藤議員からの報告書により心配していたが、過去のことをいままれこれいうのではなく、今後正常化の一步を進んで行けるかどうか。これまで七〇〇万円の補助であつたのが、今予算では一、五三三万円援助することになっている。本派のため勇気をもって広い意味の宗門大学を作つてほしい。

△学園の制度の検討と教授陣の強化を……▽

建学の精神にそわない学生は学校にとどまる必要はない。確的教養を身につけた人材の養成をはかるため現学長は、最もふさわしい人であるが、しかし大学に常在する人が望まれる。学長不在の間のため学長代行制を考へてはどうか。

また同じ花園学園でありながら、高校では自動車科や電子計算機科など出来て、宗門的色彩が殆んどない。しかし大学は宗門色を出すために補助金を出している。左翼的教職員は建学の精神にもとるから居つておられては困る。(拍手)良い機会であるから左翼の部長は花園大学から勇退を望む。(拍手)教授任免は慣例にとらわれず理事長の権限を拡大せよ。

教学部長―学長代行又は副学長の制度は考へている。又入学者の思想調査、花高と花大の一体化及び大学高校教職員の交流のことも考へている。

教授の勇退についてはお説ごもっともであるが、学内事情にどういふ影響を与えるか考慮して事情をつかんだ上で対処

する。

上村―花園大学は生え抜きの教授に乏しい。教授陣は一体宗門大学を守って行く熱意をもっているのか。教授陣の強化を望む。

偏向教授は発言しても効果のない事態に追い込んで行け。

建学の精神にそわないものは居づらいようにあの手この手からめ手で去らざるを得ないようにせよ。紛争の禍根である教授の排除と学生の排除をせよ。

高橋議員―宗門大学に学ぶ学生がないというが、学校側の姿勢に欠けている点があるのではないか。

大学総務部長―今年は推薦入学一五〇名、第一次受験者七十五名でした。学長は来たものは入れよ、募集はするなともいわれる。

文学部長―正法輪に広告するぐらいで地方高校へ出かけて行って募集するようなことはしていない。

朝雲―入学者の思想調査をして紛争の起らないようにしたかどうか。団交で交した確約書は取り消せないのか。

大学総務部長―団交に於て取り交した確約書は道義的責任から取り消すことは出来ない。確約書は旧来の教授権力などを基本的に解消することを計るというもので解消するとは言っていない。

入学者の思想調査はいたしません。思想調査が日本の憲法に許されると思いますか。そんなことは出来ないし、やって

はならない。

朝雲―思想調査については同感。

次に審附行為の改正と確約書に道義的責任があるというが、理事会との関係はどうなのか。

△今後の教学計画に活かすべきもの……▽

文学部長―大学紛争については正法輪や中外日報その他で間接的に知るのでは誤解されるおそれがある。団交は教授会と学生がとり交したもので学内だけのもの、理事会に対して拘束力を持つとは考えていない。団交は現在学生自身のいうべきことがなくなつて、立ち消えの状態である。今回の団交は今後の問題として教学計画にとり入れて大学の改革に生かして行くべきものである。団交での確約書は教授会を拘束するだけのもので理事会を拘束しない。まして宗門の立場や権限を侵す場合は取り上げなくてもよいのである。ただ団交は途中であり、新聞紙上だけで判断しないようお願いしたい。

朝雲―わかつたような気持です。しかし学則の変更などは理事会の権限を侵したのではないか。

文学部長―それは必至だが改変はしていない。それは今後の問題である。

朝雲―しかし現実には変えられているのではないか。

文学部長―それは学則と細則とは別で、細則は変えられているものがあるが学則は変えていない。

朝雲―了承。

上村議員―思想調査の件であるが願書が出たら内申書をとるなり高校宛に調査を依頼し高校で実績を残しているかどうかを調べることは出来ないのか。

大学総務部長―それなら思想調査ではなく、思考調査、人物調査である。それなら今やっている。

松山議員―確約書の件、それに学長の辞任の意向も聞く、今考えてみて過去のことは正しかったと思うかどうか。

文学部長―形の上では委任状があったとはいえ学長との連絡に不備があったと思う。反省している。

団交の確約書はいままでの規定をその場で考えなおすということであることとを了解していただきたい。

松山―中執が総辞職して新たな中執が出来ると聞く。また国法にふれた学生があるらしいが、退学させないのか、慈悲といえは慈悲であるがそれは親分子分的考え方で言葉は慈悲でカバーしているにすぎない。

白雲寮については英断を下すべきである。あのような現状で火災が起きたらどうするのか。責任は誰がとるのか。

大学総務部長―責任は学長にある。団交については九月十五日以後は相互の人権を重んじるということで進めている。今月二十七日午後授業休止の申出が、学生から出ているが、十六講座がつぶれる。団交は今後授業のない時にやる。それでもやるといえば私は欠席する。

学生処分については、いま容疑でとらわれているが、逮捕

されたと新聞で知った時直ちに所管県警へかけつけたしかめた、大学の要職にある者が逮捕された学生のためかけつけたというのは初めてだと県警では言っていた。しかしこういうやり方はマンモス大学と違い本学の特色でもある。

松山―大学を愛する発言、力づくと思う。しかし団交に総務部長が欠席して学園封鎖などのおそれはないか。又慈悲らしく見せかけて行動する人もあるともいう。慎重を期す。

入学に際して誓約書は必ずとってもらいたい。

大学総務部長―十三日（四月）が入学式であるが、その前三日間合宿をやる。入学予定者を二泊三日で祥福寺専門道場で行い宣誓をやる予定である。形式でなく内容の伴うものを考えている。

（休憩）

午後一時再開

最初に今山議員から昨年度宗議会中の秘密会議の件につき質問あり、柳田文学部長から、今年は秘密会議でなくてよいかの質問で議長全員にはかり決を採った結果、秘密会議を支持するもの三十三名中十六名で、宗制第三百八十四条により三分の二以上の賛成なきため秘密会議不成立よって公開を宣言する。そこで文学部長答弁に入ったが、「昨年は秘密会議ということとこの件に関してはその意志を尊重して一切公表していません。今年は事情が違ふと思います。今宗会が公開に踏み切ったということは一大決意をもってのことと存じま

す。この点後日疑義遺漏なきように——。」との前置きが始められると議場騒然、休憩の声あり暫時休憩となる。

再び開場、今山議員は先の質問を取り消し、席そのまま再び休憩に入り全員協議会に切り替え文学部長の答弁を聞き一同了承。

(四月五日)

★花園大学に対する要望書

なお二十八日議事日程に入る前に学園に対する要望書起草委員会から次の要望書が発表された。

〔要望書〕本派は大学教育の重大性を深く認識し、一派を挙げて大学支援の態勢を固めた。

大学は今回の学園紛争を卒直に反省し、花園大学設立の本来にかえり建学精神の確立により理事会組織の機構改革を図り、教授陣の刷新強化により教育内容の偏向をあらため、学園の秩序についての格段の努力をするともに、特に白雲寮については、その建設の主旨にのっとり、一日もすみやかに正常化されることを望む。

なお一層禅的精神に培われる師弟の共行共学による花園大学を実現されんことを強く要望する。

昭和四十五年二月二十八日

妙心寺派宗議會

花園大学長 山田 無 文殿
花園学園理事長 江西 寛 堂殿

(四月五日)

★来たるべき二十一世紀・宗教の時代へ巣立つ

——花園大学卒業式

花園大学第十八回卒業式は三月三十日午前十時より同学講堂に於て行なわれた。仏教学科三十九人社会福祉学科三十六人、国文学科九人計、八十四人に卒業証書が授与された。

今回は山田無文学長より一人一人に卒業証書が手渡されて、そのあと学長は祝辞に「国文学科、史学科に学んだ諸君は、或は教職に着かれ教壇に立ち、人の師となることのむづかしいことを知るだろう。今日教師の人間性が問われている。いま卒業証書を渡しながら、こんな学生もいたかなあと、初めてお目にかかる学生諸君もおられるがなぜもっと親しく諸君と話さなかったか、つき合わなかったか自己反省している。社会福祉学科の諸君は実際の社会に出て今日の社会のひずみにも触れるだろうが、宗教的な暖かい愛情と信念をもつて臨んでほしい。また仏教学科を出た諸君、特に宗門に籍を置く諸君はそれぞれ僧堂に行くことと思う。いま弟子丸泰仙氏はパリで坐禅指導をしているが、会社を停年退職してパリに渡り、フランス語が出来るので氏が話すと二、〇〇〇人の会場で聴衆があふれるという。僧籍がないので近く帰国して永平寺で僧籍をうけることになっているというし、サンフランシスコ、ロスアンゼルス、またニューヨークにも三カ所の禅堂があり多くのアメリカ人が禅を学んでいる。カナダにそしてメキシコにも高田恵禪君が單身わたり禅堂を建てようとしている。

アーノルド・トインビーは現代の危機を説き、物質文明は終り二十一世紀は宗教の時代だと予言している。その宗教が東洋にある。それは禪だ。諸君は真実の人間性に根ざした社会の建設をめざし、精神のよりどころをもって、一隅を照らす社会のともしびとなつてほしい」と励ました。(五月五日)

★花園大学新入学予定者合宿指導取り止め

花園大学では四十五年度新入学学生の入学式に先立ち新入学予定者約二二〇人と大学専任教職員約六〇人でオリエンテーション合宿を四月十三、十四、十五の二泊三日で亀岡市の天恩郷大本会館を会場として行なう予定であつたが、都合で取り止めとなつた。このオリエンテーション合宿の目的は、新入学生が真に大学を理解し、また大学が新入生を理解して大学を真に教育、研究の場とすることとされていた。

はじめ、入学式は、合宿指導のあと、十六日に予定されていたが、この取り止めのため十四日に繰り上げられ、十五、十六日に大学内に於てオリエンテーションは行なわれることになった。内容には大きな異動はなく、「本学の使命」(学長)「学問の仕方」(文学部長)「大学の運営と管理について」(総務部長)「学則と学生生活」(学生部長)の他、大学の組織と機構、修学規定説明、単位登録指導が各課長により、学科別の履修指導が各学科主任教授により各々説明され、学生生活に必須の事務的なこと、及び学内研究の具体的方法等が指導される。この予定変更は、思想調査であるとか、外

部の圧力であるなどという誤解と、それに伴う軋轢で万一会場へ迷惑がかかつてはとの配慮によるもの。(五月五日)

★日 単 拾 遺

三月三十日 花園大学卒業証書授与式。一時はどうなることかと思われた学園からともかく八十四人の卒業生が巣立つたことはよろこばしい。

尤も学園紛争を宗門大学なるが故に当然その圏外にあるべきものと思うのは固陋な頭のせいだろうし、天下の一大事と悲憤慷慨するのも狭い宗門内だけに視野を限る偏狭性からだと考えられる。じじつ御用新聞は大きくとりあげたが、大新聞は小さく片すみに扱つたに過ぎない。天下の大勢だといえば、当局が責任の一端を回避し得ただけだが、しかし困り果てた現今の社会ではある。

今回は卒業証書は、山田無文学長から一人一人に手渡された。中には不謹慎な学生もあり、月賦完納証書だとうそぶきながら席に帰るものなど、いささか厳肅さを欠いた卒業式であつたが、卒業後の行先について専門道場に掛搭するもの四十二、進学六、就職二十五、その他一、未定五、未解答四という数字は案外健全な方向を示しているといえよう。

四月一日、宗務本所の課制度が今日から実施、各課に主事又は主事補が配置される。課長の呼称は使われない。正法輪は総務部総務課に所属。

四月九日、花園大学新入学予定者オリエンテーション合宿

が入学式に先立ち十三日から二夜三日、亀岡市にある愛善苑大本会館で予定されていたが、急遽取りやめとなり、既に初稿の段階にあった正法輪編集子をあわてさせたが、各会社の新入社員合宿訓練大流行の時代、同一視されては前代未聞の大学となるわけで、これは賢慮であつたかもしれぬ。

(五月五日)

★花園大学の専任に迎えられて

西 義雄

昭和二年四月から、満四十二年間東洋大学の専任教員として過して来ましたが、去年三月末で、停年退職しました。その後も引続き兼任講師として大学院などで今尚、講義を受持っています。所がこの三月の半頃、突然、佐野総務部長と前学監荻須教授の御来宅により、花園大学の専任教員になるようにとの強い御要請を受けました。何か長と名の付くものになるようにとの御話もされましたが、私は元来、如何なる長たるの資格にも柄不相応でありますから、これは固く辞退いたしました。取り敢えず、専任教員たることは考えて見ましょうと申し上げておきました。と申しますのは、随分前にも二三度花園大学に来るようにとの御話もあった上、前管長古川老漢からお会いする度に、お前もいい加減に花園に帰れと言われておりましたので、専任教員でなくなった今日名分上、お断りする理由も無くなっていたからです。

その中、三月末になりまして、時の文学部長柳田教授の御来訪を受けました。花園大学の教授会全員一致の決議であるから、是非来るようにと伝えられました。私の如き薄学のものを斯くまで推して下さる御心情に感激して、終に今年度は取り敢えず毎週木曜の夜までに行き金曜一日花園の講義で過ごすという条件で、専任教員たることと、「原始仏教」と「大乘起信論の講読」という二科目を担当することで、お引き受けいたしました。これは、既に去年の十一月に、東洋大学でも四科目を担当し、月水二日行くことがきめられていましたし、火曜日には、他への出講もずっと前から約束しておりましたので、学年末になって急にその時日を変更することは、出講先に大変迷惑をかけることにもなるからです。しかし、東洋の方は、同僚の諸先生が、心配してくれまして、一科目減らした上、月曜一日ですませるように配慮して下さいましたので、充分助かりました。花園大学の仏教科に今年新しく教授として任命されたものは大森老師と私の二名であること、老師は木曜で私は金曜の出勤なので、宿は本所の三階の同じ部屋を与えられますが、丁度行き違いになりますから、毎週同じ部屋に泊りながら、始終はお会いする機会がありません。二人とも新幹線で東海道を往復することになっていることが、亦似ているようです。宿と食事とは本所の総長さんなどの御慈悲で費用はかかりませんし、月給も往復車代丈には相当しますので、別に借金する必要はありません。こ

の年になって、多少でも、宗門教育のお役に立てば、とも思っております。

二

未だ何しろ成り立ての新米教授なので、精しく花大の全体のことは勿論、仏教学科の内容も、充分、分りませんから、適確な意見や教授としての見解を発表しうる段階ではありませんが、専門学科特に講読や演習を担任するものとして、直接に痛感したことのみにつき、卒直に申しますと、仏教科の教授研究室が、未だきめられていなかったこと、特に、仏教科学生の特定の研究室とか又は演習室がないということです。六三三四制の教育制度そのものが、現在では、既に多くの問題を生んでいるのですが、しかし文学関係の一時間の講義には、之に相当する時間をかけて、学生諸君が予習や復習しうることが、この制度設置以来、要請されていますので、教員や学生が個人で容易に買えない参考書とか辞書類などを揃えて、研究室で、此が自由に使用できるようにしておく必要があると思ひます。勿論、演習やレポート論文作成などの場合は、参考書の取扱ひ方、又は使用法、論文構成法なども、学生諸君にも実地に実物を示しつつ指導したり、共同で考究したりする場として、是非共、かかる研究室がほしいと思ひます。仏教学科などは、思想的にも文献学的にも、これを盛る諸種の大蔵経や經典や、註釈類や新しい研究書類などは、誠に

歴大なものがありますので、学生が直接此等の宗典や参考書を全部揃えることは、不可能に近いのです。それ丈に、図書館の外に、研究室において、実地に此等を見聞し活用する機会を与えることが、重要であります。

以上のようなことを余り喧かましく言つと、一部の宗内の老僧方から教外別伝の禅宗の大学だからと、或は御叱責をくらうかも知れませんが、禅が不立文字を標榜して独立した時代的背景と、現今の状況とは非常な相違がありますし、今は仏教学でも禅学でも、宗派内や日本仏教内丈のものでなく、広く深く世界思想の上で、特に世界の宗教学上に立つて、此を明かにする時機であり、現代の若い世代を、広く心の底から共感せしめるものでなければなりません。欧米学問思想の現水準に立つて、然かも之を超え、之を批判し、更に新らしい姿で東洋思想の真髄を示すことに努力する方向に進むことこそ、今後に課せられた仏教学研究の社会的使命であり、仏恩に報ずる所以であります。

次にここ一兩年來、花園大学も全学連問題でかなり有名になっておりますし、更にその学科内容等々幾多の問題も控えておりますが、此等に就いては、私も亦、一層、学校当局や先生方の御意見を伺つたり、今少し勉強させてもらつてから、申し上げることにして、一応、この所感を終ります。

(八月五日)

★花園大学校庭に名園

花園大学の校舎前庭に、名園が去る五月誕生した。特志者は大阪の鈴木琴代刀自で発端は花園大学講師神文化研究所員故横山文綱師との深い法縁によるもの。鈴木氏から横山師の顕彰のために何か永く残るものをとの申し出により学園に緑地を、と庭園が作られた。

五月二十五日、学園の創立記念日、学園理事長から鈴木氏に感謝状が贈られた。造園費は一五〇万円、芳徳園と名づけられた。

(八月五日)

一九七一年(昭和四六)

★花園禅塾の開塾にあたって

上野真護

△就任に際して▽

この度、本派の念願でありました妙心寺派育英会が発足し、その一事業として花園禅塾を設置経営することは衆知の通りであります。

就きましては、不肖図らずも、この禅塾の塾頭として塾生の訓育にあたることとなり、高席を穢すことになりました。もとより不徳、菲才、到底その任に適うものではありませんが、開山大師の遠大のご遺徳と、開基法皇の深き聖旨を偲びて、微力ながらも精進を重ね、塾生とともに、育英会の趣旨をいただき、塾則を守り、和をもって明るいユニークな禅塾

を育て、よりよき本派後継者の育成を祈念しております。何卒、本派寺院諸師の絶大なる御指導と御道愛をよろしく御願いたします。

△指導にあたって▽

教育とは「人間の可能性を引き出す」と定義されているようですが、宗門では「仏性を自覚せしめる」の点に教育の意義をおくと思います。初祖達磨大師は「授とは伝なり、伝とは覚なり」と申されています。

このごろの学校教育は、知識一辺倒に徹し、また、現代教育は技術一辺倒のようであります。これを否定して悪いというわけではありませんが、いさか不安がつのと同時に、これらの消化薬がほしいと念願してやみません。この消化薬が求められているのが現代教育にあると思います。知識、技術が本当に消化されて、次に活く力、明解な判断力、鋭い洞察力、見事な構成力が必要であると思います。現代教育には、教はあっても育が欠けている点を、無視するわけにはいきません。

花園禅塾は、僧堂の規矩に準じてはおりますが、決して僧堂のリハースルではありません。(予備にはなりましようが)雲水でなく、あくまでも学生でありますから、勉学第一に考え、十二分な自習時間を与えてあります。(夜更けまで他室往來し雑談をしている場合は電源を切ることがあります)塾生の指導は、教よりも育の方にポイントをおき、知から情へ、

情から実践へと常に心を配り指導しております。

日常について

- (一) 仏子として正信にめざめる (自覚)
- (二) 行事を怠らず節度を守る (持戒)
- (三) 報恩を旨とし、温かい心で人に接する (慈悲)
- (四) 光熱を始め諸物の扱いに気を配る (謝恩)
- (五) 心を平静に保って、その場に落ちつく (坐禅)

右五訓が、一挙手一投足の活きになるよう日常心得て生活しており、それらのすべてが肌で感得できる人となつてくれれば、人生の苦しい問いに答えられる端緒ともなりましょう。

禅塾の日常行事で重きをおいているのは、いまのところ、誦経と掃除であります。誦経は、朝課と解定誦経、逐次、三経を練習します。

坐禅は第二次としておきます。坐禅を第一にもってくるべきでありましょうが、私の考え (指導理念) では、禅塾において坐禅入門ぐらいにし、(誦経の前後に座る) 禅僧として立つには「どうしても座らなければならない気持」をもたせ「僧堂へ掛搭し、専門に坐禅しなければ本物にならない」という後継者を育てたいと日夜折っております。

最後に

情報化の中で、もの識りと、小利口者が急造され、科学の急速な進歩は、人間心を機械心と変え、物質文明は、消費のみに教え、ものの生産の喜びを奪ってしまいつつあります。

このような急激な時勢の変遷に真正面から立ち向つても動かない、宗門の後継者を育てるべく努力しております。

出費多端のこのごろ、特に寺院経済は不安定にある現代、本派寺院住職の心温まる浄財による育英会の設立によって、その一事業である花園禅塾である限り、その浄財に充て得る後継者を育成しなければならぬと決心し使命感に燃えて精進いたしております。御指導と御法愛を賜りたく重ねてお願い申し上げます。
(七月五日)

★花園大学夏期伝道のおしらせ

花園大学児童教化研究部では、夏休みを利用して各地へ夏期伝道に行っています。

今年は、北関東、岐阜、四国中国地方へ林間学校を中心に廻る計画で三日～五日間三人一班で三班を予定しています。人形劇、影絵劇、ゲームその他の内容で、短期間ですが、お寺で子供達と生活をともにし、規律ある生活をし、子供らしさを認識させ、また夢を持つてくれればと願っています。

(花園大学児童教化研究部)

(七月五日)

一九七二年 (昭和四七)

★花園学園開園百年記念

大学移転の考えも (宗会から)

二十六日午後一時再開、開会に先立ち、花園学園から茶礼、花園大学総務部長挨拶、引き続き高等学校長より昨日の礼

(甲子園出場につき宗議會及び、有志よりお祝いの金一封がおくられた)が述べられ、高校の現状について

森校長―選抜野球出場のチャンスは何とか生かしたい。花園学園生徒として自覚をもち、品位を高めて行きたい。二月十五日、十六日入学試験が行なわれたが昨年より応募数が上回り、定員三五〇名のところ、六〇〇名を越え、倍率約一・八倍になり、うれしい悲鳴をあげている。七クラス編成の予定であったが、余裕をとって九クラス編成にする考えである。財政面からみても少しでも多く受け入れ人件費に近づかなければならない必要がある。

―大学の新生入生について、及び大学の現状と将来について
佐野総務部長―花大は開闢一〇〇年に相当するので、如何に教學を振興するか、これを記念に頑張りたい。十月十七日記念式典、一〇〇年史刊行、その他種々の事業を計画中である。学長問題は、三月三十一日で任期満了になり、昭和四十三年から一期四年となった。これまで二回辞職届を出されたが、決してゼスチャーではない。学長選出の規定では、七人の選考委員があり、師家分上、又は高德の中からと定められ、現学長がやはり最適、という大学の意見で、陳情に行き、懇請の結果、留任の同意があり理事長が正式に拝請に行き確定した。尚、学長に対する要望として、月曜日の実践禅学に全学生が出席するような配慮と、十時半から午後五時までは学内に留り一切の他の用件は断わることをお願いした。長期計

画としては、学費改訂。最少限度二万円アップを発表したところ、例の学園騒動にまで発展。しかし自主的に解除し元通りに弁償もした。先生の給料は諸手当も公務員並にするのが目標。その他教学内容の充実。白雲寮は厚生施設だが教育施設として来たので問題がおきた。学生を見る目でなければならぬ。学生総数六〇〇人の定員は守りたいと思う。第一次合格者を二三〇〜二四〇名にし、最終的には二二〇名ぐらいが学費を収める対象とする。第二次は一〇〇名。発展策は、起死回生の策でなければならない。自然と一体になって、学園出来る様な大学移転を真剣にお考え下さい、と敢えて傲慢に言うものである。一宗門だけでなく、現代の社会の期待に応えられる大学でなければならない。

―移転計画はあるか。

佐野総務部長―花園に因縁の地、宇多野の療養所の近くに七、四〇〇坪ある。現代は大学一、〇〇〇坪、高校五、〇〇坪だ、学費を十年間お願い出来れば可能な話である。

議事再会一時四十分。賀詞(管長に対して)花高の礼状披露。

教学部長―育英会の現況説明が誤っていないかと思い、午前中の質問に対し補足説明をする。現在本派寺院は三、四二七ヶ寺あり、七三四ヶ寺は無住寺院、二、六九三ヶ寺が有住寺院である。そのうち六等地以下はご遠慮し二、三二四ヶ寺が育英会に加入して金額は九、七三二、〇〇〇円に達している。

しかし最少限度二億の基金が出来ないと不安である。遠諱記念に五、〇〇〇万円ぐらいはほしいところである。又微笑会、花園会からも廻して貰いたいと思う。

なお、育英会費は決して無駄な使途はしていない。

(四月五日)

★花園禪塾の現況

塾頭 中島義禪

△挨拶に代えて▽

前塾頭上野真護師が、御自坊の都合で急に引かれ、図らずも未熟者が致命により、その後をお引き受けすることになりました。もとより浅学菲才その器ではありませんが、急を要することでもあり、適当な後任者が得られるまでと止むなくお請けした次第であります。しかしながらその任に当るからには、微力ながらも全力投球、少しでも宗門後継者のためになるならばと心掛け精進いたしています。何卒宜しく御鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

△禅塾の環境と設備▽

ご承知の如くこの塾は、本派育英会の事業の一つとして昨年発足したものでありますが、場所は本山から南約八百米、静かな住宅街で環境としてはよい所であります。敷地は二百十八坪、建物は木造モルタル張り洋風二階建、ロの字型で真中に吹き抜けがあり、床総面積百二十八坪、個室三十二、他に食堂、談話室兼応接室、贈室、塾頭、指導員、塾母の各室

と事務室があり、個室は四畳半、蹴込洗面所付きで、塾生はこの個室に一人ずつ起居しています。建物は借り受けたもので、可なり古風で老朽化していますが、返ってさっぱりして落ち着いた感じのものであります。ただ禅塾としての機能を發揮するのに最も必要な禅堂及び食堂が余りにも狭く、禅堂は広廊下に単を置いた全くの間に合せで、ここで坐禅をし、お経を練習しています。又食堂も狭いため、供給することができず、只朝夕の食事（昼は外食なので、薬石に斎座の食作法をする）は全員持鉢で本飯に準じて行っています。

坐禅、法式及び読経、食作法、作務等、これらは禅塾として最も特色あるもので、且つ重要事でありますから、今後一考を要する問題であると思います。

現在在塾二十七名、四班に分ち一週間交代で班毎に当番。当番は鳴らし物（板及び柝、仏前の世話、食事準備、東司清掃等に当る。

来訪者は談話室で応接。帰省、外泊は理由を明記した届けを出し、塾頭の許可を受ける。時折茶礼をして座談会をする。以上が禅塾生活のあらましであります。

△坐禅とお経の練習▽

坐禅は朝夕の勤行の前後に行い、勿論警策を廻します。坐禅は原則として結跏趺坐であるが、どうしてもできない者は半跏であります。始めは大部痛そうであったが、二カ月余りたった今日殆どが結跏趺坐で坐れるようになりました。幸い

週一回大森曹玄老師が寄宿して下さり、朝一緒に坐って下さるので、よい刺激になっているようであります。

お経の方は朝夕の勤行を兼ねて練習いたします。最初概ね八〇％はお経のおの字も知らなかったのには驚きましたが、今日までに日課経の殆んど、三時回向、施餓鬼会回向等がまがりなりにもマスターでき、毎日声を揃えて読めるようになりました。来学期は金剛経と楞嚴咒の練習をする予定であります。目下交代で維那と魚鱗子をやっていますが、中には夏休みには寺のことに大いに加担すると張り切っている者もあり、又今までは坐禅やお経が大嫌いであったが、やってみるとよいものであることに気がついたり喜んでいる者もあります。その辺にこちらもやはり甲斐を感じています。

(八月五日)

★花園学園開学百年記念式典

花園学園では今年開学百年に当り、十月十八日午前十時より京都会馆第二ホールで学園関係者、卒業生、旧教職員、花園大学在学生及び花園高等学校在学生等約一、〇〇〇名出席して記念式典が盛大に行なわれた。

式典第一部は開式の辞の後教職員、同窓物故者追悼のための黙禱があつて、学園理事長江西寛堂師式辞来賓代表祝辞の後永年勤続者表彰が行なわれ、大学の部では二十年以上九人、十五年以上三人、十年以上三人、高等学校の部では二十年以上三人、十五年以上十人、十年以上八人にそれぞれ表彰状、

記念品が理事長より手渡された。

式典第二部は記念講演で、山田無文花園大学学長の「狂猿古台に嘯く」があり聴衆に深い感銘を与えられた。式典後、午後十二時三十分より別席の祝賀会・同窓会総会に移る。約三百名が参加して百年の歩みを振り返りその歩みを祝し合った。

花園学園は明治五年に三年制の般若林を妙心寺に創設し宗門子弟の教育機関としたのがはじまりで、明治七年臨濟・黄檗合同で東京に連合総會を作り、明治十年京都に移した。明治十六年臨黃連合から分離して妙心寺に大衆寮を設置、明治十年大教校（三年制）を妙心寺におき、中教校（三年制）を大分万寿寺、宇和島大隆寺、花園東林院、美濃八百津大仙寺、駿河、武蔵の六ヶ所においた。明治二十七年普通学林と改称し尋常部（四年制）高等部（二年制）をおき、東部を岐阜県靈松院に、西部を京都竜安寺においた。明治三十一年に現在の校舎の敷地にあつた麟祥院を妙心寺内に移して、東西両部を合併して校舎を新築、現在の木辻北町に所在することになった。明治三十七年普通学林を正科（四年制）と実習科（二年制）とし、明治四十年花園学院と改称、中学部（五年制）高等部（三年制）をおく。

明治四十四年高等部を別立して臨濟宗大学（四年制）と称する許可を得、中学部の名称を廃して中学部のみを花園学院と称することになり、大正九年に花園学院を花園中学と改称した。大正十四年に臨濟宗大学の修業年限を五ヶ年とした。

昭和九年学制改革により臨済学院（学部二年、専門学校、専修部、中学部）と改称、臨済学院専門学校が同年二月認可され、花園中学校は昭和十三年三月で廃止された。昭和十年に設立者を財団法人妙心寺派教学財団とした。昭和二十三年学制改革により臨済学院中学部を花園高等学校と改称、全日制普通科を設置して、現在の基盤を作った。昭和二十四年学制改革によって臨済学院専門学校が花園大学（四年制）と改称された。この間、校舎及び、本館の改築、大学図書館の改築など外観の面目一新と内容に於いては高校の商業科の併設、大学に於いては仏教学部の代りに文学部を設置するなど逐次充実をはかり現在に至っている。

（十二月五日）

一九七三年（昭和四八）

★すべからく青年は大志を抱け

山田無文花園大学学長新生生を激励

昔、札幌農業学校でクラーク博士は「少年よ大志をいだけ」とおっしゃった。その門下から内村鑑三先生のような立派な人物があらわれた。四、五年前東大の総長が、大学の卒業式に「小さな親切をせよ」と訓辞された。明治の大学教授は青年に偉大なる志を持てといわれ、昭和の大学教授は小さな親切をせよといわれる。大学の教授の精神が変わったのか、その対象である青年の気分が変わったのか、小さな親切さえいわれなければ実行できないのが今の大学生なのかと寂

しく思った。

私は、昨日メキシコから帰ってきたが、そこには今から四十五年前、十五歳で単身メキシコへ渡った山口県の上村さんという人がいた。苦学して齒医者さんになって、現地の妻をめとり三人の子供さんがいるが、大統領夫婦の信任を得て日本人会の会長までされた方で、海外で腰を据えて立派に働いていられる。

みなさん方、両親のもとを離れてはるばる大学に来られたが、何を志してこの門をたたかれたか。「初心忘るべからず」で、その目標を貫いて堂々と社会へ出て働いていただきたい。目標なしに大学へ入る、皆が行くから行く、そういう考えで大学に入った学生が卒業するときに、小さな親切をしてほしい」と東大の総長は訴えられたのではないかと思う。

自分のことを話すのは甚だ失礼かと思うが、懺悔だと思つて申しあげると、私は十四の時、三河の山奥から東京へ出て来た。暗いうちに起されて、親父さんが氏神さまにつれていってここで拜めという。きつと偉い人になって帰ってきました、それしか言うことがありませんでした。草鞋をはいて、峠を越え、東海道の岡崎の駅からはじめて汽車に乗った。

中学四年の時に、今の高等学校二年ぐらいですか、論語の「訴えを聞くことわれなお人のごとし、願わくば訴えなからしめんか」という言葉を読んで胸にぐさつとさきつた。親父さんは司法官になれといった。しかし裁きのない、訴えのな

い世界を創るのが理想だ、戦争のない世界が理想だ、そう考えてくると何をやっても人生の手段にすぎない。裁判官も医者も、軍人も手段、ゼニもうけも手段、人生の本当の目的は何だったか、私は学校へ行っても講義は聞かずに法華經を読んだりバイブルを読んだり。最後に迷ったあげくにぶつかった先生が、チベットから帰ってきて、自分の翻訳したお経の講釈をしておられた河口慧海という人だった。その講義の中で、この世界を牛の革でつめばみんな裸足で歩ける。しかしそれは不可能だ。自分の足に牛の革をつけることだ、と。世の中を病人のない世界にしよう。それは恐らく不可能でしょう。自分の心の中に、人を押しのけようとする心を捨てよ、人類に奉仕しようと誓え。その事だけが世界を平和にしてくれるのだ。この一言を見た時に私ははじめて目がさめた。これより方法がない、自分の一生を人類に捧げていく、この道より行く道がない、と思ってお弟子にしてもらったのが、私が仏教に入る因縁だった。何もかも捧げて人類に奉仕しよう、これが菩提心です。やがて縁があって、この臨済宗大学に入

学し、八幡の円福僧堂で坐禪を教えてもらった。坐禪の真理がわかるようになった時に菩提心を起すということが人類の絶対真理だということが初めてわかった。

この学校でもいつも唱えるのが四弘誓願です。衆生無辺誓願度、煩惱無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成、この四つの願いしかない。人類の悩みを救って行こう、

そう誓うことが、仏教者の第一の願いでなければならない。

アメリカのサンフランシスコから二百数十キロ行ったところに禅センターがある。山上にまだ雪が残っている。谷底に立派な禅堂があり、アメリカの若い男女が瞑心をしている。一月十日から四月十日まで外に出ない、九十日の瞑心です。そこで四日間一緒に暮したが、日本でするとおりの修行をしている。朝三時半に起き四時から坐禪、般若心經を日本の通り唱え、それから英訳の心經、通代伝法——お釈迦さま以後の系図を誦み、南無喝羅怛那、そして衆生無辺誓願度を唱え、又英訳の衆生無辺誓願度を唱える。八時から一時間提唱をし、くれといわれたので話したが、九時から夕方まで労働をする。

物質文明の先端を行くアメリカの青年達が、物質は決して人間を幸せにしないと、人間そのものの探求に昼夜をわかつた熱中している。そして正しい指導者を求めている。この学校で四年間仏教学を勉強して、本当に坐禪をして世界が求めているこの要求に答えてやろうという人がひとりでもあることを私は心から願う。社会福祉科や仏教史、国文をおやりの方も、今忘れられつつある日本人の精神、東洋の心を本当にとりもどして、日本を救い、やがて精神的に大きな貢献を世界に与えて下さることを誓って下さるなら、私は幸せだと思う。青年よすべからく大志を持て。そして、どうかみなさんがいい学校へ来てよかったな、と喜んで下さることを心からお待ちする。(了)

(五月五日)

一九七四年（昭和四九）

★花園大学公開講演会・卒業式

花園大学では第四回公開講演会を、今回は九州で行なった。十月三十一日午前中北九州市八幡製鉄所親和会館、同日午後六時から伊万里市市民会館、十一月一日福岡市福岡県青少年勤労文化センターでと三回に分けて学長山田無文老師の「創造の人間の自覚」作家水上勉氏の「私の中の『寺』」と題しの講演が行なわれた。昨年は山陰の浜坂と松江、一昨年は岐阜でと、第二回からは地方へ出かけている。これはたんに大学の吹聴や学生募集の意図だけではなく、広く道を説き、やがて明日への人生の糧たるべき成果を念願しての、かつての伝道行脚を目指すものだと、大学の抱負は大きい。

三月十六日、花園大学第二十二回卒業証書授与式が同校講堂で行なわれた。山田無文学長は百四十四名の卒業生一人一人に卒業証書を手渡した。この卒業証書は学長の自筆によるもので、名前と生年月日は二晩かかって書き上げたという念の入ったもの。仏教学科三十八名、社会福祉学科五十二名、史学科三十四名、国文学科二十名の卒業生は様々の感懷をもつてこの証書を受け取ったことであろう。（一月五日）

★シンポジウム・靖国法案

出席 宗務本所役職員

花園大学教職員

禅文化研究所職員

於・宗務本所三階議場

時・四月二十三日

竹中玄鼎 ご承知のように、「靖国法案」が国会に提出され、しかも強行採決されるという事態が生じ、現在のところ衆議員議長あずかりという形になっております。私共宗教者として、宗教関係にたずさわる者として、これを黙って対岸の火事視することは出来ません。とにかく勉強会をもとうということ、お集まりいただきました。結論を出そうということではありません。無関心であってはいけない、ということで見ようではないかということで、今日の会を持ちました。

佐野大義 我々軍国主義の中で教育をうけたものは、その当時、人間を見る目さえも現在とは非常に異なっていたと思われまます。神さまを見る目もわかりです。死んだら靖国にまつられるのが希望で、逢うところも九段の桜の下、そうしたことに満足していた。そういう心の経験をつんだものが、靖国法案が自民党案で出され、靖国神社をお宮と思うてはいけない、宗教活動をしてはいけない、けれども伝統的に靖国神社という名前はつける、しかもこの法案の主体、任命は総理大臣が関与する、ということでありまます。このようなことを日本人としてどううけとめるか。私は山田無文学長のお供を

して慰霊行をしていますので、靖国神社と非常に關係が深いように思われますが全く異なります。けれども学長は、あれを宗教と思うな、象徴であるから反対する必要はない。又文学部長はあれは敵軍をまつてない。それでは平和の象徴になりえない。靖国万国慰霊塔ならいい、という意見でした。

戦争をこの地上からなくするのは我々の願いであるが、戦争と結びついた神社を国家が護持するのは、軍国主義につながる。戦争で死んだ人を国が守るのはあたりまえだが、国家権力が宗教に介入するのはまちがいである、として、京都仏教徒會議は抗議を申し込みました。竜谷大学では学生七〇人が大宮学舎にバリケートをはっております。花大は春風駭蕩です。学生が問題を起すことも困るけど、無関心であるというのも考えものです。

私は慰霊に反対するものではありません。国家権力が介入するのが反対なのです。法案をつくり、それで慰霊をすませるということにも問題があると思います。

荻須純道 神道というものは、日本人の民族信仰、日本人だけに通用するような特殊なものです。中国にも北京新教というものがあります。敵味方をまつるということになれば宗教になります。そうでなくて民族崇拜ということになれば、学長の考えに賛成できます。

市川白弦 あんなものは宗教じゃない、と言えば政府はよろこぶけれど開山、經典がなくても宗教の範疇に入れなくて

はいけない。もし宗教でないとすると、あれは一体何なのだろうか。戦争中の思想は靖国浄土です。靖国神社にまつられることが浄土に行くことになる。本願寺はそれに耐えられず、せい一杯の抵抗をしたのです。靖国神社におまいりすることは決して浄土につながらないと。あの本願寺でもそうした抵抗をしたのにどうにもならなかった。

総長 私は山田学長と同じ考えでしたが、なぜ靖国神社を宗教法人にしたのか、ということは今だに疑問です。神社は、乃木將軍や楠正成のようにえらい人をまつるというのが習慣です。それを今、さらに特殊法人にし、国家、政治家官僚が定めるのは本質的に間違っていると思う。宗教性によって英霊をまつるのでなければ、本当の慰霊にならない。そんな意味で反対です。

竹中 ただ、我々が考えている宗教というものの、キリスト教とか仏教とか、あるいは禅とか真宗とかいうものとは全く違っていると思うんです。そうした概念から言えば、あれは宗教でない、ということをやうまく利用されたところに問題があります。

市川 そうです。宗教でないとなると何か、宗教以上のものであるということになります。

花大職員 A ただこの法案が、妙心寺派にとって、花園大学にとって、どういう意味で重要なのか。

総長 教団としてはき程重要ではないが、仏教家として、

宗教関係に在るものにとって重要である。

花大職員 A 大東亜戦争の時、妙心寺派が「臨済号」を送ったという話を聞いたことがあるが、皮肉な言い方をすれば、そういう点で、妙心寺派にとっても花大にとっても重要なのかという気がしましたが。

竹中 そのことについては、実は我々も知らないことです。ただ、妙心寺派が「臨済号」を送ったということ、日本の国民が戦争を起したということは、同じようなことであって、その点については、戦争に参加するしないにかかわらず日本人全体が強く反省したことでその当時の人間がそうだったから、今我々がその責任をとらなければいけないことは違うと思います。

花大職員 B この問題を、たんに一般的に、仏教として禅宗として具合が悪いというとならえ方では弱いのではないか。だから「臨済号」を送ったように、一億全部がそうだったから、という形に終ってしまうわけです。妙心寺がどう関わり合うか、という掘り下げ方でなければ弱いわけです。

竹中 私共、個人個人が深く考えなければならぬことで、卒直に言って、教団でどうするかということとは不可能です。というのは妙心寺派教団の中にはさまざまな考えの方がいらっしやいます。討論し、個人的な見解を述べるのはかまいませんが、内局が上から、こういうようにしなければならぬというのは、非常にむづかしいと思います。

花大職員 C 自民党が何故これほどまでに強行採決に踏みきろうとするのか、宗教色云々より政治色の方が強いのではないか。自民党のねらいは遺族会の歓心を買ひ、選挙の票をふやすこと、憲法改悪をするための切りくずしの第一歩にしたいと、最近の田中首相の日の丸問題及び教育勅語を褒めたり、という、過去のイデオロギーに対する郷愁、復活のようなものがあると思います。

竹中 自民党の意図はどうかと、我々は結果的に反対なのです。

花大職員 D この問題をそれぞれの場に持ちかえり、花大は花大でもう一度討議をするから、宗務本所もそうしてほしい。少しでも輪を広げていくのではないか。

花大職員 E 私は、花大で法式の講義実習を担当し、また妙心寺の一員として法式を行なうなかで非常に矛盾を感じていることに、祝聖があります。これは天皇陛下の長寿を祝うという、神道的なことで、靖国法案以前の問題でもあり、こんなものやっていたいながら、靖国法案を論じる資格がない、という自己批判をしながら法義実習を教えているのであります。祝聖は、終戦と同時に失くなるものであらうと、私は内心考えていたのですが、今だに残っております。一日と十五日の祝聖は、足が重いのです。家ではやっておりません。また学生にも教えておりません。宗務総長さんにも教学部長さんにもはつきり申しておきます。教えようがないのです。接

心の時にもこの問題について学生から直訴されました、接心が左向きになったこともありました。これをぬきにして、靖国法案云々というのは問題外だと思えます。回向の内容が、日本の平和万歳だったら意味もあるでしょうけれど、天皇陛下長寿万歳だったら遠慮させていただきたい。矛盾があります。花園天皇が法皇になられ、剃髪されて関山慧玄禅師の法をつがれ一生懸命に人格を陶冶された、見性成仏された、それだったら法体として、我々は供養する、この点については矛盾はないわけです。ところが勅願所なるが故に、天皇陛下の聖寿万歳を下シ声で、私が維那をやっている姿の絶対矛盾は、まさしく冷汗三斗の思いです。形があるからやっているだけで、このような私を、どうしたら救い、教育していったらいいのか、お教え願いたいと思います。

佐野 私は、天皇は日本の代表者である、国民の象徴である、であるからその聖寿をお祈りすることは国と国民の万歳であるから矛盾はないと割りきることにしています。

総長 私の寺では戦後まもなく、祝聖をあらためました。世界平和、民衆安泰ということで祝聖回向をとなえました。本山も、教学部長と法務部長が相談して、いずれ回向文の改正があると思っていました、一向に何の動きもない、山田無文師や柴山全慶師の話を聞いても少しも触れられない。新しいタイプの老師でもその問題には触れられない。わかっていられるけれどもツカシイからやめておくのかなあ、と思ってい

ました。ところが、天皇は人間にかえるといわれました。国家の象徴になると言われました。それで祝聖回向も象徴と考えてもいいかなあと、もとかえしました。今でもやっぱりおかしいとは思っております。

竹中 真面目なお坊さんであつたら心に痛みを感じない人はなかるう、と思います。ただ、今この場でこのことを検討しろ、とおっしゃるのは無理ではないでしょうか。ある意味では法式梵唄研究会の方の責任でもあると思います。私は教学部長ですが、迂闊な発言は出来ません。

花大職員F こうした話し合いはただ議論のつみ重さねに終ってしまう危険性が多分にあります。せっかくここまで盛り上った気分を、持ちかえて検討していただくのも結構ですが、タイミングもありますので国家権力に対して、抗議電報を打つなり何らかの姿勢を打ち出してほしい。それからでも遅くはないと思います。

竹中 若い学生諸君に接しておられる皆さん方と、三千五百の未寺をかかえている宗務本所とは体質の違いもあり、同じような検討の仕方はむづかしい、ただ、シンポジウムを行なったということは、何もなかったという事にはならないと思います。

荻須 靖国にまつられている人たちは自分好きかってに死んだのじゃございません。宗教法人になっている特定のものを、国家が護持し、ひいてはそれが軍国主義につながるという

う危惧を持って、反対なさっているのわかります。ただ問題は、靖国神社にまつられている人をまつるのはいけないことなのか、ということなのであります。真宗は非常に靖国問題に対して関心が深い。真宗では神というものを認めないのですから。真宗の先生方が地方にかえりまして、靖国法案に反対しなければいけないと申しましたら、檀家の者が「和尚さんは子供が死んでおられんから、そういうことを言えるんだ」と答えたそうです。恐らく妙心寺派も地方が多いから同じだろうと思います。

総長 地方の人たちは、憲法を知らない人の方が大多数です。宗教法人法や信教の自由を知っているのは極く首脳の人で、それを知っている人は反対しているけれど、知らない人は、国のために死んだのだから国でまつてもらうのは当然だと考えている人が多いのです。民衆を教化していかなければならない教団が、その意志に反して反対だと言ったらどうなるのだろうか。自民党はそのことをよく知っていて、強行採決したのです。反対だけれども、それでもって教団として反対することは、三千五百の末寺よりもさらにばう大な花園会員からの抵抗があるのです。

佐野 学長は、この法案が通って国家護持になると、他の宗教がつぶれる、とすれば、それは宗教家自身の怠慢じゃ、本当に生きた説法をやらないからだ、とはつきりいわれました。

竹中 とにかく、宗教関係の問題に国家権力がタッチしてくることはあらゆる意味において、少なくとも私は反対であり、妙心寺派教団としても反対であると言つてよからうと思えます。ただ、三千五百の末寺云々ということをお願いしますと、保身をしているとお考えになられるのとは少し別の問題であると思えます。

佐野 だいたい今日のところの意見はこのあたりだと思うのです。

市川 讚美歌に、陽のあるうちに干し草を作る、というのがあります。まだ陽があるのですから、今のうちに干し草をつくっておかなければいけないのではないか。鈴木大拙が、アメリカのクリスチャンの集まりに出席された時、実は、日本の仏教家のほとんどはあの戦争に反対だった、と言ったところ、失笑をかった。その当時反対者は獄中にいましたからあなたは何をしていたか、と言われたそうです。(了)

(六月五日)

★花園大学本派子弟入学者名簿

▽仏教学科 三十一名

田 正博(吹田市瑞泉寺)、河北一直(大分県中津市自性寺)、伊万里良宗(佐賀県伊万里市格岩寺)、酒井康宏(岐阜県加茂郡明鏡寺)、石井孝雄(岐阜県関市香林寺)、関 大二(高知県中村市大平寺)、千葉一道(静岡県清水市真福寺)、渡辺弘明(静岡県清水市寿昌寺)、川本成吾(兵庫県高砂市臨川寺)、関

戸尚道（静岡県清水市瑞雲院、矢守崇一（山梨県南巨摩郡広福寺）、加藤昭史（島根県出雲市日藏寺）、坂口裕文（兵庫県明石市竜泉寺）、中川義章（兵庫県六栗郡仏心寺）、醍醐幸司（島根県安来市雲樹寺）、篠田浩史（別府市浜脚崇福寺）、松本興資（兵庫県加西市崇福寺）、寺本義雄（岐阜県大垣市禅桂寺）、石崎一之（岩手県盛岡市東禅寺）、加賀好文（京都府亀岡市天王寺）、太田垣満（兵庫県豊岡市楊岐院、式地正文（愛媛県宇和郡遍照寺）、安永正道（愛媛県新居浜市香積寺）、藤木琢磨（愛媛県大洲市如法寺）、益田邦彦（兵庫県尼崎市祥雲寺）久保田貴一郎（大分県日杵市掛町多福寺）、毛利孝道（広島県沼隈郡磐台寺）、阿辺学（福島県いわき市忠教寺）、飯塚裕司（島根県松江市法幢寺）、中川雅弘（滋賀県長浜市良禪寺）中田富夫（島根県江津市大隆寺）

▽仏教学科編入Ⅱ二名

三木芳樹（大阪市生野区難波寺）、城 一正（山梨県塩山市岩松院）

▽社会福祉学科Ⅲ三名

玉田 達（島根県鏡川郡玉昌寺）、谷 文人（広島県庄原市永寿寺）、大谷まや（北海道虻田郡北海寺）

▽史学科Ⅱ二名

伊藤治範（岐阜県山県郡普救寺）、田尻裕文（岐阜県美濃市順心寺）

▽史学科編入Ⅱ一名

中島義幸（滋賀県長浜市多田幸寺）

▽国文学科Ⅱ四名

徳林信道（大分県大野郡宝福寺）、山本 登（兵庫県氷上郡高源寺）、大石治宣（長崎県北松浦郡円通寺）、西山裕子（和歌山県東牟婁郡海蔵寺）
以上四十三名
（六月五日）

★花大で「青い鳥」上映

幻の名画といわれた「青い鳥」が、花園大学「青い鳥」上映実行委員会の手で、五月十八日同校四階の講堂で上映された。これはベルギーのノーベル賞作家メーテルリンク原作の「青い鳥」の無声映画で、日本で初めて上映されたのは大正九年三月、そして昭和十六年に上映禁止になった。フィルムは戦火で消失して幻の名画となっていたが、昨年暮れ、第一回上映から弁士をつとめてきた広瀬友久さん（七九）がニューヨークのフィルムライブラリーで、全四巻のコピーを見つけて、上映権も獲得、ニュープリントを輸入した。花園大学の講師梶山雅史さん（三〇）、職員沢元孝さん（二六）、同芳沢勝弘さん（二九）らがこの話を聞いて、その内容は仏教の精神にも通ずるものだから是非再上映したいと、同校教職員組合などの協力を得て今回の上映となったもの。この活動写真、現代にも十分アッピールするものを持ち、むしろこれからこそ「幸せはみんなの心の中にある」ことを知らせるべき名画で、同会では全国で次々上映することを考えているという。

福嶋先生出版記念祝賀会

福嶋俊翁花園大学名誉教授の著作集出版記念祝賀会が、去る十月七日午後五時から京都市東山区都ホテルで開かれた。

福嶋教授は花園大学で教壇生活五十年に及び、この三月同大学を勇退後もなお豊饒として学問的、文化的活動を続けられている。今回、これまでに発表された論文、評論、註解、解説、随想等のすべてを収めた著作集全巻が、東京木耳社から刊行されることになり、この祝賀会が催された。参会者百三十名という盛会であった。

(十一月五日)

一九七五年（昭和五〇）

★花園大学に入学するにはいくら要るか

昭和五十年度の新入学生から授業料その他が大幅に引き上げられ、左記のようになる。

(1) 入学手続に必要な納付金額

入 学 金	八〇、〇〇〇円
授 業 料	六〇、〇〇〇円
施 設 費	四〇、〇〇〇円
厚生諸費	一五、〇〇〇円
学会及誌代	二、五〇〇円
学友会費	三、四〇〇円
同窓会入会金	二、〇〇〇円
合 計	二〇二、九〇〇円

(2) 入学手続と同時に納入する協力金

寄附金（一口以上）	（一口） 二〇、〇〇〇円
学 債（一口以上）	（一口） 一〇〇、〇〇〇円
(3) 入学後に必要な納付金	

授 業 料	六〇、〇〇〇円（後期分、納期九月）
書道実習費	三、〇〇〇円（受講者のみ）
福祉見学費	一、〇〇〇円（福祉科全員）

右のうち、(1)と(2)は納付期限は左記の通り。

推薦による入学者—一月三十一日

第一次試験による入学者—二月二十八日

第二次試験による入学者—三月三十一日

なお、この納入期限内に納入されない場合は入学が取り消される。学債は四年後に元金が返済される。

今年度の推薦入学受付は五〇四名で、一七二名が合格、うち一六四名が入学手続を済ませた。第一次試験では三八六人が受験、一二七人が合格した。第二次試験があるが、これはかなり狭き門となる。

今度の値上げは、現行の初年度学費約十七万円が二十六万円になるもので、学生は去る一月二十四日の学生大会で学費値上げ阻止などを決議して無期限ストに入った。

大学側は、今回の値上げは大学の近代化のためで、女子寮、食堂、研究室など設備に一億一千万円、視聴覚教室に二千万円、教員の新規採用に一千万円、人件費の二〇%アップによ

る三千八〇万円増などによるもので、最低必要限度の値上げであり、内容の充実を目指すものだとしている。因に、花園大が年間二十六万円に対し、他大学を比較してみると、平安短大四十七万円、精華短大四十五万円、大谷大二十九万円、仏教大二十七万五、〇〇〇円、竜谷大二十七万円、立命館大十九万円となっている。なお、第一次入試がスト決行中の二月十二、十三日に行なわれたが、学生との摩擦はなく、静かな入試風景と、ものものしい玄關のスト風景とに違和感をもった父兄もいたようだ。

(三月五日)

★花園大学入試改革へ

―学科試験やめ、小論文だけ―

花園大学では、五月十九日の教授会において、五十一年度からの入試は、二次試験は学科試験を従来通り行なうが一次試験では、これまでの学科試験を廃止し、小論文テストのみにするという方針を打ち出した。一次試験を小論文だけに踏み切ったのは花大が初めてのケース。この方針については、五十年度に学科試験と小論文テストを行っており、そのデータに基づいて、いろいろと検討し「論文で高い評価をされた者は学科も平均以上だった」という結果から小論文テストに決めたもの。五十一年度は、高校のカリキュラム改定後の入試であり、このような方針はこれからの入試改革に大きな波紋を呼びそうである。次に50年度に出された「小論文」テストの例。

〔留意事項〕

この「小論文」テストは単なる「作文」（思いつきの感想文や随筆文）テストではありません。課題文を読み、それについてあなたの考えをまとめ、すじみちを立てて論述するものです。

・課題文の内容を的確に把握しているかどうか。

・独創性がみとめられるか。

・論述の内容にすじみちが立っているかどうか。

・文章構成や、ことばの用い方・文字などはどうか。

といった諸点が評価の対象となります。なお受験生各人の思想・信条ならびにブライヴァシーにふれる面は評価の対象から除外されます。

昭和五十年 一次 小論文

次の文章を読んで、筆者にとっての「正月」と同じような意味をもつ事柄を例にあげて、あなたの考えを八〇〇字以内にまとめなさい。

正月の孤独

「正月はぼくたち独身者にとって残酷な習俗である。正月は家出息子や独身者を疎外することによって、日本人に家庭Vのありがたさを認識させるために発明された制度であるらしい。」

とりわけ元日はどの食堂もパン屋もしまっていて、私はお腹をすかして街をうろつき、仕方なく下宿にかえって古いおもち

を焼きながらラジオをきいていた。友だちはみなそれぞれのふるさとや家庭に帰って、親兄弟や親族と団らんの時をたのしみ、恋人もいない私は、アルバイトの翻訳に日を過ごしながら、ひたすら早く正月がゆきすぎることを待っていた。だから正月は私にとって、家出少年の自由を処罰するために社会がもうけた刑罰のように思われた。

私があるところ、ひとり身でいるということに不幸をしみじみと感じたのは、ただ正月の三が日だけであつたように思う。考えてみるとわれわれの△家庭▽はもともと、この正月のためにあるようなものかもしれない。すでに多くの都会人にとって、△ふるさと▽が事実そのようなものであるように。それはともかく、多くの人がとが幸福であればあるほど、ある人びとにはいつそうみじめな日であるような、そういう季節があるように思う。(見田宗介「現代日本の心情と論理」)

× ×

あとで発表された解説文によると、この小論文は、課題文の筆者にとつての「正月」の意味を読み取り、ほかの例をあげて、あなたの考えを問うものです。といい、正月と同じ意味内容を示すものとして、「結婚」ということを取り上げ、多くの人々が結婚しているが、他方では、そのことが結婚をしない人、あるいは、結婚が出来ない少数の人びとを苦しめることにもなる。「結婚適齢期」というものも本来固定的なものではない。また、小学校への子女の「入学」、「球場

の歓声」の例を取りあげて、解説者は最後に、このような習俗、生活慣行の場合には、多くの人びとが誰でもが、こうしているからということが、判断の基準になり、したがってそうしない人、そう出来ない人、すなわち少数者にとっては、不都合、不利益、不便がついてまわり、さらに、それが社会的公正にかかわるような場合には、これを是正するような努力と工夫がなされなければならないというところまで、議論が拡大されてくることになる。と、いうことでしめくくっている。これは、受験生が自分で考える力、つまり判断力をもっているかどうかを見ながら、文章全体から学力を判定しようというもので、これが一般化すれば受験地獄でゆがめられている高校教育の是正にもつながると、新しい入試制度への試金石として注目を浴びている。

また、次の設問と解答例は一次、社会科(倫理社会)のもので、九問のうちで配点の最も大きくみられたもの。花園大学の目指す人間像を伺い知ることができる。

設問の前に、「受験シーズンに間近にある休日の午後―父と娘の対話」というのがあって、それに関した設問である。

〔設問〕 ▲「なぜみんなが大学に行こうとするの?」という花子の疑問に、父は十分に答えていないようです。さて、あなたの場合はなぜ大学を受験する気になったのかおきかせください。そして、その後でもしあなたが父親だったら、花子の質問にどう答えますか。その点もお聞かせ下さい。

〔解答例〕

▲「ただ何となく」というのが実感です。幼稚園・小学校から高校まで、「学校はもうたくさん」という気もしますが、「もう少しやってみようやないか」と思って受験しました。深い意味はないのです。それに実社会に出る前に、あと四年間の自由な時間が保証されることは、すばらしいことです。父も母も、わたしをもう少しそばにおいておきたいのやないかしらん。

▲私が父親ならば、次のように答えます。人もゆくからわたしも、というのが本音だろうネ。それにいろいろの資格もとれるしネ。花子があと四年間、わたしたちのそばにいてくれることはうれしいよ。一昔まえ、女子学生亡国論というのがあったのを思い出すヨ。文学部はどれも女子学生ばかりで、花嫁学校みたいになってネ。少数の男子学生は「七人の侍」なんてさわがれたものサ。カネよりもっと大切なもののあることを、大学でしっかり味わって欲しいネ。国家は大学を希望する若ものがすべて入学できるような制度をつくることだ。戦争や公害で国を亡ぼすより、女子学生で亡びた方がよいと思うヨ。

★花大へ宗門の新しい視線を

西村 恵信

●次元の低い「花大亡禪論」

花大亡禪論なるものが行われていると複数の宗門人から聞いたことがあります。本山参拝の帰路、花大の門前を通ら

ると、すっかり面目を一新した学舎のそこかしこに新中國文字が大書された学生運動の看板が立ち並んでいます。臨済宗大学や臨済学院専門学校時代への郷愁にかられて母校を訪れた同窓生はもとより、そうでなくとも花大に悪い評価を与えてこなかった宗門の人々にとってさえ、花大キャンパスのこの光景は何とも異様で、宗門にとって全く親しみのないものに映るのは当たり前です。私はこのようにして深められてゆく宗門人による花大に対する誤解と偏見を困ったものだと思うと共に、それを安易に花大亡禪と結びつけてしまう無思慮な宗門人に一種の怒りを禁じ得ません。ましてこの人たちの亡禪論が実は亡教団を憂いてのことだとわかると、何と花大への宗門の期待がそんな低次元のものであったかと怏しくさえなってくるのです。

それでもまだ花大のあり方を宗門の存亡と結びつけて考える宗門の人々に対しては、大きな責任をもってこの人たちの懸念に応えなければならぬと励まされることになるわけですが、宗門の行方も思わず、ただ在家以下にさえ俗化した寺庭の経済生活を守ることだけに関心し、尊い宗門の後継者となるべき子弟をマネービルの機械に仕立てさえすればよいとする種の宗門住職のことを思うと、教団を亡ぼしにかかつているのは一体誰のことかと言いたくなります。

私は、今なお宗門の将来に希望を捨てがたくて一途に花大に学を志さし、宗門の現状が許しがたいものとなっているこ

とに次第に怒りを感じ、雨降るキャンパスに立つて、真人間の根底から溢れでる純粹な叫びをあげている心ある宗門子弟の情熱と純粹さに共鳴し、彼らの健闘を心で祈る毎日に歎きを感じざるを得ません。かつて高橋和巳が、京都丸太町教会に起った若手信者の造反に對して、「こうした事件が起りうることを自分が、キリスト教精神というものが、現代の思想や社会との不適応に身もだえしながらも、なお完全には死滅していない証拠であつて、他の教団に先立って青年信徒の造反があつたことを以てむしろ名譽とすべきだ」(『波』一九六九年九月・十月号)と述べたことばに強い印象を受けた私は、花大こそが宗門のエネルギーの源泉であるべきの信念を強めたものでした。

花大に入学してきた宗門子弟は、好むと好まざるとにかかわらず多くの在家出身の学友たちからの宗教批判、仏教教団批判、更に寺院徒弟としての個人に向けられてくる批判から逃れることはできません。将来、住職の座についてからは決して聴くことを得ない民衆の、人間性の根源から出た、純粹で嘘のないことばを毎日のように身に浴びて、花大の宗門生は必ず「強い和尚」「巾をもつ和尚」「禪の何たるかをほぼ間違ひなく見当づけている和尚」となる資質を身につけて卒業していくのは何とも頼もしいことです。已事究明が刀を打つことに比せられるならば、花大は炎の燃えさかるつぼであり、溶けるまで熱せられる場であり、これがなければ道場

での鉗鎚が鉄の芯まで届かないとさえ思える必須の通路であると思います。

在学中、一般学生の批判の前に禪門の徒としての自信にぐらつきを見た宗門生が、卒業と共に僧堂へと急ぐ気持は、その言動の中に看取することができます。因みに今春三月卒業した宗門生の中の約八〇%に当る四十五名が僧堂へ掛搭したのを見てもらえば一目瞭然でしょう。花大亡禪とは一体どういうことなのでしょう。

●花大は大きく変った

確かに花大は、かつての宗門後継者の沙弥教育代行機関としての旧花大を脱皮したといえます。仏教学科単科大学が始めて仏教福祉学科を増設した昭和三九年度より、それは社会に開かれた、禪の精神を建学の精神とする宗門立の大学として大きな転換を迎え、続いて史学科、国文学科を加えて文学部へ発展し、経営の母体も学校法人妙心寺派教学園から学校法人花園学園と改称されることになったわけです。従つて、学校全体の雰囲気も新鮮なものとなり、教員の平均年齢を見ても三十五才という異例の若々しさです。また花園大学という美しい名称と文学部という学部性格から女子の志願者も多く、昭和五十年年度学生数一、〇四四名中の三六四名が女学生で雨の日の花大キャンパスはカラフルな雨傘の大パレードです。教職員の間も同様七名の女子教員と九名の女子職員が、花園に柔らかないムードを盛りあげます。

専任教員四二名、非常勤講師四四名、それに事務職員二八名を加えて実に一一四名の教職員が文字通り一体となって新しい花大づくりに日夜努力しているわけです。学生数は今年五月現在一、〇四四名ですから、施設の乏しい花大は、学生数に対する教職員の割合が実に豊かで、その気になれば対面教育の可能性はいくらでもあるわけです。

それに比べて全花大人中での宗門人の数の占める割合が著しく低くなったことはごく当り前のことで、専任教職員六九名中、いわゆる僧籍をもつものは、教員一二名、職員一一名の二三名で三二%です。学生の方はどうかといえは今卒業した学生一七一名中、五九名が宗門生でした。また現在学生の一五%が宗門生となっています。

更に、本山から花大への補助金はどうかといえば、昨年度（四十九年度）決算報告によれば、約一、六〇〇万円で花大年間総収入約二億三、一〇〇万円に対して、わずか七%にすぎないので。ところが国庫補助金は約七、〇〇〇万円で総収入の三〇%となっていますから補助金の面では国立大学なみです。

おまけに、花大に対する社会的評価の昂まりと共に、入学志願者が急増し、その入学難度上昇率の高さは、受験雑誌『螢雪時代』も注目するところであり、過去三ヶ年に志願者は三・五倍となり、従って合格競争率は、今年度の場合で平均三・五倍（仏教一・五倍、社福四・四倍、史学三・七倍、

国文三・六倍）となっています。ところが宗門からの志願者はというと、昭和四十二年度に九十五名であったのが漸減して過去三年間は八十名を割っているのはどういうことでしょうか。

●新しい「花大像」

さて、歴史の動きと共に花大にも起ってきた右のような変質に対して、宗門出身の教員の一人として私はその変遷の渦中にあつて非常に複雑な気持を抱きつづけてきたわけですが、近年、特に学園紛争を契機として花大教授会の中から盛り上つてきた新しい花大像や花大の理念が、次第に教職員相互の共通意識となつてふくらみ始めると共に、私は、本派の教育機関としての花大の意味づけについて今までと違った考えを持つに到りました。すなわち、従来のように花大を宗門後継者養成機関として単なる宗門のエゴイズムの中に収めておくことができなくなっているということです。社会は花大にそれ以上のものを求めている。世界的な広がりをもつ禅的関心もその一つでしょうし、人間教育という機械文明のひずみからくる今日的課題への注目もそうでしょう。

花大は、いまの大学制度の中で起っている多くの問題点について、それを突破しうる条件を一杯もっています。その一つが小規模大学ということです。花大へ志願する高校生の多くが、マンモス大学をさけてミニ大学を志願したと報告しています。そこには教職員と学生との親密な信頼関係のあるこ

とを高校生たちはよく知っています。学生の意見が教授会によく反映し、教授会の中での若手教員の意見や希望がよく大学当局に反映し、小まわりのきく日進月歩の大学改革ができる点で、花大は実に発展を約束された大学です。それにもちろん江西寛堂学園理事長、山田無文学長、佐野大義総務部長といった人たちの虚心で淡白な経営姿勢があることは大したこと。私立大学についての私の知る限り、わが花大は東の和光大学や桜美林大学と並んでわが国切つての新しい大学であるといつて差し仕えないと信じます。

試みに、かつて大学改革のための大衆団交や全学集会によって全花大人が確認した左の各項を見ていただきたいのです。一、大学最高決議機関としての花大教授会の公開。——これは世界的にも珍らしいことでしょう。

二、一切の処分権を行使しない。——事実上の無処罰主義で最も理想的なこと。——

三、思想信条の自由を保障するための「学園よりの暴力排除の確認」。——暴力行使者は個人の責任で法の下に裁かれるべきこと。

四、大学経理の公開。

五、制度としての出席制度の撤廃。

右の諸項は、教職員と学生が相互信頼に立ち陰湿な権力による支配被支配関係を再生させないための最低条件ですが、これによって、私たち教員は何と清々しい気分です。

ることができることでしょう。学生はすべて開かれた大学の教学、経営姿勢の前に常に主体的な責任をもって対しなければならぬわけ。学園紛争以後の教室における教員と学生の緊張関係の厳しさは、旧い花大の比ではありません。年々単位不合格者、留年者が増えていることがこれを示しています。

●理念の実現「入試改革」

花大が掲げて進む教学の理念は、学生一人一人のかけがえない豊かな人格と個性の伸張を基本とした人間的な教育と研究の実現です。そのためには、それに適した学生を迎え入れなければなりません。これこそ花大教授会が昨年度から力を入れ始めた入試改革です。詳しいことは正法輪の八月号や各方面の報道（読売・毎日・日経・京都などの各紙）で御存知と思いますが、一次試験における学力試験の全廃は、有識者から高い評価を受けているところです。学科試験に代えて行われる本学の小論文や面接には、学科試験に比して数倍のエネルギーを必要とし、平均的能力の評価に比して特殊能力の発掘は決して容易なことではありません。花大が比類なきユニークな大学としての存在を世界に示す日はもう遠くないと思います。

そして、そのような大学がどうして生れたかを世界の人が改めて考え始めるとき、その根本に禅の精神があったということにならないでしょうか。禅を建学の精神にもつということ

は、そういうことであり、それを誇りとすべきであるとは強く信じます。妙心寺派が、そういう大学づくりに深い理解を示し、尊い一派の淨財を投じることが、ひいては宗門の有能な子弟を結集する禪学の府を再建することに他ならないと思います。従来、花大に対して正しい評価と関心をもつことなく、単に宗門生のためのデモンストラティブ施設としか考えてこなかった人の多い中で、大事な子弟を二人三人と送りつけてきている有識住職の先見はやがて証明されるに違いありません。

●新しい「花大」に新しい宗門生を!!

過去数年間、在家出身の教職員や学生から加えられた花大旧態勢への過酷なまでの批判と改革は、今にして思えば、花大が新しく生れかわるための陣痛であったわけです。宗門のエゴイズムに基づく宗門内のズル和合こそ花大沈滞の根源であったことは確かです。新しい花大に新しい宗門生を迎えることこそ、新しい宗門づくりにつながると思います。一派諸老宿はもとより、大学を志さされる宗門子弟の新しい視線を、新しい花大に注がれるよう切望する次第です。

教授会の諮問機関である教務委員会の代表という公的立場と、花大の同窓生で宗門人の一人であるという私的立場を踏まえ、更に私事ながら、五年後、わが息子が大学を志す場合、花大がどのように評価されているかという私にとってさし迫った気持もあり、このような形で花大からの叫びを宗門に公

けにし得たことを有難く感謝いたします。

(花園大学助教)

(十月五日)

一九七六年(昭和五二)

★花園大学移転決まる

去る二月二十三日(二十八日の第四十四次定期宗議会において、花園大学移転に関する緊急動議が持ち込まれ、議員全員協議の結果、先ず移転候補現地を視察した後議案三十二号として上程され、審議可決された。

もともと花大移転の事は十年程前から話題に上っていたが、近年学生数の増加に伴い、その緊急性が強く全面的に打ち出されるようになったものである。この程、具体的に日本レスバKK春日寮(京都市中京区西ノ京霊ノ内町)の後地(六千六百八十坪)が候補地として前向きに検討されることになった。春日寮の位置は花大から徒歩十分程度の距離にあり、かつては、全国各地から一二〇〇余名の女子職員を収容していた。現在、体育館、食堂、講堂などがあり、なお改造すれば研究室、クラブ活動等にも利用出来る建物もあり、更に本館と禅堂及び教室を新築すれば大学としての機能は十分發揮できる状態である。土地の広さは現大学の三・三倍に当り、駐車場、運動場も整備される計画である。その土地購入費約十六億五千万円、建物建設費約四億五千万円を要するよう

ある。その収入方法は、私学振興財団から八億円、大学の自己資金五億五千万円、現大学の土地並びに建物七億円等となっている。なお利子その他に要する不足分は銀行借入れ、学債及び寄附金となっている。

このうち妙心寺派からは現在の土地建物を妙心寺派に帰属せしめることを条件として、協力金七億円を提供するというものである。この七億円については賦課金の増徴、花園会費の増徴、寄附金の募集、派債の募集等ということで話し合いがまとまった。具体的には花園大学に対して妙心寺派から昭和五十二年三月四億五千万円、五十三年三月一億二千五百万円、五十四年三月一億二千五百万円を支出することになっている。これの造成については宗会において設置せられた花園大学移転協力委員会において審議されることになっている。

(四月五日)

★花園大学移転に伴う、現花大校地及び建造物・施設を取得する件

「中外日報」その他で御覧になっておられることと存じますが、議員さんなどからの御報告もあって、既に何らかの情報が達していることと存じますが、事が事だけに不正確な噂話や、不十分な情報からで、正しいコンセンサスが得られないと、重大な過誤を生じ、思わざる結果になっては困りますので、概略を記して、全宗門内御寺院、更に檀信徒の皆さまにも御理解を得て、絶大な御協力を得たいと存じます。

花園大学の移転は、兼ねてからの懸案であり、従来もその移転先を物色しており、何箇所かの仮候補地もありましたが、所謂「帯に短かし、たすきに長し」の状態でありました。然るに最近（今年一月下旬）に現花大より東南約六〇〇米の至近距離に突如として約六七〇〇坪の売り物があり、而も、その敷地内の既存施設が学校としても充分使用に耐え得るものであるため、大学は、ほとんどその移転を決意しました。（日本レィスKKの女子工員千二百名の寄宿舎あと）その資金については私学振興財団よりの借入と、現校地売却の資を当てるということとであります。現校地は学校法人の所有地であり一応、本派の財産ではない訳であります。この売却先は本派以外には考えられない訳であります。（若し、他に売却譲渡するが如きことが生じたら重大なことになるでありません。）そして、その価格が約七億円と評価されています。もちろん、本派の現状でこの巨額な金がある筈はなく、一時は当局も、殆んどその可能性の無さを認めて、現校地を売却せしめるの止むなきかとも考えるほどのジレンマに陥ったのであります。が、隣接の現花大校地（二〇〇九坪）の取得から生ずるメリット（利点）を思うとき、本派百年の大計より案じて、この取得を決断し、宗議会にその賛否を問い、併せて、その取得に要する資金の銀行よりの借入についての賛同を求めたのであります。宗議会においても議論百出、討議に討議を重ねて、「花大の現有校地を取得し、本派財産に帰属せしめる」とい

う根本命題と、年次計画による借入金をするこの方針を可決したのであります。

資金借入は将来において当然その返済を要するのでありますが、その具体策については、宗議会の議決によって定められた特別委員会において十分に検討されることになっていたのであり、その委員会は各方面を考慮して構成される手筈になっております。

校地取得の爲の支払は七億円ですが、五二年三月一日に四億五千万円、五三年三月一日に一億二千五百万円、五四年三月一日に一億二千五百万円の延べ払いが予定されております。一応この七億円は前述の如く借入金によるのでありますが、その返済方法については、いろいろな方途が考慮されており、さまざまな試算が行われ、いくつかの案が出しましたが、何れも決定的なものではなく、あくまでも、特別委員会によって今後研究検討されていく訳で、何れは各寺院、全檀信徒に何らかの御協力を願わねばならぬことは言うまでもありませんが、既に各地でいろいろな臆説や噂話が時には悪意をもって伝えられているときえ仄聞されておりますが、現在においては、具体性をもった決定はないというのが事実であり、できる限り負担を少なくする為にはどうしたらよいかを、真剣に考究しているのであって、是非、この点御理解御協力を得て頂きたいと思ひます。去る三月二十九日、第一回の特別委員会が開催され熱心な討議がされた結果、(1)

新たに取得される現花大校地及び施設に仮りの大祖靈堂（仮称）を開設して全檀信徒各家の小位牌を安置し、その爲の冥加金（額未定）を納入して頂く、(2)特別寄班賦課金、(3)特別法階賦課金、(4)その他特別寄付金、等々を、最も合理的に運営して募財を行うという方向が話し合われたのでありますが、飽くまでも慎重を期する為に今後、この委員会を重ねて開催し、その具体策を検討することになっております。次の会合は五月末頃を予定しております。なお募金の実施は、申すまでもなく遠諱円成後のことになります。

現花大校地並びに施設を取得することによって得られるメリットの予想について申述べます。花大は五十二年三月十日までに全面移転を完成する予定であるので、現施設の模様替えまでは不可能であるが、微妙大師大遠諱には既に本派の財産に移転登記され、何らかの利用も考えられます。その後において、後継者養成のための「花園禅塾」は、ここに移転されて現有施設の利用、模様替えによって活用されること。「禅文化研究所、図書館」は大衆禅堂、布教々化センターに直ちに利用されるし、図書館は雑庫に転用される。又、今後において地方寺院、檀信徒よりの受入れざるを得ない宗務本所及び花園会館議員の宿舍と設備、また現在最も困難している参拝者用駐車場としての利用、更には、全国全花園会員の「先祖代々」の小位牌を安置する「大涅槃堂」の構想など、本派百年の大計としてはかりしれぬ程のものがあることを確信す

るものであります。

何卒、皆さまの御理解によってこの大事業が完成すること
を熱願し、祈念して、大きな困難は予想されますものの、そ
れを踏みこえてゆく強力な、お力添えを冀うものであります。

(宗務本所)

(五月五日)

【特別論稿】

★花園大学総合移転に際して『建学の精神』を考える

——老宿の書簡に答えて——

学長・教授会・理事会の見解

「宗門の一老宿より花園大学教授会に宛てられた書簡」

謹啓上 梅雨の候 花園大学諸教授には、教学振興の為め
日夜御尽粹遊ばされ、殊に今回の大学総合移転に当っては並
々なぬ御決断と、その実現までの御辛勞の程を拝察いたし
居ります。先日も学債募集趣意書・花園大学通信を拝読し、
学長老師の「設立の因縁・建学の精神を深く心にふまえて」
と仰せられています所に至り、深く感動いたしました次第で
す。それに就きまして、昨今の花大情勢を見聞するにつけて、
これは私一人ではなく、恐らく一派の多くの方々が疑念とし
て居られる処は、現状が果して設立の因縁と建学の精神が遵
奉されているのであろうか、ということでございます。

先年の大学紛争に関しても、学校当局から未だ一言の遺憾
の表明も承っていません。又理事会と教授会との間、教授会

の中に在っても、建学の精神を同じく口にされても、その具
体的各論に至っては、それぞれ甚だ不一致の点が多いやに思
われてなりません。某氏の正法輪論説には、「花大を宗門後
継者養成機関として単なる宗門のエゴイズムの中に収めてお
くことができなくなっているということですよ云云」と言われ
ています。

申上げる迄もないことですが、明治の進運を觀取されて、
それまでの寺院内の難僧教育のみでは不足である故、禪堂に
入るまでに、禪の躰とともに一般學問の教養を身に付けさせ
るために、明治五年に釈迦水師を総理として般若林が創立さ
れたことは、歴史的明白事であります。宗門後継者の育成、こ
れが第一の使命でありましょう。次に時代の変遷に随い、社
会に開かれた學府として、禪的教養ある人材を社会に送るこ
とも任務となつて参りました。これが第二の使命であらうか
と考えられます。この二つの使命を別々に切り離して見る所
から、宗門後継者養成を「單なる宗門のエゴイズム」とする
思考が出ることもなる。この二つの使命の發生には大きな
前後の時差はありますが、丁度車の両輪と同じで、裏を返し
て言えば、宗門後継者養成の任務を果せない學府が、社会に
対してどうして禪的教養ある人材を送り出せるでありまし
うか、と申すことになります。

今回の総合移転が花大は勿論、本派未曾有の画期的な大事
業であることに思いを致しますとき、先ず何よりも緊要なこ

とは、理事会・教授会一致した建学精神に基づく二つの使命を調整した明快な理念を論文にされて正法輪に掲載されるとともに、一般関係者にも配布されることであると存じます。然して之をなされるのは只今を措いて他にはないと思います。

これによって、理事会・教授会の理念の不一致も無くなり、一派及び関係者従来の疑念も解消し、感奮団結して協力することにより、新学園建設が一層促進されることになりましょう。

尚、新学園将来の運営も明朗となることを信じて疑いません。

以上甚だ至らぬ趣意ではございましょうし、また誠に失礼な言もあつたかと恐縮に存じ上げますが、本派の一員として花大の発展を念願する衷心より敢えて要望申上げるものだと思います。

誠恐謹白

昭和五十一年六月九日

山陰東教区第二部

観音寺小住 斉藤 禅 忠

九拜

追敬伸 同文を花園学園理事会にもお送りしています。

花園大学教授会 諸教授 侍史下

花園大学の使命

花園大学学長 山田 無文

明治五年、妙心寺派が、宗門後継者育成のための教育機関

として、般若林を設立されてから、已に百余年を経過した。その間、花園学院から、臨済宗大学となり、臨済学院専門学校と変り、今日の花園大学になるまで、紆余曲折、さまざまな経験を嘗めて来たことは、明らかな歴史的事実である。

元来、宗門の後継者として、禅的、又広く仏教的知識を授け、なお広く一般的學術を学得せしめ、學識豊富、人格高深なる、社会的指導者として、有為なる人物を育成することが、建学の精神であつたことは明らかである。

学生は宗門の子弟に限られ、職員は学長始め宗門僧侶によつて担当され、教授陣も宗門関係の諸先生が多かつた。謂わば、妙心寺経営の私塾に過ぎなかつたのが、過去の本学である。

昭和四十一年から、仏教学、社会福祉学、史学、国文学の四学科から成る単科大学として、広く社会に向つて門戸を開放し、新しく出発することになったのである。それは時代の趨勢に依るものであると共に、宗門大学の使命でもある、と言わねばならぬと思う。門戸をいかに開放しても、禅的人格を形成し、社会的に有為なる人材を育成するという建学の精神には少しも抵觸するものではないと信ずる。

今日、社会一般が、いや世界の人心が、禅に関心をもち、禅的人格の形成を希求している時、本学こそ社会の要望に應える適切な学園といわねばならぬ。年々、入学希望者の増加する事実が、その事を明らかに証明するものであらう。従来

のように、一クラス二十人か三十人の宗門学生だけが、忘れられた孤島のような社会の片隅で、陰鬱な藝的生活を営むよりも、一般学生と共に相語り、相論じて勉学することが、宗門子弟にとってもどんなに生き甲斐を感じるであろう。

しかも近來、寺院の子弟が、その後継者となることを厭うて、世間の経済或は産業等の一般大学へ入って、還俗するものが多い今日、花園大学仏教学科禅学専攻の卒業生の殆んどが、卒業と同時に僧堂へ入って、立派な寺院の後継者となってくる事実も高く評価されねばならぬであろう。それどころか、一般学生が花園大学に入ったがために、禅に志し出家を希望し、寺院の後継者となって活躍しておる者も多々あるのである。

今や、アメリカでもヨーロッパでも、禅こそ真の人間教育の基本であり、今後の世界を救つてゆく宗教は禅しかない、と高く認識されて居る。そうした今日こそ、本学が更に広く門戸を世界に開いて、世界唯一の禅の大学として、発展すべきではなからうか。

纔かに宗門の後継者をのみ養成するだけの大学ならば、宗派的エゴイズムと批判されても弁解の余地は無いであらう。

宗門そのものが、今日、社会に向つて何をして居るであらうか。檀信徒の葬式と法要のみにあぐれていてはならぬと思う。勿論、葬式にも法要にも信心決定の機会として全心全力を挙げてとりくんでおる人も沢山ある。宗門の子弟が寺院を

嫌うのも、死者の供養に明け暮れる生き方に、大いなるレジスタンスを感じるからではなからうか。

釈尊は死者の葬儀をなさつたことは一度もない。一周忌、三年の法要は儒教の精神で、七年以上の法要は、日本民族独特の習性である。「一切の男子は之を父と想い、一切の女人は之を母と想え。生々世々の父母なり」と明示された釈尊のお言葉こそ、仏教の真精神であろう。現実生きておる社会人のすべてをして安心立命させることが、仏教者の、殊に宗門の使命ではなからうか。その意義ある使命感を感じしめるところに宗門子弟の生き甲斐があり、その生き甲斐があつてこそ、進んで寺門の後継者となり、宗門の発展は期せずして達成されるであらう。

花園大学は僧俗を問わず、すべての学生に人生の意義と価値と使命と幸福を自覚せしめる大学でなければならぬと確信する。それには先ず教職員の諸先生方が率先して禅に参ぜられんことを願つて止まんものです。

花園大学の『建学の精神』ということ

(八月五日)

花園大学文学部長 常盤義伸

はじめに

花園大学の設置者である学校法人花園学園理事会は、今年二月十九日、大学の総合移転を決意し、妙心寺派宗議会もそのあとこれを議決されました。これが本学始まって以来の重要な出来事であることは、関係者の皆様のご承知いただいて

いる通りであります。学園理事會が、同窓會理事會と一緒に、大學關係者に対し校舍新改築の資金調達の目的で學債募集の依頼を始めましたことも、ご存知の通りであります。大學教授會は、この總合移転を学園理事會が十分な資金の余裕があつて行なっているのではないことを承知していますだけに、理事會の決意で始められたこの移転事業が万一支障を來し、大學の財政破綻を招くことがあつてはならないと考えますので、この學債募集の計画が、幸い關係者の暖いご賛同を得て順調に進められることを切望することは申すまでもありません。

學債募集の計画が順調に進むか否かは、右に述べます通り、大學關係者、同窓各位からご協力をいただけるかどうかにかつておりますが、さらにその各位のご協力の有無如何が結局は大學のあり方について皆様のご理解とご賛同をいただけるものであるかどうかにかつていふことになりまふと、この學債募集計画が教授會には直接關係のないところで進められていふものとは言えないことになつて参ります。大學關係者・同窓の各位が本學のあり方を是とされず、これに失望され、存在意義を見出されないことになりましたならば、この計画は思わしい成果を挙げることはならないと存じます。われわれ教授會員としましては、今この總合移転の事業を契機として大學の存在意義そのものが問われていると考えずにはおれません。それにつきましても、われわれが果してその

存在意義を自覺的に捉えそれを具体化する道を歩んでいるかを自らに問いますとき、自らのあり方について誠に慚愧に堪えないものがあります。

この移転の問題に関連して学内におきまして學生諸君から、大學当局に投げかけられています問題点は、整理しますと結局、大學が教學上何らか大切な視点を欠いてきたためにマス・プロ化の道を辿り大學の形骸化をもたらしているのではないかと、という疑念であります。學生の一部には、本學が昭和四十一年にそれまでの仏教學部から四学科を含む文學部になつたところにマス・プロ化の出発点を見る諸君もあるようであります。特に昭和四十四年秋の學友會による教授會相手の大衆団交の折には、大學關係者の間に、専門學校に戻らうという声もありました。あれから七年たちました今、總合移転事業が進められるなかで、本學のあり方が学内外から問われてくることは当然ではありまふようが、われわれ教授會員としまして責任の重大さを痛感せずにはおれません。

＊

そのような状況の中で、最近宗門の老宿の一人から大學教授會宛に、花大のあり方を憂える思いに溢れた一通のお手紙が届けられました。その内容は第一頁に掲載の通りですが、そこに求めておられます教授會見解をここに発表させていただきます、大學の同窓、宗門の諸氏のご叱正を賜わりたいと存じます。

*

斉藤氏はこのお手紙の中で大体次の三点を指摘されていると思われる。

すなわち花大の建学の精神について、(1)学長山田無文老師のご意向に反して教授会はこれを無視している。この点は大学の現況を見れば明らかである。(2)昭和四十四年秋の学友会による教授会との団交について大学当局が宗門・同窓の諸氏に對し遺憾の意を表していない。(3)理事会と教授会との間に建学の精神の具体的各論について意見の不一致が多すぎる。

その一例は『正法輪』に載せられた本学教授会員で宗門人の方の論説に看取される、とのこと。斉藤氏は、このような矛盾を蔵したままでは大学の移転が満足に行われることは到底おぼつかないゆえ、そのような矛盾を克服して、教授会と理事会とが一致した理念をもち、それを論理的に表現して、もって宗門・大学関係者の疑念を晴らし、移転を真に意義あるものにせよ、という思ひ召しと理解されます。われわれの見解表明が斉藤氏のご期待にそうものであると否とを問わず、斉藤氏のこの問いかけは尊いものであり、それが単に大学の「外」から発せられたものとして軽々に扱うことのできないものであることを感じます。本学に對して発せられます問いは、どのようなものであれ結局は本学の問いであります。ましてその問いが宗門の老宿から発せられるものであります場合、文面の表現を通して本當に問いかけているもの、問う人

ご自身の意識をもこえて、そこに問わずにはおれないものに着眼することが、われわれ問われているものの忘れてはならない点であると考えます。

以下に示します、斉藤氏のご質問に對する回答は、原案を私・常盤が作成し教授会の諒承を得たものでありますので、その文面が原案作成者の思考法・表現形式などを示すことは避けられないこととあります。他の教授会員ならばより一そう説得力もあり明快な論理構造を示すでもありませんが、たまたま今・明年度にわたって学部長の役職に就くことを余儀なくされましたばかりに、身の非才を承知で筆を執りましたために、誤解の種をまきちらす結果となることを恐れ、かつは己れの性の拙さを悲しみます。

△書簡に對する回答▽

教授会に宛てられました斉藤禅忠様のご質問の要点は、建学の理念を亡失したかに見える花大は、創学以来の大事業である総合移転を契機として妙心寺本山の膝下を離れてどこへさ迷い行くのか、ということであつたと思います。このご懸念は一面にきわめて妥当な、鋭い問いかけであることを見逃すことはできません。それは近代的人間への根源的批判を含みます。同時に他面、それはその近代的人間に對する批判というものが近代以前の立場からなされていますために、それが真に根源的にならず、却つてその批判の立場そのものが根源的な批判を経なければならぬことを示しています。この

二点を中心に据えて以下に論ずることにしますが、その前に少し、大学と理事会との關係に触れてみたいと思います。

教団・理事会・大学

まず齊藤様は、花大がいわゆる近代化路線を辿り文学部四学科をもつことになりましたために、それまでの臨済宗大学時代、臨済学院専門学校時代、そして花園大学仏教学部時代におきまして大学が「妙心寺派教学財団」次いで「学校法人妙心寺派教学団」の下に直接妙心寺教団とつながり、宗門子弟を養成する機関となっておりましたのが、その役割を果さない方向に向っていますことを、花大本来の使命からの逸脱とごらんになり、花大にその本来の使命に立ち帰るよう求めておられます。事実から申しますと、昭和四十一年花大が仏教学部を止めて仏教学科・社会福祉学科・史学科・国文学科からなる文学部の設置認可を得、設立者が「学校法人花園学園」となりました時点で大学は妙心寺教団との直接の關係をもつことを止め、学校法人花園学園理事会の経営するものとなったわけであります。もちろん理事長は妙心寺派宗務総長の兼職であり、常任理事も理事長が任命するものでありますから、理事会と宗門とのつながりは依然として極めて密接なものがありますが、大学は教団が直接の経営主体となるものではなく、学園理事会在が大学経営の責任をもつことになっております。これは大学の教育・研究が設置者の利害から直接に影響されずに独立を保つことができるようにという配慮に

よるものです。その意味で理事会は、大学の教学の独立を尊重する立場をとっております。そのような組織のなかで大学が宗門の後継者を養成する役割は僅かに妙心寺派教師資格を取得する途が開かれているという点にあり、大学全体としては教団に直屬する構造になっておりません。

学則と実践禅学

問題の中心は、大学の学則第一、二条に掲げられています。本学の大学としての目的とそのために開設される「実践禅学」です。学則第一、二条は次のようになっています。

第一章 大学の目的綱領

第一条 本学は高等の知識を授け、専門の學術を教授研究し、仏教精神に依つて人格を陶冶し、人類文化に貢獻する人物の養成を目的とする。

第二条 本学は前条に即し、実践禅学を開設する。

齊藤様が本学の建学の精神と呼ばれるものは、実にこの学則第一、二条に表現されているようなものと考えられます。それは、大学にそもそもの設立者である妙心寺教団がこの大学の基本的な性格づけをしたものと言つてよいでしょう。そして現実のカリキュラムでは、実践禅学がA・B・Cの三種類に分けられ、現在、Aは学長による教養課程・仏教学講義（毎週・選択）、Bは禅学専攻者の必修科目（毎週）、Cは仏教学科全員の必修科目（年二回・各三日間の授心を二年間受講）となっております。その限りでは実践禅学は、特にCに

ついで、仏教学科学生全員が卒業単位をとるためには通らなければならないものということで、学生にとって、それは「強制」されていることになりましょう。

実践禅学・摂心

しかしこの事情は仏教学科学生にのみ該当することでありまして、他の三学科には全く当てはまりません。実践禅学C（摂心）の際は全学を休講にして仏教学科教員スタッフの指導のもとに、全学の教職員・学生の自主的な参加を得て行なわれることになっておりますが、その中心になりますものは何と申しまして仏教学科学生であります。摂心の形式は妙心寺派僧堂のそれに準じますが、独参・警策とも自主的な意志に基づいて行ぜられ受けられます。摂心に参加する学生には男子のみならず女子も相当数みられます。仏教学科に女子の学生が入学しておりますことにもよりますが、それよりも原則的に、摂心参加者に男女・学科の制限がなされていないことによると申してよいでしょう。

以上でお分りのように本学の実践禅学は、仏教学科にとつては仏教学科カリキュラムとして位置づけられています。基本的には大学全体の中では、必須単位として扱われることはなくなっております。摂心への参加は全く自主的になっておりますから、大学全体としましては摂心の期間を中心になる仏教学科だけがこの行事に参加しているかに見えます。さらに申せば摂心は仏教学科の行事であり他の三学科は休講を強

制されているかのような印象をすら生じかねません。摂心に参加するものが仏教学科以外にはないのではありませんが、少数であることは事実ですので、そのような印象は理由のないものではありません。

実践禅学A

実践禅学Aに対する現在の位置づけは、昭和四十四年度の大衆団交の後発足しました教授会改革小委員会によって立てられた基本構想にもとづいております。昭和四十五―八年度には、学長担当の実践禅学Aも、全学的な行事・公開講座として位置づけられておりました。昭和四十五―七年度は毎週月曜日第一講時（当時9―10・30AM）には、この時間帯に並列する他の講座は一切おかず、全学構成員の誰でも自主的に出席できるように配慮され、しかもこの時間の出席は単位とは全く無関係になっておりました。それが昭和四十四年度の学友会による大衆団交を受けた教授会の基本姿勢となつてからであります。それ以前は、昭和四十一年度、文学部設置以後も、仏教学部時代、そしてその以前の臨済学院専門学校時代とも全く同様に、この実践禅学Aに該当する講座は単位取得の対象として全学生の必修科目とされておりました。その点から考えますと、これを単位から外しましたことは、建学の精神を遵奉させるという行き方を大学が放棄したことになります。その後昭和四十八年度からこの実践禅学Aの講座は、より多くの出席者を得るために月曜日第二講時に繰り下げられ、翌

昭和四十九年度からは同時間帯に他の諸講座を開設、同時にこの講座を現在のように単位化して教養課程の一般教育科目中の仏教学としました。

実存的関心に基づく実践禅学

昭和四十四年度末以降の本学の実践禅学に対する取扱い方は右のように進んできております。この基本の姿勢は、実践禅学というものを大学全体としては、これを強制すべきものとしてではなく全く人間の実存的な関心から自主的に選びとるものとして扱うということであります。仏教学科につきましては、学生は入学時に実践禅学をカリキュラムの基本とする本学仏教学科を選びとったと考えますので、入学後単位取得という形で一見強制されているようでも、これを「強制」と受けとめた時点でその学生は本学の仏教学科に学ぶことを止めていると判断されます。そしてそのような考え方をわれわれ教授会員がもつことができますのは、宗教の方法としての実践禅学がもつ独自の性格に由来するものと考えられます。これが他の宗教の方法であります場合には、簡単にこのような考え方をするわけには参りません。つまり一言で申せば、実践禅学というものが宗教の方法の根本に関わるものであって、特殊な一つの方法ということで尽きるものではない、ということでもあります。この点は、禅門の方々には多言を要しないところでもあります。

仏教学科と実践禅学

昭和四十四年度末以降に教授会が実践禅学について抱いてきました考え方は、大略以上のようなことであります。しかしながら現実には、大学内におきましても、実践禅学は仏教学科の関心事であり三学科の直接関するところではないという考え方がないわけではありません。そのような考え方を生じてきます一ばんのものは、実は仏教学科の方にあると言っても過言ではありません。つまり実践禅学は仏教学科の単位取得の対象であり、また妙心寺派教師資格のための必須単位となるものであるという考え方が関係者の間に根づきますと、実践禅学はある種の職業臭を帯びて参り、他学科のみならず仏教学科自身の実存的な関心事であることを排除する結果となります。こうして実践禅学は仏教学科学生、そして主に宗門子弟の資格取得のための単位科目として扱われることが強まれば強まるほど、それは本来の人間の実存的関心、本来の宗教的関心とは無縁のものとなります。斎藤様が恐れておられますのは、まさしくこの点であると思われまします。花園大学を宗門の皆様から遠ざけるものは、実に皮肉にも、文学部のなかの仏教学科におきまして実践禅学を単位取得の対象としてのみ扱うことであり、その結果、これを全学的な実存的関心事たらしめないことである、と言わなければなりません。仏教学部だけの時代にはこの点は表面化してきませんが、四学科並列の文学部となりました今日では、この問題を看過するわけには参りません。花大を宗門から遠ざけ、その「建学の

精神」から離れしめるかどうかは、実に仏教学科における実践禅学の受けとめ方如何にかかっていると申しても過言ではありません。

宗門と花大の建学の精神

この問題をさらに溯つて参りますと、宗門の皆様が花大の建学の精神というものをどのように位置づけられるかということにも深く関わつて参ります。簡単に申しますと、宗門の皆様が花大を直接無媒介に宗門後継者育成の機関として位置づけられますと、花大は宗門のための手段という性格づけをさせることになり、その結果は花大の大学としての独立性を見失うこととなります。花大の「建学の精神」は、宗門後継者のための特殊な理念に狭められ、それが人間全体にとって普遍的・根源的であることを止め、却つて普遍性ということとは人々に押しつけられる羊頭狗肉になります。それは、人が人種・階級・職業・年令・性別などの区別なしに自発的に求める真に人間に普遍的・根源的な原理であることを止め、そしてそのような狭められた見方をされる宗門というものの、普遍的・根源的な人間の関心事であることを即座に止めるであります。われわれは、現実の宗門が多くの宗教・宗派のなかにあつて一つの特種性を示されることは否定しませんが、同時にその宗門の依つて立つ基本のところが一切の特種性を否定するものであることに思ひを致しますだけに、宗門の方々が身を一宗派の特種性に縛りつけられることのないよう期

待し、顧みて、本学の「建学の精神」なるものについての宗門の皆様のご理解が一段と深められますことを念ずる次第であります。

近代文明の根源的批判

当面の所論をこれ以上進めることは止めさせていただきますが、近代文明の病根は実に、近代文明の特徴である分業というところにも見られることを申し添えたいと思います。宗教のことは宗門人という方向が人間の全体像を破壊し、そのために今や近代的人間というものは根源的な批判を経なければならぬとなつております。斉藤様が花大の現況を見られて下されますご批判の本当の意味は、実にこの点にあると考へられます。花大は、自らの学則に掲げています「実践禅学」というものの根源的な意義を徹底的に洗い直し、その最も深いところにおいて受けとめなければならぬと存じます。それと全く同時に、斉藤様のご批判の文面にも見られますこの近代文明の特徴であります分業的な発想のなされ方というのは——それは宗教教団を文明の中心におけば、そのまま近代以前の発想になります——根源的な批判を経ないわけには参りません。現にそのような分業的な発想が本学の実践禅学のもつ普遍性・根源性を否定する結果となるものですから。

西村恵信助教の論説

本学の教授会員中、宗門に籍をおく同僚は、基本的には右に述べますような本学の図交以来の共通認識を踏まえており

ます。例えば、斉藤様が批判の対象とされています本学助教
授・西村恵信氏の『正法輪』昭和五十年十月五日付論説「花
大へ宗門の新しい視線を」は、そのようなわれわれ教授会員の
の共通認識の上に立って、最近の本学入試改革の試みの中で
宗門の皆様に対して同じく宗門人である教授会員によって始
めて正式になされた所論として、われわれ一同が高く評価し
ているものであります。何とぞ再読、三読されましてわれわ
れの意のあるところをお汲みとりいただきたいと思います。
その論説が書かれた時点におきまして西村助教は、本学教
務委員長であり同時に入試委員会の重要なスポークスマンで
ありましたことを、併せ記させていただきます。

学友会による「教授会団交」の意義

本学は、先に何度も申しましたように、昭和四十四年秋に
おきましてきわめて重要な試練を経ました。斉藤様はこれを
「大学紛争」と呼ばれますが、本学の場合、それは七十日間
に及ぶ学友会提起の教授会団交でありました。その間激しい
討論が展開されましたが、その基本は、教授会が空虚な内実
を糊塗するために守ってきたすべての学生管理の発想とそれ
に基づく体制を捨てよという学友会の要求を巡るものであり
ました。教授会は、身につけている殻をはぎとるように、従
来の学生管理的な規約・心得を廃し、最終的には学生管理者
として教授会が保持していた一切の権力を解消する方向に向
って努力すること——何故なら全面的な解消は教授会が存在

する限り不可能ですので——を約束しました。斉藤様はこの
「大学紛争」について学校当局から一度も遺憾の意思表示が
ない指摘されますが、教授会は、それまでの学生管理の態
勢を捨てることによって、実はそれまでの同じ態勢によっ
て形式的に管理されるだけで実質的には見捨てられてきた学
生たちに詫びたのであります。教授会が遺憾の意思表示をす
べき対象は、まず第一に、教授会の無責任体制の犠牲として
苦しみました学生であつたのであります。そのことが同時に
それら学生の教育を大学に期待してこられた宗門の方々を含
む大学関係者・同窓の皆様にも遺憾の意を表することであつた
のであります。もしも斉藤様はじめ皆様方にとりまして大学
が自らのあり方について遺憾の意を表してはいないと受取ら
れますならば、その点、誠に慚愧に堪えません。なぜならば、
宗門の方々にそのように受取られているとしますならば、そ
れは取りも直さず教授会が自らの無責任体制の犠牲となつて
きました学生諸君に対して詫びることがきわめて不徹底であ
つたということになるからであります。

建学の精神と大学の現況

上に、建学の精神と本学のあり方というものにつきまして
仏教学科のあり方が重要なポイントをしている旨を述べま
した、しかしそのことは、仏教学科以外の三学科のあり方
を問題にしないということであらうわけはありません。繰り
返しになりますが、本学の学則に掲げます実践禅学というも

のは、一つの特異な宗教的実践という形をとってはおりますが、その内容はどのような特殊なあり方をも究極とはしない、根源的・深層的、従って根源的に普遍的な自己に覚めるというものでありますから、それは特殊な教団がその設置する機関の基本原理としてその付属機関に与えるというようなものではありません、却ってそれは、教団・大学などすべての特殊なあり方の究極的な活きた批判原理、真の自己のあり方というものでなければなりません。さし当ってわれわれ花園大学教授会としましては、自己のあり方が、大学という特殊なあり方を究極とする執着を根本において断ち切ることがなければ、歴史の苦悩を見捨てて大学という殻に閉じこもることになります。自己のなかに現実にあるような執着を見ますだけに、私どもは慄然とすることを禁じえません。今回の移転に際して学内の学生諸君のなから発せられます——大切な視点が欠落しているのではないかと——疑念は、身に覚えのないものと申すことのできないものであります。この点、大学全体、ことにわれわれ教授会員が深く思いを致さねばならぬところであります。

学長・山田無文老師

斉藤様は、教授会がこの建学の精神に関して山田学長のお考えと背反しているのではないかとされます。昭和二十四年以来、本学学長として、本学の苦難を自らの苦難とし、また年々入学し卒業して行きます若人を慈しみ暖く包んでこれ

ました山田無文老師は、本学の至宝であります。山田学長を本学の建学の精神と分かつことは、恐らくできないでありましょう。そのような学長・山田無文老師のお考えに教授会が背反していると指摘されますならば、慚愧の思いに満ちてそのご指摘を噛みしめる以外に、なすべきことを知りません。昨秋学長職を一年後に退くことを公式に発表されました老師は、今度の大学の総合移転事業を推進するために先の声明を暫時撤回するとご発表になり、私どもを感激させられました。今年七月十六日のお誕生日で喜寿を迎えられます山田学長のご健勝をわれわれ一同祈念いたしております。

理事会と教授会

斉藤様のご指摘の第三のそして最後の点は、教授会と理事会とが建学の精神の具体的各論について不一致であるということであります。念のために申し添えますが、理事会には教授会から学長、文学部長、総務部長、学生部長が理事として加わっており、そのうち総務部長は理事会の常任理事となっております。従いまして当然、大学のことに關しましては、理事会に大学側の見解が提出され、理事会全体の理解を求める機会が与えられております。大学に關しまして理事会は財政面で経営上の責任をもち、そして教学面につきましては教授会が責任をもつという体制をとっておりますので、ご指摘のような不一致がありますならば、十分に相互の理解を得るよう努力して参らねばなりません。従来この点について十分

な努力が払われたとは、当事者同志思っておりません。斉藤様のご指摘を契機に、理事会と教授会とが、それぞれの役割の違いを尊重しつつ、大学のあるべきあり方を巡って討議を深めて参りたく存じます。

結 び

以上、冗長に流れましたために却って要点を逸する恐れのある表現をもちまして、斉藤様の提起されました問題に対する一応の回答とさせていただきます。

本学の総合移転に際しまして、斉藤様のお手紙をきっかけに、宗門の機関誌にわれわれ教授会からの声を発表させていただきました、宗門の皆様へ届けさせていただきますことを深く感謝申し上げます。

昭和五十一年六月二十八日

(後記 上の回答文は、問題の性質上、「教授会見解」と呼ぶことはできませんが、幸いに教授会員の大方の賛同をえましたので、文中、これが教授会において「諒承」されたという表現を用いた次第です。

現教授会員の半数以上は昭和四十四年秋の大衆団交以後に就任された方々ですので、厳密な意味では一々の教授会員が「本学の団交以来の共通認識」を分かちあっているとは申せません。

しかし、大学の進むべき方向が過去の出来事を踏まえているというよりは、歴史そのものの進み行くべき方向に沿った

ものであるとしますならば、われわれの真に依るべきところは、過去・現在・未来を絶して歴史創造の根源であります本来の自己のめざめでありましょう。この根源に基づかない自他の見解は自壊するばかりありません。それだけにお互いにつきびしい工夫が求められて参ります。

次に掲載されます「理事会」回答は、内局側常任理事の所論でありまして、厳密な意味では、われわれ大学側理事を含む理事会の統一見解ではありません。しかし一方で、理事会の業務を代表するものは理事長および常任理事であるとする学園寄附行為(第十条)がありますので、われわれとしましては一応これを「理事会」見解として尊重します。しかし実質的には、これが内局側理事諸兄の見解を示すものと、われわれは諒解しています。

右に説明しますような意味での教授会・理事会の「回答」を山田学長がご覧になった上で、学長が記されたものが、「花園大学の使命」であります。読者のご諒解をいただきましたく存じます。(八月五日)

宗門の一老宿よりの質問に対する

理事会としての答え

花園大学常任理事
妙心寺派教学部長 竹 中 玄 鼎
はじめに

前掲の一文(理事会宛のものは教授会宛のものと同文です)ので省略します―編集室)は山陰東教区第二部観音寺住職・

齊藤禪忠師の質問状であります。真に宗門を思い、大学を愛する至情のあふれるものでありまして、蔭での苦情がブツブツとささやかれ、あるいは見て見ぬふりをし、非協力をきめこむ一般的現代の世相に比して、さすがに禪門僧侶は気骨充実したものだと思惑をおぼえるものであります。

ここに、この質問状に対して理事会としての態度を一通り申し述べさせていただきます。ところで、返答を書きます前に、先ずもって、二、三の点について予め、おことわり申し上げておかねばならぬことを記しておきたいと存じます。

× × ×

先ず第一に「理事会・教授会一致した建学の精神に基づく二つの使命を調整して明快な理念を論文にされたい」と要請しておられますが、理事会は理事会として、教授会は教授会として、別々の文章を書かせていただきました。

元来、理事会と教授会が凡ての点において常に、その考え方なり、主張なりが同じであることはあり得ないと考えられます。むしろそれならばこそ進歩発展も考えられるわけだとも存じます。もちろん、両者とも「建学の精神」を基調として、花園大学をよりよいものにしたいという志向においては全く一致しております。ただ、「建学の精神」それ自体の捉え方にしても、極端に申せば、個々、ひとりひとりについてさえ相違があるわけで、理事会による完全な思想統制も、又逆に、理事会に対して、あるいはかなり一般的に誤解から生

ずる危惧としてあるかもしれない、教授会からのプロパガンダに理事会が屈伏されているのではないか、というようなことも絶対ございません。それならばこそ、相互にその立場を尊重しながら学校運営について話し合いをつづけることができて来たと思ふのであります。

この文章も、勝手にそれぞれの立場を主張し合うということではなく、少くとも数回の話し合いをもち相互に書いた文章を読み交わした上で、同意見の点は同意見として尊重し合うと共に、両者の意見の相違についても、その点は更に相互に検討し合い今後においても両者の意見交換を続けてゆくということを前提としてのことであります。

第二に、理事会の意見についても、常に話し合い、考え合っている訳であります。この質問状を受けとってからも、直接これについて理事会（殊に宗門サイド、つまり内局）としても相談を重ねましたものの、文章化を受け持ちましたのは、学部長竹中でありまして、できる限り、私見を混えないうつもりでありまして、完全に内局の意見を代弁し得ているか、否かについては、正直、自らも疑問をもっております。即ち、どうしても執筆者の私見が混入している点があると思う次第で、執筆の責任の所在を明かにいたしておきます。万一、理事会乃至内局員の総意と、いささかなりと齟齬するところありとすれば、それは執筆者の理解不足であり、責任であります。もちろん、成文の上、理事会全員に一読していた

だき、その意見を問うた上での発表であります。

第三に、理事会の構成についてでありますが念のため申し述べます。花園学園理事会は宗務総長が理事長であることは申すまでもありませんが、教学部長と大学の総務部長が常任理事であり、他の内局員五名（内一名は現在は兼任）と大学側から学長、文学部長、学生部長（教授会にも属している）、高等学校側から校長と副校長二名によって構成されており（寄附行為）決して理事会は内局員のみによって構成されているのではないということでもあります。往々にしてこの点についても誤解があるやに思われますので、敢えて記しておきます。従つて理事会における発言は内局サイドが、たとえイニシャチーブをとっているとしても内局サイドの意見のみを無理押しすることはできないということでもあります。又、逆に教授会に属する理事は当然、教授会の意見の代弁をする訳でありますが、理事会の決定は時にそれを否定することもあり得る訳であつて、その場合、当然、理事会の決定に従わねばならないわけであります。

第四に、以下、御質問に對してお答え申し上げるわけですが、完全無欠の理論展開は、もちろん不可能であります。執筆者の非才は申すに及びませんが、この問題自体の性格から考えても、凡ての学園関係者に完全に納得を得るような文章乃至理論を要求されているとするならば、それは最初から一言の発言も無意味だということになります。たとえ理

論的には一つの反駁を許さぬほどのものが書けたと仮定しても、宗門人、あるいは全同窓生（寺院関係外も含めて）乃至、在学生等々を一樣に納得せしめることは不可能だということでもあります。而も理論的に「すき」がないということは、即ち関係者の納得とイコールだということではなく、むしろ、そうでないことの方が多いということも考えられます。

更に注意せねばならぬことは、今回の学園発展のための大事業に最も有力なバックアップを期待できる方々に対して、文章の上で、満足していただくために阿諛的な、実状と異つた綺麗ごとを並べたてたようなことをしたとするならば、それは真摯な質問者に対して礼を失した虚偽ということになるでありましょう。従つて、そうした態度は極力、取らないようにしたいと考えます。

花大の現状と「建学の精神」

「現状が果して設立の因縁と建学の精神が遵奉されていると言えるであらうか」という御質問であります。

卒直に申しまして「然り」と断言することは到底できない現状であると申さざるを得ないと思ひます。しかしながら、そのことは、現在花園学園の教育のあり方が、それを全く無視しているとか、逆行しているとか、いうことと決して同義語ではありません。「山に入る獬師、山を見ず」の譬えのごとく、地方同窓の老宿方にとつて、我々よりも、より現状への危惧が感じられ、我々学外のものが憂慮すべきことと考へ

る大学の状況が、学内の教職員の方々にとっては、さほど心配すべきことではないという分析もされることがあるようであります。この点について我々はもちろん、学内教職員諸氏に對して、この際、強い反省を要求せねばならないと思います。現代という時代の、一般的社会の情勢が花大にも及ぶことは当然であります。只、單に当然のこととして「馴れ」の中に沈むことは危険なことであつて、常に内に向つて、するどく批判を加えてゆかねばならぬと考えますし、その批判の規準たるものが「建学の精神」でなければならぬわけだと考えます。

しかし、一方、我々学外のものは、正確な情報、乃至現状判断のための多数の資料を得ることが困難であつて、えてしてトピカルな情報のみをもつて全体的な状況であると速断する誤ちをおかしやすいものである。過激な言動を弄する少数の学生をもつて、花大生全体が然るがごとき状況であると認識したとすれば、それは明かに誤りでありましょう。

教職員の方々の中には宗門人以外の方々があつて、その内の極く一部に、仮令、建学の精神や、設立の因縁に理解の乏しい方があつたとしても、それをもつて全教職員を律することも、又、誤りでありましょう。

「私一人だけでなく、恐らくは一派の多くの方々が疑念をもつておられ云々」と申されていることは、おそらく仰せのごとくであろうと存じますが、その尊い宗門乃至花大に對す

る御心配を、私どもは眞摯にうけとめ、鋭い忠告や批判を加えることにやぶさかではないつもりであります。事実、私どもは、理事会等において可なり遠慮なく発言もし、痛烈な批判を加えておるのであります。しかし、一方、多くの安堵すべき事実や、大多数の教職員や学生諸君が「完全」とか「充分」とかは言えぬまでも、本派との関係、学校の在り方などについて、決して「あるべき」姿を無視したり、反対の方向に進もうとしているとは考えられないところがあるのであります。

私は寡聞であります。が、入学式、卒業式など、少くとも私の参加できた限りにおいて（ここ三年間）他の大学等においては、おそらく想像もできないであろうような厳肅な空氣に満ちたものであつたことは、その場だけの一時的な特殊行事に限つてであらうと否定的な見方をするのできないものを感じさせるものであります。入学式においては、与えられた心経のプリントをたどしくはあつても、真剣に読もうとする態度であり、卒業式には全員が少くともふざけた抵抗などとは無縁な厳肅な態度で心経が行われ、学長老師の訓話には静肅に感動してこれを聴聞するという状況でありました。私は決して甘い評価を花大に与えようとは思いません。しかし徒らな杞憂はとらないところであります。

× × ×

御質問状にもございますように、本来、仏教学科を中心と

して、主として宗門内の学生を受け入れておりました花園大學が、時代の要請によって福祉、国文、史学の各科をもった文学部としての大学になりましたことは、学園経営の上から言つて必要止むを得ぬ方向でもあったでありましようが、たしかに禅の精神を社会に開いてゆく、即ち「社会に開かれた学府」として禅的教養ある人材を社会に送ることも任務」となつたわけであります。こうした花大に対する御認識乃至御理解は真に貴重な激励でありまして、時に花大におけるトラブルに對して「文学部を開設したことが失敗であつた」とか「仏教學部のみの、もとの形にもどすべきである」とか言うような、少くとも現在の理事会なり教授会なりにとつて、如何ともし難い、いわば不毛な批判とは全く次元をことにした御指摘だと存するのであります。従つて理事会自体が、あるいは、その背景にあつてささえて下さつてゐる宗門人の凡てが、花大を、單なる「宗門後継者養成の機関」として單なる宗門エゴイズムの中に収めてゐる」と、正法輪（S 50・10・5 発行）に掲載された論文の筆者が批判した通りだと解したならば、それは重大な誤りを犯していることになると思ひます。

しかし、論文の趣旨はそうではないようであります。むしろ、質問者のいわれるように、それだけではすまない現代の要請が、宗門エゴイズムをゆるさなくなつてゐると言つてゐるのだと思ひます。

個人的には私は、徒らにあの論文の筆者を弁護する氣持ちはありません。たしかに、あの論文の中には宗門人の痼（かん）にさわるような言い廻しがないことはない、むしろ、それを意圖したようなふしがないでもない。何となく新しいというか、進歩的というか、とにかく頭の良い人間の、有無を言わさぬような論調なしとしないところがあります。既に、その後の、正法輪、誌上に某師が反駁の文を投稿しておられました。いわゆる「カチン」と来るところのある、そういう意圖をふくんだ文章であつたとも言えるようであります。

しかし、あの主張をされているのは、花大の教員であると共に、宗門内の寺院住職であり、しかも宗門サイドから見ても、自坊の経営、檀信徒への布教々々化、その他の点において、熱心な実践者であり、地域宗門寺院に對しても教化主事としてリーダーシップをとつており、宗門後継者の具体的指導や助力に可なり積極的な教員のおひとりでもあります。

花大と宗門後継者養成の問題

花園大學が宗門関係の後継者養成を車の一方の輪となし、禅的教養のある人材を社会に送り出すことを他の一輪とすべきであるという御主張、そして「後継者養成すらも満足にできませぬ学府が、社会に對して禅的教養のある人材を送り出すことなどでき得ようはずがない」という御指摘は、頗る的確を射た御趣旨だと考えます。御不満な点は、いろいろ、御指摘もあろうと存じますが、花大は現在においても決して後継

者養成の努力をおろそかにしているわけではないと思います。少くとも、そのことに關して理事会内局側理事としては相當に強い要請を大学にしているつもりであります。本派学徒・子女の花大入学に對する勧誘や助力はご存じの通りであります。ただ、誤解があつてはならないことは、宗内後継者養成の使命ということは、宗門内の志望者は完全に無条件に入学を許可するということと同義語ではないということであり、また、学力の問題もさることながら、その宗門学徒が花大に学ぶことに先ず意欲をもつてほしいということでもあります。一応、受験したもののが、そのみでは、花大に学びたいという意欲をもつていと評することは困難なこともありうるということでもあります。

本年度の入学テストの成績においては、最上位のものが仏教学科志望者であり、仏教学科入学者の平均得点も又、他の学科に比して従来と異り、全く遜色がなかったという報告があつて、如何に我々理事会としても、教授会としても、この事実を慶賀し、よろこんだかということを申し上げて、花大が後継者養成に對して決して冷淡でもなく、ないがしろにしているものでもないことの一例証としたいと存じます。

いささか、別問題になりますが、学校の足らざるところを、花園禅塾において補うべく努力していることは御承知の通りであり、その熱意は諒としていただきたいと思いますものであります。

つけ加えて申し上げますが、今回の大学移転の実現したあかつきにおいては、最も大きなメリットを得られると考えられるのは、禅塾経営であろうと期待するのは、ひとり、私のみではないと考えます。

尚、蛇足ですが、後継者養成の問題について、少しく苦言を述べさせていただきたいと思ひます。花大が後継者養成に大きな責任をもつべきであることは前述のごとく明白であります。後継者養成を強く大学に要請される側の宗門内寺院において、花大に入学して来る学徒諸君の中で「心經」もよめず又、寺院後継者としての態度、服裝、挙措進退において、何らの躰がされた形跡の見られないものが決して少しとしない事實は、見逃しにしてすませることではないと考えます。質問の文章の中においても「寺院内の難僧教育のみでは不足である故云々」と申しておられるように、各々の寺院自体も又、今少しく具体的に熱意と責任をもつていただかなければならぬのではないかと思われます。

現代社会の激しい変化が、各寺院においてそれを為し得ない理由が正当化されるならば、より激しい社会的變動の影響を受けるにちがいない大学に對して、後継者養成の全面的責任を問うことは、正しくナンセンスではないかと考えます。

大学は後継者養成に熱意と責任を決して放棄しようとはしないであらうし、現在も、もちろん放棄してはいない。然らば、お互い、宗門人自身が、その事に熱意と責任を具體的にも

つていただきたいと懇望するものであります。

学園紛争に關して

次に、大学紛争についてであります。言い訳がましい言い方になりますが、現理事会の時代になりましたからは、いわゆる学園紛争の重大な場面に逢着したことはありません。最も過激な状態でありますのは昭和四十四年から四十六年の間であったと聞き及んでおりますが、その時点においても理事会乃至教授会は決して拱手傍観しておったではありません。その当時の理事会（教授会から推薦された方も含めて）は実に精力的にその衝に當つたと承っております。あの難局を乗り越えることのできましたのも、当時の先輩理事諸氏の粉骨の努力によるものであったと思います。

当時、いわばアウトサイダー的立場にあった筆者にとつては、その解決策に飽き足らぬ感をもつたのは事実でありますし、現在においても、なお疑点のごとくが氷解したのではないという気がいたします。しかし、その認識において當時がアウトサイダー的であつたということは疑い得ないことであつて、むしろ、その歴史は内部から改めて検討した場合、「止むを得なかつた」という解決結果ではなく、「よくぞ、かくのごとく解決された」とさえ考えられる点が多く見出されるのであります。

「処分権放棄」というようなことについても、ことばの感じのみによる単絡的な解釈はすべきでないということであり

まして、出欠をとることさえできなくなっているというような印象は全く事実と反し、個々の教員によって嚴重に出欠をとっている場合が多いようでありまして、それを実施しない場合は、良かれ悪しかれ、その教員自体の見識によってそのようにされているにすぎないので、大方が危惧されるような花大が無法状態化しているという分析は事実と反していると思います。なお、処分権については放棄ではなく、停止している状態だと、某教授との話し合いで伺つたことがあります。

もちろん、前述の如く、現在なお疑点の残るところがないわけではなく、例えば「白雲寮」の問題等については、理事会から学校当局に、その点については質し、しばしば説明も受けており、万止むを得ぬ事情は諒としながらも、我々自身が何となく完全な納得に至らない、寂然としない点が残るといった具合であります。従つて、詳細の事情の把握にくい地方の方々にとつて、そうした不安なり不満なりが残っていることは当然のことと存じます。その他、これに類した疑問点については、根氣よく、話し合いをつづけて、その氷解に至る努力をつづけたいと思います。

学園紛争については、もちろん花園大学のみを切り離して考えることはできないわけであつて、思えば、昭和四十四年―六年に至る最もラジカルな（東大紛争などをピークとして）社会的状況、中国文化大革命などの世界的な動きと無関係ではあり得なかつた訳で、花大のみが全く影響をうけない

ようにすべきであるというようなことは、不可能に近い要求であつて、そうした状況の中で、花大のあるべき姿を出来る限り、くずさないようにと先輩方のされた努力を、我々は正當に評価しなければならぬと考えます。今後においても、如何なる事態が生ずるかは予想もし難いところであるが、宗門人、同窓会、その他のバックアップを期待して、理事会はもちろん教授会にも協力を要請しつつ、学園のあるべき方向を探究し、堅持する努力をお約束申し上げたいと思います。尚、あの激動期に、その渦中であつてリーダーシップをとつた学生の中には、本派学生が相当数入つていたのでありますが、その諸君が卒業後、僧堂に掛錫し、寺に住職し、本山における研修会等（高等布教講習会など）に参加するなど、立派な後継者となっているものが、二、三にとどまらないという注目すべき事実のあることも、併せて報告しておきたいと考えます。

花大の教学に關して

重大な問題であるが、大学の課程、教科、単位修得、ことに法階の無試験検定に係わる具体的問題があるが詳細は教授会側からだされる解答に俟ちたいと思います。

いうまでもなく大学は「学問の府」であり、殊に方法論のしっかりした研究が尊重されるのであらうと思います。単に禅宗宗主となるためにだけ役立つような、いわば御都合主義的な講座は、おそらく学内ではあまり重視されない傾向があ

るのではないか、細分化され専門化された講義なり研究なりが高く評価される傾向があるのではないか、プラクティカルなものが必要以上に軽視される傾向はないか。それは「大学」である限り当然のことかもしれません。しかし現代の学生諸君（ことさら現代には限らない）を学問する立場で、いかぶることは誤りではないまでも、危険であると思う。筆者の偏見であるならば真に幸いであるが、仏教学科に限つて察知しても、方法論とか、研究態度とか、批判的精神とか、獨創性とかいう以前の、基礎力の不足は、一般的に想像に難くないのです。それは大学の使命ではないというような大義名分論がもしありとすれば、それは学生諸君をいかばかりすぎた不親切であり、大学のひとりよがりだと思ひます。少くとも、教養課程において、今少しく泥臭い、これ位のことは当然、知つておらねばならぬ筈というところを、敢えて改めて教へ込むような作業がされなければならないのではないか。それと花園大学の仏教学科の場合、それは大学のなすべき分野ではないと割り切つてしまわないで、プラクティカルなものの、例えば法式梵唄、布教実習、坐禅実習などを単位にとり入れて（やむを得ず）いるというだけでなく、今少しく重視すべきではないかと思ひます。筆者の経験から、旧制大学の一年の時、故人である裕慈弘教授から一年間、凝然大徳の「八宗綱要」「三國仏法伝通縁起」を、有無を言わず、昔の素読でもするような具合で、徹底的に読まされ指導され

たことがあり、そのことが後に如何に役立ったかを思うと、花大の仏教学科の場合も、どこかで、そういう泥臭さのようなものが必要なのではないかと思ひます。かつて筆者は花大の某教授に愚痴めいた私の意見を申し上げたことがある。その時その教授は同感の意を表され、一、二回生あたりを対象にして「基礎ゼミナール」のような講座を設けるといふ構想を話しておられたが、その構想も緒につき、かなり充実した基礎ゼミナールが実施されている由で、今後の充実を期待したいと思ひます。

教科内容については、もちろん教授会の権限でありましようから、個々の問題についての内政干渉的な発言は差し控えねばならぬと思ひますが、一般的要望の代弁者としての役割りを理事会は、今までも、今後も、パイプ役としての働きをもつづけてゆきたいし、又そうあるべきだと考えます。

おわりに

要するに、我々理事会も、教授会も、すべての点において、同じ考え方をもっているとは言えないとしても、錦の御旗的ではなく、むしろ時代に即応しつつ、時代を超えてゆく「建学の精神」を探究しつつ、それを規準として「花園大学」「花園学園」の発展を熱意をもって志向する努力を、相互に連絡をとりつつ続けていることは（これは問題のなかった時代の理事会・教授会とのかかわりあいよりも、いわば学園紛争以後、著しく緊密になっていると言ひ得る）申し上げて間

違ひないものと思ひます。

いずれにせよ、今回の花大移転を無事に完了することは、我々理事会にとつて絶対の責任であり、義務であります。既に議会の協賛を得て、矢は放たれたのであつて、今更、躊躇することは許されないことであります。学校移転は既に既定の事実であります。むしろ、問題は、宗門として募財懇請の問題、跡地利用の問題等々こそ、今後の大課題であります。只々一派各諸大徳の御援助、御協力を冀うのみであります。

（八月五日）

★花園大学移転に伴う諸問題

宗務総長 江西 寛堂

今回花園大学が綜合移転する事が決定されました。これは本派としては実に画期的な一大事業であります。亦難事業でもあります。然し事茲に至りましたことは時代の推移もさることながら、いかに花園大学が充実発展し世間一般の大学と伍して遜色のない位置にまで高められたかという証左であつて大いに喜ぶべき現象であるとも言えます。

然し実を申しますとこの問題が実に突然に降つて湧いたかの如くに起つた時には大いに当惑もし、色々な意味の反対の意向ばかりが鬱然として居りました。曰く建学の精神はどうなるだらう、曰く後継学徒の養成の問題は、曰く本派々立の大学としての特色がどのように生かされて行くか、曰く本派と大学との關係が遊離してしまうのではないかと等々につき杞

憂ばかりが先走りして、移転後の大学の本派としての存在価値について危惧の念を禁ずることが出来ませんでした。大学の現状を具さに吟味調査の結果、余りに狭小に過ぎるキャンパス、教室の不足、授業時間の不円滑、大学設置基準に不適合の状況等々の事が理解されるにつれて、早晩は何れ移転しなければ到底大学の面目を保ち得ないと知った時、至近距離に格好の地積を有する移転地を入手出来得る現在、之を失しては悔を千載に残すこととなると考えるに至ったのであります。御承知の如く今日既に矢は弦を離れている以上、花園大学内外の進展のためにも是非共万難を排して成し遂げなければなりません。

本派の教団としての目的は勿論宗旨の宣布挙揚とその教化伝道に在ると言えますが、日本仏教界に於てその十指の内に数えられる本派が社会に向つて誇示し得る事業としては花園大学の経営である。学園の大学と高等学校は、その社会に対する貢献度は高く評価されて然るべく、教団の存立の意義としても大いに誇るに足るものがなければならぬと思われま

す。而し愈々明年度花園大学が完全に移転し終つてからの大学を如何様に育てて行くか、その将来の展望について些か所見の一端を述べたいと思います。尤もその事は本派が目下鋭意考究中である本派のこの移転に伴つて醸出すべき資金の調達についても、大学の将来について深い御理解を頂くと共に折

角の御支援御協力をお願い申し上げたいのであります。

先ず最初に強調致したい事は、明年度は、明年三月末に厳修せられます興祖微妙大師六百年大遠諱が無事円成就しました、この御遠諱を契機として、本派が教団として飛躍的發展を遂ぐべき出発の第一年であります。この勝縁に當つてこの面期的一大事業に遭遇するという事は本派としては、誠に光輝ある歴史を飾るに相応しい事業と思うのであります。花園大学が禅の最高唯一の大学として世界から高く評価されるようあらゆる努力を傾注すべきで、大学のより一層の充実発展は本派の盛衰、教団の消長に懸つてあるものと考えなくてはなりません。

それにつけても一派の方々が我々当局と同様に花大の将来に關して御心配になつていたり、或は又かくありたいと要望されるであろうところの色々な問題について我々の考えの一端を述べて各位の御賛同なり御同情を得たいと存じます。

一、大学が妙心寺の境域を離れた場所に移転することは大学と本派とが疎遠になるのではないかと、一般的に考えらるる危惧であります。これに就ては今後理事の強化を計り、理事会の在り方を再検討し、新学舎には新たに理事室を設置したり、或は理事会と教授会の例会を持ち、大学の教授内容或は運営面で常日頃から意志の疎通を計るべきである。又同窓会室を設けたり、定期的学園視察等も当然為さるべきであると考えられています。

二、花園大学が大きくなり一般的大学のような形を整える事は従来の宗門学徒、後継者養成の意義を失うのではないかという杞憂があります。過去の私塾的な経営から発展して、一般大学と同様私立大学法に依る単科大学として認められ、漸次これが世間にも認められ宗門人よりも倍以上の一般学生を収容するに至ったということは世の趨勢であると共に、本学が世の要請に應えて社会的貢献をしているのであるとも考えられましょう。而も百余年の間に幾多の変遷、紆余曲折を経ては来たが、元來宗門の後継者として、禪的又広く仏教的知識を授け、尚広く一般學術を学得せしめ、學識豊かに人格高潔な社会的指導者としての、有為有能の人物を育成することが、建学の精神であつたことは明らかであると共に、今日に於てもこの建学の精神に些かも変りようは御座いません。

今日の宗門の学徒の大部分は恐らく一般大学に伍して遜色のない大学に学びたいと希求しているであります。我々当局は之に應える大学造りをして宗門学徒の優秀なる者も皆おしなべて此処に吸収するよう大学の整備発展にあらゆる努力を傾けるべきであると考えます。本派の子弟が喜んで入学し、希望を持って勉學に勤しむ施設を整える義務があると考えられます。

僧侶学徒のみが共に學んで、互に切磋琢磨するのも結構だが、これは専門道場に任せて置き、学校は学校の特色を生かし、一般在俗の学生と共に語り、共に論じて勉學することが、

本人にとってどんなにか生き甲斐を感じることでありましょうか。この雰囲気の中から自主独立不羈の精神も養われるのではないでしようか。特に又今やアメリカでもヨーロッパでも、禪こそ眞の人間教育の基本であり、今後の世界を救って行く宗教は禪しかないと高く認識されている今日こそ、花園大学がさらに広く門戸を世界に開いて、世界唯一の禪の學府として発展すべきではなからうかと存ぜられるのであります。

三、然し一面妙心寺派々立大学である以上、より一層禪的カラーを強く打ち出すことが肝要かと考えられます。これに關しては又いろいろの問題が思考されますが、教授陣の刷新というか、少くとも花大に在職する者は禪の信仰を持った人、禪に好意的関心を持った人という条件は必須でなければならぬ。又入学せんとする一般学生にしても四年間に禪宗の信徒或はシンパとして育成されて行かなければならない。そういう教育を施すべきであると考えられる。その外に本派学徒の優先入学或は又花園會員の入学優遇等の措置も考えられなくてはならない。特に本派学徒にして優秀な者には育英会より學費の全額を給付してその學究の便を計り、將來禪の碩學とし花園大学教授として活躍出来るようあらゆる方途を用意しなくてはならないと考えられるのであります。

四、大学の将来に就ては大体以上三に於て要約して申し述べましたが、花大が移転することに依て現在の大学の跡地及び地上の施設建造物一切は我が妙心寺派の財産として帰屬す

ることに決まりました。その代価は七億円ということになつて居り、この財産の取得には大きなメリットが御座います。これは今日の貨幣価値からすれば決して高いものではありません。これが本派に於て高度に有効に利用されるとすれば代価の二倍三倍の価値ありと判断されるのであります。この七億円については一応借入金に依て賄われる事となり、去る第四四次定期宗議会に於て議決されましたのであります。然しこの七億円も一応借入である以上、早晚返済せねばならないので、大きな一派の負担となる訳であります。大きな負担である以上に、これが最大に本派の為に有効に活用されなければなりません。これに就ては特別な委員会を設けて種々検討が加えられていますが、一派の声も亦伺わせて貰いたいと存じております。現在当局に於て考えられていることは、禅塾の統一、大衆禅堂、教化センター、本所事務職員の宿舎、駐車場等であり、本館の利用に就ては種々論議が交わされていますが、本館の土地の半分は、元來が花園高校の敷地でもあり、同じ学園の高等学校の発展ということも一応考慮に入れるべきであつて、当然高校の施設の中に繰入れらるべく、而もその一部例えば講堂などは本派の利用にも役立たせるとう条件の下にこれに貸与されるべきものと考えられます。尤もこれについては高校側としても本派へ何程かの資金の協力も当然の事となります。

以上要約すれば、花大移転は花大発展の為に万難を排し成就しなければならない問題であります。花大移転の費用の一部として本派は七億円を援助する。その代価として現在の花大の跡地並びに施設一般は妙心寺派の財産として帰属せしめる。この跡地は適切有効に本派の為に利用するべきであり、それについては改装費造成費等可成り多額の費用を要する。而も援助費、言い換えれば跡地取得費七億円は一応銀行より借入れしなければならなく、これには相当高い利息を見積らなくてはなりません。これ等を合すと約十一億円の金を用意しなければこの事業は成就されないのであります。

この十一億円の募財と跡地の高度利用に就て、四月以降二回の特別委員会が持たれ、大体の路線は敷かれたようではあります。未だ確たる決定は見えておりません。事本派の財政に関する点でもあり、衆智を集めて善処さるべき重大事項でもありますので、来る九月二日に財政委員会を加えて第三回目の合同委員会が開かれ、此処で最終的に論議が集中されて、その決定事項が九月十三日、十四日の両日に招集される臨時宗議会に於て愈々本決りとなるのであります。如何様に決定されようと、その募財の実施は遠慮円成後になります。ようが、一派の負担としては未曾有の事となるであろうと存ぜられます。事茲に至ります迄、内局は苦慮に苦慮を重ねてまいりました。宗議会、特別委員会も内局の苦衷を察して、文字通り真剣にこの問題と取り組んで下さいました。衆智を

集めての一大決定事項であります。大学の消長は本派教学の盛衰に関わる問題として、挙派一致これをお取り上げ願って、遠諱円成の一大記念事業として、絶大の御協力御支援を懇願申し上げる次第であります。

★定期宗務所長会

定期宗務所長会が七月二十日宗務本所で開かれた。協議事項は、宗務当局の諮問案についてと、指示事項についてで、諮問案とその答申は次の通り。

〔第一項〕

一、学校法人花園学園花園大学全面移転にともない、その跡地並に施設一切を宗教学法人妙心寺派が取得するために要する資金造成等の諸方策について

答 申

遠諱に引続いての募財であるから一派寺院にとつては大きな負担ではあるが、一派の財産として花大敷地の入手は是非必要であつて、この期を逸しては悔いを千載に残すと思われるので、その入手に万全を期せられたい。

一、募財の主旨の周知徹底を期する為に、地方教区の要請に応じて当局は一日内局等極力各教区の協力を求めて貰いたい。

二、募財については教区割とし、募財方法は教区の独自性を生かされたい。但し、募財は遠諱終了後とする。

三、土地建物利用のビジョンは、花園禅塾・大衆禅堂・教

化センターの設置等、本派教学事業に重点を置き、有意義に活用せられたい。

〔第二項〕

檀信徒、年来待望の遠諱参拝の勝縁を、真に布教の場となし得るか否かは本派教線の消長に直接結びつくことであるから、当事者一丸となつて下座行に徹し、参拝者の応接、待遇に万遺漏なきあらゆる方途を考究されたい。

一、会前、会中、会後を通じて、当該教区より先駆を派遣して当局と連絡を密にし、登山より退出までの円滑な事務処理に当らせるのも一法かと思う。

二、法要時間の適宜増減を考慮されたい。

三、参拝人員の報告は、なるべく期日を守り事務渋滞を避けるよう協力を望む。

なお本会は、会長に河村義政師（岐阜東）、副会長に阿部美明師（東北）を選出進められた。花大跡地取得のために、本派は七億円を捻出しなければならず、その他の関連諸経費を入れると十一億円にもなるもので、答申も大綱にとどまった。九月に臨時宗議会招集が予定されており、必要があればその後にもう一度臨時宗務所長会を開いて、協議が重ねられることになる。

（九月五日）

★花園大学の現況について

花園学園常任理事 佐野 大義
総合移転の進捗と最近の学内情勢

花園大学の総合移転事業は各方面のご協力ご援助によって予定どおりに進行し感謝にたえません。

特に妙心寺派におかれましては、九月半ば臨時宗議會を開かれ、大所高所から大学移転問題についても熱心なご討論があり、百年の計のために大学移転を完成すべしと力強い激励を賜ったのであります。大学はこの期待に応えるべく「移転必成」の大願に振起っております。

しかし、最近移転起工式反対、前期試験反対ストライキの事態が起り新聞テレビでも報道され、皆さまに大変なご心配をおかけしておりますことを深く御詫び申し上げます。

大学は率直にこの事態について、ご報告を申し上げ、これに対する大学側の姿勢と処理についてご理解を頂きますようお願いを申し上げます。

移転起工式について

起工式は、九月八日の吉日をトして午前十時半から挙行することになって、学生代表の学友会にも参列するよう招待しておりました。ところが九月七日に突然「全学協準備会」の名で「起工式実力阻止」の立看板が出され、当日朝八時頃に他大学も含む三十余名の学生が移転地正門に座りこみ、招待者の通行を阻止しました。大学側は参列の来賓に失礼があつてはならぬという判断から西側の門を開いて、来賓関係者を通して予定を三十分繰りあげ、厳肅に執り行いました。

この時の学生の主張は、「起工式をとりやめ学生無視の移

転問題を白紙に還元し、移転について根本的に考え直せ」ということであります。

大学側は、去る四月十五日に総合移転することを公示して以来、一貫して「総合移転」は経営の問題であり、学生と協議して決定する事項ではないことを徹底して説明しており又その様に実施して参った次第であります。

しかし、今回の様な大事業（移転）を行う上で他大学同様本学でも当然反対運動が起ることは予想して参りました。又、反対する学生の中心は千二百名中、数十名であります。大学としては、この反対する学生は勿論、その他の一般学生に対しても積極的に対話の場を設定して辛抱強く、理解を得るよう努力を重ねていく決意でございます。

学内ストライキ問題について

去る二十九日午後「学生大会」が開かれ次の様な決議がなされると共に、同日夕刻より全学ストライキに入りました。

一 学生部長、文学部長は糾弾集会に応じよ——私達は問題が解決するまでストライキで闘う。ストライキの全責任を「スト実」が持つ。

二 試験を全面的に保証せよ——

大学当局はこの決議を受け、直ちに三十日以降の試験並びに関連業務を停止すると共に、その旨を理事会に報告しました。

この学生大会決議について若干の説明を加えますならば、

1 大学当局は、文学、学生、総務の三部長で構成され、文学、学生二部長は、教授会員より選出され、総務部長は理事會より選出された常任理事が就任し、大学経営の責任者となる。(移転事業の責任者も直接的には総務部長である)

2 文学、学生二部長が糾弾される理由は、

イ 当局組織の中での二部長の役割と理事会への関わり方についての矛盾の追求。

ロ 二部長と学生との見解の相違のあるままでの前期試験実施に対する反発。

に要約され、主題であるべき「移転」問題が見当たらないのであります。折しも九月三十日、十月一日の各夕、朝刊紙、NHKのニュースで、「花園大学無期限スト——移転に反対」の報道に対し学生は批判して、特に「移転に反対する学生らの表現は誤報である」とこれに反発を加えていることを重視しなければなりません。

学債募集の現況について

同窓会員を中心に愛校興学の思召しから全国津々浦々に亘って学債に応募下さり、九月三十日現在二億三千七百万円以上に達しました。一方校舎、設備等の新政策に伴う請負業者の学債応募協力、約一億四千万円の申込があり、併せて三億七千七百万円以上となり、本年度目標四億五千万円は達成出来るものとの見通しを立てておる次第であります。

大学の姿勢について

以上の現況をふまえて、特に理事会としましては、不退転の決意も新たに移転事業を推進すると共に、教職員力を合せ、反対する学生の説得に当る所存でございます。

皆様方より、更なる御叱声と御鞭撻を得ることにより移転事業完遂の糧といたく存じております。

最近の一連の現状を御報告申し上げますと共に、よろしく御法愛賜りますようお願い申し上げます。

妙心寺派各寺院職殿

(十一月五日)

花園大學史年表

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一八七二 (明治五)	五 八	東京に師範学校設置。 国立銀行創立。 学制制定につき太政官布告。		般若林設置(妙心寺山内)。
一八七三 (明治六)	一 一〇	徴兵令発布。 開成学校開校。 征韓論敗れる。		
一八七四 (明治七)	二 八	佐賀の乱。 学校の名称を統一し、官立・公立・私立の別を明らかにする。		連合總費設置(東京)。
一八七五 (明治八)	四 一一	立憲政体樹立の詔勅。 同志社英学校創立。	四・	般若林閉鎖。
一八七六 (明治九)	三	磨刀令公布。		

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一八七七 (明治一〇)	二 四 一〇	西南の役起こる。 東京大学創設。 学習院開校。		
一八七八 (明治一一)	六	陸軍士官学校開校。		
一八七九 (明治一二)	一 九	朝日新聞創刊。 教育令を公布(学制廃止)。		連合総費京都移転。
一八八〇 (明治一三)	一二	教育令改正。		
一八八一 (明治一四)	一〇	自由党結成。		
一八八二 (明治一五)	一 一〇	軍人勅諭発布。 日本銀行開業。 東京専門学校創立。		
一八八三	四	陸軍大学校開校。	四・	妙心寺派は連合より分離して大衆寮を設置(妙心寺山)

一八九一 (明治二四)	五	大津事件。		
一八九〇 (明治二三)	一〇	慶応義塾、大学部を開設。 教育勅語発布。		
一八八九 (明治二二)	二	大日本帝国憲法発布。		
一八八八 (明治二一)	四	枢密院設置。		
一八八七 (明治二〇)	二	国民之友創刊。		
一八八六 (明治一九)	三	帝国大学令公布。	一二・	普通大教校及び中教校設置。
一八八五 (明治一八)	一二	森有礼初代文部大臣に就任。		
一八八四 (明治一七)	九	加波山事件起こる。		
一八八三 (明治一六)	一一	大日本教育会結成。 鹿鳴館開館式。		内。

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一八九二 (明治二五)	六	国民協会結成。		
一八九三 (明治二六)	八	帝国大学令を改正。	七・一 七・二四	普通大教校の改革。 学生の小試験ボイコット起る。同学生は退校処分。
一八九四 (明治二七)	八	日清戦争起こる。	三・九 一二・	花園大教校同窓会設立さる。 普通大教校を普通学林と改称。西部(山城国)・東部(美濃国)に設置。
一八九五 (明治二八)	四	日清講和条約調印。 三国干渉。	四・九	西部普通学林開場式举行。
一八九六 (明治二九)	一二	帝国教育会を結成。		
一八九七 (明治三〇)	三 六	足尾鉾山鉾毒事件起こる。 京都帝国大学を設置。	四・ 四・一〇 五・一二	妙心寺派興学会を開設する。 普通学林、尋常部を四ヶ年、高等部を二ヶ年とする。 普通学林建築起功規程布達さる。 東部学林の変起こる。
一八九八 (明治三一)	七	日本美術院創設。	八・	普通学林建築工事。

一八九九 (明治三二)	一〇 八	私立学校令公布。 普通選挙期成同盟会結成。	九・ 九・二六	普通学林、東西両部を合併、葛野郡花園村に新築移転。 普通学林通則布達さる。
一九〇〇 (明治三三)	三	治安警察法公布。 教員免許令を公布。		妙心学林同窓会設立。
一九〇一 (明治三四)	一二	日本赤十字社創立。		
一九〇二 (明治三五)	九	東京専門学校を早稲田大 学と改称。		
一九〇三 (明治三六)	三 四	専門学校令公布。 国定教科書制度成立。	一・八 一一・	評議會において普通学林学年度変更を決定(四月一日 を学年始めとする)。 普通学林を花園学林と改称。
一九〇四 (明治三七)	二	日露戦争始まる。	五・一〇	花園学林学則発布(正科五年と実修科二年設置)。
一九〇五 (明治三八)	九	日露講和条約調印。	一一・一〇	制服改革運動を発端として同盟休校、学生四十三名退 学処分。

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九〇六 (明治三九)	二	日本社会党結成。	四・	体操科実施。
一九〇七 (明治四〇)	三 六	義務教育年限を六年に延長。 東北帝国大学を設置。	四・	花園学林を花園学院と改称(高等部と中学部設置)。
一九〇八 (明治四一)			二・一〇	花園学院、専門学校令により認可。
一九〇九 (明治四二)	一〇	伊藤博文暗殺さる。	四・一	妙心寺派教学財団設置。
一九一〇 (明治四三)	五 八 一二	大逆事件起こる。 韓国併合ニ関スル条約調印。 九州帝国大学設置。		花園学院高等部を臨済宗大学と改称、分離独立。学長に坂上宗詮老師就任。主監 山本完道。
一九一一 (明治四四)	二 六	日米修正通商航海条約調印。 青踏社結成。	九・二七 一〇・五 一〇・二〇	臨済宗大学々則を制定発布。 臨済宗大学開校式。

一九一七 (大正六)	九 一	金輸出禁止。 ソビエト政權成立(ロシ ア一〇月革命)。	二・ 四・	臨濟宗大学学報創刊。 梅山玄秀老師、学長に就任。鷺尾祖鳳、主監に就任。
一九一六 (大正五)				
一九一五 (大正四)	五	二一ヶ条の日華条約調印。	一・四 五・ 七・	教場新築工事起工式。 新築教場落成。 研究室落成。
一九一四 (大正三)	三 七 八	實業教育費國庫補助法を 改定。 第一次世界大戦起ころ。 ドイツに対し宣戦布告。	四・ 五・一二 ・二〇 九・一四	横田宗直、主監に就任。 学長阪上宗詮老師選化。 原円応、学長事務取扱に就任。 釋宗演老師、学長に就任。
一九一三 (大正二)			五・ 一〇・六 一・	臨濟宗大学布教団を組織。 主監室、講師室、監事室等如是院へ移転。 運動場拡張。
一九一二 (大正一)	二 二	同志社大学設立。 第一次護憲運動はじまる。	一・二八 一・三	臨濟宗大学日曜学校開設。 花園同窓会発会式。

年	月	一般事項	月・日	花園大學関係事項
(一九一八) (大正七)	四 八 一一 一二	北海道帝國大學設置。 米騒動起ころ。 第一次世界大戰終る。 大學令公布。	二・四・七・八・一二・	江西黎州、主監に就任。 池上慈澄老師、學長に就任。斎藤竜戒、主監に就任。 旧京都府立桂村農林學校々舎買収。 教室・寄宿舎増改築起工。 教室・寄宿舎増改築工事落成。
(一九一九) (大正八)	二 六	帝國大學令改定。 対独講和条約調印。	一一・一	松岡寛慶老師、學長に就任。金仙宗諱、主監に就任。
(一九二〇) (大正九)	一 二 四	國際連盟発足。 慶応義塾大學、早稲田大學、大學令により設立認可。 同志社大學、明治大學、法政大學、中央大學等、大學令により設立認可。	九・八	妙心寺派、教學調査会を開催。臨濟宗大學を大學令による大學とすることを認めず。
(一九二一) (大正一〇)	四 一〇	大學、高等學校の學年開始を九月から四月に改定。 日本労働總同盟成立。	四・一四 一〇・二一	加藤至道老師、學長に就任。 學則改正認可。
(一九二二) (大正一一)	五	竜谷大學、大谷大學、大學令により設立認可。		

一九二二 (大正一一)	九	関東大震災。	六・六 七・ 一二・二	神月徹宗老師、学長に就任。 新築講堂上棟式。 新築講堂落慶式。
一九二四 (大正一三)	一	第二次護憲運動起る。	九・	手島文倉、主監に就任。
一九二五 (大正一四)	四 五	陸軍現役将校学校配属令公布。 治安維持法公布。 普通選挙法公布。	三・ 三・二〇	学則改正、修業年限を五年とする。 禅学研究創刊。
一九二六 (昭和一一)				
一九二七 (昭和一二)	三	金融恐慌起る。	九・五	古仲鳳洲老師、学長に就任。奥江順徳、主監に就任。 妙心寺図書館(書庫)新築。
一九二八 (昭和二三)	一 六	専門学校令改正。 張作霖爆死事件。	三・二六	中等学校修身科教員無試験検定認可。

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九二九 (昭和四)	一〇	世界大恐慌はじまる。	五・一 九・一六	榎梧宝嶽老師、学長に就任。 妙心寺派、教学調査会開催。臨済宗大学を単科大学にする案件を否決。
一九三〇 (昭和五)			七・一〇 一一・	教室兼閲覧室起工。 教室兼閲覧室完成。
一九三一 (昭和六)	九	満州事変起こる。		
一九三二 (昭和七)	五 一二	五・一五事件。 日本學術振興会設立。	四・一	後藤瑞巖老師、学長に就任。
一九三三 (昭和八)	三 五	国際連盟を脱退。 京大滝川事件起こる。	五・	日種愚道、主監に就任。
一九三四 (昭和九)	四	帝銀事件起こる。	四・一〇 六・一 一〇・	臨済宗大学を臨済学院専門学校と改称。 中等学校修身科教員無試験検定認可。 台風により寄宿舎、校舎被害。

一九三五 (昭和一〇)	二	天皇機関説問題起こる。	四・ 五・一六 八・二〇	福場保州、教務学監、日種愚道、庶務学監に就任。 設立者を妙心寺派教学財団に変更。 臨済学院専門学校、学部開設認可。
一九三六 (昭和一一)	一一 二	二・二六事件。 日独防共協定調印。	一二・ 四・	臨済学院専門学校、学部開設。 臨済学院校舎改築期成会発足。 妙心寺派宗会、臨済学院校舎改築案を可決。
一九三七 (昭和一二)	一一 七	日華事変起こる。 日独伊防共協定調印。	二・二六	臨済学院校舎改築期成会、浄財勸募を開始。
一九三八 (昭和一三)	四	国家総動員法公布。		
一九三九 (昭和一四)	五 三	文部省大学の軍事教練を 必修とすることを通達。 ノモンハン事件。		
一九四〇 (昭和一五)	九 七	日本労働総同盟解散。 日独伊三国同盟成立。		
一九四一 (昭和一六)	一二 三	国民学校令公布。 太平洋戦争起こる。	四・	福場保州、学監に就任。

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九四二 (昭和一七)	二 六	シンガポール占領。 ミッドウェイ海戦。		
一九四三 (昭和一八)	一 一〇 一二	大学令、及び専門学校令 改正。 学生・生徒の徴兵猶予を 停止。 学徒出陣。	一〇・	市川白弦、学監に就任。
一九四四 (昭和一九)	八	学徒勤労令公布。	四・一 七・二二	梶浦逸外老師、学長に就任。 学徒勤労動員(名古屋 神戸製鋼その他)
一九四五 (昭和二〇)	五 七 八	ドイツ無条件降伏。 戦時教育令公布。 ポツダム宣言。 太平洋戦争終わる。	四・一 八・	奥大節老師、学長に就任。 学徒勤労動員解除。
一九四六 (昭和二一)	一一	日本国憲法公布。		

一九四七 (昭和二二)	三	教育基本法、学校教育法公布。		
一九四八 (昭和二三)	二 四 一	大学設置委員会、大学設置基準を答申。 新制大学発足。 極東国際軍事裁判判決出る。		新学制実施に伴い新制花園大学として設立認可。仏教學部、仏教学科設置。 緒方宗博教授、シカゴ大学留学のため渡米。
一九四九 (昭和二四)	一 三 六 七 八 一〇 一二	教育公務員特例法公布。 大学設置委員会、新制大学九四校を決定答申。 社会教育法公布。 CIE顧問イールズ、新潟大学でレッドパージの演説をする。 松川事件。 中華人民共和国成立。 私立学校法公布。	二・二一 一〇・一 一一・二六	奥大節老師、学長辞任のため山田無文老師新学長に就任。市川白弦教授、学監辞任のため荻須純道教授新学監に就任。
一九五〇 (昭和二五)	一 二	日本育英会、特別奨学金貸与制度を発表。 東京都で教員のレッドパージ実施(二四六名)。		

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九五〇 (昭和二五)	四 六 七 八 九	公職選挙法公布。 朝鮮戦争始まる。 国立大学協会創立。 全学連、レッドパージ反 対闘争を宣言。 第二次米国教育使節団、 報告書を発表。		
一九五一 (昭和二六)	五 七 八 九	児童憲章制定。 文部省、学習指導要領(一 般篇、試案)を改訂。 フルブライト法に基づく 日米教育交換計画調印。 対日講和条約、日米安全 保障条約調印。	二・ 三・一 九・二〇 一一・九	中学校教員社会科一級免許状、高等学校教員社会科二 級免許状の無試験検定資格認可。 財団法人妙心寺派教学財団を学校法人妙心寺派教学団 に組織変更。 藤吉慈海教授、印度のペナレス大学に留学。 読売新聞主催京都六大学軟式野球秋季リーグ戦にて花 園大学チーム優勝。
一九五二 (昭和二七)	三 五 六 七	私立学校振興会法公布。 血のメーデー事件。 中央教育審議会設置。 破壊活動防止法公布。		

<p>一九五三 (昭和二八)</p>	<p>七 八 一〇</p> <p>文部省、教育の中立性維持について通達。 学校図書館法公布。 学校教育法施行令公布。</p>		
<p>一九五四 (昭和二九)</p>	<p>三 六 七</p> <p>文部省、学校基本調査報告書刊行。 「教育三法」公布。 防衛庁、自衛隊発足。</p>	<p>一・五 五・五 六・一八 一〇・一五</p>	<p>花園大学昇格五周年記念の新学期国歌募集さる。 学友会「全日本学生平和会議」に参加。 教養講座開設(外来講師による講演会)。 「大学通信」創刊。</p>
<p>一九五五 (昭和三〇)</p>	<p>四 六 八</p> <p>アジア・アフリカ会議、バンドンで開催。 全日本私学連合会発足。 第一回原水爆禁止世界大会開催(広島)。</p>	<p>一・一一 二・七 三・三一 五・二五 六・一 六・二一</p>	<p>始業式にて「禅文化」創刊宣言、及び学生寮改築期成要望の宣言さる。 「禅文化」協議会開催。 小笠原秀実教授辞任。 同窓会主催にて小笠原秀実先生謝恩式実施。 「禅文化」創刊。 学友会「全国仏教学生大会」に参加。</p>
<p>一九五六 (昭和三一)</p>	<p>六 九</p> <p>新教育委員会法公布(公選制から任命制へ)。 文部省、初の全国学力調</p>	<p>六・一六 六・二一</p>	<p>山田無文学長作詞、団伊玖磨作曲の新歌発表会開催。 学友会「日本仏教学生大会」に参加、本大会にて「全日本仏教学生連盟」結成を決議。</p>

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九五六 (昭和三一)	一〇	査を行なう。 日ソ共同宣言。 大学設置基準(省令)を 制定。 国連総会、日本の加盟を 可決。	九・一七 一〇・一五	緒方宗博教授、フルブライトによる交換教授として渡 米(ワシントン大学・ミシガン大学)のため歡送会。 「修学規定・学生心得」配布、説明会開催。
一九五七 (昭和三二)	五 一〇 一二	日教組、勤評・不当弾圧 反対全国一斉職場集会開 催。 ソ連、人工衛星の打上げ に成功。 日教組、勤評闘争で非常 事態宣言を發表。	五・六 六・二六 九・一 九・三 一〇・二八 一一・五	アッセンブリアワー開設(自治活動、聖歌練習、特別 講演)。 庭球コート開き。 久松真一教授、ロックフェラー財団の招きでハーバ ード大学客員教授として渡米。 山田無文学長、中国訪問。 山田無文学長、中国訪問。 学内放送施設完成。
一九五八 (昭和二三)	三 四 九	文部省、小・中学校「道 徳」実施要綱を通達(四 月より実施)。 学校保健法公布。 日教組、勤評阻止全国統 一行動を実施。	八・二八 九・二七 一一・二四 一二・二三	新学寮設計図完成。 新学寮工事地鎮祭。 小笠原秀実先生学内追悼会。 教室及び廊下の床面の舗装工事。

<p>一九五九 (昭和三四)</p>	<p>一 四 一〇</p>	<p>キューバ革命。 社会教育法を改正、社会教育主事を設置。 文部省、初の教育白書「わが国の教育水準」を發表。</p>	<p>二・二三 二・二四 四・一 五・二五 六・五 六・二五 一〇・二四 一二・一一</p> <p>新寮落成式举行。「白雲寮」と命名。 旧寮（参玄寮）解体。 妙心寺開山大師六百年大遠諱厳修（一五日まで）。 臨済宗大学創立五〇周年、花大昇格一〇周年記念式典举行。記念大講演会（講師・鈴木大拙） 仏学連全国大会総会開催。 中国高僧伝輪説会発足。 日本印度学仏教学会第一〇回学術大会開催。 花園大学改築後援会発起人会開催。花園大学改築後援会成立宣言をし、図書館研究室及び教室の改築を計画。</p>
<p>一九六〇 (昭和三五)</p>	<p>一 八 一〇 一二</p>	<p>新安保条約調印（六月発効）。 荒本文相、教育基本法の再検討を表明。 文部省、高校の学習指導要領を改訂。 国民所得倍増計画を閣議決定。</p>	<p>五・八 八・二九</p> <p>改築後援会理事会開催。財団法人禅文化研究所設立構想を決議。 西村恵信助手ベンシルヴァニアのキリスト教クエーカー派の研究所の招きで留学。</p>
<p>一九六一 (昭和三六)</p>	<p>四</p>	<p>一・一一 二・一三</p>	<p>小学校、新学習指導要領による教育課程を全面実施（中学校は翌年、高校は一九六三年から実施）。 山田無文学長、日印親善仏蹟参拝調査団の顧問としてインド訪問。 山田無文学長仏蹟巡拝帰朝講演会。</p>

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九六一 (昭和三六)	六 一〇	学校教育法改正(高等専門 学校設置に関して) 中学二・三年生全員を対 象にした全国一斉学力テ スト。	九・一五 九・二五 一一・一〇 一二・九	西村恵信助手帰朝歓迎会。 荻須純道教授文学博士の学位授与決定。 平田高士講師、ミュンヘン大学に招聘出講のためドイツへ出発。 伊藤古鑑・西義雄両教授、妙心寺派より宗門文化賞授与。 伊藤・西両教授宗門文化賞、荻須教授文学博士受領記念式典及び祝賀会。
一九六二 (昭和三七)	三 四 一二	義務教育諸学校の教科用 圖書の無償に関する法律 を公布。 工業高等専門学校発足。 文部省、全国一斉学力調 査を実施。	二・六 三・一三 九・三〇 一一・五 一一・一七	理事会三十七年度予算等可決(教室図書館建築の件)。 改築後援会実行委員総会開催。 妙心寺派花園会々長会議で花園会結成一〇周年記念事業として、大学の校舎新築を決議。 図書館研究室地鎮祭。 大蔵会開催。今津文庫善本百三十余点の展覧。
一九六三 (昭和三八)	一 二 一一	能力開発研究所設立認可。 日教組脱退者による日本 教師会結成。 能力開発研究所、第一回 能研テストを実施。	九・二八 一一・一五	仏教学部に仏教福祉学科を新設することを申請。 図書館落成。

<p>一九六四 (昭和三九)</p>	<p>一二</p>	<p>教科書無償措置法公布。</p>		
<p>一九六五 (昭和四〇)</p>	<p>二六</p>	<p>米軍、北ベトナムへの北爆を開始。 日韓基本条約調印。 家永三郎、教科書検定を違憲として東京地裁に提訴。</p>	<p>二・一七 四・一九 五・ 九・三 九・一七</p>	<p>法人評議会、文学部申請について協議。 校舎（教室棟）落成。 ベトナム反戦僧衣デモ。 教授評議会、文学部（仏・社・史・国）設置を決定。 台風二四号のため、本館（木造）の被害甚大。</p>
<p>一九六六 (昭和四一)</p>	<p>七〇</p>	<p>東京都教委、都立高校入試制度改善の基本方針（学校群、三教科制など）を決定。 中教審、後期中等教育の拡充整備についての最終答申。</p>	<p>二・二三 四・一 一〇・二六 一一・</p>	<p>禅文化研究所開所。 校舎の改築工事起工。 仏教福祉学科増設（五〇名）。 事務室が学生課（補導・厚生・寮務・教務）と総務課（会計・庶務）の二つに分れる。 法人評議会、本館新築を協議。 本館改築反対運動起る。</p>

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九六六 (昭和四一)	一二	建国記念日を二月一日とする政令公布。	一二・二三	本館新築に関する学内説明会。
一九六七 (昭和四二)	六	中東戦争始まる。 東京教育大学評議会、筑波研究学園都市への移転を強行決定。 日本学術振興会法公布。	一・ 一・二五 一〇・二 一一・一二 一二・五 一二・一五	白雲寮自治化闘争。 本館新築起工。 本館竣工。 本館落成式。 学館建設をめぐり、全学ストライキ。 ストライキに関して、学生二六名を処分(最高無期停学三名)。
一九六八 (昭和四三)	四 六 七 一〇 一二	日米、小笠原返還協定に調印。 都知事、朝鮮大学校を各種学校として認可すると決定。 東大の安田講堂、研修医問題で一部の学生に占拠される。 文部省、新小学校学習指導要領を告示。 「明治百年記念式典」を東京で開催。 東京大学、来年度の入試を中止と決定。	四・一 一二・一一	従来の学監制度にかわり、三部長制度が発足する(文学部長柳田、学生部長大石、総務部長木村)。 学生会館起工。

<p>一九六九 (昭和四四)</p>	<p>一 四 四 一</p>	<p>東大安田講堂の封鎖解除、 される。能力開発研究所、 事業の中止を決定。 文部省、新中学校学習指 導要領を告示。 大学の運営に関する臨時 措置法公布。 放送大学問題懇談会発足。 仲縄返還に関する日米共 同声明発表。</p>	<p>七・一〇 九・一六 一〇・一 一〇・二八 一〇・二九 一一・五 一二・一 一二・二二</p>	<p>学生会館竣工。 七〇日間の長期団交始まる(一二・一)。 総務部長に佐野大義師就任。 本館バリ封鎖。 改革小委員会発足。 赤軍大菩薩峠事件で本学学生四名逮捕さる。 授業再開。 改革小委よりカリキュラム改編案出る。 従来、全学生の必修であつた実践禅学を、全構成 員が自主参加できるものに改革。実践禅学Aは学 外にも公開する等。</p>
<p>一九七〇 (昭和四五)</p>	<p>五 七 九</p>	<p>日本私学振興財団法公布。 東京地裁、家永三郎の主 張を認める判決(いわゆ る杉本判决)、文部省、直 ちに控訴。 文部省、大学設置基準を 改正。</p>	<p>二・一六 三・一六 四・一 四・三 五・一八 五・二五 六・一三</p>	<p>学則・修学規程および学内諸規程改編。 ・当局 藤吉・鷲山・佐野 新入生の学外オリエンテーション案出る(於亀岡大本 教)後、学生の反対で中止となる。 団交 出席制度・前庭緑地化について。 前庭緑化工事完成(芳徳苑と命名) 安保粉砕全学ストライキ(二六日)</p>

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九七〇 (昭和四五)			一〇・一二 一二・一四	教員人事委員会出来る(昇任人事を扱う)。 定年制規程でる。
一九七一 (昭和四六)	五	国立及び公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法公布。	四・一	・当局川西原・常盤・佐野
	六	中教審、今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について答申。	四・五	改革小委の存廃について討議され、結局実績なしとのことで廃止決定。
		沖繩返還協定調印。	四・一九	各種委員会について議論。委員はできるだけ「持ちまわり」であることを申し合わせる評議会の不活潑さに批判でる。
	一〇	文部省、筑波新大学創設準備会を設置。	五・一七	赤軍派二学生の復学について審議、否決さる。
	一一	「民主教育を進める国民連合」発足	五・二五 六・七	〔右記復学問題を再審議し、許可を決定。〕
	一二	大学入学者選抜方法の改善に関する会議、入試改革を答申(全学共通学力テストの実施など)	九・一一 九・一七	応援団暴力事件(対中執系学生)(一六日) 全学集会「暴力排除の確認」。
			九・二二	学内捜査(中執側告訴による)。
			一二・三	教育研究充実長期計画案でる。

		一・二・	<p>教身体制研究委員会設置について討議される。</p>
<p>一九七二 (昭和四七)</p>	<p>五 六 九 一〇</p> <p>沖繩返還。 国際交流基金法公布。 田中首相、中国訪問。日 中国交正常化共同声明。 国大協、全国共通一次試 験の基本構想を了承。</p>	<p>一・二〇 一・二六 三・三 四・一 五・八 六・一九 一〇・一八 一〇・二五 一二・九</p>	<p>本館バリ封鎖。 バリ、学生が自主解除。 教身体制研究委員会発足。 ・当局に荻須・西村・佐野。 教体研レポートでる 一〇項目の問題提起をめぐり議 論。 実践禅学C（接心）について討議される。 創立一〇〇周年記念式典。 赤軍派手製爆弾に関連して学内捜査。 学費値上反対の坐り込み（一・一四まで）。</p>

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九七三 (昭和四八)	八 九 二	金大中事件。 「筑波大学法」成立。 国連大学本部の日本首都 閣設置決定。	三・二七 四・一六 四・一六 四・ 五・一四 六・二一 六・二五 九・一二 一一・一七 一一・二二 三〇二	<p>教体研総括レポート、学則・規程の総点検の必要性を訴える。 各種委員会を一人一委員制とする。</p> <p>・当局川土岐・小林・佐野。 各種委員会の改編案で。①就職委員会設置 学生募集委を廃止して企画広報委を発足さす。</p> <p>図書館閲覧室・司書室拡張工事。</p> <p>教体研「各学科・事務局の現状と問題点についてのアンケート」を試み、それを基に教職員研究会を開きたいと報告。</p> <p>教職員研究会（教体研よびかけ）出席わずか一二名で 流会。</p> <p>教体研「各学科の現状と問題点」アンケートの報告。</p> <p>社福「施設実習の心得」差別文書問題起る。</p> <p>専任教員服務申し合せ確認事項でる。</p> <p>「差別文書問題をめぐり全学集会。</p>

一九七四
(昭和四九)

三	四	七	一一
放送大学設置調査研究会 議、放送大学設置につき 最終答申。	筑波大学開校。	国大協理人会、国立大学 共通一次入試(セ)タ (仮称)設置などの構想 発表。	閣議、大学運営臨時措置 法は八月一七日以後も効 力を失わずと了承。 兵庫県八鹿高校で差別解 放教育にからみ傷害事件 発生。
四・一	四・二二	六・	六・一一
六・一七	七・一	七・八	七・
九・一二	九・三〇	一〇・二九	一一・二五
<p>・当局(藤吉・小野・佐野。 各種委の改編案入試委の新設(企委+教委+入試事務 室四名)結論でず。</p>			
<p>入試委、原案通り発足する。</p>			
<p>入試委内に入試改革を遂行する小委「ユニーク」でき る。</p>			
<p>東講師「差別発言」問題。</p>			
<p>一次・二次入試に「小論文」を課することを決定。</p>			
<p>新第二教員研究室新築。</p>			
<p>実践禅学に関する公開質問状への回答でる。</p>			
<p>入試のポイントでる。</p>			
<p>「施設実習の心得」問題で団交。</p>			
<p>教務委より第一外国語変更案でる。</p>			
<p>教務委よりカリキュラム改編案でる。 入試のポイントに对应するようなカリキュラムを 作らなければならない。教体研で抜本的検討を。</p>			
<p>教体研・教務委合同委報告(カリキュラム改編につい て)</p>			

年	月	一般事項	月・日	花園大學関係事項
一九七四 (昭和四九)			一二・九	<p>教体研報告・文学部長任期を二年に・部長に任期終了後研修期間(サバティカル)を与える・書道の教職課程移行について・万年助教・講師に対する停年制設定報告にとどまり、継続審議となる。</p>
一九七五 (昭和五〇)	四 六 二一	<p>国大協、国立大学共通一次試験に関する調査報告書発表。 ベトナム戦争終る。 日本教育会結成。 国大協総会、共通一次試験実施について積極的具 体化の方針決定。</p>	<p>一・二四 二・四 二・一四 二・二四 三・三 三・六 四・一〇 四・一七 四・三〇 五・一九</p>	<p>学生大会学費値上撤回・理事会団交権の確立、無期限ストライキに突入。 教授会と学生との協議会(値上・長期計画をめぐって)。 理事会とスト実との話し合い。 学生大会三・一にスト解除し三・一六より再びスト、を決定。 後期試験―学生大会 試験阻止。 教授会と団交。 ・当局(福島・芦谷・佐野)。 各種案の改編案入試委は廃止し、入試については企画委が行なうという案。結論せず、継続審議。 新入生の学外オリエンテーション(滋賀 希望丘)。 入試案、企画委よりでる(企画委+教務委員長+教務課長)結論です。 入試委は前年どおり、企画委と教務委の合同委と決定。</p>

		(一九七六 昭和五一)
六・九 七・二一 九・八 九・二二 一〇・六 一〇・二〇 一〇・二〇 一一・二一 一二・一一	専修学校制度発足。 ロッキード事件。 国大協総会、七九年度か らの共通一次テストの実 施を決定。また一学期校、 二期校の一本化を決定。	一・三〇 三・二三 二・二八
入試改革案「一次は小論文のみ」案でる。決定。 入試改革案「推薦は副申書とグループ・ミーティン グ」決定。 学生相談室調査委でできる。 部長制度について審議文学部長・図書館長の任期が二 年となる。教務部長新設は尚早とのことで見送り、文 学部長がこれを兼ねることとなる。 学内奨学金支給制度でできる。 教務委より「一般教養課程総合科目開講にむけての検 討」が提起される。 教体研より「書道コース設置」についての答申でる。 当面は不可能であるとの結論。 反戦デー暴力事件（民青×反日共系） 右記事件に関して学内強制捜査三学生が逮捕（民青告 訴による）	総合移転計画書でる。 図書館委より「図書館白書」でる。現状を報告し、大 巾な充実が訴えられた。 各種委改編・移転プロジェクトチーム発足（教体研十 各課長）・企画広報委の発足、入試委の独立。 文学部定員変更認可（各学科七〇名）	

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九七六 (昭和五二)			四・一五 四・一六 四・一七 四・ 五・七 五・二四 六・七 六・二八 七・七 七・一六 七・二四 九・六 九・八 九・二〇 九・二九	<p>・当局常盤・横井・佐野。 総合移転計画公示される。</p> <p>新入生学外オリエンテーション(小豆島)。 若草寮完成。</p> <p>移転をめぐり 当局・中執協議会第一回。</p> <p>史学科より専攻(仏史・国史) 別学生募集案で入試委・教体研・教委に付託。別学生募集案で入プロジェクト・チームより建物利用計画でる。</p> <p>史学科専攻別募集案について答申見合わせる事となる。</p> <p>教体研より「教体研の沿革と性格」でる。</p> <p>学友会部長会議より全学協議会を認めよとの要求でる。</p> <p>全学協(準)でる。</p> <p>全学協(準)と当局との話し合い。</p> <p>教体研より「教員人事委員会規程」でる、決定。</p> <p>移転工事起工式挙行。学友会阻止行動。</p> <p>教務委より「総合講座開設」提起される。引きつづき教務委で検討してゆくこととなる。</p> <p>学生大会 ストライキ突入</p>

			<p>一一・一九 一一・二〇</p>	<p>教授会、授業再開を決議。 教授会声明「：団交体制の苦渋にみちた再検討：」。</p>
<p>（一九七七 昭和五二）</p>	<p>四 七</p>	<p>国会において国立学校設置法改正案可決により、大学入試センター設置決定。 共通一次試験実施大綱決定。 新学習指導要領告示。 「君が代」を国歌と規定。</p>	<p>二・五 三・ 三・三一 四・一</p>	<p>横井学生部長辞任、後任に西村氏（三月まで）。 山越寮完成。 荻須純道教授停年退職。 機構改革行われる ①従来、の当局呼称をやめ、執行部とし新設教務部長を加え、四部長がこれにあたる。②評議会規程の改訂に従来は当局+学科主任であったが、執行部+委嘱された教職員とする。③教授会規程の改訂↓総務部長と各課長を除外する。 全学協定、入学式場に乱入、学長につめより常任理事団交の実現を確約さす。 移転完了。 移転記念式典。 常任理事団交の予備折衝決裂、監禁暴行。大学の要請で機動隊導入。二学生逮捕。 学生大会抗議ストライキ否決される。 教授会は一九六九年の大衆団交における確約書のうち「学生処分権放棄」に関する事項の放棄を宣言。 クリニックスセンター（仮称）の工事着工。</p>
			<p>四・二二 五・九 五・一五 五・一六 五・二〇 七・四 一二・一</p>	

年	月	一般事項	月・日	花園大学関係事項
一九七八 (昭和五三)	五	成田空港開港式。	二・一五	山田無文学長、妙心寺派管長に就任。
	六	大学入試センターが七九年度の共通一次試験実施要項発表。	二・二八	土岐武治教授(国文学科)、文学博士の学位を授与される。
	七		三・三一	山田無文学長辞任。
	八		四・一	・執行部 桑原・鷲阪・小林・佐野。 大森曹玄老師学長に就任。 就職課設置。
			四・	学生相談室開設。
			五・二五	クリニックセンター(仮称)開設。
			五・	山田無文・江西寛堂・荻須純道三先生名誉称号推戴授与記念式典(名誉学長に山田無文老師・名誉理事長に江西寛堂師を推戴、荻須純道先生に名誉教授号を授与した。)
			一一・二	第一期学内緑化工事。
			一二・一八	図書館増改築工事地鎮祭。 教学プロジェクトチーム発足。

後記

総合移転も「電撃的」であったが、この『花園大学三十年のあゆみ』の刊行もまた、花大らしいせわしい仕事であった。

刊行計画が決定したのは、今年の二月上旬であった。早速、編集委員会が構成され、小野信爾、西村恵信、驚阪宗演、森弘宗、芳沢勝弘、釈元孝の六名に編集委員が委嘱された。二月十日、第一回の編集委員会が開かれ、編集の基本方針を決定し、直ちに企画室は資料の収集と整理にとりかかった。二月二十一日の編集会議では、基本構想に基づき執筆分担を決定し、各方面に執筆依頼を出した。原稿の締切日は三月末日!! 執筆者には、年度末大多忙の中を、大車輪で筆を走らせて頂くこととなった。最終原稿を印刷所に手渡したのは四月十九日。そして、連休明けの五月九日から一挙に校正刷が上る。以後、夜を日について校正にとりかかり、ようやく上梓に漕ぎつけた。

本来、このような「大学史」刊行には、通常、最低一年間の準備期間が必要であろう。かかる強行日程であったために、全般に亘って「拙速」の感をまぬがれない。各時期ごとの記述分量に大きな差が出ることになってしまった。中でも、残念に思うのは、花大三十年史の中で最も貴重な資料であると思わ

れる「七十日間団交の記録」を紙面の都合で掲載できなかったことである。これは、元花大職員の河野義海さんが克明に残された膨大な記録である。何れの日か、活字になることを期し、今回は割愛した。

第六章の史料は、妙心寺派宗務本所『正法輪』編集室のご好意により提供して頂いた。本学設立者である妙心寺から花大の三十年をとらえたものとして興味深い。便宜をはかって頂いた『正法輪』編集室の津田清章さんにお礼を申し上げます。

書名は、当初、『花園大学三十年史』とする予定であったが、原稿が上がってきた段階で『花園大学三十年のあゆみ』と変えることになった。それは、内容の問題もあったが、特に文学部以降の花大十数年は、「歴史」として語ってしまうにはまだ余りにも近すぎる感じがしたからでもあった。

＊

昭和四十七年、花園大学が開学百年を迎えた年、学園理事会は『花園学園百年史』の刊行を企てたが、諸般の事情により沙汰やみとなった。したがって、昭和五十二年に企画室から出された『花園大学文学部十年資料集』を除くと、花園大学の歴史を表わしたものは、これが最初となる。あわただしく刊行された『三十年のあゆみ』の意味もここにあらう。将来、花園大学百年を通した大学史が編纂され、この『三十年のあゆみ』の欠点を補って頂くことを希ってやまない。

最後に、多忙な公務の合間をぬって短期間に御執筆頂いた先生方、同窓生の皆様方に厚くお礼を申し上げます。と同時に、苛酷なスケジュールの中で、休日を返上し連日連夜、「サンテ・ド・ウー」を傍

に常備して、校正作業に当って頂いた企画室の皆さんに感謝いたします。また、この「無謀」な刊行を可能にして頂いたのは、ひとえに、石田大成社の石黒哲朗さんのお蔭です。厚くお礼申し上げます。

昭和五十四年五月

『花園大学三十年史』編集委員

小	野	信	爾	西	村	恵	信
鷺	阪	宗	演	森	弘	宗	
芳	沢	勝	弘	釈	元	孝	

本篇執筆者（敬称略）

荻	須	純	道	西	村	恵	信
小	野	信	爾	前	中	一	晃
桐	田	清	秀	小	林	圓	照
鷺	阪	宗	演	福	島	雅	藏
土	岐	武	治	岡	田	雅	徹
佐	野	大	義	芳	沢	勝	弘
釈	元	孝		森	弘	宗	
法	谷	文	雅				

執筆協力者（敬称略）

藤	佐	衣	羽	光	宝	辻	見	山
田	藤	斐	澄	山	積		浦	田
義		弘	直	参	玄	光	宗	重
光	実	行	樹	悟	承	文	山	正

芦	榊	木	山	足	古	阿	大
谷	野	田	田	立	橋	部	内
信	丈	雄	啓	禪	圓	覚	孝
和	子	太	一	英	宗	翁	道

花園大学三十年のあゆみ

(非売品)

発行 昭和五十四年五月二十五日

編集 花園大学三十年史編集委員会

発行者 花園大学学長 大森 曹 玄

印刷所 株式会社 石田大成 社

京都市中京区丸太町通小川西入

発行所 花園大学

京都市中京区西ノ京壺ノ内町八一
電話(〇七五)八一―一五二八一